蕉門俳話文集

装幀　津田青楓

祝詞

越人

越人筆祝詞

（栗田若芝氏藏）

許六自画賛

（久保田初藏氏藏）

高砂え千きりにゆかん菊の酒

許六并画

凡兆筆柴賣說　（本朝文選卷之四參照）

柴賣說　凡兆

（久保田初藏氏藏）

諸川往來狀

（澤市郎右衛門氏藏）

解題

葛の松原　　元祿五年板　　中本一冊

蕉門の俳論がやゝ組織的の形を取つて現はれたのは支考の『葛の松原』である。それ以前の俳論としては其角の『雜談集』の如き隨筆が行はれたのみであつた。『葛の松原』とても感想錄のやうなもので論理的の記述ではないが、すくなくとも隨筆よりは全篇の筋道が通つて條理のある內容を備へて居る。支考の後半生を見れば常に師說を枉げて己を估る横着者のやうであるが、『葛の松原』の時代は若き純眞なる蕉門の一使徒であつた。現に芭蕉も存命して居た。たしかに師說に忠實な支考一代の名著である。其の起稿は元祿五年の夏、師芭蕉とは遠く境を隔てた奧羽行脚中であつた。芭蕉は

此こゝろ推せよ花に五器一具

と彼の行脚を誡めたが、芭蕉と本文とは全く沒交渉であつた。併し本書に「野盤子支考述」とある傍に「潜淵菴不玉撰」と共著の体をなして居るので、不玉と關係があるに相違ない。不玉は酒田の醫師伊東氏で芭蕉の行脚を招いて師事した人である。支考もその家に笈を下ろして本書の援助を受けた禮心に、撰者に推したので事實上の共著者ではあるまい。本文の終に「於圖司ガ之周柏堂ニ而絕ツ筆」とあるのでも察しられる。圖司は羽黑の鄉士呂丸の姓である。とにかく『葛の松原』は支考一個人の著作であつて、不玉の援助の下に呂丸の家に寓居し、其の稿を脫したものと見るの

が穩當であらう。

續五論

元祿十二年板　中本一冊

支考は『梟日記』に添へて紀行以外の俳論を此の『續五論』に發表したのであるが、內容より評すれば彼が有名な『俳諧十論』を著述する前提とも、又『葛の松原』以後の過渡期の俳諧思想を述べたものとも見らるゝので、『梟日記』とは別に本集に收容したのである。先づ滑稽論は滑稽卽俳諧の同義と見ての本質論で、俳諧の本情は風雅の寂にある事を說き、華實論に共の風雅の寂を求めて世情に疎からず、雅俗一方に偏するなきを誡め、新古論に芭蕉の「俳諧に古人なし」といへる言葉をあげて、古風は風情のみにして風姿なきが故に、姿情の二者を體得す可きを述べ、旅論に「旅は風雅のやつれなれば」戀と共に俳諧一卷中の伎倆を要する附けどころなりとし、附合の例を取つて解釋した中に「風呂敷を片よせて置窓の下」とあらば「たびねはさむき老僧の咳」として老人の寢仕度と睨み、「風呂敷を捨て置窓の下」とあらば「異見をすれば小便にたつ」と案じて若き男の手廻しよき躰と定むべき事など、甚だ巧みな說き方を試みて居る。戀論は「戀の事は一座の宗匠にまかすべし」といふ芭蕉の遺說によりて抽象論をさけ、附合の實例を以て論じ、「元祿戊丑の冬十月十二日、此五論を草稿して先師芭蕉庵の牌前に」そなへ「筑紫人の記念にぞ傳へ侍る」とあるから著作は出板の前年なる元祿十一年であらう。

二十五箇條

享和廿一年板　中本一冊

奧書で見ると元祿七年六月、芭蕉が落柿舍に寓居中、俳諧の新式を制定し去來に傳授したものゝやうであるが、去

來の遺稿に此の事を記したものはない。蕉門第一の傳書としたものは支考であつた。去來の死後妾の存命尼が大切の傳書を拾五兩にて支考に賣つたといふ日人の記事を信ずれば、支考が右の傳書を新式・白馬經・貞享式等の名目を附けて弘通させたのであるかも知れない。支考の僞作說もあるが許六は『宇陀法師』に「廿五ヶ條の口訣は先師の奥儀にして、是をしらざれば俳諧の道にくらし」と信じ、野坡の聞書『俳諧斗底記』の奥附、蕉門野坡流誹諧書目錄の中に「芭蕉翁廿五條一冊」とあるので、野坡も師說と信じて板行したらしい。許六・野坡の二人が斯く信じ、斯く板行したとすれば無造作に支考の僞作とばかり退け難い。暫らく芭蕉の傳書として其の本文を批評的に見て行つたならば支考に一杯喰はされる懸念もなからう。流布本の『廿五ヶ條』は蘭更の覆刻本であつて一條毎に註解を加へたものである。其の註解に先師とあるは、まさしく支考の事なので、これこそ獅子門一派の僞書に違ひない。一名を『白馬奥儀解』と稱する其の註解には本文の「花に櫻附る事」は「此段月花傳中に散在せり」とあり、「二季に渡るもの丶事」及び「發句の時は季に用る事」の二條は「此二段は貞享内式にくはしくす」といひ、「假名遣の事」は「別書之」として省略してある爲め、本集には江戸の西村養魚藏板の享保本により其の全文を收めたが、註解は施してないので、詳しく知らうとする人には曲齋の『貞享式海印錄』の通讀をすゝめて、本文のみを採錄した次第である。

俳諧十論

享保四年板　　大本二冊

支考の俳論は要するに彼の躰得せる虚實論の提唱にあつた。其の衒學と多辯とは年と共に理智的傾向を發展させて、遂に『俳諧十論』の躰系を組織する事になつたのである。彼の虚實とは「俳諧は上手に嘘をいふもの」といふ極めて卑近な說を出發點として、『葛の松原』以來の俳諧思想に儒佛の深遠な諸說を附會したもので、善意に解釋すれば此の

十論に於て彼はその虚實哲學を構成したのである。俳諧ノ傳、俳諧ノ道、俳諧ノ德、虚實論、恣情ノ論、俳諧地、修行地、言行論、變化ノ論、法式ノ論の十篇、孰れも俳諧の根本問題として取扱はる可きもので、本質論としては虚實、藝術觀としては變化の二論に重大な意義があると見て好い。序文には芭蕉の言行と其の風雅の大道を弘むるために、茶話禪の一錄をあみて十論と名附けたが、芭蕉の許諾を得ないので爾來三十年「獅子庵の遺稿とはなしける也」と述べて居る。起稿の年は「あるとし武江の芭蕉庵にて」といふ曖昧な書振りで『削かけの返事』によると元祿四年の事らしいが、十月晦日芭蕉の江戸入より翌年二月まで隨侍し前後「百日の間には茶話禪はいさ知らず、摩訶茶糟經をもあみ立ぬべし」と不眞面目な態度で辯じて居るので信じ難い。十論の讃に享保己亥の年號があるから同年稿を起し、勿体を附けるため茶話禪云々と書出したものであらう。各論共に「傳ニ曰」として註解を添へ、文中の故事・熟語には一語づゝ△又は▲の符號を附し、卷末に原文を引いて要解を施してある。猶享保十年には『十論爲辯抄』三卷を板行して、更に本文の主要なる語の詳解を試みて居る。

篇突

元祿十一年板　中本一冊

題名の『篇突』とは漢字の偏を伏せて、旁(つくり)のみ見せて本字をあてさせる遊戲で內容とは無關係である。俳諧の作法に關し、主として季題の解釋と其の例句を擧げたものである。芭蕉は季寄に就て甚だ無關心であつたらしく、或時は季吟の『增山井』を見よと敎示し、或時は「季節の一も探し出したらんは後世によきたまものなり」と新季題の發見をすゝめて居る程なので、蕉門には季題に關する書物は概して行はれなかつた。その中に『篇突』は蕉門の季題の格を定めたものとして、其の季題觀を見る可きものとして好適の文獻であるが、歲旦無季の格に其角の「明る夜もほのかに嬉

しよめが君」を引き「鼠をよめと稱して、ほのかに嬉し」といへるは元朝の曙ならではあるべからず」と說いて居るのは、季吟の『山の井』に既に其說ある事を知らざる解釋で、去來が『難篇突』に「一說に大としの夜大黑柱のもとに火を燈し、これを嫁が君といへり」といへると共に當時の俳人の古俳書に迂遠であつた實例と見るべく、野坡は流石に『増山井』にありと述べて居るが、その野坡も『山の井』により詳しき說明あるのを見落して居る。卷末の「發句調錬の辨は」許六のしきりに振廻した芭蕉流血脈說の皮切りである。李由と共著の形式である。

宇陀法師　元祿十五年板　中本一冊

蕉門の末派に選集の流行した時代に、俳諧の撰集にも不文の約束があつて、其の事例に通じない者は選集のために却つて汚名を着る。たとへば外題を附けるにも『芭蕉庵小文庫』は長過るし、『俳諧曾我』は曾我とばかりでは落着がないから俳諧の二字を借りたので、その二字が遊んでゐる。『初蟬』も面白くない。といふ風に難じて「誹諧撰集法」を說いた李由・許六の共著である。「撰集法」に選者の句をよけい集中に入れるのは前例があつて許されるが、入集すべき句には充分撰者の加筆を要する。卷頭と卷軸に置く句には慣例がある。その他部立、卷數、に涉つて詳記し、「當流活法」に切字には七つの「や」がある事、二字切、三段切、大廻しなどの語格に就いて論じ、古歌取、世話、書讃、景曲の句の類を例句を示して說明してある。「卷頭並俳諧一卷沙汰」に發句の格、脇の留、第三のならひ、懷紙うつり、月花の座の如き連句の式法を述べて、許六一流の芭蕉流血脈論に入つて居る。私の藏本には序文も跋もない上、表紙や刷の工合が再刷本と思はれるので、出板の年代は井筒屋の目錄に「宇陀法師 十五年 彥根許六 一冊 賣直段一匁七分」とあるのに據つて、元祿十五年の板行として置いたのである。

三冊子

安永五年板　　中本　三　冊

伊賀の蕉門土芳の遺書である。土芳は服部氏、通稱を半左衞門といひ、蓑虫庵と號して居た。其寓居は芭蕉のしばく訪れた爲め伊賀五庵の一にかぞへらるゝ遺跡であり、又かの「命二つの中に活たる櫻かな」は芭蕉が土芳と二十年振で出逢つた時の口吟と稱される。その後師弟の關係は永く結ばれたので、土芳は常に師よりの隨聞を手錄し置き、これを『忘れ水』と名附け、『しろさうし』『あかさうし』『くろさうし』の三冊子として篋底に收めて置いたが、後に蘭更その紙魚の巢となる可きを惜んで開板したのである。『しろさうし』は連歌の起源を歷史的にたづねて、遂に芭蕉が誠の俳諧を提唱する事になつた道程を述べて、全篇連歌と俳諧の別に關した論が多い。『あかさうし』は芭蕉の道に不易と變化の二者あるが其の本は風雅の誠であると說き、芭蕉の發句及び附句に對する土芳の聞書を收め、發句の年代と前後の句案を記し、特に蕉門連句の附け方を理解するに適した內容である。『くろさうし』は芭蕉の俳論と平常に關する遺語集で、短冊色紙の書き方にまで說き及んで居る。蘭更の板行本は燒失して享和元年瑞馬の跋を附した再刻本が一般に流布してゐる。本集は『くろさうし』の蘭更本が手許にあるのみで、その他の二冊は再刻本を底本としたが蘭更本と格別の異同はない事と思ふ。

花實集

安永四年板　　中本　二　冊

其角の年譜を案ずるに元祿八年去來の落柿舍に越年して居るから、多分その當時の對談であつたらう。其角・去來の二人向對して亡師の俤を慕ひ、互に見聞せるところを談じて後日のため筆錄して置いたもので、去來の序に「我

も書、角もしるして、さらに心覺えの一書となしぬ」とある通りである。但し去來の不易流行論は舍弟魯町との問答であり、其角の新古論は江戶の門人尺草の質疑に對しての答辯であるやうに、あながち去來・其角の一問一答に限つたものでない。句評の如きは『去來抄』と全く同文で、或は本書を材料として『去來抄』の一部に加へたものでないかとも思はれる。其の原稿は其角の門人晋岑の家に祕藏されたのを同人の孫獵雷の代になり、野菊庵秋色女と共編にて開板したのである。風窓湖十の序にその事を明記し、乾卷に稿本全部を收め、坤卷に其角・去來の兩吟及び秋色女等の發句を添へた二冊本であるが、現存の『柿普問答』は其の乾卷のみの一冊本である。これは『花實集』の板木を再び使用し、武陵隱士なる者の序を附し初板の單行本の如く見せ掛けた再刷本である。その事は柱に「花上」とあり、兩吟歌仙を附載してあるので看破し得る。本集は『花實集』の原名を用ひたが、坤卷は本文に無關係なので乾卷だけを覆刻したので、結局その『柿普問答』と同一のものとなつた事を一言お斷りして置く。

旅寢論　安永七年板　中本一冊

落柿舍を再興した重厚が九州に旅して植木の湖桂亭の客となつた、その家の机上に置かれたのが『旅寢論』の寫本であつた。重厚は去來の通家にて稿本の存在を知つて居たが、湖桂所持のものは頗る善本なので板行をすゝめたのが本書である。著者去來が其の生國の長崎に旅寢して、偶然許六・李由共撰の『篇突』を一見して、其の難陳書として執筆したため『旅寢論』の題名が生れたのである。稿本はそれからそれへ轉寫されて許六の手に入つたらうが、溫厚な去來の事だから『篇突』を難ずるにも批評的の態度で、婉曲な文辭を用ひて居るので一徹の許六も、當然な非難として甘受したと見えて、これに對する辯駁書は別にない。湖桂の『旅寢論』以前に同一の本文が江戶の桃鏡の手によつ

て開板され、『湖東問答』の外題で寶暦十一年に出て居た。重厚も湖桂も此の事は關知しなかつたらしい。『旅寐論』の方が覆刻されてないので底本に用ひる事にしたが、『湖東問答』と對校すると互ひに字句に出入があつて、『湖東問答』の却つて文意の透徹せる個所あるを發見したが、大體に於てその論に相違がないので本文は依然『旅寐論』に準據して文字の誤用も濫りに改刪する事をさけた。

去來抄　　安永四年板　　中本三冊

師を信ずるの厚く、後進を導くの懇切にして、然もみづから謙虚高ぶる事なき去來の遺著として『去來抄』三卷はほとんど無條件で信ぜられて居る。現存本は名古屋の曉臺が一音に筆耕させたので「先師評」「同門評」「修業教」の三卷で完備してゐる。元文年代の井筒屋の目錄によると去來の遺書として『蕉門評』といふのが既に板行され、それが『去來抄』の前身であるらしいが、右の目錄は燒失本に一々○を附し『蕉門評』亦その災厄に逢つた一部になつて居る。そのため兩者の相違をたしかめる事が出來ない。たま〳〵發見する寫本には、板本になき「故實」の一篇があり字句の異同も尠くない。成美の『隨齋諧話』に「彼の板行のをりいかなる子細ありてや、古實の篇を除きて上木す、故に流布の本には故實の篇なし、されば此篇を書加へて全備せしむべき事なり」と注意してゐる。一音の著『寂栞』にも『去來抄』四冊とあるので、板行の際事情あつてその中の一冊卽ち故實篇を除いた事は疑ふ可くもない。其の「故實篇」は文曉の出板した『芭蕉談』の一部と同一である事も問題である。本集は現存板本に據つて覆刻したが、寫本に載する「故實篇」を「修業教」の前に挿入して、流布本の缺を補ふと共に字句の異同の甚だしきものを本文の傍に小さく書添へて置いた。殊に「行春丹波にゐまさば」（二四四七）の「丹波」は異本として擧げた寫本の「難波」でなくてはならない。

越人の「うらやましおもひきる時猶の戀」は板本の「心に俗情あるもの」ならばさる人を卑しめた評語になるが、異本の「心に風雅あるもの」によると反對に稱揚した事になる。風國の兄を「書師尚景が子なり」(二五七頁)とあるは「尚景が弟子なり」の「弟」の一字を誤脱した事が異本によつて明瞭である。『去來抄』の四卷本は寶暦及び明和の奥書あるもの二本を見たが、本集の校訂に用ひたのは贄川他石氏の藏本で、相軒素秋の正本に依つて知足齋なる人が筆寫したもので、寶暦・明和の奥書本より此の方が善本である。贄川氏が板本との異同を朱書されてあつたので本集の校訂には大に便宜を得た。「故實篇」は「芭蕉談」と對照して異同のある事を知つたが、傍註を施すに困難なので、寫本のまゝ收錄したのである。

去來文　寛政三年板　中本一冊

去來が越中の浪化に送つた書翰で「翁の當歳旦に」として「蓬萊に聞ばや伊勢のはつ便」の句を引用してあるから、日附の如月十三日は元祿七年であらう。去來の俳論を窺ふによいもので、且つ浪化がその教示を受けた事實の傍證にもなる。「よとぎの詞」は夢中嵯峨の庵を出てふら〳〵と長崎へ行き卯七に逢つて來た記憶を、夢さめて後に書き置いた元祿三年の作である。本書は闌更門人の岸芷が出板したので『去來文』のつぎにある「暮る日や」等の五句は岸芷の詠で又其の評語は闌更の書いたのである。此の『去來文』は天保九年板の『去來三部集』に合輯され、上卷は「旅寢論」、中卷は「よとぎのことば」、「下卷」は「去來文」に丈草の「ねころび草」を添へ收めてある。

山中問答　中本一冊

元祿二年加賀の山中溫泉にて、芭蕉の直旨に接した北枝が覺書き風に手記したもので、俳諧の大意と雜談、連句の約束の重要なる點を簡略ながら要領よく書きとめてある。附錄の「北枝聖考」は連句の附け方に自他の別あるを說き、例句をあげて親切に解釋してあるので後人に傳寫され、白雄の著『俳諧寂栞』は「聯句自他の事」として其の說を殆んど轉載して居る。要は人事に關する附句は、やゝもすれば三句の變化を乏しくするため、主觀―自、客觀―他の句の配置と其のあしらひ方の注意を說いたものである。板本は年月を記してないので、いつの出板か知れないが、也同といふ老俳の所持せるものを秋江・鶯村の二俳人が懇望して開板したのである。製本の仕立から見て嘉永頃の板でないかと思はれる。

雅文せうそこ

天明五年板　中本一冊

許六と野坡との論爭を三宅嘯山の批評した書である。論難は手紙で行はれたが、許六は例の手段で高飛車に出、野坡は落着拂つて返答して居る。序者の滄浪居主人は嘯山であるが、此の手紙をどういふ事情で手に入れたのか判然しない。許六は芭蕉より季の取合第一に傳授されたるを、とつこに取つて論じ立て、野坡は一句の生命はその精神にある意味で許六の取合說を難じ、果は芭蕉の古池の句に就いての水掛論となり、「此問答ヲ見レバ十ニ八九野坡ニ理アリテ、風雅ノ意ヨク心得タリ」といふ嘯山の評が公平に近いやうである。『雅文せうそこ』の外題は再刷本にあるので、一寫本に『許野消息』とあるのが原板の題名であらう。板行の年は寫本に天明五年の奥附が附いてゐるのでそれに從つてもよい。

俳諧不猫蛇　　中本一冊

越人は『曠野』の時代その技倆を現はしたが、不遇にして一時存在を忘れられて居た。蕉門の高弟次第に凋落して支考一派の跋扈を憎み、彼の主著『俳諧十論』に對して激烈な非難を與へた書である。越人の支考に意趣を含んだのは師芭蕉から勘當された浮說を流布された爲めである。支考の說の是非よりは其の行狀に渉つて遮二無二攻撃したので、俳論としてより寧ろ私行の素ッ破抜きが中心になつて居る。文中盛んに警句を發して「耳を取つて鼻をかむとは此事」とか「腮にて背中をかくやうなる事」とか、頗る奇抜な句が多い。越人は全身の血を怒罵に漲らして居ると見えて、「越人は生きて居るぞ」と再度くり返して支考を威嚇して居る。勿論出板に至らなかつたので寫本で行はれたのであるが、帝國圖書館に野叟芦室といふ人が享保十四年五月に寫した一本の存するのみで異本を見ない。俳諧文庫本のそれと對照したが甚だしい誤脱があるので全然圖書館本により、文意の通じ難きは旁註的に附記した所が二三ある。支考と同じく露川を責めて居る理由は解らないが、支考と通謀して師翁を估り。朧の大祕事の如き口訣を以て世人をあざむくの罪を憎んでの傍杖に過ぎないやうである。執筆の年代は正徳四五年を通說とするが、享保以後の事とも思はれ、今直ちに確定する程の考證材料を持つて居ない。

削かけの返事　　中本一冊

越人の威丈高になつて罵るのを支考は嘲弄的に門人渡部ノ狂の名で、此の『削かけの返事』を以て答辯したのである。眞面目の辯解と思はれるのは、芭蕉に對面したのは元祿三年三月の事である位で、乙州亭の裏にて越人に懇談せるは

「人の背戸にてさゝやく事およそ色事か金事か」「此一段ばかり面目なく存ゆ」とあらぬ事にいひ紛らしてゐる。「石臼の頌」の越人草稿なるを『本朝文選』に芭蕉の作として載せたるは、「去來が許六の麁相」にその罪を塗り附けてゐる。本文も亦寫本で傳はり、容易に接手し難いものであるが、名古屋の石田元季氏の藏本を借用して本集に收容する事を得たのである。

猪の早太　　享保十四年稿　　中本一冊

『削かけの返事』に對する再駁論である。『不猫蛇』の正躰の禍なるを以て、これを退治した『猪の早太』を外題にしたのは一趣向である。『不猫蛇』は論難よりは漫罵の分子が多いが、『猪の早太』は事實を指摘して支考をとつちめたので、越人の筆にしては激越の調子がなく割合に穩やかな書振りなので「菜野・越二老の門にあそび古翁の正傳を聞ながら、削かけの返事を其まゝ捨置ては」といふ記事の某は架空の門人ではなく、越人に代つて門下の一人が實際起稿したものであらう。本文も亦寫本で贄川他石氏の許に一書の存するのを前年借覽して筆寫し置き、今回校訂に就き又ゝ郵送を煩はして對校したので、本文誤脫の如き手落ちはあるまいと信じて居る。

口状　　享保八年稿　　中本一冊

一名を『露川責』とよぶ難詰書である。これも寫本ながら廣く行はれて居るのは、支考一派の策略から其の勢力のある諸地方に幾通もの傳寫本を作つて流布させた爲めであらう。露川は支考より後進で、支考から師説を聞いて一家の俳諧を發明したらしいので、支考には一目置く可き筈のところ、北越地方に行脚して支考派の繩張を蠶食したのを

怒つて、直接露川に詰問のため執筆したのである。「曉の夢に行燈の火をとぼし」の前句に支考が「嫁々が子でない爺の子になれ」と附けたのを、露川は「さう泣ふなら嫁々が子でなし」と添削的に一直したのを聞咎め、露川の附合を俎上にあげて返報をして居る。本文は私の藏本により石田氏から借覽した異本二書を以て校合したのである。

あひくさび　　享保九年稿　　小本一冊

扉には斯く平假名書であるが本文には『口狀相楔』となつて居る。支考の『口狀』に答へた露川の辯明である。「蓮二書狀ニ」と彼の難詰を引いて一々其の非理を駁して、支考の『口狀』は露川の北越行脚によつて、彼一派の內部に動搖を來したので其の遺憾によるとなして居る。『相楔』は蕉門の朽廢せんとするを憂ひ「門の柱の楔を兩方より打かため」る意味である事を跋に書いてある。露川の草稿は支考の許に送り屆けられたであらうが、名古屋の澤市郎右衛門氏は露川の直系であつて、草稿の控を傳來さるゝので、今回澤家の快諾を得て私自身筆寫して來たのであるが、草稿の控なので文脈の通じ難い所が多く讀了になやんで、本文のまゝ活字に移した個所が尠くない。

靑根が峯誹諧問答抄　　天明五年板　　中本五冊

在來の『俳諧問答』は蕪村門人月居の序文があつて、それに「寬政庚申冬」とある丈けで奥附も何もない、時には漢文の跋が一枚附いてゐる本もあつた。變だな、可笑しいなとは思つたが此の『靑根が峯』を發見して、流布本の無責任な再刷本であるのを知つた。『靑根が峯』の序で見ると本書は才麿の門人芳室が稿本を所持したので、蕉門系統の俳人はその存在を忘れて居たが、芳室の遺弟芳麿の許に稿本の傳はると共にこれが開板を企てたのであつた。栗齋の漢

文序、芳麿の自序、龜洞の目錄は再刷本に削られたもので、卷の五に與々軒の漢文後序、芳麿の後記があり、其の斷片が再刷本に附着して居るのである。本文の卷の一は去來の「贈晋氏其角書」許六の「贈落柹舍去來書」去來の「答許子問難辯」、卷の二は許六の『再呈落柹舍書』同じく『自讃之論』上、卷の三は許六の『自讃之論』下、卷の四は許六の『自得發明辯』、卷の五は同じく『同門評判』の八篇を以て完備するので、元祿十一年三月稿を脫した事になつて居る。去來の其角に宛た一篇は『うら若葉』『菊の香』に載するものと同一で其角の流行にうつらざるを難じたので、許六・去來の難陳の根本問題は不易流行の解釋論である。許六の惟然坊を排斥せるを去來の宥めて坊の立場を辯護して居るは注意を引く。自讃之論は許六が季吟派より談林の新風に急變し、常矩門下に在る事七八年、芭蕉の俳風に眼を轉じ『曠野』を躰讀して、元祿五年江戸にて芭蕉に面謁し、遂に其の血脈を承受した自敍傳である。「自得發明辯」は取合第一の論である。「同門評」は蕉門諸子に對する許六の批評で、彼の何人をも假借せざる筆鋒、向ふところ敵なき慨がある。本集には支考の『古今抄』を收める豫定になつて居るが、內容見本に此の著名な許六の俳論を逸したので、『古今抄』を中止して『靑根が峯』を覆刻する事に一存を以て變更したので讀者の諒察を願ひたい。

本朝文選

寶永三年板　　大本五冊

蕉門俳文の精粹『風俗文選』の原板である。芭蕉は元祿三年『猿蓑』を去來・凡兆に撰集させた際、『猿蓑文集』編纂の內意を去來に傳へて同門の文稿を集めたが、二三洗錬を缺く文章があつた爲め、其の意圖を遂げず文稿は去來の手許に殘されたのである。許六は亡師の企てを承けて其の完成に志し、去來より『猿蓑文集』の稿本を授與され『本朝文選』十卷を大本五冊に仕立てゝ板行したのであつた。同門李由・去來・支考の序、許六の自序、漢文の作者列傳を附し、

芭蕉の『柴門辭』を卷頭として辭・賦・譜・說・解・記・紀行・序・箴・銘・誄・歌・文・傳・碑・辯・表・論・頌・讃賛・書の系統的分類により當時のあらゆる文躰を網羅して、內容外觀共に雄大なる文章王國の躰裁を備へたものであつた。然るに作者列傳の中、路通を評隲して「其性輕薄不實而長遂ニ師命一」とあつたので、路通の嚇怒をかひ、嚴しく談じ込まれたので遽に路通の「返店ノ文」を撤回して再板に着手する事にしたらしい。其の際支考は許六に語つて苟も本朝といへば上代よりの文章を輯集す可きに、當時の然も俳諧文を集成して『本朝文選』と題するのは不妥當である。よろしく『風俗文選』と改題した方がよいと勸告したので、許六は唯々諾々として其の勸告に從つたのである。但し其の改題前にも本文に多少の修正を施し、浪化の傳中一如法親王を削つて一如大僧正と埋木せる以外數ヶ所訂正した異本が存在するから、『風俗文選』の改題と共に三種の異本となつて現はれた譯である。改題後列傳の部の路通傳は削除するのを忘却し、依然として附載されて居たが、その後此の列傳を取除いたものが今日最も多く見掛ける九冊本の『風俗文選』である。さしもの許六のいかに狼狽したかは此の一事を以て察知さるゝのである。猶「返店ノ文」を除くと共に卷の四「雜說」の同門高弟の陰口の不穩なるを訂正してあるから、これでも一と問題を起したやうである。本書校訂用の原本は石田元季氏の藏本に據つたので、氏が錦江の『風俗文選通釋』より難解の語句の註釋を本文に附したものも附載する筈であつたが、煩雜になるので遂に中止したのは殘り惜しくてならない。（勝峰晉風）

日本俳書大系　第四巻　蕉門俳話文集　目次

筆蹟

葛の松原

支考述

葛の松原

野盤子支考述
潜淵菴不玉撰

○冬の雪の寒からむ事をしれる人も、あらかじめ水無月のきぬを重むとにはあらねど、網にかゝる鳥のたかく飛ざるをうらみ、鉤をふくむ魚のうゑをしのびざる事をかなしむ。そのまどひふかく、おもはざるの源ちかし。世の風雅に志をよする人も、万分が一もなかるべからず、是故に支考が随聞をしるして、東の人の記念にはつたへ侍る。

○芭蕉庵の叟、一日嗒-焉トシテうれふ。曰ク、風雅の世に行はれたる、たとへば片雲の風に臨めるがごとし。一-回は皐狗となり、一-回は白衣となつて、共にとゞまれる處をしらず。かならず中間の一理あるべしとて、春を武江の北に閉給へば、雨靜にして鳩の聲ふかく、風やはらかにして花の落る事おそし。彌生も名殘おしき比にやありけむ。蛙の水に落る音しば〳〵ならねば、言外の風情この筋にうかびて、蛙飛こむ水の音といへる七五は得給へりけり。晋子が傍に侍りて、山吹といふ五文字をかふむらしめむかと、をよづけ侍るに、唯、古池とはさだまりぬ。しばらく論ニ之、山吹といふ五文字は風流にしてはなやかなれど、古池といふ五文字は質素にして實也。實は古今の貫道なればならし。されど華實のふたつは、その時にのぞめる物ならし。柿-本人丸のひとりかもねむと讀る哥は、かばかりにてやみなむもつたなし。定家の卿もこの筋にあそび給ふとは聞侍し也。しかるを山吹のうれしき五文字を捨てゝ、唯古池となし給へる心こそあさからね。頓阿法師は風月の情に過たりとて、兼好・浄辨のいさめ給へるとかや。誠に殊勝の友なり。

○そも〳〵風雅は、なにの爲にするといふ事ぞや。孔子の三百篇は、草木鳥獸のいぶかしき物をしらし、倭には三十一字をつらねて、上下の情にいたらしむ。その詩哥にもらしぬる草木鳥獸の名をさして、高下を形容せむものは、いまの風雅これなるべし。しかるに俳諧といふ文字

は、史には不根の持論といへりければ、諸ノ言は吾しらず、この比その名をあらためむ事を阿叟に申侍れば、古今集は已に俳諧の名を立たり。いまの者これをせむ事よからず。是故に韓子が霊寐も魯論はけづらず、華嚴の犬瑠璃も、その奥にしるしたり。俳諧は世の變相にして、風雅は志の行ところなりと、吾がともがら是なからむや。

○いにしへの俳諧は如來禪のごとく、その理一貫して線のごとし。いまの風雅は祖師禪のごとく、捺着すれば即轉ス。かならずしも理智にかゝはらねば、寸心かけずといへるたぐひなるべし。

○俳諧に古人なしといふ事を、ばせを庵の叟、つねになげき申されしか。

○世の風雅にあそぶ者も、月花とさへいへば、やさしとはおもふらめど、なにがしの卿の、我が中はこもつちこしの一もじりもじりやすらむ逢ふかひもなし。とつらね給へるは、もじりやすらむといふ七文字にて、歌にはなり侍しと覺えしか。老杜は呼テ兒向ニ煮魚ヲともいへり。古人の語意を用る事、一字半言もたやすからず、いかにおもしろきとて、辭いやしく姿もぐた〳〵敷いひ出たらむは、貴人・公子に寵せらるゝ辨利のものゝたぐゐなるべし。

○晉子も鐵炮といふ名のいひ難しとて、千々にこゝろはくだきける也。おなじ集に品かはるといふ戀の論は、微細のところかくぞ心をとゞめけむ。殊勝の心ざし、いとうらやまし。晉子が語路おほむね酒盃に渡れりといふ人あるに、宋ノ泊宅編には、白氏が二千八百言、飲酒の詩九百首なりと答へ侍るといへど、晉子が性、人にまぎれねば、樂天が飲酒はなをかぎり有けりとて、用の事かたづけ侍りぬ。

○風雅の片はしを心得たるもの、たま〳〵名家の一まきを見て、始終の變作をかへりみず。此句はおかしからず、その句は味なしなどいふめれど、一まきをつらぬる事あながちに一句の上を不論。一たびは雨となし、一たびは雲となして、中品の眼をとゞめむ事をおそる。轉換・變化角のごとし。誰か情實の中にあそばむ。

○この比一般の才人おそろしき詞をこのみ、針灸・祕訣の

諺をめづらしといひ出たるに、しらぬものはしらず、しるものはいかにあさましとはおもふらめ。たとへば田舎人の卒都婆を橋に渡せるがごとし。なき人の罪障・懺悔なれば、その理はあしからねど、ふむ人うれしとやはおもふ。唐李之藩は夜深枕髑髏といふ句をさへ、後には刪り侍りしとかや。

○いさゝかなる事にも心をとゞめねば、あやしきにや。人夜半にふして火をも消し、隣もしづまりけれど、なを寝いらで居るとき、おのれが眼をひらきぬるや、閉ぬるやといふをしらず。これらはむづかしき事ならねど、心つきなき故なり。春草・秋鳥の名字をも旅したる人にきゝつたへ、訓蒙圖彙にて見しりたらむ、いかばかりおぼつかなし。小なきさいたづまといふ物をうれしく聞侍ると、ある人は仰せられしぞかし。

○いづれの年の夏ならむ、みな月はふくべうやみの暑かなといふ句を、人の得しらざりけむは、源氏のまき／＼に心をとゞめねばさも有べし。山路に菫とつゞけ申されしを、ある人おぼつかなしと難じけるは、有房卿の、はこねやま薄むらさきのつぼすみれ、といへる哥を不幸にして見ざりけむ人の心こそ、おぼつかなけれ。たま／＼の旅にも、あらぬまでに酒のみ、馬上にはねぶり行らむ、いとあさまし。

○一とせの秋、蔦の葉は茶をのむ人をなぐさめて　といへる第三を、湖南の珍碩はいかにきくらんと、文して問ひ侍るに、花紅葉ならば酒をこそ飲べけれ、と答へたれば、さてはおのれも皮骨は得ぬるをと、阿叟もにくみ申されし也。支考か東行の比、風雅はいかにし侍らんと、とふ人あれば、先この第三をなし給へといふに、よき人はよく、あしき人はかの叟の口僻にて、また寂寞をやられけるはと、平呑に逢ひたるはいと口おし。

鎌倉を生て出けむ初鰹

五月雨にかくれぬ物や勢多のはし

梅若菜鞠子の宿のとろゝ汁

詩哥に名所を用る事たやすからじ。かまくらの初鰹は、一支考が東より歸けるとき、かゝる事ありとて見せ申されしを、生て出るといふに鎌倉の五文字、又、その外ある

べくとも承はらずと申たれば、うれ敷きゝ侍るとて、阿叟もにくみ申されしが、みづからも徼幸にいひなしぬらむ。つら〳〵おもへば、生死のさかひを以て出入せむに、かまくら・六波羅の外殊に有べからず。しばらく風雅にあそぶ人も、いきて鎌くらを出し鰹のいまは、武江の薄しほとなりけるよと、世の觀相にのみ眼をとゞむる事、此句ばかりにもかぎるまじ。五月雨の増ぞまさぬぞといへる處、もろこしには五湖あり。倭には一二にも過べからず。しからば勢多といへるものは、古今の摸楷ともなるべし。むかしより文章には結前・生後の詞といへる事は、今の若菜のはたらける物ならむか。天心をこゝになやまさんとにはあらねど、句をつくるの法、おほむね角のごとし。さるを未練の人は、始より深からしめんとして、果は一應の理もきこえずなりぬ。一生をこゝあやまらざれや。

角文字やいせの野かひの花薄　其角

阿叟は、はじめて結前・生後の詞を用ひ、晋子ははじめていの字の風流を盡す。古今俳諧のまくらならむと、よき人も申され侍しよし。

蚊柱に夢の浮はしかゝる也　同

定家の卿の夢のうき橋はとだへて、ひさしくなりぬればと、晋子も自讃申つるが、かゝる事人のいふべき口質にもあらず。天縱の風骨、念相の外に志を得たり。しかるを左右の趣をとらへ、世人の口意にさきだてる事は、芭蕉庵の叟なるべしと、よき人も仰せられしが、つねのこゝろ誠にかたし。

秬の葉や檐にかけろふ玉祭　珍碩

降雪に淡路は夢の心地也　支考

夢ともなく、うつゝともなき無心所着の觀相、かばしらのごとき物あらば、千載の荘子をまつといへるならむ。

。趣向は古き事がらを附どころあたらしく、句づくりめづらしうしたゝむぞ、不變の正道とは承りしを、めづらしき事のあしゝといふにはあらねど、人のこゝろはつねに變をこのむなれば、いかなる道にかたゞよひ侍らむと、よき人はかなしみ給へり。

。毎句めづらしき名目をこのむは、中分以下の作なるべ

し。何となくいひ出る句にも、いさゝかなるところにたのしみはある物を、風情のあらきものは、いかにし侍らむ。釣髭はいやしきさまなれば、句にはなり難きを、しらがの交るといへば、公達の後見などの物〳〵敷やうにきこゆと承しが、伽羅といふ名のいかにあさましきぞや。なにがしのおのこの、葵の花のひらく石臺　とせしを、つほむとなをし侍るが、いさゝかのたのしみならむか。

○月花にかぎらず、春秋の季を結ばむに、その季をさきに工夫せば、あたらしき趣向なかるべし。唯、平生の心にて、當季は後にくはへたるがよしと承し也。曲水、歳旦の第三には、お葛籠に花の端綱のすゑ振りて　といふは、葛籠より趣向は起りて、花は未後の一決ならし。鳥獸草木の用をいひつゞけたるおほくはあさまし。

　三味線や芳野の山を五月雨　　曲水

此句は人のしるまじき風情なり。なにがしのおのこならむ、いとなまめかしきながら、なを戀にはおぼつかなくて、ひとり寝がちなる閨の中に、東坡が九相の圖など掛たらむぞ、五月雨の動ざる夕部なるべし。

○發句はなるべきと、なるまじきを見る事、第一の工夫なるべし。

　辛崎の松は花よりおぼろにて

此句、錦をきてよる行人のごとし。好悪はその人ぞしり給ふらめ。たま〳〵起定轉合の四格をしれる人も、第三のとまりは、なに故に文字のさだまるといふ事をしらねば、一生を返魂の烟の中にかげろふ。かなしむべき風雅の罪人ならむ。此句、花の字なからましかばしらず。

○洛の和及法師は罕人やといへる五文字にて、一生をあやまたれけれど、幾とし湖南の叟をしたひ、前の秋ならむ、心ざしをとげられしぞたふとき。かの法師のつねには申侍しとかや。世の風雅もあさましくなり行けば、流水飛禽の情にもいたらず、湖南の叟をつみせむ事、行脚の冥恩もいとおそろしと。むべなり西行上人の、さかいに立る玉の小柳、とよめるは、みづからこそ能はしり給ふらめ。

　　鳳來寺

夜着ひとつ祈り出して旅ねかな

草臥て宿かる比やふじの花

かゝる有さまの人こそ、むかしもありしとは、おもひしらめ。

ほとゝぎす啼や五尺の菖草

鶯や餅に糞する椽のさき

かの僧の和及は、かゝる事きかずなりぬるぞ、今は戀しき人の數なり。

○杜國は心ざしのおのこなるよし、阿叟も忌日おぼえ申れし。

○今はあさましき世なりけらし。詩哥にはおのれが文字を用ひ、風雅には人の詞をぬすむ。前後のたがひ是非なし。

○集などはよのつねの文字を用べし。いくつも文字をおしまけたるなど、ちりばむる者もいかにくるしからむ。なにがしの文集には、古人の學びざる文字の形容あまた侍るやうに覺しか。莊子の帶などの尾につける心地せり。

○詞をつくらひ、やさしくせむとする人は、精進をいもいといひ、客人をまろうどゝいふ。その風流なきにしもあらねど、果は合類節用を見る心地ぞせめ。

○林下何曾見二一人一といふ詩は、何曾の二字なを有べしと評せり。しかるに老杜が秋興の詩には、野航恰受兩三人といへり。何曾のおろそかなる、恰受の不可思議なる、詩をも心得たき風雅なり。張籍が賈島に逢へる詩は、一二三の風情までは、和哥にもつらねけめど、馬蹄今去入二誰家一といふ處までを、いかで盡し侍らむ。されば文はとぼしからぬもの也。

○おの字はいやしき詞なるを、どし織の帶うつくしく脇とめて　古き小判のいづるお屋敷　といへるたぐひ、お僧の鉢を所望して見る　とも申侍りき。ての字をにごりて用る事は、歌にはあまた侍れど、外の言葉艷なれば、さのみ見ぐるしからず。

○この比人々のおもひけむやうに、世にいはれぬといふ言葉はなけれど、麥門冬は中心をさらざれば人をなやまし、かい餅も飯とつゞけぬれば又なつかし。

○晋子が、宿札にかなづけしたるとはれ良　といへるは下の五文字にて、よくしづめたりと、阿叟もつねに申され

侍しか。出かはりといふ詞は、養父入にはおとりて、いやしかりしを、

出かはりや幼ごゝろに物あはれ　嵐雪

嵐雪が幼の一字にて、人に數行の涙をゆづりける也。たとへば馬上の敦盛を繪がきぬるに、甲の見入はたちばかりならむに、頬の程より纔にまへ髪のさきを見せぬれば、やがて二八の美少年とは見ゆる物を、こゝろへたきあいしらひ也。

○世に切字の發句といふ事あるべし。

酒のめばいとどねられね夜の雪

○一句の姿たしかならぬは、趣向のなき事を口先にてまぎらかしたる故なりと、晋子が導き侍る。大切の事なり、おもへば、簾中に袴を蹴こむといふ句は、聲にとなへたるがおもしろし。一とせ堅田の會席に、みほそき太刀のそる方を見よ　長祿に銀かはらけを打くだき　といへるは、銀の一字殊に奇特なるべし。

蜻蜓のゆきゝ隙なき薄かな　車庸

雉子啼宇治の茶木の覆哉　呂房

あか〳〵と日はつれなくも秋の風　と無念相の間よりいづるは、三生の薫修なるべければ、朝暮のあらゝかならぬ形容、おの〳〵その地をさらず。

沙原に吹あげられし海鼠かな　如行

如行はよづかぬおのこなれば、かの魚のたゞよへるも、世の外ならずと見侍りけむ。

煤はらひいらざる物は打くだけ　枳風

煤はきやなにをひとつも捨られず　支考

おなし年の暮ならむ、武洛の雲水をへだてゝ、かりそめの取捨はありけめど、志のかなふところ異ならず、黄連は苦しといへるを、あまからずと、あらそはむもこの道にをかば辨利なるべし。

帷子を洗はすにやる名殘かな　正秀

正秀が性はあらし。かゝる微細の風情にあまりて、會良が大和路の歸路をとゞめかね、角とおくり申されしとかや。〽猪に吹かへされしともしかな　といひ得て、肌たはまざるは、その人のいける風情なるを、〽薪ともならで朽ぬる案山子かな　といへるは風雅の用處あさから

ずと、阿叟もうなづき申されしよし。

ばせを葉はなにゝなれとや秋の風　路通

一生の風雅をこの中にぞ、とゞめ申されけむ。一とせ、初雪に根太のいたむといふ事を結びたるに、卯の花の比こそさも覺えぬべけれと、珍碩が申たれば、阿叟もおかしがり申されしよし。物と我と此情有べし。

水無月や鯛はあれども鹽くじら

みた月のしほ鯨といふものは、清少納言もゑしらざりけむ。いとめづらし。風情の動ざるところは、みづ（自）からしり、みづから悟るの道ならずかし。

鐵炮の遠音に曇る卯月かな　野徑

かゝる時は、はり物の參差（しんし）に目あぶなく、鋸の目立るに心せかれて、洒落堂が卯の花の根太もおかしとおぼえ侍れば、發句はおの〳〵そのところあるべし。

住吉ノ神送

松ばらや神も名殘のきり〳〵す　大坂 之道

屏（塀）こぼつ跡の寒や冬椿　游刀

姥どものあそび處や桐の花　ミノ 荊口

板ぶきや秋の小鳥のありく音　亡人 落梧

笋（たけのこ）にをひぬかれたる榎木かな　探志

草刈の子は一握野菊かな　羽州 不玉

藎草（カリヤス）を呼込比やむら時雨　露川

かむこ鳥啼や蛙の目かり時　珍碩

出女やすこし時雨てぬり木履　同

桃の花や雛に似たる人も來ず　乙州

阿叟、北國日和さだめなし、といへる次の年ならむ。

八重葎一しめ寒しけふの月　羽黒 呂丸

高灯籠晝はものうき柱かな　千那

夕立や川をひあぐる躶むま　正秀

團栗やうさぎも共に霜崩　同

行秋の四五日よはる薄かな　丈艸

木曾塚に旅寢せし比

木曾殿と背（セナカ）あはする夜寒かな　いせ 又玄

散花や跡はあみだの爪はじき　楚江

夏菊や薬とならむ床のうへ　智月
振ほどく藁の明りや野邊の霜　ミノ 闇如
煤はきや座右の銘はめくらずと　同 夕可
　娵追善
草茂る石をいつまで蟬の聲　同 均水
馬の耳すぼめて寒し梨の花　支考
　風陽が小弟、風雅に心ざしあるを
　よみし、進學の解作りて、
油斷してくるなに扉たゝかるな　同
青柴や食(めし)の吹たつ冬籠　昌房
稲妻や蜆がら燒く野の匂ひ　臥高
柴船にこがれてとまる螢かな　キ角
蟬啼や木のぼりしたる園貢　同
初秋や篠葉吹散るさばき髪　木枝
さびはてゝ鮎くたびれつ水の淀　如行
唐秬(たうきび)の葉をたぐり行月見哉　堅田 成秀
菜の花や小屋よりいづる渡し守　史邦
ついて來て犬もつくばふ涼かな　竹戸

蠅ならぶはや初秋の朝日かな　野童
山吹や水にひたせるゐまし麥　素牛
一まはり待人をそきおどりかな　尙白
骨おりや闇のさつきを行螢　里東

五文字の大へい又あるへしともおぼえず、作者も行の一字にて、螢火一點の無明をのこされけむ、いといぶかし。

青草や俎板(マナイタ)にをく夏茗荷　臥高

かゝる風情は、しる人もあまた侍らねど、少年よりこの道にあそびて、口おしく喰ひならひたる唐がらし　とまくれ出たるひら句は、さかりの人のゐ(得)もすまじき發句ならむか。

松笠にしがみつきたる日雀かな　駃鴿

なにがし寺の小僧なりしか、念誦禮讃にも、いとまおしき身の風雅にも、こゝろあわたゞしく、かゝる目前の境界をいひ出たる胸中、そこばくの知解もあるまじ。

○附句は附と附ざるとを論ずといへども、松葉のごみに煮ゆる鍋ふた　といひ、如意輪の像の頬杖もうき　とい

ふ句は、なまじいなる前句をきかむより、此句ばかりがおもしろきぞかし。句ごとに季のなき發句をするとおもへと申されしかど、未練のともがらのあさはかに、おもひ侍らむか。

○世に景氣附・こゝろ附といふ事は侍れど、

○走

　　敵よせ來るむら松の音

有明のなしうちゑぼし着たりけり

○響

　　夜明の雉子は山か麓か

五むナし何ならはしの春の風

○馨

　　稻の葉のびの力なき風

發心の初に越る鈴鹿やま

無所住心のところより附きたらば、百年の後、無心の道人あつて、誠によしといはむ。いとうれしからずや。

○一句のしたて結ぶはわるしと承れど、未熟のまどふべき事也。月くらき麓は馬の口とりて　といふ第三を支考が申侍りたるに、くらきといふはむすびにて、一句のさま氣だかならずとて、有明にとはあらたまり侍りき。

○こゝらのたのしみは、句どに有べき事也。

　　麥からの家してやらむ雨蛙　　智月

　　態とさへ見に行旅や富士の雪　　智月

大津の禪尼、その子乙州が東武の行を送れるとかや。人のをやのまどへるみなかみは深かりけめど、始は少をあはれむの恩愛にして、次は子をいましむるの義方なり。世の人おのれが子をそだつる時は、恩愛の道ふかければむづかしともおぼえじ。その人他家にあるとき、いとけなき子の起居に心くばりせしを見ては、おのれがをやもかゝりけむ物をと、母の故いとたふとまれぬべし。

　　世はこれぞ薺はあすをたくはへず　　己百

かゝる深長の處は、ひさしくとゞまるべき地にあらねば、いまはその人も、〱薄〱と底のまるみや三日の月　といへる處にぞあそぶらむ。

　　乳麪の下たきたつる夜寒哉

是は曲水亭にて、夜寒といへる題の發句也。さるを大和の國みわの麓に旅ねの比、此句申されしよし、都の方より吾妻路に聞ゆとて、人〱のもてはやしける也。さばかりのたがひは、此句ばかりにもかぎるまじければ、阿

叟の名望をいやがり申されしは、金ノ源三が撰集はづれたるたぐひにはあらじを。

白桃や雫もをちず水の色　桃隣

緋桃は火のごとくならねど、白桃はながるゝにちかゝるべし。ひさしく薪水の勞をたすけて、此句の入處あさからずと、阿叟もをきあがり申されしなり。

此わすれながるゝ年の淀ならむ

名月や池をめぐりて夜もすがら

必とする事なきは、素堂亭の年わすれにして、固とせざるは芭蕉庵の月見なるべし。

○風雅は一句のしたつる所、風流なるべし。たとへ意は害すべくとも、詞は破るべからず。いまやひくらむ望月の駒と讀るは、まさしくそのたぐひなるにや。今の人のこ間をさとらず、飽まで姿のくだけぬるをさへ、一句の意味淺からずといふ。あさまし。

かり寝せん味方が原の女郎花　史邦

馬上に架を横て吟ずる人は、今の世にはあまた侍らじを、味方がはらのかり寝せんといへる、此郎の風流ならずや。

阿叟もあしからずとゆるされ、左右十八につがひ申されしを、深く武具の櫃におさめける也。かの處に名をとゞめけむ、草のゆかりにも、幾秋の手向とはならまし。

木枯の地まで落さぬ時雨哉　去來

尾の荷兮が、木からしに二日の月のふきちるかと申侍るは、今の時雨にはつのりけむ物をと、みづから恥申されしを、阿叟はさもおぼえず、他は二日の月に心をとゞめたれば、時雨は古今に變せざる姿ならむ。されど迄といへる文字は未練の叮嚀なれば、唯地にも落さぬと有べきよし、いつやら申され侍しとかや。

おとゝひはあの山越へつ花ざかり　同

此句、三四年もはやかるべしと、阿叟も申され侍しよし、今は四とせばかりにもならぬらむ。なつかしき君子もあれや吁。

○風雅は世になきにしもあらねど、万分が中も唯師なし。聖人の桴にのらむと仰せられしも、天地の外にもあるまじければ、但歎息の餘音なるべしと申たれば、阿叟はいましめ申されき。

○よき人の風雅の沙汰仰せられむに、さかしきもの、おのれがいとなみの理にも、かなひぬるといふはよからず。況や句づくりなど、なをし給はむに、聊こゝろゆかぬ所ありとて、又あらため給ふとき、句のあるじさしのぞきて、おのれも心得侍らざりしが、このたびはめでたくさぶらふといふは、はじめは、いかにしのぶらんと、よろづに心づかひせらるれ。

○さりぬべき人〴〵の會にも、句の所をあらそひ、月花の座をねらふ事、いかにあさましきや。人その位にあらましかば、などおのれが心にも叶ざるべきや。物はかならずおくれよと、古風の老子も申され侍しを、かゝる事、風雅の上のみにもかぎらじ。

○今の人は所謂風月の情に過たれば、明暮のはなしにも。素言は聞もいれねば、あらぬ人の名によそへ、いさゝかのくまをあらせむとおもふは、つねの心をだやかならじ。さる人の交あわからねば、終に美食の病いえずなりぬ。

○居常の消息にも、妓童舞女の隱語をまじえたれ、ばおのれよく讀みあげたる、いとあさまし。さる文もやるべき所あるにぞありけれ。

○風雅は道の階梯なれば、内は肝膽の理にわたらず、外は人物の情に達スべけれど、おのれ風雅を墻にして、世の利要にをよがむとするものは、箇ノ中の論にあづからじ、かゝる多口の是非など、阿叟はつねにいみ申されしかど、若あるまじくば吾ひとりつみせられて、阿鼻の口業にしづみなむと、於ニ圖司之周栢堂ニ而絶レ筆。

元祿壬申五月十五日

東行ノ餞別

此こゝろ推せよ花に五器一具　　芭蕉

吾聞以レ財おくるものは、君子の人のしのびざる所なるを、今やわかれむとするとき、わすれず灸せよなど、いへる人をさへうれしく覺ゆるものなり。しらず、この別こゝろいかむぞや、たとへ推し得て十成なるも、奈古曾の關のなこそつらからめやは。

モ、すぢりゆがみてふさむ花の陰　支考

白河の關に見かへれいかのぼり　共角

片方はわが眼なり春霞　桃隣

釋支考、奥羽の間を經て、岩城(イハキ)にも行脚すべきよし聞へければ、

年經ても味をわするな岩城海苔　露沾

京二條寺町上ル
井筒屋庄兵衛板

續五論

支考稿

續五論

文考稿

滑稽論

俳諧といふに三あるべし。華月の風流は風雅の躰也。おかしきは俳諧の名にして、淋しきは風雅の實なり。この三の物に及ばざれば世俗のたゞ言となりぬべし。詩といひ歌といふ。俳諧は高下の情をもらす事なし。しかるに世の人の食喰ひ、酒のみ、燈をかゝげ、硯にむかひて口にいひ紙にかきつけたれば、是を今宵の俳諧ともおもへる。さるはなきにしもあらねど、たゞ俳諧の日用といふべし。をのが家つくらんとおもふものは、一木一草もおろかにはすてず。見るにつけきくにつきて、平生心にわすれざるは俳諧の家の主人公といふべし。人たゞ俳諧の名にまよひて、是非も俳諧を口にいはむとおもふは、おろかなる俳諧師也。

有情のものはさらにいはず。無情の草木・瓦石より道具・表色（包カ）にいたるまで、おのれ〳〵が本情をそなへて尤人情にかはるべからず。其本情にいたらぬ人は、月華に對して月はなをしらず。道具持てももたぬ人に似たるべし。

金屛の松の古さよふゆごもり

炭俵の序にこの句の魂すはりてとかき侍りしが、そのたましゐといふは何ぞや。金屛はあたゝかに銀屛は凉し。是をのづから金屛・銀屛の本情也。しかるを世の人金屛の松の古びはよき冬籠なりと見てをかば、風雅のかたはしを心得たるといふべし。六月の炎天に金屛をたてんに、人の顏かゞやきてよからず。されば金銀屛の凉暖を今の人の見つけたるにはあらず、そも天地よりなせる本情也。それをしらぬは誠にしらぬといふ人なるべし。しかれども金屛・銀屛のうち出たる本情は、貴品高家の千疊敷とおもひよるべし。それを松の古さよといはれたれば、蝶つがひもはなれ〳〵に兀（はげ）かゝりて、ばせを庵六疊敷のふゆごもりと見え侍るか。是風雅の淋しき實なるべし。金屛のあたゝかなるは物の本情にして、松の古さよといふ所は二十年骨折

たる風雅のさびといふべし。そゝ〳〵本情あり、風雅あり、その本情だにしらぬ人の風雅に骨をらんとするは、とうふ(豆腐)をあへものにせむとおもへる、料理のたがひもあるべし。

蚊屋しまふ夜や銀屛の花薄

この句もその烌、尾城のあたりより出たる銀屛也。かくいへば奥八疊・次十疊の座敷に椽の月影もきらめき渡り、玉階ノ夜色涼〆如レ水といへるその夜のありさまならん。始の金屛は松のふるびて取籠りたる座敷と見え、後の銀屛は花薄のはなやかにして取ひろげたる座敷と見ゆ。是も銀屛は本情にして、花すゝきは風雅也。この本情と風雅のふたつをしりて、はじめて俳諧をしれる人といふべし。

華實論

詩歌といふは道也。道に華實あるべし。實は道のみちにして、人のはなるべからざる道をいふ也。華は道の文章にして、神のこゝろをもやはらけぬべし。佛は四十九年の世情にたどり、老子は五千余言の世話にしられ給へる魯夫子、なをちかくたとへ(喩)をとるとぞいへりける。みつの道ともに文字に出たる、世にいふ道の風雅なるなり。五常といひ五戒といふ、惡をさり善によるの外なし。さりとてよそへいはざれば、人の心やはらぎなし。世に人の人を戀せんにも、君をおもふとばかりきかせたらんは、人もなどあはれとはおもひたらん。木曾路の橋のかけてわすられず、沖の石のかはくひまもなきたもと(袂)にわびて、あたなる紙筆のあやにもこゝろうごきせらるゝを、是が實に華なければあらず、といふたとへにもあらんか。詩は關鵰(雎)にやはらぎ、哥は八雲の色〳〵によみひろごりて、古人の托物比興とかいふなる道に、文章あるのはじめとぞなれりける。詩に連句あり、歌に連哥ありて、詩哥連俳の四の道とはわかれたるぞ。しかるに俳諧といふは、和歌に對しての名なるべし。心の俳諧をいふにはあらじ。歌は中品以上をもてあそび、俳諧はそれ以下をのこさず。是をたとへば、僧と俗と一座にありて、僧は野菜の風味にとゞまりたるが、俗は魚鳥の美をしり、野菜の風味を

ものこさゞるがごとし。俳諧など以上の風流なからん。さるを俳諧といへば、肥もち田にしほる賤の男・賤の女もいふやうにおぼえたらんか、口にはいひもしつべし。いかで心のくまをあきらめ侍らん。言葉やさしけれど、心いつはりたる人あり、心にいつはらねど言葉にげ(似)なきひとあり。といふもかくいふも言語はかりのものなれば、心のをき處風雅ならんこそ風雅の人とはいふなれ。くだかけとは庭鳥をいひ、ふかみぐさとは牡丹をいふ。いづれかいつはり、いづれかまことならん。さればとて地藏のあたまに薬摺小木も、唐がらしの秌(あき)に逢ひて紅葉するなどいはむも、いふ時はおかしけれど言語の實なしともいはれぬべし。今の世の俳諧師は繁花の地に點者の額うちて、野郎・傾城の本寺のやうにおもはれ侍るは、世俗の諺(コトハザ)にあそぶゆへなるべし。さりとて世情にうとき人は蛙の土中に冬籠りたるやうにて、それも物の理なかるべし。このさかひは二十年の腸をさくべき俳諧の工夫地也。をのれが心は女色・美肴のたのしみにをきて、口に風雅のさびをいはんとおもへる、心・口のふたつあらばいひもいはれぬべし。風雅は本さびしきもの也。女色・美肴は最上のたのしみ也。たのしきに居ては淋しきをたのしみがたく、さびしきに居てはたのしきをたのしみやすしといふ所を、心におもひてつ(徹)したらば、終りにそみ終りに喰らふとも、いかで風雅のさびなからん。年わかければさびなしなどいふ人は、俳諧のそも心より出るものといふをしらぬ人也。誠におしむべきは今の世の俳諧也。言葉をかざり面にこびて、あの人は殊勝の人なり、俳諧も上手なりと世の人にいはれたらんは、世の中のねばりあまみとて、西華坊が身にとりてはうとましき事の第一也。世に自慢といふ事の侍るは、その道にあきらかならぬ人の事なり。をのれよしとおもふは人のそしり(謗)てもくるしからず、をのれあしゝとおもふは人のほめてもうれしからず、よきは天地よりよく、あしきは天地よりあし。天地の本情をしらんに、何の自慢かあるべき。このあたりは俳諧の一場也。されば此論は心を實にをきて、言葉を華にあそぶべき華實相應の風雅のたつきとや申侍らん。

新古論

俳諧に新古あり。古は守武・宗鑑より貞德・貞室のともがらにいたる。その後は難波の梅花翁ありて、しばらく胸次の理屈をはなれたるに似たれど、しかも言語の實なし。先師、よのつね俳諧に古人なしとなげき申されしは、むかしの俳諧に誰を師としまなぶべき風流なしとおもへるなるべし。詩は杜甫・李白が腸をさぐりて、東坡・山谷が風騷をまなび、歌は人丸・赤人のこゝろをつたへて、定家・貫之の風雅をしたふ。宗祇・宗長は連歌にまことあるやつれ人とこそきくなれ。その詩哥・連俳に風情・風姿のふたつあり。是は華實のふたつに似て、いさゝかたがひもあるべし。是を世上の人にたとはゞ、辨舌口才の人赤裸(ハダカ)にて玄關にかしこまりたらんは、なにの使者かつとまり侍らん。綾羅錦繡を身にまとひたる人の耳うとく舌みじかきは、風姿ありて風情なきたとへなるべし。さればいにしの俳諧は風情ありて風姿なし。それも風情のみならば慈鎭・西行の歌のまことにもかなひ侍らんに、風情わづかに動きぬれば理となり、その理きはまりて後を屈といふ。たゞ風情變化の理屈のみありて、をのづから風情の實うすく、風姿はきはめてその論なし。ある人、我も古風の俳諧は名人たるに、今は得せずなどいへるが、いにしへの雜談俚語をまなびて、いかで詩哥の本情にいたらん。新古のさかひをしらぬ人のいひなるべし。されば古今集に俳諧の名はあらはれたれど、萬葉の時已にこの躰あり。しかれども風情はたゞ風情をつくし、風姿はたゞ風姿をつくす。姿情たま〱あひあへるものも、しゐて姿情をとゝのへたるにはあらず。是は古代の人のありさまなればならし。詩歌・連俳にかくのごとき變化あり。その變化は誰がなせるとにはあらねど、春の花と咲、秋の木葉とおつるものゝとゞむまじき自然の理なり。その理の中にありて、かしこき人は詩歌・連俳の祖師ともいはれ給へる。されば寒暖を本情として、花とさき葉と落るは春秌の姿也。何か風情ありて風姿なからんや。古風の俳諧に姿なしといふは、遠き人〱は論ずべからず。

　夕だちや細首中に大井川

是中比何人の句ぞや。水からくりを見る様にて、今の俳諧といへど此眼前をさらず。しかれどもこの句に新古あり。今の俳諧ならば、五文字に五月雨と置べし。夕立の姿は水のあかばしりて、たつたとながれたれば、見渡しのさまいそがし。五月雨の姿は薄にごりて漫〳〵と引たゝへたれば、細首の浮わたりたるさま殊によし。このたぐひは姿をしらず。たゞ夕だちは太刀にて首をきるといふ理屈に落たる故なるべし。姿情のさかひはさる事ならんか。

五畿内に降白雪やつめた食

山〳〵に裾わけするや富士の雪

坊が童たりし時雪の詩つくりて、ある和尚に見せ侍りしに、此二句をたとへものにして教給ひしを、夢のやうにおぼえ侍るが、今はありがたき事なるべし。五畿内の雪は理屈をいひて姿をしらず、富士の雪はたゞ理をいひて姿あり。理と屈とのさかひは此ほどにや侍らん。

中〳〵に雲よりうへはいさしらず
見ゆるばかりも高き山かな

山〳〵の高ね〳〵をつたひきて
ふじのすそ野にかゝるしら雲

始は姿情のまゝにいひ出し、次は姿情の理をいふ。いづれも高き處をいふなるべし。是を風雅の理とや申侍らん。俳諧は無分別のところにありて理屈なしとのみいへば、吾門にもあやまりたる人ありて、眼前にさえぎりたる物を口にまかせていひちらし、切字・てにをはの詮義もなく、附句はつきもつかず、一字半言もこゝろにおかざれば、人にへつらひなしといはれて、肌着一枚に世情をふみやぶりたるなど、是を野鐵炮といふ風雅の罪人なるべし。されば門人の放埒より師の名をはづかしむる事は、むかし今の鑑なるべし。

若衆に供のなきこそ不審なれ

國に古風の殘る鍋しま

前句にかくいひかけたらんに、理屈なしとてその理をいはざれば埒なし。さればとてこの若衆、逢がたき人をしのぶとか、又は討はたすべきけしきとか附たらんは、それは世間の理屈也。若衆の供つれぬは古代の様なりと見

なしたる、是風雅の理といふべし。

行水のあがりを人にあふがれて

たゞ一馬場に癖をしる馬

かやうに附たらん、世間の理屈也。あつさに行水するとならば、鞠にあそび木をうへかへたるもおなじ附句ならんや。一句の全躰を見る事なし。行水にあふがるゝといふは、公家長者のたぐひなるべし。千人が千人あふがるゝといへど、あふがるゝは武士の本ゐにはあらず。此前句には、歌合にまけて不機嫌なるなど附たらば、あふぎゐたる妾の何心なきさまゝでおもひやられ侍らん。この句をあふがせてといひかえたらば、さは又機嫌よきさまなるべし。風雅の理・世間の理とて二になし侍るは、本情にかなふと、かなはざるとのさかひ也。理は不盡の妙とて、鷺をからすといはむもいひふすべし。それは天地の本情にあらず。かくいへば理屈の論に似たれど、風情のうごくと動ざるとを此所にさだめたる也。たゞ新古のさかひをしるは姿情のふたつをしるべきなる也。

苗代を見てゐる森の鳥哉

西華坊一とせこの句をおもひよせ侍しに、始は脇に見てゐるといふ七文字なりしに、一句のさまおもはしからず、百練の後、森の一字を得てからすの風姿さだまりたれば、はじめて發句とはおもはれ侍る。是は尾府に有し時の吟也。その頃伊勢にある人のおなじ春の苗代を、一字もたがへずかくいひ侍るときけば、我はなど森の一字に骨をりたるぞと、風雅にうらめしき心もありしか。

寒る夜に躰の出來たる千鳥哉

是は何がし僧の句也。人もほめ、みづからもいみじとおもへるよし。西華坊に見せ申されしを、この句よからずといふ。されば冬の夜のさえわたりたるに、何の躰はなけれど、ち鳥の寒さのみ躰ならんと見たるまなこは、よのつねの趣意にもあらねど、この句に風情ありて風姿なし。千鳥を躰と見たるはわたくしの作なるべし。千鳥たつときけば、まづ聲のおもひやられ、鶴啼わたるといへば、そのすがたのおもはるゝよ。草木も鳥獸もとる所をの〳〵となならん。

寒梅といふこゝろを

雪霜の骨となりてや梅の華

是は西華坊が千鳥をあらそひたる時の句也。是さらに寒の字の躰をいふなり。水仙を仙骨といへる詩あり。是は肌(はだ)へともいふべけれど、皮肉はあたゝみあるをいやがりて、古人もこのさかひに眼をくばりたるなり。かの千鳥にいへる躰の字は、殊にすこやかならず。されば梅の華の疲てするど(鋭)に、世のあたゝみなきを骨といひなせるが天地の本情にして、かつ風姿もとゝのひたりといふべし。あるハ、夜咄にあつまりて幾人も火燵にあたりたるといふ事を、菊の花の咲たるやうにといへるが、あの人は風雅も心得ぬ人のよき事いへるかなど、うらやましがりしぞ。されば火燵にあたるは情也。菊の華といふは姿也。かりそめの咄だに姿情ははなる(離)まじき事也。かくいふ姿は事物の姿なり。又一句の姿といふ事もあるべし。今やひくらん望月の駒と云哥の姿を、葛の松原にも論じ侍しが、此たぐひはあまたあらめど、歌の道をよくしらねばおほつかなき事のみぞおほかる。

此一章はおほく姿情を論じたれど、姿情に新古ある故、新古の二字をもてこの論に名づけたるなり。

旅論

旅は風雅のやつれなれば、旅の情見る事かたからん。たま〳〵風雅にやつれたる人もおのれが観相にのみ落入て、一句の姿しづむにちかし。吾翁の、ひよろ〳〵とこけて露けし　といへるも、足縦横にふむで伊達の大木戸を越るとあるも、その人をおもへばみなたふとし。世はたのしむべく、世はかなしむべしとしりたらば、あるいはあらく、あるいはこまかに、どんすの夜着に逢ひては、年わすれの酒によひふし、一枚の薦を身にまきても、花の春をいはひありく、是を世にある自在人といふなるべし。旅はまづうきものとおほへて、おもしろきはその日の徳とおもふべし。

されば俳諧に、旅の附句ばかりにはかぎらねど、まづ旅

といふ字の見ゆれば、たゞ馬・駕籠・わたし場の船とばかりおもひよりて、丸薬・干薑の附合も耳にありておかしからず。煎豆・麦焦(コガシ)は順禮の時の附合とおぼゆらん。さるは旅といふ一字につけて、その外の寒暖風雨すら貴賤貧富のさかひを見さだめず。何を何に附たりとも、山川草木のすべて旅にあらざる物なし。されど附べき處に附れば、物の名に古し、あたらしといふ事はあるまじ。名所舊跡などいへば、松の木を臼にするといふ附句の、行先の國〱にいひわたりたるは、いかなる冥加の松の木にかあらんとおかしがりしか。臼といひ松といふ名の古(ふるし)といふにはあらず。この故に旅の句と戀の句とは、中にありて骨折るべき事也。

初旅に先雨の降るふ仕合

はつ旅にみな見る事のおもしろく

初旅ときけば、むすこ(息子)か、むすめとおもひよらるゝに、始の初旅は、庄屋のむすこなどの參宮するにぞありける。この泊より雨にふられて、連の人もあまた侍るが、柿の葉人形のように薦に穴あけて、首さし出したる人もあるに、さるは草鞋にかゆる時わるしとて、金柑の覆のやうに髭ながら身にまき廻したる人も侍り。手島御座(座)は損のたゝぬ物とて、行末負ひありくも心なかし。されどこのむす子は若むらさきの一字のゆかりやあるらん、手習師匠に合羽かされて、この時かゝりたりとうちき(着)ぬれど、終日の雨にうは着のゆかた(浴衣)もしぼるばかりなる雨の日のふ仕合と、前句を見さだめて、

初旅に先雨の降不仕合

若衆のさがる髪の結ぶり

かくいへば前髪の笠におされたるありさままで、など前句の意味を附落し侍らん。次に出立たる初旅のさまは、みな見る事をおもしろがれば、ねよけの草のはづかしき頃にはあらで、廿(はたち)もやゝ過行たる女の情と見るべし。しからば人のなさけ、世のあはれもおもひわくべき年のほどゝ見て、

はつ旅にみな見る事のおもしろく

男戀しう城でとしよる

かくいへば、ひたぶるおもしろきは、ひたぶる氣のつま

りたる事あるべしと、言外の余情も見わたりたるは、城の一字骨折なるべし。

　土橋にかゝる馬の鈴おと
　　富士を眞向に乘て行馬

旅に馬・かごの句はあまたありながら、一句の姿と情にて附句まち〳〵ならん。かゝる旅躰のあらんに、田打・畑打・村はづれ・宿はづれといひたらんに、つかぬ句はあるまじけれど、始の馬は土橋にかゝるといへるいきほひを見れば、我門を出て十町には過ぬ馬也。たゞ今あの土橋にかゝりたりと見送りて、

　土橋にかゝる馬のおと
　　機嫌よふ旅にたゝする親心

かくいへば、出入の姥もそこの門に立まじりて、寺のほりの頃の稚名(ヲサナナ)までいひふらし、今のゆゝしさをもほむるなるべし。次の馬は眞向に乘て行といさみたれば、心にうれしき事あらんと見さだめて、

　富士を眞向に乘て行むま
　　元服になを奉公のおもしろく

かくいへば御物あがりの一江戸に千石とおもひとりたるは、うかめ過て行するゑおぼつかなし。是は富士といふより見定たる旅の情なるべし。

　風呂敷を片よせて置窓の下
　　たびねはさむき老僧の咳

かく附侍しに、風呂敷の句ぬし、片の字さし合て侍り、捨ると直し侍らんと云。しからば附句の心もたがひぬべし。

　風呂敷を捨て置窓の下
　　異見をすれば小便にたつ

始の片寄てといへば、二三日も旅にある句也。後の捨てといふ時は、をのれが家にありて、明日たゝんといふ今宵なるべし。しか又片寄て置とは、用心ふかき年寄也。捨て置とは手まはしはやき若人也。かく老若のさかひまでもあるべし。親ごゝろのくど〳〵敷、矢橋の船にはのるな、芝居の巾着・寐所の帶の置どころまで、まして色町のわるづかひなど、たら〳〵の異見しかゝりたれば、むすこは親仁よりかしこし(賢)と聞なぐりて、小便に立ふりして友達の方へ暇乞に行たりと見て、二句のさかひ分明なるべし。

されば旅・戀の二躰ばかり、あるが中に附わきがたきもの也。よのつねの附句といへど、このさかひあるまじき也。世に俳諧する人のけふもいひ、あすもいへば、おなじ事ばかりいふやうにおもへど、それはさしあたりたる氣變をしらぬ人のいひなるべし。たとへば、明くれあそびに來る人に、お出か、あがり給へといはむに、いふ人の顔つき・聲のすみにごりにて、あがれとおもふ時も有、あがるなとおもふ時もあるべし。いふ人もいはるゝ人もかはらず、詞もおなじことばなるに、得失是非のたがひあるは、是さしあたりたる氣變也。しかるを、あがれといふは、いつもあがりて、たばこ吸ふ事とのみおぼえたる人は、俳諧のみにはあらじ、仕官商賈の道にも心もとなし。まして附句などは、夕アいひたる事を今宵又いふとも、一字一點のたがはぬ事はあらじ。よしたがはずとも、今宵の氣變によるべし。旅といへばなら茶・田樂とおもひ、戀といへば紅皿・おしろいと覺ならひたるは、神樂人形の笛吹やうに、笛は鼻のあたりにも抑あてつべし。世の言葉を濱の眞砂にたとへたるは、つきせぬ風雅なるべし。その砂の數には五色のたがひはなけれど、おなじ事のひとつ／＼わかれたる也。道は言葉をもて意をやぶるべからずといふは、意の新古を論ぜず、文章は意をもてことばをやぶるべからずといふは、意の新古を論たるなり。道にあきらかならん人の、なにか言語にまどひあらん。

　お寺から目下に城も見ゆる也
　　笠しきながらたばこ吸ゐる

さればよのつねの附句といへど、かく附たらんは、宮も寺も山類も水邊もおなじ事ならんや。たとへ豆腐・こんにやくとおもひよせたりとも、寺からはといふ五文字になりて、おの字の風情は附落し侍らん。

　お寺から目下に城も見ゆるなり
　　夜着の馳走に逢し久六

かくいへば、城下の寺の富貴を久六がほめなぐりたるありさま、おの字ばかりならんや、樣の字なをあるべし。

　隱居には灯もとぼさずに宵まどひ
　　垣の干葉の風にからつく

かく附たらんは、木陰の社家・在郷寺などいはむもおな

じ附句ならんや。たとへ行水・夕食と附たりとも、灯もとぼさずといふ處は附落し侍らん。

　隱居には灯もとぼさずに宵どまひ

　先度の餅は何になつたぞ

かくいへば、本屋の女房の下部共相手にして、隱居をそしりゐるありさま迄おもひやらる。さるは世にありふれたる情なるべし。

さればとて附句はあつさいかむ、寒さいかむと、前句を料理して附たらんは、土圭の中のからくりを見るやうにて、むづかしき糸のむすぼれも侍らん。明くれ枕の上の工夫をその座にあたりていはんに、よきもあしきも、その情にいたりてしるべき事也。

戀論

芭蕉門下に戀を一句にて捨るといふ人あり。其さたなきにはあらねど、師にうとき人の一筋にいへるなるべし。戀の式に二句より五句にいたる、といへる古人の途轍になづむべきにはあらず、一句にては捨まじきゆへありて也。世にいふ孀・娘・女房・後家のたぐひ、野郎・傾城の文字を戀とはさだむべからず。それもこゝろの戀あらば、百年のつくも髮も、わりなきおもかげにはたちぬべし。女、戀ならば男も戀也。むすめ戀ならばむすこも戀ならん。孀・娘を戀とさだめたるは、男のさだめたる戀なるべし。かん國の風雅ならば、さは又さだむまじきを、人はあさぢが宿に立しのび、雲井の余所をおもひやりて、さながらいひもし、いはずもなりて、物のあはれも是よりやおぼゆらんと、をしはかる情もいとふかし。しかるをおやにしらせ、仲人のいひしろひて、樽肴にさゞめかれたる、何のやるかたなき戀にかあらむ。

されば戀の附句といへば、文か夢か、おもふぞ、うらむるぞとつけたらんに、つかぬ事はあるまじ。このさかひを見さだめがたければ、吾門には戀の句を筋骨とおもへるかし。戀の事は一座の宗匠にまかすべしと、先師も遺誡申されし。

　月華にむかし小袖の袖せばく

つねのなさけを出かはりに泣

この附句戀にあらず。年のほど四十ばかりなる女房の主の氣に入、我も氣にいりて、家に久しきものなりしが、國所に見捨がたき事いひわたりて、いとまとりたるにぞ有ける。この句に戀をつくれば、前句も戀のなさけにならん。しからば人の句の意味をやぶるにちかし。たゞ文字にまよふ事あるまじき事也。

八朔も九日も酒のさたばかり

朝寐夕寐に年寄の妻

この附句戀也。節供・節日は着かざりて、あそばむとおもへる浮世ごゝろあらんに、酒はさたばかりにて朝寐・夕寐の淋しさ、心ゆかぬ處あれば、此つまは年若き後妻など見るべし。此句に戀をつけざれば、是又人の句の意味を破にちかし。されば戀に僧あり、俗あり、年わかく、老たるもあるべし。さるは上中下のしなをさだめざらむや。いつはり人・まめ人のさかひまでも、一句のいひはなしたる言葉のあやには見ゆらんかし。かゝる氣變は戀にもかぎらじ。

燈籠に人を見そめたる戀

冠きて稚き袖の露なみだ

このさま何人ぞや。とうろに人を見初るとあれば、あどなき所ありて、高家の公達など見るべし。しからば夕霧の君の雲井の鴈をおもひそみたる、おもかげもかよひ侍らん。しかれどもおさなき袖の泪とばかり句をつくり侍れば、はしたなき賤童のたゝかれても泣やうに侍れば、冠きてとしづめたるは句法也。

忍ぶ夜の月影さむき投頭巾

山の若衆が里で戀する

このさま何人ぞや。頭巾投たる人はあまた有ながら、僧にもあらず、男にもあらず、まづは寺若衆と見るべし。山といへば日枝・横川の山法師のおもわれ人也。是をお寺若衆と句作りたれば、年まだ十四五にして、顔に肉黍なし。山若衆といへば、廿にちかきうら枯の髪かたちもおもひやられて、投頭巾のさま、よづきていとおかし。

時ならぬけはひに行燈とぼすらん

うそにほれたる人もまちつゝ

是あだし人の戀也。この女年にもあらぬ化粧などに奉(傍)輩中にもにくまれ、をのれが心のうは氣より、人のたのむまじき心も得しらで、うそにほれたる人もまちならひたるは、なにがしをんなのお(老)ひがほにおしろいぬりて、森の下草にかこちたるありさまにもかよひ侍らん。

　　なりもならずもいふて見る戀
　無筆にはいかにうまれて美しき

是かりそめの戀也。世に髮かたちいときよらに、顏の色もうすべにたちて、饅頭とかいふなるむまげなるかほあり。かならずあほうのうき名たちて、たゞにこやか人と人にいはるゝなるべし。何の手わざにも心つたなくて、御用木などいへる世話の侍るは、聲もよくて歌うたひたる時の事なるべし。しからばおもひしみたる戀路のたどりもなからん。されば、なりもならずもねてかたらはむとよみたる歌は、人をなだめてふかき心をいはむとなるべし。此句に云て見るとあれば、たゞかりそめの戀とはしらる。さばかりの文字のたがひにて、哥の心のかくひるがへりたるにやあらん。

野郎戀

　むかしばなしに野郎泣する
きぬ〳〵は宵の躍の箔おきて

傾城論

　湯漬の膳になみだこぼるゝ
傾城の人まつふりをかくし合

馬士戀

うは置の干茶きざむもうはの空
　馬に出ぬ日は内で戀する

浮草のおもはずもあひ、あへるあだなる野郎・傾城の枕だに、何なき夜どをかさねたれば、はじめのいつはりたる言葉も、いつしか袖ぬらすべき泪とも、時雨とも降かはりたるは、誰がまとよりといひけん歌の心もこのあたりなるべし。いやしき馬かたの戀といへど、上置のほし茶に手をとゞむるといへば、針をとゞめて語るといへる宮女のあり樣にも、心の花はなどおとり侍らん。かくのごきは戀の本情を見て、戀の風雅をつけたりといふべきか。

しらぬ人もあるべし。儒者・佛者立たる人の人にむかひては、文字言句にあたりたる言葉をいへば、あの人の引導にも聞あきたりと友達にいはれてこそひがたき、是もゑせ人也とあり。かくあらんに、俗は俗くさく俗は俗くさきを、世にある第一の難といふべし。しからば俳諧は何のためにする事ぞや。雨の日・雪の夜のをり〳〵、燈の下にかしらあつめて、月華といへばよし野・更科のたびねに宿かりかねて、犬にほえられたるひだるさなど、夜雨の今朝はにこやかに照わたりて、松陰の茶屋に朝茶のにほひはなやぎ、そこなる人にお僧いづこへといはれて、跡先になり行など、馬かたに酒のませて富士の高ねの雪を詠め、船頭にたばこ吸せて淀のわたりの郭公をきく。月雪華ほとゝぎすの一字の間に置て千里のくま〳〵も殘ざるは、居ながら名所をしるといへる一念のたびねなるべし。夕べアにはなのちるを見ては、佛の顏かゞやきて山門に笠をぬぎ、あしたに鳥の囀るをきけば、神のこゝろ物さびて鳥居に扇うちしくばかり、是又一念の物まうでなるべし。戀には文君が酒をうり、無常には樂天が藥をうらむ。是神祇

跋

此五論のむねは葛の松原におほく論じ侍れど、こまやかならねば又いふ也。俳諧はそも何のためにする事ぞや。をのれが家にのみありて女房のかほうちまぶり、いわけなきむすこ・むすめに猿のはなしさせて、京の大佛はどちらむきなるぞ、白河は夜船か晝ふねかとしらぬは、ひたぶるのおろか人也。あるは糸綿の商に、京も大坂もかけあるきたれど、たゞ問屋の手代どもにあがまへられて、はやり哥の一文草帋をいひならひ、國にかへりては余所ことばにぬめりありく。さるものは一生おのれが本情をしらず、人にほめられ人にそしらるゝ、あやかし人といふべし。けだしは商の智ありてひすらこきは、あやかし人よりも寐ざめそひにくからん。かのおろか人とあやかし人とは、ならべてあやかし人おかしけれど、是も世帶の行するこゝろもとなし。野郎・傾城の座敷といへど、しりてあそばぬは高し。あそばず、しらぬはひくし。あそびて

あり、是釋教あり、まして無常も戀もなからざらんや。田家・山莊の諺には、田家・山莊のおもはるゝに、俵あむ片手には食の火をさしくべ、柴賣の戻に鍋ぶたあつらへたるなど、をの〳〵その場をさるまじき俳諧の風情也。されば詩歌にもこの間に心を置ながら、殘さざるものは俳諧是なり。さるを俳諧〳〵といふ五七五七ゝの文字につらねて、さし合・てにをはの詮はみてぬれば、人に草履を替られぬ分別を出し、宿に歸りては調市(でつち)が戸の明やうのおそひを、みだれ鷄のころにしかりまはす。此ほど俳諧はし給はずやといへば、武士は近侍・夜詰にいとまなしといひ、町人は米買・質置に取まぎれたりといふ。かくいふ人〳〵は、かの五七五七ゝの俳諧のみしれる人といふべし。されば俳諧は何のためにする事ぞや。士農工商のわざをやめて、その外の俳諧をいはむとならば、此世にあるまじき姿情ならんや。殿の御前にかしこまりては、我かく世につなかるゝは誰がためぞと觀ずれば、うれしき事いつゝ、くるしき事いつゝにして、誰〳〵が身のうへも世にあればさる事ぞかし。御前よろしき小性は、たちゐに褄のすそをけはなち、茶の間の小坊主が外郎(ういらう)はしがるも、その夜の俳諧とはおもへかし。殊に工商の人は世情人情にまつはれて、米買の袋〳〵はへて椽はなに立かゝりたるも、普請小屋のたばこに茶の葉きせたるも、いそがしき中の風雅と見るべし。心を物にうばはれて、口を風雅になさむといへる道のおしえはあるまじき事也。さりや俳諧を慰とばかりおぼえたらん、をのれが前にをきて、貴賤一情の鏡ともなさばなりぬべき。先師曰、俳諧はなくてもありぬべし、たゞ世情に和せず、人情に達せざる人は、是を無風雅第一の人といふべしと。しからば俳諧に心ざしなき人も、この五論のおほむねを何に見とがめざらんや。是をふところにせん人は、千歳の後に子雲に逢ふといへる、むかしの人の友達なるべし。

元祿戊丑の冬十月十二日、此五論を草稿して先師芭蕉庵の牌前に置て、燈香三拜して曰、此五論は西華坊が一字一涙也。あるは人をそしり、あるは世をいきどほる。此論あるまじくは、先師遺誡の心にそむき、三神風雅のにくみをかふむらん。是みづからのつみをかへ

り見ざれば、人また我つみをおはざらん。葛の松原はあづま人に殘し、この五論は筑紫人の記念にぞ傳え侍る。此時の風雅のまことあらば、あらそひはまことに風雅なるべし。

井づゝ屋庄兵衞板

二十五箇條

芭蕉傳書

二十五箇條

目錄

目錄終

○俳諧の道とする事

ある人問曰、はいかいは、何のためにする事ぞや。答曰、俗談・平話をたゞさむがためなり。又問、はいかいの道とする所如何。又答、佛道に達摩あり、儒道に莊子あつて道の實有を踏破せり。哥道に俳かいある事も、かくのごときとしる時は、道に反て道に叶ふの道理なり。され共俳かいのすがたは、哥・連哥の次に立て、心は向上之一路に遊ぶべし。

口傳一向宗の事あり
春秌心法獲麟之祕訣

○はいかい二字の事

はいかいの二字は古來に穿鑿(せんさく)あり、字書を引て、誹は非の音也共、あるひは史記の滑稽を引て、俳の字に定りたる共、穿鑿の理は明かなり。しかれ共、古今集より誹の字を用ひ來たりたれば、此類は古實とて、誤をも共通りに用る事もあるなり。尤、八雲御抄(やくもみせう)にも俳諧と誹諧の二様あり、され共我家には、はいかいには古人なしと看破したる眼より、玄とも玅(妙)とも名は別にさだむべけれ共、言語に遊ぶといふ道理をしらば、我家には、いまよりは俳諧の二字もしかるべし。他門に對して穿鑿すべからず。

○虚實の事

萬物は虚に居て變に働く、實に居て虚に働くべからず。實は己を立て、人をうらむる所有。譬(たとへ)ばはなの散るをかなしみ、月のかたぶくを惜むも、實に惜むは連哥の實なり。虚におしむははいかいの實なり。抑、詩哥・連俳といふ物は、上手に嘘をつく事なり。虚に實あるを文章と云、實に虚あるを世智辨と云、實に實あるを仁義禮智と云。虚に虚ある者は世に稀にして、あるひは又多かるべし。此人をさして我家の傳授と云べし。

○變化の事

文章といふ事は變化の事なり。變化は虚實の自在をいふなり。黑白・善惡は言語のあやにして、黑きを黑しとい

ふも、黒を白しといふも、しばらくの言語の變化にして道理はもとより黒白一合なり。しからば天地の變化に遊ぶべし。人は變化せざれば退屈する本情なり。況や、はいかいは己が家にありながら、天地四海をかけめぐり、春夏秌冬の變化にしたがひ、月はなの風情にわたるものなれば、百句は百句に變化すべき事也。其變化をしりても變化する事を得ざるは、目前のよき句に迷ひて、前後の變化を見ざるが故なり。されど變化といふに新古なき事は、人間の春秌に新古なきがごとし。其日其時の新古を見て、一卷の變化に遊ぶべし。變化はおふむね、料理の甘く淡く酸く辛きがごとし。能もよからず、あしきもあしからぬ所に、變化は虚實の自在よりとしるべし。

○起定轉合之事

俳諧は上下取合て、哥一首と心得べし。起とは虚空界にむかひて、無念相のうちに念相を發句といふなり。一物發る時に相對して又生ず、是を脇といふ。はじめは一物を定るなり。定の字あるひは請は、上の一物をうけ持心なり。されば發句は陽なり、脇は陰なり、第三は一轉して、天地より人を生ずるがごとし。人は天地より働けれ共、しかも天地より出る所をしるべし。合とは萬物一合なり。哥には流の字の心なるべし。是より變化して、山あり、川ありて、一卷の成就といふ也。

○發句に切字有事

發句の切字といふは、差別の心なり。物は其じやによつて、是じやと埒明くるなり。たとへば客と亭主との差別なり。たとへ切字ある發句とても、きれぬ時には發句にあらず。

桐の木にうづら鳴なる塀の内

此句五文字にて、心を隔たるなり。切字の事は哥にも詮義あり。先は發句の骨柄をいふべし。

○脇に韻字有事

脇はしつかりと、匀字にて留といふは、まづは初心への教なり。定の字にかなへむがため也。

色〻の名もむづかしや春の草
　うたれて蝶の夢はさめぬる

此句は、はじめてはいかいの意味を、たづぬる人の俳かい名目まぎらはしとて、まどひたるを其所直に一棒をあたへて、蝶の夢をさましぬる所、一句相對して脇の躰ならば、匂字・てに葉のせむぎなし。とかくに脇は、發句の餘情、氣色の面白く成やうにすべし。脇の身柄持たるは、脇の心にあらず。（口傳能々事あり。）發句は客の位にして、脇は亭主の位なれば、己が心を負ても發句に云殘したる草木・山川の一字二字の風情を加へて、客の余情をつくすべきなり。此脇も蝶の一字にて尋歩行さまを見るべし。

○第三に手爾葉之事

第三の留りに文字の定りたる事は、一句の樣、發句のやうなれ共、下のとまらぬ所にて、次の句へ及すべき爲なり。此理をしる時は、にの字ての字にもかぎらずとしるべし。され共、此句は第三の樣成と、百句の中にても撰び出すほどに第三の樣をしらざれば、やはり定りたる留りしかるべし。世に匂字留に傳受ありとて、あるひははつ櫻、あるひは郭公など、押字・かゝへ字の沙汰あるは、しらぬ人の推量なり。

かうろぎもまだ定らぬ鳴所

いづれの時か、我も此第三ありしが、一坐をいましめて佗閙を免さず、發句と平句などのさかひ、此第三の匂字にてもしるべし。されど尋常の留りにて事欠くまじき事也。

○四句目輕事

四句めは決前生後の句なれば、殊更大事の場所なり。輕みといふは、發句・脇・第三までに骨折たる故としるべし。只やり句するやうに云なしたれど、一卷の變化は此句よりはじまる故に、萬物一合とは註したるなり。都て發句より四句め迄にかぎらず、あるひは重く、あるひは輕く、あるひは安く、あるひは六ケ敷、其句・其時の變化をしるべし。此掟は中品以下のためにして、中品以上の人迚

も、此掟の所以云事をしらざれば、自己の俳かいのくらき人といふべし。

○月花の事

月は風雅の的なり。月は月〱にあり、花は四季に有て四花は月とも定まるなり。されどなごりの裏の月を略す格にて、哥仙の時は二花二月共有度事也。表の五句めに月有ては、裏の八句めに月花をすると、花前の秌季もむづかしく、秋季のうへもののもしがたし。秌季の發句ならぬ時は、表か裏に月一ツ有てくるしかるまじき事にや。此後器量の人もあるべし。それも又一坐のあひしらひあるべし。初心の人はいかゞ、月は七句め花は十三句めに有る事と、ひたと他人にゆづる時宜なり。いづくにても子細なし。都て月花は風雅の道具なれば、なくて叶はぬ道理をしつて、さのみ月花の句に新しきをもとむべからず、一坐の首尾よろしきにしたがひて、毎〻の俤の句なり共、其時、程よきやうに付て置べし。さして奇怪をこのむべからず。

○花に櫻つくる事

世に花といふは、櫻の事なりといふ人も有れど、花とは萬物の心の花なり。たとへば花聟・はな嫁の類、茶の出はな・染もののはなやかなるも、そのもの〱の正花なれば、花と賞翫の二字にさだまりぬ。いづれのはなにても春の季にして、植物に三句去べし。花は春の發生する物なれば也。古へより花に櫻を附る事、傳授あると初心にはゆるさず、或は櫻鯛の類など前の花にあらざる櫻ならば、あきらかにしつて附べきなり。花前のうへものとても、此類にて知るべし。但、花は櫻にあらず、櫻にあらざるにもあらずといふ事、我家の傳受とするべし。（傳いとざくらの事あり）

○當季を案ずる事

月花の句にもかぎらず、四季の附句に其季を案ずる事、前の二三句かろき時は、當季を經て趣向より案べし。たとへば獅子舞と趣向を定め、門の花とあしらひ、薙刀と趣向を定て、橋の月とあしらひ、前の二三句重き時は、

尤、其當季より案じて、花・鶯・月・露の類に、一句の風情を附べし。されば二つの案じかたは、もとより變化のため成る事をしるべし。

二季に渡るものゝ事

右は二季に渡るものをば、後の彼岸といひ、秌の出かはりといふ。されど前句の秌に附くる時は、後の字にも及ばず、秌季なり。此類は數多ある事なり、或は節句の二字に名目を附くる時は、大方うへものゝ指合(さしあひ)あり。是又、前句の季にしたがふべし。西瓜は秋季よろし。牡丹を夏にする類なり。夏季にはふり(瓜)の類多故なり。星月夜は秋季なり。月にあらず。發句に此辭ある時は、七句め他の季にて、異名の月あるべし。みそさゞいは秌の小鳥に入たれど、かならず冬季しかるべし。こと(殊)に十月の比おかし。青葉、夏季にあらず、雜也。若葉とすべし。淡雪は春季もしかるべし。口傳新古式法あり むし・砧の類は、夜分の心ならでは面白からず。されど夜分に指合なし。其外は此類にてしるべし。此詮義、古式になし。鐘の音(ね)・砧うつとはせぬ事なり。かねのをと、衣うつとはいふべし。口傳子・タノコトアリ されば、よくしりてするは、一坐の扱ひによるべし。

○發句の時は季に用事

あるひは夜着とふとん・足皮・頭巾の類、扇・あはせなど尋常に用るもの多し。發句にする時は當季、平句にしては指合繰るべからず。されど一句のさまにてたしかに冬、たしかに夏と見ゆる時は、其せんぎに及まじ。此掟は道理の指合を知て、文字の指合を穿鑿すべからずとなり。

○發句蒙やうの事

發句は屛風の畫と思ふべし。己が句を作りて目を閉(とぢ)、畫に準(なぞ)らへて見るべし。死活をのづからあらはるゝものなり。此ゆへに、俳かいは姿を先にして、心を後にするなり。都て發句とても付句とても、目を閉て眼前に見るべし。心に思ひはかつてするは、見ぬ事の推量なり。目に見て附ると、心に量て附ると、自門・他門のさかひ、呰筆

の上に盡がたし。諸集の附合を見て工夫すべし。口傳汎哥の事あり

○附句案じやうの事

發句はかく別の事なり。附句は其坐に望て、無性に案じぬが能なり。我心沉みぬれば、趣向もしづみ、我草臥より人も草臥て、一坐終に成就せず。附句は初念の趣向より、心を落しつけるがよき也。此故に趣向を定る傳受あり。惣じて工夫は平生にある事なり。其坐に望では、只無分別なるべし。定家卿も哥は深く案じて、いらぬものなりと仰しなり。附句、第一調子のものなり。あればとて速く出すべからず、なきとてもひさしく案じ入るべからず。よくもあしくも一坐の程をしりてこそ、はいかいの世情にたよりある修行成(なり)としるべけれ。但し大事の附句は、先云はなして、のちに思ひ返せば心の結れとけて、かく別なり。口傳兵法の事あり

○趣向を定る事

附句は趣向をさだむべし。其趣向といふは、一字二字三字には過べからず、是を執中(しつちう)の法といふなり。物其中を取て前後を見る時は、百千の數有ても前後は近し。人ははじめより案じて、終を尋る故に、其中隔りてかならず暗し口傳源氏物かたりの事

されば表八句の趣向、

はつ櫻　塗笠　暖簾　村雨　鷺　手習子

月　新酒

如ㇾ此趣向を定置て、あるひは作にも、或不作にも、あるひはかたく、あるひは和かに、黑白青黃のすがたは作るに、皆只句作のてづまなり。此法をしらざれば、人のはい諸に驚く事あり。最二字三字の趣向より、變化のすがたも明らかに見ゆる故に、最うちこし(打越)の好惡を速くしる故に、此法をしらざる人は、我句を作りて後に、うちこしもよからず。變化もおもしろからねど、今までの骨折に心残て、其句を崩す事かたし。二字三字の趣向をかゆる事は、會ておしむべき骨折にてもなし。此法は第一に、變化のためなりと心得べし。いにしへの儒書・佛經・源氏・い勢・迚(とて)も、其中より、はじまらずといふ事なし。天

地、皆、人のために生ぜずや。其中は其初なる事をしるべし。口傳天地人の名づけたる事あり

さては二字三字の趣向にも渡らず、五躰・八躰の附かたにもよらず、世にいふ窄捷といへる案じかた有て、其時・其句にあらざれば、文字の道理に書盡しがたし。それは百句にも三所四所はあるべし。しからざれば言語の道理に落て、はいかいに不傳の妙所なし。此執中の二字を指て、我家の祕法といふべし。人よく此法を工夫せば、天下の政明らかに、人間明くれの働をもしるべし。

○戀の句の事

戀の句の事は古式を用ひず。其故は嫁・むすめ抔、野郎・傾城の文字、名目にて戀といはず、只當句の心に戀あらば、文字にかゝはらず戀を附くべし。此故に他門より、戀を一句にて捨るといへるよし。戀は風雅の花實なれば、二句より五句に到るといへ共、先は陰陽の道理を定たるなり。是は我家の發明にして、他門にむかひて穿鑿すべからず。

○切字に口傳の事

切字の事、諸抄にあまたあれ共、いまの世は殊に推量多し。大廻し・玄妙切などいへる切字の事は、我家に曾て詮義なし。古のころのはい書に出たる證句とても、いかなる道理共心得がたし。その内三段切・二字切なども、いまの證句は心得がたきか。

二字切

山さむし心の底や水の月

三字切

子共等よ晝がほ咲ぬ瓜むかん

三段切

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁

あるひは、素堂かま倉の吟に

目に靑葉山時鳥はつ鰹

といふ句は、目耳口と三段をいへり。梅若菜の句は、心の三段をしるべし。されば二字切・三字切は一句の中にやといひて、いかにとうたがひ疑、らむとはねても、三字同

意にて切は一所なり。あるひは

　鷹の目もいまや暮ぬと鳴うづら

といふ句は、との字にて押さへたれば、切字にあらず。此類はあまた有て、諸抄に押字・かゝへ字のせむぎなし。切字百ありても切ぬ事多し。あるひは、

　ゆふがほや秌は色〱の瓢かな

といふ句は、上のゆふがほや秌はと句讀を切て、はの字にてかゝへたれば切字にならず。此類多かるべし。

　猫の戀やむ時閨の朧月

是を中の切といふなり。閨の朧月夜はと、中に心をのこしたる句法なり。うかりける人をはつせの、とよみたる哥の類なり。

　我は家を人に買はせて年忘れ

あいさつ切といふ。一句に自他の差別ある故なり。此二の切は我家の發明にして、他門にむかひて穿鑿すべからず。

○指合之事

俳かいに指合の事は、はなひ草の類にしたがふべし。すこしづゝの新古の事あり。されど一坐の了簡を以て、初心には隨分ゆるすべし。一句の好惡を論じて、指合は後の詮義なるべし。さしあひは變化の道理なりと先、其故をしるべし。變化の不自在なるより、世にあしあひの掟あり。萬物の法式は、此さかひにて知べし。

○から崎の松の句の事

辛崎のまつははなより朧にて　此發句の落着をしれば、發句と第三と平句との差別をしる也。發句は一句の中に、曲節といふ事あり。此句に花は曲にして、松の朧とは節なり。曲節の二ツは、尋常のうたひ・淨瑠璃にもしるべき事也。

　辛崎のまつは春の夜朧にて

是は第三のさまなり。此句平句よりは重き所、まつの朧といふ節なり。

　辛崎のまつを春の夜見渡して

是は只、春の氣色のみにして、曲もなく節もなきものな

り。此發句を世間に、留る留らぬの沙汰あれ共、それは初心の人の論也。あるひは朧かなとあるべきを、朧にてと云ことは、哉にて決定のこと葉なれば、花より松が面白ひと決定するは、片題の褒貶のがれがたし。哥にも嫌ふ事なり。

さゝ波やまのゝ入江にこまとめて
ひらのたかねのはなを見るかな

とよみたる其花より、からさきの松の朧にて、但シ面白からむと、不決定の中の決定なり。あるひは、にて留の事、

三日月は正月ばかりまことにて

此にての心にてしるべし。月は月〱の三日月有共、正月斗は誠三日月にてあらんと、決定の心を殘したるなり。最にて留の事は、哉留の發句の第三に、留の子細ある事をしるべし（口傳其角が雜談集の事あり）

○鳶に鴫の句の事

むかし武の深川にて、鴫に鳶の句附たる事あり。其時もしれる人まれなるが、今更に附合のかく式とも知るべし。

菫の柵に鳶をながめて
鳶の居る花の賤屋とよめりけり

是は前句の云とりを、哥の前書と見たるより、かくはよめり㒵と附たるなり。此類は前句の心を發して、こなたより云なしたる詫物・比興といふものなり。あるひは前句を軍書とも、能狂言のおかしみとも、じやうるりなどの拍子とも、みな〱聞なしたる風情なり。

番匠が椴の小節を絕かねて
片兀山に月を見るかな

是は前句の五文字を、古代の哥のさまと聞なして、月を見るかなと哥によみたるなり。あるひは平句のかな留にかぎらず、此類はみな〱子細ある事なり。模樣をこのみ、奇異を求ては、かならずすましき作意なり。

○宵闇の句の事

有時の歌仙の裏の七句めにて、宵闇の句、出しに三句の中に月を籠たるなり。

宵闇はあらぶる神の宮迁し
　北より萩のかぜ戰たつ
八月は旅おもしろき小幅綿

最、宵闇に月は附がたし。うち越に月は附がたし。うちこしには殊に惡し。十句めは花前にのびて無念なれば、三句の心に月を持せたるが、八月のぐはつの字にて、見渡しの月の字はあしらひたるなり。是を一坐のさばきといふ。宵闇を月とは、おもふまじきなり。三句取合て月の字の働と知るべし。

○名所に雜の句の事

名所の發句は、都て雜の句もしかるべし。名を云、季を云、心いふ時は、句作必穩なるまじ。

　朝よさを誰松嶋ぞ片ごゝろ
　かちならば杖つき坂を落馬かな
　蝸牛角ふり分けよ須磨明石

此中、須磨明石の句は、蠻·觸の兩國をたとへ、其境はいわたるなどゝいへるを葉より、思ひ寄せたれば、かならずしも蝸牛の當季にもかゝはらず。是等を雜躰と云て、名所の句の格式なるべし。口傳無季の格といふとあり

　年〳〵や猿にきせたる猿の面

といふ歲旦の例句あり。

○假名遣ひの事

世に定家卿のかな遣ひといふものあれども、あまりに繁きゆへに、まぎれてしれがたし。むかしはかなづかひの詮義もなけれ共、其後の事なれば大概しりて、埒の明事なり。さればはいかいには、さむふとも、あつふともかくなり。さむう·あつうと書ては、かな書の經文見るやうにてわろし。此類は心得あるべき事なり。

い　イキク　鯛·鯉ノ類

ひ　フヒヘ　葵·雛ノ類

あるひは、ひゐなとも、ひゝなとも、此類はかなの序書といふなり。

を　をんな、山をろし、小桶、菰の字、をに同し。

お　おとこ、おろし、桶

緒を、小を、おの字はあたらず。
大お、尾お、おの字はあたるなり。
を　は同、　上下に用。
わ　上に用、三輪の時は下に用る事也。
ゐ　聲、梢の類、又こすゐ、此時は末の字の心なり。
ゑ　中のゑ、消（きへる／きゆる）杖、机、
此時は枝といふ古實なり。
へ　かへ、かふる、是はハヒヘに通。
榮　はへ、是は古實なり。あへもの、類なり。
緣　えむ、此類なり。衣更の下にフヘノ口傳有。
る　不レ動類なり。盥（タラヰ器ノ時なり／手アライ𪜈）
紅　クレナイ、又ヰ𪜈。
住居、雲のタ、スマヒ、山のタ、スマヒ。
法師（ホフシ／ホウシ）ホウシトハ古實なり。入聲はホフシナリ。
雜（ザウ／ザツ）拾（フ／シウ）此類すべて入聲。
ち　（とちる／とつる）の類、つに通ふはぢの字なり。

右者俳諧之新式有二二十五ケ條一、最我家之眥目也。即於二落柿舍一白書而與二去來一。見レ之識レ之可レ明二自己之俳諧一。右不レ可三傳二寫他人一最道之尊重也。

干時元祿七甲戌六月日　芭蕉菴　桃青 判

享保柔兆執徐春王正月吉

花武錦城東　西邑鯤魚藏

書肆　太田庄右衞門

俳諧十論

始・終

支考述

俳諧十論 附序

東華坊述

あるとし武江の芭蕉庵にて、茶話禪といふ錄をあみて、吾翁の行狀をあらはし、我家の風雅をひろめんと、文は論語の述而にならひ、教は維摩の問疾になぞらへて、此十論を草稿せしに、故翁は例のゆるし給はず。今や世間の俳諧を見るに、春の草木の萠出るがごとき、人のちからをもて苅つくすべからず。我いふ俳諧は夏爐冬扇にたとへて、例のおかしく例のさびしく、桃紅李白の世情にあそびて、人のかずまへざらんにも、道ある物のおこなはれずといふ事なし。我より人をためんとせば、かへりて人にはにくまれなむ。德はつゝむに光あればと、口金の變をおそるゝより、梓行の沙汰には及ざりき。此故に此論をも卿蕣三が評のまゝに、獅子庵の遺稿とはなしける也。されば世の變は三十年にして生住あり、異滅ありとや。此論もしや私なからんには、永く三神の冥慮をかすめず、我門の風雅を世に傳ふべけむ。例に俳諧の虛實ながら、例に文章の過當なる、誠に恐るべく誠に愼るべし。

第一俳諧ノ傳

そも俳諧の傳といふは、もろこしの史記に滑稽の名ありて、齊・楚の比より秦・漢の間までに、七八人の言行をしるし、太史公が天道の贊詞より、或は笑言をもて大道にかなふとも、或は談笑をもて諷諫すとも、滑稽は酒桶の喩なるよし。姚氏は俳諧のごとしといへる、畢竟は虛實の自在より、言語にあそぶのいひならん。しかれば俳諧の道たるや、本より虛實の設ならんには、其道は三皇五帝より禹・湯・文武に傳りて、其名は司馬遷が史記にさだまりぬとしるべし。誠に太極の道をわかちて、儒・佛・老莊の昔より虛は實をもてつくろふべく、實は虛をもてほどくべければ、孔子に莊周ありて仁義をもどき、釋氏に達磨ありて經論をやぶる。いづれか俳諧の機變ならざらん。俳諧はよし儒佛をやはらげて、今は詩哥の媒といふべし。

ちはやぶる我朝には、天の浮橋に此心を傳へて、伊弉諾・伊弉冊の鶺鴒の喩より、天照御神はうけつぎ給ひて、虛實の間に道をひろめんとて、猿田彥は其姿おかしく天ノ鈿女は其情さびし。爰に風雅の俳優を知れとならん。是より八雲のいろ〳〵に、難波津の哥は其實をあらはし、淺香山の詞は其虛をあつかふ。万葉はまして其さまながら誹諧の名は古今集にはじまりて、それより和哥の一躰とはなりぬ。さるを俳諧と誹諧とに音訓の論ありて、八雲御抄にも二名をあげられ、二條・冷泉の哥仙達も、此風躰は分明ならぬよし。まして法式にも新舊の差別口傳あれば、芭蕉家の書法には、人偏の俳諧を用べしと白馬に家訓の一條とはなせり。さて文明の比ならん、山崎の宗鑑法師は其世に俳諧の名あるより、守武・望一もそれを學びて、百韻をつゞり千句をつらぬ。貞德・貞室は宗匠の名ありて、たゞ誹諧の言語をつたへられしが、貞室はやゝ芳野山の花を詠じ、隅田川の鳥に吟じて、其句は和哥の姿情にかなへば、今の風雅の根ざしとやいはむ。其後難波の宗因は武城に檀林の額うちて、誹諧の涅槃は破りたれど、耳に言語のおかしみを得て、眼に姿情のさびしさをしらねば、是も其道に其法なしといはむ。其法なきときは其師なし。其師なからんには、其弟子もあらず。實ぞよ、その比の誹諧といふは、今樣の人の輕口とおぼえて、哥よみ連歌する人も、一座の酒興にいひ捨て、誹諧の口をまねる人あれども、俳諧の心を傳ふる師なし。おろかや、今いふ俳諧は、其道は唐・虞の先にわかれて、其名は齊・楚の後にあらはれ、其風は和漢の一躰となりぬ。況や、其道に其法をさだめて、世情をあつかふ教とならば、滑稽の心は吾翁に傳はりて、菅丞相の梅をさゝげて、佛鑑の禪をつたへ給ひしよりも、法然上人の夢にあひて、善導の法をさづかり給ひしよりも、古池の蛙に自己の眼をひらきて、風雅の正道を見つけたらん。爰を天よりうけつぎて、自悟とも自證ともいふべき也。世にいふ誹諧はいさしらず、俳諧はよく芭蕉庵元祖といふべし。

傳ニ曰、此一段は俳諧の根ざす所にして、儒佛老の三道より千差万別の岐あれども、歸する所は虛實の二なるに、今や俳諧の一道をもて、虛實をあつかふ仲立といへる媒の一字に十論をつくして、世法に時宜の二字ある事を信ずべし。し

がるに俳諧と誹諧の字論は、古今集をも數尾ノ反にて、誹諧とはよむべからず。此類をさして故實の法といへば、やはり歩皆ノ反にて誹諧と訓ずべし。他門に向て論ずべからずとは、白馬の四十二法にあり。それらを爰の口傳とにや。そもく故翁は、伊賀の素生にして、其先は桃地の黨なるよし。壯年に仕官をしりぞき、洛の季吟に俳諧をまなびて、埋木は書本にて朱點を加へたる物二册あり。其傳は寛文の中比ならん。連哥の新式は幽斎より傳へられて、是も頭書に朱點を加ふ。或は百人一首の祕抄あり、或は古今の序傳あり、すべては孔子に七人の師あるがごとき、道として學びずといふ事なく、法として傳へずといふ事なし。かくて天和の初ならん、武江の深川に隱遁して〽古池や蛙飛こむ水の音　といへる幽玄の一句に、自己の眼をひらきて、是より俳諧の一道はひろまりけるとぞ。爰に俳諧の列傳を論ぜば、史記の滑稽より心を傳へて、古今集の名にひろむべきを、今は俳諧と誹諧とに、しおて新舊の名をわかちて、天竺の一道を建立せしは、硯に雲夢の八九をひたし、筆に和漢の一二をあらそひて、道に文章自在の論といふべし。しかるに中古の誹諧師はおほくは、名のみ書捨しにひとり貞室を稱せり。其句は今の世に讃すべし。

是はく　とばかり花のよしの山

いざのぼれば嵯峨の鮎くひに都鳥

誠や、此二句の姿情を得て、今の俳諧の根ざしといへる、爰に風雅の私なからんには、爰に新舊の差別を信ずべし。蓋いはむ、此段の本傳には、別に白馬經の弟子傳を見るべし。

第二俳諧ノ道

そも俳諧の道といふは、第一に虛實の自在より、世間の理屈をよくはなれて、風雅の道理にあそぶをいふ也。誠よ、俳諧の寛活なる、其人にして此道なからんには、狂言・綺語の假事ならんに、虛實の間に心をあそばしむる、言語の設を宗とするべし。本より虛實は、心より出ておこなふ所は言語ならんをや。世にいふ俳諧は莊老の風ありと、さるは黄白をしらぬ人のいひ也。そもく莊老の道たるや、心の天遊を先として、聖人の仁義を後とすれば、世情の理非をおしまげて、虛實のはじめにあそばむとす。しかるに俳諧は理非をあつかひて、今日の世情をなぐさむれば、道を虛實の變化におこなひ、法を世情の和談にさばく。爰を一字錄のおほむねにして、時宜の一法は立たる也。しかれば俳諧の道といふは、儒・佛・老莊の間をつたひて、虛實に中庸の法ありといはむ。本より儒佛の大道は、虛實の先後に家をわけたるを、俳諧はそれが仲人と

しるべし。さて其法に三條あり。世情の人和は、五倫の常法にして、おかしきは俳諧の名としるべく、さびしきは風雅の躰としるべし。人よく此三をしる時は、身に千重の羅綾をかざるとも、薦一枚のさびを忘れず。口に八珍の菓肴をつらぬとも、一瓢の飲のたのしみをかえず。心に世情の變をしりて、笑言に耳をあそばしむる、俳諧自在の人といふべし。しかるに我朝の俳諧は宗鑑をしたひ、守武をまなびて、俳諧の詞はひろまりたれども、俳諧の心を傳へたる人なし。此故に吾翁は、俳諧に古人なしといふ事を、ひそかに門人にさゝやきて、家訓の祕文とはなせり。今はた我朝の滑稽を論ぜば、むかしの誹諧に道をわきまへず、今の俳諧に道を得たりといはむ。爰におもへば、代々の撰集に此風躰の分明ならずとは、俳諧の詞の比興をまなびて、俳諧の心の風雅（口傳）を傳へざる也。いでや、俳諧の詩哥とは、詩に杜陵あり、哥に西行ありて、物の姿情をすぐさまにいひながら、それが雅言と俗語とをしれるは、例に虚實の自在より例のおかしく、例のあはれに、風雅は手爾遠波の事なれば也。その外の詩人・哥人達は風景をかざり、言葉をあやにして哥をつくり、詩をつくれるのみ。いづれも上手の名はあらん、名人の場ははるかに遠からん。しからば名人と上手とのさかひは、上手は十知の才にはたらき、名人は一字の信にあそぶ。信は万物の道理にしたがへば、天地も其詩に變化せられて、雨とそゝぎ風とそよぎ、鬼神も其哥に涙をこぼして、花にたゝずみ月にさまよふ。況や、俳諧の卓犖たる、信なき人の虚誕に落ざらんや。爰に儒佛の內證をさぐれば、名人は其信に道をおこなひ、上手は其才に法をひろむ。是よし、道〳〵の建立にして、師となり弟子となるの冥符ならん。儒家に聖・賢のさかひもあるも、釋門に佛・菩薩のへだてあるも、道に頓漸の法なりとしるべし。そはそれ、古詩といひ古哥といひ、其いふ所はすぐさまなれども、其代は文字もさだまらず、ことの心もわきがたしとや。詩經はひとへに教誡にかたむきて、花をめで鳥をうらやむといへる、逍遙のこゝろはかくれたるを、漢・魏の比より詩文にあそびて、淵明はやゝ風雅の花實をまじへ、万葉は今の口狀にひとしく、あるは艸木の姿を

あらはし、あるは男女の情を演るに、其躰かたつ〳〵にして、言語にあそぶ所すくなきを、人麿はひとり花實に自在なるや。かくのごときは道の元祖とあふぎて、ひろむるは、よし十知の上手にあるべし。此故に吾翁は門下に十哲の名をそなへ、天下に三千の徒あれども、人にむかつて俳諧をとかず。道は其人の信にまかせ、德は我身の功をつゝみて、武江の草庵に在ながら、佛頂和尚の禪室にまじはり、投子一碗の茶に平話をさとりて、俳諧のはこびを口傳しれるより、世間の理屈をよくはなれ、風雅の道理によくあそびて、奥の細道に行脚のわびをつくし、湖南の幻住菴に山居の名をかくして、杜律の五言を枕とし、山家集をたづさえて、貧閑すでに骨にいりぬ。玉帛の禮にも腰をおらず、淡薄やゝ身をわすれつ。衣食の産にも心をくるしめず、遠きは椎葉の糧をつゝみ、近きは杏花の酒をたづさえて、其日の影をおはずといふ事なし。さるは生涯の計にも似て、移文のうき名も立べけれど、例のさびしく、例のおかしく、俳諧は心のあそびなるを尊むべし。そもや、此道の功を論ぜば、儒・佛・老莊の虚實をあつかひ、詩哥・連哥の理をほどきて、國にいさむる臣あれば、家にあらそぶ子あるがごとき、俳諧は天下の一助口傳といふべし。しかれども俳諧の人は、宮所の春の花にたはぶれ、田舍の秋の塵にまじはりて、工家・商店のしわざにうとからず、酒肆・娼房のあそびにくらからず。世界に幾筋の道あれども、向上の一路はあやうき所をつたひて、人を損するも此道ならんか。人を益するも此道ならんか。爰におもへば、吾翁はたま〳〵人を誨るとて、俳諧は老後のたのしみといへる此語は、我家の遺金ならめど、およその人の聞過すべきをや。今はた此意を論ずるに、若き時は友達おほく、よろづにあそびやすからんに、老て世の人にまじはるべきは、たゞ此俳諧のみなれば、是を虚實の媒にして、世情の人和とはいへる也。誠や、此道の嶮岨なるより、若からん人の學ぶべくして、若からん人のおそるべければ、これらの金言を世につたへて、物の始と終とをしらば、中は人間のあそび所にして、はじめて此道の平地なる事をしるべし。

傳ニ曰、今いふ俳諧の一道は、太極の一氣の動そめて、物に

虛實の變あるより、或は神農の姿を寫し、或は黃帝の情を傳へて、其名は史記にさだまりぬ。しかるを中古の誹諧には、いかに其道を踏まがへて、今の俳諧に此道を得たりとはこれらを例の過當ながら、爰を俳諧の頓挫としるべし。此故に白馬の證文をひきて、さばかりの大言をひそかに耳語すとはいへりけり。誠に此段の公論なる、道に三條の法ありて、儒に似て其實を說ざれば、佛に似て其虛をもとめず、まして老莊の理非をまげざらんには、是を中庸の法にして、爰を俳諧の太宗師といふべし。さて此道の文章に、六義の中の名をわかちて、是を口傳といへる事は、風は諷にして其物をよそへ、雅は正にして其詞をやはらぐ。さるは詩經の大むねながら畢竟は虛實の換名なるよし。全文は白馬の貞享式に見るべし。次に投子一椀の茶に、俳諧のはこびを口傳といへる。爰に世情のはこびを評せば、其一は天地の虛におこりて、其二は人間の實にとゞまる。しかれば其三は大事にして、虛實の變を知らぬ人は、或は五倫の實をさめて、恩愛の闇に道を失ひ、或は五倫の虛におちて、慳貪(けんどん)の火に家をほろぼす。畢竟は道理と理屈とのさかひにして、皆たゞ虛實の三句目なるをや。いざや、我家の俳諧とても、例に三句目のくるしければ、言語の理屈をはなれむとて、松風・蘿月の躰をつくりて、それを向上の附合とおぼえしが、今や投子一碗の茶に俳諧は、只平生なると、三十九年の非をしりて、其茶に夢のさめけるとぞ。

稽山章在ニ投子ノ會下ニ爲ル柴頭ト。投子一日與ヘテ茶ヲ乃曰森羅万象摠テ在リ這裡許ニ。柴頭潑ニ却シテ茶ヲ曰森羅万象在ニ什麼ノ處ニ

投子曰可シム惜一椀ノ茶

君見よ、投子の茶を點じて、茶碗の中に世界ありとは、姿おかしく情さびしく、其躰も新しき發句なるに、柴頭はいまだ力味つきず、沒滋味の處に味をとめて、茶を打あけていづこにかあるとは、例に理屈の至極なるを、相手も三句目の理にわたらば、世にいふ理不盡(りふじん)のいさかひにして、果は山法師の抓(ツカミ)合ならん。しかるに投子は平生を失はず、あたら茶一盃捨けるよさは、誠に前句(ぜんく)の道理をもそらさず、例に笑中の刀をふくみて、しかも平話の耳にちかき、誰か此地に俳諧をしりて、明暮の言語にあそぶべきや。君見よ、俳諧ならずとも、かゝる世情のはこびありて、理屈に理屈をかされなば、國をもほろぼし身をも失ひてむ。爰を此道の一大事にして、師資の口傳とはいへる也。そもや、此道の世におこなはれて、虛實の間の糸筋をつたひて、諫臣・爭子の喩によらば、十年の死地に皮肉をさばし、十年の活地に耳目をあそばしめて、致知格物の條目にかなひなば、はじめて天下の一助とはなりなむ。君しるや、此論の決する所は、道に一字の信をなしめして、法に老後のたのしみをいへる。夜日におそれて學ぶべく、明暮になれてたのしむべきは、此俳諧の一道ならん。

第三俳諧ノ德

そも俳諧の德といふは、道理と理屈との二名より、人理

を捨て天理にしたがふをいふ也。さて俳諧の德たるや、文にやはらぎ、武にいさむるは仁勇の二にして、智は其德をあつかふ故に、しかも仁勇の本なるをしるべし。されど其智には二ありて、世智は仁勇を外にかざり、眞智は仁勇を內につゝむ。たとへば張良が女兒の樣(サマ)なるにしるべし。是を我家の白馬經には、俳諧の仁を談笑の諷諫といひ、俳諧の勇を文章の頓挫といふ。智はいざ俳諧の機變に越る物なからん。然るに俳諧の風躰は本より、詩哥・連哥より出て、詩哥・連哥に敵すれば、氷の水よりもすさまじく、紫の朱(アケ)をうばふとす。さはよし家〳〵の意地にして、爰を建立の一門とも我道の風骨ともいへる也。しからば俳諧の一派を立ながら詩哥・連哥のみなかみ(水上)を忘れざらん、それを此德の基(モトイ)としるべし。しかして此德をひろむる物は、道理と理屈とのさかひにして、それをさばくは文章なれば、文章の本は言語にありて、つねに言語の變をしれと也。されば道理と理屈とは、道理は全く善にして、理屈は全く惡なりと思ふべからず。道理には善と惡ありて、理屈はひとへに惡なる物也。まして善惡に善惡の三あらんをや。をのれ十分の道理あれども、君父はあしざまにあらそはれんに、君父にそむかざるも道理なれば、理屈にまくるも道ならん。しかるにをのれが道理をまけず、君をいきどほり父をうらむるは、道理の惡なる物なれば也。爰に道理のせまる時は、たちまち理屈となれるを知らん。差別は水と氷とのごとし。夫を世間の諺にも理の剛するは、信の一倍といへる、すべては言語の虛實としるべし。それらの道理にて人をあざむかず、をのれは幾度も詞をやはらげて、而白ふ人をいざなはむに、はづかしと思ふは人間の靈なり。しかれば道理の天にして、理屈のひとへに人ならんには、此理や世情をやはらげて德の潤色といふべき也。たとへば道理と理屈のさかひは、訴狀は理屈につめられて、奉行頭人も口をつぐみてにくみ、俳諧は道理にいさめられて、大名・公家もおかしとこそおほさめ。さるは言語の憎愛より、道に文章あるのいひ也。そも〳〵滑稽の記する所は、楚の優孟が木樵の哥をつくりし、秦の優旃が城をぬらんといひし、淳于髡は鶴(ツル)をにがしたれど、不信の辨にやはらぎて祿をたまはり、

東方朔は酒をぬすめども、延命の理をつくして首をきられず。其外は張儀・蘇秦がやからも、王家をいさめ敵國をやはらげて、文武ならずといふ者なし。さるは宋玉が文章より、客難・賓戯の俳諧をもちひ、戰國は殊に利害をとけば、周・秦の間はさらにして、晉・宋・齊・梁の中比より、兩唐の御代の盛なる、元明の今にいたるまで、史書に名を殘せし文武の人は、いづれか仁勇の智をかねずして、風雅の佳名を傳ふべきや。曹操は詩にあそびて四百州の敵をなびけ、靈運は文をよくして、十八賢の人ににくまる。しかまた其理の天なると、其理の人なるさかひより、世情に和あり、不和ある事を知るべし。俳諧はよし頓挫の機鋒ありて、武家の餘力には學ぶべき道也。誠に儒佛の万巻も其道の徳をひろめむとて、あるは虚といひ實といひ、あるは詩につくり哥によみて、人の心をいざなへる道に、文章の感仰ならざるや。まして俳諧の門をかまへて、天下の公道たらんには、其人にして其仁なき時は、文章の過當をにくまれて、儒門に三千の徒をなづけかだく、其人にして其勇なき時は、詩哥の風流にかすめられて、佛家に八萬の衆をなびけがたし。其智は其道の鹽梅ながら、俳諧は殊に機變の法なれば、全く此三の德をそなへて、さて今日の文章にあそぶし。さるは世にいふ言語の太皷にして、世事に多能の人に似たれど、我を知る時は其人を敎へ、我を知らざる時は其人とあそぶ。此語は我家の密法にして、詞の皷舞とは此事也。爰に俳諧の行路難あり、分別と無分別とは、上手と名人とのさかひにして、分別は理屈の靜まらざるにおこり、無分別は道理の動ざるにすみやかなり。さるを芭蕉下の學者にも、万法放下の風狂人ありて、たまたま我家の俳諧は、無分別の所にありといへる故翁の一語を聞たがへて、口にまかせて言ちらすに、きのふ誨れば、けふは師にまさり、けふ覺ゆれば、あすは上手となりて、江西・湖南にその洒落をしたへば、ほとんど我門の破滅におよばんとす。尤なるかな、耳學の人は道理と理屈の岐にまよへば、分別と無分別との一歩、千里の大道をしらんや。まさにおそるべきは此一語ならん。そもや道理と理屈とに、善惡の三を立たるは、儒佛兩門の八千卷にも、老莊一家の三万

言にも、いまだ說ざる所なるを、俳諧の世法より聖賢のこゝろを汲て、はじめて我道の公言とぞなせる。是を世法に用れば、人と人との交をやはらげて、日夜にあそべども五倫の道をやぶらず、是を俳諧に用れば、附句と附との死活をしりて、明暮におなじ俳諧なれども、一字一點の手爾波より、變化は日〳〵に新ならん。是たゞ其日の陰晴にしたがひ、其人の喜怒をあつかふ故也。況や、世情の附合に、此理のさかひなからんには、文にも武にも論に及ばず。しからば此理の天にしたがひて、今日の世情にあそぶ人を、有德の師とはいふべきなり。さりや、佛書の應機接物も、老經の和光同塵も、論語にいへる愛衆親仁も、畢竟は世情の人和ながら、其和に溫厲の二をしる事は、いづれも其家の一節にして、爰に一雙の眼力をそなふべし。しかれば其道は德にひろまりて、其德は文をもてかゞやかす。其文にして武なからんや、其武にして文なかんや、文武は天下の治具なれば也。かへす〳〵も我門の學者達は、第一に俳諧の道と德とをあきらめ、第二に俳諧の法と式とをわきまへて、道は莊老に落ざる所をつたひ、德は詩哥に及ばざらん事をはぢて、みづから警めてみづから愼み、我と虛にして我と實ならば、蘭省の花はたはぶれて、迦葉の琴のおかしさも、廬山の雨にもてなされて、淵明が鐘のさびしさも、例に三條の法あらんには、哀樂の間に世法をさばきて、俳諧に誹木諫鼓の用をしるべし。

傳ニ曰、此段は骨節にして、道理と理屈のさかひより、世情の溫和に德をつゝしめる、是を我道の大宗師にして、爰に俳諧の內證を察すべし。誠に四民の家にわかれて、五倫の外の親疎あれば、利欲におぼれ名欲にかゝはりて、公事の理論をこのむ人あらんに、是を敎訴の誡(いましめ)ながら、物に勝負の公案とやいはむ。つら〳〵一篇の親切を思ふに、始は物理の二變より、中には滑稽の人をあげて、道理に虛實の證文となし、終は例の世情ながら、人和に强柔の力をそへて、智仁勇の三を爰に結語せしは、論語の和同禮節にして彼いふ一節ならざらんや。君しるや、此論は白馬の遺訓を說つくして、我を知る時は其人ををしへ、我をしらざる時は其人とあそべる、是を佛經に遊戲自在とも、仙家の詞に地行仙とも、それを禁庭の隱者といへるは、史記に滑稽の隨一とせし東方朔が俳諧の詞にして、爰に俳諧の德といふ事を信ずべし。君見るや、此論は前には詩哥・連哥に敵し、後には詩哥・連哥にはぢて、聲價の二字に虛實をさだめたる、たとへ俳諧の家風より、天下の人の舌頭を坐斷すとも

道に虚實の方便さいひ、誹木諫鼓の用なりとも見て、彼いふ信の一字より、此いふ德の一字にしるべし。小子かつてうけ給りぬ。祖翁ある時に、高家にまれかれ給ひて、其殿のたばこなめさゞれば、祖翁も其日はめさゞるよし。誠に俳諧の洒落より、樹下石上の隱者となりて、富貴の人を諛ふべきや。權威の家におそるべきや。これらは大倉の一粒なれども、これをもてそれをしるべければ、門人こゝに記ざらんや。德はかくれたるにつゝしめさは、ましてさる事の目だつまじきないへる、論語には醯を乞ふ小節をさへ、爰を此論の骨節にして、人よく此門より俳諧に入べし。蓋いふ、迦葉に淵明の一對は、例に錯綜の法ながら、樂天が詩に虚堂の頸をあはせたる、筆に返魂の術ありさいふべし。

第四虚實ノ論

そも俳諧の虚實とは、例に言語の設なるより、道を說時の兩翼にして、それが變化をしるにはしかず。しかれば其虚は實をやはらげ、其實は虚を補ひて、いづれの道にか、かたしくならん。世にいふ、儒書は實學にして、佛經は虚誕なりと。其人は勸懲の先後をわきまへず、言端の虚實に尻をすえて、實はよき物と思ひ、虚はあしき物と思ふ世情の變をしらぬ人のいひ也。さりや、釋尊は馬麥のむくひにくるしみ、孔子は牛刀のたはぶれにあそべる、これらは虚實の證文ならずや。其經は法華を要として、開權顯實としめし給へば、其書は論語を鑑として、母必母固をさとし給ふに、彼方は實をもて方便の門をひらき、此方は虚をもて理屈の關をやぶれり。これ佛儒の公言にして、其書・其經の奥義ならずや。世にいふ連哥は實情にして、俳諧は虚頭なりと。其人も例の變化を知らねば、口にいふ所を習へども、心にあそぶ所を傳へず。たとへば佛家の戸口をちがへて、敎家と禪家との意地のごとき、俳諧は連哥をもどかんとするもの也。しかるを或抄に花實を論ずるとて、和哥は其實を本とすべしとは、自己に花實の先後をわきまへず、世なみにいひをける文章と見るべし。いでそよ、貫之が古今の序にも、男女の中をやはらげ、たけきものゝふをなぐさむるといへるぞや。其實に居て理屈をせむべき、其虚になぐさめて道理になびくならん。そもいへ和歌の鑑ならんとて、古今・万葉の花實をとゝなへたる百人一首の卷頭に、天智の御製も地統の御詠も、

實にかりほの笘(とま)をかぶりて、御衣の袂をぬるし給はんや。實に一夜の夏をむかへて、山に晒(さらし)をほすべきや。詩哥は此虚を本として、六義に虚實の品ある事をしるべし。此故に吾翁は、俳諧といふは別の事なし、上手に迂詐(ウソ)をつく事なりとは、例に俳諧の端的底にして、虚實不自在の人には知すまじき芭蕉門下の一振(フリ)刀なり。さはいへ虚實には聞まがひもあれば、虚實の虚實 口傳 といふ事を俳諧の道の一大事としるべし。一向道しらぬ無風雅の人も虚言をつくり、眞言をかまへて、夜遊の興にはいふなれど、口に出るを虚とおぼえ、心にとむるを實とおもへば、其虚は世にいふ不道化におちて其實は心のほだしとなりなむ。誰かしらん、此論には虚より万物をとゝなへて、實より五倫をそこなはむとは。爰を莊周が喩にも、家といふ物に虚なければ、婦姑のあらそひはやまじといへり。爰に虚實の變を論ぜば、實は好惡の二にかぎりて、虚にはさまざまの變あるべし。たとへば五倫の道をもていはむに、實は忠孝の本に似たれど、その忠言の耳にさかひ、その孝行の心にあはざるを、しゐて其實をおこなふ人は他國にゆきて君の恩にそむき、我家にありて父の名をくだす。世はたゞ其實をよき物とのみおもはめど、金くれるちかひのたがはぬはうれしく、首とる恨のとけざるはくるし。實のよしあしは此二に過ざらん。さて虚といふには虚實ありて、口に興ずるは遊人の放言なり。心にかまゆるは佞人の讒言なり。しかまた文道に六義の名をわかち、武道に三略の法を立たる。いづれも机に目をふたぎて千里の外の工面ながら、文雅には目に見えぬ鬼神をもよろこばせ、武略には猛きものゝふをいからしむ。其虚は喜怒の變ならずや。況や、聖經・賢典におゐて、道に此虚をおこなへば、それを方便説とはいふ也。此故に此論は言語に虚實の自在を得て、利害の變をしれとなり。そもまた虚實の大小を論ぜば、虚はおほいにして實はちいさし。たとへば針のちいさふしてしづみ、船のおほいにしてうかべるがごとし。我あに其針をおそれざらんや。人あに其船をとがむべきや。莊周も例の此船をほめたり。かくいへば、虚實のかたちくならに似たれど、其虚は先にして天地陰陽あり。其實は後にして君臣父子あり。是を大小の論とは

いはず。是を先後の辨とやいはん。世はたゞ其實の行ひやすく、其虛の設がたからんには、爰を虛實の虛實にして、その天堂には遊やすく、かの地獄には入がたしといへり。さはよし其道に先後あり、其物に始終ありて、出る所と入る所とをしれば、其虛の危からんよりは、其實の隱ならんには口傳。此語は我家の讖文にして、爰に新安の朱學士が大學の序を看破せば、爰に儒佛の內證をもしるべし。此故に吾翁は虛に居て實をおこなふべし。實に居て虛にあそぶべからずとは、白馬の法の第一義にして、人のとゞまる所をいへる大學の綱領ならざるや。其書は孔子の遺誡にして、明德の明は虛實をいひ、新民の新は變化をいへる。すべては虛實の二法より變化をしるにはしかざらん。今また虛實の先後を論せば、虛に居る人は是非をとがめず、蚊虻のそしりに耳を遊ばしめ、實に居る人は親疎をわけて、金石のちぎりに命をはたす。彼は仁にして是は義ならめど、仁義に好惡の變あるを知るべし。しかれば虛に居るも實に居るも、例に兩翼の用あれば、虛實の先後する所は、しばらく家〳〵の立派と見て置べし。

さはいへど虛實のさかひは、かへす〴〵も聞まがひあらん。たとへば人ありて居の字をとがめむに、彼もし虛に居らばたちまち實となり、我もし實に居らばたちまち虛とならむ。さるは其實のおこなひやすく、其虛のさばきがたき故なり。これらに自在と不自在とをしるべし。むかし龐居士が遺言にも、願くは世の所有を空して、所無をも實とすべからずといへる、畢竟は虛實の公論にして、虛實の虛實も此事也。人は此語を座右に銘して、起居に其言を工夫すべし。

傳ニ曰、此一論は俳諧にもかぎらず。むかしより筆陣の力をつくして、儒者は佛者にかちたりと思ひ、佛經は儒書にまされりと思へど、今いふ儒法にも虛實あれば佛法にも虛實ありて、あらそふ人は字面を學びて、言語の表裡をしらぬかたに落べし。誠や虛實の設には、迂詐の眞言といふ事あり、眞言の迂詐といふ事ありて、そこを唯佛與佛とかや。明眼の師によらざれば、口傳はなましいにまごふ人もあらん。しかるに其虛の危からんより、其實の隱ならんとは、祖翁の論者を動かして、誠に笑語せし所なれば、かの牛刀の戯とは詞に表裡のたがひありて、例の實地にまごひたる人には爰を讖文の口傳といふべし。君聞や、此論の親切は虛實を再注して居の一字をいへる、たとへ般若の六百卷は智の一字

より說ひろめたらん。これらの叮嚀には過ざるべし。況や、孔夫子の遺書をひき、龐居士が遺言をあはせたる。爰に儒をつくし佛をつくして、虛實は此論を鑑に見るべし。蓋いはむ、此篇は馬麥・牛刀の字對より法華・論語の要文をあはせて、文武に其虛の喜怒をわけたらん、針船の喩はさらにして、蚊虻・金石は意對の妙ならん。まして大學の門題とせし明新の二字に注者をさぢめて、俳諧の家の公案となせる。これらを奪胎換骨の法にして、爰に我門の文章ありといふべし。

第五姿情ノ論

そも俳諧の風姿・風情とは、其躰に古今の差別あれば也。古風は耳に其情を聞て、言語の上の姿をとゝなへず。今様は目に其姿を見て、言語の外の情を含む。しかれば古は情のみにして今は姿の論としるべし。物に情あらば姿なからんや。無情の草木も姿あればと生物しりはあらそはめど、誰か目前の姿をしらざらん。言語の姿の見がたきに、まして其上の風と雅とをしらずば、世にふい木男木女にて、姿情の論には及ばざらん。今いふ風言雅語のふたつは、俳諧躰の一大事なるをや。そも〳〵姿情の先後を論ぜば、人は天地の次に生じたれど、仰ぎて天といひ俯して地といふより、三才の姿はさだまりぬ。天地は人のつけたる名なれば、人を姿のはじめにして、月星をさして天の姿といひ、草木をさして地の姿といへる古文の祕訣も爰ならん。しからば姿は先にして、情は後なりと決すべし。たとへ君臣・父子といへども、情は天地の間にこもりて姿は忠と孝とにあらはる。いざや其情は其姿にしたがひて、あれどもなきがごとくなれば、今は姿の論といふ也。誠よ君父の忠孝も甲冑を帶すれば忠情そなはり、衣食を供すれば孝情あらはる。世に人ありて情は先なりと論ぜば、君父の前に姿をくるしめず、寐て居て忠孝の情をつくすべきや。姿の先なるは論ずるに及ばず。此故に佛の經にも五逆の姿を地獄と名づけて、鐵の門に鑓・薙刀をそなへ、十善の姿を極樂と名づけて、玉の臺に笙・篳篥をかざる。さるを儒佛のあらそひに、苦樂の情はさもあらん、地獄・極樂の姿は迂詐ならんと、迂詐をとらへて迂詐かと疑へる、それを禪語には繫驢橛といへり。本より佛經に方便あれば、儒書にも工面なからんや。爰を文章の

姿とはいふ也。そもや中古の誹諧は、双六な世の歳旦といへば目出たしと詞をむすび、五畿内の雪にはつめた飯とつゞけたる。それさへ情のみにして風なきを、風姿は夢にだも見ざるならん。誠や今の俳諧といふは、古池の蛙に姿を見さだめて、情は全くなきに似たれども、さびしき風情をその中に含める風雅の餘情とは此いひ也。さるは俳諧のみならんや。世〱の詩哥も此姿なるをしらぬは、中古の庵學とやいはむ。爰に連俳の姿を論ぜば、月花をおしむは古今一情にして、詩哥もおなじく連俳もおなじ。姿は詩哥・連俳とわかれて、ちるにつけても千差あり、傾くにつけても万別あり、是をもて是を思へば、連俳はおなじ哥道をゆけども、草履と木履とに姿かはりて、俳言・連語の論には及ざらん。むかしは連哥の情をもて俳諧の姿をいはむとて、俳言といふ事を論ぜしとや。風情はよし古きをたづねて風姿はさらに新しきをしれや。新古は時の附合によりて物の變化にしるべき也。しかれば其情の其姿にしたがひて連歌はしらず、俳諧には姿はありて情なしといはむも、人を誨る端的の處ならん。爰に俳諧の附合を論ぜば、つねに前句の姿を見て前句の情を聞には及ばず。此故に吾翁は耳をもて俳諧を聞べからず、目をもて俳諧を見るべしといへる。耳目は姿情のつかひものにして、彼には明暗のさかひあれば也。されど言語の姿といふは心得ぬ人もあるべけれど、あら寒しといふ時は兩袖をまきて首をちゞめ、あら暑しといふ時は片肌をぬぎて膝をまくる。是を下品の姿と見たるは、あらと置たる助語の變也。しかれば一字一點より附合の姿もかはりゆけば、日夜におなじ俳諧をいふとも、古いといふ事あるべきや。此故に溫故知新の四字より今の俳諧の師たる事をしるべし。史記の評林にもこれらを賛して、或は敏捷の變にして學ぶ者は詞を失はずとも、或は好事の者をして心をあそばしめ、耳をおどろかすとも、すべては言語の形容より文章の虛實をいへるならん。いざや我門の俳諧師は、姿情は新古をわかつため也。新古は言語のつきざる故なりとしりて、其言に儒・佛・神道をあつかひ、其語に詩哥・連哥をさばかば、俳諧は言語の媒とも、新古の鑑ともしるべき也。

傳ニ曰、此篇は全く俳諧の論ながら、天地に三才の先後より君忠父孝の姿をつくり、儒佛に文章の姿をあらそひて、畢竟は連俳の姿情をつくしたる。況や言語の姿より耳目の明暗の差別を立たる。道にあきらかに文にこまやかに、物に叮嚀の信ありて、人を誨て倦ずとはいふべし。されや此段の評すべき所は、温故知新の四字をもて俳諧の家の師の説となせる。聞者はこゝに耳をかたむけ、見者はこゝに眼をさむべし。蓋いはむ、古文の祕訣とは簠簋（ホキ）の詞にや、いまだしらず。結語の儒佛神道をもて詩哥連哥に對したる、神道は詩哥の詞をおこして、是は結前生後の法ながら、四字をもて三様を對したらむ、是をも文章の一格と見るべし。

第六俳諧地

そも俳諧の地といふは、繪の事には素地といひ、染物には下地といひ、まして今様の諷物には地といふ物あり、節といふ物あり、曲は其中の變相ならん。そもそも儒佛の大道も、勸善・懲惡の地形として、仁義禮智に王城の儀式をそなへ、殺盜婬妄に地獄の躰相をつくる。此故に佛の説法も、世界の耳をおどろかせし七寳の華嚴は三七日にして、何の曲もなく節もなき阿含は十二年の骨折なり。これらに擬誘彈陶の四教の次第を感ずべし。さてこそ論語といふ物の諸家の文章にすぐれたるも、人をあつかふ論談のおだやかに、助語に心をふくめたれば、げにも聖人の敎と聞えて、虚實の節といふ物は五七章にも過ざらん。さはいへ節のなからんも、我家の風言（ヨソヘコト）には結構人とあざ名して例の笑ふも俳諧也。節は家々の骨にして一道建立の大事とは知べし。今や詩といひ哥といひ、いづれか其地を飛越えて雲のあなたに道あらん。ましてや、俳諧の地といふは本より俗談平話にて、それに雅俗のさかひをしるは、例に虚實のあつかひより、例に風雅のさびしみなるを、いかに今の世の媚に媚をかさねて、たとへ俳諧の席ならずとも、さる友達のまじらひはよき人ならんや、あしき人ならんや。世には糸竹の諷物さへ骨おる所は其地にして、祕する所は其節ならめど、さらば其節の面白きとて始より終まで聲にかたむき、色をふくまむや。さまで數ならぬ小哥・說經だに自然と其理にかなへるを、いかに俳諧の無下なるや。哥人・連哥の家をならべて耻べきはたゞ此事也。今はた遠國の俳諧をきけば、さま

〳〵の集を買ひあつめて、夫が中の節を學びて地といふ物を師にならはねば、をのれはあがる〳〵と思へど、俳諧は日夜に行過て、そは史記にいふ和說にはあらで、馬に心經の喩なるべし。すべて六藝の節あらんもそれを癖とはいふべきに、人の學ぶも其癖也。爰に人間の地を論ぜば、明暮に飯くひ茶をのみて、君父の前の禮をわすれず、男女の中の交をたがへず、まして月雪花ほとゝぎすの風雅の情をうつすにも、をのれとこはすには及ざらん。されど四時の佳節ありて、節供・正月は詞をあらため、聟入・嫁取の晴がましきに、染物の模様もつねよりははなやかに、人に對する詞づかひのすこし媚たるも心にくからん。しかれば俳諧も世情をはなれず。物の節〳〵は儀式だちて節供・正月の三物なゞど、まして撰集は晴がましく天下の人に對すれば、をのがさま〳〵に曲節をつくす。本より俳諧の地はしりぬ。其地の高低に自在なれば、一字一言に金玉の聲ありて、好事の者の耳目をおどろかさざらむや。さはれ其節は一夜にも學ぶべく、其地は十年の紛骨ならんに、彼いふ人〳〵の俳諧を論ぜば、一尺の絹をもとゝなへず、天下の紺屋に難をつけて、雛形をさがしありくに似たらん。此地を佛家には平生心といひ、儒門には恒心といへる、いづれも道の心にして、心にふたつはなき物也。かならずよ、我門の俳諧師は俳諧は何の爲なるや。君は臣をなづけ、父は子になぐさみ、夫は妻にむかひ、兄は弟をめして、かゝるゑせ言のみいひたらん。俳諧はさる事にて、今日の用の放埒ならんをと神にもちかひ、人にもはぢて、つねに人間の地といふ事をしるべし。

傳曰、此一篇は人間の常にして、いづれの道か此地をふまざらん。此故に哥人、連哥に對して自門の放埒をなげきたる、俳諧に一箇の殊勝地ある事を信ずべし。誠に花嚴・阿含の二教に其地と其節とをあらはして、四字に藏經の次第をいひながら、論語はひとへに助辭をほめて、いづれも道の虚實にはかゝはらざる、例の儒佛にあきらかに、例の文章にこまやかならずや。然るを論語の隱便なるより其地に一節のちからを添たる誠は我門の一脉にして、爰を容易に看過す人は、闇に黒豆をかぞふる類ならむ。汝達こゝに其一節をしらば、驪龍頷下のひかりをつゝみて、つれは人間の地に偃臥べきをや。蓋いふ、君父と男女との一對は、禮交の二字をもて兄弟・朋友の五倫を含たる、是を雙關の文法といふ也。

第七修行地

そも俳諧の修行とは其道をあとへ戻る事也。むかしより儒佛の學者も修行は先へ行事かと覺えて、爰をさがしかしこを尋れど、くらがり峠を越えかねて、あるは虚勞の現人となり、あるはなまさとりの媚人となる。まして俳諧の虚闊なる、曠野に駒を取はなして、こなきさいたづまの名をだに知らず。芝生のがくれの花はいざ、心の手綱のかへすかたなからん。誠や漢の人情にて伊呂波をならひ、丘乙己をおぼえぬれば、庭訓はよし三月ぎりにて、先とて文選の坂にかゝれば、古文眞寶は礒の波の沖に鷗のうかれ心より、三線もひきたし茶の湯もおぼえたし、さて〳〵いそがしき心の猿の其手もつたなく、人をたのみて藝もしかと覺えず。況や俳諧は我身がちに、和哥所の式もさだまらず。里村家の掟もまたざれば、諸國にをのが道をつくりて、哥にもゆき詩にもゆき、書籍目錄を枕とし、寐るにも起るにも行過て、廿年工夫の俳諧をきけば、史記の俳諧といふ物にはあらで、世にいふ唐人の寐言なるべし。そもいへ儒佛の證文にも、回は愚なるがごとしとも、悟了同未悟とも聞えたるは、學で先へゆけとにはあらず。其道をあとへ戻れとのいひ也。あなかしこ、若き人〳〵は始に五七の字數をならひて、發句の切字も附合の八躰も、さし合はかくのごとく、去きらひはかくのごとくと、例の師をえらびて其故を學べし。さて俳諧の世法なるをしれば、俳諧はつねの夜咄を、五七五七〳〵の句につくりて我もいふなれば人もいひ、きのふもすなり、あすもすなれば、百日の功をへざれども、廿年工夫の俳諧よりも今樣の變化ははなやかならん。爰に老俳の若俳をねためども、例に修行のふみたがひより、親仁はこびたる下手にして、息子はあどなき下手といはむ。纔に世法の憎愛はありながら、いづれも俳諧の虚實をしらねば、例の道理と理屈とにまどひて、どちらも下手は下手なりと思ふべし。いざとよ、我門の俳諧師は學びて十年の功をつみなば、其場に俳諧の眼をひらきて、媚るは人情の病なりとや。俳諧は平生の詞にありて、外には五倫の人をなぐさめ、内には七情の我をやはらげて、誠に今日の世法なりし

をと、峠の松の風にも涼しく、十年の道をあとへ戻れば、前に背おりて見置たるをのが故里の道筋なれば、野山の風姿も花鳥の風情も、麥蒔・田植のしわざまで、春は夜雨の晴わたりて橋の出買のおかしさも、秋は夕日のさし入て店の煮買のさびしさも、宮古の遊女は緞子にほこりて、痞(ツカヘ)おさするも心にくげに、田舍の冶郎は蓬生にしのびて瘧ふるふも物あはれなる。武士の朝起も大工の宵寐も、世界にありとある事は、皆〳〵をのがしりたる事にて、何かは俳諧のむづかしかるべき。爰を游心和說とも詼諧弄嘯ともほめ置しもろこし人の滑稽を、我家の俳諧に傳へたり。しかるに其道をあとへは戻らずして、尙も行さきをまよひありけば、山のあなたに宗匠の追剝ありて、發句には切字の子細をほのめかし、第三には韵字の祕傳をかまへ、古今の三鳥の傳授とやらん、戸をさしこめてさゝやきまはれば、おろかなる人は信心をおこして、果は金銀をも剝とられなむ。言語道斷なげかしき沙汰也。されば修行地の次第といふは、十年往く時は其事を見つくし、十年還る時は其理を知つくす。理と事とは道の馬車にして、此ふたつを得たる時に、廿年の功をつみたる俳諧の上手とはいふべき也。爰に俳諧の知と不知とを論ぜば、廿年の下手は論にも及ばず、廿年の上手と百日の下手と其場はおなじ麓にあそびて、馬といへば大名とおもひ、車といへば公家とおもへども、俳諧は其日の模樣によりて、或は打越のはこびにかはり、或は四折の附所にちがひて、種〳〵と附合の變化あらんに、上手はしづまりて其理をさばき、下手はあはてゝ其事にまどふ。彼は十年の始に居て、其道の物理にあきらかならぬと、是は十年の始にかへりて、其道の物理にくらからぬと、明暗のさかひは遙にちがへども、口にいふ所はあひちかし。爰に上手の下手に似て、下手の上手に似ざる事をしるべし。これらは我家の訓言にして、唐には手短に不肖といへり。かくは俳諧の俗談平話にて、往くも還るもおなじ道規(ミチノリ)なるに、戻りて故里の俳諧にあそばざるや。一字も媚たる人の來らんには、鰯の頭に柊木をさして、堅く我門には入べからず。

傳曰、此一段は前の拍子にかはりて、例に俳諧の筆格より

硯の海の得手に帆をあげ、筆の林の言葉に花をさかす。さるは今様の艸紙にも似たれど、爰に雅俗の大事ありて十段の中の變化を見るべし。全篇は世間おしなべて眼前の俳諧を見すごして、七尋八寛のさまをいましめたる、古人も爰を歸去來とも歸家隱坐ともいへりけり。今の論者の一字銕には、さら〳〵我家の俳諧は學力にもよらず、辨口にもよらず、全く俗語平話の中より詩哥の風流を人にしらしめ、世法の一道を世に殘して阿翁と三會の曉をちぎり、時宜の一灯をかゝげむといへる。それらに此論の親切を記さゞらんや。蓋おもふ、此一篇は十論の中の双出にして、文章の花實をまじへたる中にも、あら野の駒の形容より芝生がくれの古哥をひきて、心の一字にいひよせたる。これらを鎖詞の文格にして、それより故里の道筋には夏冬をかくし春秋をあらはし、朙仄(ホノ)夕暮を照しめあひ、哥舞のあそびに哀樂を忘れざる。すべては士農工商をあげて爰に隱見の文法をつくし、爰に互照の文格をつくし、況や字門の對類をつくせる、是を俳諧の文鑑といはざらんや。しかまた廿年の上手と下手とに百日の器用者を形容して、古雅に若雅をれたまぜたる、まして上手の下手に似て下手の上手に似ざるとは、白馬に一條の訓言なるをや。〽そも〳〵俳諧の文章といふは、目に莊周が文法をまなびて、たとへば解牛の姿を寫し、口に韓愈が理論をこのめば、おほくは獲麟の情をつくして、意は儒佛の中庸にあそばんとす。此故に俳諧は例のおかしく、例のさびしく、例に世情の一節をしれとこそ。しかれば文章のよる所、句として長短に叶へざらんや、字として鳶鵜を對せざらんや。さるは假名をもて眞名となさむに、一字のたがひもなからんがため也。およそは四六の文法なるより哥人・連哥師の文章にはまさざれず。されど俳諧の諷詞には、額(ヒタイ)に木履のしるしあらへども、栗穂で顔を撫ばやとも、それらを不根の林論と注して、つねに言語の姿をつくれば、聞人の感涙もいたづらにさめて、儒佛の訶呵には似ざれども、そこを不虛とも不實ともいへば、こゝを談笑の諷諫にして、過當は例の虛實に聞すつべし。誠よ此篇の文章を評せば、天下の俳諧師を掌にならべて、姆子(ホフコ)を見るよりも尙あきらかに、現人といひ、媚人といひ、上手と下手とに三の品をわけて、四民の姿情をつくしたらん、世に俳諧の文章をまなびば、たゞ此一篇に透得すべし。

俳諧十論（終）

第八言行論

そも俳諧の言行とは口にいふ所を身におこなふ。さるは儒佛の大道より老莊楊墨の道とても、いづれか言行のふたつをはなれむ。それが中にも、風雅の道には詩哥・連俳の品ありて、當時に哥よみ連哥する人の雲のうへ人はいさしらず、中品以上の人とても口に月雪の銹をいへども、身は花鳥の色にまどふ。まして町人・百姓の質置の箪をとめて兼題の哥をつくり、麥刈の男を呼あげて連哥の一順をまはす。よしや鷹槌の哥よみてをのれが身にもおこなふべけれど、薪に花の口質は遁れまじ。しかるに俳諧といふ物は、中品以下口傳に風雅をひろめむと、中品以下の言行をもて中品以下の人をみちびかむに、何かは學びがたからむ。その身そのまゝの俳諧は置て、及ばぬそらの月を望て猿にゑぼしの喩ともなれる。なべておろかなる世情のならはせぞや。世には俳諧〳〵といへれど、洛陽は風土のつやをかざり、武城は風俗のかさをとれば、世にしらぬ書物の媚をあつめて、作意に作意をかさねぬれば、行衛もしら雲の塔にのぼりて、九重の階子をはづしたらんやうに、いかなる博知博覽の人も其句の埒を聞人なし。聞人なきは俳諧にあらず。されよ史記にも俳諧を注して、樽の飲口にたとへたるは、物の先後をよくさばきて、詞の次第のみだれざるをいへり。しかれば俳諧は平話にして、尼も入道もしれる事を、纔に雅俗のさかひよりかくは風雅の一道となせり。変をたとへば、都の賣物に氷蒟蒻や、さねかづらとは聞なれぬ耳には附かぬ句なれども、丹波の人はさこそ思ふらめ。今は國〳〵里〳〵に宗匠門下の黨をむすびて、人の得しらぬを手柄と思へばおなじ穴に怪力亂神をかたりて、其黨の人はさこそ思ふらめ。聞えぬ事の面白くば、四方しら壁の謎をも作れよかし。去ながら我身の白状には、世に俳諧の晴がましく一座の人に顔をまぶられて、今さらあさはかに思はれむはと人の耳遠き詞をたくむも、世にある人情のけはひな

れば、人をひとへににくむべきにはあらねど、さるは俳諧の明と不明より若き人〳〵はさもあるべし。たとへ俳諧は口にいはずとも、俳諧はたゞかくのごとくとしらば、何の詞か古からん、何の心か新からん。淳（スナホ）なる時はすなほにして、媚てよき時はこびもすらむ。爰に言行のちがひを論ぜば、すべて町人も百姓も桑門の僧も武家の侍も、をのが利用には聞えたる理屈をいひ、風雅の席には聞えざる俳諧をいへる、全く表裡の人といふべし。誠に俳諧は有がたき物なり。公儀に對してあれらの不埒を申さば、そこに狂氣の手錠をさゝれむとは、當時に或人の名言とて談笑の家の誠となしぬ。かへす〳〵も我門の學者達は、門前の姥にも問合せて合點をせぬは俳諧にあらずと、をのが心の行過を耻べし。儒にも其言をはぢて其行をすごすといへるは、東隣の老丘の詞とや。俳諧はまして目前にありて、口にもいふべく身にもおこなふべし。

傳曰、此段もおなじく修行地ながら、爰に中品以下の四字より哥人・連哥の行儀にはぢて、言行のたがひをいさめたるは、諺にいふ裸談義にして、人ををしふるの親切ならん。

誠よ俳諧の一道は、虚實の間に一節をかまへて、儒佛さ衢をあらそへば、遠くは莊老の虚を補ひ、近くは詩哥の實をほごく。しかるに下品の言行をもて下品の風雅をみちびかむさは、貴をもて人にくだるを樂しむさいへる、儒家に聖人の實語ならずや。しからば此四字の不可思議なる、我門の口傳は爰にさゞまりぬべし。爰を法然も親鸞にさゝやきて、愚禿の一門はかまへさせ給ふ。さるは儒佛をさしはさみて信心不二の大乘法なるに、このゝちの僧達は愚禿の心得たがひもやあらん。いざや芭蕉下の門人達も此段の口傳を聞過して、虚實の虚實さいふ事を知らずば、かならず言行のたがひもやあらん。我よく爰を評すべく人よく爰を信ずべし。君聞や、例の筆力にまかせて天下の宗匠を踏破せしも、白狀の二字に我身をかへり見て、若き人〳〵は詞を和らげたる。是を虚實の文鑑に見ならひて、明さ不明さの三字をもて、言中の響に人をはぢしめたる、爰を俳諧の一節さ知べし。況や樂天が門前の詞より論語の言行をいひながら、東家の丘に起結を合せたる、耻の一字は例の親切にして、誠は俳諧の論語ならざらんや。されど俳諧は巽與の言（コト）にして、口によろこむで身におこなはざらんは、我家の夫子も手をつかれて如何〳〵さもする道なからん。

第九變化ノ論

そも俳諧の變化とは、世法に今日の心得にして萬物の不

定をさばくため也。大いなる時は天地の變にして、雨によろこび風にいかり、春は花とさき秋は菓とちる。小きなる時は人間の變にして、君をおかして臣をあがまへ、父にそむきて子にしたがひ、きのふは南殿の花に遊び、けふは北邙の露にかなしむ。變化は天地のつねなるを、おどろくは人のしらねば也。爰に俳諧の變化を論ぜば、おほいなる物は古今の變にして、すこしきなる物は一卷の變也。さればむかしの俳諧は始中終の三をもて鼎のごとく尻をすえたれば、例の俗にして雅ならず。今の俳諧は始終の二ロ口をもて中に風雅の情を殘せり。さて一卷の變といふは全く附合の法にして、百韻すべて百色なるをいへり。されど附合の法といふは、皆〳〵附るといふ事にはあらず。親しく附たるも變なれば、疎くて附ざるも變にして、全く附るといふ物は、一見わたしに二句か三句ならんには、およそ廿句には及ざらん。これらは芭蕉家に祕藏の事也。そも〳〵我家に三法の附方あり。第一を有心附といふ。和哥の有心にして無心には對せず。細に前句の姿情を見つくして、一字一言に心を賦る故也。其次を會釋といひ、其次を遁句といふ。一卷はすべて此三に變化すべし。されば俳諧の案方といふは、いづれの附句にむかふ時も、先とて我句を案ずべからず。始に三句の打越を見さだめ、其次に四五句のはこびをかむがへ、其次に目立たるさし合を見あはせて、そのゝち我句の趣向を案ずべし。初念のあやまりはひき返しがたし。爰に一念の先後を論ぜば、たとへば色欲に身をほろぼし、博奕に家を失ふ人も、面白き方を先に思ふ故也。今宵しばられて橋にひかれ、今宵うちまけて薦をかぶらばと、くやしき方を先に思はゞ、たとへ一夜はあやまつとも、一たびは夢のさめざらんや。これらに俳諧の世法なるをしるべし。しかるに世間の俳諧師は、前念後念はさて置て、打越のはこびさへかへり見ず、何がな珍しき作あらばと、前句の尾ひれに取つきて、をのが一分の趣向はなし。それを前句の噂とも前句の斷とも難ずる也。此故に吾翁は趣向をさだむる法を立て、廿五箇の一條とはなせり。さて一分の趣向とは、前句の作者は其心ならねど、其句の言便に心を賦りて我句をそこへ附ぬれば、哀樂の姿も襃貶の

情も二句の間に見ゆるをいふ也。そこを俳諧之連哥と題して、上にあまるを下にゆつろえ、下にたらぬを上におぎなふ。いづれの和哥か上下をわけて、一句の作意をほめたるや。今は前句の噂をいひて、一句の作をほむる世となれば、その事は纔に變ずれども、其心はおなじはこびにて、さるは附合の法にも及ず、爰に一分の趣向といひ前句の噂といふをしるべし。誠に附るといふ時は、おほくは人倫のさまにして、士農工商のまち〳〵に貧福の情あり、老若の姿あり。貴賤の品は其人にしたがひて、衣裳の模様も、身帶の格構も前句の言外を見つくし聞つくして、聊もをのが按排をつけず。それ〳〵の道理をさばきたらん、そこに其人を見るやうにして、一字の手爾波をも殘ざる、それを今いふ有心附としるべし。さりとて百韵は百句ながら、一字一涙の脾胃を揉べからず。俳諧は本より心のあそびにして、まして離附の道理あるをや。さるを浮世のよい事づくしに、腰の萬貫の銀をまとひて、鶴に乘て楊州にあそばんといへる、それらの程をしらざらんには、さて會釋といひ遁句といへる、會釋は打越のむづかしき時に、其人の衣類か喰物か、そこらの道具表色・にて程よふそこを除く事也。さるは世間の諺に、牢人あしらひといふ事もむづかしき時の機變也。およそ百韵は六七十句も此會釋にて過る物なれば、其中の模様はさま〳〵に變じて、世法の時宜も此間に修すべし。本より會釋といふ所にて、どちらへも變化の自由なれば、是を俳諧の地と名つけて、一卷の變化は此會釋によるべし。遁句は同躰別名にして、風雨・寒暖のたぐひより時分・時節のあしらひをいへば、遁句は輕く會釋は重し。爰に別名の故をしるべし。しかるに第一の有心附は、其日・其場の模様によつて、或は寒いに物着るとも、或はひだるいに物喰ふとも、親疎は附所の變にしたがへば、道理と理屈も其道おなじく、よいとわるいも其場ひとしく、物の至極は危きにありて、名人と初心との位地なるより、上手はおそれて附ぬ時もおほし。かへす〳〵もおそるべきは有心附のまぎれにして、此附方には先手・後手の論あり。本より俳諧の案方も碁・將棊の工夫にかはる事なし。たとへば前句の模様にて〽大名なれど碁はお下手也　とあらん

に、相手は商ッ人と趣向をさだめて〽損した門に畏ると句をつくれば、商人は先手にして、畏るは後手なり。誠にお下手の風情をうしなはず、おそれ入たる風姿をも見るべし。しかるに世間の附方は先手に畏る者を案じて、もしや、句づくりに商人とも思ひよらめど、明眼の師は先後の理屈をしりて、それは前句の噂也と難ず。おなじ口よりおなじ事をいへども、先後に上手と下手ありて、爰に俳諧の明暗をおそるべし。其餘はむかひ附といひ、前句の情を起すといひ、拍子附は語路の勢にして、宗因の風に今の姿をとゝなへ、色立は氣色の取合せにして、頼政の紅葉に白河の類也。さて向附といふ事は有心附の中の別名としるべし。例の打越に人ありて、人倫のさまはやかましけれども、或はあしらひ、或はにげて、おなじ模樣の面白からねば、其時に自他の差別を見て向附の法を用ゆべし。前句は例の大名に〽薄着數奇なり、なッとあらんに、山寺の〽老僧を趣向にさだめて〽麦飯を句に作るべし。世間は爰に酒か吸物か、時の結構を案ずる故に、例の噂とも斷とも難ず。これらに麦飯の附合をば、或は俳諧のこなしともいへり。しかればよのつねの附方は、此方(コナタ)より彼方(アナタ)へ附るを、是は老僧をもて大名にむかへば、此名を向附とはいふ也。されど商ッ人も老僧もおなじ大名の相手ながら、前のは大名を動さず、お下手の詞に下品の相手をこしらへ、畏るの詞に前句をつなぎて、彼いふ有心の働を見るべし。後のは其人の風俗につけて、いくらも附やうのあるべきに、打越のさまのむづかしければこそ、その大名を動かして薄着を鷹野のもどりと見たる、物なき所に物をもてむかへば、此いふ向附の働を見るべし。前句を動すと動さぬは大むねこれらの用なれど、附方は毫末の差別にして、爰に俳諧の明と不明とを信ずべし。さて前句より情を起すといふは、連座の人の變化を思はず、縮めば五句も三句もちゞまりて、人のさまのみやかましく、伸れば三句も五句ものびて、そこら風景がちならんに、たとへば〽村雨の日影　といへるに〽田中の松のあつちこち、と附たらん。爰にて前句の情を動かして〽我は狐に化されたやら　と附たる、これらは前のあつちこちといへる詞のあやを聞とがめて、無理に此情を拵

へたれば、此名を起情とはいへる也。しかれば向附は縮む時の用にして、起情は伸る時の用と知べし。むかしは貞享式をさぐりて響といひ走といひ馨といへる三名あり。中比は東華式に八躰の附合あり。今は十論に四名を出して、附合の名は十五なれども、附方はたゞ三法にして、七名も八躰も三法の中の細注としるべし。況や百韵の百變ならんには、附合も其日・其時によるべし。さはされ連歌も俳諧も佳名は發句に傳ふべけれど、發句は太極の一氣にして、虚よりおこりて實にとゞまれば、本より道理もなく理屈もなく、まして法もなく式もなし。畢竟は信の一字より其場は名人と初心とにありて、上手の手づまは論ずるに及ばず。そも〳〵俳諧の工夫といふは、我宿にありて枕をかたむけ、其事ならぬ遊山・翫水に、人と〳〵の物いふにも虚實のさかひを心に忘れず、我身の道理には他人の理屈をためし、他人の道理には我身の理屈をはぢて、論語に門人をさとし給ふがごとく、是をもて四民の情をやはらげ、是をもて五倫の法をさばき、第一に草木鳥獸の名を知らば、風姿はいかむ風情はいかむと、平生の心に忘れざらん。それを俳諧修行の人といふべし。さて其席にのぞむ時は、衣食に一日の機嫌をとゝなへて身は泰山の雲おさまり、心は流水の風しづかに附合の三法をかむがるにも及ばず。五躰・十躰の細注にもかゝはらず、例に無分別の所より初念の趣向にたゞよふべからず。好きは其日の仕合にして、悪きは其時の不運ならん。是を虚實の虚實といひて、十論の究竟は爰の變化なり。されども一座の調子あれば、彀(ヤゴロ)をはやくはなつべからず。たとへば兵法を學ぶ人の右轉左旋は平生の稽古にして、敵と敵とのさしむかふ時は氷の刄(ヤイバ)をぬきはなして、眞中(マツカウ)ふたつに切割(キリワル)にはしかず。爰に此變をしらぬ人は、終に文武の妙所にいたらず。十論はかへりて脚手まとひとならん。かへす〳〵も我門の學者達は道理の理屈のは世法の附合にして、虚實の變化のは世情の心得なれば、俳諧は心の行所にあそびて、其時の變におどろかざれと也。

傳曰、此段は殊に惣論にして、人天の變化に哀樂を忘れざる、本より儒佛の說ながら、爰には世法の機嫌をしるべし。しかるに俳諧に古今をわかちて百韻の變化の分明なる、三法四名の委細なる、たとへ佛の經文に一念の變化を說つく

して、九十刹那に分たんよりも一念の先後に惡をこらしたる、爰に文章の公道を稱し、爰に俳諧の世法を信ぜざらんや。まさにしろべし、俳諧は附といふ事の專要なれば、第一には有心附といひて、第二・第三をば其次にといへる、さるは三郎歸一の道理にして、これらは文章の論にもあらず、例の俳諧に明なりといはん。さて俳諧の古今を論じて三昇の喩は明なれども、始終の二は不會底の人もあらん。爰に古今の證文を評せば、

（始）五畿内に　（中）降しら雪や　（終）つめた飯

（始）古池や　（終）蛙飛こむ水の音

されば此類は數多ながら、昔の俳諧の其三をつくせる。此外に人の聞べき情なし。姿はましていづこの雪をか詠めん。今の俳諧の其一を殘して、中にさびしき情をふくめる、それを詩哥の餘情とも、文章の優美ともいへるならし。今や其二と其三とを評せば、儒佛は其三を說つくして律義になしふるを教誡といひ、詩歌は其中の一を殘して幽玄にあそぶを風雅といふ。君聞や風雅と教誡の論は張子厚が書室ノ銘において、砭愚と訂頑の質なるを難じ、東西の二名の文なるをも難ず。さるは參ヶ乎といひ、祟伯ヶ子といへる、其外はすべて風雅の文にはあらず。あの名は勸學文ともいひ、座右ノ銘ともいふべきやと、白馬の文章訓に此論あり。爰には人のまどふべき所あれば、始終の二を師資の口傳とはいへり。さて附合の四名の中に拍子と色立の證文を評せば、

追手三千土用八專

宇治勢田の炙箸（ヤイト）をぞ引たりける

此句は檀林の名にひゞきて、例に言語の拍子ながら、評せば、橋のおもかげより今の俳諧の姿にも似たれば、これらに聊の差別をしるべし。拍子は殊に其姿を忘るべからず。

都にはまだ青葉にて見しかども

紅葉ちりしくしら河の關

此歌は賴政の物數奇にて、全く能因の歌をとりながら、彼は陸奥に万里の情を詠じ、是は白河に三色の姿をかざる。本より遠近の用不用ありて、姿情のさかひの各別なるに、今も等類の沙汰ありとやらん、其世に判者は知給ふにこそ。すべて故事をとり古語をとる事は、本據なくても聞ゆるをよしとす。今世の連哥俳諧にはその故事をしらず、其古哥をしらねば、何やら聞えぬ事多し。それらは同意とも等類ともいはんと、白馬の類說に此哥の論あり。しかればこれらの風景を俳諧には色の取合せといひて、一句の中の一躰となせり。蓋おもふ、四名の文法は始に起情と向附をいひ捨て、中には拍子と色立と兩句の對を書ならべ、終に前の二名を細注せし。是は隔句の錯綜ながら、双關の法も倒裝の格も句讀の長短も、語路の斷續もすべて此間に知べき也。蓋おもふ、此段の不可思議は、第一の發句には鹽梅をつけず、上手の手づまは論に及ばずとや。爰に俳諧の虛實をさぐり、爰に十論の信僞をためさゞらんや。況や論語の詩經をひきて、四民と五倫の二句をもて興觀群怨の四意をつくしたらん。さるは白馬の文章訓に、怨の一字より邇遠の二字を讀して、畢竟は鳥獸艸木の用ならんといへる、爰に第一の詞

をもて蟋蟀の法も是がためにして、評者の口訣は爰にとゞまりぬべし。誠に此の段の畢竟は千變万化も期すべきにあらず。大事は有心附の名にありて、道理にしたがへば花鳥も新しく、理屈におつれば父母も古からん。新古は今日の變化にして作者の働によるべき也。そもいへ俳諧の公案を兵家の刀法にたとへたる、此外に鬼谷が一卷を傳ふるとも、我家の手段は覺束なき所あらむ。爰に氷刄の一句をもて此十論を看破せば、道理と理屈とは世情の和をあつかひ、虛實の二論は人事の變をさばきて、俳諧はたゞ其日の遊なればと、涅槃の一字不說よりも、理屈はすべて賊後の弓なるべし

第十法式ノ論

そも俳諧の法式は連哥の家に見ならひて、手爾遠波のさし合も、艸木鳥獸の去きらひも、一座一句の物は二句とさだめ、七句なる物は五句となし、五句なる物は三句となし、三句の式は二句より一句にはぶけり。本より聖典の掟にも道はおごそかならん事をおもひ、法はやすからん事を思ふと也。さて一卷は哥仙のつがひより五十韵といひ、百韵といふ、一部の式は百韵にしるべき也。そも〳〵俳諧の法式は貞德の御傘より埋木に斧をいれ、嘘艸に穗を拾ひて、其事は今も覺えたる者おほけれど、其理は古も明なる人まれ也。理事は万法の翼ならむをや。いでや發句の切字より脇の韵字も、第三の手爾波も、哉(カナ)と束との和訓はいかむ、櫻と花との意趣はいかむ、指合は何の故なるや、去嫌は何の故なるや、四花八月は誰かしらざらん。我は明暮にすなれども俳諧は何の爲なるぞと、法式の名字はさし置て、其故といふ事をたづねば、其爲といふは言下にしるべし。其いふ論語に夫(カノ)詩のをしへも君父の道はさらにして、獸木の名をしれといへる多識の二字の聞とがめて、詞の先後をかむがへば、今いふ故と爲とはしりなん。遠くは儒佛の學問にも、近くは詩哥の藝古にも、博く學びて其事はしれども其理はいかにと心をかへさねば、耳から耳に聞つたへ、口より口にいへるのみ、心にもちゆる人はまれ也。況や俳諧は平話にて、我事を我といひながら、何の故とも何の爲とも我をしる者は一人もなし。學者はすべて此費を出ざらん。たとへ千式・万法も文字に書たる書物あらば、一夜か二夜には覺えもすらん。道に法式の故をしらさねば、其人は

例の輕口にうかれて哥人連哥の家になぶられ、傾城・猿樂の媒となりて、俳諧はいさせぬかたやまさらむ。此故に貞享式には宗匠の法と判者の法とを新式の二條にわかちて、執筆の法を一條となし、亭主の法あり、連衆の法あり、五條は例の心得としるべし。〽さて宗匠の心得といふは、第一に其座の人情を見とゞけて、我句に人を屈すべからず。人は宗匠の顏を見て待心より調子を失ふ。よきもあしきも風雅の運なれば、其日の俳諧の始と終とをかむがふべし。さて人〳〵の附句あらんに、第一は附心の道理か理屈かを聞わけて附句の趣向を稱すべく、前句の噂を難ずべし。第二は三句の打越より四五句のはこびを論ずべし。四折の變化は勿論の事也。かならず當句の面白みになづまされ、句作のあしきは宗匠より直すべく、趣向のあしきは作者へ返すべし。指合の事は執筆の役なれば宗匠の心をついやすべからず。しかるに、道はいづれの道にも法と式とは立たれど、俗にはそれを青表紙といへる、俳諧は殊に新式なるより、一座の設 口傳 といふ事ありて、宗匠のよしあしは此時の用也。おほくは月花のあつかひより二季にまたぎたる彼岸の類も、四季にわたりたる無名の祭も、發句にすれば季となる物あり、附句にすれば雜となる物あり。詞のさし合も、物の去きらひも其場にしたがひ、其人によりてとがむるもあり、とがめぬもあり、新式のかけたるをおぎなふ時あり、古式のかたくななるをためる時あり。是等をおほやけの私といひて、其才にたえざれば人も感ぜず、其和をそなへざれば人も信なし。さらば此理を先につたへて其式を後にまなびなば、はじめて宗匠の名はよびぬべし。爰に古人の詞あり、君にも重からざれば威あらず、威あらざれば信なしとは、道をまなび藝をならはむに、妙所は信の一字より入れば、俳諧もなぞ有德の師によらざらん。されど俳諧のおかしみより笑言をもて人をみちびかむに、例の一節をしらざらんには、古人の詞の聞まがひもあらむ。〽次に判者の心得といふは、宗匠の一體別名ながら、釋門に佛と菩薩とのごとき、三十二應の自在を得て世法をあつかふに分別あらん。されば詩哥の勝劣は昔より君子の射にならひて、連俳は賭物をあらそふ時もあれば、道を損ずるも判者に

あり、道を益するも判者にあり。況や百韵の點式には長點の法あり、圏點の格あり。秀逸の印は例の危ければ點も無點も判者の變といふべし。第一に判者の心得は俳諧一道の點といふ事をしるべし。本より其卷にむかふ時は、宗匠の附合を聞に殊ならず。指合は筆者の役なれど、目にあたる時は斷るべし。さて一道の點といふは、判者の心の好所を捨て、例に當句のよしあしになづまず、附合のはこびの會釋と見えば、たとへ心にいらずとも、一點加ふるは勸懲の法なり。いでそよ一本の筆を動かして一國一城の人をなびけ、西へも東へもむかすべきに、其人は判者の癖をまなべば、判者は其癖に化粧をつけて果は其黨の相詞となりなむ。されど點者の額うちて價をまつ人は此論に及ばず。そもや判者の宗匠にすぐれて世法をあつかふ大事とは、世界の俳諧のよしあしをば判者の心にはよくしれども、といへばかくいひ、かくあればとありて、この所のさだかならぬより、其黨の俳諧をまどはせば、その中に丈夫の人ありて、例の難所をあとへ戻りて、俳諧はとにてもかくにてもあらず、上手といつぱ其理のあきらかに、下手といつぱ其理にくらかりしをと、はじめて自己の眼をひらきて判者の虚實を看破せむ。爰を醫書には藥の瞑眩といひ、祖錄には千疑一決といへり。これらは儒佛の內證にして、下愚の人には沙汰すまじき敎化の人の大祕事なり。されや、むかしの俳諧には俳言なしといふ判あり。其世は例の輕口をたくみて、連哥師の餘興にもいひ捨たれば、さる脇書もすべけれど、今や我門の俳諧には、俳諧の心といふ物はあれど俳諧の詞といふ物はなし。たとへ筑波の躰をつくし、八雲の詞をかさぬとも、連哥と俳諧の姿は別なり。此故に我家の點式には雅言のぬめりには俳諧の躰なしとも、俗語のいやみには俳諧にあらずとも、そこの兩樣を書わけよと新式に故翁の傍訓なり。爰に雅言といひ俗語といひ、どちらも俳諧の公用なるに、ぬめりと、いやみとをそれが病ひとは、これらに俳諧の明白を察すべし。誠や世の中の善言も惡言も口ある者の口占（スサミ）ならめど、それに病の有無をいへる式目の委細を稱せざらんや。世にまた俳諧にくらき人の點者は十國十色なるには、俳諧はすこぶるいひかちなりといへ

る。それらは放下の人にして此中の論にはあづからず。〽次に執筆の心得といふは、宗匠の機變をよくはからひ、連衆の調子を失はず、假名と眞名との配(クバリ)を口傳おぼえて、たとへ偏畫のまぎれありとも、手づかひはやく書たらん、それを第一の心得といふべし。例に指合と去嫌は本より執筆の役なれば、人の附ざる以前よしあしからん物は見置べし。さて指合のある時は、宗匠の顏を見て竊に其事を申べき也。其場其人の句によりて其儘さし置事もあらん。それも世情の人和ながら、一座の禮節を知らざらんには公私のさかひに道をあやまつべし。爰に此法の故を論ぜば、指合といふは、手爾波の事也。語路の拍子のあしき故に去嫌といふは象物の類也。草木鳥獸のちかからんは一卷の變のあしき故に、詮義にこれらの故をしらねば法にあやまつ所あらむ。さて一順を文臺にあげて發句はふたゝび讀かへし、次第に作者の名をよむ事は、其句は誰がし此句は何がしと、宗匠に顏をしらるべき爲也。これらの道理ある故に滿座の擧には名をよまぬ也。すべて此類は諸抄に委しければ、我しりがほに世をもときて、しいて法式をいはむとにはあらねど、道に其爲をしる時は法に此故をしれと也。〽次に亭主の心得といふは、勝手の馳走に立さはがず、喰物の次第を挨拶の人にしらせて、それを宗匠に通ずれば始と終とを心得る也。されば我家の面通言(アワシコト)に、なら茶三石喰ふて後はじめて俳諧の意味をしるべしとは、ある時に故翁の戲ながら論語の精(シゲ)にはいひまさりて、名をさしていへるは例のさびしみ也。されど厭はずとしづめたる文章の優にはおどろきて、爰に雅俗のさかひをしらば、子成が文質の論をもしらん。さて新式の饗禮に、其席は一汁二菜に過ず。茶とたばことはかぎりある物から、その器物に氣をつけて亭主の結構にまかすべし。酒は二獻に過べからずとぞ。誠や茶人の時分よりも俳諧の供給は一大事とはいはむ。おそき時は待こゝろに屈し、待得てあく時は昏睡におこたる。またざらんほどは亭主の心得なり。かく饗應の輕からんもひとへに儉約の心にはあらず。例のねむらず、例のさびしからん、其故あるをしるべき也。世に客發句といひ亭主脇といへる、さよとひとへには思ふべからず。發句は客の

位に似て其さまもおぼつかなく、詞の外に心をあまし、脇は亭主の働に似て、其心あきらかに發句の余情を調ふる故也。脇の韵字も此沙汰にしるべし。世にまた名殘の花をさして匂の花といふ事あり。此名は俳諧の儀式だちて奉納追善のたぐひには發句の作者へ其花を望むべし。始と終とに其心をあしらひて、爰に其事を匂はす故也。其座に亭主の心得は、執筆は名殘の表みちて裏一順と斷る時に、亭主より其花を望むべし。そこに一順を待あはす爲也。其席は擧句もつねならねば、或は一座の老人か或は一家の故ある人か、其日の時宜を見あはせて花の次手に擧句も望むべし。かくて滿座の再吟に發句をば吟じかへさず、匂の花より擧句へつゞけて押返し二度よむべし。其事の儀式を尊重する心也。これらの故は諸抄に論ぜず、名のみおぼえたるは覺束なし。〽次に連衆の心得といふは、例に衣食の機嫌をとゝなへ、其日其席の時刻におくれず、をの〳〵其所にあつまりて、文臺のたゝぬ先はみだりに宗匠の居間に出いらず、そこに一順を調ふる時は取次をもて其句を窺ふべし。連座の前の威儀に屈せざらん爲也。いづれの席にも小懷紙の用意して面々硯にて草稿すべし。本より文臺に遠ければ趣向の間の指合にまどふ。さて其席にのぞむ時はおほむね座配の次第ある物なれば、辭義にかまびすしきはかへりて無禮なり。膝中の詞の世なれたるもいやし。附句は手をさげて執筆へ申べし。宗匠もをのづから聞しりなむ。一句一直とも、出合遠近とも、此類は古式に五條ありて、今はた爰に記するに及ばず。すべて俳諧の席を論ぜば、第一に世情の人和をとゝなへて、論語に温厲の變をおもへ。第二は談笑の風俗にあそびて、關雎に哀樂の頌をしれや。俳諧は其日の陰晴にひとしく、よきもあしきも一時の變ならん。かへす〳〵も我門の俳諧師は、俳諧は俳諧のよしあしにもあらず、俳諧はそも何の爲なるや、法式はそも何の故なるやと、其道をあきらめ、此論をとがめて、平話の中の風と雅とをしらば、道理も理屈も今日の戯にして、虚實はをのづから風雲の變にかなひ、姿情はをのづから花鳥の和にあそばん。其人はよし俳諧をまなびて、たとへ烏焉の字をしらずとも和漢に滑稽自在の人といふべし。

傳ニ曰、此篇は全く我家の法ながら、他門の式にもかはられば、其書此抄に聞なれて、犬うつ童部もしるらめど、爰には理事の二を論じて、其法は何の爲なるや、其式は何の故なるやと、法式の所謂(イハレ)をしれと也。すべては貞享の式目をつみて五條の心得をいへりけり。さて宗匠の心得に、一座の設いふ事は、其日に其場の機轉なれば、其事は日夜に變ずべく、其理は古今に通ずべし。

　宵闇はあらぶる神の宮うつし

　　北より荻の風そよぎたつ

此句は哥仙の初折にて、月秋の七句目なるに、宵闇に月の附がたければ、荻に神風の威靈をあしらふ。しかれば其次の殊にむづかしきを、例に遷宮の宵闇はほのかに月影を含たればと、爰には月といふ字ばかりを出して、

　八月は旅おもしろき小幅綿

これらは一座の名譽なりとて、其比に書つたへて侍しか。我門の太龍生はいづれの卷の宵闇をも月と覺えたる沙汰もあれば、爰を宗匠のよしあしとはいへり。此故に一座の設にはそこばくの條目を書ならべて公私の二字に結語せし、爰に一犬の虚實をおもはざらんや。蓋おもふ、此段に風雅の運といふ詞は白馬に祖翁の常語なるが、さるは黃門の家訓にも、道の冥加といひ高運といへる、風雅の詞の須(スベ)便ながら、俳諧には例の殊勝地といふべし。〽次に執筆の心得とて、假名と眞名との配をいへる、但此事は古法にはあらず。東華式の文格より我家の書法とはなしぬ。連哥には多く假名をもちいて、俳諧にはおほく眞名をもちゆれば、眞名と眞名とのかさなりて上下の連續の心得がたき時あり。たとへば〽古池や蛙とび込水の音　のごとき込水のつゞき隱ならず。〽蛙飛こむ水の音　とは勿論にして、眞名にかゝればならぬ事もあれば、其時は〽飛込む水の音　と無用のむの字を加ふる事、いはゞ大和の風躰にして、假名と假名との配にもウフの通用をしるべき也。此外にフヒヘの音韵もイキシクの竪横も、芭蕉門の假名遣(ツカヒ)とて、貞享式の一條となせる、例の口傳とは此類也。むかしより物の法式には道理を破りて時宜にしたがふ事あり、古傳のあやまりを用ゆる事あり、何の故ともしれぬ事あり。それを故實の法といへれば、例の師をえらびて先しるべきは、たゞ此故實の一法ならん。蓋や第二の條目に俳諧の黨をまどはすとは、道に教化の大祕法にして、儒門には是を孫言といひ、老家には是を寓言といふ。況や佛書の虚實自在なる、五千余卷はすべて方便說也。これらに指月の喩をしらば、爰に俳諧の用と無用とをしらん。蓋や第三の條目に、一座の禮節といふ事は前に人和の温厲ながら、今は公私の二字に結して、法の私曲をいましめたる、爰に十論の公論をあふぎ、爰に十論の公法を學びざらんや。これらを百世の五條目とはしるべし。おいな我門の文道は道德の二篇に實をほどき、法式の一篇に虚をおぎなふ。是よく虚實の設にして、讀人これらの變をしらば、此十論に鼻息を通じて、はじめて俳諧の名をよばれて天下に横說竪說すべし。君見よ、儒門の四教とても、忠信の教は諸道のつれにして、孔子の道は文行の學にあり。かく其道の差別をしれれば、三家の意地をしれる人

さいはん。唯おそれてもおそるべきは俳諧の道の平地にして、容易の人のふみまよふべきをや。

そも〳〵十論の次第よりそれが要文を評するに、第一は〽俳諧は儒佛をやはらげて、今は詩哥の媒といひ、第二は〽老後のたのしみにといへる。其一に俳諧の理即をしり、其二に俳諧の究竟をしるべし。第三段には其德をひろめて〽詩哥連哥のみなかみを忘れざる、その本立て道ならざらんや。詩哥連哥の德に及ばずとも、其用は日〳〵に俳諧をうらやむべし。まして〽道理と理屈とに善惡の三をわけたらん、此名に世法を說つくして諸家の理論を推さゞらんや。しかるに〽其和の温厲といひ、〽其家の一節といへる、爰を我家の風骨にして、呼吸の三聖も默識の要文ならん。其外は俳諧の法式をあかし、文章の法格をしらしむるに、或は〽上手の下手に似て下手の上手に似ずといへる、爰に六藝の至極をしるべく、或は〽言語は口占ながら詞のあやに病を聞わけたる、爰に俳諧の機變をしるべし。況や〽中品以下の四字にて、俳諧の一門をかまへたる道として、其僞を信ぜざらんや。法として其故を學びざらんや。すべては今日の理を說て世法をつくさずといふ事なし。いざさらば十論の趣向といふは、始より終まで儒佛の兩道を證文にひきて詩哥の二門に功をあらそへる、それをば俳諧の論語ともいひ、是をば俳諧の法語ともいはむ。誠は迹の一字より竊に老彭に比するなるべし。いざさらば十論の畢竟といふは、〽我をしる時は其人をなしへ、我をしらざる時は其人とあそべる孔子に春秋の歎息も口訣、達磨に楞迦の密法も口訣、其家〳〵の祕訣にして、右に十條の要文はしらず。今いふ一條に俳諧をつくして十論の中の大要文としるべし。君見るや、論語の四百八十章も、始は學の一字より終は言の一字をもて言をしらざれば人をしらずと、萬古不易の大道を結語せしが、其言といふは論談なり、論談といふは俳諧也。俳諧はたゞ虛實にして、其虛を談ずれば莊老となり、其實を論ずれば孔孟となる。爰に論語の名をもしるべし。いづれの言語か虛實によらざらん、いづれの虛實か先後によらざらん。法は變化の檝としるべき也。君聞くや、佛書の五百四十函も、經に論あれば論に律ありて、其言をしり其人をしるより三界一音の教といへる。しかれば儒佛の大道すら阿難迦葉の其言につたはり、有若曾參の其語にひろまりて、道に文章の數奇と不數奇とはあれど、迂詐か眞言かの論には及ばず。まして和漢の風雅を評せば、遠くは詩經の三百篇も、魯頌の一言をもて世をおほひ、近くは哥書の八代集も浮橋の詞をたれとしてよろづの哥とぞなれりける。今や十論の評者として、爰に論者の大功を評せば、儒門に木鐸の喩はしらず、例に俳諧のおかしみより佛家の龍樹も菩薩の名をやめて此道の論師となれるなるべし。

十論ノ讃

我聞此十論者和漢傳滑稽之心而勸之擬論語之風諭些徵之倣維摩之彈呵歷誠不文而可學質而可信焉耶。言則謂俳諧之論語矣若夫分道理與理屈而所謂物于先後之序此名者出我家之發明而四民應可遊此理了則六藝應可講其序梟矣尤憶花巖之次第則佛應宜給勸法先後以習分別居來其經者爲誨出世之樂焉乎此論者將說世情之遊虖哉爰知所謂俳諧之和發儒佛而詩哥之媒意焉爾有則俳諧之一道者不爲學佛兮學儒兮實老莊楊墨之虛兮常知虛實之變而將設今日之世法爾者歌人應不隔臥猶之床兮連哥應不爭千鳥之友兮姿者構文武之門而情者爲同花鳥之道矣假令爲虛於其實了共不可爲實於其虛與者遇名麗居士之遺言也則何不有善焉其以祖翁之令授道也則是以先師之爲記法也止今也憶選場之時節則祖翁之滅後三十年而殆可遂此論之功而傳其道之德矣夫此故再撰此十論而令成和漢文操之別錄者也享保已之亥歲林鐘晦日獅子房蓮二爾申

十論ノ校

例のいふ獅子庵に廿余岬の遺稿ありて、それが中に五祕の傳寫あり。今いふ十論も其ひとつ也。むかし武陵の芭蕉庵にて祖翁と此事を論じ給ふは元祿のはじめと聞ゆれば、先師の奥羽に行脚ありし庚午の明る年なるべし。爰にその比の草藁を檢點するに、白馬經と一字錄とは祖翁と先師の相撰と見ゆる也。さて十論の評者をせし朝暮三といふ者は、其比は深川の庵に侍りて、世間の餅搗の賑しきに、今一臼も聞て寐ばやといへる名言の小坊主なるが、そのゝちの名を傳へざれば、これらは竹林の撰集の時もかくのごとくの役人附と見るべし。扨こそ全篇の評を見るに、おほくは口傳の祕事をいへれば、文は客難の荅にならひて、發語に傳曰の二字を置るならん。されば十論の次第を校するに、第一は和漢の俳諧に以心傳心の道あるより、公任・經信のこゝろを汲て、誹諧の躰のさだかならぬをいへる。第二・第三は道德を論じて天下に文武の一助たらんには、爰に滑稽の諷諫をもて治國齊家の媒といはざらんや。第四・第五は此道の本論ながら、虛實は俳諧のみならんや。儒佛は是をもて人をおごろかし、老莊は是をもて己をあそばしむ。まして其道を傳へむに、姿情は文章のよる所なるべし。さて第六の實地には物に一節のちからを添たる。第七・第八も其地にして、俳諧はたゞ平話なれども、それに雅俗の品あるより、文章に鼓舞のはなやかなる。筆に管絃の術ありて、爰に儒佛の氣を轉ず。第九は俳諧の用ながら、變

化は天地のつれさいへる、迅雷疾風の冠にも及ばず。鳥拉跡さいふべし。第十は本より家法ながら、式には新舊のたがひめたいへる。一座の設は貞享式をつみて、これらに五臓のおほむねた察すべし。しかれば第一より第十まで、物の先後に俳諧をさばき、詞の虚實に文章をあつかひて、一字一點のわたくしをいれざらむ。世さらに此論を鑑させば、俳諧は自己の面を照して、好惡はみづからしるべき也。おなじく享保のこさし、文月のはじめ門人渡部狂うけ給はりぬ。

十論ノ解

十論之奥書ニ云此論者粗紛ニ副墨ニ而可レ惑ニ前後之相紊ニ。梟其阿翁自加ニ給口焔之筆ヲ則今将不レ忍レ改ニ草稿ヲ我後及ニ予雲之論ニ也則二三子其惟察レ之實慶者ニ此論之故事ト與ニ古語ニ則皆々作レ引ニ儒佛之讃文ニ就レ中有レ多ニ論語之詞ニ丁者謂ニ儒書與佛經ニ之多少ヨ笑乎謂レ猿ニ論語之風論ニ矣夫不ニ其心在レ茲焉ニ此門人 某等仍解ス

序文解

△滑稽　史記ノ評林ニ崔浩曰言出レ口成レ章詞不レ窮竭ニ若ニ滑稽之吐レ酒ニ▲或曰諧語滑利知計疾出ツ▲或曰多智圓出之貌也▲或曰漢書談笑類ニ俳優ニ註ニ俳諧雑戯也　「解ニ云、此外ノ贊詞數多アリテ本文ニ散在セリ。

△述而篇　論語ノ述而篇ニ　述シテ而不レ作信シテ而好レ古竊ニ比ス於我老彭ニ朱註ニ述ハ傳レ舊而已作ハ則創始也▲維摩經問疾品

問疾品　居士彈ニ呵佛十大弟子ニ　「解ニ云、此一對ハ十論ノ中ニ文章ト教誡トノ二樣アレバ、爰ニ文教ノ二字ヲ用ユ。論語ハ文學ノ先ナルヲ知ベキナリ。

△夏爐冬扇　此四字ハ禪家ノ常語ナリ。何ノ書ノ熟語ニヤ知ラズ。或ハ禪錄ニ臘月扇子ト云フ　哥書ニ、夏ノ炭櫃ト云ヘル、何レモ無用ノ喩ナリ。

△桃紅李白　古詩ニ　桃紅李白人間夢獨枕空樽忘世情

△口金　史記張儀傳　衆口鑠金積毀銷骨

△生住異滅　佛經ニ此四相ヲ立テ、人天ノ間ノ變ヲ云ヘル、爰ニハ年月ノ變化ナリ。

第一段

△諷諫　家語　諫君有五義一譎諫二戇諫三降諫四直諫五諷諫唯度主而行之吾從諷諫乎　「解云、論語ノ註ニハ、詩經ヲ評スルトテ風諭ノ二字ヲモ用ユ。諷諫ハ俳諧ノ別名ニテ、世情ノ人和ト知ベキナリ。

△莊周
達磨　莊子　仁義之端是非之塗　樊然殽亂或曰何揭仁義若擊鼓而求亡子焉▲老子　大道廢有仁義▲少室六門集　達磨曰以心傳心不立文字或曰今時講得經論以爲佛法者愚人也　「解云、此一對ハ法ノ虛實ヨリ道ニ廣狹ノ論ヲ云ヘリ。十段ノ評ノ阿難・有若ノ下ニ見合スベシ。

△天浮橋　筑波問答ニ、浮橋ノ詞ヲ以テ連哥ノ始ナリト云ヘル說アリ。▲鶺鴒ノ故事ハ日本紀ニ出タリ。或曰、猿田彥居道迎皇孫形異而配侍神不得相向天鈿女目勝於人宜往向之鈿女乃露其胸抑帶於臍下而笑噱向立　「解云、此段ハ全ク俳優ニシテ、以弱勝强ノ謂ナリ。

△八雲　古今序、八雲の御哥は三十一文字の始とし、或は難波津の哥は帝の御始なり、淺香山の詞は采女が戲れよりよみてさあり。

△誹諧　八雲御抄ニ、俳諧・誹諧等ノ九品アリ、奥儀抄ニモ此論アリ。夫誹諧ト云フ躰ハ如何ナルヲ云フニカ有ラン、正シキヤウ知レル人ナシ。公任ナドモ不知之。道俊ナドハ心得タルニヤ。後拾遺集ニ是ヲ入ル。經信云、入誹諧歌ニテ殊事ノ惡ルサモ被知トアリ。「解云、俳諧ト誹諧トハ差別ニ我門ノ口傳ヲ知ベシ。

△白馬經　俳諧白馬集ハ芭蕉門ノ遺經ナリ。篇目ハ四十二條ニ分チ、題號ハ佛家ノ四十二章經ニ效ヒテ白馬東來ノ意ナリトゾ。全部五卷ニシテ其中ニ貞享式二卷アリ。獅子庵ノ遺稿ニ五祕ノ傳トハ此經ノ中ニ散在セリ。文章ノ趣ハ論語ノ教誡ト風諭トヲ學べり。

△菅家
法然　神社考天神贊　裹巾奇幅而袖間插梅花一枝則指參佛鑑禪▲明義抄ニ、法然ノ夢中ニ金色ノ僧アリ、云我ハ大唐ノ善導和尚ナリ、汝正路ノ化導退轉スベカラズト。「解云、此一對ハ夢ノ中ニ漢土ノ法ヲ傳ヘ玉ヒシニ、祖翁ハ自己ニ開悟セシトナリ。

△七人師　論語ニ　夫子焉不學而亦何常師之有或曰三人行必有我師焉　「私云、七人ノ師トハ何レノ全文ニヤ尋ヌベシ。

△雲夢　上林賦ニ　吞若雲夢者八九其餘胸中曾不蔕芥　註胸中極廣也

第二段

△一字錄　此錄ハ東華坊所述ナリ。篇目ハ孔子ノ家語ニ效

テ或ハ意ヲ取リ或ハ詞ヲ取レリ。全部三卷ニシテ、其中ニ東花式一卷アリ。多クハ月花ノ曖ヨリ新舊ノ式ヲ付ヒテ一座ノ設ヲ出セルナリ。全篇ハ俳諧ノ世法ヨリ時宜ノ變化ニ一門ヲ構ヘ、儒佛老ノ三教ヲ一合シテ、或ハ門人ノ編集ヲ雜ジ、或ハ註者ノ按排ヲ雜ズ。爰ニ淺磨ト莊周トニ俳諧ノ風骨ハ似タレドモ、物ノ機嫌ニ達スル事ハ諸家ノ風雅ニ勝タル由ヲ云ヘリ。

△千重羅
八珍菓　佛經ニ思ヘバ衣羅綺千重思ヘバ食百味具足ス▲大寶箴ニ羅ニ八珍於前ニ所レ食不レ過レ適レ口▲論語ニ一箪食一瓢飲回也不レ改ニ其樂ニ「解云、此一對ハ俳諧ノ一大事ナリ。身ニ飾ル者ハ心ニ飾リ、口ニ奢ル者ハ意ニ奢ル。其レヲ儒佛ノ誡ナルニ、反テ常ニ合フ道ト云フハ俳諧ノ人ノ活計ナリ。

△俳諧之詩歌　「解云、此名ハ始テ十論ニ出テ俳諧ノ家ノ公言ト云ハン。誠ニ風雅ハ虚實ノ設ナレバ、儒佛ノ法ニモ連哥アリ、俳諧アリ。増シテ詩哥ニ於テヲヤ。然レバ連哥ハ文ニシテ、俳諧ハ文武ヲ兼タリト云ベシ。但シ詩經ト万葉トノ對ハ是ヲ竝對ノ文ト云ナリ。

△其代　古今序ニ　神代は哥の文字もさだまらず、すなほにしてことの心もわきがたかりけらし。人の代となりて花をめで鳥をうらやみ、とあり。

△奥細道　此書ハ芭蕉翁ノ紀行ナリ。奥羽ヨリ三越ノ間マデ文章アリ、發句アリ。板行ノ一册ハ四半ノ小本ナリ。

△幻住庵　此庵ハ湖水ノ南石山寺ノ後ノ山ニ在リ。爰ニ隱ル、コト二年バカリ、世ニ幻住庵ノ記ト云フ物三通アリ。去ルハ記ト賦トノ差別ナリトゾ。

△玉帛禮
衣食產　論語ニ禮云禮云玉帛云乎哉▲略史ニ不レ意ニ衣食之產ニ「解云、此一對ハ註者ニ間違アラン。彼翁ハ万人ノ崇敬ヨリ玉帛モ衣食モ乏カラネド、其人ニ訣ハズ、其事ニ拘ラズト註スベシ。彼翁ハ貧閑ヲ貴ミテ玉帛ヲ賤ツズト註セバ、世間一通ノ愚註ニシテ、何レノ書物ヘ合セテモ、勸懲ノ理ノ同ジケレバ俳諧ノ註者トハ云イ難シ。昔ヨリ儒佛ノ註者モ孔子ヲ註セズ、釋迦ヲ註セズ、自已ノ大道ヲ註スレバ何レモ元祖ノ本意ヲ失ヘリ。

△椎葉
杏花　莊子ニ　適ニ千里ニ者三月聚レ糧　▲万葉ニ　旅にしあれば椎の葉にもる、とあり▲公子行詩　借問酒家何處有牧童遙指杏花村　「解云、此一對ハ遠近ノ貴介公子モ、彼翁ノ隱家ヲ募テ玉帛ヲ捧ゲ、衣食ヲ供スレバ、心ニ貧閑ヲ樂ミナガラ、其身ハ衣食ニ乏カラズトナリ。

△移文　文撰ニ毀ニ彦倫之僞隱ヲ而書ス北山移文ニ　註移令書也「解ニ云、祖翁ノ食帛ニ乏カラヌハ、杏閑ヲ作ルニ非ズト、爰ニ前文ヲ註セシナリ。

△國臣家子　家語ニ　國有ニ爭臣ニ則社稷不レ危也　父有ニ爭子ニ不レ陷ニ無禮ニ　註以レ義諫諍ス

△遺金　書言　達賢支成俱以明レ經位至ニ丞相ニ語曰遺ニ黃金滿籯ニ不レ如レ教ニ子一經ニ云々

△六義　朱氏語錄ニ　以ニ風雅頌ニ爲ニ三經ニ以ニ賦比興ニ爲ニ三緯ニ曰風是庶民所レ作雅是朝廷之詩　「解云、風ト雅トハ虛實ニシテ連哥ト俳諧ノ差別ナリ。

△三十九年　伯玉曰四五十而知ニ四十九年非ニ「解云、白馬

ニ四十雀ノ發句ヲ擧ゲテ詩經ノ興觀ノ口評ヲ合セ、茶話禪ノ沙汰モ見ヘタレバ、此年ハ祖翁ノ初老ノ秋ト知ルベキナリ。「老の名のありともしらで四十雀

△師資　老子經ニ　善人不善人師不善人善人資（私云）世ニ師匠ト弟子トヲ指シテ師資ト用ルハ此故ナリ。

△致知　大學ニ　致知在格物「解ニ云、例ノ平生ヲ失ハズ。今日ノ人事ヲ設ク時ハ、世情ノ道理ニ通達シテ治國齊家ノ一助ナラントナリ。

第三段

△天理人理　莊子ニ　牛馬四足是謂天落馬首穿牛鼻是謂人

△張良　漢書贊ニ　聞張良之智勇以爲其貌魁梧奇偉反若婦人女子

△氷水紫朱　荀子ニ　學不可已青出於藍而青於藍氷出於水而寒於水云々▲論語ニ　惡紫之奪朱「解云、爰ニ紫朱ヲ以テ藍青ニ替タル事ハ、惡字ノ語勢ヲ假ル爲ナリ。誠ヤ文章ハ換骨ノ術ヲ得テ、故事古語ヲ用ルニ子細アラン。然レバ此等ノ文章ヨリ俳諧ノ自己ヲ慢セザル過當ハ例ノ虛實ト知ベシ。

△不背君父　論語ニ　事父母幾諫見志不從又敬不違勞而不怨

△滑稽人　楚優孟爲封孫叔敖之子作樵哥曰楚相孫叔敖持廉至死方今妻子困窮負薪而食不足爲也於是莊王乃召其子封之四百戸▲秦二世欲漆咸陽城優旃曰漆城雖於百姓愁費然佳哉漆城蕩々寇來不能上顧難爲蔭室於是二世笑之止▲齊淳于髠飛鵠成辭曰不忍鵠之渴出而飲之去我飛亡鵠毛物多相類者吾欲買而代之是不信而欺吾王也欲奔亡他國痛吾兩主使不通叩頭受罪大王楚王曰善齊王有信士▲漢東方朔竊飲仙酒武帝怒欲誅之朔曰陛下殺臣不死臣死酒亦不驗遂得免「解云、此四人ハ滑稽ノ元祖ニシテ、自己ノ知計ヲ作ルニ似タレド、畢竟ハ諷諫ナリ。但シ此文ハ長短アリテ句對ノ法ヲ用タリ。

△宋玉　文選ニ文章多シ。楚ノ襄王ニ寵セラル▲答客難ハ東方朔ガ文ナリ▲答賓戲ハ班孟堅ガ作ナリ。何レモ俳諧ノ理論ニテ文ニ虛實ノ鑑ト云ベシ。

△曹操靈運　曹操ハ魏ノ太祖ナリ。赤壁賦ハ橫槊賦詩▲靈運ハ晉ノ司馬參軍ナリ。涅槃經ノ譯者ニシテ求入廬山之蓮社ニモ遠法師以心雜止之「解云、十八賢トハ遺民宗炳等ノ念佛講中ナリ。此一對ハ文ト武トニ世情ノ人和ヲ說ナガラ、其和ニ虛實ノ自在ヲ知レトナリ。

△餘力　論語ニ　行有餘力則以學文「解云、世ニ文章ト云フ時ハ詩哥連俳ノ四ナルニ、俳諧ハ溫厲ニ自在ナレバ、武士ハ連哥ノ文ヨリハ俳諧ノ文ヲ學ベトナリ。

△多能　論語ニ　吾少也賤故多能鄙事君子多乎哉不多也

△鼓舞　易繫辭ニ　鼓之舞之以盡神　註ニ如擊鼓然自然能使

人跳躍踊舞也

△三經和　佛經ニ　如來以眞智應機接物▲老經ニ　和其光同其塵湛兮似或存▲儒經ニ　汎愛衆親仁

△溫厲　論語ニ　子溫而厲威而不猛　註　厲嚴肅也

△文武　家語ニ　有文事者必有武備有武事者必有文備

△迦葉淵明　白氏文集ニ　蘭省花時錦帳下廬山雨夜草庵中▲宗鏡錄ニ　如迦葉聞琴起舞阿難好哥吟俱以余習也▲高僧傳ニ　遠法師以書招淵明明日若許飲卽往遠許之一日聞酒鐘而攢眉而去▲虛堂頌　迦葉聆箏起舞淵明聞鐘皺眉

△誹木諫鼓　淮南子ニ　堯置敢諫之鼓舜立誹謗之木　註　欲諫者擊其鼓書其善否於表木

△和同　論語ニ　君子和而不同或曰知和而和不以禮節之亦不可行也或曰顏回能信而不能反子張能莊而不能同或曰回也屢空或曰回也如愚或曰可及其智不可及其愚「解云、十論ハ本ヨリ論語ノ風諭ニ效ヘバ、此等ノ數語ヲ看破シテ爰ニ孔子ノ虛實ヲモ溫厲ヲモ知ベキナリ

△三遊戲　佛經ニ　遊戲自在▲東坡詩ニ　先生眞是地行仙▲史記ニ　東方朔曰如朔等所謂避世於朝廷間者也何必深山蒿廬之下

△高家　奥州岩城ノ郡主内藤家ナリ。先祖風鈴軒ニハ夜錦集ノ撰アリ。此殿トハ露沾公ノ淺布ノ別莊ィゾ。但シ此詞ハ小子識之ト云ヘル家語ノ文勢ナリ。

△乞醋　論語ニ　孰謂微生高直或乞醯焉乞諸其隣而與之　註　所枉雖小害直爲大矣「解云　此喩ハ表裡ナガラ飲食ノ小事ヲ類セシナリ。

第四段

△虛實　「解云　此二字ハ俳諧ノ一大事ニシテ、虛ヲ先ニシ實ヲ後ニス。去レハ諷諫ノ和ヲ節スル爲ナリ。然レバ儒佛ノ先後ハ假リニ其宗ノ門趣ト知ベキナリ。

△馬麥牛刀　興起行經ニ　佛九十日食馬麥　中略　我因毀謗佛曰羌頭沙門正應食馬麥不應食此甘膳之供▲論語ニ　夫子之武城聞弦哥之聲莞爾而笑曰割鷄焉用牛刀　中略　子游曰小人學道則易使也子曰二三子偃之言是也前言戲之耳「解云、佛ノ實苦ト儒ノ虛遊トヲ知ベシ。

△顯實毋固　法花經ニ　開權顯實或曰開方便門示眞實相▲論語ニ　子絕四毋意毋必毋固毋我「解云、馬麥ニ九十日ノ苦ヲ受タルハ佛法ノ實ニシテ因果ヲ知リ、牛刀ニ二三子ノ戲ヲ設タルハ儒法ノ虛ニシテ方便ヲ知ベシ。況ヤ孔子モ微生畝ニ難ゼラレテ、非敢爲佞疾固也トハ、素ヨリ虛實ノ時宜ト云ベシ。

△花實　百人一首花實相應の事は、明月記の趣に、新古今の花過たる事を本意なく思ひて、新勅撰百人一首を撰せし、となり。花實相應の事は哥道の口傳とぞ。

△婦姑　莊子ニ　室無空虛則婦姑勃谿　註　勃谿爭鬪也

△忠言　家語　良藥苦於口而利於病忠言逆於耳而利於

於行

△虚船　莊子　方舟而濟於河有虚船來觸舟雖有偏心之人不怒

△天堂地獄　禪錄　天堂易遊地獄難入

△大學序　朱子曰異端虚無寂滅之敎其高過於大學而無實

△明德　大學註　明德者人之所得乎天而虚靈不昧

△新民　新民之新者革其舊之謂也

△蚊金　南史　不容耳於蚊虻之謗▲孟郊詩　惟當金石交可與賢達論

△麗居士　編年通論　麗居士臨死枕襄州牧于公膝曰但願空諸所有切勿實諸所無

△唯佛　無量義經　唯佛與佛乃能究盡「解云、爰ニ虚實ノ虚實トハ、馬麥ト牛刀トノ虚實ノ如キ虚實ノ表裡ヲ知レトナリ。

△般若經　心經ノ節要　此等ノ大旨アリ。畢竟ハ佛果ノ種智ヲ云ヘル、三般若トハ三智ナリ。

第五段

△甲衣　家語　介胄執戈者無退懦之氣非躰純猛眼之使然也或日奉衣供食者孝之常也

△温故　論語　温故而知新可以爲師矣

△誨人　論語　默而識之學而不厭誨人不倦何有於我哉

△簠簋詞　唐ノ一行禪ノ師占文ニ如此ノ類語アレド全文ハ見エズ。今ノ簠簋トハ晴明ガ占書ニヤ。嘗テ此等ノ文言ナシ。尙尋ヌベシ。

第六段

△繪事　論語　繪事後素　註　先以粉地爲質而後施五采

△華嚴　四敎儀　佛初在寂滅道場現七寶莊嚴相三七日間說花嚴經

△擬誘彈陶　「擬宜」誘引」彈呵」陶汰　此四は佛敎の次第なり。

△平生心　佛經　平生心是道▲孟子　無恒產者無恒心▲論語　得見有恒者斯可矣

△闇黑豆　禪錄　闇黑豆老僧　註　無分曉之喩也

△驪龍領下　列子　夫珠在驪龍頤下子遭其睡也使其寤子當爲靡粉「解云、爰ニ偃臥ノ二字ヲ以テ文章ノ起結ヲ見ルベシ。

第七段

△芝生　古哥、道のべのしばふがくれの花にだにさむればさまる心なりけり▲長嘯擧白集　こなきの花さきてつまの事あり、山家記ニ見るべし。

△丘乙巳　「上大人」丘乙巳」化三千」七十子」佡小生」八九子」可作仁」可知禮也　此八句ハ唐人ノ伊呂波ナリ。

△三線　八義譯文　蟬ヲセミト云イ、文ヲフミト云イ、錢トモ蘭トモ云ヘル。或ハ茶碗沙鉢ノ類モ通語ノ中ノ言語ト

云ナリ。三ヲモサミト訓ズベシ。三味線トハ後ノ物數奇ナリ。

△和歌所　和歌ノ指南ハ、二條・冷泉ノ兩家ヨリ世々ニ其時ノ才名ヲ撰ミ、連哥ノ花本ハ里村ノ家ニ傳ハリテ、或ハ是ヲ新在家トモ云ヘリ。

△不肖　史記ニ 堯知丹朱之不肖不足授天下 註ニハ肖似也

△三會暁　彌勒下生經ニ 初會二會三會ノ濟度アリテ、龍花三會暁トハ云ヘル。龍花ハ釋尊ノ菩提樹下ノ格ナリ。

△解牛　「解云、莊子ニ解牛段ハ文章ノ形容ヲ要トシ、韓
獲麟　文ニ獲麟解ハ文章ノ理論ヲ要トス。畢竟ハ姿情ノ二ナリ。

△鳶焉　六書正譌ニ 焉鳥也假爲語終辭 鄭樵曰卽鳶字 「解云、惣ジテ詩文聯句ニハ文對アリ、意對アリ、句對・字對ハ勿論ニテ、隔對モ一法ナリ。或ハ態藝ニテ鳥獸ナル物アリ。或ハ生植ニテ支体ナル物アリ。此故ニ今ノ二字ヲ擧ゲテ十二門ノ凡例トセリ。委クハ文操ノ大和聯句ニアリ。

△不根論　叢話ニ 東方朔枚皐以不根持論好詼諧也武帝以俳優幸之

第八段

△鷹槌　古歌ニ 我戀はこもつちこしの一もちりもちりやすらんあふかいもなし

△薪花　古今序ニ 大伴の黒ぬしはそのさまいやし。いはゞ薪をおへる山人の、花のかげにやすめるがごとし。

△怪力　論語ニ 子不語怪力亂神 「解云、世ニ同穴ノ狐
亂神　ト云ヘル俗間ノ諺ヨリ此四字ヲ形容セシナリ。

△門前姥　詩話ニ 樂天ハ常ニ詩ヲ作リテ門前ノ老婆ニ聞セシトアリ。

△言行　論語ニ 君子恥言而過行或曰邦無道危行言孫 「解云、儒言行ノ偏ナラヌハ此等兩語ニ知ベキ也。況ヤ定公對問ニ言不可以幾 ト云ヘリ。

△東隣　家語ニ 孔子西家有愚夫不能識孔子是聖人乃
老丘　曰彼東家丘吾知之矣 「解云、前ニハ門前ノ姥ト云イ、爰ニハ東隣ト云イ、老丘ト云ヘル、總テ文對ノ爲ナガラ作ニハ用ト無用アレバ、此等ハ無用ノ用ヲ稱スベシ。

△儒佛衡　希逸莊子序ニ 其意欲與吾夫子爭衡 故其言多過當 ▲說文ニ 謂牛好抵觸以木闌制之也

△下人　家語ニ 孔子攝行相事有喜色曰不曰樂以貴下人乎 「解云、儒道ノ實トハ此事ニシテ、俳諧ノ詞ニハ骨ヲ出スト云ナリ。

△愚禿　護灯會下ニ、關白兼實公ヨリ法然上人ヘ御望アリテ、善信ノ御坊ニ姫宮ヲ嫁シテ、始テ妻帶ノ念佛ヲ建立セリ▲教行信證ニ 或ハ改僧儀賜姓名處遠流予其一也爾者已非僧非俗是故以禿字爲姓 「解云、非僧非俗ノ四字ニ宗旨ノ信アリ。

△巽與言　論語ニ 巽與之言能無說乎繹之爲貴說而不繹吾末如之何也已矣 註ニ 巽言ハ婉而導之也

第九段

△南殿北邙　「解云、南殿ハ禁庭ヲ指スナリ。和朝ニハ南殿ノ櫻ト云ヘル名モアリ。北邙ハ墓所ヲ指スナリ▲洛陽城記ニ山連ニ亘四百余里ニ東洛九原之地也▲淵明詩ニ一旦百歳ノ後相與還ニ北邙ニ

△有心附　定家卿ノ説ニモ此躰ヲ至極トセリ。和哥十躰ノ中ノ一ニシテ、理世撫氏ノ五躰モ此中ヨリ出タリ。但シ有心無心ノ説ニ口授アリ。

△橋鷹夢　「解云、此段ニ此三字ヲ指シテ、文法ニハ語路斷續ト云イ、句格ニハ互照ト云ヘリ。文章ノ起結ハ此間ニ知ベキナリ。

△俳諧之連歌　「解云、横懐紙ノ端書ニ此五字ヲ題スルハ常法也。然ドモ俳諧ハ眞名勝ニテ、長ノ句ニハ七文字ノ配リモ宜カラズ。懐紙ノ面モ穩ナラズ。我家ノ書法ニハ多クハ竪懐紙ヲ用ヨト貞享式ノ傍訓ニアリ。假名ニヤフノ通用モ此爲ナリ。

△一字一涙　叢話ニ　盧仝詩一字一涙也或曰杜甫爲レ詩瘦云云

△騎レ鶴　小説ニ　有レ客各言レ志一願レ爲ニ楊州刺史ニ一願レ多ニ貨財ニ一願ニ騎レ鶴上昇ニ一願下腰纏ニ十萬貫ニ騎レ鶴遊中楊州上ニ云云

△鳥獸　論語九卷ニ　小子何莫レ學ニ夫詩ニ詩可ニ以興ニ可ニ以觀ニ可ニ以群ニ可ニ以怨ニ邇之事レ父遠之事レ君多識ニ於鳥獸草木之名ニ　「解云　白馬ノ文章訓ニ此論アリテ、章段モ訓點モ古註トハ各別ナリ。爰ニ白馬ノ大略ヲ擧ルニ、尤モ此章ハ前章ニ續キテ由也章ノ結文ト見ユレバ、子曰ノ二字ハ衍文ニシテ、小子ハ其座ノ二三子ヲ指ス詞ナラン去レバ。一段ノ要ヲ論ゼバ仁・知ハ教誡ノ常ニシテ、信・ハ六言ノ本ナレバ爰ニハ直勇剛ノ三蔽ヲ以テ子路ニ學文ヲ勸玉ヘルナリ。總テ六言ニ好學ノ詞アリテ、文學トハ何ゾ、風雅ナリ。風雅トハ何ゾ、詩哥ナリ。然レバ其詩ノ教誡モ子路ニ於テハ文章ヲ先トスベシ。此故ニ興ハ比興ナリ、觀ハ觀ノ感ナリ、群ハ其書ノ群而和スルナリ、怨ハ詞ヲ以テ物ヲ哀動スレバ、儒佛ノ文章モ哀動ニ止リ、風雅ハ增シテ其哀ヲ本トセリ。邇遠ノ二字ハ文中ノ文ニシテ、爰ニ五倫ヲ互照セシ文ハ無用ノ用ヲ文トス。畢竟ジテ一段ハ、子路ガ生質ノ野鄙ナル、諭シテ鳥獸艸木ノ名ヲ知レトニテ、結語ハ多字ヲ用タル、去ルハ廣雅ニ祇也ノ訓ヲ用ベキヤ。其書ニ多不レ知レ量ト云ヘル適也ノ訓ヲ用ベキヤ、但シ玉篇ニ大有ノ義ヲ用テ第一ノ意ニ通ズベキヤ。是ハ決シテ多少ノ多ニハ非ズ、同語異敎ノ變ヲ知ベシトゾ。

△機嫌　阿含經ニ　預知ニ機嫌ヲ　註ニ機發也嫌嫌疑也

△刹那　仁王經　一念中有ニ九十刹那ニ一刹那有ニ五百生滅ニ　法數ニハ刹那ヲ一念ト譯セリ。

△書案銘　白馬ニ此銘ノ論アリ。去ルハ眞寶ノ標題ヲ難ズルトテ張子厚ヲモ難ジ、程伊川ヲモ難ズ、大概ハ爰ノ趣ナリ。

△蟋蟀法　詩經ニ　七月在レ野八月在レ宇九月在レ戸十月蟋蟀入ニ我牀下ニ云云　「解云、此名ハ文章ニ先後ノ法ニシテ、彼章ノ結語ヲ起語ト知レトナリ。

△鬼谷　鬼谷先生ハ戰國ノ時ノ異人ナリ。吳子・孫子ハ兵法ノ師トシ、張儀・蘇秦ハ滑稽ノ師トス。其傳ハ六國史ニアリ。

△一字不說　四十九年一字不說ノ語ハ禪錄ニ多ク用イ來レリ。涅槃經ノ中ノ取意ナリトゾ。

△賊後弓　此語ハ禪錄ニ多シ。本朝ノ諺ニハ喧嘩ノ跡ノ棒三昧ト云ヘリ。

第十段

△法式　建治式ハ爲相卿ノ作ニシテ、應安式ハ良基公ノ述ナリ。是ヲ連歌ノ新舊ト云イ、慶安式ハ長頭丸ノ作ニシテ、貞享式ハ芭蕉翁ノ述ナリ。是ヲ俳諧ノ新舊ト云ヘリ。或ハ季吟ノ埋木アリ、或ハ立甫ノ嚔艸アリ、大旨ハ此等ノ書ニ依ルベシ。一座ノ設ハ東花式ニ見ルベキナリ。

△道嚴法易　法曹書ニ此等ノ類語アリ、尙可尋全文。

△古人詞　論語ニ君子不重則不威。私云尙可尋全文。

△佛菩薩　大論ニ佛ト菩薩トハ羅穀ヲ隔ルガ如ク、纔ニ元品ノ無明ヲ殘シテ濟度ノ爲ニ衆生ニ緣ヲ引ト云ヘリ。「解云、第二段ノ論ニハ名人ト上手トニ喩フ。去レバ聖人ハ人ヲ誨テ貴ズ、賢者ハ利害ヲ說ニ己ガ用アリ、譬ヘバ孔子ト孟子トノ如シ。然レバ詩歌ニハ聖教ノ温和ヲ知リ、俳諧ニハ賢典ノ的當ヲ知レバ、温厲ノ二用ニ世法ノ設ヲ知テ、俳諧ハ殊ニ虛實ノ用ナルヲ知ベシ。此故ニ三十二應トハ、觀自在ノ化相ヲ以テ道ニ勸懲ノ方便ヲ知レトナリ。

△君子射　論語ニ揖讓而升下而飮其爭也君子

△眄眩千疑　醫書ニ藥不眄眩則病不愈▲禪錄ニ這裡回頭千疑一決虛也

△論語精　鄕黨篇ニ食不厭精膾不厭細「解云、白馬文章訓ニ不厭ノ二字ヲ稱シテ、朱註ニ養人害人トハ食物本艸ノ註ニシテ、聖人ノ夜話ニハ實過タラントゾ。誠ヤ此二句ヲ起語トシテ十七句ハ飮食ノ沙汰ナレバ、爰ニ嫌擇ノ文章ナカランヤ。實ニ膳中ノ物好ミナラバ、小人ノ間居ト云ベケレド、不厭ノ詞ニ文章ヲ盡セル、爰ニ論語ノ雅俗ヲ知リ、爰ニ孔子ノ虛實ヲ知ラバ、爰ニ文章ハ先ニシテ、敎誡ハ後ナルヲモ知テ、爰ニ儒佛ノ差別ヲ知ベシ。

△子成　論語ニ棘子成曰君子質而已矣何以文爲子貢曰文猶質也質猶文也

△茶莨菪　「解云　此二品ハ有限物ト云ヘル、論語ニ酒無量不及亂ノ意ニテ、有限モ無量モ例ノ文章ナリ。或ハ徒然艸ノ下戶ナラヌト云ヘルモ此類ナリ。

△温厲變　論語ニ子張曰君子有三變望之儼然卽之也温聽其言也厲▲論語ニ關雎樂而不淫哀而不傷「解

△哀樂頌　云、此一對ハ敎誡ノ常ニ似タレド、爰ヲ十論ノ節ト知ベシ。本ヨリ俳諧ノ遊藝ナル、和同ニ流レ談笑ニ暮テ、例ニ夜遊ノ輕口ト成ナン。子張モ此等ヲ紳ニ書セトゾ。

△烏焉　「解云、烏焉馬ノ三字ハ　相似ノ紛レヲ云ヘリ。然ルニ元祿ノ艸稿ニハ一丁ノ字ヲト本紙ニ在リテ、脇ニ烏焉ト加筆アリ。一丁トハ張弘靖ガ曰挽兩石弓不如識一丁字ト云ト　但シ丁字ハ人ノ知リ易キヲ云ヘリ。如何ナル故トモ知

リ難ケレバ、爰ニハ加筆ノ烏焉ヲ出セルナリ。

△一犬虚　禪語ニ　一犬吠レ虚千犬傳レ實　私云　此喩ハ師道ノ論ナリ。

△三言　論語ニ　邦無レ道　危レ行言孫　註孫順也▲莊子ニ　寓言十九重言十七巵言日出　註寓言者以二己之言一借二他人之名一以言レ之▲涅槃經ニ　皆是方便說也　「解云、古ヨリ三道ノ論者ハ、其經ハ虚ナリ、此經ハ實ナリト、其家ニ虚實ヲ定レドモ、虚實ハ詞ノ先後ノミニテ、何ノ道カ虚實ヲ兼ザラン。差別ハ文章ニ知レトナリ。

△標レ月　圓覺經ニ　修多羅敎如二標レ月指一若復見レ月了知所レ標二畢竟非レ指

△四敎　論語ニ　子以二四敎一文行忠信　註忠信本也「解云、白馬敎誡論ニ此評アリ。此四ハ文忠ノ二ヲ本トシテ、行信ノ二ハ其用ト知ベシ。文ハ行ニ和ラギ、忠ハ信ニ嚴ナル故ナリ。文忠トハ何ンヅ、文武ナリ。文武ハ孔門ノ仁義ナラズヤ。誠ニ論語ハ學而篇ヨリ幾許ノ文字ヲ說タルニ、註者ハ敎誡ヲ先トシテ、文行ノ沙汰ニ及ネバ、釋迦ノ法化モ孔子ノ論語モ勸懲ノ理ハ同ジ談義ト成リテ、道ニ世出世ノ本懐ヲ失ヘリ。然レバ三道ハ一敎ニシテ、虚實ノ詞ニ先後アレバ、三道ノ差別ハ文章ニ知ベキヲ、其家ノ註者ノ錯ヲ傳ヘテ、果ハ儒佛ノ論ト成リヌ。獅子身中ノ虫トハ此喩ナリ。

△理卽　止觀ニ　「理卽「名字「觀行「相似「分身「究竟　「解云、此名ヲ天台ノ六卽ト云テ修行地ノ階級タリ。然レバ我家ノ俳諧モ始ニ虚實ノ理ヲ知リテ、次ニ法式ノ名ヲ覺エ、終ニ老後ノ樂ヲ知ベシ。釋ニハ初發心時辨成正覺ト云ヘリ。

△本立道生　論語ニ　君子務レ本本立而道生

△醋吸　此圖ハ孔老釋ノ三聖ナリ。一卽爲レ三三卽爲レ一法味ノ喩ヲ圖セシナリ。

△默識　「解云、此二字ハ諸書ニ在リテ知ト記トノ兩用アリ。論語述而ニハ記也ノ義ヲ用ヒ、默識心通ニハ知也ノ義ヲ用ユ。爰ニハ兩用ト見ベシ。

△春秋　胡氏傳ニ　孔子曰知レ我者其惟春秋乎罪レ我者其惟春秋乎▲五灯會元ニ　達摩曰吾有二楞伽經四卷一亦以付レ汝云々「東坡楞伽序ニ　達摩謂二二祖一曰吾觀二震旦所有經敎一惟楞伽四卷可ニ少印レ心　「解云、此一對ヲ指シテ評者ノ口訣ト成セル、爰ニ俳諧ノ眼ヲ認ヨトナリ。誠ニ知我ノ二字ヲ解セバ唯佛與佛ノ權實ニシテ、談笑モ風諭モ此一語ニ知ベキ事ナリ。

楞伽

△始學終言　「解云、論語ハ始ニ學而ノ詞アリテ、中ニハ詩書禮樂ノ文ト質トヲ論ジ、終ハ今日ノ言語ヲ知レト云ヘル、此三ハ世法ノ實學ト云ベシ。

△四百八十章　五百四十函　「解云、此等ノ文法ハ全篇ニ數多ナレド、爰ニハ長短ノ文ヲ調ヘズ。本ヨリ句對・字對ニモ非ズ、文對ノ法トモ亦別ナリ。是ヲ意對ノ格ト知ベシ。

△阿難　有若　大論ニ、竹林精舍ノ西南畢鉢羅窟ニテ結集ス。阿難ハ迦葉ノ命ヲ承ケテ鑰隙ヨリ入テ說法セシニ、大衆ニ三疑アリ。此故ニ如是我聞ノ發語ヲ置ケリトゾ▲論語朱序　程子曰論語之書成二有子曾子之門人一故其書獨二子以レ子稱　「解云、此一對ハ門人ノ說ヲ云ヘリ。釋迦・孔子ハ其道ノ德ヲ愼ミ、阿難・曾參ハ其道ノ化ヲ擴テ始テ儒佛ノ法ヲ定ム。然レバ其道ハ文章ニ差別シテ門人ノ才覺ニ依ベキ

ヲヤ。爰ヲ一字錄ノ儒佛篇ノニモ、佛家ハ達摩ヲ爭子トシテ愛シテ、戒律ヲ破ズンバ虛實自在ニシテ道廣ク、儒門ハ莊周ヲ諫臣トセズ、憎ミテ仁義ヲ戾セネバ虛實ハ自在ニシテ道狹シ。去ルハ敵ト成リ、味方ト成ル、軍法ノ家ノ大事ナリ。漢ノ韓信ニ我儘ヲ云ハセテ智勇ヲ用タル寬仁ヲ知ベシ。孔子ハ四百州ノ聖人ニシテ四絕ノ大道ニ自在ナレバ、異端ヲ攻ルハ害ナリト宣給ヘル。論語ヲ讀人ノ爰ヲ讀ズヤト、論語ノ註者ノ世々ニ誤タル事ヲ云ヘリ。誠ヤ門人ノ結集ヨリ後世ノ註者ニ至リテ其師ノ言語ノ裏ヲ悟ラズ、其書ノ文字ノ表ヲ習ヒテ已ガ道ヲ按排スル故ニ、多クハ贔負倒ノ諺ナリ。此評ハ十論ノ祕訣ニシテ爰ニ評者ヲ拷問スベシ。

△魯頌詩　論語ニ詩三百一言以テ之蔽レ之曰思無レ邪 註ニ魯頌ノ辭也

△浮橋詞　▲八代集トハ古今ヨリ詞花・千載等ノ和歌ヲ云ヘリ。或ハ浮橋ノ詞トハ女神・男神ノ穴嬉ノ詞ナリ。「解云、此一對ハ諸書ヲ錯綜シテ、「詩ニハ孔子ノ詞ヲ合セ、哥ニハ貫之ガ序ヲ假リテ和漢ノ風雅ヲ結シタル、是ヲ文對ノ法ト知ベシ。

△木鐸　論語ニ天將ニ以テ夫子ヲ爲ントス木鐸ト▲夏書ニ遒人以テ木鐸ヲ徇ニ于路ニ 註ニ遒人宣レ令之官也「解云、元祿本ノ艸稿ニハ木鐸ニ傍訓アリ。夫子不ニ久失ヲ位トノ說ハ、例ニ自己ノ按排ナリ。孔子ヲ令官ノ下品ニ喩ヘタル一章ノ意地コソ風雅ナレト云ヘリ。此等ハ文章ノ虛實ナルヤ、論語ノ諸註ヲ見合スベシ。

△龍樹　「解云、天竺ニ馬鳴・龍樹ト云ヒ、無着・天親ト云ヘル四菩薩ハ、何レモ佛經ノ大論師ナリ。然ルヲ評者ノ論者ヲ指シテ俳諧ノ令官ニハ喩フベケレド、龍樹ハ例ノ過當ナルニ、今ハ菩薩號ヲ取置テト云ヘル、爰ニ滑稽ノ辨利ヲ知ル。誠爰ニ俳諧ノ談笑ヲ知ラバ、過當ハ例ノ虛實ニ聞捨ベシ。二十論ノ惣評ニ至リテ儒經ニ木鐸ノ虛ヲ扱イ、佛書ニ龍樹ノ實ヲ顯ス。爰ヲ儒佛ノ證文ニシテ一部ノ結語トハ云ベキナリ。

篇（へん）突（つき）

李由
許六 撰

序

連哥世にさかむ成し時、琶琵湖の濱に何がしと云作者有。夢物語は夜分に非といへば、又傍の人夜分也と爭ふゆえ、花の本へ訴へける時、宗匠夜分ト極めり。夜分に非といふ人の云、宗匠の眼なき時は碁打べし。假令夜分に極めり共、おして勝てるがよしとて連哥をやめて、一生を碁に総る人有。今の誹諧宗匠を見るに、おのが家職におこたり、家貧なれば誹諧に德有とて、頻ニ點者となれり。此類の宗匠達、夢物語を極めたり共、よしあしの沙汰には及ばじ。ゑびす・大黑は福の神なれば、表にくるしからずと云人有。たとへば極樂と云所は、樂の極れる國也、地には金玉を敷、百味に朝夕の舌を味ふ。黄金の肌と成て、長生不老の地とおしゆ。しからば釋敎の中にも、極樂斗はくるしかるまじくや。世に誹諧をこのむ人、此福の神を師とし學びつとむ。やがて習へる人も、程なく又福の神とぞなれりける。次第ニ誹諧の道もおとろへ、風雅も日〳〵に取失ひて、五句付の褒美とて、太鼓食繼の沙汰に及ぶも、福の神の風雅にはむべならんか。今の人の發句するを見るに、あたらしきと、今めかしき物との界をしらず、いにしへより有來て見殘し、取殘したるを社、あたらしき物とは云べけれ。惣じて誹諧は、文字數少き中に、言外の意味をふくむを本意とすれば、藪氏が沅湘日夜の詩も、當流はいかいならば、愁人の爲にとゞまらずとはことはるまじ。猶、うら白・三つ物等の句數少きはいかい、世にしろ人多からず。たとへば土佐駒と云馬あり、これを乘る人、大馬のごとくあてがふ時は必曲馬となれり。大人の良藥も小兒には、其効ゆるくして屆かざるがごとし。茲ニ李・許の兩吟士、此事を愁て共あらましを記ス。予ニ序を乞フ、予醉中に筆を執て、誹諧入門の爲に書ク之。

于時元祿戊寅秋九月近陽城武林

松氏汶郁字師姜於埜蓼参叙

印　印

へんつき

四喿盧李由
五老井許六　撰

歳旦三ッ物　元祿十丁丑屯日試筆

扨の字に韻なきもよし國の春　李由
子から繰出す正月の時　朱徊
ゆり若の踉の跡も雪きえて　許六

貳

きそ始裏を探らす大夫殿　程己
俵かさねて中戻りする　徐寅
芋種も角ぐむ比の朧月　木導

三

むつまじや雜煮の上の寄合田　毛紈
無筆なければ世は長閑なり　錢芷
雨ひとつ花一本を訴へて　汶邨

又、いづれの春にやおぼへず。

蓬萊にきかばや伊勢の初便　翁
年たつや家中の禮は星月夜　其角

空の名殘おしまむと、舊友の來りて酒興じけるに、元日の晝まで伏て、曙見はづして

二日にもぬかりはせじな花の春　翁

湖頭の無名庵に春をむかふ時
三日閉口　題四日

大津繪の筆のはじめは何佛　同

當時、歳旦格式しれる人稀也。次第に師說もうとく成行社、いと口惜しけれ。只、初春の季を入るまでにて、曾て歳旦ニならぬ句のみ多し。歳旦の字意をよく工夫し侍らば、仕損じは有まじ。歳旦の句二ッ三ッしるし出すやからも有、又、歳旦帳に、子の日・二日・三日など題して出す人もあり。師說、如何き〻置侍るや覺束なし。遠國の歳旦などまぜて出すも、遠慮あり度事か。大津ゑ等の前書、後代歳旦の格式、是にて分明也。季の詞をむすぶなども、よく時代の考あるべし。元日やと云、打ひらめたる詞などは、四五年も過去たるべし。歳旦道具等用いやう猶以、新古の差別あるべし。

餘興

花鳥に隙ぬすまばや春もたち　杉風

面ッ〳〵の蜂を拂ふや花の春　嵐雪
生れ子も起るさいなや花の春　岱水
すたりたる椿咲けり御代の春　尙白
遣羽子や吾子女に交る年女房　木導
野炭たく安房や上總の庭竈　汶村

歳旦 無季の格

明る夜もほのかに嬉しよめが君　其角
君が代にあふや狩野家の福祿壽　許六

鼠をよめと稱して、ほのかに嬉しといへるは、元朝の曙ならではあるまじ。狩野家の布袋・福祿壽も、常は見あきたる風情もあれ共、初春のあしたには、いとめでたきもてあそびならん。此界に入て、無季の味を察しるべし。

脇・第三の格式、是も春季の詞をむすび、やう〳〵前句につけるまでを本意とし、尋常百韻・誹諧の口三句引出したる類にて、歳旦三ッ物の手柄なし。たとへば小車のきびしく廻るが如し。只三句に百韻・千句のはたらきある事をしらず。第三やゝもすれば、初春の詞などむすび出すやからは、筆頭に評せるも、共に愚成類とやいはむ。世上にいひ出す過去の誹諧數万言、大率歳旦の曲輪をはなれず。漸いひ古したる事は、十ニ三四はなし。殘る六ッ七ッは、世眼に遮らず、かゝる人歳旦三ッ物にくるしみ、はやく十月比より胸中に横はり、起居見聞の上に春季をむすび、これやあれやと心頭を勞せり。此格式しれる人は、明德明らかなる故に、常〳〵道具澤山に富めり。

歳暮の格

月雪とのさばりけらし年の暮　翁

年の暮と云は、一とせの暮行上にかゝり、大とし・除夜は只、一晝夜の上にて大切成日也。よく工夫すべし。

餘興

年もはや牛の尾程のたよりかな　去來
ぬり物にほこりもすごき年の暮　エド 野坡
六尺も駕物なしに歳暮哉　ナゴヤ 鼠彈
目を突に出たか師走の棒かつぎ　同 東推
はな馬は市の日の出や年木賣　大ガキ 文鳥
餅きゝに出たか師走の風羅人　イセ 反朱
柴うりの出てがさつくや年の市　同 賀枝

世の中は胸から上の師走哉　如行

仲秋前後井月の辨

名月に麓の霧か田の曇　翁

三井寺の門扣かばやけふの月　同

雲おり／＼人を休める月見哉　同

名の字を容易に置ける事は、元來未練の至り也。古人名の一字に、腸を斷てる事はたやすからず、名月・けふの月・月見・此かはりいさゝか有べし。名ノ字に近代明ノ字書く人あり、覺束なし。

待宵や明日は二見へ道者われ　其角

仙人は日本にもありけふの月　李由

旣望は世間小豆の月見哉　汶村

名月や升のむかいの淡路島　許六

小男鹿や角にいたゞく三日の月　胡布

待宵は理屈に落、旣望は良夜に動安し。春の月は朧を魂とすべし。夏は井輪に腰打かけて見たる社、誹諧の情なれ。秋の月、天高くさし出たるに、俄ニ一曇のかゝりて、大粒成雨のはらつく程もなく、やがてはれちぎりて、猶、宵よりは一きは淸く更行まゝに、雁の聲に虫の音の和してしらべけるは、又似るべくもなくあはれ也。冬の月は冴るを本意と見るべし。魚舟に鎖さしかため、扉をしてたるに、醫者の小挑灯の飛がごとくに、見えかくれたるは、大寒に入夜の月のすさまじく、といへる風情ならん。雪いとよく晴れて、月さし出たるは、興に乘じて來り興盡て歸と云、其夜の心地ぞする。

花　櫻の辨

喰物をしいるも花のみやこかな　李由

東山双林寺に詣でゝ、西行・頓阿の古墳を拜ス。

これ斗うその交らぬ櫻かな　許六

花といへるは賞翫の惣名、櫻は只一色の上也。初櫻・遲櫻・山櫻等の名字持、あるひはうとく、あるひはしたし。此さかひに入ては、有といひて又無と答へたるがよし。

餘興

蔦の輪につれて寄らばや山ざくら　丈艸

さくら花ちるやはぜ賣小落雁　汶村

題上野櫻

大名の駕籠に散込む櫻哉　毛紈

伊賀の新芭蕉庵にて、松尾氏老兄、短ざく所望のころ申侍る。

西行の蟲戻もたえてちる櫻　李由

苗代の水にちり浮くさくら哉　許六

花のさく木はいそがしき二月哉　支考

鶯　杜鵑の辨

うぐひすの身をさかさまに初音哉　其角

鶯と云句は、よのつねに成がたき題也。晋子が身をさかさまと見出したる眼社(こそ)、天晴、近年鶯の秀逸とやいはむ。亡師の餅に糞すると、こなしたまへる後、これ程に新(あたらしき)は見えず。此句よりよき句は、如何程もあるべし。新敷所なくては誹諧と云べからず。師ノ云、時鳥はいひあてる事もあるべし、うぐひすは中〱成がたかるべしといへり。尤、冠道具にて、ほど拍手よく揃はねば、萬と〻のひがたき故なるべし。

一こゑの江に横たふやほとゝぎす　翁

時鳥聲横たふや水の上　同

右兩句、甲乙自己にも分がたくや、沾德が判にて水の上に極ると云事を廣めり。此事子細あるべし。慥ニ江に横たふの方勝れり。李由・許六が方へも、其おり此事申贈られたり。其返答にも一聲の方、すぐれりとは申遣し侍る。案ずるに後代、沾德が判にて極たると云事を、殘し給ふ故成べし。門人に對して句を定めたまふ事、いくばくかあらむ、終に其判者の沙汰なし。勿論其極まらぬ句を、廣め給へる事もなし。古兩句共に並べ給へるは、自己にも一聲の方勝れりと、おもへる成べし。此兩句、察し見るに江に横たふの方、先へ出たるべし。一聲の江に横たふやと云までは、なびらかにきこえて口にさはらず、下のほとゝぎすと云所、舌頭にあたり、はねかへりたるやう也。故に下五もじを引上て、ほとゝぎす江に横たふやとは作り見たまふべし。是にては五もじ・七もじの間に、聲の字不足しける故に、江の字を聲とは直りたるべし。下の水の上は、いろえむすびにて連續也、水の上の方は、かくれたる所もなく、しかも水の上と、うつくしく色えたるに寄

て、俗誹の耳にはよろこぶ所也。水の上といひつめたる所を、自己にもおとれりとはおもひながら、病のなき方を取得として、水の上には極め給ふ成べし。されば爰に至て、沾德と云名を出し給へるに見所あり。古哥に、

日も暮ぬ人もかへりぬ山里は
峯の嵐の音斗して　基俊朝臣

日くるればあふ人もなし正木ちる
峯のあらしの音斗して　俊頼朝臣

此兩首いくばくの相違なし。時の人俊頼の哥勝れりといへ共、定家卿の判に、俊頼の歌は正木ちると云處いろえにて、俗のこのむ所、是新古今時代の費也とて、基俊の哥すぐれたるには極まれり。兩句の上を見るに、水の上と云詞、正木ちると云にかよひ侍れば、江に横たふの方慥に勝れり。惣別、ほとゝぎす・かきつばたなど云、てにはなしの五もじを下に置とき、上十二字の間、てにはよく廻らざれば、下にて舌頭に當りぎよつとする物なり。

野を横に馬引むけよほとゝぎす　翁
木がくれて茶つみもきくや時鳥　同

右兩句、十二字の間てにはよく廻れば、連續して幽玄也。

餘興

芍藥は遲し牡丹にほとゝぎす　支考
蕎麥切のわかれも悲し杜宇　許六
浮雲や納り兼てほとゝぎす　朱廸
飛込だまゝか都の時鳥　丈艸
うぐひすのふまへごゝろや梅柳　汶村

二季の雪

せめ寄て雪のつもるや小のゝ峯　去來
春雪や近江かぶらの見えぬ程　李由

連哥に雪のしたゝり・雪の流るゝ、共に冬也。雪氣(解)の水は春也といへり。俳諧は皆かやうの類、春に用ひ來れり。初雪・春雪のさかひ、まぎれ安し。水仙の葉のたはむ程と云は、例の季と季の取合にてこそ、春雪にはうごきがたけれ。惣じて初霜・初雪等の初の字、大事の一字也。臆を厚(あつく)、案じて容易にをく事なかれ。

餘興

初雪や今朝下られし山法師　許六

初雪や出頭人の供の者　老人 如元
三日月の眉ほそめたり峯の雪　ナゴヤ 露川
白雪もふるや冬梅冬椿　大サカ 諷竹
有明さ氣のつく雪の明さ哉　越中 浪化

梅が香　菊の香のさた

梅が香にのつと日の出る山路哉　翁
菊の香や庭にきれたる沓の底　同

梅が香の旭は、陽に向て仁德を發し、沓の底の菊の香は、陰をやしなつて德をかくせり。人〻香の字になづみて、明德を失ふ。よくつゝしむべし。

餘興

篝火を見る窓のあかりや梅の花　大ガキ 荊口
春風や餅のわれめの梅の花　錢芷
節季候の手拍子にさけ梅の花　京 風國
梅が香や客の鼻には淺黄わん　許六
梅が香や菊でつめたる長枕　木導
松茸に柚の香にさめり菊の酒　李由
我形は山路の菊の寒さ哉　支考

朝霜やうなづく菊のうらおもて　毛紈
山科や五荷三束に菊の花　許六

片田何某が亭にて

蝶も來て酢を吸ふ菊のすあへ哉　翁

四季の雨

春雨・五月雨のさかひ、夕だち・時雨の勢ひ、大方似安し、霧雨・急雨の風情混亂せり。村雨は無季にして、しかも其季をむすぶに習ひ格式あり、しらずばあるべからず。

月花の目を休めばや春の雨　支考
頭をさげて馬も歩むや五月雨　荊口
夕立に動ぜぬ牛のまなこ哉　木導
村雨や朝露ながら夏大根　李由
霧雨にぬれて芭蕉の雫哉　汶邨
あたらしき紙子にかゝるしぐれかな　許六
淋しさの底ぬけてふるみぞれかな　丈艸

四季の風

灸の墨の干兼るに肌を着兼ね、引殘したる赤莱の中に吹

こそ、餘寒を殘したる春風とは云べけれ。時鳥の來べき比、若葉の梢に何となふぞはめきたるは、あはれなるに、民の門邊の麥ほこりには、遠近の旅人に笠を傾させり。芋の葉のぶりつき、葛の葉の早合點なる、風の色に所ゝ刀尺を催し、田丸の城にはきぬた急也。はや風の柞原に渡り初てより、障子の穴に菊の花をきりつけ、火燵たゝみの一疊斗、おもてがえの思案顏に成て、風の音に驚きたるは、たれも〳〵よくしりながら、誹諧の上に及ぶ時は、人欲の私にひかれて、曾て動かざるはいとロおし。

海棠　梨花

海棠や初瀨の千部の眞ッ盛　李由

忍ばする姿に似たり梨の花　許六

海棠は梨・櫻のさかひに咲ヶり。さくらは笑がごとく、海棠はたしなみて笑はず、梨花は泣たる顏にて笑に似たり。萬物おもひに打沈みて、人の下に立てるがごとし。

梨のはなさくやむかしの小のゝ宿　汶邨

雲雀　雉子　水鷄　千鳥

春秋の雁

雲雀ときけば、天眼に成て空に心を寄(よせ)、千鳥といへば月の横に通ふ。水鷄の題を見れば、みじか夜の明やすき心地に成こそ、自然の人心なれ。秋の雁の啄(ついばむ)を、田ぬしにかくし、歸雁の旅支度に身を細うするなど、禽獸の上にあはれ成事のみ多し。立さはぐ今や紀の雁伊勢の雁　といへるは定まれる歸雁の詞はなけれ共、紀の雁伊勢の雁とはしらせたる上に、立さはぐと云五もじにて曾て動かず。いにしへより雁に片田(堅)をよめるは、越路・近江路の山をこえて、是非にやすらふ所也とは、獵する人の語り侍る。古人黑き眼に見あやまる事は有まじ。なれ共、あるひは川筋かはりて道を付かへ、其國の土産に跡たえて、なきものいくばくあり。

餘興

しのゝめをこらへ乘たる雲雀かな　イセ女 市

葬の火をたよりに寄るや濱千鳥　李由

おのが音の尼や水雞の磯のやみ　丈艸

山郭や卯月曇の雉子の聲　錢芷

初雁に驚き顔や蕃椒　朱廸

蛙鹿

角大師井手の蛙の干ほし哉　許六

題を探て朝鹿と云事を得たり。

朝鹿の身振ひ高し堂の椽　許六

能因法師が長柄の鉋屑も、信用はしがたけれ共、帶刀節信が井手の蛙の干ぼしこそ、かの角大師の御影元はなかりけるや、いと覺束なけれ。總別、蛙の句云古して、新み少なからん。西行上人の、うれし顔にもなく蛙哉　とよみ給ひし此顔こそ、誠にまざ〳〵と見る心地はすれ。鹿と云物も哥の題にて、俳諧のかたち少し。ひいとなく尻聲の悲しさは、哥にも及がたくや侍らん。南都の鹿は、紅葉踏分る姿は少し。尋常の犬のたぐひなれば、少はより所もあるべし。中〳〵奥山の鹿は、いひ屓せがたき題成べし。

風の鹿と云題にて

風筋を角に請たる小鹿哉　木導

藤　牡丹

島原へ荷なふて這入る牡丹哉　徐寅

五老井四絕之内
題艸字藤

蝮蝎の郼に動くふじの花　許六

牡丹は連誹、夏の季に用ひ來る事は、古人大に染じたる所より出たり。詩哥には春也。執心あらば、よき師を尋てきくべし。藤は四月に盛なれ共、咲初る日を取て春の季とは定めり。

春のくれ　秋の暮の辨

行春を近江の人とおしみける　翁

此道や行人なしに秋のくれ　同

春のくれに對して、秋の暮を暮秋と心得たる作者多し。秋の暮は古來秋の夕間暮と云事にて、中秋の部には入たり。

秋のくれ肥たる男通りけり　傳白奴 與三

此句さして秀たるにはあらね共、誹諧の國をよくしれ

り。惣別哥の國・詩の國・誹諧の國ありて、道具は異なれ共、相當の位はかはらず。浦の苫(とま)やの夕間ぐれ・眞木たつ山の秋の暮と淋しからぬ事を、淋しきとはよめり。是皆哥の國の道具也。又肥たる男と、さびしからぬものに、秋のくれのあはれをむすびて、淋しがらするは、誹諧の國の道具にて、相當の位は少もかはらず。

餘興

行春やさそ出替のなぐれもの　許六

あまたろう春も暮けり干大根　（大ガキ）千川

大き成(なる)くつさめ一ッ秋のくれ　（カタヾ）角上

蓼の穂やひさりこぼるゝ秋の暮　程己

衣がへ　秋あはせ

ひは〲と木目(モクメ)見えすく袷哉　（大ガキ）此筋

相撲取のもみ裏染し秋あはせ　許六

今朝かけわたしたる靑すだれの影に、うすものゝあはせの、ひは〲と涼しく、すだれも、あはせも共ニ木目の見えすく影こそ、砂川の淺く流るゝ水には似たれ。相撲取の秋あはせは、手柄すくなきに似たれ共、例の取合を本意とすれば、衣がへの袷には動がたし。

餘興

西行は娘捨てやころもがへ　支考

小宗中はおりめ高也衣更　汶村

寒　土用

夜咄しの脾胃のつよさよ寒がはり　千川

寒晒土用の中をさかり哉　許六

寒暑のかはりは、各別の沙汰にして、其趣のかよひ侍る事は、寒・土用ひとつ口より出る。たとへば月花の發句には座當をむすぶ、これは見ろ事の案じ殼(から)也。中比、富士の雪を雑の部に入侍れば、維舟(ゐしう)は夏に用ひけるも、雑の趣向より産出(うみいだ)して、月花に座當の出る類ならん。

茶摘　田植

萱ばたけ茶摘の汁にあれにけり　毛紈

産月の腹を抱えて田植かな　許六

茶つみは春季、新茶・古茶共に夏也。茶つみ・田植のさかひ、田家の情動きやすし。田植は上代の姿殘りて、なつ

かしき風俗あり。茶摘は先宇治を出所に取る心ありて、都ちかき女の赤前垂に、京笠着たるとならでは繪にはかゝれず。さればいなか茶つみの情、廣く人の氣にうつらず。しかれ共今やうは、宇治の茶つみの風情も田舍にかはらず。惣じて繪のうつらざる人は、風雅の上に欠たる事多し。古人も詩中の畫・畫中の詩共いへり。又詩は有聲の畫共かけり。許六が芭蕉庵の障子にゑがく時、師、雪中の南天をこのまれたるは、是畫中の詩也と云べし。

餘興

參宮の笠きて出たる田植哉　支考

早乙女の顏の並ぶや水鏡　毛紈

朝顏　晝顏　夕がほのさた

朝がほのうらを見せけり風の秋　許六

晝顏や夏山ぶしの峯づたひ　支考

夕皃の花見の衆や油賣　許六

朝顏の葉がくれに、朝な〳〵の盛も程なく、身にしむ風の立初てより、秋のあはれをつゝめり。晝顏の晝中に目を醒したるは、萬つきなき花とやいはむ。夕顏のひとしづめしづめたる顏つきこそ、如何成思案も出つべけれ。よき所に咲かゝり、よき人に名をとはれ初てより、風雅の中に入て哥、人の腸にはまとひ侍る。此三色の本生、各別の相違あり。作者よく見屆て、新みをつけよ。許六が朝顏の句を、ある人にかたりければ、亡師の葛のおもてに作例たるべしといへり。つく〴〵おもふに、少もくるしからじ。されば師の句は、葛のうらと云古歌を返して、初て

葛の葉のおもて見せけり今朝の霜

とは言はれたり。是おのづから制也。葛のうらと云事、古今、制はなし。朝顏の句は葛のうらに對して、新みをいひたる句也。古人、葛より外にうらといへる事なし。まぢかき鼻の先に、朝顏の有事をしらぬと嘲りたる句ならん。此句韻塞に加入せしか共、此事書む爲出し侍る。惣じて等類のがれの事は、

都をば霞と共に立しかど
秋風ぞ吹しら川の關　能因法師

都をば青葉と共に出しかど
紅葉ちりしく白川の關　　源　頼政

右兩首、心・詞少もかはらずして、等類にあらずとは、定家卿の判也。産み所の各別成事をきゝ分て、しかも作者の手柄也とて、褒美したまふとは師說に聞けり。

もみぢ　卯の花

山ふさぐこなたおもてや初紅葉　　其角
卯の花や葬禮の夜の顏と顏　　李由

紅葉は哥の題にて、近年誹諧の手柄見えず。山ふさぐこなたおもてといひけるは、よく初もみぢを見屈たる句ならんか。一張の紅錦夕陽斜といへる、言外の夕陽有、卯の花に葬禮の夜の人の顏と云べきを、顏と貞とかさねたる詞こそ、一入おぼろ成卯の花とはいふべけれ。

雲の峰　野分

ひら〳〵とあぐる扇や雲の峰　　翁
猪も共に吹かるゝ野分哉　　同

扇のひら〳〵とするは、本間が舞臺にての作、時に取ての妙言也。惣じて雲の峯、むづかしき題なり。猪の野分のすさまじさ、臥猪の床は宵の程に吹まくられ、松も檜もくつがへりたる風情、言外にあり。俊成卿、野分の題に、草木の上をむすぶを本意とはいへり。當時傘のふり來るなど云句、まれ〳〵見たり。

寒暑幷涼の辨

照つけるさらしの上や雲の峯　　許六
暖簾の顏にまつはる暑さ哉　　汶邨
節絹の紺の兀たる寒さ哉　　李由
唇に墨つく兒のすゞみ哉　　千那

暑からず寒からぬ物に、むすび合たる社、作者の手柄とは云べけれ。涼みと云句、人〳〵よくいひなぐりて置侍れ共、これは大切成所を本意とする題にて、中〳〵いひ負せ難からん。はつか成所に、手柄をあらはし侍る社、すゞみの情なれとて、兒の凉は師も一夏一句と感じ給へる也。

餘興

鮟鱇の口のぞいたる寒さ哉　　木導

一はけに墨繪の竹の寒さ哉　汶村
かゝえ帶解かで旅寐の寒さ哉　市
有明にふりむきがたき寒さ哉　去來
數つめる備後おもての寒さ哉　徐寅
子持菜の二葉も寒し今朝の霜　胡刀
斑猫のにらみつめたるあつさ哉　毛紈
古藏に日のさす家の暑さ哉　京吾仲
椽まで來て居る秋のあつさ哉　支考

一夏山院にこもりて

牛に成る合點ぞ朝寐夕すゞみ　同
屹(ツイ)立て帆に成袖やすゞみ舟　丈艸

秋草　冬の花

萩・桔梗・女郎花・尾花の類、花の姿は異なれ共、志の趣所大方似たれば、句にのべて萩を桔梗にしらけ直し、薄を荻に曲安し。よくさかひを辨じて例の取合(とりあはせ)肝要ならん。冬の花は類すくなき故に、猶趣似安し。茶の花・山茶花、一種二物也。

餘興　かた田何がし亭にて

秋風や萩のり越えて淚の音　千那
ない袖を振つて見せたる尾花哉　許六
草花や秋しり顏に持ありく　支考
秋風にそよぎたらぬや荻の花　朱廸
霜がれや猶はりかけて唐がらし　徐寅
寒菊や定香盤の火の力　奚魚
暮合に飛脚着けり水仙花　木導

夏秋　生類の辨

蟬は古來より夏・秋にむすび來れり。詩ニ四月秀葽、五月鳴蜩といへるは、一陰下に生ずる時、感じて鳴陰虫也。殘る螢、誹諧にては秋也。連哥には夏とす。殘る菊も秋也。秋待虫も秋也とぞ。誹諧には春待は冬、秋まつは夏になれり。連哥にことしと云は春にあらず、去年は春に用るの類、連誹相違ある事少からず。誹の格式、大率連哥より出たり。しかれ共誹諧は連哥をからず。もと和哥の一躰なれば、穴がち無言・新式をも守るべからず。連哥、制の詞などによはしと定まれるは、師說にも大きに忌めり。いやしといへる類は曾て嫌はず、虫は夏より啼

け共、皆秋に定まれり。陰類なれば秋とす。斯螽・莎鶏・蟋蟀、一物別名にして、皆きり〳〵す也。五月斯螽股を動し、六月莎鶏羽を振といへば、斯螽・莎鶏は夏の名也。蟋蟀、吾床下に入ると云時、暮秋・初冬の名成べし。秋のわたり鳥、常に飛翺(翔)るもあれ共、これも陰を感じて啼也。鵙の聲は、おどろきやすきを本意とすべし。七月鳴鵙に公子の裳をつくるともいへり。

蟬の音や利(スルト)に晴るゝ空の色　木導
蟬の音の晝に迫るや七曲り　(越中)温故
螢火で見れ共長し勢田の橋　李由

五老井の納涼

夕立にはしり下るや竹の蟻　丈艸
ひがいすな身に秋近し蚊とんぼう　此筋
蟷螂の鎌つかいけり露の玉　錢芷
きり〳〵す案山子にかゞむ夜寒哉　程已
鵙啼や八丈島の女子共　許六
輕忽に誰がさはるぞ鵙の聲　市

涅槃忌　灌佛　御命講　十夜
達磨忌　佛名　臘八　夏
御取越　魂祭

涅槃忌の來れば紙子もわかれ哉　李由
灌佛や我罪を泣子取祖母　毛紈
御命講や昆布から鮭に蛸法花　朱廸
東寺茶に十夜の鐘や月の霜　汶邨

何がし寺の住持、いにしへ石榴鼻と云ものにて、面色の赤かりければ、于レ今寺のあだ名となれり。

達摩忌の旭たふとや赤東堂　許六
佛名やとゝろ汁にてすべらかす　(ナゴヤ)左次
悟るほど摸相腹の寒さ哉　程已
籠るべし百日紅のちる日まで　支考
おとり越(こし)炭盜人や通夜(つや)の僧　千那

七月十五日到清見寺

餓鬼の食雲もかゝるな清見でら　許六

祭　星祭　夷講　神樂　吹革祭

乳(ち)出して押さるゝ里の祭哉　徐寅
土佐が繪にあふのく人や星まつり　支考
酒桶に聲のひゞきや夷講　木導
夜神樂の果るや下駄の氷る音　陳曲
澤山に吹革祭のをこし炭　李由

右題號の發句、同季・同法事など隨分まぎれ安し。よく工夫して披露すべき事か。祭と斗は賀茂に歸する、余は皆里祭也。神樂と斗は禁裏の神樂、余は里神樂也。神樂のうたひ物の名も冬也。夜分也。

賀　挨拶　追善　懷舊　記行
移徙　餞別　留別　神祇　釋敎
戀　讃之類　前書ノ格　古事
古實　古哥ヲ取ル格

右ケ樣の題、常式、花鳥風月の案じ所とは各別也。執心あらば、よき師にあふてきくべし。追善など一筋に心得がたし。貴人・僧俗・親子・兄弟・師友藝の名人等の相違、いかほどもあるべし。余はこれに準じてしるべし。當時の前書を見るに、其句の講尺也、前書と云は其句の光を添る事也。一年、江戸にて晋子が句兄弟あめる時、許六ニ語て云、越人が、けしの句は慥ニいひたらず、此けしを返して、兄弟を付たりとて、

ちる時の心やすさよけしの花　越人
散時は風も頼まずけしの花　其角

とせしと云時、許六が云、此越人がけしにて、師の名人をしるといへば、晋子が云如何。答て云、吾子がいへるがごく、此けし云たらず。故に僧にわかるゝと云前書を付て餞別の句とし、猿みのには入給ふ也といへば、晋子うれしがりて句兄弟には書入たり。越人がけしの句は前書ニして慥ニ光をましたり。是後代、前書の格式たるべし。古事・古歌のとりやうの事、むかし・中ごろ・當世のかはりあるべし。むかしの古事を用ひたるは、直にして作意なし、中比は無理を云て大にはたらき、大きに笑へり。今やうは古事・古哥を其まゝたて置、少もからず、已が作意をならべて盡す。此さかひをしらぬ人は、多中古の作

意ニ落る、よく工夫すべし。

名将の橋のそり見る扇かな

と云句せし人あり。此句、其名將の作にして、句主の手柄は少もなし。讃類、其物によりて、作意のはたらき如何程もあるべし。外の事をいひても其讃に成事あり。源氏、雲井をかけれ時の間もみむ、と云書に、讃このむ人あり。辭すれ共免さゞれば、引のけて白丁のかしらに、

傘持も月におくるゝ姿哉　其角

寒山自畫自讃　在許六家藏

庭はきて雪をわするゝはゝきかな　翁

發句調錬の辨

世上、發句案ずるに、皆題號の中より案ずる、是なき物也。余所より求來らば無盡藏ならん。たとへば題を箱に入置、其箱の蓋に上て、乾坤を廣く尋る物也。題號の中を尋て、新敷事なきと云は、たま／＼万が一殘りたるものあり共、隣家の人、同日に同題を案ずる時、同じ題の曲輪なれば、殘りたるものニひしと尋あてべし。道筋かはらざればうたがひなし。まして遠國・遠里において、いくばくか仕置侍らん。曲輪を飛出て案じたらんには、親は子の案じ所と違ひ、子は親の作意と各別成物也。師ノ云、發句はとり合物也。二ツとり合て、よくとりはやすを上手と云也といへり。有難おしへ成べし。たとへば日月の光に、水晶を以て影をうつす時は、天火・天水を得たるが如し。發句せんとおもふ共、案じざる時は出べからず。日月斗を案じたり共、天火・天水を得る事有まじ。外より水晶を求めて、よくとりはやすゆへに、水火を得たるがごとし。水晶ありとも、とりはやす事をしらでは、發句成就しがたし。

又云、題の噂と覺えたるがよし。たとへば花の句せんニ、花と斗は文字十七の數なし。されば風に花の散といふ事、一どはおかし。二度は面白からず。入相の鐘にちる共いひかへ、風の吹ぬにちるなど、随分噂を盡したれば、上手はよき噂を尋出し、下手は下手にて噂わろし。

又云、物ずき共云べし、上手は物ずきよく、下手は物ずき悪し。てにをは・切字・をさへ字等は上手・下手共に一字も免さず。又、誹諧はなきとおもへばなき物也。あるべけ

れ共、尋あてざるとおもひて、案じ侍れば澤山にて盡ず。

又云、未來の句をするといへば、未練のものは斗方もなき樣におぼえ侍れ共、眼前にしれたり。たとへば花の句所望せし時、一句案じて當前に出す。又、一句のぞむ時、最前の案じ所をかえて、奥を尋ねて一句とり出すべし。又所望する時、ひたもの奥を尋て出さん。是未來の句、眼前に知れたり。世上の人、奥を尋ぬる事をしらざる故に、未來の句曾て見えず。上手のすり上て、案じたる骨折をしらざる事無念也。されば上手の句は、今日とらずといへ共、四五年も過侍れば、世に用ひらるゝ事、是奥を尋て案じたる故也。世間の人も、日月の上りかはるにしたがひ、我しらずに少は流行する故に、前々とらざる句共、面白く成もの也。上手は又其時、五年も十年もさきへ流行して、終に下手の居る所に遊ばず。故に一生追つく事かたかるべし。

又云、上手に成る道筋樣にあり。師によらず、弟子に寄らず、流によらず、器によらず、畢竟句數多吐出したるものゝ、昨日の我に飽ける人こそ、上手にはなれり。

師ノ云、誹諧は文臺上にある中とおもふべし。文臺をおろすと、ふる反古と心得べしといへり。たふとき一言成べし。世間の誹諧は位をしらず。一どおかしき事は、いつ迄も其うまみにくひつき、味のなき所に、風流ある事をしらず。味のなき事がよきとて、頭より無味成は、何の用にたゝず。あくまで味の有中より、うまみをぬき捨たる事を云也。

連誹のさかひをしらぬ人多し。たとへば五月雨(サツキアメ)は誹言也。五月の雨といへば連哥也。此一色にて余は準じてしるべし。いやしき言葉を誹諧と覺えたるは、大き成誤說也。の文字一字入て連哥に成事をしるべし。誹諧は自由躰成る故に、貴賤・親疎・都鄙・遠近・一事として殘す物もなく、いはずと云事なし。

屛風　數珠　几帳は連哥に用ひ來る也。誹諧につかふ時は誹言也。子細尋てきくべし。

誹諧は俗語・平話をのべ侍れば、誰も〱よくいひ習ひたるに似侍れ共、しる人の耳にはいと淺間しき事のみ多し。第一てにはの事をしらぬ故に、一句の首尾調のはぬ

句のみ也。それ、てにをはは五音のひゞきにて、めに見えぬ鬼をなかしめ、ものゝふの心をやはらげ侍るはてには也。唐土聖人の代の樂に少も違はず。國を治るの第一也。樂は五音相續の調子を以て打ならし侍る。唱哥は詩也、詩は風雅也。春はうら〳〵と霞める中に、鶯の初音を催し、東風立初るより、梅の匂ひを送る事をのべて、民の心をやはらげ侍る。我朝の樂も又同じ。唱哥は皆哥也。やまと哥はてにをは也。てにはゝ五音のひゞき也。芭蕉をはせをと訓じたるは、ウトチト通ずるひゞき也。てにはのよき句は、おのづから五音の調子よくひゞき、あしきは調子とゝのひ侍らぬゆへに、民の感應する事なし。されば絲竹・管絃の吹皷ならでも、此てにはの五音にて打はやし侍るゆへに、めに見えぬ神鬼を泣しめ、武士の心をやはらげ侍る事うたがひなし。大事のてにはを、あだにをける事は未練の至り也。てにはにて打ならすと云は、

　うき吾を淋しがらせよかんこ鳥　翁

此句淋しがらするかんこ鳥とあらば、何を以てか人の心のやはらぐ事あらむ。これ常なれば也。淋しがらせよと、てにはを以て打ならし侍る故に、五音相續してきく人感應す。中〳〵樂器の吹皷をやとひ侍るには及ばず。一句〳〵に樂はおのづから調ひ侍る。今めかしきに似たれ共、大和は哥建立の國なれば、風聲・水音・一晝・一夜の呼吸の數皆哥也、三十一もじの數と云にはあらず。万物の上に訓を付て箸・橋・端の三ツをよくいひ分侍るは、アイウエオの五ツのひゞきより出て、一切此ひゞきにもるゝ事なし。たとへば今のてには違の句は、餓たる時我は餓たり、飯を喰まじきといへるがごとし。いづれの集にか作者おぼえず、

　とられずば名もなかるらん紅葉鮒

と云ふ句あり。名もなかるべしと云べきを、なかるらんとはねたるは、飯を喰まじきといへるに似たり。此類の句、いくばくあり。かやうのてにはを、吾黨は説經てにはと云。上下万民おしなべて、かんぜんもの社なかりけれと、はねたるに少も違はず。

誹諧に不易・流行と云事あり、此二躰の外はなし。近年不

易・流行ニ自縛して、眞ゝの誹諧血脈の筋を取失ふ。あるひは不易がよし、又は流行すぐれたりなど云やからもあれ共、曾て甲乙はなし。血脈相續して出生すれば、不易・流行の形はおのづから備はり、男と成、女となる如く、口より出ると等し。千里をはしる物也。あながちに不易・流行を貴とする物にはあらず。万葉・古今より相續したる血脈あり。師、此血脈を發明して世上に廣め給ふ。後世の學者、よく此血脈を見屆て、芭蕉流血脈の門人と成べし。生前の門弟にあらずといふ共、百年の後、此筋を見屆たる人こそ、眞ゝの門弟とは云べけれ。かならず在世の門人をうらやむ事なかれ。蕉門の輩、多は蕉翁を崇敬して、蕉翁の誹諧のたふとき事を崇敬せず。是誹諧に執心少き故にして、蕉翁の誹諧のたふときを元來しらざる故也。世に蕉翁より勝れたる名人あり共曾てしるまじ。あがほとけと賴たる師あり共、自己の眼明らかならば、其名人を見屆、忽のりかえて師とすべき事也。風雅も次第にうと〳〵しく成て、よき人は名をかくし、あるひは死うせて其跡もなし。亡師ひそかに未來記の一言あり。吾滅後、門葉の友がら集作る事は、さだめて初心の手にわたるべし。見よ〳〵、十年は過べからずといへり。今我〳〵が集作るの罪、未來記、的中の一言いとはづかし。

余興　題しらず　四季不同

薬研ではこかしおろすか後の月　其角

笠きせて見ばや月夜の鷄頭花　支考

五老井題揮月窓

芋な煎る鍋の中まで月夜哉　許六

紙子着てよれば火燵のはしり炭　丈艸

介病も一人前の火燵哉　去來

寐た顔で居ろやおごりの明ろ朝　涙化

憐山家衆生

食にする木の芽も遲し奥山家　李由

春雨の木末ふり繼柳哉　木導

西風に東近江の柳かな　許六

秋風やまだ四五尺の杉の先　汶村

輪藏の廻りごゝろや秋の風　毛紈

寄かゝる碁盤や秋の夕間ぐれ　起中 一村
無縁寺の土も沈むや五月雨　朱徊
五月雨や旅せぬ人の高鼾　徐寅
五月雨やけふもおくるゝ網の濾　溫故
豆腐やの火影たよりや小夜時雨　程已
村しぐれぬれッ乾ッ六地藏　知元
張たてゝ傘ほす晝のしぐれ哉　李由
笋子や持くろめたる家子の宗　胡布
新麥や笋子時の草の庵　許六
やのむれの麥や穗に出て夕日影　丈艸
麥めしのへらぬに夏の夜明哉　許六

五老井四絶の内

小豆の詞書有略ス

誹諧の鼠も多し小豆種　支考
六月や磯にてりつく豆畠　大ガキ 怒風
沈の香や格子もれ來る玉祭　汶村
傾城のつめ共にがしふきのさう　吾仲

伊勢奉納の二句

青海苔も和光の塵のひさつ哉　許六

松櫻川をへだてゝ墨の端　李由
古城の行義崩さぬ櫻哉　起中 十丈
梅が香や鷄寐たる地のくぼみ　大ガキ 斜嶺
石風呂に紅葉を燒く夜寒哉　奚魚

何がし菱川が繪に讃このまれて

石竹やづらりさ並ぶ小傾城　毛紈
山ぶりや山吹沈む水の底　起中 北人
夕立の晴るゝ氣色やれり雲雀　錢芷
芳野雄琴雲雀にさゞく煙哉　丈艸

病よい起て、初て四梅廬に

遊ぶ　途中之吟

苗代のきはや病後の額つき　許六
ぬりたての畦をゆり出る田螺哉　十丈
乞食の法躰したる十夜かな　吾仲

四梅廬之納涼　文章略ス

打水に殘る涼みや梅の中　丈艸

おなじく

淋しさのたらでや黄なる軒の梅　支考

支考子が長サキ行脚を送る　二句

貫之も精進の友よ海松海雲　許六
哥讀まば爰ぞ田植の五器の中　文村

西國行脚の比幡磨路より文通に

關守も寐られぬ須磨の新茶哉　支考
山芋も茂りてくらし宇津の山　許六
出かはりは疱瘡くしまでもあはれ也　李由
凩の寐耳に寒し釣干菜　錢芷
床脇に前髮役の暑かな　島田塚本 如舟
瘦藪に蚊遣いぶせき小村哉　同所近藤 嘯風
極樂は夏の遊びや蓮の中　同所 逸藤
夏斗隱居させたきふさり哉　同所 未染
挑灯に蹴上の泥や駒迎　許六

六番　相撲合

馬を賣きほひに出たるすまひ哉　木導
大腰に懸てなげけり石地藏　許六

二

下帶は見事なれ共京相撲　同
行縢をぬぎて取たる相撲哉　木導

弐

月代にいさみ立けり草相撲　同
見物の鼻血おかしや辻相撲　許六

四

あの人のうそと相撲は親ゆづり　同
なでしこの内股くゞるすまふ哉　木導

五

組合て馬やへ落る相撲かな　同
茶壺わる座敷相撲や従弟どし　許六

六

雨ふりは夜着きて寐たり相撲取　同
稲妻の拍子に勝やすまひとり　木導

追加

四睡廬賦

恙を恐れたる時は、窩に住居し、氷の雨の用心とて、岩宿の所々に殘りたる世もあるに、廂に孫びさしをおろし、下輪にしころを付て、民の竈のにぎはひける祉めでたけれ。堅田の海士の舟に年を重ね、乞食は橋の下に子

產むたぐひ、鶯の巢のやさしく、烏の巢のふつゝか成、皆已〳〵が生得也。ことしの秋、予ひとつの巢をいとなむ。燕の土をはこび、蟻の塔をくみて、四根の梅をたより、頰白の家をかゆる類にはあらで、病鷄が塒に賴む鳳凰の威を振はむよりは、凡鳥の嘲りなからん事をよろこぶ。山鳩が逸物の鷹と吹上たるも心ぐるしく、只一日の閑鷗と覺えて眠る。蝸牛の釜打破らんと、せがまれては又出て、なめくぢりの部とのらめく。あはびの貝の半造作、榮螺のふたの漏らぬ住居ながら、風狂の友の入亂れ、賓主奇居虫の家をわすれて、例の夜鷹の寄合よとはやされて樂のみ。

丁丑秋七月

主人 李買年述 回回

飮食色欲箴

善は常也、惡は變也。惡出て後善あらはる。善惡に迷ふ人は、其物になづむが故也。食の命を養ふ色のあはれを知れる功も、なづむ心よりやがて大病を生ぜり。色は三敎共ニ、にくむ事甚しき故に甚制せられず。和朝哥道のおしへの高き事は、戀を第一とす。色は風雅也。風雅は仁也。惻隱の心あり。大舜の二女に嫁し給へるも、今日おして見る時は是畜生也。かのながれを汲むやからは、これらをもよしとなづめり。元來畜生・兄弟・姉妹と嫁する事をせずば、人倫は姉妹と嫁する事を道とやはいはむ。かのおしへには後なきを不孝の第一とたてゝ、孝を五常の初に置けり。もし周公・孔子、天生精の虛したる人ならば子なけむ。第一の孝道は欠ぬべし。是とても聖人の全きと云べき歟。桀紂の極惡も子あれば是孝子也。子なき君子にはまし侍らんか。

吾朝いづれの御ゝ時よりか、西域の敎を廢めり。此敎は後なきを第一とせり。其ながれをたてるもの世に多し。大路を往人、十が三四は是也。神の道に合して、是を兩部といへり。扶桑・東夷の氣をよくしり、且ッ小國の分量をよきとせり。地のせまく人の過たる國也。かのやからの人〳〵、後なきを不孝とし、鼠の子を產捨侍らば、程なく富士山もこぼち入られ、湖もいよ〳〵鹿飛を切ぬく沙汰に及ばむ。堂塔に金銀を彫め、法事・法席に美を

盡すといふ共、其費は國にとゞまりて、他の所へはもれず。多の眷屬の食ひつぶし侍らんよりはいとめでたし。

佛供といへる物は、備へたる斗にて曾て減らず、是、日の本建立の源ならんか。一人の罪ゝ人と成給ひし御心こそありがたけれ。しかはあれ共、此比は僧のかくし子といへるものあれば、少は戻るか。

溫飩は汁をほめられ、蕎麥切はからみに威をとられり。

奈良茶は跡一盃を、茶につけられても其號を持てり。飯食・器物、共にすぐれたる極品の物は、賓客のもてなしとせるに、だんご斗は亭主を奔走せり。客人たばこはへらぬを、調法とせるは何ぞや。

餅は心地よき物　酒はうれしき物　茶は淋しき物。

餅くひは酒をのまず、酒ずきは饅頭をくはず。是、天の自然か。たま〳〵上戸に嫌なき生(うまれ)つきあるは、牙あるものゝ角をいたゞきたる類とやいはむ。

傾城の色は、晋氏が見届ていひふるしたれ共、遊君の情は下品に社、おかしき事はあれとて、木導は出女の上を盡せり。よき遊女のきぬ〴〵のうつり香は、こぬか袋の匂ひかともおもはる。安傾城の匂ひは、郡内島のうつり香ならん、追込・辻君のたぐひは匂ひ曾て定まらず。

隱居の妾程、うらやましからぬものはあらじ。定まれる名をさへいはず、若きをも祖母〳〵と呼れつる社うたてけれ。色欲におぼれて、あくまで淫するものは、男女上下の違ひありて、高家・富貴の人の妻は、七人半ゝのあてがいといへるも、男子の德とおぼえり。たとひ七人が十人といはれたり共、いやとはいふまじきに、半ゝとかぎりたる、はしたの妻こそ覺束なけれ。

雪駄の男鼻紙の知音とさだめて、いくたりの妻を重ね侍るは、下女や、はしたの上のおごり也けり。筑摩の祭の跡たえて、おこなはれざるは、かれらが爲には大き成仕合ならん。かゝる淫欒の世と成行も、神道のおとろへたるとがめと云べし。

鮟鱇・河豕魚と云魚あり。形も大きに生れつきて、あくまで肉を食はれながら、汁を吸はるゝを、手柄にいはれけるこそ大き成損なれ。

鯛は魚の最上とほめられながら、鼻くそにて釣られける

ためしもありや。いと口おし。

鰯と云ものは、魚類の下品にいひなされて、いやしきものゝ添物と成るのみならず、田畠の肥しと成こそ、猶口おしけれ。然共、正月のことぶきに引出されて、上郎のまじはりをするを自慢顔也。され共かしら斗をはやされ獄門の如ニ成て、口〳〵にさゝれ、果は箒の先にかりゝて、行方しらず成行けるも、猶〳〵口おし。

かながしらと云魚は、あたまがちにてくふべき所少し。かのかしらのかたき所に手柄ありて、産屋のことぶきには、かしづかれて出る。惟然坊がつぶりのやはらか成は、かれにも似よかし。

魚鳥の匂ひをもてなさるゝ類は、むしり喰れながらも、本意とやはおもふらん。

鶴は芹の香の俤を残し、雉子はむかしなつかしき匂ひをとゞめり。痩て小兵とはいへ共、雲雀のいきりもの水無月の鶴雁とほこりける。

生海鼠と云ものゝ匂ひは、たとふべき物なし。牛房の香に通ひておかし。松茸のふん〳〵たる物に、毎度柵の相

客に出らるゝ類。

焼蛤の馨しきには、胡椒の粉の鼻に入たるが嬉し。かばやきの匂ひ、風流にはあらね共、うまき匂ひとやいはむ。ある法師の茄子の鴫やきをほめられければ、傍の俗人、鴫のなすびやきも、又よしと返しける。

時を感ずるといへるは、かけ菜に打大豆汁の春めきたるもあるに、つまみ菜に蕃椒の青くさきは、初秋のあはれをすゝめり。芹・蕗のとうを、春の景物に撰出は無念也。定家卿、冬の花に梅をよみ給ふ、いとよし。

鰤は節振廻をかぎりとし、鯖は生身魂を終にとれり。

さんちやは四ツ時、出女は八ツを威勢の盛といふべし。

吾翁、色と義の道をしめしたまへる詞ニ云、

色をおもふ事は、うどんを見るがごとく、
義を守るものは、唐がらしの辛に類せよといへり。

山葵　生姜　蓼　からし　山椒の辛類も各其場所を得たり。海鼠腸といへる物には、わさびの打上りたるからみをすり込み、昆布に巻込るゝ時は山椒の手柄を見せたり。鯉の子づけの清汁に、飯鮨のおぼつかなき味をもてる。

色はおもひのまゝならぬを、命とはよめり。あはぬをかこち、逢夜の鶏をうらみ、待宵の鐘に戀の情を盡せり。湯殿・柴ア(部)やのせは〳〵しきちぎりに、百とせのよはひを延たる心地して、さらぬ顔をつくりて出たるもおかし。せはしき事を戀のあはれと云共、八坂・北野の茶屋ものゝ振廻程、手廻しなるはなし。燭臺を握り、階子に上り、客を迎ふるより、進退に左右の手を空しくせず。内の亭主心得て、二階口へ銚子・盃さし出し、取肴あまたならべり。二三獻の過を待兼ね、屏風引廻したるは、つまみくらひたる蛸や、酢貝の胸につかへたる心地やせむ。玉子ノ山芋は腎の藥と斗おぼえて、同じ食ひ物ならば、水を盆物ニしくはなしとて朝夕すゝめり。虚實共ニ病と成て、尅する所をしらず、古人も口よく病を致し、其德を敗る。口を守る事は、瓶の如せよとはいへり。吾生はかぎり有、情欲はかぎりなし。色このむものはみだりに淫せず。傾城に家を亡すものはあれ共、腎虚をしたる人をきかず。

五老許羽官述　印印

元祿戊寅秋九月

井ツゝや庄兵衛板

宇陀法師

彦根

李由
許六　撰

宇陀の法師

李由
許六　撰

誹諧撰集法

一師説云、選集に撰者の句あまた入事、昔千載集の時再度勅許有て、俊成卿の哥加増せられたる事有。當時俳諧選者憚りなくともゆるすべき事。

一てにをは・差合、選者加筆憚るべからず。是例也。金の源三あい共、閉口さすべき加筆有べし。

一發句たてやうに習ひ有。地發句をならべ、秀句置所有べし。猶絶勝の句撰集に出すべからず。世上の眼届がたし。但發句は選者の位に寄て入べし。雜句の中たま〳〵秀逸有ても前後に穢され其句の光を失ふ。人〻共集をあなどり、手にとらざれば見る人なし。俳諧も又同じ。連衆を撰みてすべし。先師一代志の通ぜぬ人と俳諧せず。歴〻の門人に俳諧の手筋通ぜぬ人多し。其人と終にいひ捨てもなし。まして打込の俳諧は名人とてもならず。

一選者の句大事也。目にたつ事なくては甚無下の事也。其集を見る時、撰者の句に力を入て見る。一部の位はすべて選者の句にてしるゝもの也。耻かしき事なり。

一卷頭・卷軸の句心得有べし。新古今勅撰の時、後京極殿勅定に寄て、古今の心有哥奉り給ふといへば、古今集の卷頭よい哥はをとれり共、むつかしき題なれば手柄といふべし。四季の卷頭一題〳〵の卷頭あり。人を考へ句を撰みて置べし。下手の卷頭に出たるは、土民公家の上座仕たる心地して其集いやしまるゝ也。いにしへ哥勅撰の時は色〻故實あるよし、八雲御抄幷定家卿しるし置給ふ也。今の俳諧撰集には不ㇾ入事ながら、故實は知たるがよき也。抑御製の傍に雲客以下の下﨟をならべす。普代の堪能は不ㇾ苦。卷頭より四番め當帝の御製を不ㇾ奉ㇾ入。卷頭は人丸・赤人・現存の達者を入へし。普代ならぬ人始て入には、一二首季の外に入べし。二代の作者あまた入べし。撰者の哥に事書有には、いづれの時よみ侍しとシ文字をすへべし。たゞ人には其時よみ侍けるとケルの字を書事習也。春の部は陽の段、

上下あらば、上を半に下を調に哥數有べし。秋の部は陰也。上下をかゝへて段〻に調半とつゞくべし。懷舊・述懷の哥、しかも季なからんを卷頭に不レ入レ之。戀は初戀・忍戀とつゞくる也。序代は假名にて書もらしたる事、眞名にて少書べし。集序も同事也。かまへてみじかくていたく詞がちには有べからぬ物なり。假名序はたゞ口にまかせて可レ謂レ之云〻

一長明無名抄云、千載集撰ぜられける時は、道因法師なくなりて後の事也。此人和哥に執心深き人なればとて十八首まで入給ふ。夢中に來てよろこびをなしけるとて、今二首加へて廿首入けるといへり。たとひ俳諧は次なり共、執心の輩はおほく入べき事なり。

一當時俳諧撰者の眼に句の甲乙急度わからざる故に、作者樣〻批判す。隨分依怙贔屓を捨て、等類作例を吟味すべし。いにしへ新古今の時、西行上人はあづまに在けるが、勅撰を聞て上りける道にて、登蓮法師に逢て撰集の事尋侍しに、はや披露有て御哥も餘多入よし申ければ、鴫立澤の哥入侍るやと尋ければ、不レ入よし申によりて、其集見て詮なしとて又東國の方へくだりける。此事都へ聞えて鴫立澤は後に入たるよし也。世に三夕とてもてはやし侍れる浦のとまや・眞木たつ山は、西行の鴫立澤によりて入侍るよし申侍る。愚案ずるに、鴫立澤の哥一首は前後のつゞきよからざるに寄て、二夕を加へて出たる成べし。當時俳諧の集前後のつゞき肝要也。夫選者は、第一自句達者にして秀逸の句持てもをしまず、代句に出入もやうをつくり、題と題とのつゞけ所、句の不足あれば、俄に筆をひかへ發句する程の達人ならでは選者成がたし。近代初心の手に落て國〻より蜂起する撰集、てには違をならべ、集とおもへるはかなき事也。東西南北にもてあそぶ集は書林に沙汰有べし。たゞ集は拙き事なきやうにすべき事なり。外國の奇發句てには違ひは作者の罪にしてしるて罪なし。專選者一人の罪なり。

一集は第一もやう也。四季を分ていつもかはらぬ梅・櫻・月・雪、しかもよからぬ句を並べ出せる、不與の事也。

一作有べき事也。題と前書の相違有べし。近年其差別

なし。前集篇突に此事あれどかさねて申侍る。前書に二様あるべし。一には發句の光をかゝぐる前書有。二には詞書なくては後代難とすべき時、前書を加へて後のいひわけに殘す事あり。哥にも題の哥・詞書の哥共差別あるよし。詞書の中に題あるは題の哥の格式也といへり。詞書にゆづると云格あり。古今集在原業平の哥に、

　彌生の晦日雨ふりける日、藤の花を折て人の許へ遣しける時

ぬれつゝぞしゐて折つる年の内に
　春はいく日もあらじと思へば

此哥、雨もなく藤もなし。よければこそ古今集には出たれ。

　甲戌の秋大津に侍しを、このかみ(兄)のもとより消息せられければ、舊里に歸りて盆會をいとなむとて

家はみな杖にしら髪や墓参　翁

此句、魂祭とは成がたき故に墓参とは申されけり。詞書に盆會をいとなむと出して後難をのがれ給へり。前集歳旦の下にも此格を出す。又詞書を加へて發句の光を挑(かゝぐ)るといふは、

　儒士何某がむすこ洛に入て入學すさきく。唐土に櫲樟七年の才と云は鈍にして遲し。當時は三年にて大木の幅する木あり、由(油)斷すべからず。

本ッ箱に先ッなる桐の若芽哉　許六

一題に竪横の差別有べし。近年大根引のたぐひを菊・紅葉一列に書ならべ出する覺束なき事也。先師炭俵に大根引といふ事をと詞書にかけり、面白事也。

一部立の事、年中行事四季景物次第をたつる事、常の事也。發句數すくなく、あるひは二句三句同作にて同じ所にならべざれば、其感すくなくして題を分がたき事ある物也。其時は神祇・尺(釋)教・旅・無常と四季不同に分べき也。人丸ほの〴〵の哥は、文武帝かくれさせ給ひし時よめる哀傷の哥なるを、海路の旅にして古今集には出せり。作者の人丸より撰者貫之手柄なるべし。

一同じ作者の句二ツ三ツならべ侍る事、見ぐるしき第一也。同作ならべざれば叶はぬ所もあれば、それは各別の沙汰也。名人の句にても、同同とつゞけたるは不興成物也。前書の上り下り・一字一點の所迄、眼をくばり心頭を勞する撰者もあり。又こなたの折めに題を書て、うらへ返してほ句あるさへ待遠にして、もやう笑しからずといふ人もある也。

一卷數の事、上下二冊あれば見ぬ先より發句俳諧と推量せらる。三冊五冊に及ぶは前後見る人稀也。金銀にて撰集する人の論にはあらず。さやうの集は奉加帳と等しければ、紙數よごれたる社手柄なるべけれ。たゞ集は手輕き樣にして、上下二冊あるべき集なり共二度に出板したるこそ、人の心の新まりたる心地はせらるれ。桃隣がむつ千鳥、前後見る人もなく、覺えたる人も稀也。只其角が像の眞向なる事をおぼえて、外はいひ出す人もなし。歳旦・引付など丁數多きは、見ぬ先よりうとましき心地す。是も金銀の穿鑿ならば同日の論に非ず。片田舍には引付多きを上手にいふよし。丁數多きを手柄ならば、口一牧年號計をすりかえ、毎年上へとぢ重ねたり共、年〻の句を考へ新敷する人なければ、かはりめ知人有まじき也。

一題號の事、さして深き心をふくめたるもうるさし。人の嘲りを蒙らぬやうに專一とすべし。わづかの文字の中に一部の大意をふくまんと云は少き心也。只其書をよぶに便の名目と心得べし。あら野・有磯海等心なくてよけれど、けふ此ごろは度〻にて聞あき侍る。只耳にたゝず・やすらかにふるめかぬ事社よけれ。芭蕉庵小文庫は長過たりと難ずる人有。其人常に其書をよぶ時小文庫とならではいはず、武州深川芭蕉庵小文庫と名付たり共、終に呼ざれば難じて益なし。又撰者芭蕉庵小文庫といはせむど(マヽ)念を入侍れど、人呼ざれば是も益なし。難じたる人・名付たる人共に無益の持也。又三州の產に俳諧曾我と云書あり。題號四字の中俳諧の二字遊べり。曾我計は落着せざる故に、俳諧の二字を借て題號となせり。あめつちの二卷を兄弟としるして少作意を付たり。此名上下の二卷を十郎・五郎とつけば

堀川の太郎・次郎の俤も有て、兄弟の名乗も入まじ。かく云五郎・十郎の名のよきにもあらず、俳諧曾我のあしきにてもなければ、只作意のなきといふまでの事也。風國が初蟬と云名は、岩にしみ込むと云先師の發句より出たる事序文にあり。此句にたよらば初の字心得がたし。蟬の聲は作意なし。岩蟬などいはゞ細工ならんと思ひて、賞翫の心もありて、初蟬とはいへる成べし。小蟬といはゞ俳諧の名成べしと云人も有よし。共に〳〵皆こまりより出たる名也。只理屈なく、おぼろ豆藪ともつけ侍らば、撰者の心奥ゆかしくて後人嘲有まじ。張子厚が砭愚・訂頑の兩銘を見て伊川先生の云、是爭ひをおこすはし也。只東西の銘といはむにはしかじといへる、是也。蟬にこまりて付あぐまむよりは、はやく題號を乘かえて褒貶をまぬかるべき事也。風國が同作、先師一代の發句をあつめて泊船集を出せり。書ヽの眞僞を考えず、てには違・書あやまり、文盲千萬なる事論ずるにたらず。先、泊船の題號は風子が自分につける堂號か、又は先師伊賀にすめる比、釣月軒宗茂・泊船堂宗房など書なぐりの反故など拾ひてかく名付たるか。世上廣くゆるしたる芭蕉の號を捨て、泊船の二字を搜し出たる事淺ましき至也。但風子が堂號ならば以の外の慮外なるべし。家珍に祕し置侍らば、天照太神と成共付べし。此泊船手にとる物にあらず、學者僞事とすべし。

一あら野　ひさご　猿蓑　炭俵　後猿と段々其風躰あらたまり來るに似たれど、あら野の時、はや炭俵・後猿のかるみは急度顯れたり。只時代の費を改めて通り給ふまで也。前猿蓑は俳諧の古今集也。初心の人去來が猿蓑より當流俳諧に入べし。炭俵・後猿は前猿有ての上の集也。此さかひよく見屆べし。名ごやの荷兮・越人あら野に眼明たるに似たれど、瓢に底を入られ、湖南の連衆は猿蓑に關をすへられたる事、其時慥に其風を得ずして血脉をつがぬ故也。何ぞ慥に風を得ば、自己に流行せず共、師にとりつき流行すべき事也。實は師の恩に依て名を顯し侍れば、底を入らるゝも理也。はいかいの底をぬくと云事有。ぬけぬ作者曰〳〵ふるく

成行也。先師の手傳にて撰者の號を蒙りたる人、天晴作者と見えて其人何となくゆかしきに、師迁化の後に後集を出して下手の尾を出し、初心の人に嘲らるゝ。其人も力量有て速に俳諧をやめるか。又は亡人の數に入侍るならば、一たび名を上たるは、末代朽る事あるまじ。俳諧にかぎらず、其事に數寄出て後怠度やめる事、力量なき人ならぬ物也。只はやく死たしと願ふべき事也。長生の望あらば速に俳諧をやめ侍れかし。寂蓮法師によみこされて、死なばやと願はれたる古人も有けり。

一何某選と云文字の事、選者一人の時は選字たるべし。多人の時は撰字を用べし。

一朱印は色紙・短尺にはをさぬ法也。何某之印と置事子細あり。みだりには成がたし。勅印と云事唐名なし。但直印と云事にや。口に有印は眉の印と云也。彫刻の法樣〻有。當時錐笞さしの類にて彫刻み、赤判と號して押ちらす事無下の事也。三十二躰と云は文字の格也。古篆の字法もしらず、千字文一冊にて篇つくりを取合て一字となし、山二つは出〃ノ字、木篇ゝに寸ゝは村ノ字と覺えたる人多し。朱肉の方色〻有。冬凍安し。遲生は膠に出たる方よし。刀の事印刀 立刀あり。印刀ノ製井刀のつかひ樣をしらず。魚尾 爛銅などいふは彫刻の名なり。

當流活法

一先師俳諧の新式に指合・てにをはの事は、多は先輩の式に似たれど、當流の用捨各別の事又多し。然其指合・てにをはの事は俳諧一通の法なれば時宜によるべし。廿五ヶ條の口訣は先師の奥儀にして、是をしらざれば俳諧の道にくらし。世に執心の人なき事を先師常になげき給ふ也。これらの事は人の信不信の上なるべし。

一長頭丸より傳はりたる何某と云書有。先師の自筆を以て的傳し畢ぬ。近年切字・てには等みだりにして、初心の人法をみだる故に祕事たりといへど、少〻はこれを記す。猶師を求めて傳受すべし。

一發句切字事　不吟味にして他門の嘲り有。切字二つ入

ぬ物也。是初發心の時習ふ事也。歷々の作者折節見えたり。二つ三つ入るゝは二字切・三字切の習也。奥ニ記ス。やとして哉と留らず。七つのやの内　口合のや　名所のや斗は、哉と留るなり。やもじの下にあり。

一哉留り五つの習ひの事　一ニは落着哉　二ニは願哉　三ニは浮たる哉　四ニは沈む哉　五ニは現在哉　此現在哉、上五七の内、現在のし文字ありては留らず。

遠　山遠し花ゆへ曇る霞哉

遠しのシ文字現在にて、二重切とまらず。

同　あかねさし出ても曇る春日哉

此シ文字現在なれど、さし出るとつゞく故留る也、大秘事也。猶口傳。

一や文字の習ひの事

同　時雨きや雲に露けき山路哉

此やもじは、けりといふにかよふ故、哉と留る也、旁大秘事也。

夕顔や炑はいろ〱のふくべ哉

此やもじ、うたがひにて哉と留る也。瓢は惣名にして、百なり・千なり・長ふくべ品々あれど、花は一色、夕顔といへるは如何成事やと云事也。名人のてには初心の及ぶ所にあらず。

七つのやの事

○一口合や　是や世の煤に染らぬ古格子

○二切や　朝顔や晝は鎖おろす門の垣

○三捨や　露とく〱心見に浮世すゝがばや

○四疑や　けふよりや書付けさむ笠の露

○五中のや（はさみやとも）　旅をして見しや浮世の煤拂

○六はのやのや共　白魚や黑き目を明く法の網

○七すみのや　むざんやな甲の下のきり〱す

七つの外のやもじの事

○名所のや　難波津や田螺のふたも冬籠

○こしのや　庭掃て出ばや寺にちる柳

○は　や　秋もはやばらつく雨に月の形

○よび出すやは名所のやと同事也。口合のや　名所のやまぎれ安し。

あつみ山やふく浦かけて夕すゞみ

あつみ山やは名所のやなれど、ふく浦と口合たるに依て口合のや也。連俳の習、影や梅　月や紅葉　此類置所にて口合に申侍れど、秋篠や外山　須まや明石　葛城や高間　此類皆〻口合のやと云也。口合のや　名所のや　よび出すや、皆〻哉と留るなり。たとへば、

あつみ山やふく浦かけてすゞみかな　とも留る也。

腰たけや鶴脛ぬれて海凉し　名所のや有て下に現在のシ文字あるは、哉と留る格式なり。

○七つのやの内、第四番めうたがひのやに二色有。かた疑のやと云は、やと斗して下にをさへぬを云也。春や立らん　宿やからまし　君や來し　秋や來ぬらし　皆〻もろ疑也。

雪ちるや穂やの薄の刈殘し　是かた疑也。

○疑ひ捨るや　一里は皆花もりの子孫かや

○れがひのや　蓬萊にきかばや伊勢の初便

○願ひ捨るや　こもりゐて木の實草の實拾はゞや

○なしはかるや　春なれや名も無き山の朝霞

○さや 問かけてにはと云　星崎の闇を見よとや鳴千鳥

○やすめたるや　いかめしき音やあられの檜笠

ふるや時雨　たつや烟の類也。定家卿建保の哥合の判に、やもじやすからぬよしとがめられしは此や文字也。哥の讀方には十五のやあれど、連俳は字數短き故用捨多し。

○あそぶやと云事有。や文字なくてよき句也。世間此や文字多し。ぬき捨がたきや也。一とせ李由が家の五百番句合の時、大根引といふ事を申侍し。

出女に投て通るや大根引　許六

大根引ぬいてたゝくや牛の尻　汶村

李由が判云、なげて通る　ぬいて扣く、共にやの字なくてよし。是例のあそぶやなれば左右持に定ぬ。惣別切字は色〻澤山有て自由なる物也。其所相應の文字を置て首尾すべし。

二字切

はやくさけ九日もちかし菊の花

鷹の目も今や暮ぬとなくうづら

此ぬの字はねぬと云也。ふのぬ　おはんぬの外にてき

るゝ也。珍敷ぬの字也。いく夜ね覺ぬ須磨の關守と云ぬ是也。消えぬ　おもはれぬ　の類、兩方へかよふ也。よくきゝて落着すべし。

一字うたがひと云事

初雪やいつ大佛のはしらだて

あら何共なや昨日は過て河豚魚汁

幾春か　誰宿ぞ　此類皆〻二字切にあらず、一字疑といふなり。

三字切

面白し雪にやならん冬の雨

子共らよ晝顏咲ぬ瓜むかん

四字切

初眞桑四つにやわらん輪にやせむ

連哥の書〻にも三字切はあれど四字切はなし。此句四字切なり。五つにても十にても落着せばいくらも有べし。近年の書〻に落着せぬ二字切・三字切おほし。

三段切

奈良七重七堂伽藍八重櫻

大廻しの習事

あなたうと春の日みがく玉津島

此句連哥の大廻しにひかれたれ共大廻しにあらず、五文字にて切たるよし、先師相傳の時申されけり。大事の習也。玄旨法印、光廣卿へ物語云、玄妙切・大廻しの仕樣習ひ置たれ共終にせず。今までせざる程に一生すまじき也。むつかしき事したがりて用がなき也。人のしりて面白やうにしたるがよき也と申給ふ也。先師一生大廻し・玄妙切の句なし。

一古事・古實・古物語・古哥等の詞をとりて發句する事、上手のみにかぎらず。さまでなき作者もよく取廻してする人もある也。又上手に不得手も多し。一樣に心得べからず、取樣品〻有。

古實の句

韻塞　御玄家も過て銀杏の落葉哉　李由

篇突　山科の五荷三束や菊の花　許六

御玄家に　天子より三色の餅を諸臣に給ふ時、檀紙に包み小角にのる水引にてゆはへ、銀杏の葉に何某殿と

書付てはさめり、勾當内侍より渡る、是古實也。山科の
郷に五荷三束・一荷二束など云事有、御觸紙の表(オモテ)也。
五荷はかい敷の檜葉・しのぶの類、二束三束はあぶりこ
の竹也。是を御領の御役目とす。

古哥を取裕

先師七回忌　夏の尺敎　浪化興行

荷(ハス)にのる蛙は似たる空也かな　李由

同じ追善　畳物　題鶯　支考興行

鶯の小瓶やほしき飴おこし　許六

十月の十の代には十夜哉　汶村

拾遺集「一たびもなむあみだぶといふ人の
蓮の上にのぼらぬはなし　空也上人

西行談抄「鶯よなどさはなくぞ乳やほしき
小瓶やほしき母や戀しき

貫之の娘の哥也。母を離別せし時歎てよめる。此哥に
てよび返したると也。八雲に「霜月に霜の降こそとはり
やなど十月に十はふらぬぞ　此哥、家隆卿をさなき時
の詠なるよし。

物語のことは

水無月や友待雪の不二颪　李由

炉開に這出給へきりぐす　許六

正月や先きよき物あら莚　朱廸

源氏若菜卷に、友まつ雪のほのかに殘れる上に打ちり
そふ空を詠め給へりと有。「紅葉賀に、源氏源内侍が方
へ忍び給ふ時屏風のかげにかくれ給ふを、頭の中將の
詞に、壁の中のきりぐす這出給へと云ゝ「淸少納言枕
双紙に、淸き物かはらけといへり。正月の五文字に力
あるべし。

四五月のう波さ波やほとゝぎす　許六

無名抄云、筑紫のはて國には四月・五月に大波たつ。四
月をう波といひ、五月をさ波と云。いと興ある事と云ゝ

世話

ほとゝぎす蠶の四月や蚊の五月　徐刁

出替や小のゝ小町も衣裳から　管午

名月や熊野(ゆや)松風に米のめし　程已

筏士よまて事とはむ水上はいか斗吹嶺の嵐ぞ　此哥落

葉隔水と云題詠成よし。一首の中落葉の字なし、名人の作也。此格吾はいかいにやつして、

紙子着て川へはまらば龍田哉　許六

或人難云、吉野哉とをかば花の句成べしと云。是俳諧しらぬ人の論也。大河の吉野人の心ゆかず、渡らば中絕むとは、立田歩行渡り明也。其上紙子に立田のかけ合有。連俳には季の詞なくては難とする故に、紙子は出たり。

入口は柳にのぼる芳野哉

是も櫻を沈めたれば花の句成べきかと云。是は柳也。六田、柳の所なれば、底のさくらよりは柳慥成べし。

三世の句

◦過去　羽子板の箔にうけたり春の雪　吾仲

羽子板に雪を請たるは尤過去にして、箔の一字に眼を入たり。

◦現在　蚊遣火に團（うちは）あてけり秋の風　許六

過去・未來の論なし。

◦未來　南天にあたる音する紙子哉　木導

十年の後此句を見るべし。

梅が香や粉糠ちり行臼のあと　許六

畫讚　梅月の繪

武者繪　二句

みをのやはしころとられて飛蛙　李由

西瓜喰時景淸が手つきかな　毛紈

景曲の句

春風や麥の中行水の音　木導

師說云、景氣の句世間容易にする、以の外の事也。大事の物也。連哥に景曲と云、いにしへの宗匠ふかくつゝしみ、一代一兩句ニは過ず。景氣の句初心まねよき故深いましめり。誹諧は連哥程はい（忌）まず。惣別景氣の句は皆ふるし。一句の曲なくては成がたき故、つよくいましめ置たる也。木導が春風、景曲第一の句也、後代手本たるべしとて褒美に、「かげろふいさむ花の糸口　と云脇して送られたり。平句同前也。哥に景曲は見樣躰に屬すと、定家卿もの給ふ也。寂蓮の急雨（むらさめ）・定賴卿の宇治の網代木、是見るやう躰の哥也。

一題の事、一樣に心得べからず。時雨は野山を尋てきく心を云。鶯は待心をいへ共尋て聞心をいはず。鹿はあはれをいひて待よしをいはず。櫻は尋ぬれ共柳は尋ず。初雪はまて共時雨・あられはまたず。花はをしむといへ共紅葉は惜まず。かやうの故實をしらぬ人は無下の事也。

一切字なしの發句の習ひ、近年傳授請ぬ人、才覺分別にてみだりにいひちらせる、散々の事也。能傳授仕たる人に急度習ふてすべし。

卷頭幷俳諧一卷沙汰

一百韻の卷頭なれば、たけ高き句第一也。平句にのびたる句あれば發句見をとさるゝ也。發句は大將の位なくて卷頭にたゝず。平句は士卒の働きなくては鈍にしてぬるし、其用にたゝず。師說云、惣別發句は取合物と知るべし。題の中より出る事は、よき事はたま〳〵にて、皆ふるしと申されける。此胸よく請繼て、江東の俳諧は常に取合第一とす。同門の中にも、江東は道具過たりと難ずる人も有よし。先師の句十に七八は必取合にて道具也。難ずる人取合樣を慥にしらざる故に此難有。道具でする事得物ならば、幾度も道具でよき句せらるべし。不得手の格にて悪しき句して何の益かあらん。たとへば徒鑓つかひに、十文字を得つかはぬと難じたると似たり。

脇の事　發句は言外の意味をふくむをよしとす。脇は發句に殘したる言外の意味を請て繼也。物の名又は何にても一字にて留る物也。てにはどめ習也、脇に五つの仕やう有。其外ひとからみ對付・拾ひ付・大小の脇など云事有。當流用捨多し。發句の季三月に渡る物ある時、脇の句にて其月を定る事連哥の式也。

一第三の句、第一難儀の場所也。上手の入ると云は第三也。發句の打越、脇の句にはなれて付を、上手の手際とは云也。しかも第三のふりを持て、留りに去嫌あれば第一の難所也。一卷の出來・不出來、脇第三より極る也。先師御在世の時、許六亭にて、

梅が香や通り過れば弓の音

土とる鍬に雲雀囀る

陽炎に野飼の牛の杭ぬけて　翁

自畫自讚を汶村の家珍とす。彥根已の歲旦詩格の第三に、

下駄の齒に一筋黑く鮮初て　と云は、第三のふりをつくべき爲、雪の一字をぬきたる也。此第三の骨折は黑の一字也。是字眼也。應和哥合待時鳥の題にて此格有。

五月雨のふり出てなけと思へども
明日のあやめのねを殘らん

判者宜しきに定めて勝たるよし。

一哉留りの發句、第三にて留めせぬ事人〻知侍れど折ふしは見えたり。流れ哉　野澤哉　是治定の哉也。にてにかよふ故にあしく、たぐる哉などゝ云見立、發句に疑ふ心の哉多し。聞わけてにて留あるべし。

一にて留りに現在のシ文字ありてはとまらず。

里遠し行もつゞかぬ山路にて　是とまらず。

一に留り、覽どめ　第三常式の事也。能句稀也。

馬時の過てさびしき牧の野に　翁

に留りもかやうに有たし。

一覽どめ習は、をさへ字なくてはねる事也。一字ばね・二字ばなしと云事も有也。ぬけらん　ふれらん　など云惡敷てにはあり、習ふてすべし。や覽と斗心得侍る無下也。上に疑ひあれば覽とはねる也。たとへば、なになぞ　いつ　いかに　いく　いづれ　たれ　かは　かも　さぞ　此類皆〻覽と留る也。前集に紅葉鮒の句難じ侍れば、をさへなくてはねたる事と思ふ人も有よし。覽の事には非ず、只てには惡きと云事也。近年てにはを大切に思ふ作者なし。和國の風俗はてにはにて一切埒する事也。たとへば物を借ルと云も、借スと云も同字也。水火の相違有は手爾波一つ也。光廣卿へ玄旨の物語云、ある人二條の蛸藥師を通りさまに、上へや行べし下へや行べしと云を、連哥師聞て上へなり下へ成共行たきやうに行給へ、さりながら、てにはは公界物なれば、なをいて通り侍れと云遣ると書り。行べしも行べきも同字也。是を手爾於波と云也。公界物にてはづかしき事をしり侍れかし。

一四句め、六句めにふり有事書ゝに出たり。脊冠の揃ひたる句のらぬ物也。近年四句め・六句めは點のなき所とて、點取俳諧衆嫌ふよし。よき句ならば所にはよるまじ。師戯云、點のなき四句め・六句めに秀逸して肝つぶさせたるがよしとて、常に案じられたる事もありけり。

一座付、懷紙うつりには、欲を離れて二三句の中に早速付る物也。一くさり延れば上手も出兼る也。此次ゝと待ッ中に、句毎にむつかしく覺えて出ず。たま〳〵よき趣向浮ひて、にとやせむ、はとやせむと句作ッひねる中に、外よりよからぬ句を出して懷紙にのせ侍れば、其座の俳諧はもはやおもしろからずして、彼前句にひねりかけたる句を、益もなく案ずる物也。句前次第にのび與侍る中に、むつかしき前句出て人ゝ付あぐむ時執筆にせがまれ、かゝらぬ句なれど出たるを幸にして、人の案じ空(カラ)にやり句計をするもの也。

一月花の座定まれる所なし。七句・十三句めは、下の句にてすまじき爲也。一座の時宜に依て七句・十三句迄延たる事也。月花結び合たる句猶手際入る也。雪月花懷紙に同作有べからず。折をかえて一つ有べし。初懷紙の花は再返か再ゝ返か、誰もいたし侍る。奧三本は大方定る例也。花に初中後の心持あり。めぐむ　咲初る　盛　ちる　殘る　の類也。花を櫻と思ふ作者も有也。唐朝の花は牡丹也。吾朝詩哥の花は櫻也。連俳の花は櫻にも非ズ、牡丹にてもなし。篇突云、花は賞翫の惣名と註ス。されば花に櫻付る事習有。何ぞ花の句櫻ならば、花に櫻付る事あらん。茶の出はな　藍の出はな　正花たるべしと先師申されき。前猿蓑のはいかい名殘の花に櫻有。是を見誤りて正花に櫻する人も有けり。櫻非二正花一、初心人する事なかれ。口傳有。惣別當流は人に不審をおこらせ、誤と見えて急度下にいひ分を揃へ置、難ずる人を落し穴に引入るゝ事毎度也。他門の衆由斷有べからず。一とせ先師いせ山田にて俳諧ありしに、神樂堂と云句せられけるに、山田人神樂堂を難じ申ける時、俳諧は平話を用ゆ、常に神樂堂といひならはし侍れば、深き事はしらずと答へ給り。山田の氣情をよ

く察したる返答成べし。其後此事を尋たる人有、師云、唯一の神道には神樂殿ト、兩部には神樂堂と云、むつかしく云分して益なし、只はいかいには神樂殿をかしからずと申されけり。

一月の句八ッ也。名殘の裏にはなくてもくるしからず。發句に月次出て同字のがれ難き時、有明・さかづきの影など名を隱して出す事常也。星月夜、秋にして月に非ズ。深川集俳諧に宵やみと云句、賞翫の月にせり。師云、宵闇と云句に月は成まじ、此宵やみ月秋の前句也、是を月にすべしとて秋を付出し、八月と云月次を出せり。全ク八月非ニ賞翫ー例のおとし穴也。此事聞傳たる作者、やれ宵やみは月に成とこそいへ。毎席出せる人も有けり。月秋の場所に宵闇出合たればこそ、ふしぎの働も有けれ。毎度宵闇・曉闇の月に成てはおかしからぬ事を知侍れかし。一望月　八雲ニ、十四五六日の間也。いざよふ月はいざよひにあらざる由說ヾ有。先師やす〱と出て、いざよふと十六日にせられければ、これを證とすべし。定家卿說に、十六日に限由侍れば、先師も此說による歟。

一俳諧付やうの事、師說に千變万化すといへ共、つまる所は三つに極る、執心あらば口傳をうくべし。

・俤の句　口傳

前　尼になるべき宵のきぬ〲
　　月影に具足とやらを見透して

思ひなしの句　口傳

前　半分は鎧はぬ人も打まじり
　　舟追のけて蛸の喰あき

景氣の句　口傳

前　乘懸の挑灯しめす朝嵐
　　汐さしかゝる星川の橋

一當時世間の誹諧は、つかぬがよきとてほどらいをしらず、百句共にならべたる物也。されば五句・七句引のけても、又二句・三句入ても共きは見えず。當流は間に髮を不レ入、一字も動かし難し。つけるとつくとの差別也。人作分別にて付る故に理屈に落る也。つくと云は自然につく也。師云、俳諧の連哥と云は、よく付と云字

意也。心敬僧都の私語にも、前の句に心のかよはざるは、たゞむなしき人のいつくしく、そうぞきてならびゐたる成べしとはいへり。

一旅の事、支考が五論に記せり。師云、連哥に旅の句三句つゞき二句にてするよし、多くゆるすは神祇・尺教・戀・無常の句、旅にて離るゝ所多し。當流旅・戀の句難義にして、又よき句も旅・戀に有。旅躰の句は、たとひ田舎にてする共、心を都になして相坂をこえ・淀の川舟に乗る心持、都への便もとむる心など本意とすべしとは、連哥のをしへなり。

一戀の事、是も五論ニ有。當時戀の詞と云は、うき　戀　傾城　文　夢　など云詞ならでは用がたし。ある時、

うき戀に文つき返し笑はれて　と云前句に、人々付わづらひけるは、例の詞大方出たり。

　尻もつ立るうらみねの夜着　と先師申されけり。又晋氏が句に、

　物さしに狂ふ男のたゝかれて　と云は、戀の詞一字もなし。至〃踏込たる戀の句也。春風桃李花開日、秋露桐葉落時と云は戀の詩也。近年俳諧とて戀の詞を捨へ置は、其人の胸中せばき事しれたり。惣別去嫌も同前也。格式を守は初心の時也。たとへば坊主は尺教なれ共、廣間坊主・居合坊主は尺教には成まじ。紙帳は夜分夏季なれど、ぬしやの紙帳は夜分にも夏季にも非ズ。惣別もろ〳〵の差合前に有て、よき付句出たる時、其差合のがるゝ習あり、口傳。

一あたらしみと云事、末々の門人迄きゝ習ひて申侍れど慥に知たる人なし。新敷と云は趣向に有。あたらしみと云は句作りに有。毎度あたらしき趣向は稀なる故、句作りにてあたらしみを付て云事也。大祕事なれど末〳〵の門人うろたへ侍る故に出し侍る。惣別流義と云も皆句作りの事也。定家の流・西行の流、皆てには・句作りのかはり也。心は梅に鶯、古今かはらず。たとへば精進と云事新敷いはゞ、

　精進日はまづふるいから上るなり

　精進日も添てむすこに代を渡し

など云は、新しき趣向也。あたらしみと云は、

祖父祖母の精進は間にまびかれて
と云をいふべし。

首きれ連哥と云事有。此習しらざる故にあらたむる人なし。小文庫に先師の句、

はれ物に柳のさはるしなへ哉　此句あやまり覺えて書〻に迷はし侍る。是、首きれ連哥也。

はれ物にさはる柳のしなへ哉　とこそはつゞき侍れ。其上腫物にきつと柳のさはりては一句おかしからず。はれ物にさはる柳と自筆の短尺に有。連哥證句に、

衣うつ淺茅が原に里ふりて　衣擣、淺茅はつゞかず。

衣うつ里は淺茅にうづもれて　衣うつ里とはつゞきてよし。此事敎へたる名人、何ぞ首きれ連哥をすべき。

名殘の裏隨分かろく、やり句勝に事がましき事をせず、早仕廻べき也。うら八句、大略面八句の作者相定りたる事也。及レ暮時猶以早口たるべし。あげ句は句のかゝり定りたるやうに申ならはし侍る。追善の連哥に殊更祝言にてあげる例也。あげ句の花大祕事也。

祝言の俳諧、禁忌の詞ぬき去べき事也。追善同レ之。鬼地獄の沙汰等努々有まじき也。夢想の誹諧には夢の字をせぬ事、是又例也。

一他門の說云、芭蕉翁は發句上手、俳諧はふるしと云人有。先師常に語て云、發句は門人の中予にをとらぬ句する人多し。俳諧におゐては老翁が骨髓と申されける事每度也。此かはりめ同門すら知人稀也。他門いかで知べき。先師一生の骨折は只俳諧の上に極れり。師云、老翁が俳諧は五哥仙に究めぬ。人一生俳諧ならず共いへり。大切成事にして又心安キ事也。多年俳諧すきたる人よりは、外の藝に達シたる人、はやくはいかいに入るとも申されき。

一當流はむつかしき事なく、無分別に理屈のなきがよしといひなぐる人ゝあれど、それはさる事にして少子細有べし。隨分腸をつよく案じて口外へ出す時、無分別に理屈なくいふ事也。さやうにいひもてゆけば、後には俳諧消果て、野鐵炮の作者のみに成べし。近年五論・篇突等新敷格式を書出して、初心人を迷はし侍ると云人も有由。曾て其人の爲には昔ず。見給ふ事無用たる

べし。此比何がし〳〵と云片腹痛き四五集出て、腹をかゝえながら見侍れば、向後それと持にして置べし。先師一生人の尋ぬ事をもて出て語らぬ人也。其人の眼に見えざれば尋ぬる事をしらず、尋ねざれば教ず、一生しらずして果たるも殘多し。いにしへの連哥は代々の達人たち、此道の絕果べき事を悲しびて書置る書山の如し。故に今の代までくはしく傳はり侍る。吾俳諧とて連哥におとらず。然るに前後猿蓑・炭俵等の書あれども、句帳のみにして先師の遺風を殘すべき式法なし。百年の後、芭蕉流の血脈を殘して、さる作者ありとしらるべき一念也。世間重寶のはなひ草も、連哥のいろは新式と云書にて書侍れば、はなひ草なくても事は欠まじ。昔日の連哥は大切成事にて、今の俳諧の如容易にする物に非ず。宗祇の時代まで百韻花三本・雨一つ也。宗長の時に至りて、にほひの花一本・雨一つ勅許を蒙り度旨奏聞せられてより、花四本・雨二つに極まりたる由、先師申されき。俳諧は當時最上の時節也。此後は次第に下手と成べし。芭蕉流血脈の門人二三子には過ず。抑はいかいは先師迁化の日、急度決定せぬ人終に俳諧一人役ならぬ物也。人にもたれ人の口を守る作者、芭蕉流直指の俳諧成就せず。彼二三子が俳諧しらん人誰かあらん。只すき不數寄の方に落して、善惡の沙汰に及ぶは無念也。二三子が言に云、先師此比まで在世し給はゞ、己等が俳諧にまなこは明まじといひけり。

一發句・平句共に末のおくるゝと云事有。哥にも大切に申給ふよし。降つみし高根の深雪解にけり　とつよくいひ侍るには、淸瀧川の水の白波　とならでは成がたきよし。ある時深川の庵へ訪ひける時、夜ァさる會にて、

人聲の沖には何を呼やらん

と云前句有て、

須磨の鼠の舟きしる音

と案じつれ共、音の字前句の聲にさし合案じ煩ひて、

鼠は舟をきしるあかつき

と付たりと申されたり。許六云、此曉の一字有難き事也。一夜案じ給ふ骨折、此一字に見えたりと申せば、先

師起あがりて云、曉の力きゝしり給ふやといふ。六云、尤須磨の鼠、新敷物とはいへど、舟きしる音といふ下の七字大きにおくれたり、此曉の中には須磨の鼠、明石の火用心、一として殘る物なしと申せば、例の鼻をくん〳〵と吹ならし、予が一句すれば一座はつといひたるまでにて、草鞋はきて胸中をさがす人なしと、よろこばれけり。

一たて懷紙、文臺にのせぬ法也。一順はたて懷紙にて面〻の座に廻す事も有。一巡終て執筆の句をとり、本懷紙に寫し、文臺に置。其時重硯箱面々菓子定れる事也。人〻畳紙に書寫し懷中す。句前をくり案じ、指合・輪廻等執筆に尋ねぬ法也。かりにも雜談あるべからず。常〻行義正しくいひ習ふべし。西行法師此道名譽の達人なれど、哥の座さはがしくて一の難と申侍る也。執筆の法さま〳〵有、略ス。師に依てきくべし。

一二見形の文臺寸法口傳。おもてに墨繪有、是先師の製也。當流專用也。二見の硯箱と云、文臺に付事に非ズ。取合物也。

一千句・十百韻の差別有。去嫌ひ六ヶ敷ゆへ多くは十百韻也。五十韻は百韻の半成事勿論也。近年四十四と云事有。是又五十韻の例たるべし。哥仙は百韻三分一なれば、式法一座三句の物は一つたるべき由、先師申されき。たとへば新式に藤・紅葉一座三句也。哥仙には只一句の筈也。季をかえて今一つ有べし。つゝら藤・紅葉笠は雜也。いひかえたる類、裏ニ有べし。雪・氷、連歌四ツ也。俳諧哥仙、春・冬の中に慥ニ二つなり。雪餅・氷砂糖の類うらに有べし。雪院・雪踏と聲にてよむ類、見わたしにもくるしからず。

一新式、今案に、春風一座に二句、俳諧に春の風と今一つ有べし、秋風・松風同前。

一又云、櫻一座に春秋三句也。愚案ずるに百韻花三本の時代きはめたる例成べし。俳諧に櫻鯛・櫻貝の類名をかりたる物、折をかへて今一つはくるしからず。惣別差合の事は新式今案を以了簡すべし。

一俳諧文章の事習ふて書べし。惣別俳諧の文章といふ事いにしへの格式なし。うつほ・竹取・源氏・狹衣の類皆

ゝ連哥の文法也。故に先師一格をたてゝ門人に傳申され侍る。みだりに書ちらす人もあれど、當流の格式をしらざれば片腹痛事共多し。序　記　賦　說　解　箴　辭　など少づゝ差別有べし。眞名文章は字法有て慥にわかり侍れど、假名物には無念の事のみ多し。中山三柳が醍醐隨筆に、蝮蛇記と云眞名文有、天晴蝮蛇の賦成べし、何の虵に記する事あらんや。文の勢と王元之が竹樓記をあてゝ、只一筋に思惟なく蝮蛇の記と名付たると見えたり。是日本の人の智也。三柳一人のあやまりにはあらず。

一同字の事　詩哥・連俳共にゆるさず。上の句さくらありて、下に花とわけたるさへ俊成卿難じ給ふ。詩哥に疊字の格ありて同字をゆるす。されば連俳とて遠慮あるべからず。向後疊字の格を以て同字あるべし。たとへば、

前はしらは丸太花はみよし野　李由
吉野山さくら〳〵と賣る櫻　許六
湯好旅好木まくらの夢　汶村

數珠粒をまぎらかしたる腹藥　木導
三番草にかゝる蒸餠　朱廸
土用干まづ上紺の夜ルの物　由
比丘尼を買て出る顏つき　六
犬の戀棒で荷ふて町送り　村
松とる跡の砂の淡雪　導
足輕の節によばれし足駄共　廸徂
朧〳〵とおぼろ月哉　由
さすらへの扶持方をそき舟便り　六
朝と晩との木魚淋しき　村
脇ざしに封の付たる子共達　導
節句をあてゝ吳服屋が來る　廸
片作の麥を取込十二分　由
やがて可醉の江湖始る　六
風呂敷にきせる指たる草枕　村
襟を自慢に伊勢の出女　導道
慥なる夢を掃込む椽の下　徂
若粥たく火に夜は明にけり　由

羽織着てきつとわせたる大工殿　　六
　うら寺町の暑き盆前　　村
鬼胡桃はびこる中の初嵐　　道
　猿三聲に有明の月　　廸
射盡して箙にさがる虚空穂　　由
　氣の遠うなる木曾の雪隠　　六
持て出た壹歩の數に年暮て　　村
　あゝ降たる雪哉と打詠めつゝ　　道
ほちりんと腹のふくれた哥をよむ　　徂
　紙帳の中の國の廣さよ　　由
客人に食傷したる玄關番　　六
　あら剃刀にかゝる蒟蒻　　毛紈
春もまだ冴る朝の小豆粥　　程己
　逢坂ちかき三井の鶯　　徐寅
目の及ぶ所は花のさかりにて　　李由
　滅多に金のほしうなる也　　許六
世中はほとけ高力鬼作左　　丸
　ツシから落て大惰せらるゝ　　己

滿月の光すみきる鷄の聲　　ヲ
　御遊は濟て夜食やゝ寒　　由
股引で松茸山へ行合點　　六
　兄が嗅出す蓬生の宿　　丸
肱杖のくぼむもしらぬ物思ひ　　己
　どろりと曇る鈍色の空　　ヲ
ひら〳〵と楞の中の紙のぼり　　由
　裸ではしる朝網の鮎　　六
あたらしき乘懸一駄付出して　　丸
　錢投てとる五器の煎豆　　己
大きなる木の根じやくれて海道中　　ヲ
　背太哢て明かゝるなり　　由
手屓武者屓れてさつと引もあり　　六
　栗の粉めせとゆり輪さし出ス　　丸
ついて來る市日の跡の烋の蝿　　己
　洗足の湯の光る夕月　　ヲ
田も畦も入らざる友の高笑　　由
　味噌と溜の所帶穿鑿　　六

をかもなき師走の果の日はあれて　丸
　道の減る程越る澁谷　己
密夫に作り付たる男ぶり　刁
　只一心に御臺いたゞく　李由
取はづし柳櫻をこきまぜて　許六
　お次お末の晝の日永　錢芷
出替も近づく空の鉗屋物　管午
　尻で名とりの公平が來る　六
なまぐさき朝觀音に夕藥師　由
　けふのむかしの六條の烁　午
米の直もさがらず風の身に入て　芷
　こら〳〵て小便の月　由
中間の付て乘たる合羽籠　六
　僦ほかつく畑のうり物　芷
あやめ葺煠の雫の雨の音　午
　浪人の時。短檠のもと　六
こく餅の紋に鼠のかぶりつき　由
　野位牌白く夢は覺けり　午
大木に枝の淋しき松の風　芷
　底倉の湯を下に見おろす　由
此度は母の願ひの身延山。　六
　國に入ては錢の直を問　芷
飲物に嫌ひのなきも不思儀にて　午
　此西行も少しやるなり　六
月花の雪が常住ふるならば　由
　おもひあまたの春風の面　午
穴ばたを覗く親仁の冴かへり　芷
　御法事あてに干物の船　由
伊豫へやる女中の支度出來兼て　六
　けふは下向でこつち向るゝ　芷
敬ふて聟のわせたる衣更　午
　一疋燒に皿の賑ふ　六
蒲團から夜着こぎり出かかり枕　由
　弘法顏で廻る大和路　汶村
早口に仕舞ふは人の目に見せず　木導
　八ッの日ざしに下馬の北風　李由

縫箔の年に似合ぬ紅粉を着て　許六
　十念すめば茶の段になる　道
名月の前には高きひがし山　村
　鈴虫啼てほめる松あり　六
脇臭き駕籠に乗たる秋の風　由
　椽先キへ出て振ふ下帯　ソン
若盛一夜も欠ケぬ衣〲に　道
　大津の風でいきる兵法　由
町かりの祭の入目済かねて　六
　煤と餅との音のせはしき　道
杖突て童部集る雪の朝　ソン
　闇に汗かく殿の乗馬　六
貧木の花もめで度ク咲こぼれ　由
　炭火の上にもゆる陽炎　村
滑飴の喉を通るも長閑にて　道
　狐の顔の白き暖簾　由
駕物にをくれてはしる出家衆　六
　寒の奇特の霰ふる風　道

手をのばす火燵の榧の紙袋　村
　妾の訴訟鼾かく也　六
うき戀の裸で逃る大百足　由
　蚊の六月の明安キ月　ソン
吹上の方より和哥の城を見て　道
　大阪駕籠で二十五貫目　山
はり上ゲて今を始の旅ごろも　六
　御前はしんと斗圭打出ス　道
蕎麦切と早速見ゆる花鰹　ソン

井つゝ屋庄兵衛板

三冊子（さんざうし）

白・赤・黒

土芳著

三冊子序

天地人の三才より和哥に三鳥の名にたちて、連誹に三物の祝ひぞめでたき御代のためしなれば、三都はいふもさらにして、いかなる鄙のすみかにも、家三ッあれば風人なきといふ事なし。されば、此の三草帋も伊賀の土芳叟が随聞記なるを、翁滅後三十年はいさしらず、半三十年は忘れ水の別名のごとく、後三十年は蠧のために朽ぬ。ちか比たまたま此書を得る輩は、玉のごとくこがね（黄金）のごとく、函底にかくすのみにして、道の爲にはならざりければ、今年梓にちりばむるに、もとより乙文の才なければ、五車韵瑞のほまれもなく、郝隆が腹中にもあらざれば、日に曬のたかぶりもなし。筆をとるにいとものうければ、三伏の夏すぎ初秋の凉しき比、おもむき而已をかく述るものなりけらし。

安永五丙申　半化房

闌更

しろさうし

俳諧は哥也。哥は天地開闢の時より有。陰神・陽神磤馭盧島に天下りて、まづめがみ、喜哉遇ニ可美少男ニとの給ふ。陽神は、喜哉遇ニ可美少女ニととなへ給へり。是は哥としもなけれども、心に思ふ事詞に出る所則哥也。故に是を哥の始とすると也。神代には文字定まらず、人の世と成てすさのを（素盞嗚）の尊よりぞ三十一字となれる。

八雲たつ出雲八重垣つまこめに
　やへがきつくるその八重垣を

此哥より定れると也。和國の風なれば和哥と云。和哥に連歌あり。俳諧あり。連歌は白川の法皇の御代に連歌の名有。此號の先は續哥と云。其句の數もさだまらず。日本武尊、東夷せいばつの下向、吾妻の筑波にて、

　新はりつくばをこへて幾夜かへぬる

と仰られければ、

　かゞなべて夜には九夜日には十日よを

と、火燈しの童の次侍る。是連歌の起とすといへり。業平いせの國かりの使の時に、齋宮、歩行人のわたれどぬれぬえにしあれば　と云上に、又逢坂の關は越なん　その盃の皿のついまつのすみして、哥の末を書付とあり。後鳥羽の院時、禪阿彌法師小林と云、連哥差合其外の句法式の書作れり。是本式なり。聯句法立也。是より新式あり。俳諧と云は黄門定家卿の云、利口也。物をあざむきたる心なるべし。心なきものに心を付、物いはぬものに物いはせ、利口したる躰也。

韻學大成に、鄭綮詩語多二俳諧一。俳は戲也、諧は和也。唐にたはむれて作れる詩を俳諧と云、又滑稽と云有。滑稽は管仲楚人答る也、本朝に一休和尚あり。是等は人に相當る答の辨の上にありて、いはゆる利口也。古今集にざれ哥を俳諧哥と定む。是になぞらへて連哥のたゞことを、世に俳諧の連歌といふ。

夫俳諧といふ事はじまりて代々利口のみにたはむれ、先達終に誠を知らず。中頃難波の梅翁自由をふるひて世上に廣しといへども、中分いかにしていまだ詞を以てかしこき名也。しかるに亡師芭蕉翁此道に出て三十余年、俳諧初て實を得たり。師の俳諧は名むかしの名にしてむかしの俳諧に非ず、誠の俳諧也。されば俳諧の名有て其物に誠無が如く、代々むなしく押移る事いかにぞや。師も此道に古人なしと云り。又故人の筋を見れば求るにやすし。今おもふ處の境も此後何もの出て是を見ん。我是たゞ來者を恐ると返々詞有。むかしより詩哥に名ある人多し。皆その誠より出て誠をたどるなり。我師は誠なきものに誠を備へ、永く世の先達となる。誠に代々久しく過て此時俳諧に誠を得る事、天正に此人の腹を待るや。師はいかなる人ぞ、連俳直一也。心詞共に連歌有。俳諧有。心は連俳に渡れども、詞は連俳別てむかしより沙汰仕をける事共有。俳無言と云書に、聲に云詞都而俳言也。連歌に出る聲のものあれども俳言の方也。屛風・几帳・拍子・律の調子・例ならぬ胡蝶など云類也。千句連哥に出る鬼女・龍虎その外千句のものゝ詞俳言也。連歌に嫌ふ詞の櫻木・飛梅・雲の峯・霧雨・小雨・門出・浦人・賤女などの詞、無言抄にも紹巴の聞書等にも數多みえ侍る。か様の

類みな俳言也。

　名にめでゝおれるばかりぞ女郎花

　　我落にきと人にかたるな

此哥僧正遍昭さが野の落馬の時よめる也。俳諧の手本なり。詞いやしからず心ざれたるを上句とし、詞いやしう心のざれざるを下の句とする也。先師のいはく、いにしへの俳諧哥雑躰あまたなれども、まめやかに思ひ入たる躰、

　おもふてふ人の心のくまごとに

　　立かくれつゝ見るよしもがな

　冬ながらはるの隣のちかければ

　　なか垣よりぞ花は咲ける

又いはく、春雨の柳は全躰連歌也。田にし取・烏は全く俳諧也。五月雨に鳰の浮巣を見に行くといふ句は、詞にはいかいなし。浮巣を見にゆかんと云所俳也。又霜月や鴻のつく／＼双居て　と云發句に、冬の朝日のあはれ也けり　といふ脇は、心・詞ともに俳なし。ほ句をうけて一首のごとく仕なしたる處俳諧なり。詞に有んに有。其外この句の類作意に有、信所一筋に思ふべからずと也。

詩哥・連俳はともに風雅也。上三のものは餘す所も、その餘す所迄俳はいたらずと云所なし。花に鳴鶯も餅に糞する椽先と、また正月もおかしきこの比を見とめ、又水に住む蛙も古池にとび込水の音といひはなして、草にあれたる中より蛙のはいる響に俳諧を聞付たり。見るに有。聞に有。作者感るや句と成る所は、則俳諧の誠也。俳諧の式の事は連哥の式より習て先達の沙汰しける也。連哥に新式有。追加ともに二條良基攝政作レ之。今案は一條禪閤の作。この三ツを一部としたるは肖柏の作と也。連に三と數ある物は四とし、七句去ものは五句となし、万俳諧なれば事をやすく沙汰しけると也。今案の追加に漢和の法有。是を大様俳諧の法とむかしよりする也。貞德の差合の書その外その書世に多し。その事をとへば、師、信用しがたしと云り。その中に俳無言といふ有。大様よろしと云り。差合の事もなくては調がたし。

師の門にその一書あれかしといへば、甚つゝむ所也。法を置と云事は重き所也。されども花のもとなどいはるゝ

名あれば、其法たてずしては其名の詮なし。代々あまた出侍れど、人用ひざれば何ッが爲ぞや。法を出して私に是を守れとは耻かしき所也。差合の事は時宜にもよるべし。先は大かたにして宜と也。たゞこゝろざしある門弟は直に談じて信用して書留るもの、密にわが門の法ともなさばなすべし。

戀の事を先師云々、むかしより二句結ざれば不レ用也。むかしの句は戀の詞を兼而集メ置、その詞をつゞり句となして、心の戀の誠を思はざる也。いま思ふ所は戀別而大切の事也。なすにやすからず。そのかみ宗砌・宗祇の比迄一句にて止事例なきにもあらず。此後所々門人とも談じて、一句にても置べき事もあらんかと也。又ある時云々、前句戀とも戀ならずとも片付がたき句ある時は、必戀の句を付て前句ともに戀にすべしと也。是には此句のみにてつゞいて戀にも及べからず。新式にも此沙汰あるよし也。然れども戀の事は分て其座の宗匠に任すべしと也。

旅の事ある俳書に師の曰、連哥に旅の句三句つゞき二句にてするよし。多くゆるすは神祇・尺教・戀・無常の句、旅にてはなるゝ所多し。今、旅・戀、難所にして又一ふし此所にある。旅躰の句はたとひ田舎にてするとも心を都にして、相坂を越へ淀の川舟にのる心持・都の便(たより)求る心など本意とすべしとは連の敎也とあり。又旅、東海道の一筋もしらぬ人風雅に覺束なしとも云へりと有。本歌を用る事新式に云々、新古今已來の作者を用べからずと也。八代集は古今・後撰・拾遺・後拾遺・金葉・詞花・千載・新古今是也。後土御門依レ勅新勅撰・續後撰二代を加へて十代集を本哥に取る。又堀川兩度の作者迄の哥は、十代の外の集たりとも、たとひ集にいらぬ哥也とも、作者の吟味有レ之かと云也。

又新式にいはく、人のあまねくしらざる哥をば付合に是を好むべからず。事により證哥には引用ゆべしと也。本哥と證哥と差別あり。本哥取といふは古哥の詞を取合て付るをいふ。證哥とは聊達有。或は一句余情又名所續合たる物を付るをいふ也。證哥はいづれの集にても可レ有事也。輪廻の事、新式に薫(タキモノ)といふ句にこがるゝと付て、また紅葉を付べからず。舟にて付べし。こがるゝといふ字かは

ある也。夢といふ句に面影と付て月花を付る事、面影ものと云て近代不レ付レ之、更無二其理一、曾以不レ嫌レ之。又たとへば花といふ句に風とも霞とも付て又不レ可レ付也。數句をへだつといふとも一座にて嫌レ之他准レ之。又竹と云句に世と付て、又竹出る時夜の字不レ付也。如レ此の類、遠輪廻也。あらしと云に山と付、次に富士など付ば取なして打越へ歸るたり。是を嫌、他准レ之。一卷の內似たる句嫌レ之なり。是遠輪廻也。等類の事おろそかにすべからず。師のいはく、他の句より先我が句に我が句等類する事をしらぬもの也。よく思ひ別て味べし。若わが句に障る他の句ある時は必わが句を引べし。趣向に表と裏の事あり。句にもよるべしとは言ながら、大樣のがして等類になさず取べし。ふるき連哥に、思はぬ方にちらす玉章　と云前句に、山風や枝なき花を送るらん　と有。この句山風の枝なき花を送るこそ全ちりたる躰、前句同意の連歌と沙汰しけるよし有。又いはく、

都をば霞とともに出しかど
秋風ぞよく白河のせき

都にはまだ靑葉にて見しかども
もみぢちりしく白川の關

此哥の事、師のいはく、いにしへより色をわかちたる作意によりて等類のがれたると云來る也。さもあるべし。今師の思ふ所、後のうた、卯月比都を出て十月に及び白川に至り、紅葉のちり敷たるを見て前の能因法師の哥を思ひ出し、彌その哥の妙所を感徳（得）したりと云心より詠る哥なるべし。是にて等類よくのがるゝと云り。切字の事師のいはく、むかしより用ひ來る文字ども用べし。連俳の書に委くある事也。切字なくてはほ句の姿にあらず、付句の躰也。切字を加へても付句の姿ある句あり。誠に切たる句にあらず。又切字なくても切る句有。其分別切字の第一也。その位は自然としらざればしりがたし、猶口傳あり。師常に道を大切にして示されし也。あこくその心はしらず梅の花　と云句をして切字を入る事を案じられし傍にありて、此句は切字なくて切るやうに侍ると云ば、切る也。されども切字はたしかに入たるよし、初心の人の道のまどひに成てあるゝ。つねにつゝしむべし。ま

してさせる事もなき句は、句を思ひやむとも常にたしなむべしと示されし也。

文章の事、師のいはく、惣名を文章といふ也。序に由序・來序・內序といふ三躰あり。由は起るよしを書、來は是より先の事を書、內はその書の內の事を書也。此三躰をひとつにして序一ッにも書る也。跋はふみとゞまる也。序あつて跋あり。序も跋もその云所同じ。跋は序を猶委しく云たる物也。ふみとまりて委しくするの心也。序・跋ともに年號月を書。五字・七字書は長哥の格也。七五三などゝ地の詞亂に書。あるひは對ある時は必對を置く。古事を置時は古事の對、野山・水邊・生類等おの／＼對同前也。詞書その書樣和にならひなし。漢には其綾もある事と也。記は其物を記すの心也、格は序跋に同じ。意の違のみ。銘は前に同じ。意の違のみ。贊はほむるの心也。卽山吹に句をする時は山吹をほめて贊也、山吹を褒美の義理也。惣而文章に書時四五字／＼に書、大かたの格也。

句合判の事、衆議判と云は連中の打寄詮儀批判するを云也。蛙合は衆議判の格也。別に判者もしかとなし。ほん判といふ時は、判者奥に跋にても又序にても書なり。句引までも付る也。哥に哥合有。卽座の判・兼而の判もあり。卽座の判は左右に文臺を立て判者あり。難陳（ナンチン）あつて判者是を聞。それにもかゝはらず判を書也。卷頭は多くは持のもの也。

懷紙の事は百韵本式也。五十韵・哥仙みな略の物也。連歌の古式は表十句・名殘の裏六句・月七句去・花裏表に一本宛・表の內名所必一有。今も淸水連哥は此如しとなり。師のいはく古法表十句の例を守て八句の後二句過る迄、表に嫌ふもの〻類連歌に今にせず、俳にはくるしからず。連哥に龍虎・鬼女さし出たる類表の內嫌。俳諧にも鬼女はなりがたし。龍虎はくるしからず。その外人を殺す・切る・しばるなどの類は用捨すべし。百韵一所に過べからずと師の云也。又戀の詞・述懷の類・祝言に云たる句は表の內いかゞ侍らんとたづねる時、師のいはく、句によるべし。文字はくるしからず。祝言にいひなすとても、人のうへに云はいよ／＼述懷也。花のさびしきの類はくるしからず。崩し壁に下る夕顔などゝ歪の貧家を移す句は用捨

すべし。他人の句はとがむまじと也。又戀・無常其外嫌ふ古事、本說を下心にして表にあらはさず。又他物のうへにかり用ひたるなどの句の類いかゞ侍らんと云ば、師のいはく、大形は表に嫌ふべし。事にもよるべき事ながらいづれとても心嫌也。詞に出さずして心の下に嫌ふ事を持たるは作者淸からず。心きたなし。一向にうち出て云たるかた然るべし。されども表の躰にあらざれば常にくるしからず、うち出せといふにはあらずと云り。又古今の人の名、表に出す事いかゞ侍らんとたづねしに、師の云、今の人の名はつゝしむべし。古人の名は物によりてくるしかるまじ。されども好がたし。心嫌也と云り。懷紙に戀をなくていかゝしく、むかしより沙汰し來る。なくてかなはざる事か。好む心はいかゞにと云は、此事は知て大切の事也。懷紙に戀を目立る事、神代より日本はじまるの例也。戀なくては詮なき事也。つゝしむべしと也。
師のいはく、たとへば哥仙は三十六歩也。一歩もあとに歸る心なし。行にしたがひ心の改はたゞ先へ行心なれば也。發句の事は一座、卷の頭なれば初心の遠慮すべし。八雲御抄にも其沙汰有。句姿も高く位よろしきをすべしとむかしより云侍る。先師は懷紙のほ句かろきを好れし也。時代にもよるべき事にや侍らん。又古來より新宅の會に燃る・燒など火の噂、追悼にくらき・道迷ふ・罪・とが、船中に歸る・しづむ・浪風等の類いむべき心遣ひと也。五躰不具の噂一座に差合事思ひめぐらすべし。ほ句のみに不限其心得あるべし。脇は亭主のなす事むかしより云。しかれども首尾にもよるべし。客ほ句とて、むかしは必客より挨拶第一にほ句をなす。脇も答るごとくにうけて挨拶を付侍る也。師のいはく、脇、亭主の句を云る所卽挨拶也。雪月花の事のみ云たる句にてもあいさつの心也との敎也。ほ句に三月に渡る景物出る時は、わきにて當季を定むべし。是は連歌の習也。俳にも其心遣ひ也。師のいはく、ほ句に神祇・尺敎其外一事ある時は應じて脇すべし。たとへ詞に出さずとも心にはあるべし。但水祝などの季一通りにして云句は、脇に戀なくてもあるべし。たゞほ句に依べし。對付・違付・うち添ひ留の類むかしより云置所也。師云、第一ほ句をうけてつりあひ事にうち添て付る

よし。句中に作を好む事あるべし。留りは文字すはり宜すべし。かな留ﾒ自然にある心得口決あり。第一應對合体の心とおもふべし。作者心得べきは、先ほ句出るとよく聞しめさせる事見えずとも、作者より句意をあらはすやうに挨拶してよく聞ふせて脇すべし。心とゞかざれば無禮にして無下成事也。たとへば連哥のほ句は聯句の唱句也。脇は對也。此格を以て文字留也。詩聯句に習て韵といふ也。第三は師の曰、大付にても轉じて長高くすべしとなり。或書に、留りの事むかし沙汰なし。宗祇よりの格式也。常用る通りなり。疑の切字のほ句の時は第三はね字にとめずと古來云り。うたがひの句二句去故也。覽(らん)はうたがひのはね字なり。句中に押へ字あり。や・か・いつ・何などの類也。又句によりて押字なくてはねるあり。一字はね也。をらん・ちらんの類也。哉留りのほ句の第三にて留ﾒせずとむかしより云り。是治定の哉故にせずと也。花のさかり哉・月の光哉の類也。盛ッにて・ひかりにてといふにかよふ也。先師のいはく、にてになるに留ﾒくるしからず。にて留は嫌ふべしとなり。文字留・手爾葉留自然にあり。古法口傳有事也。一說、古書にあるは脇の句韵字留ッゆへ、懷帋に文字留り(並)ならばざるやうに留也。若、脇、手爾葉にて留ﾒば第三文字留にて留るとも云り。かくの事は達人に有。常の留をよしとす、是此道の習也。第三は轉ずるを專とすれども脇の句によるべし。達付・取なし付等の句の時は、第三にて轉ずるにおよばざる事なり。ほ句、戀・神祇等のものにて脇是に應ずる時、第三に至り必是を轉じ、はなれてすべし。師の說也。四句めはむかしより四句めぶりなど云て、やすくかるきをよしとす。師のいはく、重きは四句目の体にあらず、脇にひとし。句中に作をせずと也。古事・本說など嫌ふ事也。春秋の季つゞき、四句目にて花月の句をする事必あるまじとの師說也。五句め・七句めの事、三(み)て五覽(ごらん)などゝ古說あり。七句めも同じ心得也。第三の後一順上の句を賞とす。中にも月の座は名ある所也。老分に當べし。同字を表に嫌ふも懷紙をたしなむ所也。て留・はね字留は句の一体表道具と也。裏に成て四春八木と連歌に古說あり。四句め春をせず、八句めに高うへ(植)物せず、花につかゆる遠慮也。俳諧も

其心得也。他の句を返すには不レ及。春出ば花を付べし。是呼出しの花となり。花の前句に秋の字用捨すべし。戀の花はむつかしきわざと連哥に祕して、前句よりつゝしむと也。俳其沙汰なし。月の定座をこぼす事、師のいはく、五十句より内にはあるべからず。奥に至つては少の興にも成るものなり。哥仙はくるしかるまじ、略の物故也。月の座・月の字有時も差合たる時は異名にてすべし。異名の仕かた人〻の作意にあるべしと師の詞也、又師のいはく、月は上句勝たるべし。落月・無月の句つゝしむべし。時によるべし、法にあらずと也。星月夜は秋にて賞の月にはあらず。もしほ句に出る時はす（素）秋にし、他季にて有明などする也。月といふ字に五句隔と新式にあり。師の曰、表に月二ッ稀に有。此時は月數八ッ也。名の裏はまれにも月なしと也。花の事は、花四本の内下の句は一句ばかり、定座まれにもこぼす事なしと也。賞花の句、前句への付心か。又その一句の心か。實は梅・菊・牡丹など下心にして仕立、正花になしたる句、その木草にしたがひ季を持たすべきか。或は正月に花を見る、また九月に花咲など云句いかゞと云ば、師の曰、九月に花咲などいふ句は非言也。なき事也。たとへ名木を隱して花と計云とも正花也。花といふは櫻の事ながら都而春花をいふ。是等を正花にせずしては花の句多く出る賞輕しと也。宗祇の時代迄百韵花三本也、雨一ッ也。宗長の時にいたり、匂ひの花一本・雨一ッ勅許を蒙り度旨奏聞せられて、花四本・雨二ッには究り侍る。連哥の式と師の詞也。裏一順の事も初のごとくかろ〴〵とあるべし。句なみを追ふにも不レ及と也。揚句は付ざるよしと古說有。今一句に成て一座興覺る故也。また兼て案じ置とも云り。ほ句主并に亭主のする所にあらず。初の一順に執筆の句なくば揚句を筆にすべし、ほ句にある文字をつゝしむと也。にほひの花にて春季五句に至るとも揚句に季をはなすべからず。たとへ季六句に及てもすべしと也。いづれの季・戀にても揚句此心得なり。句ぶり心得あるべし。

あかさうし

師の風雅に万代不易有。一時の變化あり。この二ッに究り、其本一なり。その一といふは風雅の誠也。不易をしらざれば實に知れるにあらず。不易といふは新古によらず、變化流行にかゝわらず、誠によく立たる姿也。代々の哥人の哥を見るに代々その變化あり。又新古にもわたらず、今見る所むかし見しにかはらず、あはれなる哥多し。是先不易と心得べし。また千變万化するものは自然の理なり。變化にうつらざれば風あらたまらず。是に押移らずと云は、一端の流行に口質時を得たる斗にて、その誠をせめざる故也。せめず心をこらさゞるもの誠の變化を知ると斗云事なし。唯人にあやかりて行のみ也。せむるものはその地に足をすへがたく、一歩自然に進む理也。行末いく千變万化するとも、誠の變化は皆師の俳諧也。かりにも古人の涎をなむる事なかれ。四時の押移如く物あらたまる。皆かくのごとしとも云り。師末期の枕に門人此後の風雅をとふ。師の曰、此道のこゝに出て百變百化す。しかれどもその境、眞草行の三ッをはなれず、その三ッが中にいまだ一二をも不レ盡と也。生前折〳〵のたはむれに俳諧いまだ俵口をとかずとも云出られし事度々也。高くこゝろをさとりて俗に歸るべしとの教なり。常に風雅の誠をせめたどりて、今なす處俳諧に歸るべしと云也。常風雅にいるものは、思ふ心の色、物となりて句姿定るものなれば、取物自然にして子細なし。心のいろうるはしからざれば、外に詞をたくむ。是則常に誠を勤ざる心の俗也。誠を勤るといふは、風雅に古人の心を探り、近くは師の心よく〳〵知べし。其心をしらざれば、たどるに誠の道なし。その心を知るは、師の詠草の跡を追ひ、よく見知て即我心の筋押直し、爰に趣て自得するやうにせめる事を、誠を勤るとは云べし。師のおもふ筋に我心をひとつになさずして、私意に師の道をよろこびて、その門を行と心得がほにして私の道を行事あり。門人よく己を押直すべき所也。松の事は松に習へ竹の事は竹に習へと、師の詞のおりしも私意をはなれよといふ事也。この習へといふ所を

おのがまゝにとりて終に習はざる也。習へと云は物に入てその微の顯て情感る也、句となる所也。たとへ物あらはに云出ても、そのものより自然に出る情にあらざれば、物と我二ツになりて其情誠にいたらず、私意のなす作意也。唯師の心をわりなくさぐれば、そのいろ香我心の匂ひとなり移る也。詮義せざれば探るに又私意あり。せんぎ穿鑿せむるものは、しばらくも私意になるゝ道あり。たゞおこたらずせんぎ穿さくすべし。是を專用の事として名を地ごしらへと云、風友の中の名目とす。功者に病あり。師の詞にも俳諧は三尺の童にさせよ、初心の句こそたのもしけれなどゝ、たび〱云ひ出れしも皆功者の病を示されし也。實に入に氣を養ふところすあり。氣先をころせば句氣にのらず。先師も俳諧は氣にのせてすべしと有。相槌あしく拍子をそこなふともいへり。氣をそこなひころす事也。又ある時は我が氣をだまして句をしたるよしともいへり。みな氣をすかし生て養の敎也。門人功者にはまりてたゞ能句せんと私意を立て、分別門に口を閉て案じ草臥る也。おのが習氣をしらず、心のおろかなる所也。多年俳諧好たる人より、外藝に達したる人はやく俳諧に入るとも師の云るよし、ある俳書にもみへたり。師のいはく、學ぶ事はつねに有。席に望て文臺と我と間に髪をいれず、思ふ事速に云出て、爰に至て迷ふ念なし。文臺引おろせば卽反古也と、きびしく示さるゝ詞もあり。或時は大木倒すごとし。鍔本に切込意得(こゝろえ)、西瓜切る如し。梨子くふ口つき、三十六句皆やり句などゝ、いろ〱にせめられ侍るも皆功者の私意を思ひやぶらせんとの詞也。師の心をよく執行し、つねに勤て事にのぞみて案じころす事なかれ。案ずるばかりにて出る筋にあるべからず。常勤て心の位を得て感るもの、動くやいなや句となるべし。氣をころしては心轉ぜず、則轉る心細くなりては、貫之がいと筋の幽なるものふとく、轉じては傳敎大師の三みやく三の丈夫心不ㇾ成と云事有まじ。皆いきて轉ずるに顯はるゝ筋なるべし。

新みは俳諧の花也。ふるきは花なくて木立ものふりたる心地せらる。亡師常に願にやせ給ふも新みの匂ひ也。その端を見しれる人を悦て、我も人もせめられし所也。せめ

て流行せざれば新みなし。新みは常にせむるがゆへに、一歩自然にすゝむ地より顯るゝ也。名月に梺の霧や田のくもり　と云は姿不易なり。花かと見えて綿畠　とありしは新み也。

師の曰、乾坤の變は風雅のたね也といへり。靜なるものは不變の姿也。動るものは變也。時としてとめざればとゞまらず。止るといふは見とめ聞とむる也。飛花落葉の散亂るも、その中にして見とめ聞とめざればおさまるとなし。その活たる物だに消て跡なし。又句作りに師の詞有。物の見えたるひかり、いまだ心にきえざる中にいひとむべし。又趣向を句のふりに振出すといふとあり。是その境に入て物のさめざるうちに取て姿を容る敎也。句作になると、するとあり。內をつねに勤て物に應ずれば、その心のいろ句となる。內をつね勤ざるものは、ならざる故に私意にかけてする也。

師のいはく、体格は先優美にして一曲有は上品也。又たくみを取、珍しき物によるはその次也。中品にして多は地句也。師の句をあげて、そのより所をいさゝか顯す。

何の木の花とはしらず匂ひかな

此句は本哥也。西行、何事のおはしますとはしらねどもかたじけなさの涙こぼるゝ、とあるを俤にして云出せる句なるべし。

有明の三十日にちかしもちの音

此句は兼好、有とだに人にしられぬ身のほどや見そかにちかき有明の月　とある本哥を余情にしての作なるべし。

明の月　高水に星も旅寐や岩のうへ

此句は小町が、石の上に旅寐をすればいとさむし苔の衣を我にかさなん　と云心を取ての句なるべし。

ほとゝぎすなくや五尺のあやめぐさ

此句は、ほとゝぎすなくや五月のあやめ草　といふ哥の意を取ての句なるべし。

花のうへこぐさよみ給ひける古きさくらも、いまだ蚶滿寺のしりへに殘りて、影涙を浸せる夕ばへいと涼しければ

夕はれやさくらに涼む浪の華

此句は古歌を前書にして、其心を見せる作なるべし。

　ほとゝぎす聲横たふや水の上

此句はさせる事もなけれども、白露横といふ奇文を味合たると也。一たびは聲や横たふとも、一聲の江に横たふやとも句作有。人にも判させて後、江の字抜て水の上とくつろげて、句の匂ひよろしき方定る。水光接レ天白露横レ江の横、句眼なるべしと也。

　廿日あまりの月かすかに、山の根ぎはいとくらく、駒の蹄もたど〳〵しくて、落ぬべきあまたゝびなりけるに、數里未だ鷄鳴ならず。杜牧が早行の殘夢小夜の中山にておどろく。

　馬に寐て殘夢月遠し茶の煙

此句古人の詞を前書になして風情を照す也。初は、馬上眠からんとして殘夢殘月茶の煙　と有を一たび、馬に寐てと初五文字をしかへ、後又句に拍子有てよからずとて、月遠し茶の煙　と直されし也。

　ちる花や鳥もおどろく琴の塵

この若葉の卷によりて、詞を用ひられし句なるべし。

　粽結ふ片手にはさむ額がみ

此句物がたりの躰と也。去來集撰の時、先師の方より云送られしは、物がたりの姿も一集にはあるべきものとて送ると也。

　　此境はひわたるほどゝいへるもこゝの事にや。

　かたつむり角ふりわけよ須磨明石

此句は須磨の卷の詞を前書にしての句なり。

　觀音のいらか見やりつはなの雲

此句の事、或集にキ角云、鐘は上野か淺草かと聞えし前のとしの吟也。尤病起の眺望成べし。一聯二句の格也。句を呼て句とすとあり。さもあるべし。

　朝皃や晝は錠おろす門の垣

　碪うちて我に聞せよや坊が妻

　枯枝に烏のとまりけり秋の暮

此句ども字餘り也。字餘りの句作の味ひは、その境にい

らざればいひがたしと也。かの、人は初瀨の山おろしよと有、文字餘の事など云出て、なくてなりがたき所を工夫して味ふべしと也。

初雪にうさぎの皮の髭つくれ

此句、山中に子どもと遊びてと前書あり。初雪の興也。ざれたる句は作者によるべし。先は實体也。猶あるべし。

節季候のくれれば風雅も師走哉

此句、風雅も師走哉　と俗とひとつに云ひ侍る。是先師の心の人の句に藏やけて　と云句有。とぶ蝶の羽音やかまし　といふ句あり。高くいひて甚心俗也。味べし。

早稻の香やわけ入右はありそ海

一おねは時雨るゝ雲か雪の不二

この句、師のいはく、若大王に入て句をいふ時は、その心得あり。都に名ある人かどの國に行て、くんせ川とかいふ川にて、こりふむと云句あり。たとへ佳句とても其信をしらざれば也。有そもその心遣ひを見るべし。又不二の句も山の姿是程の氣にもなくては、異山とひとつに成べし。

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁

この句、師のいはく、たくみにて云る句にあらず。ふと云てよろしと跡にてしりたる句也。かくのごくの句は、又せんとは云がたしと也。東武におもむく人に對しての吟也。梅若なと興じて、まりこの宿にはといひはなして當たる一躰なり。

二日にもぬかりはせじな花の春

この句は、元日ひるまでいねてもちくひはづしたりと前書あり。此句の時師の曰、等類氣遣ひなき趣向を得たり。此手爾波は二日にはといふを、にもとは仕たる也。にはといひては、あまり平目に當りて聞なくいやしと也。其角、たびうりにあふうつの山　といふも、あはんといふ所をあふとは云るゝ。喜撰が、人はいふ也の類なるべし。

せりやきや緣輪の田井の薄氷

この句、師のいはく、たゞおもひやりたる句也と也。芹やきに名所なつかしく思ひやりたるなるべし。

御子良子の一本ゆかし梅の華

此句は一とせいせに詣て、老師梅の事をたづねしに、子良

の舘のあたりに漸一本ふるき梅あり。その外に會てなしと社人の告けるを、則句としてとあられし也。師のいはく、むかしより此所に連俳の達人多く句をとゞむに、終に此梅のことをしらずと悦ばしく聞出ける也。風雅の心がけより此事とゞまるを思ひしれば、やすからぬ所也。

とぎ直す鏡も清し雪の花

梅こひて卯の花拜むなみだ哉

此雪の句は熱田造營の時の唫也。とぎ直すと云て其心をやすく云顯し、其位をよくする。梅は圓覺寺大顚和尚遷化の時の句也。その人を梅に比して、爰に卯の花拜むとの心也。物によりて思ふ心を明す。そのものに位を取。

稲妻を手に取るやみの紙燭かな

この句、師のいはく、門人この道にあやしき所を得たるものにいひて遣す句也となり。そのあやしきをいはんと、取物かくのごとし。万心遣ひして思ふ所を明すべし。

旅人とわが名呼れん初しぐれ

此句は師武江に旅出の日の吟也。心のいさましきを句のふりにふり出して、よばれん初しぐれ　とは云しと也。いさましき心を顯す所、謠のはしを前書にして書のごとく章さして、門人に送られし也。一風情あるもの也。この珍らしき作意に出る師の心の出所を味べし。

何に此師走の市に行鳥

此句、師のいはく、五文字のいきごみに有となり。

ほとゝぎす正月は梅の花さかり

此句はほとゝぎすの初夏に、正月に梅咲ることをいひはなして、卯月なるか、ほとゝぎすの聲はと願ふ心をあましたる一体也。

塩鯛の齒ぐきも寒し魚の棚

此句、師のいはく、心遣はずと句になるもの自賛にたらずと也。鎌倉を生て出けん初鰹　といふこそ、心のほね折人のしらぬ所也。又いはく、猿のは白し峯の月　といふは其角也。塩鯛の齒ぐきは我老吟也。下を魚の棚とたゞ言たるも自句也といへり。

春立や新年ふるき米五升

此句、師の曰、似合しやとはじめ五文字あり。口惜事也といへり。其後は、春立や　と直りて短冊にも殘り侍る也。

はせを野分盥に雨を聞夜かな

いざゝらば雪見にころぶところまで

木がらしの身は竹齋に似たるかな

山路來て何やら床しすみれ草

家はみな杖に白髮のはか參り

灌佛や皺手合る珠數の音

此野分、はじめは野分してと二字餘り也。雪見、はじめはいざゆかんと五文字有。木枯、初は狂句木がらしのと餘して云へり。すみれ草は、初は何となく何やら床しと有。家はみな、一家みなと有。灌佛も初は、ねはん會と聞へし後なしかへられ侍るか。此類猶あるべし。皆師の心のうごき也。味ふべし。

猪の床にも入るやきり〴〵す

この句自筆に有。初は、床に來て鼾に入るやきり〴〵すといふ句あり、なしかへられ侍るか。

草臥て宿かる比や藤のはな

此句始は、ほとゝぎすやどかる比や　と有。後直る也。

風色やしどろに植し庭の秋(萩)

此句ある方の庭を見ての句也。風吹とも一たび有。風色やとも云り。度〻吟じていはく、色といふ字も過たるやうなれども、色といふ方に先すべしと也。

こんにやくにけふはうりかつ若な哉

この句、はじめは蛤になどゝ五文字有。再吟して後こんにやくになり侍ると也。

鞍つぼに小坊主のるや大根引

此句、師のいはく、のるや大根引と、小坊主のよく目に立つ處句作ありとなり。

六月や峯に雲おくあらし山

この句落柹舍の句也。雲置嵐山といふ句作、骨折たる處といへり。

川風やうす柹着たる夕涼み

此句すゞみのいひ樣、少心得て仕たりと也。

雲雀鳴中の拍子や雉子の聲

此句、ひばりの鳴つゞけたる中に、雉子折〳〵鳴入るけしきをいひて、長閑なる味をとらんといろ〳〵して是を究。

からざけも空也の瘦も寒の内

この句師のいはく、心の味を云とらんと、數日はらわたをしぼると也。ほね折たる句と見え侍る也。

蛇くふときけばおそろし雉子の聲

此の句、師のいはく、うつくしき㒵かく雉子の蹴爪かなといふは其角が句也。蛇くふといふは老吟也と也。

木のもとは汁も鱠もさくら哉

この句の時、師のいはく、花見の句のかゝりを少し得て、かるみをしたりと也。

たが聟ぞしだに餅負ふ牛の年

此句は丑の日のとしの歳旦也。此古躰に人のしらぬ悦ありと也。

七夕や秋を定むるはじめの夜

此句、夜のはじめ・はじめの秋、此二に心をとゞめて折〳〵吟じしらべて、數日の後に、夜のはじめとは究り侍る也。

丈六のかげろふ高し石の上

かげろふに俤つくれ石のうへ

此句當國大佛の句也。人にも吟じ聞せて、自も再吟有て、丈六の方に定る也。

明ぼのや白魚白きこと一寸

この句はじめ、雪薄しと五文字あるよし、無念の事也といへり。

とし〳〵や猿にきせたる猿の面

此歳旦、師のいはく、人同じ處に止て、同じ處にをらで落入る事を、悔ていひ捨たるとなり。

牛部屋に蚊の聲くらき殘暑哉

此句、蚊の聲よはし秋の風と聞へし也。後直りて自筆に殘暑かなとあり。

梅が香にのつと日の出る山路哉

なまぐさし小なぎが上の鮠の腸

此二句、ある俳書に、梅は餘寒・鮠の腸は殘暑也、是を二体の趣意といはんと門人のいへば、師、尤とこたへられ侍ると也。

ひや〳〵と壁をふまへて晝寐哉

是も殘暑と、かの門人いへば、師宜と也。

秌風の吹とも靑し栗のいが

此句いがの青をおかしとて句にしたる也。吹とも靑しと云ふ所にて、句とはなして置たりと也。

　馬ほく〳〵我を繪に見る夏野哉

此句はじめは、夏馬ほく〳〵我を繪に見る心かな　と有、後直る也。

　金屛に松のふるびや冬籠り

此句はじめは、山を繪書て冬籠り也。後直し也。

　秋風や桐に動てつたの霜

此句、梧うごく秋の終りや蔦の霜　とはじめは聞侍る。後直りて此秋風也。

　團扇とつてあふがん人の後ろむき

此句、集ども、うちわもてと五文字して下の五文字、後むき・せなかつきと有。後改るか。この句盤齋の後むきの像の賛也。

　窓形に晝ねのござや簟

此句、淵明をうらやむと前書あり。はじめは、晝寐の臺やと中の七あり。

　一とせに一度つまるゝ若菜哉

此句、その春文通に聞え侍る。その後直にたづね侍れば、師の曰、其比はよく思ひ侍るが、あまりよからず、うち捨しと也。

　　旅懷

　此秋は何でとしよる雲に鳥

此句、難波にての句也。此日朝より心にこめて、下の五文字に寸〻の腸をさかれし也。

　明月や座にうつくしき皃もなし

此句、湖水の名月也。名月や兒達双ぶ堂の緣　としていまだならず、名月や海にむかへば七小町　にもあらで、座にうつくしきといふに定る。

　蘭の香や蝶の翅に薫(たきもの)す

此句は、ある茶店の片はらに道やすらひしてたゝずみありしを、老翁を見知り侍るにや。内に請じ、家女料紙持出て句を願ふ。其女のいはく、我は此家の遊女なりしを、今はあるじの妻となし侍る也。先のあるじも鶴といふ遊女を妻とし、其比、難波の宗因此處にわたり給ふを見かけて、句をねがひ請たると也。例おかしき事までいひ出て、

しきりにのぞみ侍ればいなみがたくて、かの難波の老人の句に、葛の葉のおつるの恨夜の霜　とかいふ句を前書にして、この句遣し侍るとの物がたり也。其名をてうといへばかくいひ侍ると也。老人の例にまかせて書捨たり。さのこと侍らざればなしがたき事也と云り。

秋もはやはらつく雨に月の形り

此句はじめは、昨日からちよつ〱と秋も時雨哉　と句作り有。いかにおもひ給ひ侍るにや、いろ〱句作りして心見（試）らるゝ反故の筆すさみ有。終に月の形と自筆の物にも残しをかれ侍る也。

皃に似ぬ發句も出よはつ櫻

此句は下のさくらいろ〱置かへ侍りて、風与（ふと）初ざくらに當り、是初の字の位よろしとて究る也。

朝露によごれて涼し瓜の泥

此句は、瓜の土　とはじめあり。涼しきといふに活たる所を見て、泥とはなしかへられ侍るか。

人聲や此道かへる秋のくれ

此道や行人なしに秌の暮

此二句、いづれかと人にもいひ侍り。後、行人なしといふ方に究り、所思といふ題をつけて出たり。

淸瀧や浪にちり込靑松葉

此はじめは、大井川浪にちりなし夏の月　と有。その女が方にての白菊のちりにまぎらはしとて、なしかへられ侍る也。

桐の木に鶉なくなる塀の内

この句いかゞ聞侍るやとたづねられしに、何とやら一さまある事に思ふよし答へ侍れば、いさゝか思ふ處ありて歩みはじめたると也。

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

此句病中の吟にて句の終り也。猶、かけ廻る夢心　といふ句作有。いかに思ひ侍るやと人にもいひて、後此句に定ると也。枯尾花に其角がかける、かれ野を廻る夢心　ともせばやといへるとあり。笈日記に猶、かけ廻るとあり。

朝よさを誰松しまの片心

此句は季なし。師の詞にも名所のみ、雜の句にもありたし。季をとりあはせ哥枕を用る、十七文字にはいさゝか

心ざし述がたしといへる事も侍る也。さの心にてこの句もありけるか。猶杖つき坂の句有。
門人の句に、元日や家中の禮は星月夜　といふ有。たゞ門松に星月夜と斗する句也。味ふべしと也。
同、松風に新酒を澄す山路哉　といふ句有。山路を夜寒にすべしといへり。その夜の道の戻りに、集などに若出す時は、はじめの山路しかるべしと也。
同、花鳥の雲に急ぐやいかのぼり　といふ句有。人のいへるこの句聞がたし。よく聞ゆる句になし侍れば句おかしからず、いかにといへば、師の曰、いかのぼりの句にしてしかるべしと也。聞の事は何とやらおかしき所有を宜とす。此類の事はある事なり。むかしの哥にも、小男鹿のいるのゝ薄初尾花いつしか君がたまくらにせん　と云もその類也。聞とげざれどもあはれなる歌也といひならはしたるとなり。
同、都にはぶりぶりすらん玉の春　といふ句有。これは玉の字分別あり、かくすも無念なるわざとて、結句いひ顯したる句といへり。

同、ぬしやたれふたり時雨に笠さして　といふ句あり。是は初五理屈也、なしかゆべしと有。後、跡に月とはいかゞと云ば、宜と也。
同、時なる哉柊旅客は笠の端にさゝん　といふ句あり。初の詞過たり。柊をと斗(まかり)すべしと也。
同、鶯に橘見する羽ふき哉　といふ句あり。下の五文字、師の手筋よく思ひ知たるはと也。四ッ五器のそろはぬ花見心かな　と云も爰なるべしと也。
同、春風や麥の中行水の音　といふ句あり。景氣の句なり。景色は大事の物也。連哥に景曲といひ、いにしへの宗匠ふかくつゝしみ、一代一兩句に不レ過、初心まねよき故にいましめたり。俳には連哥ほどにはいまず。惣而景氣の句はふるびやすしとて、つよくいましめ有也。此春風、景曲第一也とて、かげろふいさむ花の糸口　といふ脇して送られ侍ると也。哥に景曲は見様躰に屬すと定家卿もの給ふと也。寂蓮の急雨・定頼卿の宇治の網代木、是見様躰の哥とある俳書にあり。
師の曰、俳諧之連哥といふは、よく付といふ字意也。心敬

僧都の私語にも、前句に心のかよはざるは、たゞむなしき人のいつくしくさうはきてならびゐたるなるべしと、ある俳書ニ有。又付の事は千變万化すといへども、せんずる所只俤と思ひなし、景氣此三に究り侍るよし、師のいへるとも有。又ある時師の詞に、躰はさま〴〵有といへども、世上二三躰に過ず。今思ふ所十二躰には見へ侍る也。物にも書留んや。此後こゝに究め侍るやうに人こゝに留らんか。しかれば書留るにもいたらずとて事やみ侍る也。師の曰、付といふ筋は、匂・響・俤・移り・推量などゝ形なきより起る所也。こゝろ通ぜざれば及がたき所なり。師の句を以て其筋のあらましをいはゞ、

あれ〳〵て末は海行野分かな
鶴のかしらをあぐる粟の穂

鳶の羽もかいつくろはぬ初しぐれ
一吹風の木の葉しづまる

此脇二は、前後付一躰の句也。鶴の句は、野分冷(すさま)じくあれ、漸おさまりて後をいふ句なり。靜なる体を脇とす。木のはの句はほ句の前をいふ句也。脇に一あらし落葉を亂し、納りて後の鳶のけしきと見込て、發句の前の事をいふ也。ともにけしき句也。

寒菊の隣もありやいけ大根
冬さし籠る北窓の煤

此脇、同じ家の事を直に付たる也。内と外の様子也。煤の字有て句とす。

しるべして見せばやみのゝ田植うた
笠あらためん不破の五月雨

此脇、名所を以て付たる句也。心は不破を越る風流を句としたる也。

秋の暮行先〳〵の苫屋(とまや)かな
荻にねようか萩に寐ようか

此脇、發句の心の末を直に付たる句なり。

菜種干ス莚の端や夕涼み
螢迯行あぢさいのはな

此脇、發句の位を見しめて事もなく付る句也。同前(おなじ)栽其あたりの似合(にあはしき)敷物を寄。

霜寒き旅寐に蚊屋を着せ申

古人かやうの夜の木がらし

此脇、凩のさびしき夜、古へかやうの夜あるべしといふ句也。付心はその旅寐心高く見て、心を以て付たる句也。

おくそこもなくて冬木の梢哉

小春に首の動くみのむし

この脇、あたゝかなる日のみの虫なり。あるじの貌に客悦のいろを見せたるはたらきを付たる句也。

市中は物の匂ひや夏の月

あつしくと門ゝの聲

此脇、匂ひや夏の月と有を見込て、極暑を顯して見込の心を照す。

いろくの名もまぎらはし春の草

うたれて蝶の目をさましぬる

此脇は、まぎらはしといふ心の句に、しきりに蝶のちり亂るゝ様思ひ入て、けしきを付たる句也。

折くや雨戸にさはる萩の聲

はなす所におらぬ松むし

この脇、發句の位を思ひしめて、句よろしく事もなく付たる句也。

緣の草履の打しめる春

石ふしにおそき小鮎をより分て

此句、氣色を付とす。一句床夏の卷の俤也。うちしめるといふに寄る。

夕皃おもく貧居ひしける

桃の木にせみ啼比は外に寐ん

一句、付ともに古代にして、其匂ひ萬葉などの俤なり。

笹の葉に徑埋て面白き

頭うつなと門の書付

これ一句隱者の俤也。前句のけしきに其所を寄せ、句意新みあり。

龜山やあらしの山やこの山や

馬上に醉てかゝえられつゝ

前句のやの字響き、ともに醉てそゞろなる躰を付顯す。

一句風狂人の俤也。

野松に蟬の啼立る聲

歩行荷持手ぶりの人と噺して

前句のなき立る聲といひはなしたるひゞきに、勢ひを思ひ入てうち急ぐ道行人のふり、事なく付たる匂ひ宜し。

　青天に有明月の朝ぼらけ
　湖水の秋の比良のはつ霜

前句の初五の響に心を起し、湖水の秋・比良の初霜と、清く冷じく大成る風景を寄。

　　僧やゝ寒く寺に歸るか
　猿引の猿と世を經る秋の月

この二句別に立たる格也。人の有様を一句として、世のありさまを付とす。

　　こそ／＼と草鞋を作る月夜さし
　蚤をふるひに起るはつ秋

こそ／＼といふ詞に夜の更て淋しき様を見込、人一寐迄夜なべするものと思ひ取て、妹など寐覺して起たるさま、別人を立て見込心を二句の間に顯す也。

　　夜着たゝみをく長持のうへ
　灯の影珍しき申待て

前句の置の字の氣味に、せばき寐所、漸一間の住居、もの取片付て掃清めたる所と見込、わびしき申待の躰を付たる也。珍の字ひかりあり。

　　酒にはげたる頭なるらん
　双六の目を覗までくれかゝり

氣味の句也。終日双六に長ずる情以て、酒にはげぬべき人の氣味を付たる也。

　　そつと覗けば酒の最中
　寐所にたれも寐て居ぬ宵の月

前句のそつとゝいふ所に見込て、宵からねる躰してのしのび酒、覗出したる上戸のおかしき情を付たる句也。

　　煤掃の道具大かた取出し
　むかひの人と中直りけり

推量の句也。事せはしき中に取まぜて、かやうの事もある事也とすいりやうして、中直りけりとありさまを付たる也。

　　冬空のあれに成たる北風
　旅の馳走に有明し置

馳走の字さび有。あれに成たると、心のしぼりに旅亭の

さびを付て寄る也。

のり出て朧に餘るはるの駒

摩耶が高根に雲のかゝれる

まへ句の春駒といさみかけたる心の餘、まやがみねと移りて雲のかゝれるとすゝみかけて、前句にいひかけて付たる句也。

敵よせ來る村松の聲

有明のなし打烏帽子着たりけり

前句の事をうけて、其句の勢ひに移りて付たる句也。

月見よと引起されて恥しき

髪あふがする羅(うすもの)の露

前句の様躰の移りを以て付たる也。句は宮女の躰になしたる也。

牡丹おり〳〵涙こぼるゝ

耳うとく妹に告たる郭公

心を以て付たる句也。

あき風の舟をこはがる浪の音

雁行方や白子若松

前句の心の餘りを取て、氣色に顯し付たる也。

鼬の聲の棚もとの先

箒木はまかぬに生て茂るなり

前句に言外に侘たる句ほのかに聞及て、まかぬに茂る箒木と、あれたる宿を付顯す也。

能登の七尾の冬は住うき

魚の骨しはぶる迄の老を見て

前句の所に位を見込、さもあるべきと思ひなして人の躰を付たる也。

中ゝに土間にすはれば蚤もなし

わが名は里のなぶり物也

同じ付様也。

抱込て松山廣き有明に

あふ人毎に魚くさきなり

同じ付也。漁村あるべき地と見込、その所をいはず、人の躰に思ひなして付顯す也。

四五人通る僧長閑也

薪過町の子共の稽古能

前句の外通る躰に、内の躰以て付る也。前句の位を思ひなして、奈良の事にはつけなし侍る也。

頃日の上下の衆の戻らるゝ
腰に杖さす宿の氣違ひ

前句を氣違ひ狂ひなす詞と取なして付たる也。衆の字ぬからず聞ゆ。

御局の里下りしては涙ぐみ
ぬつた苫より物の出し入

さもありつべき事を、直に事もなく付たる句なり。思ひ亂るゝに其わざ、さもあるべきとをいへり。

隣へもしらさず嫁をつれて來て
屛風の陰に見ゆる菓子盆

同じ付也。盆の目に立、味ふ事もなくして付たる句也。心の付なし新みあり。

入込に諏訪の涌湯の夕まぐれ
中にもせいの高い山ぶし

前句にはまりて付たる句也。其中の事を目に立ていひたる句なり。

人聲の沖には何を呼やらん
鼠は舟をきしるあかつき

この句はじめは、須磨の鼠の舟きしるをと といひ出られ侍るに、前句の聲といふ字差合て付かへられし句也。曉の字骨折あり。人のいはく、須磨の鼠新きものに侍れども、舟きしるをとゝいひては、下の七大におくれたるかといへり。師聞て、宜といへり。

榎の木からしの豆からを吹
寒き爐に住持はひとり柿むきて

此句はじめは、住持さびしくとなして、後淋の字除かれし也。

桐の木高く月さゆる也
門しめてだまつて寐たる面白さ

この事先師のいはく、すみ俵は門しめての一句に腹をすへたり。試に方々門人にとへば皆、泣事のひそかに出來しあさ芽生(チフ)といふ句によれり。老師の思ふ所に非ずと也。

もらぬほどけふは時雨よ草のやね

火をうつ音に冬のうぐひす

一年の仕事は麥(ムギ)におさまりて

此第三は、みのにての句也。十余句斗吟じかへてのち、是に決せられしと也。

市人にいで是うらん雪の笠

酒の戸たゝく鞭のかれ梅

朝がほに先だつ母衣を引づりて

此第三は門人杜國が句也。此第三せんと人〻さま〴〵いひ出侍るに、師のいはく、此第三の附かたあまたあるべからず。鞭にて酒屋をたゝくといふものは、風狂の詩人ならずばさもあるまじ。枯梅の風流に思ひ入ては、武者の外に此第三あるべからずと也。

歩行ならば杖つき坂を落馬哉

角のとがらぬ牛もあるもの

此句は門人土芳が句也。先師此句を風與(ふと)仕たり。季なし。皆脇して見るべしとあり。おの〳〵さま〴〵つけて見侍れども、こゝろにのらずしてふと此句を見せ侍れば、よろしとてその儘取て付られ侍る。師の心味ふべし。

くろさうし

發句の事は行て歸る心の味也。たとへば、山里は万歳おそし梅の花　といふ類なり。山里は萬歳おそしといひはなして、むめは咲るといふ心のごくに行て歸るの心發句也。山里は万歳の遲といふ斗のひとへは平句の位なり。先師も發句は取合ものと知るべしと云侍るよし、ある俳書にも侍る也。題の中より出る事はすくなき也。もし出ても大樣ふるしと也。師の云、發句の物・脇の物・第三のもの・平句の物と其位ある事也。こと〳〵にかく云にはあらず、其位を見知るべしといへり。又いはく、季をとり合するに、句のふるびやすき煩有、とありし時も侍る也。門人つねに心得べき詞なり。

又いはく、人の方に行に、發句心に持行事あり。趣向・季のとり合障りなき事を考べし。句作りはのこすべし。孕句出たるは出る品うるはしからずと也。

としの松・年の何などゝ近年歲旦に用る事あり、いかゞと

たづね侍れば、師のいはく、達人のわざにあらず、論に不㆑及と也。去年今年春季也。當年といふ事も季に心をなさば成べしと也。師のいはく、手のうちに蟬をにぎりて鳴する事を、宜ものと句にしばらくとりなやみ侍る也。古みをとらんとせしと、おそろしきものにあひたるやうに語出られし也。

手爾葉留の發句の事、けり・や等の云結たるはつねにもすべし。覽・て・に、その外いひ殘たる留りは、一代二三句は過分の事成べし。けり留りは至て詞强し。かりそめにいひ出すにあらず。ふりつみし高根のみゆきとけにけりといふも至てつよくいひはなして、その響に應じて、淸瀧川の鳴りあがる水のしら浪といひかけて、けしきを顯す也。覽とはねべき所を、やといひ捨るもあり。也といふべきを、覽といひてはゞを取事なども古歌などにも多し。皆句作の所なるべしと師の敎也。

師のいはく、下句・上句ともに二字三字の間にあり。またその二三字に甚ぬかり落る句あり。骨折べき所也。

師のいはく、持て來る詞といふあり。ことに人の名などにある事也とぞ。

師のいはく、素秋の事、せぬ方先よろし。するに習ひなし、時によるべし。

同いはく、花によし野付ぬ事は、しゐて事もなし。たゞ法度のみ也。

同いはく、俳諧は敎てならざる所あり。よく通るにあり。或人のはいかいは習て通ぜず、たゞ物をかぞへて覺るやうにして通る物なしと也。師のいはく、或人の句は艶をいはんとするに依て句艶にあらず、艶は艶いふにあらず。又或人の句はしほりなし。しほらんずるが故にしほりなし。又或人の句は作に過て心の直を失ふ也。心の作はよし、詞の作好べからずと也。

又いはく、格は句よりはなるゝ也。はなるゝにならひなし。鳶に鳶を付、隱士の打越に隱士を出す類ひ、爰に至てせん儀なし。一たびはくるしからず、後の隱士は過てあやまち也。必うらやむ所にあらずと也。發句は門人にも作者あり。附合は老吟のほねといひ給ひけると、或俳書にあり。

句のすがた、さのみかはるにもあらで人〻の腸をしぼる所、聞ものゝ好・すかざるによりて、言下に心のごとく聞なし侍らんは本意なしと、師のいへるよしあり。

師のいはく、わが句ども多くの集に書誤り多し。是をみづから書本とし、門人の志を以て二三句ほどづゝ書添て、所〻の哥仙一折宛、是もいがの門人を初として、志を以て書留むべし。號を笈の小文とせん、又小文と斗やすべき。此號は或方にて能見侍るに、太刀とかいふ謡に此事あり。宜集の名と思ひ留たる也。書號によろしきものなど常に見置べし。拙號はあさましき物也。万に心遣ひ有事也。

師、ある俳諧の時、宵やみといふ句に月成まじ、是を月にすべしとて秋を付出し、八月と云月次を出せり。月秋の堪所によひやみ出合たればこそ、ふしぎの働出たりと、俳書に有。

牡丹に芍薬を付る事はあるまじ。是は心の好所にて差合にはあらず。付らるゝ働あらば付て猶よろしかるべしと、師の詞也。万に此類あるべし。門人心得てすべき事也。

師のいはく、相似たる句は、集に出す時外に置て、まぎらはしくせざるよし。後猿蓑に師の蕎麥の花の句、猿雖が蕎麥の花、一所にわざと置侍ると也。付句の心得いろ〱いひ出られし時に、前句を添て付心の顯るゝ事などならで見るべしと、さま〲句をさせて見侍られし事もあり。

又猿蓑に脇三を三躰に仕わけてなし置たり。心付て見るべしと也。身はぬれ紙のとり所なき　といふ句を云出侍れば、師の曰、是一体新に見へ侍る也。体格は定がたし。心がけて勤るに猶あるべし。又琴・三味線の類、句ふるびて世上あつかひかねたり。心見に句して見よと、いろ〱句作りを見られし時もあり。道にすゝむ者の勤る所、かくの事もあるべき示し也。

或二三子俳諧にしほこりて、哥仙二三巻老翁に點を乞ふ。師是をうけず、再三の後その人に對していはく、皆秀作也。しかれども我おもふ所に非ず、しゐてとらんとせば、是彼の内、此二三やり句と捨られし物や取侍らんと也。その人猶思ひやまずして、終に老師の門に入となり。

師の曰、句は天下の人にかなへる事はやすし。一人二人

にかなゆる事かたし。人のためになす事に侍らばなしよからんと、たはれの詞なり。

師のいはく、俳諧におもふ所あり。能書の物書るやうに行むとすれば、初心道をそこなふ所ありといへり。いかなる所ぞととへども、しか〳〵ともこたへ給はず。其後句を心得見るに、くつろぎ一位有、高く位に乗じて自由をふるはんと根ざしたる詞ならんか。末弟の迷ひて道をおろそかにせん事を、なにかに付て心にこめてつゝしみのとば也。

師の曰、其角は同席に連るに、一座の興にいる句をいひ出て、人〻いつとても感ず。師は一座その事なし。後に人のいへる句はある事も有と也。さあるべき事也。云く、座によりて、一座の人にとれて句をそこなふ事あり。門人常に心得べし。其角は生質としてこゝに居らずと也。

又いはく、一とせ對面の始いひ出られ侍るは、俳諧能過たり。碁ならば二三目跡へ戻してすべしと示されし也。面白教也。

ある時心見に哥仙一卷四唫して送侍れば、我おもふ所よく見知侍る也。此上いふ所なし。猶秀物は時の仕合・機嫌をうかゞひ、千變万化口の外より感ずべし。氣變に任すべしと也。諸集のうち聞がたき句あるよしをたづね侍れば、師のいはく、故ある句は格別の事也。さもなくて聞得ざると有は、聞へぬ句と思ふべし。聞えぬ句多しと也。

師、句作り示されし時、腹に戰ものいまだ有と也。感心の趣也。是師の思ふ筋にうとく、私意を作る所也。元を勤ざれば成るといふ事なく、只私意を作る也。工夫して私意やぶる道有べし。師、ある時土芳にはなしの次手に云、いつにても機嫌をはかり、誠の俳諧してと有。後あるじの云、翁の詞、その誠の俳諧と云事は、いかなる事にかとたづねらる。師の心しらず、思ふに余念なき俳諧の事なるべし。師も氣にのらざれば、餘念なき俳諧はいつぞは〳〵などいはれし也。

師の句にても再三吟じて、猶心得がたくや思はれ侍りけん。その句書付よ、人にも聞かせ見んと、聞えける事もおり〳〵あり。おろそかならざる所、門人としてわすれまじき所也。

人の句前にて句の趣向いろ〳〵沙汰する事つゝしむ所也。或月次の座にて、其事を門人に示されし事あり。

師のいはく、俳諧を嫌ひ、俳諧をいやしむ人あり。ひとかた有ものゝうへにも、道をしらざる事にはかゝるあやまちもある事也。その品なにゝもせよ。俳諧ならざる事更なし。其人、甚俳諧をして、事をさばき事をたのしむと也。

師の神樂堂と云句を難ずるもの有。師のいはく、俳諧は平話を用ゆ。つねに神樂堂といひならはし侍れば、ふかき事は知らずと也。其後此事をたづねたる人あり。師の曰、唯一の神道には神樂殿、兩部には神樂堂といふ。むつかしくいひ分して益なし。たゞ俳諧には神樂殿おかしからずと或俳書にあり。季にて戀の句をつゝむと、戀の句にて季の句をつゝむと、むかしは嫌へども今はくるしからずと也。

師のいはく、絶景にむかふ時は、うばはれて不ㇾ叶、物を見て取所を心に留て不ㇾ消、書寫して靜に句すべし。うばはれぬ心得もある事也。そのおもふ所しきりにして、猶かなはざる時は書うつす也、あぐむべからずと也。師、松島にて句なし、大切の事也。

師のいはく、俳諧の益は俗語を正す也。つねに物をおろそかにすべからず。此事は人のしらぬ所也。大切の所也と傳へられ侍る也。

師のいはく、結び題の發句などの時に、たとへば五句ある時は秀作三句は過る也。當座の題は猶其心得あり。哥の題の事もかやうの事とやら聞へ侍るとなり。

師のいはく、撰集・懷帋・短尺書習ふべし。書やうはいろ〳〵有べし。たゞさはがしからぬ心遣ひありたしと也。猿みの能筆也。されども今少大也。作者の名大にていやしく見へ侍ると也。

能書の物かけるには、哥の詞・手爾葉など違ふ事必あり。ふしぎに思ふべからず。かなゝどのつゞき・時の拍子又書ざま見ぐるしき所、書違へたる事多しと也。

師常に我をわすれず、心遣ひあると也。或方にて貴人師を座上に請待せらるゝ事しきり也。師の曰、此所似合の所と落着申也。席過侍れば心しづかならず、俳諧の障に

成侍るの間心まゝにと願ふ也。尤の事也。又ある旅行の時、門人二三子伴ひ出られしに、難波のすこしこなたより駕おりて、雨の鷹に身をなして入り申さるゝと也。その後此事をとへば、かゝる都の地にては、乞食行脚の身を忘れて成がたしと也。駕をかるに價を人のいふごとくに毎も成し侍る也。

師ある方に客に行て、食の後、蠟燭をはや取べしといへり。夜の更る事眼に見えて心せはしきと也。かく物の見ゆる所、その自心の趣俳諧也。つゞいていはく、いのちも又かくのごしと也。無常の觀、猶亡師の心なり。

あるとしの旅行、道の記すこし書るよし物がたりあり。是をこひて見むとすれば、師のいはく、さのみ見る所なし。死で後見侍らば、是とても又あはれにて見る所もあるべしと也。感心なる詞也。見ざれどもあはれふかし。

師一とせ岐阜鵜飼見の時、鵜尉(匠)一人に十二羽宛、舟に篝して、其ひかりにこれを遣ふ。十二筋の繩たて横にもぢれて、さばきむづかしき事を、やすく是をなす。鵜尉に此事を尋ね侍れば、先もぢれぬよりさばきて、なまもぢれ成るものを又さばく、むづかしくもぢれたるものひとりほどけ、さばくるといへり。万に此心はあるべしとなり。

ある門人の事をいひて、かれかならず此道にはなれず、取付侍るやうにすべし。はいかいはなくてもあるべし。たゞ世情に和せず人情通ぜざれば人不ㇾ調、まして宜友なくてはなりがたしと也。又いはく、人是非に立る筋多し。今其地にあるべからずと、恨あるべき人の方にも行かよひ、老後には心のさはりもなく見え侍る事あり。

一とせ大和の法隆寺に太子の開帳有。その頃太子の冠見おとし侍るとて、後の開帳に又趣(む)れし也。かゝる古代のものを心にかけて、旅立れし師の心のほど思ひやるべし。

ある禪僧詩の事をたづねられしに、師の曰、詩の事は隱士素堂といふもの、此道にふかき好ものにて人も名をしれる也。かれつねに云、詩は隱者の詩、風雅にて宜と云と也。

師のいはく、定家卿五首の祕哥に、こぬ人を入るといふ說あり。この祕といふはたゞ難なき哥を出したる所をいふと也。撰者の身として、すぐれたる哥もおとなしかるま

じとの心遣ひ也。難ある哥も猶いかゞ也。この心得を祕といふとなり。能見せしめ也と師もいへるなり。

伊勢が哥のとしをへて花の鏡となる水は、とある此五文字なくても、下ばかりにて哥よく聞へたり。此五文字、年〱水清くすみて水のかはらざるに、花のちりかゝるを曇といへる也。五文字紛骨の哥なりと師のいへる也。

涙川たえずながるゝうき瀬にもうたかた人にあはで消めや、この哥のうたかたはむしろといふ字・何ぞといふ字二說あり。義理は何ゞぞ也。なんぞ人にあはできへんと也。されども定家卿の云、何ゞぞと義理を結で見るべからず、いやしき也。うたかたはたゞ水のとにいはんと思ひていへる斗と聞べしと也。亡師も義理を詰るはいやしといへる、おもしろしと也。

古今の序に哥人のうたざまを、おの〱難じたるやうに貫之の書なせる也。師のいはく難じたるにあらず、その人ゝの紛骨の所を見顯し賞したる所也。喜撰法師の曉の雲の事・我庵はの哥のすへ・人はいふ也とあるあるあたり也。いくたびも可レ味と也。

かさゝぎの哥は、夜をうば玉といふより、かさゝぎの橋と夜るくらき空の事をよめる也。空の事を天のうきはしなど橋にいひたると多し。たゞ夜のくらき空をたる趣向、此うたばかり也。趣向の本所、かはりたるをほめたる儀也。

濱庇は高眞砂の崩かゝりたるが、ひさしのごとくなるとなり。又濱にある家・笘屋の類ともいへり。定家卿哥に、後鳥羽の院熊野へ行幸の供奉に新宮へ三首の哥あり。題庭上冬菊といふにて、霜おかぬ南の海のはまひさし久しく殘る秋のしら菊　と讀り。此哥は濱家のひさし也。しからねば庭の字落題也。浪間より見ゆるおしまのはまひさし久しくなりぬ君にあひみて　是は久しきといはん枕詞也。序哥也。

清濁、にごるを清は難なし。清ゝを濁るは耻也。かり衣・から衣、この二は清也。此類皆下ゟ濁る也。旅衣の類也。はしひめ・さよひめ・さ保姬、此三清て外は下を濁る也。濁るは二ッ物をつゞくるには必あり。酒も大酒といへば、ざけとにごる類也。濁るは和らぐ道理也。清ゝは陽、濁る

は陰也。ヽは陽、すむ也。ゝは陰、濁る也。數一は陽、二は陰也。

呼子鳥の事、師のいはく、季吟老人に對面の時、御傘に春の夕ぐれ梢高くきて鳴鳥と思ひて句をすべしと有。貞德の心いかにとたづねられしに、老人のいはく、貞德も古今傳受の人とは見えず、全句をせざる事也といへるよし、師のはなしあり。いせの濱荻芦にあらず、荻に似たる物にて別也。いせに限也。角組(つのぐみ)とき葉一卷也。祭主祐親、娘濱荻と名付られしと也。伊せの海・するがの海・石見の海等、國の名なれども、名所に取る景をほめていへる故の事也。

春雨はをやみなく、いつまでもふりつゞくやうにする、三月をいふ。二月末よりも用る也。正月・二月はじめを春の雨と也。五月を五月雨と云、晴間なきやうに云もの也。六月夕立、七月にもかゝるべし。九月露時雨也。十月時雨、其後を雪みぞれなどいひ來る也。急雨は三四月・七八月の間に有(ある)こゝろへ也。

東風、春風也。東風開(トク)レ凍と書文有。夏は南風、秋は西風、冬は北風と漢に用る也。和にさのみその沙汰なし。されどもその心遣ひはあるべきか。夏は嵐なきやうにする也。春は少の風も花をいとひて、嵐と和にもいふ也。秋の初風、はつ嵐と云。中秋にはあらき風を野分と云。初冬の風を木がらしと云。末の冬に至ては、嵐は却而似ざるやうに連哥に用る也。

螢、四五月より秋迄も用る。蟬、六月專に暑の甚しき時を用る。秋までもかゝるべし。日ぐらし、せみのやうに鳴て夜もなく。初秋に啼、日中には不レ鳴、曇りにはなく。夕立は夕時分といふにはあらねども、晝より後にあるやうにと連歌云。

順の峯入・逆の峯入とも夏也。むかし紀の國路よりみねに入て是を順といふ。今はよし野路よりいりて是を逆と云。今の峯入は逆也。諸ともの哥、順逆ともに夏故に感ふかしと師の云也。和哥には、はねる字を、にとよむ也。緣をえにと云、難波(ナンバ)をなにはといひ、蘭(ラン)をらにと云。

心の駒は心のさはがしきを云。ひまの駒、光陰(ヨルヒル)の去やすきをいふなり。心の松は不變の心也、みさほなる心也。待事にもよそへる也。心の杉、是も不變の心也、又直成

る心也。しるしの事をも云。鹿に鹿聞なれず、草ふし立とはあるといへり。

鳴子は田か畑か植物か、結びてする也。

田鶴は水邊か里ちかく鳴樣にするなり。

朝の月は十七日より廿八日まで也。

皃よ鳥、春されば野べに先なく皃よ鳥聲に見へツヽ忘られなくに　といふは雉子をよめり。又鴛をもよめり。霜氷る岩根につるゝ皃よ鳥浪の枕やわびてぬるらん　是は鴛也。定家卿の云、皃よ鳥、春の鳥也となり。師の曰、說ゝあれども、たゞ春の小鳥のいつくしきをいふと知るべしと也。

殘雁說あり。哥の題には冬也。連俳には秋に用る也。

つぼすみれといふは、舊薗のすみれ也。つぼの內のすみれといふ事也。一たびよみて詞やさしき、依てすみれの名になして山野にもよめる也。師のいはく、此類の事どもみなある事とぞ。

いな妻は宵の內ばかりのものゝやうに連哥には云也。

苗代の代といふは、かはるといふ義理也。去年の苗代、地を不ㇾ用して新に作る所を好む義理也といへり。

夕さりの事、さり〳〵て夕の間を云。冬さり・秋さり、みな初の秋冬にはいひがたき詞也といへり。

夕まぐれといふ事、間は休め字也。暮てたそがれ迄の間をいふ。しばしの間、人の見ゆるか見えざるかの程を、たそがれといふ。誰かれといふ義理也。むかしは人倫にする、いまはそのさたなし。

はたれ雪・帷子雪、みな大ひら雪の事をいふと也。

すぐろの薄、やけ野に燒殘より芽の出るをいふと也。

かつこ鳥・かんこ鳥、一鳥同じ鳥の事也。

氷の衣といふ事は、氷のうちにかいこ有て糸をなすと、無き事を佛道にいひたるより出たる也といへり。

佗と云は、至極也。理に盡たる物也と云。

若菜の發句は、初春七日の跡先三日の內也。平句には初春の內にはくるしからずと連哥にいひ來るとあり。

霞は夜と晝は似ぬもの也。夜の朧といふ事なし。月星に結びてするよし、連哥にあり。

月の影と上の句下の句に留らずと連ニ有。いざよふ月又月

に不ㇾ限、日ぞいざよふなど丶云は、聳物に日の影へだちたる也。聳物なくては云がたし。又人をいざよふ倡也、雲や浪をもいふと連書にあり。

師のいはく、大方の露には何のなりぬらんたもとにおくは涙也けり、此うたは鴫立澤に勝ッ哥也。面白しと也。

あるひは師宗匠などの方へ句の直しを願ふ時、書て出す法あり。たとへば一順廻りし時、書翰を以てうかゞふ。二句書て自賛と思ふ方を口に書べし。本懐紙に書事あるべからず。別紙に書て宗匠の方にて添削のうへ留る様にすべし。その書様はたとへば、

とま打かけて――――

大聲の喧嘩仕出す濱の方

濱の風大あみ笠を吹取て

宜御引直し奉賴ゆ　　蘭　風

芭蕉先生

又云く

慈斤　　何氏　蘭　風

何――――

人の方へ句を送るに折紙に認様

牛殘子旅立送る

何、、、

年號月日　　芭蕉稿

或は牛殘公・老翁、人に依て尊卑あるべし。人によりて貴丈など丶も書。

書留も、旅を送り奉るとも書也。

紙四ッ折一ノ折ニ先の名・氏號を書、如ㇾ圖付紙を張る、付紙有、赤きを用ゆ。

悼に青紙を用ゆ。

外包は紙袋を用ゆ。略して上包にても用ゆ。

拜机　合爪

など丶書、尊卑によるべし。

名を送る時折紙認様

山　岸　氏

宜爲車來候

年號月日　　芭蕉判

又何氏何右衞門殿とも書。

宜爲何兵衞候

自分名判

色紙短冊の事

紙の上下の事、常は青雲の方上也。

悼の時は紫雲上也。

名ハ脇へ寄ル、卑下也。

三折一下テ書題ヲ書時也。題のなき時は一字半上テ書。題あるとも下つまる時は一字も上る。

花の短冊、其外物に付る時は、水引にて付る一筋也。付やう、水引さし込ひとつに取て、一むすびして付る也。水引穴紙のうへ四角に取、其眞中に穴を付る圖のごとし。

名の書様常の通。若庵號など書つゞける時は、蓑虫庵服部土芳庵主とも書と也。

蓑虫軒
服部土芳子

服部氏とも書べしとなり。

哥に點するは八分也、

哥折紙二行七字

紙の折やうつれの料紙のごとし

三行三字

世之事二伎藝一者。樹レ黨遂レ非。作レ勢護レ短。啣二誘門下一
者噫可レ歎矣哉。諸歌者流亦往々病レ諸。夫人病レ熱則
譫語。掌壓レ心而睡必魘。或陷二溝壑一。或沒二波濤一。蛇追
鬼捕。諸般苦辛。一爲二傍人一所二喚醒一。諸苦如レ洗。蓋
樹レ黨護レ短者。熱未レ解。魘未レ覺焉耳。斯書也。蕉翁之
遺言。而土芳係二筆記一。闌更梓公二于世一。後爲二祝融氏一
所レ奪。今茲新刻。厥功成焉。其言叮嚀精詣。實可下彼
喚二醒病二熱與一レ魘者上。而能洗中諸苦上也矣。

享和改元之春

生々庵瑞馬撰書

印　印

享和元辛酉春再刻

蕉門書林

大坂心齋橋筋
奈良屋長兵衛

京寺町押小路上ル
橘屋治兵衛　合

井筒屋庄兵衛　梓

同三條寺町西え入
菊舍太兵衛

花實集

柿晉問答

去來著

今や蕉門獨立して諸國の名子すくなからず。されど先師の常に祕藏申されし門人は纔一兩輩のみ。それが中に東武の其角、傍哲才幹にして、ひとり殿前に名をたて譽をたくましうす。誠に夜岳の列夫もおそふべからず。道を聽る事又ひさし。我蕉門に志深しといへども、庸愚短才にしていたづらに師恩を荷ひ、老の波立かへるべき昔もあらず。かくて門下に年を經ぬれば、なまなかに虛名高く、此道の一筋もあきらめ侍るやうになん、人はおもひ侍るやらん。今なべる輩の折ふしの難陳を起して、予にその疑惑を問侍りぬ。是を辨んとすれど才拙く、いはじとすれば蕉門の理解なきに似たり。さすがに聞置る師說も侍れば、仇に過んもいと本意なくや。とし（今年）其角上京のみぎり暫予が茅屋にやどりぬ。ひたすら先師在世のおもひをなし、迁化の今に至れるまで、新古變異の談論盡しがたく湧がごし。互に耳底をはらひて捨て二都の雅情をつたへ、我も書、角もしるして、さらに心覺えの一書となしぬ。もとより自己の見を用ひず、ひとへに先師の胸臆を守りて、たとはゞ花をいひ實をかたるも、その口質による所、言は千萬にいひ廣くとも歸する所はなどか心にふたつあらんや。倩（つら〳〵） 先師迁化まし〳〵てより風のばせを裂みだれ、門葉多しといへども、家〳〵に垣を隔てゝをのづから交うときやうになん成にたれど、遺風は日〻に增長しぬれば、此道の修行地におもむかん輩の一助ともなれかしと、見聞のために端書を添畢ぬ。

落柿舍
去來

仲冬下浣

其角曰、凡吟ある時は風あり、風は必變ず、是自然の事也。先師是を能見とりて、一風に長く止るまじき事をしめし給へり。假令先師の風たりとて、一風になづみて變化をしらざるは、却而先師の心にたがへり。

去來曰、蕉門に千歳不易の句・一時流行の句といふ有、是を二ッに分て敎へ給へる、其元はひとつ也。不易を知ざれば基たちがたく、流行をしらざれば風新たならず。不易は古によろしく後にかなふ句なる故、千歳不易といふ。流行は一時〳〵の變にして、きのふの風けふよろしからず、今日の風明日に用ひがたき故、一時流行とはいひ侍るなり。

魯町問、不易・流行其もと一ッとはいかゞ。去來曰、此事辨じがたし。有増(あらまし)人体に譬ていはん。先不易は無爲の時、流行は坐臥・行住・屈伸・伏仰の形同じからざるがごとし。一時の變風也。其姿は時に變ずるといへども、無爲も事有も元は同じ人也。されば基をしらずして末を變ずる時は或は變風、俳諧をはなれ、或ははなれずといへども拙し。

魯町問、不易の句の姿はいかに。去來曰、不易の句は俳諧の体にしていまだひとつの物數奇なき句也。一時の物ずきなき故に古今に叶へり。たとへば、

月に柄をさしたらばよき團扇哉　宗鑑
是は〳〵とばかり花のよし野山　貞室
初(秋)風や伊勢の墓原なをすごし　はせを

是等の類也。魯町曰、月を團扇に見立たるも物ずきならずや。去來曰、賦・比・興は誹諧のみに限らず、吟詠の自然なり。凡吟に顕るゝもの此三ッをはなるゝ事なし。物ずきとはいひがたし。

魯町曰、流行の句はいかに。去來曰、流行の句は己に一ッの物ずきありてはやる也。懷容・古歌・器物に至るまで時ゝのはやり有がごとし。たとへば、

むすやうに夏にこしきの暑かな

或は手をこめ、或は哥書の言葉づかひ、又は謡の詞取などを物ずきしたるあり。是等も一時流行し侍れど、今日はとり上る人なし。魯町曰、むすやうに夏にこしきと云は

緣にあらずや。去來曰、緣は和哥の一事にして物數奇にはあらず、手を込ると緣とは變あり。
其角曰、誹諧の基、詞にいひがたし。凡吟詠するもの品あり、哥はそれ也。その內品あり、誹諧は其一也。その品〻をわかちしらるゝ時は、誹諧哥は如レ斯なるものなりとをのづからしらるべし。夫をしらざる宗匠たち誹諧をするとて、詩やら哥やら旋頭・混本哥やら、しらぬ事をいへり。是等は誹諧にまよひて誹諧連歌といふ事をわすれたるなり。誹諧を以て文をかくは誹諧文也。哥を詠は誹諧哥也。身を行はゞ誹諧の人也。唯徒に見ゝを高し、古を破り人に違ふを手柄に、仇言いひちらしたるいと見ぐるし。かく斗器量自慢あらば誹諧連歌の名目をからず、はいかい鐵炮となりとも、亂聲となりとも一家の風を立らるべき事なり。
去來曰、不易・流行は万事にわたる也。しかれども誹諧の先達是をいふ人なし。長頭丸以來手を込る一体久しく流行して、

角樽や傾け呑ふ丑のとし

花に水あけてさかせば天龍寺

といふまで吟じつめぬれど、世人誹諧は如レ斯のものとのみ心得て風を變ずる事をしらず。宗因一度その態かたまりたるを打破りて新風天下に流行し侍れど、いまだ此教なし。しかりしより以來、都鄙の宗匠たち古風を用ひず。一旦流ゝを起せりといへども、又其風を長く己がものとして時ゝ變ずべき道をしらず。先師始て誹諧の本体を見付、不易の句を立て、又風は時ゝに變ある事をしり、流行の句ゝ分ゝに教給ふ。されば不易・流行の事は古說によらず、先師の發明なる事今におゐてあきらか也。凡蕉門不易・流行の說ゝ有。或は今日の一句ゝの上をいふ說あり、是も流行にあらずと謂がたし。しかれども不易・流行の教といふは、誹諧本体、一時〳〵の變風との事也。
尺艸問、誹諧基より出ると出ざる風はいかに。其角曰、基をしらずしては解しがたからん。先あらはに知ルもの三ッを擧ん。たとへば、先師の風といへども、

白魚しろき事一寸

貞固が松布に門には女共きほへ

瀧ありと蓮の葉に雨をいだきしか　素堂

是等は詩か語か。又文字數不レ合のみにあらず。又合たるにも、

ある花にたゝらうらめし暮の聲　幽山

此句は謎也。誹諧哥に謎の体もある事にや。是等は皆誹諧哥体より出ず、察しらるべし。又問、先師も基より出ざる風侍るや。其角曰、奧羽行脚の前はまゝあり。この行脚の中に工夫し給ふと見えたり。行脚の中にも、

あなむざんやな甲の下のきり〴〵す

といふ句あり。後にあなの二字を捨らる。是のみにあらず、異体の句どもはぶき捨給ふ多し。此年の冬、始て不易・流行の教を說給へり。

其角曰、誹諧を修行せんとおもはゞ、むかしより時代〳〵の風・宗匠ゝの体をよく考しるべし。是をしる時は新古をのづから分れ來るもの也。

去來曰、先師は門人に教給ふに、或は大にかはりたる事あり。譬ば予にしめし給ふには、句ゝさのみ念を入るものにあらず、又一句は手づよく作意慥かに作すべしと也。凡兆には、一句纔に十七字、一字もをろそかにをくべからず、誹諧もさすがに和哥の一体也。一句にしをりの有やうに作すべしとなり。是は作者の氣情と口質によつてなり。悪く心得たる輩は迷ふべき筋なり。

其角曰、凡句案の事、その案じよるべき基をしらずしていたづらに屈情せんは、泥に泥を加ふるごとく百練千鍛なすとも更に益なかるべし。先能題意を探りもとめて、をのづから其姿情にたがはざらんにおゐては、即興とても佳吟多し。或時はせを庵の夜話に、嵐雪曰、利休の落し穴といへる、よきをかしみ也。是に上の句あらばなどかたらひぬ。そのころや卯月はじめかたと覺え、ほとゝぎすほの聞えて、各我聞顏に立まどひ侍るを、ふとおもひよりて、

ほとゝぎす啼や利休の落し穴

と口號(くちずさみ)侍りけるを嵐雪聞て、連續此うへやあらじ、よきほ句まうけぬと興じ侍りき。されば風姿をのれと備れる時は、練句・即興の隔はなき事に侍る。是修行の第一にして、その姿情に違はざらんやうを思惟すべき事也。此意

な辨へずして唯に心神をいたましむるとも何の益かあるべき。萬の題意に背、かれそれが奴僕となりて、その題の言譯をのみ綴り習ひ、終に、本意を遂るとあたはざるべし。かたより此道に志なからんものならばこそ、なまなかに知侍るもの丶姿情の境をもあきらめずしていかめしくもてはやしぬる、かた腹いたき事になんおもひ侍る。

去來曰、

ゆふ暮は鐘をちからや寺の秋　風國

此句始は、入相の淋しからぬといふ句也。句は忘れたり。風國曰、此ごろ山寺に入相を聞に曾て淋しからず、よつて作す。是殺風景也。山寺といひ、秋の夕といひ、入相といひ、淋しき事の頂上也、しかるを一旦游興騷動のうちに聞て、淋しからずといふは一己の秋也。風國曰、此時此情あらばいかに情ありとも作すまじきや。去來曰、若情あらば、如レ斯にも作せん歟と、今の句に直し侍りぬ。句は勝れずといへども本意を失ふ事はあらじ。

應う〳〵といへどたゝくや雪の門　去來

丈艸曰、此句不易にして流行の正中を得たり。

支考曰、いかにして斯安き筋より入るゝや。

正秀曰、唯先師の聞たまはざるをうらむのみ。

曲翠曰、句の善惡はいはず、當時作せん人を覺えず。

許六曰、尤好句なり、いまだ十分ならず。

露川曰、五文字好也。

野坡曰、句意尤力あり。

其角曰、眞の雪の門也。去來曰、人々の評又各その位より出。此句先師遷化の冬の句也。その頃は同門の人々も賞嘆せり。今は自他ともに此場に止らず。

岩翁問、

鞍壺に小坊主乘や大根曳　芭蕉

此句いかなる所がおもしろき。其角曰、吾子今解がたからん、唯圖してしらるべし。たとへば花を圖するに、奇山・幽谷・靈社・古寺・禁闕等によらば、その圖よからん。能が故に古來多し。如レ斯の類は圖の要歸にあらず、不珍なれば取はやさず。又圖となしてかたち好ましからぬものあらん。是等は圖惡きとて用ひられず。稀なる圖あらば是を畫となしてもよからん、句となしてもよからん。

鞍壺に小坊主のちよつこりと乘たる圖あらば、古からんや、拙からんや。畫師の何がし甚感驚す。かれは誹諧をしらずといへども、畫におゐてその姿情をおもふが故なり。

去來曰、發句に切字を入る事は第一句を切ため也。切たる句は字以切に及ず、末句の切たるを不ㇾ知作者のため、先達而切字の數を定らる。此定字を入時は十に七八はをのづから句切る也。殘二三は入て切ざる句、又不ㇾ入して切る句あり。此故に或は此やは口あひのや、こしのしは過去のしにて切ず、或は是は上段切、是は何切などゝ名目して傳受事とせり。又、丈艸問、先師曰、哥は三十一字にて切、發句は十七字にて切。又或問、先師曰、切字に用る時は、いろは四十八字皆切字也。用ざる時は一字もきれ字なしとや。都而切字の事は連誹ともに深く祕すれば、是等は皆奚をしれと障子一重を教たまふなり。

其角曰、他流と蕉門と第一案じ所に違ひありと見ゆ。蕉門は氣情ともにその有所を吟ず、他流は心中に巧るゝと見えたり。たとへば、

御蓬萊夜は羅着せつべし

元日の空は青きに出船かな

加茂川や二度目の網に鮎ひとつ

といへるがごとし。禁闕に蓬萊なし、二度目に鮎ひとつ少し、さる事にや、みな是細工せらるゝ也。そもそも蕉門の發句は一字不通の田夫・十歲以下の小兒も、時によりては好句あり。却而他門の功者といへる人は覺束なし。他流は其流の功者ならざれば、その流の好句は成がたしと見えたり。

去來曰、

猪の鼻くすつかす西瓜かな　卯七

此句させる事なし。三四分の句也。正秀曰、猪なればこそ鼻はくすつかしけんと甚悦り。其後先師も一興ありと也。退ておもふに、此頃いまだ上方に西瓜珍らし。正秀も珍らしとおもふより猪の怪みたるとは風聞す。予は西國生れにて西瓜も瓜・茄子のごとし、曾て心ゆかず。惣じて人の句を聞に、我知場・不ㇾ知場に違あるべし。虎の噺を聞て、追れたる者の汗を流したるといへる類ひなるべし。

且水問、發句の善悪はいかに。其角曰、ほ句は人の尤感ずるがよし。さもあるべしといふは次也、さもあるべきやといふは其次也、さはあらじといふは下也。
去來曰、誹諧は新らしき赴（趣）を專とすといへども、物本性をたがふ。たとへば感レ時花濺レ涙、惜レ別鳥動レ心、或は、櫻花ちらばちりなんちらずとも大宮人の來ても見なくにといへる類也。感レ時・惜レ別・大宮人の見ざる所一首の勝なり。

きられたる夢は誠歟蚤の跡　其角

去來曰、其角は誠に作者にて侍る。纔に蚤の喰付たる事を誰か斯は言盡さん。先師曰、然り、定家卿也。さしてもなき事をこと〲しくいひつらね侍ると聞えし、許謂に似たり。
其角曰、凡發句をこゝろがけるに、その品あるべし。時により興に乘じてめづらしき題の句得たりとも、外に鏡とすべき好句なければ、一句は一句能句にして、それをさして能句持とはいふべからず。唯、多き中にも好ましきは、花・時鳥・月・雪なるべし。是等は風物の甚源にして人々常に心にかくる故か數多く聞え侍れども、却而さし出たる句も見えず、甚稀也。それが中に勝れたる句いひ出んは誠に面白かるべし。或は鶯・霞・柳・梅・さくら・歸鴈・春雨・蛙・おぼろ月・雛・行春、或は更衣・牡丹・杜若・初がつほ・鵜・ほたる・凉・夏の月・清水・蟬・暑、或は立秋・七夕・秋かぜ・砧・虫・鹿・夜寒・鴈・菊・紅葉・露・九月盡、或は時雨・霜・千鳥・枯柳・冬の月・かれ野・火桶・紙衣・頭巾・木がらし・冬籠等なるべし。是等に能句侍らば實に誹諧の句持成べけん。たとへば雀蛤となり、或は櫻魚・峯入の類にていかに好句あればとて、姿情の限ある事なれば、いひ課（難）せて何程の手柄あるべき。されどあながちせざれとにはあらず。撰集の時などには好みてもなを模樣に入句すべき事也。是は只常に心懸べき趣を申侍る也。
卯七問、蕉門に無季の句興行侍るや。去來曰、無季の句は折〲あり、興行はいまだ聞ず。先師曰、發句も四季のみならず、戀・旅・名所・離別等無季の句有たきもの也。されどいかなる故有て四季のみとは定めをかれけん。其事をしらざれば暫默止侍ると也。其無季といふにふたつあり、ひとつは前後表裏、季と見るべき物なし、落馬の卽興に、

歩行ならば杖つき坂を落馬哉　はせを

何となく柴ふく風もあはれなり　杉風

又詞に季なしといへども、一句に季と見る所ありて、或は歳旦とも定るあり。

年〳〵や猿に着せたる猿の面　はせを

如レ斯の類なり。

其角曰、發句は立木のごとく脇は枝のごとし。第三は地のごとく表は雨のごとし。附合は葉の茂るがごとく風の吹がごとし。是を誹諧の眞体といふ。

許六曰、發句は題の廓を飛出で作すべし。廓のうちにはなきもの也。自然廓のうちに有ば天然にして稀也。去來曰、發句は廓のうちになきものにあらず、こと(殊)に卽興・感偶するものは多くはうち(内)也。しかれども常に案ずるに、内はすくなし。多分古人の糟粕なり。千里にかけ出て吟ずる時は、句多きのみにあらず、第一等類を遁れ侍る。蘭國が誹諧毎日廓の内也。予此事を噺せば、明月にみなさかやきを剃にけり　といふを、さかやきをみな剃立てさしむかひ　と直しぬ、初學の尤おもふべき所なり。巧みなるに及ては又内外の論にあらず。

其角曰、始より秀逸を心掛るものは終に好句を持たるを聞ず。卽興・感偶は格別、句案に及ん事は、二三十句も案じての後ふと出るもの也。秀逸体の句常に好む時は、骨こはく心亂れて却而秀逸も出侍らず。凡秀逸は其趣向取とむる所もなく、いはゞ只言と糸一筋なるべし。惡く作せば只言となり又は理屈に落べき也。されば翁の古池の句もかはづの飛込たる故、水の音すると理屈のやうに聞ゆれど、音といふ字にいか斗か淋しき情なからん。その外、木がらしの一日吹てをりにけり　雨あられとんとめかして降にけり　是等の句いづれも風調高うしておそらく聞人も稀なるべし。

杜(牡)年問、發句と附句の境はいかに。去來曰、七情萬景に止る所に發句あり、附句は常也。たとへば鶯の梅にとまりて啼といふはほ句にならず、うぐひすの身を逆に啼といふは發句也。又問、こゝろに止る所はみな發句なるべき歟。去來曰、此内ほ句になると、ならぬとあり、たとへば、

つき出すや戸樋のつまりの蟇　好春

此句を先師の古池の蛙と同じやうにおもへるとなん、と珍らしく等類なし。嘸こゝろにもとゞまり興もあらん、されど發句には成がたし。

先師曰、發句は頭よりすら〳〵といひくだしきたるを上品とす。ほ句はものを合すれば出來せり。そのよくとり合するを上手といひ、惡きを下手といふ。其角曰、ものをとり合せて作する時は句多く吟速也、初學の人是をおもふべし。功成に及では、とり合あはざるの論にあらず。

去來曰、

おとゝひはあの山越つ花ざかり

此句、猿蓑の二三年前の吟也。先師曰、此句今聞人あるまじ、一兩年を待べしと也。其後杜國が徒とよし野行脚し給ひける道よりの文に、或は吉野を花とのみいひ、或は是は〳〵と斗と聞しに魂を奪れ、又は其角が櫻さだめよといひしに景色をとられて、吉野に發句もなかりき。たゞ一昨日はあの山越つ　とをなじく吟じ行侍るとなり。其後此ほ句を人もうけとりけり。一兩年はやかるべしとはいかで知給ひけん、予は夢にもしらざる事也けり。

龜翁問、句のしほり・細みとはいかなるものにや。其角曰、しをりは憐なる句にあらず。ほそみとは便なき句にあらず。しをりは句の姿にあり、ほそみは句意にあり、則證句をあげて辨ず。

鳥どもも寐入て居る歟よごの海　路通

此句細みありと先師評し給ひしなり。又、

十團子も小粒になりぬ秋の風　許六

先師此句しをりありと評し給ひしなり。惣じて寂・位・細み・しをりの事は、言語筆頭にいひ課がたし。唯先師の評ある句を擧て二意をしめし侍る、他は押てしるべし。

支考曰、附句は句に新古なし、附る場に新古有。去來曰、古風の句を附るも場によりてよし。されど古風のまゝにはいかゞ、古躰のうち今様すべし。

其角曰、蕉門の附句は前句の情を引來るを嫌ふ。只前句は是いかなる場・いかなる人と、その業・其位をよく見定、前句をつきはなして附べし。

去來曰、附物にて附・心附にて附るは、その附たる道筋しれり。附物をはなれ情を引ず附んには、前句のうつり・

句・響なくしてはいづれの所にてか附んや、心得べき事なり。支考が附句は一句に一句といへるは、附る場の事なるべし。附る場は多くなきもの也。句は一場の內にもいくつもあるべし。先師曰、氣色はいかほど續けんもよし、天象・地形・人事・草木・虫魚・鳥獸の遊べるその形容みな氣色なるとなり。

其角曰、附句に二品あり、附キたる句と附ケたる句となり。附キたる句は、たとへ秀逸ならずとも、自然と附キたる所。附ケたる句は、前句の媚をはなれ、あらまし附クべき所の三四等を經、誠に新意の附句を以、こちらより骨を折たる。手際の句なり。その千眼一到の場を拔出、修行の別眼を以て見出し附んは、風雅におゐて恥べきところをしらじ。先師曰、附ヶ物にて附る事當時好まずといへども、附ヶ物にて附ヶがたからんを、さつぱりと附ヶものにて附ヶたらんは、又手柄なるべしと常にのたまひけり。

支考曰、附ヶ句は附ヶる物也。今の誹諧附ざる多し。先師の句に一句も附ざるはなし。去來曰、附句は附ざれば附句にあらず、附過るは病ひなり。今の作者附る事を初心の業のやうに覺えて却而附ざる句多し。聞人も又聞えずと人のいはん事を恥て、附ざる句を咎めず、却而能附たる句を笑ふやから多し。我聞るとは格別なり。

其角曰、附合の句は附過るを病とす。されど初心のうちは附過るほどに附習ふべし。得たるうへには自由になるべき也。先師初誹を導き給ふにも、發句・附句ともに律儀に言習ふべし。又附句は眞實に附べし。初心の時より上手めきたる句・飛退たる・離れたる等の句なすべからず、初心の時は目立やうに見ゆれど、後ゝ埒もなうなるべき也と宣ひけり。

去來曰、

　　につと朝日にむかふ橫雲

青みたる松より花の咲こぼれ　去來

此附句始に、すつぺりと花見の客を仕舞けり　と附侍る。附ながら先師の顏つきをかしからず。又前を乞て此句を附直す。先師曰、いかにおもひて附直し侍るや。去來曰、朝雲の長閑に機嫌能りしを見て始に附侍れど、能見るに此朝の奇麗なるけしきいふばかりなし。是をのがしては

詮なかるべしとおもひかへして直し侍る。先師曰、やはり始の句ならば三十棒なるべし。猶陰高きを直すべし、と今の五文字になりにけり。

先師曰、發句はむかしよりさま〳〵かはり侍れど、附句は三變也。むかしは附ヶ物を專とす、中ごろは心附を專とす、今はうつり・響・匂・位をもて附る事をよしとす。杜年問、いかなるを響・匂・うつりといへるにや。去來曰、支考あらましを書出せり。是を手に取たるごとくにはいひがたし。先師の評を擧て語る。他は押てしらるべし。

赤人の名につかれけり初がすみ　史邦

鳥も囀る合點なるべし　去來

先師曰、うつりといひ、匂といひ、誠に去年中三十棒をうけられたるしるしとなり。

其角釋曰、つかれたりといひ、なるべしといへるあたり、そのいひ分の匂相うつり行所見るべし。若、發句名はおもしろやとあらば、脇は囀る氣色也けりといふべし。

響は打ば響がごとし。たとへば、

榑椽に銀土器をうちくだき

身ほそき太刀の反ルを見よ

此句をあげ、右の手にて土器を打つけ、左の手にて太刀に反り打かけるしかたしてかたり給へり。一句〳〵に趣かはり侍れば悉いひ盡しがたし。

位は、前句の位をしりて附る事也。たとへば好句ありとても、位應ぜざればのらず。先師の戀句を擧てかたる。

上置の干菜刻むもうはの空

馬に出ぬ日は內で戀する

此前句は人の妻にもあらず、武家・町家の下女にもあらず、宿屋・問屋などの下女也。

細き目に花見る人の頰はれて

茶種色なる袖の輪違ひ

前句、古代めかしき人の有さまなり。

白粉をぬれども下地黑いかほ

役者模樣の袖の薫もの

前句、今やうは女と見ゆ。

尼になるべき宵のきぬ〳〵

月影に鎧とやらを見透して

前句、いかさま然るべき武士の妻と見ゆ。

掛乞に戀のこゝろを持せばや

ふすまつかふで洗ふ油氣

前句、町家の腰もとゝいふべきか。是を以て他を押るべし。杜年間、俤にて附るとはいかゞ。去來曰、うつり・響・匂は附やうの鹽梅也。俤は附やうの事也。むかしは多く其事を直に附たり。それを俤にて附る也。たとへば、

艸庵にしばらく居ては打破り

命嬉しき撰集の沙汰

始は和哥の奥儀をしらずと附たり。先師曰、前を西行・能因の境界と見らるゝかし。されど直に西行と附んは手づゝならん、只俤にて附べしと直し給ひ、いかさま西行・能因の俤ならんと也。又人を定ていふのみにもあらず、たとへば、

發心の始に越る鈴鹿山

内藏頭かと呼人は誰

先師曰、いかさま誰ぞが俤ならんとなり。俤のこと支考も書をかれたり。參考せらるべし。

其角曰、凡句は余情を元とすべし。たとへば、

誰やらが姿に似たり今朝の春　翁

此句、衣通姬と歟、小町と歟、置たらばさもあらじ、誰やらと隱して、しかも春色のうるはしきさまを、美しき人のすがたにたとへたる所、余情限りなきをおもふべし。誠一字二字すら大切也。況五文字の違ひをや、仇に案ずまじき事也。

去來曰、

兄弟の顔見る闇やほとゝぎす

此句は五月廿八日の夜、曾我兄弟の生涯に始果見合ける頃、ほとゝぎすなどもうろ啼けんかしと、紫式部がおもひやりたるおもはくをかりて一句を作せり。先師曰、曾我殿原とは聞ながら、一句未いひ應せず。其角評も同前なりと、深川より評し給ふ。許六曰、此句は心あまりて詞たらず。去來曰、心餘りて詞たらずといはんははゞかり有、唯いひ應ぜざる也。丈艸曰、今の作者はさはがしくかけり廻りぬれど、是等は合點のうちなるべしと倶に笑ひけり。

其角曰、

唐黍にかげろふ軒や魂まつり　洒堂

此句、路通難じて曰、唐黍は栗にも稗にもふるべし、發句となしがたしと也。是いまだ路通、句の花實をしらざる故也。此句は軒の艸葉に火影のもれたる賤の魂祭を賦したるにて、一句の實委にあり。その艸葉は唐黍にても栗・稗にてもその場に叶ひたらんものを用ゆべし。是は一句の花なり。實は魂祭にてうごくべからず。動ば外の句也。花はいくつも有べし、その內雅なるものを撰み用ゆるのみ。

野明問、句の寂はいかなるものにや。去來曰、寂は句の色也。閑寂なる句をいふにあらず。たとへば、老人の甲冑を帶し、戰場に働き、錦繡を飾り、御宴に侍りても、老の姿有がごとく、賑なる句にも靜なる句にも有もの也。今一句を擧、

花守や白き頭を突あはせ　去來

先師曰、寂色能顯れ悅ゆとなり。野明又問、句の位とはいかに。去來曰、是又一句をあぐ。

卯の花の絕間たゝかん闇の門　去來

先師曰、句位尋常ならずと也。去來曰、此句位唯尋常ならざるのみ也。高位の句とは謂る覽。畢竟句位は格の高きにあり。句中に理屈をいひ、或はものをたくらべ、或はあたり合たる發句は、大かた位くだれるもの也。

其角曰、誹諧は火を水にいひなすと淸輔がいへるにまふて、雪の降る日は汗をかきけり　といふても苦しからずといへる人あり。火を水と斗心得いひなすといふに心づかざる故也。雪の日汗かくやうに一句を能ゝいひなされなばさもあらん。咲替て盛久しき朝がほを仇なる花と誰かいひけん　の類なり。

去來曰、句に勢ひといふ有。文は文勢、語は語勢也。たとへば、

明るがごとく小糠雨ふる　去來

先師曰、是文勢也。など打明るごとくとは作せずや。去來曰、詞つまりたるやう也。先師曰、古人も我ものやおもふらんとはいはずやとなり。

其角曰、一卷に我句九句十句有とも、一二句好句あらばよし。殘らずを好句にせんとおもふは、却而不出來なるもの

也。未好句なからんうちは、随分句をおもふべし。

去來曰、一巻面は無事に作すべし。初折の裏より名殘の表半までに物好の曲も有べし。半より名殘の裏にかゝりてはさら／＼と骨折ぬやうに作すべし。末にいたりては互に退屈出來り、なを好句あらんとすれば却而句しぶり不出來なるもの也。されど吟席いさみありて、好句の出來たらんを無理に止るにはあらず、好句をおもふべからずといふ事也。

去來曰、附物にて附る事當時嫌ひ侍れど、そのあたりを見合、一巻に一句二句あらんは又風流なるべし。都而附句は何事もなくさら／＼と聞ゆるをよしとす。巻を讀に思案工夫して附句を聞んは苦しき事也。

其角曰、凡、讃・名所の發句は、その讃その所の發句と見ゆるやうに作すべし。西行の讃を定家の讃にも書、明石のほ句を松島にも用ひ侍らんは拙き事なるべし。

去來曰、

　魂棚のおくなつかしき親の顔

此句始は、面影のおぼろにゆかし玉祭　といふ句なり。

此時添書に、祭る時は神いますがごとしとやらん、靈棚の奥なつかしく覺え侍るよしを申す。先師伊賀の文に曰、玉祭尤の意味ながら、此分にては古びに落申べく候ほどに、玉棚の懐しやと侍るは、何とて句になり侍らん。下五文字和らかなれば、下をけやけく親の皃と置ば句に成べしと也。其思ふ所直に句となる事をしらず、深くおもひしづみ、却而こゝろ重く詞しぶり、或は心たしかならず。

是等は初心の輩の覺悟あるべき事なり。

其角曰、古事古哥を取には一段すり上て作すべし。たとへば、蛤よりは石花を賣れかし　といふ西行の歌を取て、

　石花よりは海苔をば老の賣もせで

と先師の作あり。本哥は同じ生物を賣とも、石花を賣、石花は看經の二字に叶ふといふを、先師は生物を賣んより海苔を賣レ海苔は法にかなふと、一段すり上て作り給ふ也。老の字力あり、大概斯のごとし。

去來曰、

　卯の花に月毛の駒の夜明かな　許六

此句ヲ此趣向あり。句は、有明の花に乗込　といひて月

毛・芦毛馬は詞つまり、のゝ字を入ばロにたまり、さめ馬は雅ならず、紅梅・さび月毛・川原毛おもひめぐらして首尾せず。其後許六が句を見て不才を嘆ず。實、畠山右衛門佐といへば大名、山畠佐右衛門といへば一字を加へず庄屋也。先師の、句調はずんば舌頭に印轉せよとありしは爰の事なり。

其角曰、誹諧の工夫は今日のうへにして、風姿己とその佳吟をまてるもの也。されど誹席にのぞむとも屈情すべからず。屈情あれば句しぶり、心砕て更に取べきなし。予が常に誹席に出る毎に、上を白眼て句案侍るを、人ゝはとやうにおもひもすらんなれど、句の死活何ぞ胸中に寄ざらんや。先師常に誹諧にのぞまば誹諧を忘れよ、誹諧を忘るゝうへに今日何事かある、唯見るもの聞事誹諧ならずといふ事なしと宣ひけり。

去來曰、正秀亭の會に、

ふたつにわれし雲の秋風　正秀
中れんし中切あくる月影に　去來

此附句第三也。初は、竹格子影も露けく月澄て　と附侍るを、かく先師の斧正し給へる也。其夜ともに曲翠亭に宿す。先師曰、今夜始て正秀亭に會す、珍客なれば、ほ句は我なるべしと兼て覺悟すべき事なり。其上ほ句と乞はゞ秀拙を撰ず、はやく出すべきなり。一夜のほどいくばくかある、汝發句に時をうつさば、今日の會むなしからん、無風雅の至なり。あまり不興に侍る故我ほ句を致せり。正秀忽脇を賦す。ふたつにわるゝと烈敷空の氣色成を、かくのびやかなる第三附る事、前句の氣色を探らず、未練の事也と、夜すがら呵り給ひけり。その時、月影に手のひら立る山見えて　と申一句侍りけるを、唯月の殊にさやけき所を申さんとのみなづみ、位をわすれ侍ると申。先師曰、其句を出さばいくばくの増ならん、此度膳所の耻一度雪がん事をおもふべしと也。

其角曰、句案に二品あり、趣向より入と言葉・道具より入となり。詞・道具より入人は頓句也、多句也。趣向より入人は遲吟寡句也。されど案じかたの位を論ずる時は、趣向より入を上品とす。詞・道具より入事は、和歌流には嫌ふと見えたり。誹諧はあながちにきらはず。

卯七問、猿蓑に花を櫻にかへらるゝはいかに。去來曰、此時予花を櫻に替んと乞。先師曰、故はいかに。去來曰、凡花はさくらにあらずといへる、一通りはする事にして、花翠・茶の出花なども花やかなるによる。花やかなりといふもよる所あり。畢竟花は咲節をのがるまじとおもひ侍る也。先師曰、さればよ、古は四本の內一本は櫻なり。汝がいふ所も故なきにあらず、ともかくも作すべし。されど尋常のさくらにて替たるは詮なからんと也。予糸ざくらはら一ぱいに咲にけり　と吟じければ、句我儘なりと笑ひ給ひけり。

去來曰、句に姿といふもの有。たとへば、

　妻呼雉子の身を細うする

始は、雉子のうろたえて啼也。先師曰、去來、汝いまだ句の姿をしらずや、同じ事も斯いへば姿ありとて、今の句に直し給ひけり。支考が風姿といへる是也。風情といひ來るを、支考は風姿・風情とふたつにわけて敎らるゝ、尤さとし安し。

其角曰、句に語路といふものあり、句はしりの事也。語路は盤上に玉の走るがごとし、滯りなきを好とす。又柳糸の風に吹るがごとし、優を取たるよし。溝水の泥土に流るゝがごとく、行あたり〱なづみたるを嫌ふ也。其外卷中に一句二句曲をなせる句は有べし。それともに語路のしぶりたるは惡し。是等は一手の外也。

去來曰、たとへば百員は一座の百員にして、十人の連衆ならば十人の百員也。されば我ひとり好句なしたりとも、一卷の拍子に違ふては文章をそこなふの罪尤不與なり。たとへば、

　初のいのこにてうどしぐるゝ

　生鯛のひち〱するを臺に載

　どこへ行やら裏の三助

此附句臺にのせといへる所、いのこの祝義と極て此分過たり。やはり、ひち〱としてはねかへりなどあらまほしき、然ば附句までも能らん。かゝる所より手おもくなれり。總じて一句にいひ盡したるは、あと〱附がたきもの也。されば附句は前へよろしく、後へおよぼすを第一の習とし侍る事也。

其角曰、さし合等の事、先師曰、おほむね御傘・はなひ等を用ゆべきと也。惣じてさし合の事はあらましをさへ覺え侍らば、强て吟味すべき事にはあらじ。是誹諧を無量ならしめんが爲、先師もさし合くりの上手といはれんよりは、誹諧に上手のかたあらまほしと宣ひき。さし合の吟味にひまどりて誹諧に未熟ならんは、かの說經習ふ事をのちに、馬乘習ひけん法師に異ならずぞ有べき。

卯七問、先師は誹諧の法式を用ひ給はずや。去來曰、是を成程用ひてなづみ給はず。おもふ所ある時は古式を敗り給ふ事もあり。されど私に敗るは稀也。第一先師の誹諧は長頭丸以後の誹諧を以元來とし給はず、唯世々の誹諧体にもとづきたまへり。凡誹諧の句は已に久しといへども、連誹となるは長頭丸以來にして、未法式なし。仍て連誹の式を用ひらる。重而誹諧の法式を改作あらるゝにも及ばず、又上より定りたる法式にもあらず。若其人あらば是を損益あるとも罪なるまじ。其時の宗匠達はみな元來連歌師たる故、連歌の法式を借用らるゝ也。退ておもふに、今日の先師若其時に居まさば、連哥によらず、誹諧の式は別に立べし。世の人は誹諧を以連歌の奴僕のやうにおもへり、先師の沙汰は格別也。

其角曰、句談・句評は尤一大事也。都而聞人も我好むかたに聞なして、たとへば閑寂なるを好むものは作ある句をとらず、作好む人は閑の場をしらず、是いまだ誹諧の手に入ぬ故不自在なり。されば先我聞たるやうを功者の人にうかゞふて、其甲乙を試むべき事、一向修行のたよりなるべし。

去來曰、

行春を近江の人とをしみける　芭蕉

先師此句を語て曰、尙白が難に、近江は難波にも行春は行歲にもふるべしといへり。汝いかゞ聞侍るや。去來曰、尙白が難當らず。湖水朦朧として春を惜むにたよりあるべし。とに今日の上に侍ると申。先師曰、しかり、古人も此國に春を愛する事、おほく都におとらざるものを。去來此一言心に徹し、行としを近江に居給はゞ、いかでか此式ましまさん、行春難波にゐまさば、もとより此情うかぶまじ、風光の人を感動せしむる事眞なる哉と申。先師曰、汝

は倶に風雅を語るべきものと、殊さらに悦び給へり。

つたの葉の　　　尾張の句

其角曰、此發句は忘れたり。蔦の葉の谷風に一すぢ峯まで裏吹かへさるゝといふ句なるよし。予先師に此句を語るに、先師曰、發句は斯のごとくま〴〵までいひ盡すものにあらずと也。支考傍に聞て大に感驚し、始て發句といふものを知侍ると、此頃もの語あり。予は其時も等閑に聞なしけるにや、あとかたもなく打忘れ侍る。いと本意なし。都而句はいひ課せざるは未練也。いひ過るは又病ひなり。いづれも句として見る所なし。或時、

此ごろや小春を室にかへり花　　丈艸

此句はじめ上五文字を、山陰や・南邊や、と置わづらふよし。尤小春の利に落て、いひ過るの病ひなり。下七五にて何意悉濟侍れば、たゞこゝろなき五文字を置べき也と、今のかふり（冠）に定侍る。

去來曰、

年たつや家中の禮は星月夜　　其角

元日や土つかふたる顏もせず　　去來

許六の說に、當時元日といふ冠用ゆまじき難あり。去來曰、元日は嫌ふべき事にあらず、やの字平懷に聞ゆ。此難成べし、此句元日といはん外なし、やは嘆美したるの詞也。許六曰、其角此句吟じ、春たつといへば歲旦にあらず、元日はいひ古びたりとうかゞふ。先師曰、さばかりの作者の今日と謂んは拙かるべしとて、年たつやとは置給へり。又やの字に嘆美賞のやといふはなし、五ッのやは疑ひのやとは習ひ侍る。去來曰、角が句におゐては先師かく宣ふべし。予が句におゐてはさは宣ふまじ。作者の甲乙を以いふにはあらず、己〳〵がこゝろざす所に違あり。そこは先師の見ゆるし給へり。予は珍物新詞を以常に第二等に置侍る。又嘆美のやは名目にはなし。名目を以いはゞ治定のやなり。治定に嘆美・嘆息あり。古今集の和哥にもあり。世話にも、さるたりや虎御前　切たりや武藏坊　といふ比は治定歎美なりと論ず。猶後判を待。

其角曰、凡句といふものは、冠を沓へまはし、中を上へやり、或はもをのとし、にをはとするごとき類ひは一体趣向手はりにて、一句にいひ取がたき故也。極て秀逸とはなりが

たし。速にその趣向を捨、心を轉じて句案すべきなり。

去來曰、發句・附句ともにだん〳〵深く案じ入つゝ人にうかゞふに、趣向はさもあらんなれど、一句のうへ聞えぬよしを答ふ。是を聞得ざるかと人を疑ふは僻ごと也。我は初發より趣向を胸にわすれざれば、深く案じて句面に趣向のうかまざるに心づかぬ故也。是等執心に案ずるうへにまゝこれあり。彼誹諧の修行地は、淺きより深きに入、深きより淺きにもどるべしとは、先師も教置れしなり。

其角曰、人情と人倫をひとつの事のやうに覺え侍るやからあり、大に相違の事也。人倫は人の品、人情は其心〳〵なり。されば附合は前句・打越の姿を定てその品をわかつ時は、たとへば百句が百句人を以附るとも、さし合の沙汰を遁れ、しかも其一卷句ゝ連綿していと興あらんか。されど序破急をばとりはづすべからず。凡初心の修行は卷數を以功を積べし。卷數なければ一卷の序破急をのづから定る事難し。先師は誹諧ははやく上手に成べし、そのうへ功を積べき也と宣ひけり。

去來曰、

綾の寐まきにうつる日の影

泣〳〵も小き艸鞋求めかね　去來

此前句出て座中暫く附あぐみたり。先師曰、能上﨟の旅なるべし。頓而此句附。好春曰、上人の旅と聞て言下に句出たり。蕉門の徒修練格別也。

其角曰、一卷附込たる所をゆるめんが爲、天象・時節・氣色等にて伸たる句をするなるをば逃句といふて、拙き事のやうにおもへる輩あり。さにはあらず、却而功者の心を用ゆべき事也。先師も、加茂の社は能やしろ也　とは手本を殘し置給ひし也。是能伸たる句は一句の花をかざらず・前を抑えてしかも跡の附よければ、是より又立直りて句ゝはしりも出來ぬれば、是を一卷の繋・功者の捌とはいふ也。

野坡曰、東武の會に盆を釋教とせず、嵐雲是を難ず。先師曰、盆を釋教といはゞ正月神祇なるかとなり。去來曰、予其時は兎角をいはず。退ておもふに此事はいかさま故あらん、一句に釋教なしといふとも、既盆と呼ば釋教ならんか。中元といふ類にはあらず、いと不審也。

去來曰、誹名はあながち熟字によらず、唯唱きよく調ひ、一字形の風流なるを用ゆべし。短冊など書てなを見る所あり。片名書侍るにとく／＼しき字形は苦しかるべし。はせをは假名に書ての自慢なりと也。又野明が名をはじめ鳳仭といひけるを、劒・刄のある字は名に用ゆべからずとて、野明とは改め給ひける也。

其角曰、誹諧文の趣をうかゞひ侍るに、先師曰、世上誹諧の文章を見るに、或は漢文を假名にやはらげ、或は和哥の文章に漢章を入、詞あしく賤くいひなし、或は人情をいふとても、けふのさかしきくま／＼まで探り求め、西鶴があさましく下れる姿あり。我徒の文章はたしかに作意をたて、文字は假令漢章をかるとも、なだらかにいひつゞけ、事は鄙俗の上に及ぶとも、懐しくいひとるべしとなり。

去來曰、先師誹諧は老後の樂也となり。誠に世中の諸藝みな年の限あり。ものゝ師はさる事なれど、老ては友にうときなるべし。此道にのみ若きにも交り、却而老を助らるゝ也、されどもいづれの業に限らず人は時宜によるべき事なり。此こゝろ忘るべからざれば、老も若きも隔てはあらじ。

浪化問、今の誹諧にものがたり等を用る事はいかゞ。去來曰、同じくは一巻に一二句あらまほし。猿蓑の、待人入し小御門の鎰　は門守の翁也。此撰の時物語等の句すくなしとて、粽結との句を作し入給ひけり。

其裔問、竹植る日は古來より季にゆや。其角曰、不二覺悟一。先師の句に始て見侍る。古來の季ならずとも、季に然るべきものあらば撰み用ゆべし。先師、季節のひとつも捜し出したらんは、後世によき賜となり、鹽かきの夜も古來の季節かしらずといへども、五月晦日なれば夏季に定て可南が句に沙汰し侍るとなり。

去來曰、誹諧集の模樣はやはり誹諧集のうちにて作すべし。後あらの集の献立を見て、先師も我を折給ひき。かのつれ／＼艸はあつめ書の部になりて、哥書のうちに入ずとかや、おもふべし。先師曰、誹諧書の名は和歌・詩文・史錄物語等と違ひ、誹言有べしと也。されば先師の名付給ふを見るに、みなし栗・三日月日記・冬の日・ひさご・猿蓑・葛の松ばら・笈の小文庫(本ノマヽ)、みなその趣なり。浪化集の時、上

下を有磯海・となみ山と號す。先師曰・みな和哥の名所なれば紛らはし、浪化集と呼べしと也。

蘭國問、浪化集と誹書の名、詩和史文をわかつべからず。去來曰、されば浪化詩人ならば詩集なるべし、誹諧者たれば見るより誹諧書といふ事明らけし。先師の一言を用ひ給ふと仇なる事は侍らず。

仙化曰、彥根の發句一句に季節ふたつ入手曲あり、尤難ずべし。其角曰、一句に季節ふたつ・みつ有とも難なかるべし。もとより好む事にもあらず。許六曰、一句に季節をふたつ用る事初心は成がたし。季と季のかよふ所ありと也。其角曰、一句に季をふたつ用る事は功者・初心によるべからず。許六の季と季のかよふ所に習ひ有といへるは、予いまだ不二覺悟一事なり。

去來曰、

夕立や戸板押ゆる山の中　　酒堂

此句黑崎に聞て是に及なし、句體風姿あり、語滯らず、情ねばりなく事新らし、當時流行の正中也。世上の句多くはめさるゆゑに角こそあれと句中にあたり合、或は眼の前をいふとて、すんきりの竹にとまりし雀、暖簾の下潜り來る燕などいへるのみ也。此兒此地にありて能師に學ばゞいか斗の作者にかいたらん、第一はまた心中に理屈なき故也。若、わる功の出來るに及では、又いか斗の無理いひにかなられん、おそるべし。

其角曰、

鶯の舌にのせてや花の露　　半殘

此句、のするやといはゞ風情あらじ。のせけりといはゞ句なるまじ。てやの一字千金。實、半殘は手だれなり。嵐雪曰、てやといへるあたり上手のこま廻しを見るがごとし。

去來曰、

いそがしや沖のしぐれの眞帆片帆

猿蓑は新風の始、時雨は此集の美目なるに、此句仕損ひ侍る。只、有明や片帆にうけて一時雨　といはゞ、いそがしやも眞帆もその中にこもりて、句のはしりよく、心のねばりすくなからん。先師曰、沖のしぐれといふも又一ふし有かし。されど句ははるかにをとり侍る也。

其角曰、「

鶯の啼て見たれば啼れた歟

起ざまに眞そつとなかし鹿の聲　杜若

如ㇾ斯伊賀の連衆に仇なる風あり、是先師の一体なり。迂化の後ます〳〵多し、右の類ひ也。その無智なるには及びがたし。支考曰、伊賀の句、或はさしてもなき句はあれども、いななるは一句もなし。伊賀の連衆は上手也。

去來曰、

腫ものに柳のさはるしなへかな　芭蕉

此句浪化集に、さはる柳と出す。是は予が誤傳ふる也。重て史邦が小文庫に、柳のさはると改め出す。支考曰、さはる柳なり、いかで改め侍るや。去來曰、さはる柳とはいかに。支考曰、柳のしなへは腫物にさはると比喩也。去來曰、不ㇾ然。柳の直にさはりたるなり。さはる柳といへば兩様に聞え侍る故、重て予が誤りを糺(訂)す。支考曰、吾子が說は行過たり。只さはる柳と聞べし。丈艸曰、ヿ葉の續きはしらず、趣向は考がいへるごとくならん。去來曰、さすがの兩子爰を聞たまはざる口惜し。比喩にしては誰〳〵もいはん。直にさはるとはいかでか及ん。格位も又格別也と論ず。許六曰、先師の短冊にさはる柳とあり、そのうへ柳のさはるとは首切なり。去來曰、首切の事は予が聞所に異なりと論に及ばず。先師の文に、柳のさはると慥なり。許六曰、先師の跡より直し給ふ句多し、眞跡證となしがたしと也。三子みな、さはる柳の說也。後賢猶判じ給へ。

去來曰、いかなる故にやありけん、此句汝にわたし置、必人に沙汰すべからずと、江府より書贈り給ふ。其後大切の柳一本去來にわたし置けると、支考にも語り給ふ。其比、浪化・續猿兩集にも除かれけるに、浪化集の半に先師迂化有しかば、此句のむなしく殘らん事をうらみて、其集にはまゐらせける也。

其角曰、

梅の花赤いは〳〵あかいはな　惟然

此惟然坊が今の風大かた此類也。是等は句とは見えず。先師此坊が誹諧導き給ふに、その秀たる口質の所より進めて、磯際にざぶり〳〵と浪打て　或は、杉の木にすらすらと風の吹わたり　などいふを賞し給ふ。又誹諧は氣先

を以無分別に作すべしと宣ひ、又此後いよ〳〵風体輕からんなど宣ひける事を聞まよひ、我得手に引かけ、自分の集の歌仙に侍る、妻呼雉子・あくるがごくの雪の句などに評し給ひける句勢・句姿などゝいふ事の物語どもは、みな忘却せりと見えたり。

去來曰、

泥龜や苗代水の畦うつり　史邦

此句、猿蓑撰の時ヲ誤て畦傳ひと書。先師曰、畦うつりとつたひと、形容・風流格別なり。ことに、畦うつりして蛙啼也　とも詠り。肝要の氣色をあやまる事、筆の罪のみにあらず、句を聞事おろそかに侍る故也と、機嫌悪かりけり。又、

田のへりの豆つたひ行螢かな

此句始は先師の斧正ありし凡兆が句也。猿蓑撰の時凡兆曰、此句見る所なし、除くべし。去來曰、へり豆をつたひ行螢の光、闇夜の景色風姿あり。凡兆許さず。先師曰、兆もし捨ば我拾はん、幸伊賀の句に似たるあり、それを直し此句となさんとて、終に万字が句となりけり。

其角曰、誹諧も句に心を顯すなれば、はづかしき事いひ出んはいと拙し。わけて戀句などには心を附べし。かの古の集にも、月の夜・雪の朝、哥をめしてさかし、おろかなりとしろしめしけんとあり。誠に心根の賢愚、句に顯はるべき事なり。

去來曰、人各才智ありて修行いまだ足はずとも、句も附合も能し、人ゝ是をほむれば、我も能なすぞとおもひとりて、心にひとつ關を居れば、それより長く風雅の逆路におもぶくべし、おそるべきの一筋也。たとへ心は古人を恥ずとおもふとも、修行におゐて何ぞ及ぶべき所あらん。されば此道の習ひとして、心は高う遊ぶとも、業におゐては我眼當とすべき人をたよりて、渠は上手、是は及ぶべくもあらずとおもひて精出しなば、一際其人より上達すべき事疑ひなし。人のそしるも是ならず、我よしとおもふも非ならず、唯修行の道を心得ると心得違ふるとにあり。

東叡山下竹町
星運堂　花屋久治郎版

旅寝論

去來著

長崎といふ所に旅寐しけるに、都の書林重勝がもとより比日の集なりとて、浪化が續有磯海・風國が泊船・許六が篇突など三の集ををくる。ある日此浦の卯七・魯町ともに披みるに、外二のは發句・連俳をのせられ、篇突集は此道のをしへ・工夫のたよりをしるして、修行の人の助すくなからず。然どもまた疑はしき筋も見へ侍れば、かれこれ鍛錬を起して、一ッの書にとゞむ。我蕉門に年ひさしき故に、虚名高しといへども、何におゐてその靜なる事丈草に及ばず、そのはなやかなる事其角に及ばず、輕き事野坡に及ばず、仇なる事土芳に及ばず、巧なる事正秀に及がたし。曲翠・半殘・野水・越人・酒堂が輩、今、この道にほこらずといへども、をの／＼恐るべき一すぢあり、猶この人／＼のみに限ず。されば卑き才をもつて徒に評をなさんは、流石に憚おほえ侍れども、日比聞置たる師說をうしろ楯に、此品／＼を述る。かならず鹿をとらへて、人を欺くやうにはあらじとおもひ侍るのみ。

元祿十二己卯三月　日　　去來旅人白序

許六の篇突集を見侍るに、歳旦の句二ッ三ッ記し出す族もあり、また子の日・二日・三日など題して遣す人もあり、師說如レ此聞つたへず、無二覺束一といへり。

答曰、此事我未レ聞、そのかみ我歳旦の句二ッ並べ出す、是は自他の趣を述たる句なり。先師もよしと許し玉ふ。むかしは昔にて今は嫌ふ事にや。たま／＼東坡が詩集を見るに、己卯の年の歳旦三首あり、惣て詩哥ともに事にふれ感によりて作せんに、いくつ有とも風雅の上に難有まじき事か。但、同趣なる事の句作のみ多出さんことは見苦しかるべし。許六の說さだめて聞ところ侍らん。

問曰、遠國の歳旦など交へ出すも尤遠慮有たき事歟。大津繪の歳旦前書、後代の格式にて分明也といへり。此發句の前書は三日閉レ口題二四日一とあり、いかなる所を法式に學びし事や。

答曰、遠國の歳旦まぜて出す事、如何なる遠慮侍るもしらず、もし遠方の句、初春に出さん事、時日不二相應一故にや。是は苦敷かるまじ。如レ此かぎり侍らば遠客の歳旦は、二月・彌生の比、都にも關東にも聞へ、はつ春の氣色

いたづらにして、あたら作者どものこゝろざし空からん。能因法師の白川の秋風も都のうちの吟なりと一說あり、かやうの事は風雅の風なれば、古人もしゐてとがめずと承る。そのかみ京・江戶の名客達の歲旦も年の內の吟なるも、假令三十日・廿日前後ありともくるしかるまじきか。是たゞ五十步をもつて百步を笑ふなるべし。先師の句など京・膳所・難波等の歲旦に合せて見出したるさまも多し。又、大津繪の前書の事、そのとし我方に書送り給ひしは、鳰鳥の鳰の浮巢に春をむかへて、三日鶯をうごかす題四日と侍りき。此前書、後代の格式といへる、いさゝかわきまへがたし。唯うち聞たるまゝに求ることなし。但題四日にて三日は鶯を閉るとある故に、兎角試筆の句は元日にもせよ、二日・三日にもせよ、只一句のみといへる格式にや覺束なし。畢竟二日に吟じ、四日に題し給ふ事は一ツは騷人の風流、一ツは風客の感偶なり。しゐて一句に限るにも有まじ。其題を得給ふときはいくつも有べし。然どもこれ我一己の見解にて、あながちに謂れがたし。但二句以下の句は前書・題號も有べき事か。

問曰、元日やと打ひらめたる詞は、過去たるべしといへり。先師の句に元日といへる冠あり、用捨いかゞ侍らん。

答曰、元日と云詞はとがめたるにはあらじ。元日やといへる、やの一字にて詞平懷に聞へ侍る故なるべし。此事を書つらねしは、去年我歲旦の句の評たるよし、惟然物がたりすと聞ぬ。退ておもふに此句の五文字、元日やといはん外なし。やの一字は元日を賞嘆したる詞なり。たゞ元日は元日にてと云て全（詮）なし。先師迁化のとし落柹舍に入給ふ。我當時の流行を窺（伺）ひ侍るにも、詞の平懷なるを嘗て嫌ひ給はず。先師なくなりたまひて既に四五年も過ぬ。許六の四五年も過去たるべしといへるは、其後の流行に嫌ひ侍る事にや、我いまだその流行をしらず。また元日といへる詞は、いつとても用捨有べき詞にあらず。初春・元日・花の春等の詞、許六のいへるごとく句によりて差別有べし、時代に依べからず。

問云、歲旦無季の格とて、許六二句あげて示さる、無季の句と申事侍るや。

答曰、先師もたま〳〵無季の句有レ之、然どもいまだ押出

して是を作り給はず、或時の給ふは神祇・釋敎・賀・哀傷・無常・述懷・離別・戀・旅・名所等の句は無季の格有たきもの也。是を興行せんと思ひ侍れども、暫おもふ所ありと云々。無季の句といへるは落馬の即興に

　歩行ならば杖つき坂を落馬哉　　翁

　何となく芝吹風もあはれ也　　杉風

此句は先師の旅行を送りての吟なり。

　戀をしておもへばとしの敵かな　　去來

これらの句なり。表裏ともに季を見る所なし。此句而已にかぎらず、折〳〵の吟あり。今許六の擧るも、二句は無季といふべからず。表に季見へずといへども内に季あり。此故に歳旦の句にはなれり。一とせ先師の歳旦、

　とし〳〵や猿に着せたる猿の面　　先師

此句季はいかゞと窺けるに、とし〳〵はいかにとの給ふ。いしくも承るもの哉と退ぬ。としは季の詞にあらずや。かくの給ふ處をしらるべし。面に季見えずして季になる句、近年付句等にもほゞ見へ侍る也。また其角が嫁か君は勿論鼠の事也。一說に大としの夜大黑柱のもとに火を燈し、これを嫁が君といふといへり。思ふに嫁が君は鼠の事也。大黑柱の有明は嫁が君に捧たる燈明なるべし。しかれば大としの夜、元朝かけて鼠の事を嫁が君と云にや、尤、本說をしらず。野坡が曰、嫁が君は春季にて鼠の事なりと增山の井に書たり。

問曰、脇・第三の格式それも春季の詞をむすび、樣〳〵に前句に付るまでを本意とし、尋常の百韻誹諧の口三句引出したる類にて、歳旦三ッ物の手柄なし。たとへば小車のきびしく廻るごとく、唯三句に百韻・千句の働有事をしらずといへり。尋常の脇・第三といかゞ替り侍るや。

答曰、我とし比歳旦三ッ物を作といへども其所をしらず。又、先師も汝が三ッ物其格にあらずととがめ給ふ事なし。其中發句はわすれぬ。脇は、

　梅に雀の枝の百なり　　去來

先師深川にて此句を評して、これ二月の氣色也。去來はいかゞおもひあやまり侍るやとのたまひけるとなん。又、許六がいへる所も一理有。去秋、支考此津に旅寐して卯七と表合あり。我に語りて曰、凡、表合等の俳諧は尋常の

歌仙・百韻とかわるべし。表のうちに一巻の姿をこめて、去嫌もあながち用ひ間敷事也といへり。一段面白かるべしと答へぬ。二子の先師に兼て聞置る事にや、又古來の法式にや。二子發明の案に合したるにやと退ておもふに、古法・師傳によらば論に及ばず、もし一己の見解にあらばいかゞ侍らん。只一時の風流にはさも有べし。法式と立んはわづらはしかるべし。凡先師おり／＼古法を破り、新式を定めたまふ事は制をはぶき、事を廣めて句に秀句多からん事をはかり給ふ也。常に門人に語り給へば聞置たる人あらん。然ども故實をふまへ、猥に破り給ふ事なし。今二子のごとく法を定んは、三ツ物に一ツ理屈そひて、かへりて後人の害ならんか。深く先師の旨を察ししらるべき事也。

問云、中秋前後幷に月の句に名の字を容易に置事は、元來未練の事也。古人名の字に膓をたつことはたやすからず、名月・けふの月・月見、此かはり有べし。名の字、近代明の字書事有り、無ニ覺束一いへり。名月と云る事如何なる故實侍るや、明の字嫌ふ事に侍るや。

答云、されば三五十三夜の月、今をしなべて名月といへり。其中何れの月か不レ知、名月といふ故有と聞。しかれども今日、名月の詩哥を作らんに、あながちその故實に不レ可レ限・尤故實によらば猶佳なるべし。又明の字を用る事は和漢ともに三五の清光を賞し來る故に、明と名と通ひたるをもつて通用は成べし。か樣の事はまゝ侍る也。又漢家には名の字は三五兩夜ともに用るとなし。我朝の故實なる故也。尤十三夜の事は不レ及ニ沙汰ニ一

問云、鶯といふ句は尋常になりがたき題なり。晋子身をさかさまにと見出したる眼より、天晴近年の鶯、秀逸とやいはんと云り。此句如レ斯よき句に侍るや。

答云、この句は風情あり。然ども初音哉といへる、いかゞ侍らん。鶯の身を逆にするは戯れ鶯也。戯鶯は早春の氣色に非ず、初音の鶯は身を逆にする風情なし。初音ほのめくなど共詠り、今其角が鶯を見るに、日比その姿を覺て、句に望む意を畫屛なんどをみて、作したる句也と難じらるゝも尤也。全く鶯の本意を忘れたると云んか。されば素行が句に

　　うぐひすの岩にすがりて初音哉

此句を大津の連中の殊に感賞すと、美濃の怒風がもとより句主へ告來れり。これ鶯の姿に非ず、たゞ物を傳ひて飛移らんとするか、又は物におそるゝ姿、又は餌をひろふかたちなり。其角が句は鳴音哉と留、素行が句は岩に消りてなどゝし侍らば首尾相應すべし。然ども鳴音・岩にとまりてと云んは拙かるべし。此故に初音哉、岩にすがると云捨たる物なるべし。時鳥は適ゝ云あつる人も有べし。鶯は中〳〵成がたかるべしとの玉ふといへばさも有べし。先師在世に門人の句の中に、郭公は折々賞し給ふ句多し。鶯の句は稀に聞侍りぬ。

問云、先師の句に、其聲の江に横たふやほとゝぎす　又、子規聲横ふや水の上　此二句沾徳が判にて、聲横たふの方に極るよし、許六書れたり。先師も人の評によりて句をさだめ玉ふ事侍るや。

答云、此事有べし。沾徳のみに限らず、門人の評を聞て句を定玉ふ事多し。

問云、江に横たふの方は句すぐれ侍れ共、下の五文字舌頭に當りて刎かへるやう也といへり。下に杜鵑と置給ふ句、或は野を横に、或は京にても、其外如何ほども侍らん、唯此一句をのみ先師の吟じかへ玉ふといへるは、如何成事に侍るや。

答云、許六の云る所さだめし故有べし。我西國に生れ舌だみ清濁分らず、いさゝか舌頭に當る所をしらず、又野を横に馬引むけよ子規　こがくれて茶摘もきくや子規　の二句は、上の十二文字の間にて、てには廻らずといへるも我等のしらざるところなり。

問云、初雪・春雪の境紛れ安しといへり。尤、紛間敷事なり。如何成故にや、かくは書れ侍るや。

答云、いかなる故ともしらず。

問云、村雨は無季にて、然も其季を結ぶに習ひ・格式有といへり。いかなる習侍るや。

答曰、その習ひをしらず、然ども村雨といへるものは一種にして、外の雨と風情かはり有、夕立に非ず、時雨にあらず、その風情をよくしらるべし。凡、村雨而已にかぎらず、その景情にたがひて無理の作をかりにも作べからず。是古今騷人の深く思ふ所也。その景情にかなふ時は心な

き草木に心をこめ、しるべなき風雲に想をはこぶ、尤憐べし。

問云、奥山の鹿は、中〳〵云尽せがたき題成べしと許六説也。難題に侍るや。

答云、如何侍るべき。先師、同門の發句を考へ不レ見、今さし當り思ふに、集に見得たる發句は多くは端山の鹿也。又端山・奥山に通ふ句あり、一かたにおく山の鹿に吟じたるを不レ覺。十とせ餘りむかしにや侍らん、

奥山や五聲續く鹿の聲　去來

鈴鹿の吟也。伊勢紀行一巻つゞりて深川に送る。先師唯一巻を賞して文章并に發句のむすび、句の善悪は沙汰なし。今退て思ふにつたなき句也。然共おく山の鹿の風情に洩じ。許六のいへるは此題は秀句の作しがたかるべしといへる成べし。

問云、牡丹を連俳ともに夏の季に用ひ來る事、古人大に案じたる所より出たりといへり。如何成事に侍るや。

答云、此事いまだ不レ考、夏の景物少き故に、これを夏に寢りたると云一説も侍る。

問云、春の暮に對して、秌の暮を暮秋と心得たる作者多しといへり。尤秋の昏は秋の夕也。春の暮は暮春の事に侍るや。

答曰、春の暮は暮春也。又一片に不レ可レ限、一首・一句の趣にもよるべし。

問云、浦の笘屋の夕まぐれ・槇立山の秋の暮と淋しきこともさびしきとは讀り。是みな哥の國の道具也。又肥たる男とさびしからぬ物に秋のくれを哀れを結びて、さびしがらするは誹諧の國の道具にて、相當の位は少しもかわらずと云り。然ば我誹諧ともに秋の暮などには淋しからぬものを結びたる、よく侍るや。

答云、是は許六、和哥と誹諧の相當の事をいはん爲なり。秋の暮にさびしからぬ物をむすぶをのみ、本意とするにあらず。是にひかるゝ和哥も浦の笘や・槇立山、皆淋しき物に秋のくれをむすばれたり。文章は先後を考へ、大意を見らるべし。淋敷ものに淋しき物をむすび、めでたき物に目出度ものを結ぶは天然の作なり。さびしきものに淋しからぬ物を結び、目出度物にめでたからぬものを結び、

一句をよく首尾したるは作者の働也。古人も作の跡の見得ざるを以て、上品の沙汰有。猶先師の病鴈の夜寒に落て　といへる句のたぐひならん。

問云、許六の說に哥の國・俳諧の國、或は哥の題・俳諧の題と所々にわけられたり。然ば哥の題に於ては、誹諧より押(推)て作すると申物に似たり。此事如何侍らん。

答云、不審尤也。古來より哥の名所・諧誹の名所と云るが如し。是を假初にわけて云時は、二ツに別れて聞え侍れども、委敷是を論ずる時は、和哥は制法多く定りて題も名所も限りあり。法外に遊ぶ事なし。此故に和哥の名所・和哥の題定れり。誹諧は分量なし。詞として誹諧に不レ用と云事なし。唯和哥の見處と俳諧にらむ所と趣きたがひ有のみ也。たとへば花は和哥の題・菜種は俳諧の題と云はよし。花は誹諧の題に非ずといふは非也。吉野は和哥の名所・如意は俳諧の名所と云はよし。吉野は俳諧の名所にあらずと云は非也。此故に花や、吉野を詠ぜんも少しも和哥の題を誹諧よりかり作るにあらず、尤、よし野にも誹諧の領あり。古人その景情の和哥にもれて、やむまじき所有を以て俳諧は行れたり。是を双方に引分たるものゝごとく沙汰せんは、却て古風に近し。

問云、惣て繪に不レ移人は、風雅の上にかけたる事多しといへり。然ば繪書ざらん人は、達人には成間敷や。

答云、如レ斯の語は廣く聞てこまかに察べき物也。許六一事を揚て人を導く敎と云ふ成るべし。古より詩哥・連俳の名人、皆よく繪を知り給ふにもあらず。尤許六の繪に移るといへる寫の宇肝要也。第一繪にうつる人は風雅に勸む事早かるべし。又韻塞集に先師の語をあげて、東海道の一筋も不レ知もの風雅に無二覺束一といへり。是皆如レ此語る類也。一片に不レ可レ聞。むかしより代々の皇、驛路に行幸し給ふは稀也。然れ共多くは哥仙にてまします。我八歲にして初て二百里を歷し、今猶夢のごとし。十六歲より今年四十八歲として旅寐せずと云事なく、海陸に廻る事四十八ヶ國、東西に走る事五十余度、牛馬の通ふ道を難所とせず、壁有家を佗寐とせず、鹽をなめて無菜とせず、尋常人の往通ふ旅は申に不レ及、都て此一事におゐては百人が中に出ても拾番と落じ。然ども才拙く吟おもく

して、句に望て千が一も吐ず。如ｖ此論ぜんは牛の爪丸くば猶にぶからんと云に似たり。畢竟繪に移り旅に馴れ學に富色にそみ閑に居し難に所したる人は、風雅の道に大きなる助なるべし。唯俗に云る禿達の傾城・かつしきだちの長老といふものならし。

問云、許六、蕣の裏を見せけり風の秌　と云句を或人亡師の、葛の葉の表見せけり今朝の霜　といふ句と作例たりと難じけるに、少も不ｖ苦よし許六の辨あり。いかゞ定給ふや。

答曰、先作例と等類は違ひ有。和哥に作例は證哥に引るゝと聞たり。等類は是を憚る。誹諧には等類は云不ｖ及、作例も事により用捨侍るべし。今許六の論を見れば等類の辨と見へたり。その論又我おもふ所に少しく同ふして大きに違有り。第一、先師の葛の表を吟じ給ふ句は、古人葛の葉のうらを云たるを返して吟じたるのみに非ず。冬の朝の物靜に霜白ふ置わたし、葛の葉の表折れて流石に凋たる風情の見るべき所あるを、俳諧の眼にらみ出し給へり。又、證歌に引るゝ所の筋も姿・心、同じやうに侍れども、その風情を述る所各別也。唯に春夏の都を出て秋白川に至り、長途に日數を經ると云一片の事に不ｖ寄、一首は秋風の吹わたる白川の風情に驚き、一首は紅葉ちりしく白川の氣色を述られたり。然共此二ッの風情に衣裝せざらんには聊詠じ給ふ。先師行春を近江の人とおしみけると侍るがごとし。その心をしらざる人は、却て行春は行年にもふるべく、近江は丹波にもかわるべしと難じき。先師の葛の葉の表見るべき風情なからんには爰を吟じ給はじ。今許六の朝顔もうらを見せて句とすべき風情あらばさもあらん。唯古人葛の葉裏を詠じて目前に蕣有事をしらずと、あざけりたる分にてはいかゞ侍らん。古人、若再來して蕣の事はしり侍れども、裏を見せたる風情佳ならざる故是をとらずといはゞ、いかゞ答侍らん。葛の葉のうら吹のぼる抔とは蚊足も作りぬ。許六も定て見る所有て發句とはなし侍らん。その風情をしらずして脇より尤評しがたし。又等類の事は前〳〵より同門に於て樣〳〵共論あり、今私にいはば我佛尊かるべし。先師並弟子の評の二ッ三を擧て是を辨ず。

面梶よあかしの泊りほとゝぎす　野水

先師の馬引むけよ郭公　と等類のよし、先師と凡兆の論有り。先師の曰、野水が句は明石の時鳥を吟ず、等類の遁るべし。去來いかゞ思ひ侍るや。答て申けるは、明石の郭公と云る分にて、和哥に詠ずる所とひとし。俳諧ににらみたる場は、面梶よとゝがめたる船中の眺望にあり。是又、師の引向たる馬に蹴出されたり。たとひ等類を遁れ侍るとも野水が手柄ははべる間敷か。先師曰、勿論也。手柄におゐては聊見へ侍らず。

清瀧や波にちりなき夏の月　先師

先師、此句は清瀧の初の吟也。師易簀し給ふ砌、我を呼て此日、その女かたにて

白菊の目に立て見る塵もなし

と云句を作すれば、清瀧の句を吟じかへたり。わすれず書とゞめ野明が方に殘し置、草稿は破り捨べしとて

清瀧や波にちりこむ青松葉

此句をかたり給ふ。是らはあながち語るべきほどの事には侍らねども、名人の心を用ひ給ふ事見るべし。されば浪にちりなきの句は、外に沙汰すべき句にも侍らぬを、師の句といへば門人あらそひ出して、集〲に見へ侍る。誠に師の本意を破るも淺間し。

桐の木の風にかまはぬ落葉かな

凡兆、此句先師の、樫の木の花にかまはぬ姿かな　と等類也と、其角と凡兆と評論あり。其角が曰、師の樫の木は多く風景を見盡し、魂よりねり出したる一句也。凡兆が桐の木は漸く樫の木にとりつき、指頭に拾ひ集たる也。如レ斯名人の句をおかし來らんは、情なき作者と云つべし。

月雪や鉢たゝき名は甚之丞　越人

此句、猿蓑集の草稿に撰び入侍りけるを、伊丹の集に、彌平(兵衛)とはしれど哀れや鉢たゝき　といふ句見當りて、入集いかゞ侍らんと窺(伺)ひけるに、先師曰、そのこゝろざす所かはりあり。然ども句において紛はし、遠慮有べしと下知し給へり。

門口や牛王めくれて初しぐれ

作者不レ覺、此句は彦根連中の吟也。一とせ許六がもとよ

り發句ども見せられけるに、これは其角が、よろ法師我門ゆるせ餅の札　と云句と氣味惡敷よし評ぬと覺へたり。これ我大きなる誤也。但其時こゝろ兩端に侍りき。若くにからぬかたに評せば大幸ならん。後悔の餘り今爰に去來語る。

秋はまづ目にたつ菊のつぼみ哉

此句は去秋、園女がもとにて先師の事ども申出ける序に吟ず。拙き句ながら、師の目に立て見るの句に等類なるまじきと覺へ侍る。是らの句を以て等類の事あらましにおもひしらるべし。又發句は唯一足の上に一ヅ、いひのきにしたる分にはあらず、夫も小刀・楊枝などの如く余情なからん物には、流石に見ゆる所も有べし。さもなき題にては發句の詮なかるべし。惡敷心得れば、

突出すや樋のつまりの鳴蛙

といへる句に成侍らん、心得給ふべし。

問云、誹諧は大旨連歌より出たり。然ども誹諧は連歌をも守るべからず、連哥にはよはしと定むる事は、師說にも大に嫌ひ、賤しと云類には苦しからずといへり。如レ形守り侍るべきか。

答云、許六の云るがごとし。凡誹諧は和哥の一躰にして、是を上下に分つ事も又久し。然ども唯一句一句の云捨のみ也。連哥興行せらるゝ時、いまだ定る法式なし。此故に法式は連哥により粗略して今の法式定る也。先師、此道を和哥にもとづけ給ふといへども、法式に於ては古法を旨とし給ふ事也。まゝ法式を破り玉ふ所は、十が八九は古實によれり。次韵の比迄は多く法式をやぶり玉ふといへども、却て今はもとにかへり侍る。許六はあながちに心得べしと、先師の物がたりを擧て是をさとす。或人曰先師の法式を破り玉ふ事を難ず。我その事を辨ず。そしる人の曰、しからば何事によらず、一利あらん事は古人の法を破り苦しかる間敷か。我答云、吾子法を破り風を變じて、天下の人三分一是を用ひば新式を立らるべし。若是を信ずる人なくんば詮なかるべしと云々。その後、先師是を聞給ひて必人と爭ふ事なかれ、我誹諧におゐて或は法式を增減する事は、大旨ふまゆる所有といへども、今日の罪人たる事をまぬかれず。唯已後の諸生をして此道に

安く遊しめん爲なり。心を以て考へ可レ知。凡法をやぶり風を變ずる事は其人に寄べし。又、史邦が誹諧の法式、何れの書を用ひ侍らんと窺ひけるに、諸書の説ゝ互に是非有べし、其中、俳無言まづよろしかるべしと先師も宣ひける。

問云、當時の前書をみるにその句の講尺也。前書といふは、其句の光を添る事、一とせ江戸にて晋子が句兄弟あめる時、許六に語りて曰、越人がけしの句は慥に云たらず。此けしを返して兄弟を付たりとて

散ときは風もたのまず芥子の花

とせしと云ゝ。許六曰、此越人がけしにて師の名人を知るといへば、晋子が云、いかん。答曰、吾子がいへる如くけし云足らず、故に僧に別るゝと云前書を付て、餞別の句とし猿蓑に入給ふ也と云り。今打聞たる所云たらずとも覺えず、いか成處をさして二子は評せられけるや。

答曰、ちる時の心安さよけしの花　と云句也。此句聊たらずといふ句に非ず。けし一躰の句となしても風情言おゝせたり。殊に餞別の句なれば見る所有。云たらずと云ん句は、

まん頭で人を尋よ山ざくら　其角

兄弟の顔見る闇やほとゝぎす　去來

角が句は自讃といへり。然ども其句意を聞ば、春花の間に遊んで、奴僕様のものに饅頭をとらせて、誰を尋來るべしといへる句となん。さりとては言たらず、たゞ前ゝ聞ゆる聞句にいへる物のごとし。夫も聞句は句を切て、手に葉を廻し侍れば、よく聞ゆる故に聞句とは云り。是は手に葉に能まはりたる所もなく、言外に意味の籠りたる方もなく、打聞たる儘にて六ヶ敷句にもあらず、唯言たらぬ句なり。我郭公の句も曾我の句とは聞ながら、今少足らずと先師も評し玉ひぬ。又越人が芥子は後に題を付給ふ事に非ず、越人、路通に別るゝ時の句と聞ぬ。猿蓑撰のころ越人をはじめ諸門人路通が行跡をにくみて、しきりに路通をいむ。此故に僧別の二字に改て先師ニさゝぐ。先師も特に興じ玉ひ侍る也。又前書の事は許六の云る如く、講尺のごとくならんは、ほ句の光をうしなふに似たり。前書并文章等、蕉門の手筋あり。又越人・其角がけしの花

の評は、越人すぐれたるよし、先師の評聞侍る人も多からん。

問云、古事・古哥を取様、むかし・中比・當世の品々をあげられたり。その中當時の取様は古事・古歌をその儘立置少もからず、己が作意を並て盡すといへり。然ばいまの取様は古事・古歌を立置て、此方の作意をならぶる事に侍るや。

答曰、許六のこゝろは古事・古歌をそのまゝ立置ては、おもしろからずと云事也。必そのまゝ立置には限らず、すべて古事・古歌を取には朧に取法あり、そのまゝ立置てもとる法あり、さま〴〵とる法ありといへども、皆前をすりあげて作す。此許六が己が作意を兼て盡す所なり。されども並べてのみと心得侍らば、初心の輩はもし誤も出來んか。たゞ一筆すりあげて作すると心得らるべし。尤並て云もあしと云には非ず、若、誤出來なむといふは、

猪の寐に行かたや明の月　去來

此句自賛にて先師に捧けるに、歸とて野邊より山に入る鹿の跡吹送る萩の上風　と共場の面白き事は古人も能しり玉ひて、跡吹送ると迄讀れたり。今俳諧の上に只、寐に行かたや明の月　と作したらん分には、汝が手柄はなかるべし。又、面影と云句有り、是等はすりあげる類にあらず。又、

名将の橋のそり見る扇かな

といへる句を名將の作にして句主の手柄なしといへり。此云へる所、昔の取様に此品有、今は甚嫌侍る也。又讃類の事、外の事をいふてその讃になる事有といへり。尤の事也。讃類・名所等の句はその場をうしなはざるを肝要とす。一とせ人〳〵集りて木曾塚の句を吟けるに、先師一句も取給はず、門人に語て曰、都て物の讃・名所等の句はまづその場をしるを肝要とす。西行の贊を文覺の繪に書、明石の發句を松島にも用ひ侍らんは淺ましかるべし。句の善惡は第二の事也となり。我むかし先師の木曾塚の句を拙き句也と思へり。此時はじめてそのうたがひを解す。乙州、木曾塚の句は勝れたる句にあらずといへ共、雯をゆるして猿蓑集に入べきよし下知し給ふ。又難波の病床に夜伽の句、おの〳〵吟じけるに丈草の句のみ

賞し給へり。委く工夫有べし。句は枯尾花集に見へたり。
問云、發句案るに、皆題號の內より案るあり、是なきもの也。余所より求來たらば無盡藏に句あらんといへり。しかれば蕉門の人は、曲輪の內より案ると嫌侍るや。
答云、これ又許六その一端を擧て初心に示たるもの成べし。曲輪內外をしゐて論ずべからず。然ども曲輪の內はすくなし。外は尤多し。また許六、曲輪の內より求て新敷ことなし。たま／＼殘たる物も同日、隣家の者と同題を案る時おなじ曲輪なれば、殘たる物にひし／＼と尋當るべし。道筋かはらざればうたがひなし。曲輪を飛出て案じたらんは、親は子の案じ處と違ひ、子は親の作意と各別ならんといへり。これは一片の見解にて曲輪の內を探すといへども、他門の句と類句すくなし。曲輪の外を案るといへども、同門の類句多し。是教をうくる道筋の同じきと、ちがひある故也。
問云、しかれども曲輪の內にまた／＼殘たる物を探さんより、速に飛出て外を求めんにしかじ。
答云、吾子さおもひ給はず、先師の如く案じらるべし。曲輪の外を探して別に容なし。曲輪の內を捨得まじき事は、自後に思ひしられなん。殊に感偶・卽興する者は曲輪の內よりなし來る句多し。先師、先達の發句を以て考らるべし。又句は題の噂と覺たるがよしと、云はさもありなん。又物好とも云べしといへるは尤の事也。
問云、手爾於葉の切字・押字などは上手・下手共に一字もゆるさずといへり。然るに蕉門の發句に切字なき句多く侍る事は尤習ひ有。爰を知りたる者は用捨、句によれり。此故に切字なき句もまゝみへたり。その中切字もなく句も切ざる句の侍るは、蕉門のいたづらといへども、いまだ切字の事を傳ずして、みだりに切字のなき句も先師の取給ふとおもひ誤りて作する成べし。又切字有てもよし、なくてもよしと云句あり。是は法の如く切字を入侍るをよしとす。唯切字を入侍ればあしくなり、切字を除侍ればよろしく成句に、切字を入るゝは見苦しかるべしと。先師の曰、發句は取合する物也。二ツとり合て能取合するを上手といへりと、許六の說にみへたり。しからば蕉門の教、一物の上にて發句はなきものに侍るや。

答曰、これ又先師一かたの敎也。膳所の俳諧初め此旨を聞て、爰になづむもの多し。我洒堂と常に爭ふ。その後、洒堂、武府にまかりけるに先師告て曰、汝が發句みな物二ッ三ッをとり組てのみ句をなす。發句は唯、金をうち延たるやうに作すべしと敎玉へり。（洒堂脫カ）歸京の後、我に語りて前非を悔む。すべて先師の門人に示し給ふを一方に聞べからず。人〳〵の吟情・口質によりてさま〴〵有り。我事のにぶきが如きは、常に句に念を入べからず、詞をつよく作すべし。また凡兆に於ては發句はたゞ十七字の內になし來れば、一字もあだに置べからず。又誹諧といへども風雅の一筋なれば、姿・かたち、賤敷作なすべからずと也。其外、門人夫〳〵の敎へ替るとは誰〳〵も知り玉ふらん。凡發句は一物の上になき物にあらず、證句少々揚て是を辨ず。まづ一物の上に成たる句は、

毛衣につゝみてぬくし鴨の足　先師

此句は殊に一物の上にて作したると、支考に語り給ひける句となん。

いざさらば雪見にころぶ所迄　先師

うつくしき顏かく雉子の毛爪かな　其角

鶯の啼て見たれば啼れけり　作者不知

うぐひすの一聲も念を入にけり　利牛

是等の句也。もし鴨の足は毛衣と取合、雉子の爪はかほと合せたると云人もあらん。また雪見と鶯は何を合せたるとみんや。また先師の取合ものとの給ふは曲輪の內外を分の給ふならじ。許六のこゝろは前の曲輪內外の論を以て見れば、取合ものも曲輪の外の物を云ると見へたり。曲輪の內より取合たる句も有べし。　。

春もやゝけしき調ふ月と梅　先師

飛込だまゝか都の郭公　丈草

俤や姨ひとり泣月の友　先師

しぐれねば又松風の唯をかず　北枝

是等ば皆曲輪の內より合たる句なり。又、

とり網に袖ぬれて聞く鶉哉　正秀

如月や大黑棚はうめの花　野水

卯の花にあし毛の馬の夜明哉　許六

馬の耳すぼめて寒しなしの花　支考

生柴をちよろ〳〵させて礎かな　千川

これらの句みな曲輪の外より合たる句也。發句は一物の上になきものにもあらず、曲輪のうちになき物にも非ず、前後の論考へしらるべし。

問云、未來の句をするといへば、未練の者は十方なき様に覺へ侍るといへり。蕉門に未來の句を嫌ふ人も侍るや。

答云、許六のいへる如く未來の句を嫌ひ侍らんは、初心の最上たるべし。今許六、爰を揚て論ぜらるゝに不ㇾ及、都て疑ふべし。去來・許六と誹諧を論ずるうち、未來の風の事を記せり。無事にや有らん。然ども許六、風体を取違て可ㇾ作ものに非ず、句ゝに新味を探して、いまだ人の行ざる場をふむ事、人ゝの覺悟也。一句〳〵あたらしみは申に不ㇾ足、一とせ先師、

一昨日はあの山越へつ花ざかり　去來

と云句を作したる時、此句今は取人も有まじ。猶二三年も早かるべしと也。其後吉野行脚の歸に立より給ひて、日ゝ汝が、あの山こへつ花盛　の句を吟行し侍りぬと語玉ふ。又深川に發句ども捧ける中に、世上に未無情の句一句もみへず、汝手柄たるべしと。如ㇾ此未來の句を賞し給ふは自他の上に聞侍れども、未來の句をとがめ給ふ事終に不ㇾ聞。又未來の句を起し來らん事は、其人にあらずばかなふ間敷事也。もし强て是を起し來らば、定て其風あしからん。口惜かな、先師世にいまさば皆必一變して新風流行せん。既に迁化在て六年、いまだ新風を起し來る人なし。たま〳〵變風に似たるものあれば、近代の古人の糟粕也。ひとり伊賀の連衆、此日あたなる句の風あり。尤なつかしき姿也。おもふに是先師の敎なるべし。先師の句にあたなる姿は多く侍らずといへども、先師在世の內より此姿伊賀にあり。迁化のとし、關東より道すじ尾張に立寄給ひけるに、門人當時の風を窺ひければ、たゞ子共のする事に心をつけよと宣ひけると聞り。又その前、先師深川をいで玉ふとき、野坡別に望んで、來る春の歲旦はいかに仕侍らんと尋申けるに、猶今の風然るべし。五六年も經なば一變して、いよ〳〵風躰輕く移り行んと敎へ給ひけるとなん。されば未來の風を起し來らんは、その人に非ずばかたかるべしと申侍る事、鏡にかけて明也。

問云、上手に成べき道筋慥に有。師によらず、弟子によらず、派によらず、必竟句數多く吐たるものゝ昨日の我に飽ける人にて、上手になれりといへり。然ば師傳にみえざる事に侍るや。

答曰、勿論さも有べし、是は拔群の人なり。尋常の人の存がたからん。先師はもと季吟の弟子也。初めその風を學び給ひて、晩年に至り一己の風あり。上達して一己の風を建立する場にいたりては、あながち師によらざるに似たり。其もとを押來時は師によれり。師は針の如く、弟子は糸のごとし。針ゆるむ時は糸もゆるむ。此故に古より師を撰むを肝要とす。師をはなれて獨歩するものは、尤一口に論じがたし。またよき師有とも句數吐ず、自己に慢じて、先にすゝむ事をしらざる人は、身を終るとも達人に成がたし。許六の云る、昨日の我に飽たりと、誠に善言也。先師も此事折〳〵しかり給ひき。

問云、

　取れずば名もなかるらん栬鮒

と云句あり。名もなかるべしと云べきを、なかるらんと刎るは、說經手に葉にて淺間しと難じられたり。これより此手に葉、能聞へ侍ると見ゆ。許六の評いかゞ侍るや。

答曰、此事是非無覺束、まづ和歌の手に葉にては上にうたがひなくて、下にて刎事は好まず、ぬらりはねと云は習ひありと承る。然ども俳諧はあながちその別法を用ひ來らずと見へたり。しからばその罪はなかるべし。されどもなからんと云へる詞は、上の請やうにて心のかはり有べし。此句荒增聞へたる樣に侍れども、私に手に葉の事云がたし。猶證哥を考へ重て是をさとし侍らん。

問云、俳諧に不易・流行と云事あり。此二体の外はなし。近年不易・流行に自縛して、眞の誹諧の筋をとりうしなふ。或は不易よし、流行勝れたりと云やからもあれど、曾て甲乙なし。血脈相續して生ずれば、不易・流行の形は自ら男と成、女となるが如く、口より出ると等しく千里を走る物也。あながち不易・流行を貴とする物には非ずといへり。此說いかゞ侍るや。

答云、蕉門の徒、不易・流行を云もの諸ゝあり。許六と去來、此事を論ずるに此一ツ並びて貴きものに非ずといへ

り。今此集にあながちの二字にかへられたり。定て故あらん。又血脈相續して出生すれば、不易・流行の類は自ら爰に至らん。是を貴しとする故は、其血脈を相續せんために是を貴む也。又一段是を習ひ得たる人あらん、不易は不易なれば、一度是を得て二度改め學ぶに不レ及、流行は時に流行すれば、その變ずる場にいたり爰を學ざれば師の流行にあらず。師の流行にあらずとも己が一風を建立して、而もその風宜敷侍らんは、是また名譽の人なるべし。たゞ師の流行におくれて止らん人は、終に古風の名を取べし。今許六の論を見れば、月を見て指を廢する者に似たり。如レ此は悟道の上也。是に至ては不易・流行の二ツのみに不レ限、何をとらへて貴しとせんや。佛を呵し祖を罵るも此謂か。退て思ふに不易・流行は大事の物に非ず、六ケ敷事にあらず、數多ものに非ず、隱れたる物に非ず、今日はじまりたる事に非ず、たゞ正風と變風の名也。しかれども古人爰をいふものなし。先師始て二ツを分て示し給へり。門人しらずんば有べからず。その不易を知らざれば、先師の誹諧のもとをしらず、それ流行を學びざる時は、先師の變風の流行にをくる。我是を尊む由緣もたとはゞ、其角は蕉門の高弟也。不易・流行の說さだめて學びつらん、然ども彼一己の好む所に止りて、ながく先師の變風に隨ず。かへりて同門の人々にいやしめらる。もしよく先師の變風に隨ひ來らば、角が俊哲廣才に於て、おそらくは肩をならぶる人少からん、尤惜べし。又我どきはもとより吟おもし、才拙し、たゞ先師の變風に一日もおくるゝ事を恐れ、畏〳〵として慕ひ來るを以て、今二三子の數にならはずといへ共、衆人の下にたゝず。これ先師に此二ツを聞てその事をおもふ故也。深く先師流行に遊ぶといへども、或は舊染に引れ、或は新風をおもひあやまちて、流石の名客達もまゝ誤なきにもあらず。まして我ごときは何を吐に十が五ツは猿蓑の風也。その二ツはみなし栗のこれり。今先師の新風にいたる物、纔に三ツ。もし當時の流行を貴ずんば何を以て舊染をすゝがんや。又不易・流行に甲乙有りといえる人は、擧て論ずるに不レ及。察るに去年許六へ送る文章の中、正秀が物語を書その文に、先師既になくなり給ひぬ。此後の流行たのみなし、以來

たゞ不易の句を樂んのみと云〻。此物語、日比許六是を嘲哢せらるゝと支考傳へり。もし此事にやあらん、此誤尤難なかるべし。正秀が云へるは先師既に迁化し給ひぬ、重て新風出て流行せん、その流行頼みなしと。又その風は長く止らじ。たゞ不易の風の句を樂んと云る也。風といはずして句といふ事は、己が一己の句の上に懸て云り。是を籠ていふ時は、句の上に備る風体也。是を分て云時は、風・体・句の三ッ也。許六いかなる故を以て嘲哢せらるゝ所をしらず、但、我文章筆頭を誤るか。正秀が語は先師迁化の時なり。先師をおしみ又重て、めで度新風の出ざらん事を歎きていへり。聊とがむ間敷事なり。また其角一日語りて曰、今同門の輩、先師の變風をしたふ者を見るに、先師の梅か香にのつと日の出ると吟し玉へば、或はすつと・きつとゝいへり。師ののつとは眞言（まこと）の、のつとにて一句のぬし也。門人のきつと・すつとは、きつともすつともせず。尤見苦しく、晋子是を學ぶ事なし。

去來答云、雅兄のいへる所は、先師の流行をしる物にあらず。これ唯、師の一句になづむもの也。我及ざるといへども、先師の流行に一歩もおくれん事を恐る。然ども見給へ、我句に於てかゝる詞を用ひ侍るは一句もあらじ。用る迄になし、同じくは遠慮すべき詞也。雅兄句になづむものを以て、流を學ぶものを譏給ふべからず、然ども初學の者は句を似せ、詞によるも又よし。此句に當つて外に譲べき詞なくんば、あながちに是を去り嫌べからずと云〻。又比日さる人のかたより文通あり。その文云、大津の木節・乙州等に會吟し、不易・流行を委く習ひ得て誹口を開きたり。先に其角と去來と此二ッを論るといへども、これたゞ淺みの事なりと云〻。右の人委く傳受したりといへるは、いかなる事にや侍らん。時〻の流行を一〻傳授したると云事にや。夫は傳受に不レ及、殊に是を聞て俄に俳口をひらきたるといへる、尤無ニ覺束一。不易・流行をし（知）つたるを以て、俄に上達するものにあらず。不易・流行は風を知る大根也。その本をたて、その工夫たんれん（鍛錬）して、上手にはいたるべし。今許六の不易・流行に自縛すると云るは、右の人の如き者の事歟、又其角が難じたる如きの人か、又は正秀が語の如きか、又は我ごく是を貴むものた

る歟、其說聞まほし。凡不易・流行は自縛する物に非ず、又忘却する物に非ず。一度此事聞ば決然として明也。此故にその教を尊み、その教の如くならん事を執行する外なし。

問云、蕉門の人ゝ先師を尊は、先師の誹諧の名人たる故也。しかるを先師を尊は先師の誹諧の貴を知らずと論ぜらるゝは、却て逆論にあらずや。

答云、許六の義は只綫人の場をみるが如きをいへり。すべて先師を尊む人樣〳〵有べし。その人となり風騷にしてしかも閑寂・正直なるを尊み、ともに誹諧に遊て悅るもの有べし、又誹諧の名人なるを悅て、尊み隨ふ者有べし、又二色を合て用る人有べし。一片に云がたし。此論誹道にあらず、強く辨を用るに益なし。

問云、先師を尊む論によりて我不審あり。蕉門の人の撰集を見るに、句の下に名を書するに、或は芭蕉と書集あり、或は翁と書有。雅兄の猿蓑には芭蕉と有り。此義師を尊む事の疎なるに似たり。いかなる事に侍るや。

答云、是をはせをと書事は先師の教也。又翁と書事は其角先師を尊み、初て書。しかれ共私にせず。むかし其角我にかたりけるは、今度都に來り、師の名高きことを彌知り侍りぬ。同門の人師を尊みて翁と云のみに非ず、他門の人我に向ひて翁〳〵と稱す。まして季吟は師の師也。其子の湖春を先として翁といへり。然ば門人のはゞかるべき事にあらず。かさねて集を出さんに翁と書べしと云り。答申けるは尤の事也。今誹諧の集に出て翁と書んに、天下の人芭蕉翁たる事を疑じ。雅兄これをはじめて同門の衆の手本となし給へと云。此故に其角が集にはじめて是を書し、又はせをと後に改る事は、猿蓑撰集し侍る時、句の下に翁と書。先師の云、此頃門下の集をみるに、たゞ我を翁と書り、尤憚るべし。去來云、師の謙退に於てはしかり。弟子尊敬に至りては翁と書せん事苦しからじ。先師曰、されば門人なれば自分の家に納めんには兎も角も有べし。これを世間に廣め、人に沙汰せんには、かえりて淺間成べし。人丸・赤人の哥の聖と聞へ侍るも、いづれの集にかその名書ざる。かさねてかならず翁と書事なかれと下知し玉ふ。是によりて猿蓑集に改て芭蕉と書侍る也。

むねをしらずして、みだりに遠境の人に傳ふ成べし。尤附句は千變万化にして、數を以ていふものにあらず。別に師を尊む淺深あるにあらず。

餘評

或人問云、蕉門の附句十七体の教有と也。一とせ路通此浦に來りて、人々に傳受する。定而此事を聞給らん。去來答曰、十七体とやらん、四体とやらん書たる文を破りたまふ事はうけ給り侍る。是を傳受し給ふ事はしらず。先年野水、先師にかたりて曰、近來大津の連衆名護屋に來て、蕉門十七躰の附句不レ殘傳受し侍るよしを申。名護屋の連衆かつて信ぜず、もしかゝる事も侍るや。先師の曰、これ誠に斗方なき句也。先年加賀の門人何がしが許より、常に遠國に侍れば、親しき教を受る事もかなはず、願くは附句の体書記し示し侍るべきよしを望む。是がために附句の大數を書出し侍れども、如レ此しるさば、かえりて初心のまよひ有べしとおもひとりて、終にその書をやむ。さだめし反古のはしをひろひ見て、是を云なるべしと大笑ひし給へり。おもふに、此文をとゝのへ給ふは、大津にての事也。路通久しくかしこに侍れば、その文をみて、その

わが落柿舎の開基去来先生は、はせを翁の誹諧をよく傳へて、この道の曾子とあふがれたれど、たゞ世の人の聞あやまらんことをつゝしみてや、いさゝか書のこる反古だにまれなり。こゝにこの一冊は先生の晩年、長崎の浦に旅寮せられし比、そこの卯七・魯町の二人が湖東の五老井の著述せし篇突集の不穏なるところ〴〵を、尋ものせし問答の書なり。長崎の浦に旅寮して書給ふによりてや、旅寮論と名付しをいつしか世につたへて、辨篇突と題してこゝに寫し、かしこにもち傳ふといへども、落字あるは誤字の多きをうれふ。しかるに筑前の湖桂の許にその全文の正しきあり。是を櫻木にのほし、先生をしたへる好士に見せんといへるに、われまた筑紫の旅寮に、この旅寮論の時にあへるをよろこびて、嵯峨野ゝ旅人、重厚はじめに物かく。

歌道に付て古事・口傳などは、古双帋ひとつもとめぬればと聞へしは、いたりての沙汰なるべし。いづれに誹諧を學ぶとても、書なくしてはかなふべからず。そもこの旅寮論はいつの比よりか家に傳へて、常に机の上にさし置けるを、このほど嵯峨の旅人にみせしめ侍るに、かゝるめで度ものを獨愛して、はては帋魚のために空しからんは、ほいなかるべしといさめられて、やがて花の木にのほす事になりぬ。

安永七酉九月十日

筑前植木 湖桂書

皇都書林

辻井吉右衛門

橘屋治兵衛

井筒屋庄兵衛

去來抄
去來著

去來抄敍

芭蕉の翁、ひとたびこの道に斧ふりして、屈(カヾマ)れるをうち、曲れるをおし、俳諧の眞ごゝろを傳へてより、風の草をおし均(なら)して、一派八隅にかゝり、支流湧がごく、終に川木(かはき)拾ふわらはも菜摘女も耳にふれ口に出るの時、風調はじめて泥土にくだり、意を横さまに穿て風體を折き、惑說十襲して今時平地に波瀾を起す。其弊を撓(タメ)むには、いそしき哉去來、うべなる哉此抄、淺く漁て呑舟の魚をもらす事なかれと也。

安永三甲午十月

曉臺

印　印

先師評

外人の評有といへども、先師の一言まじるものは此に記也。

蓬萊にきかばや伊勢のはつ便　芭蕉

深川よりの文に、此の句さまざまの評あり、汝いかゞ聞侍るやとなり。去來曰、都又は古郷の便ともあらず、伊勢と侍るは、元日の式の今やうならぬに、神代をおもひいでゝ、たより聞ばやと、道祖神のはや胸中をさはがし給ふとこそ承侍れと申。先師返事に、汝が聞く處にたがはず、今日神のかうがうしきあたりをおもひ出て、慈鎭和尙の詞にたより、初の一字を吟じ、淸淨のうるはしきを蓬萊に對して結びたる也と。

からさきの松は花より朧にて　芭蕉

或人(異本、伏見の作者)、にて留りの難あらんやと云。其角答曰、にては哉にかよふゆゑ、哉留の發句ににて留の第三を嫌ふ。哉といへば句切(くぎれ)迫れば、にてとは侍るとなり。呂丸曰、にて留の事は其角が解あり、又是は第三の句なり、いかに發句とはなしたまふや。去來曰、是は即興感偶にして、發句なる事疑なし。第三は句案に渡る。もし句案にわたらば第三等にくだらん。先師重て曰、其角・去來が辨皆理屈なり。我は

たゞ花より松の朧にて面白かりしのみなりと。異本（此句再吟スルニ、初テ發句ト第三トノ境ヲ思ヒアタリケリ）

行春をあふみの人とをしみける　芭蕉

先師曰、尙白が難に、近江は丹波（異本(難波)）にも、行春は行年にもなるべしといへり。汝いかゞ聞侍るや。去來曰、尙白が難あたらず、湖水朦朧として春をしむに便有べし。殊に今日のうへに侍ると申き。先師曰、しかり、古人も此國に春を愛する事、をさ〳〵都におとらず。去來此一言こゝろに徹す。行年、近江に居たまはゞ、いかでか此感のましまさん。行春丹波（異本(難波)）にゐまさば、もとより此情うかぶまじ。風光の人を感動せしむる事眞なるかなと申。先師曰、汝や去來、ともに風雅をかたるべきものなりと、よろこび給へりしか。

此木戸や鎖のさゝれて冬の月　其角

猿蓑撰の時に、此句書おくり、冬の月・霜の月置わづらひ侍るよし聞ゆ。衆議冬の月による。先師曰、其角が冬霜に煩ふべき句にもあらずとて、冬の月に定め入集させられける。はじめは文字つまりて柴戸とよめたり。然るに

出板の後、大津より先師の文に、柴の戸にあらず、此木戸なり。かゝる秀逸は一句も大切なり。たとへ出板におよぶとも、いそぎ改むべしとなり。凡兆曰、柴の戸・此木戸させる勝劣なし。去來曰、此月を柴の戸に奇（寄）て見れば尋常の氣色なり。是を城門にうつして見れば、其風情あはれに物凄ぎ事はかりなし。實も其角が冬・霜にわづらへるもとはり（理）なり。

うらやましおもひきる時猫の戀　越人

先師、伊賀より此句を書贈て曰、心に俗情（異本(風雅)）あるもの、一たび口に不レ出といふ事なし。かれが風雅、是に至りて本情をあらはせりとなり。是より先に越人名四方に高く、人のもてはやす發句多し。しかれども爰に至りてはじめて本性を顯すとなり。

こがらしに二日の月の吹ちるか　荷兮

凩の地にも落さぬしぐれ哉　去來

去來曰、二日の月といひ、吹ちると働たるあたり、予が句にはるか勝れたりと覺ゆ。先師曰、荷兮が句は二日の月といふものにて作せり、其名目を除けばさせる事なし。

汝が句は何をもて作したりとも見えず、全躰の好句なり。
たゞ地までとかぎりたる、迄の字いやしとて直し給ひぬ。

春風にこかすな雛の駕籠の衆　荻子

先師、此の句を評して曰、伊賀の作者あだなる處を作して尤なつかしとなり。丈艸曰、伊賀のあだなるを、先師はしらず顔なれど、そのあだなるは先師のあだならずや。

清瀧や波に塵なき夏の月　芭蕉

先師、難波の病床に予をめして曰、此頃園女が方にてへしら菊の目に立て見る塵もなし　と作す句に似たれば、清瀧の句を案じかへたり。はじめの草稿野明が方に有べし、取て破るべしとなり。然ども、はや集にもれ出侍れば捨るに及ばず。名人の句に心を用るたまふ事しらるべし。

異本（涼しくも）
涼しさの野山にみつる念佛哉　去來

是は善光寺如來の洛陽、眞如堂に遷座在し時の吟也。はじめの冠はひいやりと〻置たり。先師曰、か〻る句は全体おとなしく仕立るものなり、五文字しかへてよしとて、風薫と改め給ふ。後猿蓑の撰場には、再改て今の冠にぞせさせける。

異本（おもしろよ）
面白やあかしのとまり郭公　荷兮 異本（野水）

猿蓑撰の時去來曰、此句は、先師の野を横に馬牽むけよと同前なり、入集すべからず。先師曰、明石の時鳥といへるもよし。去來曰、明石のほと〻ぎすはしらず、一句たゞ馬と舟とかへ侍るのみ、句主の手柄なし。先師曰、句の働においては一歩もうごかず、明石をとりえにいれば入なんとなり。終にいらず。

君が春蚊帳は萌黄に極りぬ　越人

異本（先師予に語て曰）
先師曰、發句は落つかざれば眞の發句にあらず。越人が發句、既落着たりと見ゆれば、又おもみ出來れり。此句蚊帳は萌黄に極たるにてたれり。月影・朝朗など置て蚊帳の句となすべし。其上かはらぬ色を君が代にかけて、歳旦となし侍故、心重く句奇麗ならず。異本（汝が句も已に落付におい ては氣賞ひす、そこに尻な居べからずと也）

振舞や下座に直る去年の雛　去來

此句は、予おもふ處ありて作す。五文字、古烏帽子・紙衣等はいひ過たり。景物は下心徹せず。あさましや・口惜しやの類ひははかなしと、今の冠を置て窺（伺）ひければ、先師曰、五文字に心をこめておかば、信徳が人の世やなるべ

し。十分ならずとも振舞にて堪忍有べしと也。

田のへりの豆つたひ行螢かな　万乎

もとは先師の斧正ありし凡兆が句なり。猿蓑撰の時、凡兆曰、此句見る處なし、除べし。去來曰、へり豆をつたひ行螢の光・闇夜の景色、風姿ありといふ。凡兆ゆるさず。先師曰、兆もし捨ば我拾はむ。幸伊賀の連中の句に是に似たるあり、夫を直し此句となさんとて、終に万乎が句と成けり。

大としをおもへば年の敵かな　凡兆

もとの五文字戀すてふと置て予が句也。信德曰、戀さくらと置べし。花は騷人の思ふ事切なり。去來曰、物には相應あり、古人花を愛して明るを待、くるゝをゝしみ、人を恨、山野に行迷へども、いまだ身命のさたにおよばず。櫻と置かば、却而年のかたき哉といへる處あさまになりなむ、信德なほこゝろえず、重て先師に語る。先師曰、そこらは信德が知ところにあらずとなり。其後凡兆、大年をと冠す。先師曰、誠此一日、千年のかたきなり、いしくも置たるもの哉と大笑し給けり。

賽錢も用意顔なり花の森　去來

先師曰、花の森とは聞なれず、名處なるにや。古人も森の花とこそ申侍れ。詞を細工して、かゝる拙き事云べからずと也。

月雪や鉢たゝき名は甚之丞　越人

去來曰、（異本（猿蓑集の時））此頃伊丹の句に、〽彌兵衛とはしれど憐や鉢たゝき　と云あり。越人が句、入集いかゞ侍らむ。先師曰、月雪といへるあたり一句働見えて、しかも風姿あり。たゞ、しれど憐やといひくだせるとは各別也。されども鉢敲の俗体をもて趣句を立、俗名をかざり侍れば尤遠慮有べし、又重て折もあらむとなり。

きられたる夢はまとか蚤の跡　其角

去來曰、其角は實に作者にて侍る。はつかに蚤のくひつきたる事、誰かかくはいひ盡さん。先師曰、しかり、かれは定家の卿なり。さしてもなき事を、とく〳〵しくいひつらね侍るときこえし評、詳なるにゝたり。

をとゝ日はあの山越つ花ざかり　去來

是は猿蓑二三年前の吟なり。先師曰、此句いま聞人有ま

じ、一兩年を待べしとなり。其後杜國が徒と、よし野行脚し給ひける道よりの文に、或はよし野を花の山といひ、或は、これは〳〵とばかり　と聞えしに魂を奪れ、又は其角が、櫻さだめぬ　といひしに氣色をとられて、よし野に發句もなかりき。たゞ、をとゝひはあの山越えつ　と日ゝ吟じ行侍るとなり。其後此句をかたり、人もうけとりけり。いま一兩年はやかるべしとは、いかでか知給ひけん。予は却て夢にもしらざる事どもなり。

　病鴈の夜寒に落て旅寐かな

　海士の家は小海老にまじるいとゞ哉

猿簑撰の時、此うち一句入集すべしとなり。凡兆曰、病鴈はさるとなれど、小海老にまじるいとゞは、句のかけりことあたらしく、誠に秀逸なりといふ。去來曰、小海老の句はめづらしといへど、其物を案じたる時は、予が口にもいでん。病鴈は格高く趣かすかにして、いかでか爰を案じつけんと論じ、終に兩句ともに乞て入集す。其後先師曰、病鴈を小海考などゝ同じごくに論じけるやと、笑ひ給ひけり。

　岩鼻やこゝにもひとり月の客　去來

去來曰、（異本（先師上洛のとき））酒堂は此句を月の猿とすべしと申侍れど、予は客勝りなんと申。先師曰、猿とは何事ぞ、汝此句をいかにおもひて作せるや。去來曰、明月に山野を吟歩し侍るに、岩頭亦一人の騷客を見付たると申。先師曰、是にもひとり月の客　と己と名乘出たらんこそ、いくばくの風流ならめ。たゞ自稱の句となすべし。此句は我も珍重して笈の小文に書入けるとなん。予が趣向は一等くだり侍りけり。先師の意をもて見れば、少し狂者の感も有にや。（異本（狂者の感も有にや、退て考るに自稱の句となし見れば狂者の様もうかみて、はじめの句にまされる事十倍せり。誠に作者其心を知ざりけり））笈の小文集は先師自撰の集なり。名を聞ていまだ書を見ず。草稿半にて遷化まし〳〵ける。昔時申けるは、予が發句幾句か入集なし給へるやと窺（伺）ふ。先師曰、我門人笈の小文に入句三句持たるもの希（稀）ならん、汝過分のことをいへりと也。

　うづくまる藥（異本（藥罐））の下のさむさ哉　丈艸

先師難波の病床に、人々に夜伽の句をすゝめて曰、今日より我が死後の句なり、一字の相談を加ふべからずと也。さま〳〵の吟ども多く侍りけれど、たゞ此句のみ、丈艸出來たりとのたまふ。かゝる時はかゝる情こそ動侍らめ。

興を發し景をさぐるに豈いとまあらんや、と此時にて思知侍る。

下京や雪つむうへの夜の雨　凡兆

此句初に冠なく、先師をはじめ、いろ〱と置侍りて、此冠に極め給ふ。凡兆、あと答て、いまだ落着ず。先師曰、兆、汝手がらに此冠を置べし、若まさるものあらば、我二たび俳諧をいふべからずとなり。去來曰、此五文字のよきことは、誰〱もしり侍れど、是外にあるまじとは、いかで知侍らん。此事他門の人聞侍らば腹いたく、いくつも冠置べし。其のよしとおかるゝ物は、又こなたにはをかしかりなんとおもひ侍る也。

猪の寐に行かたや明の月　去來

此句を窺ふ時、先師しばらく吟じて兎角をのたまはず。予思ひ誤は、先師といへども、歸り待つ夜興引の意を知給はずやと、しか〲のよしを申侍れば、先師曰、其おもしろき所は古人もよく知ればこそ、〽明ぬとて野邊より山に入るしかのあと吹送る萩の上風、とはよめりける。和歌優美のうへにさへ、斯までかけり作したるを、俳諧自由のうへに、たゞ尋常の氣色を作せんは、更に手柄なかるべし。一句おもしろげなれば、暫案じぬれど、兎角に詮なかるべしとなり。其後おもふに、此句は、郭公なきつるかた、といへる後德大寺の歌の同案にて、いよ〱手柄なきことを知れり。

蘿の葉の………　何〻とやらん跡は忘れたり。尾張の人の句也。

此句は、蘿の葉の谷風に一すぢ峯まで裏吹かへさるゝと云句なるよし。予先師に此句を語に、先師曰、發句は斯のごとくまで〲、いひつくすものにあらずとなり。支考かたはらに聞て大に感驚し、異本（感動）はじめて發句といふ物を知侍るとて、此頃ものがたり有けり。予其時も等閑に聞なしけるにや、此事あとかたもなくうち忘侍るこそ本意なけれ。異本（下忘れ侍る、いと本意なし。都て句はいひ課せざるは未練なり、いひ過るは又病ひなり。いづれも句として見る所なし。或時　この頃や小春を宿に歸咲　丈草、此上五文字を　山陰や　南邊や　と置わづらふよし、尤小春の利に落ていひ過るの病也。下七五にて句意濟侍れば、たゞこゝろなき五文字を置べき也と今の冠に定侍る。）

下臥につかみわけばやいとざくら

先師路上にて語給ふ。此頃其角が集に此句あり、いかに思てか入集しけむと。去來曰、いとざくらの十分に咲たる形容、よくいひおほせたるに侍らずや。先師曰、いひ課て何かある。予こゝにおいて肝に銘ずる事あり。はじ

めて發句になるべきとゝ、成まじき事とを知れり。

手をはなつ中に落けり朧月　去來

魯町に別るゝ時の句也。先師曰、此句惡しといふにはあらず。功者にてたゞいひまぎらかしたるなり。去來曰、いかさまにさしてなき事を、句上にてあやつりたる所あり。しかれどもいまだ十分に解せず。予が心中に一物侍れども、句上にあらはれずと見ゆ。いはゆる是は意到句不レ到也。

泥龜や苗代水の畦うつり　史邦

猿簑の撰に、予誤て畦づたひと書入たり。先師曰、畦うつりと傳ひと形容・風流各別なり。殊に、畦うつりして蛙啼なりともよめり。肝要の氣色をあやまる事、筆の罪のみにあらず、句を聞事のおろそかなる故なりとて、きげんあしかりけり。

じだらくに寐れば涼しき夕かな　宗次

さるみの撰の時、今一句の入集を願ひて、數句吟じ侍れど取べき句なし。一夕先師の傍に侍りけるに、いざくつろぎ給へ、我も臥しなんとおほせられければ、御ゆるしゆへ、じだらくに居れば涼しく侍ると申ければ、先師曰、是こそ發句なれとて、今の句に作りて入集せさせ給けり。

靈棚の奥なつかしや親の顏　去來

はじめは、面影のおぼろにゆかし魂祭といふ句なり。此時添書に、祭時は神いますが如しとやらむ、靈棚の奥なつかしく覺侍るよしを申贈る。先師返事に、異本(伊賀の文に)靈祭尤の意味ながら、此分にては古びに落申べくや、詫に靈棚の奥なつかしやと侍るを、何とて句にならざるや、とおどろかし給ひけり。異本(おどろかし給ひけり。上五文字和らかなれば下をけやけく親の顔と置かば句となるべしと也。其おもふ所直に句と成事をしらず、深くおもひ沈みかへつて心おめく詞しぶり或は心たしかならず、是等は初心の聲の覺悟有べき事なり。けやけく置てしかるべく侍らん、是則僻のまどひし成べきや。)

夕すゞみ疝氣おこして歸けり　去來

予が初學の時、發句の仕やう窺(伺)けるに、先師曰、發句は句つよく俳意たしかに作すべしとなり。試に此句を賦して窺ければ、又是にても大笑し給ひけり。異本(是にてあなしと)

つかみあふ子どものたけや麥畠　游刀

凡兆曰、是麥畠は麻畠ともふれんか。去來曰、麥麻になりても、よもぎ(蓬)になりても、くるしからずと論ず。先師曰、又ふれる・ふれぬの論かしがまし、無用なりと制し給

けり。見る人察せよ。

　いそがしや沖のしぐれの眞帆片帆　去來

去來曰、猿蓑は新風の始なり。時雨は此集の美目なるに、此句仕そこなひ侍る。たゞ〽有明や片帆にうけて一時雨といはゞ、いそがしや　よりも句のはりよく、心のねばりすくなからん。眞帆もそのうちにこもりてん。先師曰、沖の時雨といふも又一ふしにてよし、されど句ははるかにおとり侍るとなり。

　兄弟の顔見あはすやほとゝぎす　去來

去來曰、此句は五月廿八日、異本（雨の闇の夜）曾我兄弟の互に顔見合ける頃、子規などもうち啼けむかし。むかし光源氏の村雨の軒端にたゝずみ給ひしを、紫式部がおもひやりたる趣をかりて作す。先師曰、曾我とのばらとは聞（きこえ）ながら、一句いまだいひおほせず。其角が評も同前なりと、深川より評し給ふ。許六曰、此句は心餘りて詞たらず。去來曰、心餘りて詞たらずといはんはばかりあり、たゞいひおほせぬとも評すべし。丈艸曰、今の作者はさかしくかけ廻りぬれば、是等は合點の内なるべしと共に笑けり。

　につと朝日にむかふ横雲

　青みたる松より花の咲こぼれ　去來

先には〽すつぺりと花見の客をしまひけりと付侍るが先師の顔つきをかしからざれば、又前を乞て異本（能書こ）此句を附なほす。先師曰、いかに思ふて附直し侍るや。予曰、朝雲ののどかに機嫌よかりしを見て、初に附侍れど能見るに、此朝雲のきれいなるけしきいふばかりなし。これをのがしては詮なかるべしと思ひ、附直し侍るといへり。先師曰、やはり初の句ならば三十棒なるべし。猶陰高きを直すべしとて、今の五文字にはなりけり。

　梅にすゞめの枝の百なり　去來

是は歳旦の脇なり。先師深川にて聞て曰、此梅は二月の氣色なり。去來いかにおもひ誤て、歳旦の脇には用ゐけるとなむ。

　船にわづらふ西國の馬　彦根の句也

許六こゝろみの點を乞ける時、此句に長（ちやう）をかけたり。先師曰、いまはかゝる手帳らしき句はきらひ侍る。是等は手帳なり、長あるべからず。重て上京の時、此句何ゆゑ

に手帳に侍るや。先師曰、船の中にて馬の煩ふ事はいふべし。西國の馬とまでは、よくこしらへたる物なりとなむ。

弓張の角さし出す月の雲　去來

去來問曰、此句も手帳なるべきや。先師曰、手帳ならず、雲も角も弓張月も、いはねば一句きこえず。

丁稚が擔ふ水こぼしけり　凡兆

初は糞なり。凡兆曰、尿糞の事も申べきか。先師曰、嫌べからず。されど百韻といふとも二句に過べからず、一句なくてもよからむ。凡兆、水に改む。

（前句）ほんとぬけたる池の蓮の實

咲花にかき出す椽のかたぶきて　芭蕉

此前句出る時、去來曰、かゝる前句をのがすべからずとて、數刻案じたれど皆〳〵なし。先師に附句を所望しければ、斯こそ附給へれ。

くろみて高き樫木の森

咲花に小き門を出つ入つ　芭蕉

此前句出ける時、去來曰、前句全體樫木の森の事をいへり。その氣色を失はず、花を附る事むづかしかるべしと。先師の（異本（附合））附句を乞ければ、斯付て見せ給ぬ。

綾の寐まきにうつる日の影

なく〳〵も小き草鞋もとめかね　去來

異本（此前句出て座中しばらく、附句あぐみけれ。先師曰）

先師曰、よき上﨟の旅なるべしとぞ。予これをきゝて、頓に此句を附侍りける。好春曰、上﨟の旅ときゝて言下に句出たり。蕉門の徒の修練格別也と感ず。

二ツにわれし雲の秋風　正秀

中連子中きりあくる月影に　去來

正秀亭の第三なり。はじめに、〽竹格子影もまばらに月澄て　と付侍けるを、先師かくは斧正し給けり。其夜ともに曲翠亭に宿す。先師曰、今夜初て正秀亭に會す。珍客なれば發句は我なるべしと兼て覺悟すべき事也。其上發句と乞はゞ好悪をゑらばず、速く出すべき事也。一夜のほど幾ばくかある。汝が發句に時をうつさば、今宵の會むなしからむ。（異本（むなしからむ、無風流の至りなり））餘り不興のいたりなれば我が發句を出すべしとて、其夜は先師の發句なりし。正秀忽脇を賦す。二ツにわるゝと、はげしき雲の氣色なるを、かくのびやか

なる第三附る事、前句のけしきを探らず、未錬の事なりと、夜すがらいかり給ひける。去來曰、其時に、〽月影に手のひらたつる山見えて　と申一句侍りけるを、たゞ月の殊更にさやけき處いはんとのみなづみて、位をわすれ侍ると申き。先師曰、其句を出さばいくばくのましならん。此度の瞎所の耻を一度すゝがん事を思ふべしと也。

分別なしに戀をしかゝる　去來
淺茅生におもしろげづく伏見脇　芭蕉

先師、京より野坡方への文に、此句を書出し、此邊の作者いまだ此甘味をはなれず、そこもと隨分輕みをとり失ふべからずと也。

赤人の名はつかれたり異本（名につかれけり）初霞　史邦

先師曰、中の七文字よくおかれたり。發句の長高く意味すくなからず。

駒牽の木曾やいづらん三日の月　去來

今や引らん望月の駒、といへるをふりかへて、木曾や出らん三日の月　といへり。先師曰、此句は算用を合せたる句なりと、あざけり給へり。

同門評

異本（凡篇中の昨評を是とするに似たるは、未判者なき故なり。猶後賢を待侍る。）

腫（はれ）ものに柳のさはるしなひ哉　芭蕉

浪化集に、さはる柳と出せり。是は予が誤傳ふるなり。かさねて史邦が小文庫に、柳のさはると改出す。支考曰、さはる柳なり、いかで改侍るや。去來曰、さはる柳とはいかに。支考曰、柳のしなひは、はれものに障る如しと比諭（ゆ）せるもの也。去來曰、しからず、柳の直にさはりたるなり。さはる柳といへば兩様に聞え侍る故、かさねて予が誤をたゞす。支考曰、吾子の說は行過たり、只障る柳と聞べし。丈艸曰、詞のつゞきはしらず、趣向は支考がいへる如くならむ。去來曰、流石の兩士、こゝを聞給はざる口惜し。比諭（ゆ）にしては誰〳〵もいはん。直にさはるとは、いかでか及ぶべき。格位も又各別なりと論ず。許六曰、先師の短尺に、さはる柳とあり。其上、柳のさはるとは首切れなり。去來曰、首切の事は、予が聞處に異也。今論におよばず。先師の文に、柳のさはると慥にあり。許六曰、先師あとより直し給ふ句多し。眞跡も證としがたしとな

り。三子皆ゝ障る柳の說なり、後賢猶判じたまへ。

去來曰、いかなる故にやありけん。翁、此句は汝に渡し置、かならず人に沙汰すべからず、と江府より書贈給ふ。其後大切の柳一本、去來にわたし置けるとは支考にも語たまふ。其頃、となみ・續猿兩集にも除れけるに、浪化集撰の半に先師迁化ありしかば、此句のむなしく殘らん事を恨て、其入集にはまるらせける。

雪の日に兎の皮の髭つくれ　芭蕉

魯町曰、此句意いかゞ。去來曰、前書に、子どもと遊びてとあれば、子どもの業と思はるべし。强て理會すべからず。機發を踏破して知べし。先師此句を語給ふに予甚感動す。先師曰、是を悅ばん者、越人と汝のみならむと思ひしに、はたしてしかりとて殊さらの機嫌なりし。異本（去來曰、此說の古事、神代卷に出たり、或曰兎の皮の……）世人或云、雪は越後兎の像に似たり。或云、兎の皮の髭作るは雪中の寒ければなりなど、いろ／＼理屈をつけて見ることかた腹いたし。斯のごく解さば、暑き日に猿わか髭をはやしけり　の類なるべし。いと淺間し。

山路來て何やらゆかし菫艸　芭蕉

湖春曰、菫は山によまず。芭蕉俳諧に巧なりといへども、歌學なきの過なり。去來曰、山路にすみれを詠たる證歌多し。湖春は地下の歌道者なり、いかで斯は難じられけん、いとおぼつかなし。

笠提て墓をめぐるや初時雨　北枝

先師の墓に詣ての句也。許六曰、是は脇よりいふ句也。自何疑有てやとはいはん。去來曰、やは治定嘆息のや也。常に人を訪ふには、笠を提て門戶にこそ入れ、是は思ひの外に墓をめぐる事かな、といへる事也。凡發句は一句をもて聞べし。笠提て門に這入るや　といはゞ、疑なく外人の事なるべし。

春の野をたゞ一のみや雉子の聲　野明

はじめは、春風や廣野にうてぬ雉子の聲　なり。去來曰、うてる・うてぬは、あたり合てやかまし。廣き野をたゞ一のみや　といはんかたやまさらん。丈艸曰、廣の字猶いやし、春の野とあらむか。去來心服す。

馬の耳すぼめて寒し梨子の花　支考

去來曰、馬の耳すぼめて寒し　とは我もいはん、梨子の花

とよせられし事妙なり。支考曰、何のかたき事か有らん、吾子の如く、かしらより一すぢにいひくださむこそ難き事なれと論ず。曲翠曰、二子互にえたる處を易とし、得ざる所を難しとす。其論ともに尤なり。しかれども惣体をいはゞ、一すぢにいひ下さんはかたかるべし。去來曰、翠、亦えられざる故なり、凡修行は我が得たる處をやしなひ、いまだえざる處を學ばゞ次第にすゝみなん。おのれ纔に得たる所になづみて、他の勝りたるをうらやまずば、功をなす事終にあるべからず。

白水のながれも寒き落葉哉　木導

其角曰、もはいま一ッあるの詞なり。去來曰、角はこれを又もとおもへるにや。是等は力もなるべし、寒きは冬の惣体也。

うの花に月毛の駒の夜明かな　許六

去來曰、予此趣向ありき。句は有明の花に乘込　といひて、月毛駒・芦毛馬とは詞つまれり。の文字を入れば口にたまれり。鮫馬は雅ならず。紅梅・鴾月毛・川原毛などおもひめぐらして首尾せざりしが、其後許六が句を見て不才を嘆ず。こゝに畠山左衞門佐といへば大名の名と成、山畠佐左衞門といへば一字をかへず庄屋の名なり。先師曰、句とゝのはずんば（異本（句調ひ侍まば舌頭に……））舌頭に千轉せよ、とありしも此事也。

起ざまにまそつと長し鹿の足　杜若

乾鮭と鳴く〱行や油つゝ　雪也

うぐひすの啼て見たればなかれたか（異本（けり））　作者しらず

去來曰、伊賀の連衆にあだなる風あり。是則先師の一躰也。迁化の後ます〱多し。斯のごとくの類なり。其愚（異本（無智））なるには及がたし。支考曰、伊賀の句はさせるとなきもあれどいやみなし。伊賀の連衆は上手なり。

鶯の舌に乘（のせ）てや花の露　半殘

去來曰、乘らすやといはゞ風情あらじ。乘けりといひては句にならまじ。てやの文字千金なり。半殘は實に手だれ者也。丈艸曰、てやといへるあたり、上手のこま（獨樂）廻しを見るがごとし。

うぐひすの身をさかさまに初音哉　其角

鶯の岩にすがりて初音かな　素行

去來曰、角が句は暮春の亂鶯也。初鶯に身を逆にする曲なし、初の字心得がたし。行が句は啼鶯の姿にあらず。岩にすがるは、ものに怖れて飛あがりたるすがた、或は餌拾ふ時、又はこゝよりかしこへつたひ道などするさまなり。凡ものを作するに、先其本情を知べき也。しらざる時は珍物奇言に魂をうばゝれて、其本情を失ふ事有べし。（異本（失ふ事あるべし、外のことに魂を奪はるゝはそのものに着する故なり。これを本意を失ふといふ。））角が功者すら時にとりて過てる事多し。初學の人愼まずんばあるべからず。

桐の木の風にかまはぬ落葉哉　凡兆

其角曰、是先師の橿の木の等類なり。兆曰、しからず、詞つゞきの似たるのみにて、こゝろ大にかはれり。去來曰、等類とはいひがたし。同巢の句なり。同巢を以て作せば、予が、凩の地にも落さぬ時雨かな　といふ（異本（作者の））巢をかりて、瀧川の底へふりぬく霰哉　と言出て、いさゝか手柄なし。されど兄より生れ勝さらんは又各別なり。

駒買に出迎ふ野邊の芒哉　野明

去來曰、駒買に人の出迎ふたる野邊の薄にや、又は直に芒の風情にや。野明曰、薄の上なり。去來曰、はじめよりさは聞侍れど、吾子の俳諧の斯上達せんとは思はざりし故、たゞおどろき入侍るのみ。支考曰、句の秀拙はともかくも、野明此場をしらるゝ事いと不審也と感吟す。予此人を教る事年あり、曾て通ぜず。一とせ先師廿日ばかりの旅寐に供せられしより拔群上達せり。常に俳友なく修業むなし。然れども先師をはじめ、丈艸・支考など折ふし會吟して外のわる功をしられぬ故、おのづからかゝる句も出來めり。誠に手筋を尊むべし。只平生作意の弱きを難とす。

あらし山猿のつらうつ栗の毬　小五郎

花散て二日居れぬ野原かな

正秀曰、嵐山は少年の句にして、しかも風情あり。落花は惡功の入たる所見えて、少年の句といひがたし。去來曰、二日をられぬといへるあたり、他流の悦ぶ處にして、蕉門の大に嫌ふ處なり。

散時の心安さよけしの花　越人

其角・許六ともに云、此句はいひおほせざる故に、僧に別るとて、といへる前書あり。去來曰、罌粟一体の句としていひおほせたり。餞別となして猶見處あり。

電(いなづま)のかきまぜて行闇夜かな　　去來

丈艸・支考ともに曰、下の五文字過たり。田づら哉　とも有たし。去來曰、物を置べからず、たゞ闇夜なり。兩士曰、（異本、尤ヶ句にして）最句にして拙しと論ず。其後丈艸に語て曰、退て思ふに、兩士は電の句と見らるゝならん。只電の後の闇夜の句也。故に行くとは申侍る。丈艸曰、さばかりはえ聞ざりき、いかゞ侍らん。

ほとゝぎす帆裏になるや夕まぐれ　　先放

はじめは下を明石瀉といへり、渡鳥集にあらため出せり。可南曰、いかなる故にや。去來曰、時鳥帆裏になるや　といふにて景情たれり。此うへに明石瀉をもとむるは、こゝろのねばりならんか。可南曰、同集に卯七が子規も明石也、いかゞかはり侍るや。去來曰、卯七が發句は趣向を（異本　卯七は、あかしといはねば、凉しけりといふ本意たらず。）二ッ三ッとりかさねて作するものにあらず。又下意を持せて作するとは格別なり。

とられずば名もなかるらん（異本「ながれなん」）紅葉鮒　　玄梅

許六曰、是を說經ばねと云。感ぜん者こそなかりけりの類也。又曰、人あり、路上にて人にあひて、上へや行べし、下へや行べしと道を問ふがごし。てにをはあはず。去來曰、上へや行べしといふは、上を疑ひて下を決したるゆゑ語路不通なり。又疑ひて決するといふてにはにもあらず。此紅葉鮒は上に疑ひありて、下をはねたればくるしからず。又らんは、らしにかよふ也。許六曰、あながちにはねたるをいはず。惣体、てにはあしき也。

鞍壺に小坊主のるや大根引　　芭蕉

風問曰、此句いかなる處か面白き。去來曰、吾子いま解しがたからん、只、圖(づ)してしらるべし。たとへば花を圖するに、奇山・幽谷・靈社・古寺・禁闕によらば其圖よからん、よきゆゑに古來多し。斯のごくの類は圖のあしきにはあらず、珍しからざればとりはやさず。又圖となしてかたちこのましからぬものあらむ。是等はもとより圖のあしきとて用ゐられず。今珍しく本情の儘なる圖あらば、是を書となしてもよからむ、句となしてもよからん。されば大根引の傍に、草はむ馬の首うちさげたらむ鞍つぼに、小坊主のちよつこりと乘たる圖、（異本「圖あらば古からんや」）おほくは古からんや、拙からむや。察し見らるべし。國が兄何某、却て國よりも

感動す。かれは俳諧をしらずといへども、諧をよくする故也。諧師尚景が子なり。異本（尚景が弟子なり）

夕ぐれは鐘をちからや寺の秋　風國

此句、はじめは晩鐘のさびしからぬといふ句也。句は忘れたり。風國曰、此頃山寺に晩鐘をきくに曾てさびしからず、依て作す。去來曰、是殺風景也。山寺といひ、秋のゆふべといひ、晩鐘といひ、寂しき事の頂上なり。しかるを一端游興騷動の內に聞、さびしからずといふは、一己の私なり。風國曰、此時此情あらば、いかに情有とも作すまじきや。去來曰、若（もし）、情あらば斯のごとくにも作せんか、と今の句に直せり。勿論句勝れずといへども、本意を失ふ事はあらじ。

應々といへど敲くや雪の門　去來

丈艸曰、此句不易にして流行のたゞ中を得たり。支考曰、いかにして斯安き筋よりは入たるや。正秀曰、たゞ先師の聞給はざるを恨るのみ。曲翠曰、句の善惡をいはず、當時作せん人を覺えずといへり。其角曰、眞の雪の門也。許六曰、尤佳句也、いまだ十分ならず。露川曰、五文字妙也。去來曰、人々の評亦おの／＼其位より出づ。此句は先師迁化の冬の句なり。其頃同門の人々も難しとおもへり。今は自他ともに此場にとゞまらず。

幾年の白髮や神の光かな　去來

大宰府奉納の句なり。許六曰、發句に切字二ッ用うるは法あり。此句、切字二ッの病あり。去來曰、予曾て切字二ッあるにこゝろなし。ふたつ有ともこれを切字に用ず。異本（切字に用ひずんば苦しからじ。）

白雨や戸板おさゆる山の中　助童

去來曰、此句、初學の工案異本（工案ながら黑崎にきゝて此に及ぶなり。句體……）ながら句体風姿あり、語路滯らず、情ねばりなく事あたらし。最當時流行のたゞ中也。世上の句おほくは、兎（と）する故に角（かく）こそあれと句中にあたりあひ、或は目前をいふとて、ずんど切の竹にとまりし燕、暖簾の下くゞる事のみなり。此兒、此下地ありてよき師に學ばゞ、いかばかりの作者にか至らむ。第一いまだ心中に理屈なき故なり。もし惡功の出來（いでき）たるにおよんでは、又いかばかりの無理いひにもなりなん。怖るべし。

さびしさや尻から見たる鹿の形　木導

許六曰、此句は、入鹿のあと吹おくる秋の上風、といへる

等類也。去來曰、吹送るの歌は、朝鹿の山に歸る氣色をいへり。これは鹿一体のさびしさをいへり。趣意各別なり。等類なるまじ。

唐黍にかげろふ軒や靈まつり　酒堂

酒堂曰、路通いへるは、唐黍は粟にも稗にもふるべし、異本（成べし）發句となしがたしと也。去來曰、路通いまだ句の花實をしらざる故也。此句は軒の草葉に火影のもれたる賤が魂祭を賦したる也、一句の實こゝにあり。其草葉は唐黍にても、粟稗にても其場に叶たる物を用うべし、是は一句の花也。實は魂祭にて動べからず、動けば外の句也。花はいくつも有べし、其内雅なるを撰用のみ。

靈祭うまれぬさきの父戀し　甘泉

去來曰、吾子は出生已前に父を喪し給ふや。甘泉いはく、去ゝ年送葬し侍る。去來曰、然ればこれは他人の句也。吾子に對してをかしからず。凡發句を吟ずるに、異本（吟ずるに、これより我位を出べからず、若は害を得べし。意は……）意は聖賢佛神の境にも遊ぶべし、處は禁裏・仙洞のうはさも申べし、乞食桑門の上にもおよぶべし。句においては身上を出べからず。身外を吟ぜばあしき害を求め侍らん。

御命講やあたまの青き新比丘尼　許六

去來曰、七字斯いひくださんはいかゞ。是を直さば一句しをり出來らん。許六曰、しをりは自然の事也、求て作すべからず。是は七字を以て發句となる也。其角もさこそと評し侍る。

門口や牛王めくれて初しぐれ　作者不知

去來曰、此句彦根より見せられたるに、其角が弱法師の門札の句と等類と評す。予甚誤なり。其頃は少し似たる事も、けば〳〵しく嫌ひ除て一句の物体をしらず。門といひ札といふにて、はや等類の評をなせり。いと淺間し。

猪の鼻ぐすつかす西瓜哉　卯七

去來曰、させる事なし。三四分の句なり。正秀曰、猪なればこそ鼻はぐすつかしけん、と甚悦びたり。其後先師も一興ありとなり。去來曰、退て思ふに、此頃いまだ上方には西瓜めづらしければ、正秀もさおもふ心より、猪のあやしみたるとは風情聞出せり。予は西國うまれにて、西瓜も瓜・茄子のごく、さしてめづらしともおもはざりければ、曾てこゝろゆかざりけり。惣て人の句をきくに、我

がしる場としらざる場とにたがひ有べし。虎の噺を聞て追れたる人の汗をながしたりといへる類也。

饅頭で人を尋ねよやまざくら　　其角

許六曰、是は謎といふ句也。去來曰、是はなぞにもせよ、いひおほせざる句也。たとへば、提燈で人を尋ねよ　といへるは、直に提燈もてたづねよ也。これはまんぢうをとらせんほどに、人をたづねよといふ事を、我ひとり合點していへるもの也。むかし聞句といふ物あり。それは句の切様、或はてにをはのあやをもて聞く句也。此句は其類にもあらず。

あさがほに箒うちしく男哉　　風毛

魯町曰、此句或人の長點也、いかゞ。去來曰、發句といはゞいはれんのみ。杜(牡)年曰、先師の「蕣に我はめしくふ男哉　とはいかなる所に秀拙ありや。去來曰、先師の句は其角が蓼くふ螢といへるにて、飽まで巧たる句の荅也。句上に事なし、荅る所に趣あり。風毛が句は前後表裏一の見るべき所なし。斯のごとき句は口をひらけば出るものなり。こゝろみに作て見せん、何なと題を出されよ。魯町則露の句を乞。〽露落て襟こそばゆき木陰哉。又菊の題にて〽菊咲て家根のかざりや山畠　と十題十句、言下に賦したり。若はらみ(孕)句の疑もあらん、一題に十句せんといふ。魯町則砧の題を出す。〽娘より嫁の音よはき砧哉　乘掛の眠をさます礎哉　といふをはじめ、十句筆をおかず。予は蕉門遲吟第一の名ありてすら斯のごとし。況や集にも出たる先師の句なれば、各別の事ありと知らるべし。

異本（去來曰、此言自らてらふに似たり。しかれども世間の……）

去來曰、當時世間の作者、翁の蕣の句、あるは道ばたの木槿などの句体にまよひ、あさましき句を吐出し、芭蕉流とおほえたる族(やから)おほし。其輩(ともがら)にしらせんためこれを記すもの也。

年立や家中の禮は星月夜　　其角

元日や土つかふたる顏もせず　　去來

許六曰、當時元日といふ冠、用うまじき難あり。去來曰、元日は嫌ふべき言にあらず。やの字平懷にきこゆ、此難なるべし。此句元日といはん外なし、やは嘆美したる詞也。許六曰、其角此句を吟じ、春立といへば歳旦にあらず、元日はいひ古びたりと窺ふ。先師曰、さばかりの作者の

今日元日といはんは拙かるべしとて、年立やとは置給へり。又やの字の嘆賞のやといふはなし。五ッのやは疑のやとは習侍る。去來曰、其角が句においては先師かくのたまふべし。予が句においてはさはのたまはじ。作者の甲乙をもて云にはあらず、己〳〵が志す處に違あり。予は珍物・新詞をもて常に第二等に置侍る。そこは先師も能見ゆるし給へり。又嘆美のやは名目にはなし、名目を以ていはゞ治定のや也。治定にも嘆息・嘆美あり。世話にもすいたりや虎御前、切たりやむさし坊などいふ、皆治定嘆美也と論ず。猶後賢判じ給へ。

風國曰、彥根の發句、一句に季節を二ッ入る手くせあり。難ずべきや。去來曰、一句に季節二三有とも難なかるべし。もとより好む事にもあらず。

許六曰、一句に季節を二ッ用る事初心のなりがたき事也。季と季のかよふ處あり。去來曰、一句に季を二ッ用る事は、功者・初心によるべからず。されど許六の季の通ふ處に習ありといへるは、予がいまだ知ざる事也。

盲より啞のかはゆき月見かな　去來

去來曰、此句は十七八年前の句なり。其頃は先師にも賞せられ、世上にも聞えありし句也。尤事新しうして感深しといへども、句位を論ずるに至ては甚下品也。いま蕉門の俳友中〻此場にをらず。この頃或連歌師の曰、花のもとにて此句の評あり、俳諧もかゝる感情の句あればあなづりがたしとなり。是を賞せらるゝと聞けば、今時の連歌師はこのもしからずおもひ侍る。

牽牛花の裏を見せけり風の秋　許六

一說、此句先師の、葛の葉の面見せけり　と等類なりと。許六曰、等類にあらず。見せけりとは詞のむすびまで也、趣向かはれり。去來曰、等類といひがたし、同巢の句なるべし。たとへば和哥には、花さかぬ常盤の山の鶯はおのれ啼てや春を知らん、と云に、紅葉せぬ常盤の山の小男鹿はおのれなきてや秋をしるらむ、とよみても等類にはならずとよ。俳諧には遠慮あるべき事也。

しぐるゝや紅の小袖を吹かへし　去來

正秀曰、いとによるものならなくに、の類にて、去來一

生の句屑也。去來曰、正秀が評いまだ解し得ず。予はたゞしぐれもて來る嵐の路上に、紅の小袖吹かへしたるけしきは、紅葉吹おろす山おろしの風、と詠たるうへの俳諧なるべしと作し侍るまでなり。

はつのゐのこに丁どしぐるゝ
生鯛のぴち〱するを臺にのせ
どこへ行やらうらの三助

去來曰、此附句、臺に載せといへる所、いのこ(亥子)の祝儀と極て、此分過たり。やはり、ぴち〱としてはねかへり などあらまほし。しからば次の附句までもよからむ。かゝる處より句体重くなるなり。惣て一句にいひ盡したるは、あと〱付がたきものなり。

梅の花赤いは〱あかいかな　惟然

去來曰、惟然坊が今の風大かた是等の類なり。異本(是は句とは見えず)發句にはあらず。先師迁化の歳の夏、惟然坊が誹諧を導給ふに、其得たる口質の處よりすゝめて〱磯際にざぶり〱と浪うちて 或は、松の木にすら〱と風の吹わたり などゝいふを賞し給ふ。又俳諧は氣鋒(きさき)にて無分別に作すべしとのたまひ、亦此後いよ〱風体かろからんなどのたまひたる事を聞まよひ、我が得手に引かけて、自(みづから)の集の哥仙に侍る、妻よぶ雉子、あくるがごくの雪、の句などに、先師評し給へる句勢・句姿などゝいふとの物がたり共は、みな〱忘却せらるゝと見えたり。

行ずして見五湖煎(いり)蠣(かき)の音を聞　素堂
なき人の小袖もいまや土用ほし　芭蕉

素堂子の句は深川芭蕉菴におくり給ふ句なり。先師の句は予が妹が身まかりける頃、美濃の國より、贈給ふ句なり。ともに其事をいとなむたゞ中に來れり。此頃ある集を異本(古暦集)見るに、先師の事ども書ちらしたるかたはしに、素堂子の句をあげ、いり蠣のたゞ中に來るとをもて、名人達人と譽られたり。それをもて名人といはゞ、其そしらるゝ先師の句もかくのごとし、皆人の知たる事也。異本(皆人のしらざることなり)それのみならず、世話にも、人事いはゞめしろおけ、異本(人事いはゞ、むしろしけ)といへり。一氣の感通・自然の妙應、かゝる事もあるものとしるべし。誠に痴人面前夢を說べからずとなり。

梅白しきのふや鶴を盗まれし　芭蕉

去來曰、古藏集に此句をあげて、先師の事をなぢり、此句へつらへりといへり。是等は物の心を辨へずして評せり。秋風は洛陽の富家に生れて市中を去、山家に閑居して詩歌をたのしみ、騷人を愛すと聞て、かれに迎へられ、實にかれを風騷の隱逸人とおもひ給へる文作ありしが、いか異本（思ひ給へるにより此作あり。先師のこゝろに佞諂なし、評者の心に佞諂あり、其後……）どありけむ、其後招けども行給はず。今や此評を見るに、かれが佞諂なるを知れり。

うぐひすの海向てなく須磨の浦　卯七

鶯もとはじめ作せり、野坡曰、もとあたらんよりは、やはりの文字よからむ。去來も是に同じける。丈艸曰、異本（丈草曰、もとといひて風情侍れど、やはりたしかに鶯のといはんかた……）のといひて風情は侍れど、たしかにもといはんかたまさるべしと也。

故　實　予初學のときより、俳諧の法をしる事を穴勝にせず。去來季節等も不覺悟にして、其外の事は云ふに及ばず。然れども此篇は先師の物語ありし事ども、わづかに覺え侍るをしるす。

卯七曰、先師は俳諧の法を用ひ給はずや。

去來曰、是を成るほど用ひてなづみ給はず。思ふ所ある

時は、古式を破り給ふ事もあり。されど私に破らるゝは稀なり。第一、先師の俳諧は長頭丸以後のはいかいを以て、元來とし給はず。唯世々の俳諧躰にもとづき給へり。凡、俳諧の付句は已に久しといへども、連俳と成るは長頭丸以來にして未法式なし。仍連歌の式をかり用ひらる。重ねて俳諧の法式を改作あらはすにもおよばず、また上より定たる法式にもあらず。もし其人あらばこれを損益あるとも罪あるまじ。其ときの宗匠たちはみな元來連歌師たる故、連歌の法式をかり用ひらるゝ也。退ておもふに、今日の先師、もし其時にいまさば連歌に寄らず、俳諧の式は別に立べし。世の人は俳諧を連歌の奴僕のやうにおもへり。先師の沙汰は格別也。

卯七曰、蕉門に手に葉留の脇・字留の第三、用る事はいかに。去來曰、發句の脇は哥の上ミ下モ也。是を連るを連歌といふと云。一句〳〵に切るは長くつらねんが爲なり。哥の下句に字留と云事なし。文字留と定るは連歌の法なり。是等は連歌の法によらず、歌の下の句の心も、むかしの俳諧の格なるべし。むかしの句に、

守山のいちこさかしく成にけり
　うばらもさぞな嬉しかるらん
まりこ川蹴ればぞ浪はあがりける
　かゝりあしくや人の見るらん
是等、手に葉の脇の證句なり。第三も同じ。
卯七曰、蕉門に無季の句興行侍るや。
去來曰、無季の句は折々あり。興行はいまだ聞ず。先師の發句も四季のみならず。されどいかなる故有て、四季のみとはさだめ置れけん、其事をしらざれば、しばらく默止侍ると也。其無季といふに二ツあり。一ツは前後・表裏、季と見るべき物なし。落馬の即興に、
　歩行ならば杖つき坂を落馬かな　はせを
　何となく柴吹風もあはれなり　杉風
又、詞に季なしといへども、句に季と見るところ有て、あるひは歳旦とも、名月とも定るなり。
　年〳〵や猿にきせたる猿の面　はせを
如レ斯なり。

卯七曰、發句に切字を入る事は如何。
去來曰、故あり。先師曰、汝切字をしるや。去來曰、いまだ傳授なし、自分覺語し侍る。先師曰、いかに。去來曰、たとへば發句は一本木のごとしといへども梢・根あり。付句は枝のごとし、大いなりといへども全からず。梢・根ある句は切字の有無によらず、發句の躰なり。先師曰、しかり、然れどもそれは面影をしりたるなり。是を傳授すべし。切字のことは連俳ともに深く祕す、猥に人にかたるべからず。惣て先師に承る事多しといへども、祕すべしと有しは是のみなれば、其事はしばらく遠慮し侍る。第一は切字を入る句は句を切ため也。切れたる句は字を以て切に及ばず。いまだ句の切れる、切れざるを知らざる作者のため、先達、切字の數を定られたり。此字を入るときは十に七八は句切る也。殘二三は入てきれざる句あり、又入れずしてきれる句あり。此故に或はこのやは、口あいのや、このしは、過去のしにてきれず。或は是は三段切、是は何ぎれなどゝて、名目して傳授事なり。又、丈草に向て先師曰、歌は三十一字にて切れ、發句は十七字にて切る。

丈草撰入あり。又、或人曰、先師曰、きれ字に用る時は、四十八字皆切字なり。用ざる時は一字もきれ字なしとなり。是等は皆ゝこゝをしれと障子ひとへをおしへ給ふならん。去來曰、此事を記す、同門にもみだり成りと思ふ人有らん。愚意は格別也。此事あながち先師の祕し給ふべき事にもあらず、たゞ先師の傳授のとき斯ありし故なるべし。予も祕せよとありけるは書せず、唯此あたりを記して人も推せよとおもひ侍るなり。

卯七曰、花に定座ありや。

去來曰、定座なし。花の句はたがひに大切と讓り合侍る故、裏十一句・十三句にて出す。十句・八句は短句なり。十三句目おのづから花の句となり侍る也。當流には此說を用ゆ。

卯七曰、花を引上て作るはいかに。

去來曰、花を引上るは二品有り。一ッは一座に賞翫すべき人ありて、其人に花をと思ふ時、其句前にいたりて、前句より春季を出して望む也。是を呼出しの花と云。又一ッは一座の貴人・功者抔は他に讓るべき人もあらねば、よき寄り來る時は、呼出しを待たず花をなす。又兩吟の時は互に一本宛の句主なれば、謙退に及ばず。何方にてもひき上て作する也。扨、故もなく花を呼出すは、呼出すものゝ過にして、花主の罪にあらず。また故もなくみづから引上るは、くわんたいの作者なり。是等の事は隔心の會の式なり。常の稽古には兎も角も有べし。人にふりかゆる花あり。これは花一句と思ふ人の句所あしきときは、我句を前にふりかへて花をわたす也。

卯七曰、猿みの集に、花をさくらにかへらるゝはいかに。

去來曰、此時、予、花をさくらにかへんと云。先師曰、故いかに。去來曰、凡、花はさくらにあらずといへる、一通りはする事にして花聟・茶の出花なども、はなやかなるによる。花やかなりといふもよる所有、必竟花はさくらをのがるまじと思ひ侍る也。先師曰、さればよ。古へは四本の内一本は櫻なり。汝が云ところも故なきにあらず、兎角作すべし。されど尋常の櫻にては、かわりたる詮なからんとなり。予ハ糸ざくらはら一ぱいに咲にけり、と吟しければ、句、我まゝなりとわらひ給ひけり。

卯七・野明曰、蕉門に戀を一句にて捨るはいかゞ。

去來曰、予此事を伺ふ。先師曰、古は戀の句數定らず、勅已後、二句以上五句となる。これ禮式の法なり。一句にて捨ざるは、大切の戀句に挨拶なからんはいかゞとなり。一説に戀は陰陽和合の句なれば、一句にて捨べからずともいへり、皆大切に思ふ故なり。予が一句にても捨よといふも、いよ〳〵大切におもふ故なり。汝は知まじ、昔は戀句出れば相手の作者は、戀をしかけられたりと挨拶せり。また五十員・百員といへども戀句なければ一卷とはいはず、はした物とす。斯ばかり大切なる故、皆戀句になづみ、わづか二句一所に出れば幸とし、かへつて卷中戀句まれなり。又多くは戀句より句しぶり吟おもく、一卷不出來になれり、この故に戀句出て付よからんときは、二句が五句もすべし。付がたからんときは、しばらく付ずとも、一句にても捨よと云へり。かくいふも何とぞ卷づらをよく、戀句も度〳〵出よかしと思ふ故なり。勅の上を斯く云は恐るゝ所有(ところある)に似たれども、それは連歌の事にて、俳諧の上にあらねば奉背にもあらず、然れども我古人の罪人たる事をまぬかれず。唯、後學の作しよからん故をおもひ侍るのみなり。

卯七曰、蕉門に宵闇を月に用ひ侍るや。

去來曰、此事あり。酒堂曰、深川の會に宵闇の句出たり。先師曰、宵闇は句中に月あれば、外に月の句作せんは拙なかるべしと、直ちに月にもちひ、さて表に月を見せざらむもいかゞと、月次の月の字を入らるゝといへり。さもあるべきことゝおもへり。其後、風國が會に宵闇の句いづる。予曰、先師已に此式を立らるゝ上は、いざ其法にならはんと、是を月に用ひ侍りぬ。この比、許六の書を見るに、先師の宵闇を月にし給ふは故有との事也。然るを何の故もなく月に用るは淺ましとなり。此ことばを聞て恥るにたへず、許六は其時深川の會の徒なり。いか樣子細あるべし。

野坡曰、東武の會に盆を釋教とせず。嵐雪是を難ず。先師曰、盆を釋教といはゞ、正月は神祇になるかと也。予、兎角をいはず、退て思ふに此事はいか樣故あらん。一句に釋教なしといふとも、已に盆と呼はゞ釋教ならんか。中元といふ類にはあらずと、いとふしんなり。

去來曰、許六と名月の明の字を論ず。予は第一、八月十五日夜要箱なり。清明を用る。第二、和歌にも今宵清明をよめり。第三、詩にも清明の字あり。第四、本朝のならひ字儀叶ふを假用る故有。富士を不二、吉野を芳野と云が如し。第五、先達明の字書れたる多し。明の字書て苦しからじと云也。許六は明月と八月十五夜とは和歌の題格別也。名月は良夜の日の事也。名月に明の字書は未練といへり。是論至極せり。もし明月の題を得て、中秋の月を作せば放題ならん。名月も明の字書まじき事必せり。

許六曰、むらさめは季なし。季を結ぶに習あり。熊野の謠に、のう〳〵村雨のして花を散しゆと云は、歌道を知らぬものゝ作となり。

去來曰、村雨多は夏の初、秋の半に詠み侍る。哥人に問ふに、花にも月にも結ぶ也。春の末・夏のはじめ、遲櫻などに結び侍る事にや。いまだ證歌は覺悟せず、退ておもふに急雨など書て、必竟一降雨なれば、その風情をうつし得ば、いつをかぎるまじ。無季なるもかゝる故にや。

去來曰、手爾葉は天下一まいのてにはにて、確も知るものなり。一字も違ぬればかならず通せず。又傳授ある手にはといふに至ては、天下に知人少し。堂上にも傳授の人多くましまさずとなり。是よりはじめて人の歌も直し給ふとかや。又地下に傳授のひとすじあり。紹巴・貞德も此傳なり。先師も此傳と承る。我輩のみだりにいふ事にあらず、

許六曰、古事・古歌を取るには、作をならべて己が心を盡す。たとへば、

名將の橋の反見る扇かな

といへるは、名將の作にして句主の作にあらず。

去來曰、古事・古歌を取には、本歌を一段すり上て作すべし。譬へば蛤より石花をうれかしと云、西行の哥を取て、

かきよりは海苔をば老の賣もせで

と先師の作あり。本歌は同じ生物をうるともかきをうれ。石花はかんきんの二字にかなふといふを、先師は生物を賣らんよりは海苔を賣れ。のりは法に叶ふと、一段すり上て作り給ふなり。老の字力あり。大概かくのごとし。

先師曰、世上のはいかいの文章を見るに、或は漢文を假名

に和らげ、或は和歌の文章に漢字を入れ、詞あしく賤しく云なし、或は人情を云とても今日のさわがしきくまぐを探りもとめ、西鶴が淺ましく下れる姿あり。我徒の文章はたしかに作意をたてゝ、文字はたとひ漢字をかるとも、なだらかに云つゞけ、事は鄙語の上に及とも、懐しく云とるべしと也。

先師曰、凡、賛名所の發句は、其賛・其所の發句と見ゆるやうに作るべし。西行の賛を定家の繪にも書、明石の發句を松嶋にも用ひ侍らんは拙き事なるべし。

先師曰、俳名は穴勝熟字によらず、唯となへ清く調ひ、字形の風流なるを用ゆべし。短册など書て猶見る所あり。片名書侍るにことぐしき字形は苦しかるべし、はせをは假名に書ての自慢なりとなり。又野明が名をはじめ風叉と云けるを、釵・叉の有る字は名に用ゆべからずとて、先師の野明とは改め給ひけり。

去來曰俳諧の集の模樣は、やはり俳諧の集の內にて作すべし。後あら野集献立を見て、先師も我を折給ひき。かの徒然草はあつめ書の部に成て、歌書のうちに入ずとかや。思べし。

去來曰、外題の寸法あり。譬へば表紙の三分一を取り、横五分が一を取とやらん。猿蓑のとき先師の給ひけり。たしかに覺えず。

魯町曰、竹植る日は古來より季にや。去來曰、不レ覺悟、先師の句にてはじめて見侍る。古來の季ならずとも、季にしかるべき物あらば撰び用ゆべし。先師曰、季節のひとつも探し出したらんは後世によき賜となり。鹽かきの夜も古來の季節かしらずといへども、五月三十日なれば夏季に定る。可南が句に沙汰し侍る。

卯七曰、先師に二見形と云ふ文臺侍るよし。いかゞ。去來曰、しかり。史邦是をよくうつさる。先師の考圖、寸法を直に聞侍れども忘却せり。本より文臺も所持せず。其後門人寫し侍る人多し。

去來曰、先師曰、俳諧の書の名は、和歌・詩文・史錄等とたがひ、作者の名あるべしと也。されば先師名づけ給ふを見るに、みなし栗・三ヶ月日記・冬の日・ひさご・猿蓑・葛松原・笈の小文皆其趣なり。去來、浪化集の時上下を有磯

海・となみ山と號す。先師曰、みな和歌の名所なれば、浪化集と呼べしとなり。

魯町曰、浪化集にては、俳書の名は詩歌・史文を分つべからず。

去來曰、されば浪化、詩人ならば詩集成べし。俳諧者なれば見るより俳諧書と云事あきらけし。

修業教　異本（不易流行）

去來曰、蕉門に千歳不易の句・一時流行の句といふあり。是を二つにわけて敎給へども、其元は一なり。不易をしらざれば基立がたく、流行をしらざれば風新にならず、不易は古に宜しく後に叶ふ句なる故に、千歳不易といふ。流行は一時〳〵の變にして、きのふの風は今日宜からず、今日の風は翌日に用ゐがたきゆゑ、一時流行とは、はやるとをいふなり。

魯町曰、俳諧の基とはいかに。去來曰、詞にいひがたし。凡吟詠するもの品あり、歌は其一なり。其中に品あり、はいかいは其一なり。其品〳〵をわかちしらるゝ時は、俳諧連歌はかくのごときものなりと、おのづからしらるべし。それをしらざる宗匠達はいかいをするとて、詩やら歌やら、旋頭・混本歌やら知れぬ事をいへり。是等は俳諧に迷ひて俳諧連歌といふ事を忘れたり。俳諧をもて文を書ば俳諧文なり、歌をよまば俳諧歌なり、身に行はゞ俳諧の人なり。唯いたづらに見を高くし、古をやぶり、人に違ふを手がらがほに、あだ言いひちらしたるいと見苦し。かくばかり器量自慢あらば、はいかい連歌の名目をからず、はいかい鐵砲となりとも亂聲となりとも、一家の風を立らるべし。

魯町曰、不易の句の爲（異本（句の事は））はいかに。去來曰、不易の句は俳諧の躰にして、いまだ一の物數寄なき句なり、一時の物數寄なき故に古今に叶へり。たとへば、

月に柄をさしたらばよき團かな　宗鑑

これは〳〵とばかり花のよし野山　貞室

秋の風伊勢の墓原猶すごし　芭蕉

是等の類也。魯町曰、月を團に見立たるも物數寄ならず

や。去來曰、賦・比・興は俳諧のみにかぎらず、吟詠の自然なり。凡吟にあらはるゝもの、此三つをはなるゝ事なし。物數寄とはいひがたし。

魯町曰、流行の句はいかに。去來曰、流行の句は、おのれに一ツの物數寄ありてはやる也。形容・衣裝・器物等にいたるまで、時〻のはやりあるがごとし。たとへば、

むすやうに夏にこしき(飯)の暑さかな

此躰久しく流行す。

あれは松にてこそゆへまきの雪(異本(枝の雪)) 松下

海老肥て野老(ところ)痩たるも友ならなむ 常矩

或は手をこめ、あるひは歌書の詞づかひ、又は謠の詞とりなどを物數寄したるあり。是等も一時に流行し侍れど、今日は取上る人なし。魯町曰、むすやうに夏にこしきといふは緣にあらずや。去來曰、緣は歌の一事にして、物數寄にはあらず。手を込ると緣とはかはりあり。

魯町曰、不易流行共元一なりとはいかに。去來曰、此事辨じがたし。有增(あらまし)人体にたとへていはゞ、不易は無爲の時、流行は坐臥・行住・屈伸・伏仰(俯)の形同じからざるがごとし、一時〳〵の變風是也。其姿は時に替るといへども、無爲も有爲も、もとは同じ人也。

魯町曰、風を變るには其人ありとはいかに。去來曰、本をしらずして末を變る時は、或は變レ風、其變風俳諧をはなれ、或は離れずといへどもつたなし。

魯町曰、基より出ると出ざるとはいかに。去來曰、基をしらずしては解しがたからむ。先あらはに知れる物一ツふたつをあげて物がたりす。たとへば、先師の風といへども、

貞固が松けさ門に有女ともきほひ

瀧あり蓮の葉にしばらく雨をいだきしか 素堂

これらは詩か語か。又文字の數合たるにも、

散花にたゝらうらめしくれの聲 幽山

此句は謎なり。誹諧歌に謎の躰も有事にや、是等はみな俳諧歌体よりはいでず。察し見るべし。

魯町曰、先師も基より出ざる風侍るにや。去來曰、奥州行脚の前はまゝあり、此行脚のうちに工夫し給ふと見えたり。行脚のうちにも、あなむざんやな甲の下のきり〳〵

す　といふ句あり。後にあなの二字を捨られたり。是のみにあらず、異体の句などもはぶき捨給ふもの多し。此年の冬、はじめて不易流行の教を說給へり。魯町曰、不易流行の事は古說にや、先師の發明にや。去來曰、不易・流行は萬事に渡る也。しかれども、はいかいの先達是をいふ人なし。長頭丸已來手を込る一躰久しく流行し、〽角樽や傾けのまふ丑のとし　花に水あけて咲せよ天龍寺　といへるまでに吟じたり。世の人、はいかいは斯のごとき物とのみ心得つめぬれば、其風を變ずる事をしらず。宗因師一度其こりかたまりたるを打破り、新風を天下に流行し侍れど、いまだ此教なし。しかりしよりこのかた、都鄙の宗匠達古風を用ず、一旦流〱を起せりといへども、又其風を長くおのが物として、時〱變ずべき道をしらず。先師はじめて誹諧の本体を見つけ、不易の句を立、また風は時〱變ある事をしり、流行の句變ある事を分ち敎給ふ。然れども先師常に曰、宗因なくんば我〱が誹諧今以貞德の涎をねぶるべし。宗因は此道、中興開山なりといへり。

丈艸曰、不易の句も、當時其体を好みてはやらば、是も又流行の句といふべき也。異本（先師遷化時、正秀曰、此より後は定て變化あらん、其風好なし。唯不易の句をたのしまん。）

去來曰、蕉門に不易流行の說〱あり、或は今日一句〱の上を云說あり。是も流行にあらずといひがたし、然ども不易流行の教といふは、はいかいの本体一時〱の變風との事也。

去來曰、俳諧を修行せんと思はゞ、むかしより時代の〱の風、宗匠〱の體を、能〱考知盡べし。是をしる時は新古おのづから分る物なり。

去來曰、俳諧の修行者は、おのが好たる風の先達の句を一すぢに尊み學びて、一句〱に不審をおこし、難を構ふべからず。若解がたき句あらば、いかさま故あらんと工夫し、或は功者に尋明むべし。我が誹諧の上達するにしたがひ人の句も聞るもの也。始より一句〱をとがめがちなる作者は、吟味のうちに月日かさなりて、終に功の成たるを見ず。先師曰、今の俳諧は日頃に工夫をつけて、席にのぞんでは氣鋒を以て吐べし、心頭に落すべからずと也。

支考曰、むかしの誹諧は如來禪のごとし。今のはいかいは

祖師禪のごとし、捨著すれば卽轉す。

去來曰、先師は門人に敎給ふに、其とば極なし。予に示し給ふには、句每〻にさのみ念を入る物にあらず。又句は手づよく俳意たしかに作べしと也。凡兆には一句わづかに十七字なり、一字もおろそかに置べからず。誹諧もさすがに和歌の一体なり、句にしをりの有やうに作るべしとなり。是は作者の氣性と口質によりてなり。あしく心得る輩は迷ふべきすぢなり。同門の中にも、こゝに迷をとる人多し。先師曰、發句は頭よりすら〳〵といひくだし來るを上品とす。

洒堂曰、先師曰、發句は汝がごく、物二ッ三ッとりあつめて作るものにあらず、こがねを打のべたるやうにありたしとなり。先師曰、發句は物をとり合すれば出來る物也。夫をよく取合するを上手といひ、あしきを下手といふなり。許六曰、發句は取合て作する時は、何多く出來るものなり。初學の輩これをおもふべし。功者に及では取合不取合の論にはあらず。

異本（許六曰、發句はとり合物なり。先師曰、是ほど仕能き事の有を人は知らずや。去來曰、取合せて作る時は句多吟速なり。初學の人は是を思ふべし……）

許六曰、發句は題の曲輪を飛出て作るべし。廓のうちにはなきもの也。偶然曲輪の中に有は、天然にして稀也。

去來曰、發句に曲輪の內になきものにあらず。殊に卽興・感偶する物は多くは內にあり。然ども常に案るに、內はすくなく、多くは古人の糟粕なり。千里にかけ出て吟ずる時は、句おほきのみならず、第一等類をのがる。初學の尤思べき處也。功なるに及では、又內外の論にはあらず。風國が誹諧、句每曲輪の內なり。予此事を示せば、電に德利さげて通けり と云を、德利さげて行かゝり と直す。「名月に皆さかやきを剃にけり といふを、「さかやきを皆そりたてゝ駒迎 と直しぬ。

去來曰、他門と蕉門と第一案じ處に違ひありと見ゆ。蕉門は景情ともに其有處を吟ず。他流は心中に巧まるゝと見えたり。たとへば〽御蓬萊夜はうすものをきせつべし〽元日の空は青きに出舟哉〽鴨川や二度目の網に鮎一ッといへるごとし。禁閾に蓬萊なし、洛陽に出舟なし、鮎ひとつは少き事にや。皆是細工せらるゝなり。

去來曰、蕉門の發句は一字不通の田夫、十歲以下の小兒も、時によりてよき句あり。却而他門の功者といへる人

は覺束なし。他流は其流の功者ならざれば、其流のよき句はなしがたしと見えたり。

去來曰、誹諧は新意を專にすといへども、物の本情を違ていふものにはあらず。若其事をうち返していふには品あり。たとへば、感時花濺涙、惜別鳥驚心、或は「櫻花ちらばちらなん散らずとてふるさと人の來ても見なくに、といへるたぐひなり。感時惜別、大宮人の見ざる、是等一首の眼也。

去來曰、誹諧は火をも水にいひなすと淸輔がいへるに迷ひて、雪の降る日は汗をかきけり　といふてもくるしからずといふ人あり。夫は火を水とばかりこゝろへいひなすといふ處に、心のつかざる故なり。雪の日に汗かくやうに、一句を能いひなさばさもあらむ。〽咲かへて盛ひさしき朝良をあだなるはなとたれかいひけむ、の類也。

去來曰、句案に二品あり。趣向より入ると、又詞・道具より入るとなり。詞・道具より入る人は、多は頓作多句也。趣向より入る人は遲吟寡句也。されど、案じかたの位を論る時は、趣向より入るをよしとす。詞・道具より入る事は、和歌者流には嫌ふと見えたり。誹諧にはあながちにきらはず。

去來曰、蕉門に同巣同竈と云事あり。是は前吟の鑄形に入異本（作りたる句の意、又入て作をする句也）て作する句也。たとへば竿が長くて物につかへる、といふ句を、刀の鐺(こじり)が障子にさはる、或は、杖がみじかくて地にとゞかぬ、と吟じかゆる也。同竈の句は手がらなし、されど、兄より生れましたらんは又手柄なり。

去來曰、句に句勢といふ事あり。文に文勢、語に語勢あるがごとし。たとへば、〽ふるふがごとく小糠雪降る　と云句を、先師曰、打あくるごと小ぬかゆき降る　と作れば句勢ありとなり。

去來曰、句に姿と云あり。たとへば、

　　妻よぶ雉子の身をほそうする　　去來

初は此句、つまよぶ雉子のうろたへて啼　と作りたりけるを、先師曰、去來、汝いまだ句の姿をしらずや。同じ事も斯いへば姿ありとて直し給へるなり。支考が風姿といへるもこれ也。異本（風情といゝきたるを、支考は風姿風情と二つにわけて敎らるゝ尤さとし安し。）

去來曰、句に語路といふものあり。句はしりの事也。語

路は盤上を玉のはしるがごとく、滯なきをよしとす。又青柳の風に亂るゝがごとく、優を取たるもおもしろからん。溝川に土泥のながるゝやうに行あたり〳〵、なづみたるはわろし。其外卷中一句二句は曲をなせるもあるべし、夫とても語路の滯たるは嫌ふ也。

先師曰、發句は昔より樣〻替り侍れど、附句は三變にとゞまれり。むかしは附物を專とす。中頃は心附を專とす。今は移り・響・にほひ・位を以て附るをよしとす。

杜年曰、いかなるを響・匂ひ・移りといへるにや。

去來曰、支考等あらましを書出せり。是を手にとりたるごとくにはいひがたし。いま先師の評をあげてさとさん、他はおしてしらるべし。

赤人の名はつかれけりはつ霞　史邦

鳥もさへづる合点なるべし　去來

先師曰、うつりといひ、匂ひといひ、實は去年中三十棒をうけられたるしるしなりと悅び給ひけり。爰におもへば、匂ひといふも、移といふも、わづかに句作のあやにして、のると乘らぬとの境なれば、冷暖自知の時ならでは、悟し明らむる事あるまじ。此句もし赤人の、名もおもしろや　とあらば、鳥も囀るけしきなりけり　とも作るべきを、名はつかれたり　といへるより、合點なるべしと相うつり行くところ、味ひ見らるべし。響はうてばひゞくがごとし。たとへば

くれ縁に銀かはらけを打くだき

身細き太刀のそるかたを見よ

先師、此句を引て敎るとて、右の手にて土器を打つけ、左の手にて太刀にそりかくる眞似をして語り給ける。一句〳〵に趣のかはる事なれば、言語に盡しがたきところ看破せらるべし。

杜年曰、句の位とはいかなる事にや。去來曰、前句の位を知て附る事なり。たとへよき句ありとも、位應ぜざればのらず。先師の戀の句をあげて、いはく、

上置の干菜きざむもうはのそら

馬に出ぬ日は内でこひする

前句は人の妻にもあらず、武家・町人の下女にもあらず、宿屋・問屋の下女なりと見て、位を定めたるもの也。

細き目に花見る人の頬はれて
なたね色なる袖の輪ちがひ

前句、古代の人のありさまなり。

白粉をぬれども下地くろい顔
役者もやうの袖のたきもの

前句のさま、今やうの女と見ゆ。

尼になるべき宵のきぬ／＼
月影に鎧とやらん見すかして

前句、いかにも可レ然もののゝふの妻と見ゆ。

ふすまつかんで洗ふあぶら手
懸乞に戀のこゝろを持せたや

前句、町家のこしもとなどいふべきか、是をもて他はなずらへてしらるべし。

杜年曰、面影にて附ると云はいかゞ。去來曰、うつり・ひゞき・匂ひは附様の鹽梅也。おもかげは附やうの事也。むかしはおほくは其事を直に附たり。それを面影にて附るといふは、

草菴にしばらく居ては打やぶり
いのちうれしき撰集の沙汰

初は、和哥の奥儀はしらずと附たり。

先師曰、前を西行・能因などの境界と見たるがよし。されど直に西行と附けんは手づゝならむ。たゞ面影にて附べしとてかく直し給ひぬ。いかさま西行・能因の面影ならむとなり。又人を定ていふのみにもあらず。たとへば、

發心のはじめにこゆるすゞか山
內藏の頭かと呼ぶ人は誰そ

先師曰、いかさま誰そがおもかげならんとなり。面影の事支考も書置たり。見合すべし。

支考曰、附句は一句に一句也。前句附などはいくつも有べし。連誹にいたりては、其場・其人・其時節等、前後の見合ありて、一句に多はなき物也。

去來曰、附句は一句に千万也。故に誹諧變化極なし。支考が一句に一句といへるは、附る場の事なるべし。附る場は多くなき物也。句は一場の內にもいくつも有べし。

先師曰、氣色はいかほどつゞけてもよし。天象・地形・人事・草木・魚虫・鳥獸のあそべる其形容みな／＼氣色也。

支考曰、附句は附る物なり。今の誹諧はつかざるをよしとす。先師の句、一句もつかざるはなし。

去來曰、附句は附ざれば附句にあらず、附過るは病なり。今の作者、附る事を初心の業(わざ)の樣におぼえて、かつて附ざる句多し。聞人も又聞得ずと人のいはむ事を恥て、附ざる句を咎めず、却而よく附たる句を笑ふやから多し。我が聞るとは各別なる事も多かる。

去來曰、附物にてつけ、又心附にて附るは、其附たる道筋しれり。附物をはなれ、情をひかず附んには、前句のうつり・匂ひ・響なくしては、いづれの處にてか附ん。心得べき事也。

去來曰、蕉門の附句は前句の情を引來るを嫌ふ。たゞ前句は是いかなる場・いかなる人と、其事・其位をよく見定め、前句をつきはなして附べし。

先師曰、附物にて附る事、當時好ずといへども、附物にて附がたからむを、さつぱりと附物にて付たらむは又手柄なるべし。

宇鹿曰、先師、十七の附かた路通に傳授し給ふと聞。去來曰、遠境の門人の願に依て、附方を書出し給ふ。されど、後〳〵はせをが附方は、是にかぎりたりと人の迷ひならんとこれを捨らるゝ。其書出し給ふ分十七ヶ條とやらん聞えたり。是を傳受としたまふ事をしらず。大津にての事とやらむなれば、路通もし其反古を拾ひとりて人に教るにや。許六曰、此事をねがひたるは千那法師なり。

去來曰、附句は何事なくさら〳〵と聞ゆるをよしとす。卷をよむに思案・工夫して附句を聞むは苦しき事也。

去來曰、風は千變万化すといふとも、句体「新く「清く「輕く「慥なる「正く「厚く「閑なる「和なる「剛なる「解たる「なつかしく「速なる如レ此はよし。「鈍く「濁れる「弱く「重く「薄く「しだるく「澁たる「堅く「騒しく「古き、かくのごときは惡し。但し「堅きと「鈍なる句には善惡あるべし。

支考曰、附句は句に新古なし、附る場に新古あり。

去來曰、古風の句を用るにも場によりてよし。されど古風のまゝにはいかゞ、古体のうちに今やう有べし。

先師曰、一卷表より名殘迄一躰ならんは見ぐるしかるべ

し。去來曰、一巻、面は無事に作るべし。初折の裏よりなごり表までに、物數寄も曲も有べし。半より名殘の裏にかけては、さら〳〵と骨折ぬやうに作るべし。末に至ては互に退屈いできたれる物也。猶よき句あらんとすれば、却、句しぶりて出來ぬ物なり。されど末〳〵まで吟席いさみありて、好き句出來らんを無理に止るにはあらず。好句を思ふべからずといふ事也。

其角曰、一巻に我句九・句十句有とも一二句好句あらば、殘らず能句をせんとおもふべからず、却而不出來なるものなり。いまだ好句なからむうちは、隨分好句を思ふべし。

去來曰、附物にて附る事當時嫌ひ侍れど、其あたりを見合一巻に一句・二句あらんは又風流なるべし。

浪化曰、今の誹諧、物語等を用ゆる事いかゞ。去來曰、同じくは一巻に一二句あらまほし。猿蓑の中に、待人いりし小御門の鎰　も門守の翁なり。此集撰む時、物がたり等の句すくなしとて、粽結ふの句を作して入給へり。

去來曰、凡吟ある時は風あり、風は必變ず、是自然の事也。先師是をよく見取て、一風に長くとゞまるまじき事を示し給へり。たとひ先師の風なりとも、一風になづんで變化をしらざるは、却而先師のこゝろにたがへり。

杜年曰、發句の善惡はいかに。去來曰、發句は人のもつともと感ずるがよし。さもあるべしと云は其次也。さも有べきやといふは又其次也。さはあらじといふは下也。

杜年曰、發句と附句の境はいかに。去來曰、七情万景こゝろに留る處に發句あり、附句は常なり。たとへば、鶯の梅にとまりて啼といふは發句にならず、鶯の身を逆に啼といふは發句也。杜年曰、心に留る所は皆發句なるべきか。去來曰、此うち發句になると、成らぬとあり。たとへば

つき出すや樋のつまりのひきがへる　好春

此句を、先師の古池の蛙と同じやうにおもへるとなん、事めづらしく等類なし。さぞ心にもとゞまり興もあらむ、されど發句にはなしがたし。

野明曰、句のさびはいかなる物にや。去來曰、さびは句の色也。閑寂なる句をいふにあらず、たとへば、老人の甲冑を帶し戰場に働き、錦繡をかざり御宴に侍りても、老

の姿有がごとし。賑かなる句にも、靜なる句にも有ものなり。たとへば、

　花守や白きかしらをつきあはせ

先師曰、さび色よくあらはれたり。

野明曰、句の位とはいかなるものにや。去來曰、これも又一句をあぐ。

　卯の花のたえ間たゝかむ闇の門

先師曰、句の位尋常ならずとなり。去來曰、畢竟句位は格の高きにあり。句中に理屈をいひ、或は物をたくらべ、或はあたり合たる發句は位くだるもの也。

野明曰、句のしをり・細みとはいかなるものにや。去來曰、しをりは哀なる句にあらず。細みはたよりなき句にあらず。しをりは句の姿にあり、細みは句のこゝろにあり。是も證句をあげていはゞ、

　十團子も小粒にならぬ秋の風

先師曰、此句しをりあり。

　鳥どもも寐入てゐるか余吾の海

先師曰、此句細みありと評し給ひしと也。

去來曰、惣じてさび・位・細み・しをりの事は以心傳心なれば、唯先師の評をあげて教るのみ、他はおして明むべし。先師遷化の年、深川を出給ふとき、野坡問曰、はいかいやはり今のごとく作し侍らむや。先師曰、しばらく今の風なるべし。五七年も過はべらば又一變あらむとなり。

今年素堂子、洛の人に傳へて曰、蕉翁の遺風天下に滿て漸〱變ずべき時いたれり。吾子こゝろざしを同じうして、我と吟會して、一ッの新風を興行せんとなり。去來答云、先生の言かたじけなく悅び侍る。予も兼而此思ひなきにもあらず。幸に先生をうしろだてとし、二三の新風を起さば、おそらくは一度天下の人をおどろかせん。しかれども、世波・老の波、日ゝうちかさなり、今は風雅に遊ぶべきいとまもなければ、唯御殘多おもひ侍るのみと申。素堂子は先師の古友にして博覽賢才の人なりければ、世に俳名高し。近來此道うちすさみ給ふといへども、又いかなる風流を吐出されんものをと、いと本意なき事なり。

於暮雨巷　噓居士一音書

去來抄跋

崑岡之璞。非二人採一之。則誰知二璞之爲一玉乎。一日先生與二二三子一游焉。得二諸幽蘭之下一。琢而磨レ之皓ゝ乎。世所レ謂玉鏡也。使下對レ之者心在中塵埃之外上。則去來之功至レ是可レ謂發二輝千歳一矣。吾徒愉快。其在二於斯一。

井士朗 印 印

安永四年乙未三月

皇都書林

井筒屋庄兵衛
橘屋治兵衛

去來文

去來稿

去來文といふ集の草稿に御かゝり被レ成候よし、正門高弟の中にも和漢の才ありて行状甚よろしき人に候へば、ゆかしき事のみおほかるべきと、一日もはやく熟覽仕度存候。扨御作御きかせ、別而おもしろく覺え候まゝ存付を書添申候。蛇足の罪ゆるしあれ。可祝。

五月廿三日　　闌　更

崖　芷　樣

・

故ありて去來の文をひめるに、時の到れりけりとさくら木に鏤む。むべなる哉、德は猿みのゝ調、姿は獸にあらはし、蓑ほしげなる時雨の魂を、去來まめやかに、好く世の人にすゝめ侍る。

寛政三年亥仲夏

也足亭
岸　芷　自　序

印　印

去來文

前書略

右之御句どもの内に切字なき句多く見え申候。先切字を發句にいれ候子細を得心仕候而、其上にて切字なくてもくるしからざる句を、一々存候へばよろしく候。おなじくば切字いれ候へば、ほ(發)句たしかになり申候。切字いれ候て一句のすがた下品になり候句なれば、切字をぬき申候事御坐候。二ツどりにはいれたるが能候。たとへば、

辛崎の松は花よりおぼろにて

此句、切字なき事をくるしみ候て他書の集に一二書にて、

辛崎の松は花より朧かな

とつかまつり候。此かなの字にて一品の姿下り申候。はせを此哉を存られず事は候はねども、朧にてと申たる句の融(幽)遠なることを愛しられ、如レ此に候。切字なくて不レ叶ほ句には是非〳〵切字を加へ申べく候へども、切字なくてくるしからず句勢ゆゑ如レ此に候。猿蓑集に源氏を下ご

ゝろにふくみたる句有よし被仰下候。なるほど御目利の通に候。

　　隣をかりては　　夕がほ
　　待人入しは　　常陸の宮

かやう成事に存候。すべて此二句にかぎらず、猿みの集、草紙・物語などの事に存付あそばされ候句ども所々に御座候。源氏などの事下々心にふくみ被遊候事くるしかるまじきやの御尋、御尤に奉存候。成程くるしからず候。二ッ三ッと出し申候。かせん(歌仙)・五十句と並べ申候句のうちには、いか様にも古き草紙・物語など一ッもふたつも見たるはゆかしく奉存候。他流には物ぐさきとてつかまつらざる人も候哉。しかし、それは書物のまゝにて申ゆゑによろしからず、故事なども我物にいたさず、面影にて仕らんに別條有まじく候。物ぐさくあまくなり申さぬやうに可被遊候。當流に面影をもつて句を付申候事御座候。是は古人のしたる事をその通りに句に仕候へば故事にて御座候。其故事とはちがひ申候。たとへば書にも文にもかつてなき事も、その人の風勢〳〵かならず如此成べき事をとおもひよせ可仕候。譬ば、

　　草庵に暫く居ては打破り
　　　命うれしき撰集の沙汰

此句は西行か、能因がごときの人の面影と聞え候。

　　稲のはのびのちからなきかぜ
　　發心の初にこゆる鈴鹿山

是は實ッ西行をおもへよせたる句にて候。西行行脚のはじめ東國へ下り、すゞかにて略す。是を、

　　行脚して哥讀初る鈴鹿越

と仕候ては一句もあしかるべし。跡々も付がたく候。右の句どもは西行の面影うつり申候。

　　すみ切ッ松のしづかなりけり
　　萩の札すゝきの札をよみなして

是、撰集抄の故事をとり申候。さるみの集撰びして翁へ内覽にいれ候所、古き草紙・物語の事などおもひよせて發句かくとて、

　　粽(結)巻片手にはさむ額髪

是も源氏のうちよりおもひ寄られ候。是等同門の內にも

嫌申候人も候へども、翁の思めし如レ此御座候。句躰によりふるび付候は、はいかい第一の病にて候。

手もつかず朝の御膳のすべりけり
わらづを直す墨の衣手

此句、吉野の皇居などに分入し人のさすがと思ひ寄被レ成候へども、それも御こゝろに落ずよし御尤に覚候。是はたゞ花山法皇・吉野の帝の行脚などを思召れ候と御聞可レ被レ遊候。御膳に手もつかねば、法皇のわらづを直す人はその従者と御聞可レ被レ遊候。かく法皇の熊野行脚には、はかぐ\しき人もつれそひ參らせず候へば、取分此法皇のおもかげに仕候ては付たる句と被レ存候。惣じて面影の句には先きに人を立候而、その人の面影を仕候事御座候。亦是はたれぞが面影なりと申候句も御座候。其句などはいかさま古き草紙・物語などのうちに寄ならむ。すべて面影の句は落涙可レ仕句ども多く御座候。此儀は必ゝ他へ洩し被レ遊間敷候。

押あふて寐ては又たつかり枕
火とぼしに暮ればのぼる峰の寺

ケ様の句どもは、たれの人ぞの面影に立申候句に御座候。尤、他流にもケ様の句ども御座候へども、何心なくしたると心を寄てしたると、付所格別に成申候。又句作にも各別の味出申候。古詩・古歌を寄候事、一段せめあげ候而とり申候。

柴門流水依然在

此句をおとり被レ遊候而

梅が香や奉行をおくる門の口

此句叶可レ申かと御尋御尤に候。しかしながら、此句は只風景自然に見來處の味じ同じさゆゑに、景氣も見聞も違ひ候へば叶がたく、只今仰に寄存寄申候。依然在とまで古人の申たるを、水衣にしづめて見たるは下慢りかと申候。

陽炎や流れにうつる柴の門

此五文字すゞしやと可レ仕歟。是なむ叶不レ申哉。すべて古哥・古詩を取り申候事、其情をとり候ても景をとり候ても、一段せめ上て取申たるがよく候。先年下拙妹千子と申ものが鈴鹿にて、

小鳥さへ渡らぬほどの深山かな

是王荆が佳句に、一鳥不レ鳴山更幽なりと同じきと存候。

先年下拙句に

猪の寢に行かたや明の月

此氣しき面白さに自讃し、翁へ見せ申候所、我に翁、暫く物をも不レ被レ申候ゆゑ、拙者心に猪の山へかよふ氣しきしられざるやと、重而其風情を咄し候へば、翁申されしは、されば其氣色の面白き事は古人も、

かへるさて野邊より山へ入る鹿の
あさ吹おくる荻のうはかぜ

と讀候へば、暫く俳諧の手がらなきやうに存候ゆゑ、案事申候と答へ申されし。中〳〵跡吹おくる荻の上風と讀たるけしきに合しては、明の月と申さむは、俳諧に月見たる場のより〳〵口をしくと被レ申候ゆゑ此句をすて申候。すべて古哥などをとるには、一しほ風情も姿もせめ上て申度事ニ候。

翁の當歳旦に

蓬莱に聞ばや伊勢のはつ便

慈鎭和尚の、いせにしる人おとづれてうれしきの此いせ便りの出所、蓬莱にて先、初の一字、翁の魂奇妙と被レ存候。

鐘隔二寒雲一聲到遲

此こゝろに思へよりて、

華の雲鐘は上野か淺草歟

はゝきゞのその梢さは見えざりし
さくらは花にあらはれにけり

此こゝろを、

切かぶの芽立つを見ればさくら哉

また、

梅が香をさくらの花にやどらせて
柳のえだにさかせてや見む

此こゝろを、

梅折て柳の枝にまたがせむ　其角

雲花のまがふ事を

峯の花少しは雲もまじるべし　野水

またがせんと謂、まじるべしと謂、切かぶ・上野か淺草か、と皆己がちからを古詩・古歌の上にせめて用ひ申候。さなくては詩を歌をほ句を戀したる句までに候。併あまり古

詩・古哥を用ひ候事、强て好み申事御座なく候。尤嫌も不レ申候。ふるび付申さぬやうに仕候事、右も左も大事に御座候。下拙も定家卿の煙十文字におもひより候て、

時鳥啼や雲雀の十文字

又、越人も定家卿の猪の戀のうたによりて、

うらやましおもひ切る時猫の戀

おもひ切時をうらやませるは、越人の秀作と被レ存候。只ほ句も色々様々の姿御座候へども、猿みの集に翁の句御座候。可レ被レ遊二御覽一候。夫を一躰に心をとり候へば、却てほく仕がたく候。只跡はかなく、さらりと仕候を第一と可レ被レ遊候。句の姿はいかやうになりと被二仰出一可レ被レ成二御覽一候。

腹這ふて草あたゝめつ雲雀筒

惣而此御句は可レ被レ遊二御工案一候。ケ様に被レ成候ては、此方よりわざと草をあたゝめむために、腹這たるやうにきこえ申候。おなじ事にて、

腹這に草もぬくむで雲雀筒

と被レ遊候へば、腹這て自然と草もあたゝまるにきこえ申候。以上。

如月十三日　去來

浪化公

暮る日や花の光りのたゞならず　岸芷

此けしき千金にかえがたきか。

すがたまで見ゆるや晝の時鳥　丶

鶴に乗て揚州ののぞみたりたる人なるへし。

戀鹿の川わたり行あしたかな　丶

鳴止て鹿ふたつ行あしたかな　と予先年深川の庵にて探題の句あり、戀鹿の面白みに思へ出る。

むしの聲止時草のあらし哉　丶

秋の野のけしきさもあるべし。

晴る時夜に入る雪のあかり哉　丶

雲箋たくみなくしてすら〱と聞ゆ、珍重。

右

よどぎの詞

おもしろやことしのはる(春)も旅の空　と我叟のすさび。何の事やとえさらぬも、ひとつのむかしとなりにたり。あるひはおほゐ(大堰)の川の河岸にせふえふし、あるはあらし山の高根に枕を高くして、おほうちやまの麓なりとよめるむかしのきみのうた(歌)もゆかしくて、ひきゝおのれをみそひともじのかたかたを、口より出るまゝに、かくほどに〳〵下ゆく水は鳥をうつし、空ゆく雲は花をうつして、虹とたち霞ときえて、雨を降らしむも、のどかなる日のあゆみにうち添つゝ、杖を引のたよりなんあれと、ちさき瓢に酒いれて、

春や今水に影ゆく鳥と雲

として我庵にかへるさと、おもひしゆふべ、ひとつのやどりをみこみて、爰も春のくれつかたよ。たれ〳〵のすゐのよをしも、雪につみてすみ(住)すてしぞととぶらふに、さにはあらで、いとわかきおうなのふたりすみつゝ、けさふすべき風情もなかりしが、手がひの虎に手枕をおなじうして、なにかつぶやきぬるに、あやしの聲や。いでものとはんと、かの杖もすてやりて、なりひらのひら〳〵と垣間見してぞみぬるに、うき世がましくみえゆくほどに、軒のもとさわがしくて、いかゞすべきやうもなしと、かのふたりの女にかはるすさび、

うき友にかまれて猫の空ながめ

などいひすてゝ、やゝわが庵にいりぬ。春もくれゆく空と遠きたづきの友より來ぬる文どもを、ひとつの籠にとり收めて、ことし夏は翁にならひ、紙のかさなどはりぬらんよと、はるほどに〳〵終にいはほもおよばざるほどのかたきものとなり、小まちか玉章(たまづさ)をもてつくれるつちの佛とひとしく、うれしきの事よとひとりゐみてぬる夜、まくらのもとにいぶかしのびく(比丘)ひとり來たりていふやう、なんじ(汝)いかなるゆへにや、紙はりの小がさをつくりながら、小まちが爲の佛に似たりとおもふぞ。我はかのこまちが戀のやつこたりしものなれり。あはれかさと佛のうたよまむと、かたへによりていふをきけば、

中〳〵に紙くふ虫はなかりけり

ひとへ衣の夏は來るとも

ときくと、夜のあくるごとくきえぬるに、われもこの人のなつかしくて、道のほどふたまち・みまちを過て追(お)はへ出るに、その俤もなかりしが。とても今はあふべくやうなしと、亦かの張がさをいだし、かしらにいたゞきて、いざやこの人を、このよにてしたふ心出よと、

張がさに雨もいとはずほとゝぎす

として都のまちをはなれ、日もくれ竹のふし(伏見)にゆきて、友とすべきひともやあれ、夜と共に語らんと、とひもてありきぬるに、柳の葉しげりあひて、そこともわかぬ川のきしに、小みのを(蓑衣)かつぎしたるしろきかしらの者ひとり、舟にのらば伴はん、いざ來よかしと手まねきしつるに、これもまたあやしのものならん、さきの女にこりずまの浦邊もしたはんと出し身なれば、外のものには心もかけじと、心のうちに心う(得)るといへども、ひたすらに來よかしとよばゝる聲のふとりきぬれば、きくにしのびず、かの舟にとりのりて、月の出しほなどうちながめゆくに、此者のいふやう、我は黑ぬしにつかへしものなり。昔、哥のために心をうばゝれ、戀のために身をすてんとせし我君をとはんと、此處に來て此道の輩をまちまふけ侍りしが、さちにその人をえたり。いざや、此夜を語りつくして、我おもひをやぶりてんよと、寐んとすればゆ(搖)ぶり、起んとすればうちこかして、語れよ〳〵とすゝむるに、すべきやうなしと、やたての墨して、

戀のためにあらず旅にやるひざがしら

とすさびすてゝ、あくれば浪華の川岸にあがりて、あさい(朝食)などとゝのへぬ。けふは亦久しぶりなるすみよしの神にまふでゝ、松かげをたのみ、すずみなんどして日を經んとゆくほどに、はやすみのえのすみよげに宮井年ふり松ふりて、風や波に吹さらすものゝ數しらず、我生涯のたのしびは爰にあらむと、ひとりごちして、筆とり出しやすらふに、かんなぎ(巫)のひと〳〵のわくとなく、ふるとなく出來るほどに〳〵くれゆくまゝに、ねぐらをたづぬるむら鳥のごとくうちむれし。

立ありく人にまぎれてすゞみかな

としてその夜に此地をはなれて、亦なにはづの宿にかへ

り、是よりはいづくに越んとおもふに、いでや、すま・あかしの月に秋を忘れて、はては長さきの津にゆかむと心ざしつゝ、はりま路の浦〳〵を見つゝゆくに、松かげよりすかせば、なにしあふ淡じ(路)しま山なりき。

あきの水淡路島根をかこひけり

それより舟にのり、亦は馬をかりて日を送りぬるに、きゝおよぶなどころのみならず、しらぬ野山もいとなつかしきあきの色〳〵を取あつめてん、あら心よし〳〵、よの中に秋といふものゝあはれは、われ・ひとのしのぶゆふべなるに、今は何の神の道びきたまふにや、かゝるたび路のうきをわすれて、うれしやとおもふの外、むかし平氏の人〳〵の命をさらす所〳〵にあきをしたひて、いとかなしき事どももちゞになり來て、

みちかくる月になみだぞ須磨のあき

として懐におさめ、いでや長さきの津にゆいて、しるひと〳〵をとひ侍らむと、わらづの緒を薄(すゝき)につきてゆきぬるに、爰は長さきのみなとなりと、えしらぬから(唐)ことなどうたふ遊女のわれをみて、ひのもとの人をみよ〳〵、髭もなし、亦かみも短かし、あらいぶかしのものならんと、より(寄)てはわらひ、さりてばゆびさし、酒を乞へば湯をくるゝ風情も、から・やまとの事のたがひを、おのれしり顔にあざけぬるやとおかしく、まづやどをかりえて、此みなとに卯七といへるすきびと(好人)ありやととふに、此やどのあるじなりと、めしたく女のいへるに、うれしさ海山をへしにたくらべて限りなく、

道を經て散り來し嵯峨の木の葉哉

として、これをあるじにあたへてんよと遣したれば、やがて卯七は出來りて、盃などあるじまふけぬるに、何となく物の音さはがしげなるが、鷄の八聲ともろ共に夜明れば、夢も覺たりき。これより南にゆくの心せちに出たり。

長さきのながきも訪はん雲霞

落柹舍のやどり　去來

元祿みつのとし春

枕もとの硯に墨して眠り〳〵にかく。

山中問答（やまなかもんだふ）

北枝著

貴書辱拜誦、清和之節愈御多祥珍重〻〻。拙無異。例之物草いづ方へも一向御不音のみ。偖今般山中問答上梓御思召立の由、此義は先年、也同老ゟ粗承候。實ニ蕉門壁中の書ニして、此道の至寶申迄もなし。天晴之御盛氣、鼓舞雷同不ㇾ過ㇾ之候。就者小序御申越、致ニ熟思一候處、此ニ一言を加へ候はゞ泥をもて玉ニ彩るがごとく、返而古人を穢候罪を不ㇾ免候へば任ニ愚意一兼候。猶當時名家ニ御求候はゞいか程も可ㇾ有ㇾ之候へ共、矢張無ㇾ之方壁を全するとも可ㇾ申哉。斯申も道をいやしめざるの本意迄に候へば能〻御了簡被ㇾ下度候。委曲は也同老へ申入候間、可ㇾ然御談し可ㇾ被ㇾ成候。先は貴答迄匆〻不一

四月十五日　　乙　也

砍江雅兄
鶯村雅兄

山中問答

俳諧大意

蕉門正風の俳道に志あらん人は、世上の得失是非ニ惑はず、烏鷺馬鹿の言語に泥むべからず、天地を右にして萬物山川・草木・人倫の本情を忘れず、落花・散葉の姿にあそぶべし。其すがたにあそぶ時は、道古今に通じ、不易の理を失はずして流行の變にわたる。然る時は、こゝろざし寛大にして物にさはらず、けふの變化を自在にし、世上に和し、人情に達すべしと、翁申たまひき。

一　正風俳諧のこゝろは萬物の道・よろづの業にも通ひて、一端にとゞまるべからず。世に俳諧の文字を論じ、誹は非の音にて俳の字然るべしといへる人もあり。或は史記の滑稽をひきて穿鑿の沙汰に及ぶものもあり。しかれども吾門には俳諧に古人なしと看破する眼より、言語にあそぶといへる道理に任せて、誹・俳の二字とも用ひて捨

ず、他門に對して論ずることなかれと、翁申給ひき。

道理と理屈との二種ある事

一　俳諧の道理に遊ぶ人は俳諧を轉ず。はいかいの理屈に迷ふ人は轉ぜらる。世に上手・下手の論のみして、俳諧といふ道の所以をしらず。蕉翁は正風虛實に志ふかき人を、吾門の高弟なりと譽給ひき。

一　虛實に文章あり、世智辨あり、仁義禮智あり、虛に實あるを文章といひ、禮智といふ。虛に虛あるものは稀にして、正風傳授の人とするとて翁笑ひ給ひき。

私曰、虛ニ虛なるものとは、儒に莊子、釋に達摩なるべし。

一　いにしへより詩といひ歌といひ、道の外に求るにあらず。然るに、よのつね俳諧の文字にまよひて、和哥に對したる名の道理を辨へず、頓作・當話の俚俗に落て、狂言綺語とのみおぼえたる人もあるべし。これあさましきことなり。

一　はいかいは道草の花とみて、智を捨て愚にあそぶべしとぞ。

一　俳諧のすがたは俗談・平話ながら、俗にして俗にあらず、平話にして平話にあらず、そのさかひをしるべし。此境は初心に及ばずとぞ。

一　世人俳諧に苦しみて俳諧のたのしみを知らず。附句の案じやう趣向をさだむるに心得あり。

一　工夫は平生にあり。席に臨では無分別なるべし。

一　初學の人切字に惑へり。發句治定の時は切字おのづから有べし。

一　面八句并四折に曲節地の配りある事。

一　發句は發句の姿あり、平句は平句の姿あり。發句は大將の位なくしては卷頭にたらず、平句は士卒の働なくしては鈍にして役にたゝず。先このこゝろ得第一也。

一　脇の句は發句と一体の物なり、別に趣向・奇語をもとむべからず。唯發句の余情をいひあらはして發句の光をかゝぐる也。脇に五ッの附方あれども、これみな附やうの差別にして、外に趣向を覓るにあらず。

一　第三は或は半節・半曲なり。次の句へ及すこゝろ、第

三の姿情なり。て留は何の爲ぞと工夫すべし。て留をはぶきぬれば、何留にてもよきぞとなり。俳諧一韵にて、四折は面にして表裏の句あり。歌仙にていはゞ、名殘の表はあそび處としるべし。

一　初折は地の句を專らにして奇語・怪言をこのまず、直なるべし。戀の句などそのこゝろ得あるべし。

一　二の表に至ては半地・半節也。初折の禮法をすこしゆるめたる心なり。禮の用は和といへるがごとし。

一　三の折は俳諧のあそび處也。もつぱら花やかなる句を求め、をかしみを案ずべし。されど和して禮を忘れずとは、正風の姿情とこゝろ得べし。

一　名殘の折は一卷の首尾なれば、その坐を屈せぬやうにすべし。匂ひの花・擧句にいたつて、高貴の人をまたせぬるは不禮也。俳諧は言語の遊びにして、信をもつて交る道なり。妙句に一坐を屈しさせんよりは、麁句にその坐の興を調へよとなり。一卷の變化を第一にして滯らず、あたらしみを心懸べし。好句の古きより、惡き句の新しきを俳諧の第一とす。

一　句文に風雅といふことを忘るべからず。さび・しほり・細き・しほらしきといふは風雅なり。此こゝろがけなければ、或は平話の句はたゞごとになり、或は無骨、或は野鄙に心いやしく、又道理に落て俳諧連歌の本意を失ふこと、道に於て甚太切のことなり。

一　俳諧は謡ひものなること、こゝろえべし。名聞の爲に風流をおとし、物好みして德をうしなふと、常にいましめ敎へ給いき。

山中や菊は手折じ湯の匂ひ　翁

山中溫泉にして翁の物がたり給へることゞも、あらく書とゞめ侍る。

元祿二年己巳秋　　金城　北枝　誌

附錄北枝叟考

附方八方自他傳

硯にむかひすだれ揚つゝ　自

梨の花さき揃ふたる夕小雨　場

雉子におどろく女ひとむれ　他

箇様に中の句人情なき時は、自他をふりわけて句作すべし。いか様に轉じても中の句を兩方にてみるなり。

おくり火に尼がなみだやかゝるらん　他

まつ風遠く水のゆくゑ　場

さつぱりと醉のさめたる明屋しき　自

これも自他をふりわけたるなり。但し面に句つゞき、四五句も人情なき句附たるときは、今一句のばして附るは常のことなり。

落瓦あらしは松に鎮りて　場

みなわすれたる明がたの夢　自

抱籠の手ざはりもはや秋ちかき　自

又

看病の粥ふきさます小くらかり　他

ケ様に人情なき句へ自の句附たる時は、その人の自の句を附るとも、別に人を出して自の句よりみせるか、物いはせるか、思ひやらせる歟に句作すべし。此外附方なし。

並木あらはに松の露ちる　場

入月に痩子抱たる物もらひ　他

わきひらもみぬ鍛冶が勢ひ　〃

かやうに他の句に他の句をむかはせて附たる時は、見て居る人は別にありて、二句ともに見手とつくるべし。尤人倫・人情の差別はなし。よく〳〵前句の他を辨へて附べし。

顔にみだるゝ髪の赤がれ　他ノアシラヒ

是はその人のあしらひなりとても、物もらひの自他は附ぬものゆゑ、これも見て居る人は別にありとしるべし。又

聖靈おくる朝のせはしき　自

是は物もらひをみてゐる人の自の句なり、是を自向ひといふ。此外附方なし。

あたらしき草鞋に布施のあたゝまり　自

いのちなりけり洛外の春　〃

見よかしにさくらがもとの女房達　他

ケ様に自の句に自の句附たる時は、その自の句の人に見せるか、物いはせるか、思ひやらせるか、如レ此別の人を出すべし。是も自より他へうつる句法也。能々考ふべし。この外附かたなし。

薬のなつむ假（本ノマヽ）つれなき　自
一言もいはで日中の御垣もり　他
こぼれ松葉を手まさぐりゐる　アシラヒ

又

ちらり／＼と屋根ふきの廛　他

かやうに自の句に他を向はせ、またその句に他の句をむかはせるはなし。能々打越しへもどらぬやうに工夫せねば、轉じがたきもの也。尤二句の間よく／＼向ふやうに句作すべきなり。此外附方なし。

ひとつづゝ手本もらふて粽結　他
叱る局にわらふつぼねに　他
よろ／＼と裾にむしろの下向道　アシラヒ

かくのごく他の句に他の句むかひたる時は、又他のあしらひを附るなり。あしらひなればくるしからず。三句共に見てゐる人は別にありとしるべし。又

染ぬきをおもひのまゝにうり課せ　自

ケ様に自の句を向はせてもよし。此外附方なし。

くじら突一二の銛をあらそふて　他
無分別なる顔に雪ふる　アシラヒ
あのやうな小庵かなとおもふまで　自

ケ様に他の句へ他のあしらひ附たるときは、あしらひの句を何ものと見出して、自の句を向はせるなり。見出さねば二句からみになるなり。是をからみ自向ひとはいふなり。

襷ながらに嫁のすり臼　他
櫛いれぬ髪にも艶は生つき　他アシラヒ
おはりに成て公事が噯ぬ　自

如レ此、中の句を公事人とみて、自の句附たるあり、よく／＼考ふべし。此外附方なし。

花守に花のたにざくのぞまれて　自他
さてものどかにさても黄鳥　時節

水上は懺悔〻〻とぬるませる　他

かやうに自の句も附がたく、さりとて花鳥も出たれども、そこに居る他の句をも附たると心得べし。

身は雲水のさま〴〵の怀　自

笘ぶねに寐られもやらぬ闇深き　、

女の聲でまよひ子をよぶ　他

ケ様に付たるを舟と見て、ふねの句附たる時は、陸人を向はせ附べし。左なくては三句船中にありて、いか様ニ作りても轉ぜぬなり。

編笠に凌げどゆふ日かゝはゆき　自

おくれしつれに心ひかるゝ　、

たばこの火くれて內儀はもとの機　他

かやうに連といふて、そこに居ぬ人はやはり自の句にして、他の句を向はすべし。

此書此外附方なしとあるは、人情にて附込する事なきといふ附かたをいふなり。句作廻らぬ時の事也。幾句も人情つゞきたる時は、其場のあしらひ、時分・天相など見合せ附べし。附こむ事をしりてのばすはよし、つけられぬとて遁句するは、返〻未練也と翁仰られたり、穴賢。

右三年之工夫を以て蕉翁ニ爲レ見申け處の一法也。假初に他見をゆるさず、執心の人ニ相傳すべし。多分は祕すべし〳〵。

元祿五年春　　翠臺北枝

此山中問答の一書は、おのれ壯年の頃、ある人のもてるを寫し得てより几上を放さず。一日秋江・鶯村など來り、つく〴〵うかゞひ見ていふ、祖翁の餘澤世に溢れて、殘墨寸語といへども刊行せざるもの稀なる中に、かゝる金玉の敎へをもらせる事惜むに堪たり。我〻に與へなば、とみに木にのぼせて、普く世にその光りをかゞやかせんと、雨子が乞ふにまかすことゝはなりぬ。

也　同

京堺町四條上ル
御集冊摺物所
近江屋又七

雅文せうそこ

許六
野坡

消息序

およそ評論は其世に定らずして、後にけせる事おほし。たとへば杜少陵は古今獨歩の詩聖なれど、生涯をば更にもいはず、十數年の間其光あらはれず、やう〳〵中唐に及て、退之・微之が輩はじめてこれを推たとびしよりこのかた、宋・元を經、明に入て後にぞいよ〳〵出て、いよ〳〵委う大虚の日月のごと、何國もゝゝ輝わたりて位二なふ定まりはべる。おもふに萬の道かゝる類こそ多からめ。今此一帖は蕉門、許六・野坡、各うけ傳へぬるはいかいの道を論ぜる再應の書音也。よまむ人よきはよく、あしきはあしと公にこれをとらば、發明する事も亦復少からじ。あるひと余が評閲せんことを請ふ。とみに筆をとりて思ふ事をあからさまにかいつけゝるちなみに、其緒をもたて初はべる。

洛　滄浪居主人

正月十一日年始之御狀忝并歲旦帳被ニ贈下一感心不レ少候。當年諸國隨一と門下の者ども評判申候。是程の御手柄は可レ有ニ御座一事と存候。三ッ物先達而進申候。定而御一覽可レ被レ下候。

文段、野坡ヲ直下ニ見タリ。

一八ッ橋集御取立發句の儀、被ニ仰下一門下しかぐ〳〵句を持合たる人も無レ之候。愚句とても其通りに御座候。俄普請一句遣し候。御氣に入候はゞ御加入可レ被レ成候。

八橋を十ヲもかけたる田植かな

一舊冬三河へ御越、歸路御乘打殘念の事に御座候。併春中御越可レ被レ成候由、いづれに相待申事に候。

一驚の難陳無益之儀と存候へども、同門の輩目明一人も無レ之、ちからを落し申候。

前ニ一應贈答ノ文アリシ体也。サテ惣ジテイヘバ、許六自讃ニ、芭蕉ノ道統ヲ次シハ我一人也ト、筆ニ顯セルニハ似ズシテ、生涯ノ句深婉ナラズ。學問モ相應ニ有ナガラ、論ハ痛ク偏固ナルヲモテ、日比イブカシク思シニ、此贈答ノ書ニモ、如レク形ノ其意ヲ押立テ論ジタリ、高慢ニ暗

マサレシニヤ。

先師の申されたる鶯の兩句は、季の取合せ第一にて、心の通ふ所を結び合せたるものに候。殊に餅に糞するといふ横平天然有合所、別て奇妙と申ものに候。惣別先師の句は季と季の言葉の取合せたる句十に七ッ八ッは是にて御座候。其餘の句も二ッ取合せ、あるは物語の言葉又は故事等もみな〳〵取合て、一句によく縫目を合せたるものに候。季と季ふたつ合する事はいとやすき事に候へども、先師生前の門人に一人も是をする人なし。死後猶以ての事に御座候。翁の妙は此所に候。生前に此所よくしりて仕候もの我等一人にて、先師の許し申されたる事も此所の事に御座候。翁の雜談に、日蓮之御書とて、新麥一斗・竹の子三本・油のやうな酒五升、南無妙法蓮華經と回向いたし候と御座候由物語申され候。我等返答には、御命講の五文字は是にてなされ候や、新麥に竹の子は季と季のよき取合せものにて候と申候へば、油斷して既に汝にとられ候とて〽新麥や竹の子時の草の庵　と作りわれらに給り候。季と季の取合せ心の通ふと申所は此所に御座候。鶯に餅・柳に鶯のかよひも皆々此所にて致され候句に候。此場所を替て梢の鶯となされ候は、少も鶯にこゝろの通ひ無レ之、人〳〵聞候てもはつと申事無レ之候。人の案じ申さぬ所を致し申とて、心のかよひなき事を先師は是を行過とて嫌ひ申され候。千那・李由等常ゝしかられしも是にて御座候。むかし更衣の朝、我等旅宿に逗留致され候時、殊之外いつ〳〵よりも朝寒く、小袖ふたつかさねても冷し年にてありしに、其朝紙帳賣、表を觸れて通りしに翁の曰、行過るといふは是にて候間能心得申さるべく候。人の賣ぬ先に賣取可レ申と觸候へども、人〳〵餘寒にていまだ冬の心をわすれず、蚊の事なぞ存寄も無レ之候。蚊の出出合がしらに人の賣り申さぬ先に賣申さねば、人ゝはつとは不レ申、いにしへの哥仙達の正風體とて詠ミ給ふ哥も此所に御座候。家隆卿、初秋の風の涼しさを詠ミ夏をわすれたる哥に、〽風そよぐならの小川の夕暮は御祓ぞ夏のしるし也ける、ときのふの御祓を其儘證人に立置、夏を忘れたる事をよめる哥也。〽撫子のあつさわするゝ野菊かな　又、葛の葉の裏を證人に立たる句に〽葛の葉のお

もて見せけり　と云霜の作、表見せけりといふ所を世上に秀逸と申候。是は天然有合たるものにて、萬に初霜の心の通ひを第一に骨折申されたる所に候。諸人不レ存候。最一句所望いたしても季と季の取合せ、心の通ふものは人作にては翁にても自由に成り不レ申候。心に不圖うかみたる季と季のかよひにて御座候。名所に名物の取合せも此格にて御座候。〽津の國の難波の春は夢なれや芦の枯葉に風わたる也、難波に蘆、奇妙にて候。いづれの草木にても一年のはやく過行き、枯葉に風のわたるは同じ事にて候。此哥は芦にてなければ人もはつと不レ申候。〽鎌倉を活て出けん　と云松魚の作とても、生て出けんの言葉奇妙と世上には申候へども、此秀逸は初鰹に鎌倉のかけ合せ心の通ひ、天のあたひにて御座候。かさねて申候ては翁たりとも成り申さず候。〽汐干の柳　〽春雨に蜂の巣　〽初雪に水仙の葉等、皆々此通ひ一種にて御座候。無益の御返答に候へども、行過の御取あやまり其所にては無レ之候故次手ながら申候。かやうの事は文通・筆談にては盡ぬものにて御座候。かさねて御越の時分口上に可ニ申盡一候。

以上。

許六、蕉翁ヨリ受傳タル大事ハ、季ノ取合第一ナリト云々。按ズルニ、聖人ノ弟子ヲ教玉フニモ、各其才ノ近キニヨリテ、忠孝仁智等ノコトヲ答示サレシ詞ミナ異ナリ。定テ芭蕉モ其意ヲ以テ、許六ニハ斯ク語ラレタランヲ、專一ト心得シニヤ。今ニ至ルマデ彦根派ヲ習ル人、スベテ掛合ナラデハ發句ナラズト云フ事。去トテハ頑ナニ覺コミシ物哉、コレヲモ一躰トハスベシ。此外ヲ悪トスルハ、大ニ僻事ゾ。家隆卿ノ哥ヲ初秋ノ作トシテ、六ケ敷解ヲナシタルハ何ゴトゾ。童スラソラニ詠ズル歌ヲ、イカデ秋トハ取ナセシヤ。新勅撰夏ノ卷軸ニ入タレバ、委ク論ズルニ及バズ。難波ニ芦奇妙、初鰹ニ鎌倉ノ掛合、天ノ與トハ、アマリニ虚氣タル申ヤウ、野坡答一々可ナリ、許ニカヽラズ。

二月六日　許六

野坡丈

前文略

一先師の發句、季と季取合せたるが十に七ッ八ッもこれあ

り、心の通ひ第一のよし、其段は初心の人といへども此場所よく存候。此場所調はずしては發句に成不レ申候。しかれども句はしまりを第一にして、新しみを願ひ申事に候。取合せものを尊しとは存ぜず候。取合せなくて一物に仕立候句は骨折れ、初心の及ばぬ所に候へば大方取合せを格式のやうに致し候。先師の取合せ、さらに一等には申されぬ事に候。又下の七五・上の五七に發句調ひし句は、五文字に骨折の事に候。上に五もじを置句に成あり、下に五文字を居ヱ句に成もあり、先師の取合せは一物同前、只今の取合せは別々になり候。句あまた御座候。翁在世ならずといへども此道三十年執行致候得ば、大方埒明申事に候。迷ひては此後百年を過るとも解申間敷候。人丸・貫之・杜子美・李白に後の人及ばずといへども知る事妙也。天下の俳者よき句は能聞分申候。御油斷なされまじく候。取合にも一物にも達道の人には此難なし。

余常ニ思ラク、蕉門高名ノ中ニ、野坡ハ學問アリトモ見エズ、又俳オモ働カズシテ、外ノ人々ヨリ餘程下ナリ。シカモ長壽、元文ノ頃マデ存生ニテ、其時分ノ句々ハ、蕉翁在世ノ比ノ句トハ、遙ニ惡ク覺ユ。淡々ガ或人ニ向テ、野坡ハ下手ナレドモ老人ナレバ尋ネモセラレヨカシト云ケン、實モト。然ルニ今此問答ヲ見レバ、十ニ八九野坡ニ理アリテ、風雅ノ意ヲヨクハ得タリ。中ニモ〵取合にも一物にも達道の人には此難なし云々 此等ハ的中ノ詞ナリ。

一鶯ニ餅の取合せ奇妙と仰られ候。更にさやうならず候。餅に糞するといふ七文字ならでは益なかるべし。神妙に置給へる故、是只自然の作と聞え侍る也。鶯に餅を取合せ候事は此後も有べし。餅に糞するとはふたゝび申間敷候。是七もじ句神なる故也。

許六ハ鶯ニ餅ノ取合ヲ妙トシ、野坡ハ糞スルノ詞ヲ神也トス。双方トモ師ノ句ナル故、尊ブ所斯ト見ユ。余思フニ、世人芭蕉ノ句トイヘバ、悉ク妙絶也トスルコト怪ムベシ。古ヨリ詩歌・連哥ノ達人トイヘドモ、作ハ時ニヨリ、事ニヨリ、氣ノ王スルト、沈ムトニテ、出來不出來アルハ云ニ及ズ。芭蕉ニ限リ其事ナシト云ベキヤ。コレハ名ヲ怖テ可否ヲ分得ズ、胡椒ヲ丸ル呑ニセル類ノ云コ

ト也。故ニ蕉翁ノ句トテモヨクヨク見ワケ、地句ナ是非ノ辨ヘナク鏡トハスベカラズ。此鶯ノ句モ、サマデ佳趣ト云ニアラネバ、强テ論ズベカラズ。サレバ西行モ、古今集ノ歌ナレバトテ皆々ヨキコトナシ、ウケラレヌ歌ドモアルナリト云々。又定家卿ノ筆ニモ、上手ト世ニ云ル、人ノ歌ナバ、イトシモナケレドモ譽合ヒ、イタク用ヒラレヌ類ノ詠作ナバ、拔群ノ歌ナレドモ、結句難ナサヘ取ツケテ譏リ侍ルメリ。只主ニヨリテ、哥ノ善惡ナワカツ人ノミゾ佽メル。誠ニアサマシキコトト覺玉ヘル。是ハ偏ニ是非ニ迷ヘル故ナルベシ。下略新麥ニ筍ノ句モ亦同ジ。

一柳のうしろ藪の前、是も鶯に柳の取合は幾度するとも難なし。柳のうしろ藪の前と所をさし佽事、かさねて檉のうしろ杉の前とも申されまじく佽。鶯に柳は其比もふるく佽へども、かくのごとく句作り給へる故、あたらしみ第一也。尤、柳・藪は道具にして外の木草といはんよりは、其場に有合の取合せもの也。たとへ柳に鶯を結び佽とも、かくのごとく致し佽へとの教也。後の作者猶鶯に柳のあたらしみをさぐりて手柄あるべし。

一油のやうな酒五升は勿論日蓮の御書より出たる作也。酒五升はいづれにも通ひ侍る故に、御命講の五もじに定め給へる也。下十二字より上五文字を斷侍る句にして、かくのごとく作し、えびす講とも通ひ申まじく佽。各人のなす所、詩文・和歌を取佽へども唯何面にて埓明佽様に仕立申事にて、句意聞へずして、何ぞと問佽やうに致佽事作の叶はざる故也。惣じて上手の故事を取佽事、水に塩を入れたるがごとし。下手の故事をとる事塩に水を入たるが如しとて、文騒の人も嫌ひ申よし承り佽。俳諧に故事を取事、三品の師傳御座佽。其元へは御傳授無レ之と存佽。

一新麥・竹の子時いづれも俳諧に便ある道具也。取合せまでにていまだ句の神入らざるを、草の庵と居ヱ給へる故、一句の神定り侍る也。新麥・竹の子は得がたくしてたづね安し。草の庵はたづね安くして下手の置がたき所也。

一青柳の泥にしだるゝの句は青柳に汐干、取合よくて句作り給ひし時節相對の場也。泥にしだるゝと置給へる故、汐干の句神是也。汐干に柳は幾度もすべし。泥に

しだるゝと古めかしき詞なれど此後申難し。青柳といふより泥にしだるゝとつゞきたるは殊勝に御ざ候。竹の泥にしだるゝとも此後申されまじく候。とかく發句神をよく御工案候べし。

一春雨の蜂の巣、是はまことに世の人さほどに沙汰をせぬ句なりといへども、奇妙天然の作なりと、翁つね〴〵吟じ申され候。此蜂の巣は去年の巣の草菴の軒に殘たるに、春雨のつたひたる靜さ、面白くいひとりたる深川の菴の體そのまゝにて幾度も落涙致候。凡俗をはなれ侍る句也。よせ物取合せものと心を付候はゞ作に落入、深ゝの妙所にいたる事有まじく候。初心の輩は其道其に尋まよひ一代風雅を取とめ申事なるまじく候。翁死後には東西の門人丈艸をしたひ申事、此人さのみ世に差出る程の事もなく候へども、翁の俳神を得られ候にや、うらやみ申事に候。

奇妙天然の作也と翁つね〴〵吟じ申され候云々　芭蕉如レ此自讃シテ吟ゼラレシトハ心得ガタシ。誰ニモアレ、自句ヲ奇妙天然ノ作ナリトテ常ニ吟ゼンコトハ、イト片腹痛カリナン。是ハ書様ノアシキ歟。但去年ノ巣ニ雨ノツタヒシ深川ノ菴ノ体ト云ルハ甚ヨキ解ニテ、一歩ヲスヽメタリ。〽ツク〴〵ト春ノナガメノサビシキハシノブニツタフ軒ノ玉水、此歌ヨリ出シ作ト見ユ。

丈艸ヲ慕シハ、其頃ノ實事ナラン。此人ハ眞隱ト見エテ、外ノ雅ノ如ク俳諧ヲフルマフ意ナドハ少モナカリシ故、自然ト句ニモ其眞ヲアラハセシナルベシ。世ニ差出ルホドノコトナクト云ル、ソレコソハ殊勝ノ所ナレ。

一鎌倉を活て出けんの句、是も鎌倉に鰹古き文にも見え候へば、よせ物・かけ合とも存ぜず候。活て出けんより初松魚のはつの字の歩み神妙也。鎌倉に鰹は此後もすべし。生て出けんとは申されまじく候。

一撫子の暑さわするゝ野菊　此句は翁再來ありとも拙者において神妙とは申まじく候。是等は格を定たる句也。暑さ忘るゝ野菊かな　と句作出來候うへは、凉しき物を置申さゞればかなはぬ作也。先師の曰、格を定、理を求むる人は俳諧中位に置、格をはなれ理を忘るゝ人は此道の仙人なりと、常ゝしめし申され候。

前條初鰹ノ論モ、全ク野坡ニ理アリ。

撫子の暑さ……、涼き物な置申さゞれば……　コヽハ暑キ物ト書ベキ所ナリ。

格な定め……、此二語勿論歌ニモ古人ノ論ゼシ最上ノ場ナリ。

一葛の葉の表見せけり此句は、一たび嵐雪が翁にそむきし事の直り侍る時に、幸に書て遣はされ候句也。成程表見せたる句也。葛の葉の枯果てうら見る昔も盡はてたるといふ本情にして、今朝の霜の置渡したるを見れば、誠に表見せけり、うら見る秋をうちわすれて、表のけしきの面白きよと申句也。先師發句の中にても算へる句なり。

一水仙に雪、幾度もくるしからず候。雪に葉のたわむとは外の草には申されまじく候。是いづれも句の神ある所を能御工案候へかし。和哥に制の詞と定るも神妙の所也。

一津の國の難波の春は夢なれや芦の枯葉に風渡る也、是も難波に蘆奇妙と仰られ候。いかゞ御心得候や、和歌はよみ合せと申事御座候。津の國は何々、山城は何々、近江は何々とよみ合の外はよみ申さず候、西行より前にも〽難波がたみじかき芦のふしのまもあはで此世をすぐしてよとや、〽難波江の蘆のかりねの一夜ゆゑ身をつくしてや戀わたるべき、此外いかほども御座候。和哥は道具はふるく意のあたらしきを第一といたし候。〽風そよぐならの小川の夕暮は御祓ぞ夏のしるしなりける、是初秋の哥にて、きのふの夏を證人に立候よし。是又御心得違ひにて候。是は納涼の哥也。上十七字は全體秋のごとくによみて、下の御祓するゑ見れば扨は夏にてあるよと打返したる歌也。定家卿、百人一首えらみ給ふ骨折は、奈良の小川を賓と見、夏の字を主と見候へば埒明し哥にて御座候。貴丈和歌の事は御傳へなされずと相見え申候。拙者はくるしからず、哥道心得たる人に麁相仰遣され候事、俳者の名おりと存候。

一鶯に鳶、つき合なく候はん句なれども、詩にも鳥と鳥心の通ひ同事なる故、同句にも致し申され候。拙者只今は此場を第一といたし候。他人の譽譏くるしからず、是無情の句體也。姿にも言葉にもよらず、只打回ふ發

句の場所に遊び候。春雨の比、梢に鳶のとまりたる下に鶯の啼けしき面白きと、其場を迯さず其儘に作したるまで也。拙者句にて候まゝ委細に申さず候。和哥に行雲躰・幽玄躰其外體多く候へども是皆後の名目也。是を詠じ申べきとて、ならざるものに御座候。右別心無ニ御座一候故是ほど申遣し候。貴丈も拙者も老吟になり候へば、よせもの・取合せものを忘れて我俳諧に遊び申より外のたのしみ無ニ御座一候。以上。

此句ノ仕立見ネドモ定テ〽鶯や梢の鳶……ナドノヤウナラン。許六難ハ、ツキシホナシトノコト、聞ユ。野坡答ニ詩ニモアリトハ、鳴鳩乳燕青春深シ、又ハ黄鳥時兼ニ白鳥一飛ノ類、幾等モアルベシ。縁ナキモノヲヨセ合テ宜ク仕立タラバ、イカニモ手柄ナラン。但シ、拙者只今は此場を第一と致し打向ふ發句の場所に遊び候トハ、實景ヲ主トスト云コトナラン。俳姿ニモ詞ニモヨラズト云ルハ非也。實景ヲ見スヱタル上、句ノ調ト、詞ノ文(アヤ)ナシニカヲ用ヒズシテハ、美濃風ノ如クニ成テ、淺近ニ陷(ヲチイ)ルベシ。故ニ此語ハ取難シ。和哥に行雲躰・幽玄躰……、後ヨリノ名目ハ勿論ナレドモ、詠ジ申ベキトテ成ザルトハ僻事ナリ。既ニ後鳥羽院ノ御時、六體ヲ出サレテ、時ノ達人方、詠出シテ奉ラレズヤ。〽葛城ヤ高間ノサクラ咲ニケリ立田ノ奥ニカヽル白雲寂蓮 此歌ハ長高キ躰ヲ詠レシナリ。總論野坡ニモ少シ誤アリトイヘドモ、眼ノ付所宜キ故、論モ亦可ナリ。

二月　　野坡

許六丈

前文略

一翁の古池の句いかゞ御聞候や、おそらく此句を會したるは我ならで有まじく候。其角も山吹のまよひ、嵐雪も上京の時分五老井に來りし比、せめ申候に埒明不レ申候。李由・正秀など日々問ども今に答へず。加賀に北枝ありと翁の譽め給ひしも、あか〳〵の句を聞たる故ながら、中〳〵古池は心えなく、去來・凡兆・丈草とても翁の微笑し給ふ事不レ承候。我のみ汝は聞得たりとて、芭蕉庵において稱美ありし、貴丈いかゞにや。意は差

置、蛙の聲ともいはず蛙の飛を發句にしていかなる所が名句にや、名句〳〵と唱へて味ひたるものはなし。御門人のためにﾊ聞りきみをはなれ、我に御聞あるべくﾊ。同門の事にﾊ聞傳へ可ﾚ申ﾊ。此句蛙と古池のかけ合を能々御工夫あるべくﾊ。

例ノ自賛ト見ユ。蕉門ノ古老、皆此答ナカリシ由、其心ハ量ガタケレドモ、各相應ノ解ハ有ン。サレド斯ト極テ云ハヾ、句其限ニ、意味ノ長カラザランコトヲ慮テ、明カニ答ヘザリシ歟。許六ハ又イカヾ會シテ、カヤウニ慢ゼシヤ。其モ爰ニアラハサヾレバ評スベカラズ。野坡答モ亦復同ジ。今双方ノ惡口ヲ捨テ、試ニ余ガ解ヲ記ス。必シモ得タリトニハアラズ。世人高評アラバ、ソレニ從フベキナリ。惣ジテ句ハ、表ニ顯レテ佳ナルト、藏レテ妙ナルト、或ハ富麗ニシテ風情ヲ備ヘタルアリ、又ハ寂寞テ味ヲ含ルアリ、其餘尚種々ナレバ、束ネテハ極メ難シ。此句ハ寂寞ヲ躰トセルゾ。凡古來ノ俳句、多分云掛又ハ理詰、拍子等ヲ主トシテ一統ナリシヲ、蕉翁始テ、詩歌ニモ肩ヲ比スベキ姿情ヲ發明セラレシハ、此等ノ句ヲ最トス。故ハ、云カケモナク、拍子ニモ拘ラズ、表ニ旨ヲ顯サズ、又俳言ヲ强ク用ントモセズ、自然ニ云ヒ下シテ裏ニ意ヲ含メリ。江戸深川庵居ノ側ニ舊池アリ、時春ノ闌ナルニ及ンデ、池畔ニ徘徊セル蛙ノ、岸ヨリ飛込シ水音、ジヤブリト聞エシニゾ、實モ梅・桃・櫻ト次第ニ開キ、柳ノ絲ノ日ニツレテ長ク、生タツ草ノ中ヨリ蘭・萩草ノ背高ク伸出タルナド、得モ云レヌ長閑ナルニモ、草菴ハ萬ラウガハシカラデ此蛙ノ飛シ音、ジヤブリト耳ニ清ミ入シサマ、言語道斷、アハレ春色滿ヌルヨ、カヽル微物モ時ヲ得ヌルヨ、所ヲ得ヌルヨ、天地造化ノ物ニ私ナキ、神ナル哉妙ナル哉ト獨感ジ獨默シテ口ズサマレシナランカ。余古選中此句ノ評ニ、今是有妙境、難用筆舌説、コレハ王維ガ輞川ノ五絶、其餘ニモ絶勝多キ中ニモ、鹿柴・竹里館、又ハ、木末芙蓉花、山中發紅萼、澗戸寂無人、紛々開且落 又、人閑桂花落、夜靜春山空、月出驚山鳥、時鳴春澗中 コレラノ作ヲ引合テ無味中ノ味ヲ知ベシトナリ。スベテ云ヘバ、音ノ字ヲ骨目ト見ルベシ。晉子ガ山吹ト置ルハ、花ヤカニシテ面白ミヲアラハシタリ。下ニ水アルヲ古池ト定ラレシハ、愚ニ返リテ旨ミヲ拂ヘルナリ。後世淡々ハ晉子ヲ宗トセシ故、スベテ一句ノ上下ニ同意ノ物ヲ用ルコトヲ嫌ヘリ。サレドサナリト必スルハ、例ノ偏固ゾ。

一行舟や笘もる月に袖の紋　北枝　凩の吹行うしろすがた
嵐雪　此日、乙州貴庵へ訪ひ候時分、拙者が明月の吟を
譏り、此兩句を名句のよし譽られ候由、いかゞ踏違ひし
や、我句はもとより出來たりとも存ぜず、其夜の景色を
述たるまで也。北枝が句も嵐雪句も前書なくては聞え
ず。行舟を外より見たるか、又乘合人の袖の紋を見た
るや分がたく候。嵐雪が句は又別れにのぞみてと歟、
見送りてとか前書なく候ては、誰が後姿にや、見しら
ぬ人のうしろ姿があはれなるや、何の事やらしれぬ事
に候。定て兩句ともに作者は前書ぶりにて致し候半と
存候。只譽られては作者もめいわくなるべし。とくと他
の句も分別ありて譽も譏もあるべき事也。かゝる句を
譽らるゝ耳には、我等が句は合點ゆかぬはづと存候。
一今はやる單羽織をきつれたち　といふに、奉行の鑓に
たれもかくれる　と附合は、此句の味ひ手本にするよ
り外なしと御咄のよし、翁の手本に致す句は百千御座
候。此句はたれもの字、前へかゝりて無益也と後に悔
れし句なり。其事を知らずしてうかつに門人にすゝめ
らるゝは、一盲衆盲をひく事多かるべきと存られ候。能
ゝ工夫をめぐらし一分はいかやうとも、他を損はぬ樣
になさるべく候。同門の事に候へば氣の毒に御座候。
一しぐるゝや夕日殘れる原くらし　北枝　此句も文通に聞
ゆとてことの外感心なされ候由、夕日の殘れる原くら
きとは予が耳へは聞えず候。いかやうの所感心に候や、
渠が手づまにおどろき、文通の句毎に一句としてあた
なるはなし。今の世の名人など仰られ候由、其元の句作
よく〳〵おとろへ候と存候。以上。

九月廿日　許六

野坡　文

一翁の古池の句貴丈ならでは聞得るもの天下になかるべ
きよし、然るを今天下に名句といふ事は、はいかいせぬ
ものも申候。素堂も四句の名句の内に撰出し候事、集
御覽にて御存あるべく候。翁みづから名句とふれ給ふ
にや、又其許が名句と聞てから天下に觸られ候や、不審

にて候。翁の口よりも此句名句也と承らず、其許よりも承らず、かく日々に文通致候拙者かくのごとくに候へば、諸國の人猶更の事に候。さるを天下に聞ものなくて誰が名句といはんや。此句の意は翁によく承り置候事、先年其元へ物語申候。されどいかゞ翁の說れしやとも御尋もなく候。もとより我も翁の稱美にあづかりしとも御咄なく候。定而たかぶり我をおとし入れ、句意を書あらはさば、我ものにせんとのはかりごとゝ存候。其角・嵐雪をはじめ素堂・杉風、其外此句を聞得ざるものは、翁に句解を聞、きゝ得るものは稱美せられ候。江戸の門人など一人も合點いたさゞるものはなく候。北枝も先年のぼりし比、咄合候に能々聞得申され候。李由も翁に聞申され候よし、其許はいまだ聞給はざる事明白に候。さればこそ聞得たる人をしり給はず候。何を聞き是也と極め置かれ候や、甚だ覺束なく候。一分は格別、門人衆中へわけもなき事など傳へられまじく候。翁の名玉に瓦の土ごしらへを說に同じうして、罪深かるべく候。

一北枝月の句、嵐雪木枯、前書忘れたるにて候。我罪にあらず、乙州には我等方にて前書見せ申候。

一兎角かけ合なくては發句にならずと度々仰承り候。いかなる踏違にて候や、凉兎が〽木がらしの一日吹て居りにけり　嵐雪が〽黄菊しら菊其外の名はなくもがな　北枝が〽我友はことしも月にあかしけり　如柳が〽いつの間に背戸の木槿は咲やらん　これらの句は無名庵に於て貴丈・惟然・去來・正秀・予落合候時、かゝる大道の句は得がたき事也。渠等は上手なりと翁の譽給ふ。

一座いづれも感心、其許も感心せし其一人ならずや。とても此上手の場はゆかぬと決定して、下手の手に合ふ所を高ぶり申され候や、合點行不レ申候。あか〳〵と日はつれなくもの作も、日と秋の風をかけ合せて翁の案じ申されしにや、片腹いたく存候。他門の笑ひきのどくに候。

北枝句端書ハトモアレ、座ノ語佳ナラズ、強テ論ニ及ズ。又嵐雪句ハ芭蕉翁同郷（玄峯集ニ見ユ）、コレモ名句ナド稱セシハ勿論野坡ガ麁忽ナラン。

凉兎ガ爪・嵐雪ガ菊ハ、イカニモ秀逸ナリ。北枝・如柳句ハ、サマデ佳ナリトモ思ハヌハ、聞ノ徹セヌニヤ。古今詩歌ヨリ發句ニ至ルマデ、秀逸ト稱シ來シモ、面々ノ意ニ、實モト思フモ、亦思ハヌモアルハ、人々覺アルコトナレバ、コレラモ其類ナラン。

一奉行の鑓にたれもかくれる　たれものもの字前へかゝるとて、翁のくやみ給ふよし。是は其許の空言にて御座候。翁の文通今に我所持せり。きつれたちのひとゞきを、誰もといふにて受たるものなり。かゝる所工夫あるべしと翁の直筆今にあり。さるにより信仰して門人にも語り候。何の罪なるや、其文も深川の出來し時分にあらず、幻住菴より附合の事何角尋候答也。くやみ給はゞ何ぞかくをしへたもふべき。

許六ハもノ字前ヘカヽリテ無念ナリト悔レシト云。野坡ハ連立ノ響ヲ誰モト受タルト示サレシト云々。今コレヲ分ツニ、カヽルトハ當ル氣味ニテアシトシ、響ヲ受タルトハ、態ト〳〵ト置タル意ナリトス。其代ニ生レテ蕉翁ニ逢ザレバ、何レヲ是トシ何レヲ非トシ難シ。但シ許六書ノ如ク、野坡ガ付合ハ此句ヲ手本トスルヨリ外ナシトノ

詞、實ナラバ過ナリ。イカニモ許六說ノ如ク、コレニ勝ル句多ケレバナリ。

一北枝が〽しぐるゝや夕日殘れる原くらし　此句御聞取なされがたきよし、西行の〽甲斐が根の麓の原はみなくれて夕日殘れるはつしかの里、此哥をもて作りし故、甚おもしろく感心する也。明月の吟をなされ候口にては、貴丈など此句作一生なるべき事にあらず、加賀に北枝といへる作者ありとは翁も度々譽め給へども、句聞ありとは譽給はず候也。〽舟涼し吹れて居れば吹にけり〽追あげて尾上に聞ん鹿の聲〽帆柱にならぶや霧の向ひ島　北枝ならでかく自在するものはあらじと無名庵にて稱し給ひし事、貴丈も其座にありて聞申されずや。まことに今の名人と申が我があやまりにや、大笑〳〵。

時雨ル故ニ夕日殘ナガラ原モ暗シト云意ナランヲ、聞エズトハイカヾ。但シ時雨ニ日月ヲ結ビシハ度々出ル趣ニシテ、サノミ可ナリトモ思ハレズ。地句ナルベシ。名月ノ句ハ双方トモ記セザレバ知ガタシ。二子トモ同門

ノ念比ブリノ樣ニテ惡口多ク、討論ノ躰チ失シハイトアシウコソ。舟涼し……、イカニモ佳章ナルベシ。鹿ノ句モ一趣アリト云ベシ。帆柱ハ地句トセン。蕉翁ノ稱美アリシト見エタレド、其意量リガタシ。

野　坡

十月五日

許　六　丈

俳諧不猫蛇

越人著

二條大相國良基公の御記に、遁世を表はし、心を漫(みだりに)、名聞名利に紛るゝ者は、頼政が射たりけん猫にもあらず、蛇にもあらず、狂亂、もの狂ひの至極なりと書せ給へり。當時是よりなほ甚敷者あり。俳諧の大凶鵩(ふく)鳥二羽いでゝ法を破り、妄言を以て僞書を出し、芭蕉老人死去の後、生前に祕事傳授を得たりと愚昧の者を誑(たぶらかし)、銅臭を耻ず、酒食・美服・遊宴の利とす。其一人は予が詞を添、芭蕉へ遣せし者なり。翁に付ある事三年ばかりの內、十日・廿日、凡二百日近ふあるべし。其比はいかひ漸く仕習ひ、上ミ下モの句も指を折數へし者なり。勿論俳諧の席などへ出たる事なし。芭蕉死なるゝ年までに、名古屋へは七八度往來せられ、所々にての會、岐阜・大垣等に數日逗留、多くの會あるにも、彼兩人一度も出る事なし。京・大津・膳所等の會にも、芭蕉・我等など出る席へは句を得せず、翁へ近付て右の日數なれば、觀たる事もなき事予が知る所なり。翁死去の後は、我等も上方筋へ不レ出ゆ得ば、其後は初心を欺きに折ゝ二人ともに出たりとぞ。今壹人は荷兮、弟子也。弟子になり一兩年の後、荷兮をたのみ、重五と我等に稽古の爲にゆ得者、何とぞ三吟を被レ成被レ下と申間、三吟など仕てとらせし事もあり、彼者は覺あるべし。如レ此の者共近年三十年來芭蕉より直傳を得、正風傳祕訣不レ殘得、外に知る者なしなど、諸方を訇まはる事、さらになき事なり。支考は右に申日數、露川は翁に二度ばかり逢たる者なり。兩人ながら弟子の數へは入たるなるべし。祕事傳授等あればとて、さやうに初心なる者どもへ聞かさるべきか、笑ふに堪たる事共なり。なを又おかしき事は、一人は翁の冷泉家の哥書の祕事、つれ〲草、兼良公の傳と訇り、其外いろ〱の僞書をつくり、己が言に口傳祕事と錢を貪る。一人は家傳和哥の書・季吟の傳・本式俳諧の傳、其上に古今集など傳授するよし。是等が傳授を云者は齒牙にかゝらぬ文盲、また其傳を受給ふ人もあまりなる事共なり。是非をいふにたらず。かやうの儀ども中は悉皆狂亂・物狂ひ、平生の人の心にてさらになし。支考は予をたのみ、翁へ行し時は出家にて有。しかるに彼が書しものに、龍樹・天親菩薩を令官にせんと、儒佛〱と雨の降るごとく申て、

孔子をも令官にせんなど申事、是等亂心也。大路を裸に成、口ばしる亂心は事輕き事なり。かやうに古今壹人の聖人を令官など申事は、正眞のものぐるい、亂心の大ィ成亂心なり。儒者の意は知らぬ筈、しばらく出家しても居れば龍樹なり天親を何ゆへに、かく放言するならん。かやうなる心上おのれと出家を落、己と罰を當る。佛神でも天にてもなく、それを耻る心のなきが、則自身が自身を罰するといふものなり。予昔出家の噺を聞る事有。經說のよし、華嚴法問經ニ曰、文珠金色女語テ曰能發ニ精進ニ爲レ除ニ一切衆生煩惱ヲ是名ニ出家ト又曰、能於ニ金色女生死流轉ニ以ニ慧方便ニ化令解脫名ニ出家ト。然るに支考は樺燒の香、かりそめの遊び女に、兄弟・親族の耻を不レ顧、佛法にて云日は、未來永劫の苦患を忘れ、情慾を愼まず、猫でも蚰でもなく成、なを忘言忘說に人を欺く事不便なり。又大法炬陀羅尼經曰、宜應ニ忍默慈愍心ニ存ニ勝負ニ獲ニ大重罰ニ汝忍默と名利にこらへる事なく、世間の俳諧師を婢子のごとく手の內に並んなど、是我慢にあらずや。大重罪也。又曰、應ニ慚愧ニ勿レ生ニ貪心ニ不レ得ニ我慢ニ無レ消ニ滅施主善根ニ自不レ憍レ人。出家の時これらの經も見たる成べし。汝慚愧といふ事をしらず、人を貪る事幾年ぞ。憍慢は龍樹・釋迦よりも上なりと申、人に憍る事、おのれが書物どもを見よ。謙退・卑下・辭讓といふものは針のさき程も申さず大憍慢、施主の善根は酒肆・婬房のために業火に燒亡し、なを今に止ず。猿の菓を如レ見、猫の魚鳥の香に飛ぶごとく也。自分に酒肆・婬房の遊びに闇からぬと申程に是非に及ず。暴逆浮屠の形になりて釋氏の法を見ながら破る。是等の事予が如くなる者さへ咄を聞たるに、汝しらずとはいはるまじ。其道知つて破るは、不レ知者より淺まし。阿含經曰、出家以ニ自在ニ爲レ苦以ニ不自在ニ爲レ樂俗以ニ不自在ニ爲レ苦以ニ自在ニ爲レ樂云に、おのれ出家にて自在を好み樂むゆへ、婬房・衣服・厚味の費を求め、妄言・佞姦の事どもを思案し、芭蕉の遺骨をおさめし塚・義仲寺に有を京と松本迄はわずか三里に、又京に石牌を立、塚を築事、人を誑て錢を取る術なり。喩へ汝京住の者にても、遺骸を納めし塚までは、芭蕉〳〵と申ほどに可レ行事なり。京住ニテもなき身にて何と云事ぞ。芭蕉へ眞實のなき事、前に申ごとくにて

なき故、只名利の種ばかりを築塚なり。當年も翁の遠忌なるとて、京にてせし由。翁は十月の十二日なるに三月にする事、世間の法事取越すといふ事もあれども、止む事得ぬ事に依ては有。汝何事のやむ事なき事有や。田舍より寶物・靈物開帳に京へ出るを能事と思ふか。悉皆汝が邪智それなり。是も事を追善に寄せ、婬房の謀ばかりなり。それに美服を身にまとい、闇愚を集め、上座にあがり、耻かしとも思はず、妄語を雨露のごとく云ちらし教るなど云事、失迎は片腹いたき事。孔安國の曰、賤、貴き着レ服、是を云。借上一無レ禮國の姦人なり。坊主の身の程もしらず、京・伊勢の繁花の地へ出、知りもせぬ芭蕉を賣果して出家を落、何ともしれぬものに成り、其非を改る事なく、非をかざらんとす。雪の上に霜の降ルがごとし。佛經に曰、昔有二一狸一張レ口伺二鼠子一有レ鼠出レ穴則呑レ之入レ腸猶生返テ食二狸臓腑一患痛迷悶狂走遂至二命終一北丘一依二聚洛一住不レ護根門破レ欲損レ心迷悶狂走と、汝此經にあらずや。汝が只今云所皆迷悶狂走なり。又曰、喩如三赤焼鐵丸裹二却貝綿中一綿一速燃否比丘曰速燃佛曰愚痴之人住二聚洛一不二善護一戒心不二正念一欲火燒レ心捨戒還俗ヒ。此文實に汝が身に符合せり。かゝる事に耻ル心もなく、なを妄言を申。私に盞れ、忘却したるものなり。そちが十論之内、虚實・儒佛・老荘・詩哥・連哥と、小比丘尼の米を嚙ムごとく申せども、一つも埒の明ぬ事なり。儒佛・老荘の何と云語が、誹諧の何といふに合たりといふ證文も不レ出、勿論はいかひに入事にてもなし。己高振人を高ぶらせて、脇道へ連行分別、名利の便りとする邪智、汝がごとくの虚言は、汝も取とめ合點は行ず、聞者も濟事でなし。一ツも實といふ物なし。少物の差別ある者聞ては、茶の花を金と見せると同じ。世に用ぬ妄言を立んと新式の龜鑑を消し、汝等、貞享式・芭蕉式・東花式・白馬經、このやうに式目といふ物が幾品有物ぞ。芭蕉假名遣・堅懐紙の書やうなど、おのれ〳〵が僞にあふやうに、ひたもの作り出す事、もとを不レ聞しらざるゆへ也。一條殿の式目もしらぬそうにて、かやうの妄言を申。少にても知てはいはれぬ事也。白馬經と云經の字、先文盲也。佛說は經と云、菩薩の說は論と云事をも、佛者にて居ながら知ぬか。佛法を知りたるも

の〻云分不都合也。儒にては勿論、聖人の書は人日用經に行ヮ所なれば、經と云ぞ。それをしらず、白馬經とは闇愚の至、おかし。二條殿の式目、何故に捨て如レ此の妄言を申ぞ。貞德翁・立甫など書る〻指合・去嫌ひ、新式の旨を細かにいはれたるばかりなり。俳諧の法は點にてする者の心〳〵にて、仕廢やうにする物と汝思ふそう也。初心の人もさやうに思ふ事もあるべし。中〳〵誰にても改る事はならず。良基公　勅を受ての　御製作なり。汝、芭蕉に聞たる事なきは、是等の僞書にて明らかなり。自分の心をもとにして申せば、都合せぬが斷なり。芭蕉に十年・廿年も隨身したか、不屆者也。汝等が云所何ぞ芭蕉にあるべし。我に逢ふて申て見るべし。無ィ證據は我明らかに申べし。其角・嵐雪、田舍にては杜國・越人などを置て、恐らくは芭蕉の當流建立の趣意、汝等ごときの者共の知ル事にてなし。當流開基の次韻もしらぬゆへ、蛙飛込の句より翁は眼を開き申さる〻の、夢想に滑稽の傳を傳へられしなど妄言を申。蛙飛込の發句は次韻より十年も後に、予が所へ書越されたる發句なり。其角が脇あり、芦の若葉にかゝる蜘の巣　といふ脇なり。翁死後と思ひ、兩人出るまゝに、古池の發句より眼を開き申さるゝの、此句を傳受なりと申廻るよし、おかし。松は花より朧にての句を、朧の傳授など初心を迷はするよし、汝等誰に傳授したるぞ。芭蕉になき事は予が能知ル所なり。かゝる事どもに、初心の者どもに堅めとて血をしぼらするよし、去逆は何共言語を絕する邪曲者共也。芭蕉の自撰なりと詐る續猿蓑、片腹痛き事。あのやう成埒もなき集、附やうの古サ、句の仕様の惡ルさ、語路と吟の惡サ、翁の句なりと汝が作りて入たる句、いかほどか有ぞ。其ゆへ自撰のなき證據は、汝が仕たる島日記・笈日記などに、しらぬといふて知リ、知ッたといふては又知らぬといふやうなる、口の違ひたる云分どもにて知れたり。芭蕉の直筆を見せても、俳諧が芭蕉にてなひぞ。二三百年以前の手跡は、紙墨等各別なる物をさへ今似せるぞ。手跡を以、はせをと云ふは最下の事也。誹諧がはせをなれば、悪筆が書ても翁としらるゝ。併其方共目にて、自分の句もはせをの句もひとつに思ふにより、僞作を申散すは我日利ならぬ故也。躑躅を正花にな

し、松露を冬にしたり。其やう成事せらるゝ、はせを成と思ふか。鳶が腐り鼠を美食と思ひ、人を恐るゝごとく、おのれ〳〵を人の信ぜざらん事をばおそれて、わけもなき事どもを芭蕉〳〵と申。何程申ても、初心は其分、其事を知る者は實にはせぬ物にて、物の古實もしらず、習ひもなく高振、汝がしたるものに本朝文鑑と云名付たる本有よし。夫を見るに及ばず文盲ぞ。朝の字は朝庭に預る書ならでは置れぬ事也。それをさへしらず、己が仕たる物に本朝とは文盲者なり。偖文鑑の名、又世人へ慮外也。文があれば文鑑といひてよきと思ふか。喩へば地下の喰ふ食も米穀、天子のあがる飯も米穀なり。しかれども天子へ奉るは供御といひ、又神へ奉るは今では御供と申ぞ。夫をひとつに覺へて我友などへ、出來合の供御明日進度りと云に同じ。おのれが掃溜の様成書に本朝文鑑、何共云に詞なき馬鹿也。本朝文鑑、日本國の人の文の鑑にせよか。是天子の仰付られたると同じ。本朝と云内には、將軍家・攝家・公家・門跡、汝が云儒佛・老莊の學者・詩文・哥學者もあるに、仰山なる題號、疑もなく亂心物狂ひの至極なり。末に云ふ、十論にも此類ばかり也。人に高振、狸の草村を宮殿樓閣と見せ、人を化す如く、一つも實と云事なし、無類の化物也。又文鑑の内にある由、假名で詩の作り様ありと。詩は日本が始りか、漢が始りかをもしらぬか。詩は文字のつかひやう、心をふくみ義をふくみ、作意の働は其人々の力をつくしつくる事の由。然るに假名にて何と其様に成べし。假名と漢字との別もしらぬか。假名といふは昔の万葉集などのごとく昔が假名とぞ。喩へば阿太志野と云様成事、阿の字にくま又おもねるなど云ふ心あれども、假名は阿の音斗をかり、字の心と義はなし。太の字にふとひといふ心もなし。志にしるすの、心ざしのといふ心もなく、野同前、文字の音斗をかりたるばかりなり。今云片假名は吉備公の製のよし、平假名は空海の作なりと。皆音斗を借りたるものなり。字に心と義なきに詩が作らるべきか。人をだますとて、汝も人にだまされたるなるべし。異國の人に假名が可レ通か。詩は朝鮮・清朝の人とも贈答し和韻して通ずるが詩也。日本ばかりで用る詩か。夫を詩といはるまじ。詩を假名で作りても、

和には和哥ありて埒が明く事也。只人の迷ふ様成事を僞作する事が好きなり。一犬虚を吠て百犬實を吠ると。汝一人が云事を實にして、弟子共假名で詩を作るといひまわるよし、おかし。其様成公に立ぬ事は、梟の目の夜る見へ、晝闇、非常を咎る犬夜るは吠ず晝吠て、少兒女子などの往來人の門戸の邪魔に成と同じ。ひとつも益なく害而已(のみ)なり。只奇怪成事を申、其方(ソチ)を見るに、町の僕(デツチ)にわやくなる者有が、使に歩行に、廣き能道は行ずして溝を跨、堀を飛行に、石を打て步行者有。丁度其方が云ふ事は其様成事也。なひ(無)事・ある事直に云ッ事なし。實、猫にもあらず、蛇にもあらず、江戸・大坂にて見せ物に仕たき化物也。

一抑連哥の法度、新式(注)を舊式を改られて新式なり。古式は百韻皆句毎に賦物(ふしもの)をとつてせしよし、かやうの儀猶其外つかゆる事ある故なるべし。月花の數も定まらず、一卷三折にて表十句のよし、今製する神祇・釋敎・戀・無常の類も表にせし由。今の新式は二條相國良基公御かゝりあり、勅をうけ應安五年十二月に定る所なり。其上に一條の攝政兼良公追加を添られ、又牡丹花老、今案を加へ三條にて定まり、末代まで此道の龜鑑なれば、高位高官の學識有歴〻にても、謂なく改らるゝ事にあらず。勅をもどくの重き事あり。彼新式の和漢篇の法を宗祇獨吟に用ひられしより、俳諧は和漢篇の法也。しかるに此良基公と申は、轉職(博識)多才、諸道の達人にて、光明院・崇光院・後光嚴院・後圓融院・後小松院五代の天子の御師範にて、顯(著)はしたまふ書多く世に行なはる。武家の古實をも多く撰進なされし由。後光嚴院御卽位の時、三種神器南帝の御方にありしかば、神器なふして御卽位の例を不レ聞と、諸卿かたぶき申されしに、此二條殿、寶劍には尊氏を御用ひ、神璽には良基を用ひらるべしと仰られ、御卽位なされしとや。御登極の御時は、高き御座にて執柄の人御傳授なさるゝ事有に、其比兵亂打續キ左様の事知る人なかりしに、此良基公御傳授なされし人也。和漢の學才高官位(たかき)と申、轉(博)覽の御人、多年御懸りの上に勅を受御製作、わづかなる紙數の書なれ共、此一帖にて万理を統含(スベフクミ)、擧テ二一隅一知ル二三隅一連俳の燈燭なり。其上に一條の大相國兼良公是に追加を

添らる。兼良公、又和漢の廣學、著述の書多し。世に行るゝ夫に牡丹花老人、今案をくわへ、此三條にて定る。何人か其法を破り戻きけ事あらんや。此道の寶鑑誰か改べき。勅定を改ると云物也。誹諧ノ上にて貞徳・立甫などのせらるゝ物有といへども、只新式の旨を初心の心得安き様に俳諧を以書、新式の旨に違ふ事なし。其先輩さへ式など云事は、深き心ありて題せられざる事也。芭蕉其理存ぜられたり。然るにいかで貞享式・芭蕉式など式と申さるべきや。はせをのせられしにてなき事明らか也。式とは何事の法製にても、天子・将軍より出て天下一統に行ひ用るの法也。延喜式また貞永の式目等にて知るべし。何ゆへに翁、式とせらるべき。去とは文盲者共也。是そちども十年餘以來云ふらす事共也。翁存命の時なき故、其角・嵐雪がせし物にも此名なし。前にも云ふ田舍にて杜國又越人などが見ぬ事、はせをに有、汝等傳授仕たりなど云事、朱子の像の讃を黄帝なされ、臨濟錄の序を孟子がなされたるなど云に同じ。誠に徒然草に道風が朗詠なり。公任と道風の前後をしらず、いよ〳〵祕藏せしごとく、芭蕉の事を直に見聞すべき者、見聞したる者をおきて、彼が云事を實として、しらぬ衆何やら申留り廻る、道風が朗詠なり。返つて予が事・其角が事など是非する也、おかし。鼻かけ猿が鼻のある猿を笑ふに同じ。新式は見たる事もなきか、見ても合點の行事でなし。表に月せずに裏始に月をして、兩方用るなど、亂心者也、遊女の類、戀にせぬ戀一句にて捨る、おのれ〳〵無性にして、ものをきかず、見ず、勝手の能やうに拵へ、式目をいくらともなく拵へ、其時〳〵に思ひ出す儘に合ふやうにするか。早そちらが僞作も彼と是と違ひ、夫とそれとは皆違ふべし。軌矩準繩のなき事也。新式一座一句の物の前に、女といふ下の小書に、如此の類の物大略戀になる也、人倫なりと有ぞ。そちは女が戀ならば、男も戀なるべしと云廻り、物にも書よし。違ひ儒佛は扨置、それは悉皆野菜が精進ならば、魚鳥も精進なるべきといふに同じ事、馬鹿の物狂ひ也。男と女とがひとつか。そちは女買ひ遊ぶも墨髭に酒飲せ遊ぶも同じ事、左右するか。

鼻かけも美女も帛も疵着たるも同じ心か。又錢とらせたも、小判もらふたも一つか。出る儘申ても他を置、汝に皆違ふべし。其様成闇愚ゆへに、躑躅に正花を持せ、松露を冬にして置支言也。正花には櫻の花と云ても成ねば、躑躅が成ものか、松露が冬あるものか。冶郎・傾城は錢にて買ふ故戀にせぬと申廻ると、そちが云聞せたる者が申廻ると、汝等が申故也。冶郎・傾城、錢で買ふ故に戀にてなくば、旅で錢出し旅籠喰、餅酒買ふも、錢を以買ふは食類には嫌はぬか。東坡が風花並ヒ入ル長春苑と云句、宋朝にて戀童とて日本で冶郎なり。江戸境町のやう成所也。又燈燭交輝不夜ノ宮と云句は遊女の居る所、大坂新町・京の嶋原の様成を不夜宮と云ぞ。此句共戀なり。傾城・冶郎、皆金銀で和漢ともに買ぬか。其様成を翁に聞たか。馬鹿者也。序にいらぬ事ながらいはん。汝は何にか、越人ははせを勘當の弟子なりと、書て出したるを見たる人、慥に申され侍り。予が申やう、影にては御歴々の上をも申ゆ得者、我等ごときの虫の様成者の上、いろ〳〵に可レ申と笑ふてあいさつし居たり。是も汝俳諧の自慢云廻る故、他國にて何と越人とは出合が有か、折々咄さるゝかと、人問ふゆへ、予に意趣もなけれども、芭蕉をひたもの三十年も一所に居たる様に云故、しかれば越人とも念比なるべしと人問ひしに、我に出合ぬと申がわるく、はせをと夫程懇意ならば、越人とも出合あるべくと云者もある故に、今は我も不通なりと申たるもの也。とかく其方は予をいやがるが、何ンでいやがるぞ。おかし。左やうなる事をいひそしりながら、去春の様に、久敷不レ得二御意一床敷奉レ存、翁追善仕、御相談仕度事も御座ゆと状おこし、もはや何事もわすれたるなるべしとおもひ、予に發句でも第三でもうかとさせぬ、夫を又商ひにする分別、子共をだますごとく淺はか成事、おかし。去年の事なれば慥に覺あるべし。只虚言を云ふ事をそちは何共不レ思、人の第一の疵、大罪也。そちがうそは法を不レ知、破りて申ほどに皆奇怪也。其故に初心成人々かわりたる事と思ひ、珍しがると見へたり。韓退之曰、甚矣人好レ怪不レ求二其端一不レ論二其末一惟怪之欲レ聞と、達人の語は實に難レ有。

奇怪を申、利を得ると、後は邪宗に近ひ者にも成者也。有、云ごとく、二條殿の式・芭蕉の正路に風流なるをわけもなく仕なし、初心を文盲の闇屈へ引入るゝは、已愚なる故也。譬喩經曰、有二一長者一生レ子而愚也、其家寶乘レ船與二愚子一滿載沈香精且貴所也、買者少、久滯不レ售、同侶皆反レ鄕、已獨不レ得レ去、恐レ失二其伴一、偏覩二市中一、貨レ炭甚駛燒レ香作レ炭、希以二速售一、復何所レ得、そち共是也。良基公の新式の名鏡、翁の當流開基建立の名香の寶を馬鹿なる僞言の炭にして、汝等が得る所いくばくぞや。喩へ一朝に万金を得るとも心に問へ、耻かしき事。

一汝が書ヶ十論と云ものを見るに、悉ヶなき事也。其序ニ曰、芭蕉庵にて茶話禪と云錄を編み、翁の行狀を顯はしぬと、是僞ヮ也。已れ其時江戸へ始て行し事、皆予何角を指圖して、汝が兄よりの翁へ頼み申けと云狀も皆予が沙汰せし事、おぼへあるべし。大津乙州が裏にて予に申せし事も覺あるべし。偖、其時翁の供して行しは、霜月初旬比に江戸へ着しもの也。翌年正月早々に立、名古屋へ歸り、予が所へ來りしは正月中旬也。其間に茶話禪書たり、俳諧の卷も其方に書せらるまじ。可レ書者でなき事は前に申せば今不レ申。其時翁よりは、盤子がまいる間狀を不レ遣けと今年に限り、合點の行ぬ事と予思ひし。そちが申樣、俳諧の文、盤子に集めさせ申け、名古屋にて荷兮・野水・越人共に取持可レ被レ成との事と申ゆへ、又合點不レ行、左樣の事ならば、なを以て三人方へ連名にて狀可レ來に不二心得一、狀どもはそちが中にて取りしもの也。我等うかと其文集むる事可二取持一と思ひしゆへ、狀あれば邪魔と思ひて取りしもの也。其時予があいさつの顏付より、汝、予が方へ三十年來名古屋へ來りながら無沙汰せし始也。其上行狀といふ物は、其人死してこそ書事成ぞ。明道の行狀を伊川書給ひ、韓退之行狀を門人の書ごとくなり。死なれぬ先に何として書くや。夫より三年か四年後に死なれたるか、三四年後の事が死なれぬ先にしれたか、兩頭蛇也。どちがどふやら埒が明ぬぞ。又序の奥に、此事一つも不レ僞とて、和哥三神も御照覧あれ、僞におゐては御罰を蒙らんと、怖敷誓言をのせたり。此誓文にて

僞り也。誰がそちに誓文を好みたる。好めばとて容易に誓文可ㇾ立事か。此僞誓はそちが心に、人が實と思ふまじければ、眞實に人に信ぜられんと思ふ心から出たる誓文也。何と是に誓文が入事か。人が好む故無ㇾ是非ㇾ立しか。そちが僞からたつる誓文、汝が心に問ふて見るべし。そちは罰は不ㇾ當と思ふか、是皆罰なり。出家は落、芭蕉を賣り、邪曲の事共を作り、人を誣、迷はする事共數しれず。此罰、神も佛もあて給はず、そちが心で作り、自分の身に皆是等の事當る罰ぞかし。和哥三神が、汝が樣なる者に當ぬ・當ると云はおかしき事。汝が證據に慮外な和哥三神、其云分が罰なり。汝名のある哥讀か、哥學者か、十方もなひ事を申十方なし也。

一彼が十論の一段に曰、俳諧傳といふに虚實有は、三皇五帝・禹湯文武より其名は史記に定まる。儒佛・老莊の昔より虚を實を以媒とすべしと、此云分わけもなき事也。三皇五帝・夏殷周に俳諧といふ事ある物か。誠に三皇の御代には文字も筆紙もなく、繩を結んで大事は大繩、小事は小繩にて有よし、それに俳諧傳と云事がある物か。汝は何れの書より見たるぞ。漸、黄帝の御代に蒼頡始て文字を作れり。虚實が有とは其傳のうちに虚實がありしや、なを以て僞り也。歴代の書になき事を、何を證據に申ぞ。其名は史記に定まるは、史記に滑稽傳が有ゆへにそれを誹諧傳と思ふて、今する誹諧とひとつに思ひ、史記に定まると申か。耳をとつて鼻をかむとは此事也。夫はまだ頭の内にある事なるが、此樣なるとてもなひ事は、川向ひの喧嘩で、こちの山の峯の人が死んだと云に同じ。儒佛・老莊のむかしより實を以て虚を媒といふか。儒などにさらになき事也。虚なる者は、君子・實德なる人の德に化せられ、前非の虚を改て實になる事はあるべし、實が虚を中だつと云事の如何ぞあるべき。佛老にかやうの噺する者もなく、又聞し事もなし。亂心者の云分なり。詩さへ五言は漢武帝の時李陵始て作り、六言は漢の谷永始り、七言は武帝栢梁臺にて群臣に作らせ給ふ。始とぞ。然るを三皇五帝の時俳諧傳に虚實といふ事ありとは狂亂者也。史記の滑稽傳に東方朔・郭舍人などの類を上るうへ滑稽傳也。是

等今する日本の俳諧のごとく成ると同様なるか。滑稽とは帝の傍に有、おどけたる事申たる也。彼等寄合、起句・脇句・轉句など云連ねたるか。文字でこそあれ、和の假名の俳諧同様成と云程の事にてもあるか。馬鹿者也。文字も紙筆もなき三皇の時、俳諧がある物か、漢の時もなかりしぞ。但聖人のうたわせ給ふ詩は此論にあらず、文字は一つにても漢以來の詩とは大きに異なり。鍋も鍬刀も鐵といへばとて、刀劍で食事を煮らるゝか、鍋にて軍がなる物か。うつけ者也。知りもせぬ言なれば、見もせぬ事を出るまゝにいふ程に、皆虚言也。伊川先生の仰られしごとく、吉凶榮辱惟所レ召傷レ易則誕なり。誠に大賢の御言は千歳の前もなを今のごとし。おのれが云所皆誕なり。心安げに出るにまかせる故なり。禪小僧にてしばらく句雙帋のの語、無門關躰の物聞はつり、馬鹿なる事斗、若き衆の初心なるに俳諧教るとて脇道へ連行、入もせぬうそをつき、何ゝの儒佛・老莊、只おのれは狐が人を化し、草原を石垣町と見せ、馬牛の糞を蒲鉾と人に喰せると同じ。彼がいふ事を實と思ひ、高振るゝ人が笑止なる事也。又曰、滑稽は釣につたわりて菅家に佛鑑の禪を傳へ、法然の夢に善道の法を授り給ふごとくと、文盲の談義するやうなる事申たり。先菅家へ禪を佛鑑が授し事、證據のなき事、菅家御存生の時なき事、遙か後聖一が言たる夢中に傳法有など、夢幻泡沫とは佛語ならずや。殊に菅家は吾朝の鴻儒也。佛說などを交給ふなどあつても御心は儒也。君臣の義、(其)御忠信を御作などにて見るべし。佛者の奇怪の證文には早夢なり。是愚人をしばらく黄葉を見せ、泣をやむると同じ。なき佛を見たるの、せぬ入唐せしのと云に、夢は其證據の逃所也。靑砥左衞門が祿を辭せし事はしらぬか。汝が闇愚にて正道は耳に入まじ。元來利欲の爲には愚痴・姦曲なるがよさそふ也。偕夢中に芭蕉へ、滑稽は何と云神か、佛か、人が傳へたるか。菅家へは佛鑑、法然へは善道と名が知れたり。はせをの夢に、夢の傳へしは誰ぞ。か樣なる虛言、越人はまだ生て居るぞ。見も結ばぬ糸おかし。又曰、古池の蛙に眼を開ひて、爰に玄より受續て白悟すと。汝等は當流開

其の次韻と云、二百五十韻の集しらぬか。信徳が七百五十韻までは、色々かわりても古風也。其次韻二百五十韻よりが當流ぞ。爰をしらでは新古のわかちはしれぬぞ。汝等は何を以、古ひの新ィのと云ぞ、おかし。夢の傳の善導の夢と同じなど、馬鹿なる妄誕、おかし。又曰、此段の本傳は白馬經の弟子傳を見るべしと。經の字の文盲は前に申、是僞書也。そちが作りて己が云もの本傳なりと申程に、其言合ふにてか、有人の娘を媒するとて、先の聟は丁度彼がやうなる者といひ、男振り年も同じと云て、おのれが妻に仕たると云噺のごとく、おれが作り己が言を見よと、おかし。朝の字・經の字などにて、文盲も妄誕もよく知るぞかし。

一第二誹諧の道とは、虛實の自在より理窟を離れ、風雅の道理にあそぶ也と。又妄誕を素人だましにおかし。虛實の自在といふは、うそをつき、實を虛になし、虛も實なりと思ふか、何とも義も恥もなく放埒なるが自在か。汝が云分はそれ也。何事の上にも理なき事なし。其理には善有、惡有。わるい理は捨て能理に付が人也。然るに理屈を離れよと云ながら、風雅の道理にあそぶとは、道理といふ理を離るゝ理でないか。天地皆理なり。人物なを然(シカ)也。ひだるふ成て食を喰へば飢休る理也。寒き時は綿の入(いる)物をきる、着れば温になるが理也。そちは理を離れて、飢ても不レ喰居て濟か。寒きにも帷子にて居て心能ひか。口から出るまゝ也。又曰、誹諧の道と云は儒佛・老莊の間をつたひ、虛實中庸の法ありと。汝は儒佛・老莊の濟ンで其間をつたふか。先此樣成事を云心では、一つも濟ンだる事は見えぬぞ。汝が弟子に成と、儒佛や老莊が二年や三年で濟ムか。そちが云ごとく、妄言を云が傳ふのか。中庸の法有とは口傳へ引入るゝ前置、虛實に中庸とは、虛に中庸とは大分にうそ云ぞ。中分にいへば虛でもよいが、初心を欺き、子細らしく中庸の法、先汝が何所が中庸ぞ。妄誕妄言。三皇五帝の時、誹諧傳と云ふもの有など、虛か中庸か、たわけ者也。又曰、一瓢の水を蓄ずして俳諧自在とは何ンの事ぞ。芭蕉と汝が一瓢の水と云事か。そちが俳諧、何所がはせをに似たるぞ。似ぬ筈や、芭蕉のいは

れぬ事を僞り、私意を交旨にて云ふにより、埒もなき筋もなき云分、野分〻の跡の草原の散亂のごとく、それが一瓢の水か。自在〳〵と口癖に申が、書にもなく故人もいはぬ事共を史記の白馬經のと、人に理をいはれては遁所もなき事を義も不レ知、耻とも不レ思申は、いか様自在の虚言を得たり。併、目の明たるものに逢ふては、そちは盲人が大家の幾間もある所に寢て、與風(ふと)案内しらずに小便に起たるごとく、此が口かと探れば壁也。あなたが明くかといらへば佛檀なり。障子明れば爐が切て有所、行當り〳〵疊の上に小便するごとくに、めいわくなる時は大き成不自在なるべし。又曰、工家・商店の事にうとからず、酒肆・婬房の遊びに闇からずと、兎角狂亂也。商店と云ても、呉服屋は材木店の事不レ知、瀬戸物店は小道具屋の事しらず、見えたる事也。工家と云ても、大工は鍛冶屋の事しらず、紙漉は藥鑵屋の業がうとからぬ様に可レ成か。そちは人の師匠になるほどに、皆その通精蜜(密)にうとからぬか。馬鹿ばかり不レ耻申、おかし。酒肆・婬房のあそびに闇からぬとは、人の笑ふ所うとき所、親子の間も夫婦の中も不和に成て、身を滅し家を失ふ事に明るひ(い)か。是は闇ひがましならん。そちがはした金にて伊勢・京の茶屋女とあそびは闇からでも、又吉原・島原の様成所で、そちが金の分では闇かるべし。此やう成事を俳諧する者の親・近親などが聞ひては、そちを何と思ふとは思はぬか。是も汝が邪智にて自分の不作法・惡行をまぎらかさん方便也。うつけ者也。又曰、誹諧而已なれば爰を虚實の媒にして、世上の人和と云っ。是又己が惡をまぎらかさんとの邪習、そちが人和と云っは太鼓打・世の輕薄諂者(へつらうもの)か。自分には出家落、太鼓持て廻るをいみじき事とは思ふらめ。弟子も教(を)る云分か。つら〳〵思ふに、人として義と信となき時は耻辱と云事をしらず、かやうなる事書て口傳傳授と錢を取り、目を遂るを樂みとする淺まし。又曰、五倫の虚に落て恩の闇に迷ひ、道を失ふと云も亂心者也。五倫といふは何の事と思ふぞ。君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友、是實にて虚なし。虚なき故に人倫には五倫有り。是皆天の賦與する所、人

の人たる實也。五倫の名に虛といふ文字が可レ入か。不忠・不義・不慈・不孝成には、五倫といふ名はなき事也。自然不屆有と君臣でなし、父子にてなし、五倫といはれず。恩の闇に迷ふとは、子に後るゝ親深く憂へ、親死て子斷腸する類の事か、是又自然の理なり。汝が是を闇に迷ふと思ふか。親子は扨置、他の上にても己をおして思へば哀にかなし。況、君臣の間・親子の恩をや、何ぞ止事を得ん。李漢、老子を殺し、深く憂へ大惠に問て曰、殺レ子情無レ盡恐道不レ近と、大惠答て曰、殺レ子不レ憂ニ豺狼一也と。大惠は禪者也。何ぞ聖賢此情なからむや。人の恩にあづかりても何とも不レ思に、不義ばかり思ふゆへに如レ此の事を申。是も汝が人の恩何とも不レ思して不レ苦と邪智のかこひ也。又曰、十年の死地に身を鑄し、十年の活地に耳をあそばしめて、致知格物の條目に叶ひ、天下の一助とならんと、彌亂心也。先死地に身を鑄とは、何ゝの事なるぞ。事を申せ、活地に耳を遊ばしむるとは、口談又は義論にても聞事か。そちは皆死地にも鑄し、活地にも遊びたるなるべし。併此分にては、そちは生て居ると思ふか。皆死人ぞ。子細なき事を作りて人を悪に引入る、芭蕉を語り賣り、出家を墮落し、初心を誑て錢を取り、酒肆・娼房の遊び數奇是を人で生て居ると思ふ、不義不行跡は皆死地なり。死地の活地のとわけて申が皆死地なり。人として志ッ立ず、氣の迷亂するは皆死人と云ものぞ。今の分にては活地は何國に有べし。何と前の死地・活地の云分にて致知格物の條目に叶ふか。先、致知格物と云事もしらで條目に叶ふと、何派の儒を聞て如レ是の馬鹿を申ぞ。耻を己とかく、人のあたへぬ事也。此樣成馬鹿也。十方もなき事をいひて耻辱とも不レ知、致知格物に叶ふて天下の一助と成ならんと、何と人の心にていはるべき事か。慮外者也。かやうなる事は、天下の罪人と云ふものなり。

一第三俳諧の德といふ内に、詩哥・連哥に敵すれば氷の水より冷敷、紫の朱を奪んとす。此云分實を不レ知故に如レ此也。俳諧、詩哥・連哥に敵するとは、相手になるといふ事か、勝といふ事か、いづれにしても埒の明ぬ事。

詩哥・連誹ともに入所異也。詩よりは哥を委しくなしと思ふやうなる事は、我好む事に皆着する故也。佛者の其宗々を貴みいふと同じ。然どもそちが云分は、氷は水に勝て冷也。紫は朱に勝と云分、俳諧は詩哥・連哥に勝りたりとの云分也。四ッのもの何れも同じ。詩の下手は哥よりわるく、連哥・俳諧又同じ。上手がすると、俳諧連哥に可レ勝。其道〱の至る人は他の不才の人よりよかるべし。然るに俳諧が詩哥・連哥に勝て、水よりも氷寒冷(ひやゝか)に、朱に紫が勝、色を奪ふとは偏屈なる云分、氷は氷、寒には水にも勝、暖には氷負る、是常也。紫の朱を奪ふを俳諧の勝に喩ては、俳諧をわるふ云分也。紫は間の色、朱は正色なり。間色の正色を奪ふは、小人が賢者より時めくごとく也。不正の正を奪ふを悪みての語ぞかし。然るをがく云事、本語の心を不レ知、細工にやる故可レ笑。梅は梅にて面白く、櫻・海棠も夫〱に人の心に好・不好有もの也。詩哥・連哥知もせで、それに俳諧が敵すると、詩にはそちが流の假名の詩に勝せるか、負せるか、皆各其道に入てはいはるまじ。勝か負か、そちがせし俳諧を、哥讀み・連哥師に見せよ。是にて俳諧が勝たるか。てにをは吟など能笑種也。又曰、秦の優旃・楚の優孟・淳于髡は不信の辯にて敵國を和らぐと、彼等は何國に六國が和ぎて戰爭が止みたるぞ。不信の辯と云か、早埒の明ぬ事。不信に和らぐは前如レ云、輕薄者・諂者なり。和らぐといふても、不信は後の害、取所なし。美食・美服を心に願ひ思ふ故に、優旃・優孟・淳于髡がたぐひの遊說、辨士の浮べる雲の富を羨み、かやうの者を能事のやうに申ぞ。又曰、蘇秦・張儀は王家を諫め敵國を和らぐ、文武にあらずやと。何を云やら柔皆埒なき泥の海なり。蘇秦・張儀が王家へ諫入たる事なし。汝は六國諸侯の借號を王家と思ふか。王は周室なり。敵を彼等がいつ和らげたる事あるぞ。有無は史記にて見よ。彼等六國の諸侯をさわがせ、秦を滅ンとして六國、秦に耻かしめられ、地を割、賄、臣伏させし、此比云ふ日本の慶庵と云やうなる者共成に、國を和らげ文武など、子共にいふごとく、己が耻、文盲を自分に云事淺まし。又曰、儒佛・老莊八千巻にも三万言にも說ざる俳

諧の世法より、聖賢の心を汲ッで吾道の公言となせりと馬鹿を申。おのれ佛說八千卷・儒書一万言に說か、說ぬか、兩書見つくせしか、俳諧の書をだにとくと見たものでなし。己がいふごとく成馬鹿なる事が、儒書・佛書に可レ有か。何くで一切經を操りて不レ說を知りたるや。聖賢の心を汲とは、亂心物狂ひの慮外者、十方なし也。俳諧世法ばかり云か、夫こそ神儒佛、老莊・源氏物語・狹衣・榮花・軍書・哥書の事まで。其作者〲の志氣にて覺たる事はするなるに、誹諧の世法と、世法より外はせぬか。何ッと云ッ事をいふて公言と申ぞ。汝がいふ事は邪曲の私言也。推參慮外者、おのれが其身にて聖賢の心を汲むなど、何ともうつけの十方もなし也。扨も〲あまりの事に笑れもせぬ馬鹿也。又曰、つら〲思ふに、始には物理の二變より、中には滑稽の人を上て道理に虛實の證文とし、終りに例の强柔の力を添て智仁勇の三つ結語せし也と。此云分前に彼が云言と同じ。いふにたらぬ事ながら、物理といふ事理を離れよと云とは、都合せぬ云分、物皆理ならずといふ事なし。其理をつくすは智也。然るをそちは其理を捨たるものにて、汝が弟子共も理を離るゝといひ廻る由。此始の虛實に中庸の法有り。氷は水より冷敷、紫の朱を奪ふなど、皆しらぬ言いふ故、云所と此喩へ其表裏にて不レ合、夫が物理をつくしたるか。人物ともに變ずるは、瞬目の間もとまらぬは易の理なるよし、中々滑稽の人を上て道理の虛實の證文とし、淳于髡・蘇秦がともがらが道理の證に成者共と思ふか。國賊共也。うその證文には成べし。終りに、例の强柔の力を添へと名聞・好色に强く、其和らか成が强柔か。彼書物の爰を見ん人、物理も强柔も聞へるか、聞て見給へ。名利の力は汝は强く婬房に和らか也。是が强柔、知仁勇の三ッを結語せしと、汝是等の云分にて知仁勇の三德と結語したか。爰に書所にいづくに仁が有、知が有、仁(勇)が見ゆるぞ。亂心者也。おのれが浮世双帋のごとくなる物に、願人鳩かひの云やうなる言、物理の知仁勇のと心安そうに、狂亂者也。物理を知る者、ヶ樣の慢言がいはるゝものか。知仁勇の三ッにて終りを結したるなど、

聖賢にさへヶ様の三德には、白ヲ居給ひて結語せしと仰らるゝ事なし。去迎は物理しらず也。知る時はいわるゝものにてあるべからず。盲人の蛇見えぬゆへに怖敷事なし。うつけもの也。折々眼に見へ羨ム者は、戰國の遊辯の賊どものうへを、道理の證文など扱も／＼申たり。又曰、迦葉・淵明の一對は例の錯宗の法ながらと、淵明が一對に成ものか。淵明見ニ南山一の何を、禪者第一の達磨など云を聞はつゝ、迦葉と一對、儒と一對に成たがる云分也。已に迦葉は父母ヲ捨、出家せし所に、儒で云大切なる父子の義はかけたり。佛者の上からは能事に云は、其意違ふたればさも有べし。淵明は二朝に仕へず、宋の代になり其號を不レ用、甲子を用る忠臣義心鐵肝也。夫を一對とは、又樂天が詩に、虛堂の頌を合たる筆に反魂の術ありと知べしと、是知ぬ故也。虛堂は禪者也。樂天も佛者ながら其趣合ふまじ。樂天が詩文を見るに、爲ニ當來世之讃佛乘之因轉法輪之緣一又百千万菩提種、八十三年功德林などゝ云詩文の類、禪者の趣とは各別也。虛堂の錄も白氏文集もしらずに、詩を四五首見、頌の一つ二つを見、其人々の氣象依ル所もしらず、迦葉・淵明の一對も何もしらず、又人の云たる前後も不レ見に出ル儘也。中に淵明などの事は、富貴高錄塵芥のごとく、君臣の義を鐵石のごとく守る人を、汝ごときの心盲、酒肆・婬房の目よりは見へぬ尤なり。見へねば云ヲ所違ふ筈なり。その違ふ心にて書くものに反魂の術が有ことは、狐付の云やう成言、何としたる狂人やら、假にも卑下辭讓といふをしらず、釋迦よりは丁寧にいふの、龍樹を令官せんの、おのれが書たる物に反魂の術が有ルしれなど上もなき事ども申、不猫蛇なり。

一第四虛實論曰、虛は實を和らげ、實は虛を補ひ、何れの道も片し／＼ならずと。何其醉狂の寢言聞やうにて埒が明ず。實を虛にて和らげて能か、補ふが實といはるべきか。二つながら皆虛にて、たわいのなき事也。片し／＼ならぬ樣にとは、虛で和らげらるゝ實も實でなし。虛は實に補るゝとは、いかやう成補ぞ。先虛を補ふ實も虛也。虛に成つた實で補るゝ虛なれば、いよ

〳〵大虚ぞ。皆大偏屈の片し〳〵、汝が申やうが、かたし〳〵成云分也。又曰、孔子牛刀の戯れにあそぶと、論語の語をわづかに見、戯と云を能事見出したると思ひ申よ。孔子御心は仁義に遊び給ふべし。牛刀の語にて、孔子の戯にあそぶとは、胆にて脊中かくやうなる事を申。凶がる生き者也。汝は出家しても居たれば知べし。佛經に所々に歡喜踊躍といふ言が有程にとて、釋迦は踊が好奇(よき)にて、聲聞緣覺羅漢は踊子にて有と思ふか。踊と云字あれば、松坂こへても同じ事と思ふ成べし。又曰、牛刀の戯れを論語の要とし、法華には開權顯實を要とし、毋必固我をさとし給ふと。偖〳〵希(け)有成(うなる)事哉。牛刀の語が論語の要か。そちが儒は誰に聞たぞ。汝もだまされたもの也。論語の要が牛刀なるとは、取あげもならぬ事を云たり。開權顯實も要とは、又だまされた物也。開權顯實は法花經の文ではないぞ。天台が妙樂の釋なり。法花經は除ィて、其釋か要か、しらぬ事は云(いは)ぬ物ぞ。毋必固我をさとし給ふとは、孔子と天台と引合てさとし給ふか。誰が此樣成事を云て何をさとす。毋必固我も意必固我也。論語の要に牛刀をせしは戯と云字にて、汝が要にした物也。法花の要はそちも可レ知事なるに、しらぬか。法華の要は壽量品也。壽量品ばかり立たる法花宗もあるは、それにて知べし。知りもせぬ事を知ッたやうに云程に、高振、高慢云て人を怖(おど)す、邪智おかし。汝闇愚ゆへに高振、我慢にて人に信ぜらん（か、脱カ）とす。汝去年是を讀とて人集めせし由、其聞人の中に、一人もケ樣の馬鹿なる事に不審云ッ人なかりしが、兎角仕合者也。此やうなる事、口訣傳授して、剩さへ固めして金銀出されたる人も有よし、珍敷事也。高振我慢は頑愚の用也。闇愚は高振、我慢の躰、三皇五帝の時の俳諧傳より、手近く汝が心へ立歸り、放れ飛ぶ心を尋よ。又曰、實は少ひさし、針の沈むがごとし、大き成船は浮む。此語は新安の朱學士が、大學の序を委に看破せば、儒佛の内證行ィべしと、針の沈み船の浮むと云語で、大學の序も看破がなるか。大學の序、看破して佛教の内證も儒も行(おこなは)るゝか。又聰であるくと云樣成事申。針は鐵也。鐵の性は沈む物、針よりわづかなる鐵

屑ひとつにても沈むぞ。船は二千石・三千石積ても浮もの也。浮は木の性也。此理が大學の序讀としれて、儒佛の內證が行るゝか、心安ひ儒佛也。朱(朱子)などを學士など云事、及第學士などひとつに思ふなるべし。其わけもしらぬ筈也。又曰、我翁は虛に居て實に行ッべしと、是亦虛言也。越人いまだ生キて居るぞ。虛言ゆへ早云分違ッたり。そちは實を虛から和らげ、虛は實にて補ひ、偏ならぬやうにといはずや。此云分は片し〳〵と云ものなり。はせを左樣なるうつけたる事いはるゝものか。又曰、白馬は虛也と、成程汝が云通り、白馬經と云ものは汝が僞作にて虛也。虛實〳〵とひたもの申が、虛實は萬事の上に皆有。何ッの事の虛實ぞわけしらぬ俳諧の今來古往なし。芭蕉に勿論、かやうなる埒も明ぬ俳諧に不レ入事はなし。何事の虛實、其躰に付ていはねは聞へぬ事也。めつほうに虛實〳〵と申斗で、同じ事を狐の付たるごとくに申、おかし。そちが弟子にも此分か、虛實、儒佛・老莊に去とは聞飽き退屈したり。いつ云いひ分も皆埒の明たる云分一つもなし。又曰、般若の六百卷は知の一字より說廣める、是の丁寧に過ざるべし。況、孔子の遺書に龐居士が遺言を合せ、儒佛を反盡しては此論を鑑とすべし、兎角紛もなき亂心なり。何を申ぞ。般若といふは智惠と云梵語なり。般若と智と別の物の樣成申樣、さて般若を說れしは釋迦にてはなきか。釋迦よりおのれが書く此論が丁寧なるか。埒の明ぬ事しらぬ事、知る樣に云分、所々で同じ事違て云が丁寧にて、釋迦よりもまさりたるか。此樣成馬鹿なる物が何の鑑に成ぞ。云て聞せよ。うそにも前後かまはずいひ佛も神もおのれが從者のごとく云、狂氣の鑑に成か。況、孔子の遺書に龐居士が遺言を合せるとは、夫が合ふものか。前に迦葉・淵明の一對の所にて申と一つなれば取にたらず。遺書と遺言の字が一つなれば、合せたと申成べし、めつほう者也。龐居士が事は、儒の上よりは皆一休が云ごとく、あほう居士なれば云にたらず。ヶ樣なる身の程も不レ知人が可笑とも不レ思、只人を欺き利を得れば、おのれが心によき故、孔子の釋迦のといふを從者の如く云て、優旃・淳于髡・蘇秦・張儀が姦

佞、邪曲者を敵國を和らぐの文武の者など、何とも希代の愚痴文盲者。馬鹿の大膽成は飲する藥なし。華陀・扁鵲も術つきたる心意の迷闇、息災にて大病人、前代未聞なり。只放言云ひ、物さへとれるやうにとの心より外他なく、外の事は見へぬ也。されば古人いへる言有、齊人有ニ盜レ金者一。當ニ市繁時一至掇而走、勒問ニ其故一曰前盜ニ金於ニ市中一何也、對曰吾不レ見レ人徒見レ金耳、志所レ欲則忘ニ其爲一、實に彼等が事也。芭蕉に露なき事を僞り、聖賢をば己が家人同前に申、佛神を欺き、自分の勝手に能やうに、夢の入時は僞りて故人に夢を今見せ、聖賢の書も本意を曲ておのれが勝手に合せ、最下の賤言を書ては世の鑑なんど、人に耻る事なく、義理に背き何とも不レ思、前後あはぬ事ばかり、只初心を口訣傳授へ引入るゝ事斗目に見へ、市中を横行し、酒肆・娼房の心ばかり也。淺まし。

一第五姿情論曰、古しへは情のみにして今は姿の論と知べし。此云分表裏なり。俳諧の事なれば昔は姿也。今は情也。信德が七百五十韵迄段々替りても情はなし。其次韻芭蕉の二百五十韻は是當流ノ開基、古風・當風といふは、姿の時を改て心にて付る、心は情也。然に汝等此兩樣の俳諧はしらぬそうで、古池の蛙より眼を開きなど申事、前に評して笑ふたり。むかしは姿に俳諧を專せし證には、今に古き衆など誹諧が句の上になしなど難ぜらるゝ事也。昔は點するにも俳言なしなどいふ事、姿故也。しかるを表裏に心得る事、今の俳諧の本をしらぬ事明らけし。又曰、君父の忠孝も甲胄を帶すれば忠情備り、衣食を供すれば孝情顯はると、先ッ此云分、馬鹿成云分、姿といはんとての事そうなれども、古と今姿情の事は前に云通り。姿にさへ甲胄帶すれば忠と思ふか。帶し物にて情が備はるか。情といふは何と思ひて云ぞ。姿より情大切也。鎧着たるとて忠と可レ申か。君父に敵せし無道者反逆せし軍、和漢多し。鎧さへ着れば忠情が備はるか。うつけたる申言也。衣食を供すれば孝と思ふか。喰物・着物の能を父母に勸むるが孝ならば、貧なる者には孝は有まじ。曾子・閔子騫など極貧なれども大孝也。心の實なふて父母を養ふは、孝

(やく(役)カ)までやりたてず、至二於犬馬一皆有レ養、不レ敬何以別と仰られたり。汝心に實なふて申せば、其詞に皆實といふものがなひぞ。又曰、世に人有りて情は先きなりと論ぜば、君父のまへに寢て居て忠孝の情すべきや。夫は何と心得申ぞ。主親のまへに寢て居る者の鬢をあげて、大學に入る年よりして有物か。君父の前に寢て居るに、忠の孝のと評が可レ入か。亂心禽獸也。前に云ッ不レ敬何以分クレの敬の字をそちは姿と可レ申か。情は先きにして情より姿は敬する也。無法者也。君父の間の忠孝を云に、其前に寢て居て杯、最下の事を申。起て居て膝などさすりさへすれば忠孝か。十方なしなり。齒牙にかくる事にあらず。又曰、此論にて儒佛神道迄あつかい、詩哥・連哥まではかるか。俳諧は言語の媒、新古の鑑とも知るべきなり。たわけ者哉。そちが此論で儒佛神道がさばかるゝか。詩哥・連哥がそちが書たる是にてさばかるゝか。是にて何が一つ埓の明事が有ぞ。汝が云分、其前後相違云分轉々を是にてさばけとや。此やうなる事にてさばかば亂心になるべし。先此云分がどちがどうか、さばき明らるまじ。俳諧のさばきのごとく表に月せず、戀一句、躑躅を正花、是等さばきか。其迚は亂心也。又曰、此論は全く誹諧の論ながら、天地人三才の前より君父忠孝の姿を作り、儒佛に文章の姿顯れると、汝は亂心に疑ひなし。ケ様の夢を見て申か。何ンと云書に有ぞ。先天地開ぬ先きとは、いかやうなる事と聞ひてかくは申ぞ。よく聞け、予などが可レ知事にてなけれども、堯夫先生數學の聖が仰られし説、天先きに開けるを大始と云、一元の始也。是より漸五千四百年して子の會といふ。其中に當り、輕淸る氣登りて日・月・星・辰の四の象をなして天となり、此故に天は子にさすと云ッ。夫々五千四百年にして子の會終り、丑の會の中に當り、重く濁るの氣凝結し、物始て堅まり、水・火・土・石、四ッの形を成シ地と成ル。故に地は丑の會に終ると云。寅の會の中に當りて人物始て生ずと、是三才の始也。其前はいはず、邵康節の説也。然るに人は莫太の年數經て後に生ず。三才の前には何もなし。三才の始、天の開たる年數莫太の後、日月星辰の形成ル。日

月星辰の形さへなき時、君父の忠孝の姿を作り、儒佛の文章の姿をあらはすとは、出るまゝの阿房者也。三才の前を堯夫先生さへ其説なし。いかに虚言をいへばとて、日月の姿さへなき時、忠孝の姿・儒佛の文章あらはすとは、亂心者にうたがひなき馬鹿也。

一第六俳諧の地と曰、抑儒佛の大道も勸善懲惡を地とす。仁義禮智に王城の儀式を備へ、殺盜・婬妄に地獄の躰想を作ルと。そちが云事は本を捨、皆末也。俳諧の地を申せ、是に儒佛の勸善懲惡も仁義禮智も入事なし。俳諧の地の句といふ事が合點行ぬゆへに、いらぬ事を取出し、まぎらかす。葛藤何ゝの事もなひ地をしらぬか。百首の哥など讀にも地哥といふ有と。連俳、本より地の句と云あり、其地といふをしらぬと見えて、色〳〵なる事申。心安く何ゝの事もなきもしらぬ、おかし。仁義禮智、王城の儀式斗にあるか。天子より民間までに、人として此四つかけると人にして人ならぬぞ。其理もしらず、言もしらず、人のいふ名を知りもせず、知り顏におかし。王城の儀式の仁義に、地獄の躰想と對も珍しき書やう也。扨、殺盜・婬妄が地獄の躰想なれば、汝よく〳〵聞ケ。そちが地獄の躰想より直に地獄なるぞ。先殺生はせぬと思ふ成べし。然ども大殺生也。佛法で云時は、なき事を教へ、習ふ者を闇愚になし、そちが弟子皆汝を手本にし、知も合點も行ぬ事を、俳諧の外に高振高慢に云ちらし廻る。佛性は皆死して、我慢ばかりに胸はなり居る也。佛性を殺すといふは、其者〳〵の志を皆殺したるぞ。前に云佛經に不レ得二我慢一白不レ憍レ人とは佛語也。そち憍慢を人に敎るは、人の佛性の殺生、形を殺し魚鳥を殺すより大罪也。盜みとて財寶を夜る入取りはせまじ。然ども芭蕉のいはれぬ事書れぬ物をいはれたかゝれたと云て、口訣傳授と錢を取る事は何ゝであらうと思ふぞ。妻子飢寒に堪ヘ兼、命を捨て一六にする盜は思へば哀なる事なり。そちは其事はなひではないか。婬は酒肆・婬房の遊びに闇からずといへば不レ及二是非一に妄は翁は夢中に天より俳諧傳へられしの、釋迦の說の、般若六百卷より汝が此書か丁寧成の此論にて儒佛・老莊・詩哥・連哥もさばけばさばかる

ゝのといふは皆妄言也。都でなくそちが居る所が、皆地獄の躰想なり　又曰、此地を佛家には平等心と云ひ、儒道には恒の心といふと。先ッはいかいの地と云其地は、ケ様〳〵の事を地といふ埒をば明て、平等も恒の心も申せ。夫を埒明けず横筋へ行、何ヽ事もなく安き事の地をいはぬは、しれたかしらねか、おかし。平等の恒の心など云が、俳諧の地か。腮にてかゆき所かゝるゝといふと同じ。又曰、男女一對は禮交の一字を以て昆弟・朋友の五倫をふくみたる、是を双關の文法と云なりと。しらぬ事を云と耻をかくに、なぜに申たがる。男女一對とは夫婦と云か、男女の夫婦は別有といふぞ、禮にて交ると云は又違ふぞ。禮交といふ一字とは不ニ心得ニ云分也。昆弟・朋友の五倫とて別に有様なる云分、兄弟・朋友皆五倫の内なるぞ。扨双間(關)の文と云が、是が腹筋の釣る双關なり。古文の註など見て、男女禮交の一字と云か。双關は替りたる双關の文なり。鼠双紙・化物盡の様なるものに双關の文法、少は耻といふ事を思へかし。

一第七修行地と曰、修行といふは跡へ戻る事なり、昔より儒佛の學者も修行は先きへ行事と覺えて、爰を探しかしこを尋れども、闇がり峠を越兼てうつゝ人と成、悟りの媚人と成と、一つもいふ程の事埒の明ぬ事斗也。學文・藝の上の修行にも、跡へ戻るが修行とは、何といふ事ぞ。何(いつ)くから其道〳〵にて戻る事ぞ。行着ねば戻りて事(詮)のなき事勿論なり。先其道〳〵にて極地に至りて和光する事は可レ有、只一概に戻ルは修行とは十方もなき云分也。其上昔から佛儒の學者が、皆一様に戻るばかりか。汝も聞及ぶべし、禪者共も庭前柏樹子と云猫をきりて示ス麻三斤と云が一様にはなきぞ。前にも云ごとく、儒佛を汝知りて申か。是までの云分、知る云分一所もなく、皆出るまゝ也。はや此内にもうつゝ人と成、悟りの媚人と成云分、夢現と云は、現は目ざめ正氣にて居る事を悪き事の様にいひ、悟る者に媚と云事なし。媚は悟ッぬ故に媚まはるぞ。物の云様をしらざる故、汝が云事は子共の如くにて聞へぬぞ。儒には顔子の修行地を見、其進退を不レ見と、聖人仰られたり。

佛には應レ無レ所レ住而生ニ其心ーとはいはずや。是が跡へ戻る事か。其故に又俳諧と云物は、人の能き句を読み盗み、我能き句を又出し度なるが大き成煩ひなり。跡へを踏ぬやうに作意をはたらかねば古くなる也。夫を跡へ戻るが誹諧の修行とは、馬鹿なる云やうなり。扨是等の云分、俳諧修行に皆入らぬ事、儒佛の學者穿鑿、脇道へ連て行云分也。ものゝ直に云事の不レ成性なり。又曰、和哥の式も定まらず、里村家の掟も侍ざれば心いそがしき猿もつたなくと、是又出る儘口也。汝は和哥の式定メたるか。俳諧に和哥の式を定メねば成ぬか。先俳諧の式を可也にしらせたし。里村家の式とは連哥の式か。是も云様わるし。連哥新式もと可レ申里村家にて定たる掟にてなし。前に云ごとし。偖里村家に、表に月なくして裏始の月にてする掟が有か。戀一句にて捨る法が有か。うかれめの類戀にせぬ法が有か。何ッの和哥式、里村家掟知りもせず、見たる事もなき云分は、汝が前々云たる事が皆證據也。尻と口で云様で、埒が明ぬぞ。連哥に堅懷紙に書は里村の式か。何を云やら亂心なり。又曰、儒佛にも回ガ如レ愚悟に未レ悟とも聞へたるは、學ッで先きへ行にあらず。又しらぬ事を云度がる。回如レ愚とは跡へ戻る事とおもふか。是は先へ滯なふ行給ふぞ。聖人の仰られる事、御言葉に疑ひなく、其旨を得給ふ故に御褒美の御詞ぞ。戻る事にてはなし。悟に未レ悟は、予はしらね共禪語か。悟道する人は高振人を下ダさず、和光同塵せる心か。又悟道したと思ふが、悟道せぬゆへ其念起ると云事なるべし。何れにてもそちが云分とは皆違ふたり。しらず其事の心を得ぬ事は、いわぬがよいといふ事を知るべし。皆しらぬ事を云故に笑るゝぞ。又曰、故人も爰を歸去來とも、歸家陰座ともいへり。歸去來は淵明の事か、彼賦を見よ。是が跡へ戻る事か。いはゞ先へ行たるなり。覺ニ今是而昨非ー、わづかに歸ると云字を見ておかし。知レ非は善に進む也。戻る事とばかり申、馬鹿なり。歸るも進む功也。歸家陰座も其心にて、我自性を見、自家を知るともいへり。歸去所なるべし。そちが云分とは各別なり。又曰、韓愈が理論を好めば多麒麟の情をつくし、意は儒佛の中

庸に遊んと云分、いよ〳〵おかし。かくいへば、汝がいふ事を意地にわるふ云ッ樣なれ共、左樣にて更になし。先此云樣、儒書も佛書も出る儘なり。韓子の理論を好とは、退之を其見樣違ひ也。文公、道の心より止む事なくいはるゝ事也。理論好むとは難レ申。多くは麟の情を盡すとはいかんぞ。麟の解にては麟の事、原道にては道の事也。其外其文〳〵にて其言をいはるゝぞ。多くはとは、どの文にても麟の事が出るか。又情をつくすとは云分大きに違ひたり。麟の德なり、情にはあらず。其解曰、鱗所三以爲ニ鱗者以レ德不レ以レ形と有ぞ。何ンぞ情成べし。儒佛の中庸に遊ぶとは、佛は過不及なる物にて、中庸の理とはいはるまじ。天台家にて非有非無中道といふ事あるよし、しかるを中庸と一つの樣に思ふか。佛に中庸と云文有か。又曰、此篇の文章を評せば、天下の俳諧師を掌に並べて、婢子を見るより明らかなりと、此樣なる馬鹿の十方もなき事、本心にてなき事明らか也。天下の俳諧師とは天下に幾千人あるべき。其內には廣學なる人もいか程あつて、俳諧なさるゝ人もあるべし。哥學者・公家・門跡、其外大名・御歷々も可レ有に己が手はいか程大キなゝ手ぞ。並べて婢子のごとく見るか。うつけ者の慮外者也。汝天下の俳諧師の程を皆知りたるか、何として可レ知、亂心也。此樣成化物づくしの繪のなひやうなる鼠双紙で、天下の俳諧師が手に並べらるゝか。おのれが是を結講なる物と思ふは、鵄が腐鼠を珍味とおもひ、犬の不淨を貴むと同じ。耻といふ事不レ知、義と云事しらず、扨も〳〵齒牙にかくるゝ垢らは敷事也。推參千萬なる妄言、おのれ是が跡へ戻る云分か。假にも卑下辭讓と云事しらず、なひ事を高振馬鹿のとたん也。今が亂心なるに、猶此上にいかやうなる狂亂にかなるべし、笑止也。

一第八言行と曰、俳諧の言行といふは、口に云所を身に行ふ。さるは儒佛・老莊・楊墨の道、何れか言行の二ッを離れむ。儒佛・老莊は言行離れまじ。俳諧に何といふ所は皆行ふか。十方なし能聞ヶ。公家・大名・聖賢・諸藝、句にはするが、其云ふた言皆行はねばならぬか。酒飲むといふ句は、予がごときの上戶は酒を行ふべし。

下戸は飲ぬ程に酒といふ句はせぬか。己は言行ともに合ふたか。先あふたと思ふ事もあるべし。うそを云て、うそが身に行ふ事は、合ふたとおもふなるべし。儒佛・老莊は一つもあふあはぬと云に不ㇾ及、汝がしらぬ云分、汝が云にて能知ㇾたり。儒佛・老莊を、百の内一つなりとも合て見よ。一つもあはぬぞ。儒佛ともに言行の合ぬ事を、いはでも能言が闇愚故、去迚は汝が儒佛・老莊の名に耳がつぶるゝぞ。いはでも能言を闇愚故ひた物巾て耻をしらず。汝がごとく成者は是非に不ㇾ及、そちが様成文盲を能事と思ひ、此様成馬鹿な事に堅ﾒを仕、口訣傳授などせらるゝ衆は、盲人を案内にして盲人の大河を渡るに同じ。皆虚に誕に流れて人の笑ふはしらず、高振高慢に成、俳諧は扨置、其心にては人と交るに知らぬ者に奢り悦び、知つた者につめられては怒、無念に胸をこがし、放心せられん事うたてし。夫でも言行が一つと思ふか。口にいふおかし。又曰、其黨の聞へぬ事が面白くば、四方白壁の謎も作れかし。その黨の聞へぬ言とは、俳諧の事か。そちが此内に書言、一ツも符合する事なし。人嘶すを聞に、聞へぬ句多し。四方白壁の謎が聞へぬか。子共も知つて云豆腐也。是が聞得ぬか。扨も、又曰、俳諧は有がたきものなり。あれらの不埒申さば、狂氣者とて手錠さゝれんと、不埒云事知りたるか。段々前に予が云如く、そちが云所皆亂心狂氣也。他の上より汝が狂氣を立歸り見るべし。良基公の式目を破り、戀一句にて捨、表に月なし、治郎・遊女戀にてなし、芭蕉俳諧は夢に天より授かるなど、跡方もなきうそ。新式を破り、其外汝が書てはせをの書れたなど、幾數百有ぞ。幸にして聰を勤かし、飽までくらひ温に着て、牢獄を遁れある事、俳諧のありがたき物と思へ。又曰、爰を法然も親鸞へ私語て愚禿の一門を立させ給ふ。さるは儒佛さしはさみ、信心不二の大乘法、後の僧達は心得違へならんと、何を以て今の本願寺の僧が心得違ひぞ。開山上人の掟の通りと見ゆ。扨信心不二の大乘、儒佛さしはさむとは、妻帶・魚肉喰ふと云事か。是開山の教なり。儒佛さしはさみとは、誰が云ふたる事ぞ。己が心也。親鸞の愚禿

といふは、自から卑下謙退の名なり。愚禿を儒佛さしはさみたる大乘の宗と思はゞ、おのれはなぜ辭讓の心はなきぞ。此汝が書たる物に、一所も辭讓の言なし、實の心なき事明らかなり。愚禿の名を大乘といふも、只己が酒肆・婬房をまぎらかさんとの用心也。大般若六百卷より、汝が根なし草の化物盡の樣なる本が丁寧なるとは、おのれ釋加よりまさるか。其心にて愚禿の名を心得たる云分、取にたらぬ妄言也。汝跡へ戻る修行か出るまゝに申ても、己は道もなき所を無上に高登りして申所、人まで惡所へつれ行ぞ。此内に何が實が有ぞ。誹諧の道を言樣をしらぬゆへに、とてもなき知りもせぬ儒佛・老莊・詩哥知て申ても、それが其心では妄言也。況や、しらぬ事は己が名乘て妄言といふと同じ。皆妄言也。三才の先に誹諧の文章が有り、三皇の時誹諧傳有の、釋迦より丁寧を說の、孔子を冷官にせんの、龍樹を令官にせんのと孔子・龍樹の上へ上り、妄言はく事禮義しらぬ筈、耻敷と云事をしらず、出るまゝの十方なし。出家落、釋迦より丁寧の何もしらで、朱子の四書の注があやまりなるなど、己より昔の揚雄・許衡か如ク廣覽轉誦も、君臣の義を失へば云所皆虛なり。況や汝が如ク猫でも蛇でもなひ化物、和哥の連哥の誹諧の本意もしらで、悉皆願人の辻談義、前後の合ぬ事共を耻ぬうつけの惡癖のふとひ馬鹿也。謙退耻不レ知、聞ば名見龍と付といへり。己儒をしらば、ケ樣の文字可レ付か、慮外者也。又それに對せぬ一名は獅子坊といふ事、昔の山法師の闘戰好みの惡僧の名にはよし。詩哥・連哥に遊るゝ名でなし。居合拔、やわら教へのやうなり。名は實の賓なるぞ。能聞ば、見龍は闇愚故付名也。獅子坊は己が心に人を隨ん人が怖と思ふ馬鹿の實の名なり。此比ある人予に笑せられし事あり。支考が名を三慢坊といはれし故、是は何とせし心にて付にやと申せば、高慢・我慢・自慢斗、申廻るゆへなりと、予聞て誠に能坊主落が名也。身の程もしらず高振、取留たる誹諧の事も不レ知自讚、我を我とほむる、何も一ッ理の濟たる事ものふて、儒佛・老莊、是等三ッ根源、名利・好色、道に心なき故心の闇愚より出たる我慢・自慢なれば、闇愚庵と云俳號

を上に置たしと笑ひたり。

一第九變化論に曰、家に三法の付句有。第一有心付、無心に不レ對、細に前句の姿情を見つくし、一字一言に心を賦るゆへなり。其次に會釋付といひ、其次にのがれ句といひ、一卷は此三法に變化すべしと、先言分愚也。我家にとは、おのれが師にて細ヵに傳へたる家は誰ぞ。芭蕉とはいわれまじ。越人存命して其始より知る事は汝知ルべし。先芭蕉にケ樣なる馬鹿なる事なし。そちが自家の法か。有心躰といふ事誹諧斗と思ふか、連歌にも有り。本ト和哥に有名なり。無心に不レ對とは馬鹿なる云分、無の名ありて有あり、万事の上にしるべし。無といふものなくて有が有物か。無心不レ對とは子細らしきやうで埒が明ぬぞ。前句の姿情を細ヵに見盡し、一字・一言に心を賦ると、夫は古風の事なり。當流の發起は左樣の事ではなひぞ。何と芭蕉が其樣成事可レ被レ言か。發起の付樣は其樣成事でなひぞ。前句をしらずに誹諧付句が付らるゝ物か。そち斗が見て、外の誹諧師は見ずに付るか、うつけたる云分。會釋付、そちが家の法か。昔よりいふ事を此比聞出したるか。のがれ句と云ひ分、打越の氣味遁るゝは皆知たる事、前の用る所を各別に取かへ付る事か。夫もむかしより云事ぞ。其三法で一卷が濟か。一句に百句も二百句も付もの成に、只三ッに極付るといふ事、窮屈なる誹諧、有心・會釋・遁レの外にはさせぬか。百千に變じ新敷付るが作者の働、粉骨成ぞ。しかれば其人々の作意にていくばくの變化有べきに、只三法とはおかし。又曰、一念の前後に寄て論ぜば、喩へば色欲に身を滅し、轉奕に家を失ふ。面白キ方を先にし、打負て今宵縛せられ、橋に引れふと思ふを先キにせば、一度はあやまつとも、一度はゆめ覺メざらんや。是誹諧の世法に可レ成か。しかるに世間の誹諧師は前念・後念は扨置、打越のはこびをさへ不レ顧と、雪の上に霜のふるごとく、ひたもの馬鹿を申よ。先一念の前後、汝が知ッたか。名利の巧に、惡事は一念の前後も可レ知。何と出家落では人が尤と云か。汝一念の私欲に後念を不レ思、坊主落たるは面白キ方を先にし、佛法で云時は將來地獄に落、永劫の罪を得る事

は前念の不レ思所なり。轉(回)奕打、家を失ふは我物にて是非もなし。汝は出家にて有り、佛家を滅したるぞ。余所の事の様におもひて居ル愚也。一度はあやまつとも、一度はゆめ覺メざらんや。そちはゆめがさめたと思ふか。さめねばこそ、ケ様なる埒もなきうそは改ぬぞ。何と、然に世間の誹諧師は前念・後念は置、打越のはこびさへ不レ顧と、汝は夫知りたるか。翁の作述と僞り、續猿蓑抔に打こしのはこびの惡き句、いか程有と思ふぞ。しらぬ上に仕たる物なり。世間の誹諧師とまへにも云ごとく、馬鹿の慮外者也。又曰、此故に我翁は趣向定法を立て、二十五ケの條とはなせりと、いふに不レ及僞書なり。先よく聞ケ。趣向定むる法とて、句をするに法が定まる物か。古風にこそ毛吹草・便船集など、名古屋といふ句には政常・信高の小刀を付、尾張と云へば萱津・呼續・鳴海など云名所を付合にする、是趣向也。當流では違ひたり。尤名所も其所の土產等も付る事はあれとも、夫は用なり。躰の趣向は心なり。汝其句のあしらひのやうに定むる法と云、先芭蕉になし。定ると(も)當流ではなひぞ。二十五ケの一條ともに妄言なり。趣向といふもの、其人の心〳〵にて、泉のわくごとく其作意、働は極りなし。前にも三法の、爰にも趣向定る法のと馬鹿を云。誹諧の一卷は喩へば琴也。表八句、表に神祇・釋敎の類せず、是非月一ツこぼしてするも不快也。是極ル法は琴、趣向は琴柱にて、其調子の變ずるに隨ひ柱は極リ定まる場なし。しかるを趣向定むる法が芭蕉に有とは、文盲成事を琴柱に膠と、昔よりそちがやうなる偏なる者を云事なり。又曰、誹諧の樂じ方は碁・將棊の工夫と替る事なしと、是も琴柱に膠の云分也。皆本をしらざるゆへ違ふ。尤なり。皆其道〳〵にて工夫稽古も替ルぞ。兵法つかふも、弓射も、一ツと云と同じ。碁も句にはするといふべし。工夫は夫キに違ふ。碁打に初て誹諧させて見よ。一ツか、別か知るゝぞ。何を云やら。又曰、大名なれば碁は御下手也とあらんに、商人と趣向を定メ、損した門に畏ると付ケば商人は先手にして、畏るが後手也。實に御下手の情も失はず、恐れ入風情を見るべしと、そちが作る前句にそち

が付る句なれば、是能キ句なるべし。されども句も云分も埒なし。其は御下手とは商人が大名を悪口か、損した門に畏るにて、風情が何と有。是が前へしかと付たか。大名の恭に相手は商人ばかりに極るか。大名に畏ると云が風情か。商人は先にして畏るは後手とは、一人の商人が、二人の様に聞ゆるぞ。此やうなる句を付て、風情を見るべしの自讃、文盲ゆへなり。又曰、心付の法は、例の大名に薄着數寄なりなんどあらんに、山寺の老僧を趣向にして麥飯を句作にすべし。世間は吸物か、時の結講を安ずるゆへに、例の噂とも斷とも難ず。是等に麥飯の句作り・付合・誹諧のこなしともいへり。是は老僧を取て大名に向ひ付といふ也と、何をいふやら、馬鹿なる事斗。例の大名と云例の字はいかに、本の儘大名さへ出ればといふ心で例のか。此前句も汝が前句なるぞ。しかるに大名に薄着數寄といふ句が出ねば此句はせぬか。大名にも薄着ぎらいの大名もいか程かあらぬ。薄着數寄なりとあらんと云が、笑し。夫に、山寺の老僧が山寺の老僧にてなくてはならぬか。

只老僧でもあるべき事なり。めつぽう成趣向也。句作りに麥飯をせよとは、外の食類は悪ィか。へんくつ成句作り趣向也。世間吸物か、時の結講を句作るゆへ、噂ともなり斷とも成て難ずるか。扨へんつく者也。大名とあれば商人、山寺の老僧の外は悪ィか。吸物結講にも噂・斷にならぬもいか程か有べし。麥の飯の外は噂・斷と難ずるか。是を付合諧のこなしと、先當流付合で付るは嫌ふぞ。古風こそ付合で付たれ、當流しらぬ言なり。能明かなり。付合をあしろふ事はあり、夫は用也。體を付合に用る事は更になき事也。こなしといふ詞も、治郎・傾城買の云様で、和哥・連哥の人には不相應也。其上趣向も句も質も跡踏ぬやうに思ふてさへ、新敷は成兼る物成に、二升なべは二升鍋、三升は食のならぬやうに、阿房なる事共をいへり。無理に偏屈に成様に教がおかし。大名に老僧が向ひ付か。前の大名に商人の趣向も一つなり。向ひ付と云はあれども、此様成事にてはなし。翁の撰の冬の日・初懐紙などに有ぞ。商人・老僧の云分にては、見ても合點は行まじ。世間は大

名・吸物・結講たあんずるに極りたるか。汝が偏屈に狭ひ心で、せ間〱と毎度申、おかし。句はむりやう(無量)の物にて、何を人が可レ付、兼而いかゞ極メらるべき。當流は何付と、そちは思ふて是を心付とは申ぞ。此様成心付が有物か。しらぬは是非なし、しらずしていゝたるで、一ッもあたらぬぞ。又曰、後は其人の風俗に付テいくらも有べし。打こしむづかしければ、其大名を動して薄着・鷹野戻りと見立なき所に、物持て向へば向付也。働を見るべし。後の大名の前句はそちが一句作りたる句ぞ、などあらんにといわぬか。作りたる一句の前句に打越が六ケ敷事が何か有。薄着にて大名を鷹野戻りと見る云分おかし。大名壹人が薄着で鷹野に出らるべきか。大名ならば人數多可レ有事、犬も鷹もあれば、薄着にて獨のやう成云分、夫を働を見よ、向付を見よなど笑殺する事共なり。又曰、喩へば村雨の日影といはんに、田中の松のあちこちと付たらんに、爰にて前句の情を働し、我は狐に化ヵされたるやヲと付、前句のあちこちと云詞のあやを聞とがめて、此情を捹たれば、此心を起情といへりと、いよ〱そちが誹諧は古ひぞ。起情の捹へるのと云は、人をだましまぎらかす例のそちが病ィなり。田中の松といふに狐にばかされたと云は、子供も誹諧すれば思ひよる句ぞ。時代古と云物也。又曰、昔は貞享式を探り、響と云蓉と云ィ走りと云三名有リ。中比は東花式には躰の付合、今は十論に名を出して、名は十五なれども三法にして、七名八躰も三法の細注と知べしと、古暦で日月の蝕見るやうなる事を申よ。響・蓉・走と云事、昔から句に有事、七名八躰は渾哥の趣にて、昔から云事を大事そうに申、そちは仕合者也。若ャ衆の何もしらざる人斗にあふて、ケ様成久敷事を取出し申て尊敬せらるゝ。併罪人にても重ィ罪也。何の事もなき事を取出して、口傳傳授と堅メなどさせる事は、そちが心に問て見よ。恥かしかるべし。古ひ事を古流の誹諧の本から見出し、秘事がましくいふ。おかし。八躰・十五躰と云事もなひぞ。其名は、

幽玄躰　行雲躰　廻雪躰　長高躰

遠白躰　澄海躰　有心躰　物知躰

不明躰　至極躰　理世躰　撫民躰
麗　躰　花麗躰　松　躰　竹　躰
存直躰　可然躰　秀逸躰　抜郡躰
鳫古躰　面白躰　一興躰　濃　躰
見様躰　一節有躰　拉鬼躰　强力躰

是八ツや十五か、哥にもありて夫を連哥も云事也。祕事がましく、初心成人に色々子細を申なるべし。前句の付合心壹ツにて付句斗引放は、別成句の仕様あり、前句を取わけ付る仕様有り、禽獸を人の上にて付る有、五文字を付句まで用る仕様、憂キと云につらき一句結びて、同意にならぬ様有、前句の終りの五文字を、付句の枕言葉にして付る様有り。詩の對のごとく付る様有。うけて付る様有、かけて付る様あり、きせて付る様有。前句の一字にて付る様有、猶其外いか程有とおもふぞ。しかるを八躰の十五躰の三法にて變化させ一卷はするなど、付様は三ツや、百法と限ル事なし。前に云ごとく趣向は泉の涌ごとく限りなき物也。廣ひ誹諧を趣向定ル一ケ條じや、一卷が三法の變化と云事、昔より轉ずると云が變化なり。別に名をいひ、初心たぶらかす邪知か。但しらぬにてあるべし。付句の仕様・發句の取所、發句に成物ならぬ物有もいわず。發句も吟と語路ばかりにて能句有、物にて能句有、詞にて能句に成有。そちらがごとく輕がよひとて、素湯飲むやう成句を能など云よし。發句といふもの一躰に、又も〳〵聞るゝものか。人の跡踏ぬやうに新敷ィに心をめぐらし、新に進み〳〵する心なるに、跡へ戻るが能など妄言を云は、當流延立をしらぬ故也。知りたりと申て見よ。知らぬが定なり。證據は汝が云所にて明らか成ぞ。又曰、其席へ臨ム時は、衣食に一日の機嫌を調へ、身は泰山の雲納り、流水の風しづかなるごとくと、口から出るまゝに昔から古風のものどもの書たるを、今そちが家風の祕事の様におかし。衣食に一日機嫌調とは、美衣食を調へ、心能やうにして出るか、夫皆女の出立なり。出る時は其身〳〵の分に隨ひ、洗濯物にてもよごれぬものにてよし。不相應の美服は慮外といふ物也。宋の大祖さへ、洗濯したる御衣召たもふと申ぞ。泰山の雲なく流水の

しづか成様にと、是心が何ゝとそちはそうなつて出るか。左様成は賢人分上の事也。汝出家を落、妄言を立て、泰山流水の静なる心か。産禅工夫する出家は皆馬鹿成ぞ。破戒してうそつくが悟なるべし。張良・孔明などが軍中に有様成事を申そちが心の裏、只今迄一日にても左様成事有か。妄言也。汝が心は淫房・名利のみにて有ぞ。酒肆・淫房の遊び闇からぬと自分に申せば、泰山流水の静成事のなきは明ヵ也。妄言・僞書をする者は、心は靜ならざる證據にて、又曰、張子厚が書室の銘に有ては砭愚と訂頑の質も難ズ、東西の文成も難ず。参か崇伯子かといへる其外は、風雅の文にあらずと、何と云言ぞ。實に肱尻で鋸引すると同ジ、埒の明ぬ事を、西の銘を風雅の文にあらずと、尋常のあれを文章詩賦と思ふか。眼のつぶれたる云分、風雅の文章と見て何と埒が明物ぞ。質も難じ文も難ずるとは、其難は何と難じた難を云べし。先、砭愚・訂頑を質の文のと何を申ぞ。参か崇伯子と云斗にて、其外は文でも質でもなひか。砭・訂は爰へは入ぬと斷たり西の銘と云物ぞ。西の銘が文でなひと云事、木に魚を求、水中に狸を狩ルと同じき所に求る馬鹿なり。推參慮外者也。聞ば、汝が弟子共そちが云事を實にして、西の銘は二三行は横渠の言、余は後人の附詑なりと、何に有事ぞ。先輩の書る物有か。是も已が妄言也。又朱子の四書の註誤多し、可レ正と、そちが云由、弟子が云廻ること、是亂心仕ると、白晝に大路を自分に叫走ると云物也。已に獲レ罪祈所なしとは此事也、不便成事也。我と呼走る是等狂亂なり。西の銘が風雅の文でなひ故、難ずると亂心なり。そちが大罪何ともいはん方なし。おのれ豈人が酒肆・婬房を明ルふせんとて、人を誣・僞り、信ぜられぬとの事にて、此様の妄言を吐く。其手に付者共、亂心の言とも不レ知、西の銘附詑多、四書の注に朱子のあやまり有と云ィ廻る者多し。他をそこのふ事大罪也。此様の事に傳授口訣と錢を取事、誹諧のとたんなり。なひ米賣に等し。根からなミ事どもに、師匠顔して錢を取、心能とは人倫にてはなきぞ。遊女・博奕打が、こんい顔して友の錢取、家たおし、嬉敷がると同

罪也。誹諧に入もせぬ西の銘・四書の注、三才の先に誹諧の文章姿を作る、其外妄言闇愚幾千ぞ。淮南子に圖工好レ畫ニ鬼魅一而憎レ圖ニ狗馬一者何也鬼魅不レ出レ世而可レ見レ日也。實なる哉、誹諧の便に成書はいわず、三皇五帝の前の詩哥の、儒佛老莊の其外、初心の衆のしられまじとおもふ事をひた物に云、誹諧の事は十にして二三も有なし也。其二三も皆僞書を作り、人を迷わせる心にて鬼魅を畫き、愚魅を誣。初心衆はしるまじけれども、少心有者は予がごとくの愚も見ゆるぞ。汝は唯班猫のごとく、そちにさわる心性が闇くなつて、自慢に皆なり、淺間鋪事なり。大毒虫也。多書云には又能言も有物成に、扨〱云程の事一つも能言なし。誹諧の法を人に破らせ、第一人を高ぶらせ、佛法で云日は、心の佛を絶滅し、闇夜に迷わせて、已一人が邪曲を送る事、佛書に云、深穴に虎に追れ落入、藤蔓にすがり下を見れば毒蛇有て呑んと待、取付藤の根を黑白の鼠來りて嚙ば安き心なきに、甘露の落、口へ入をたのしみにて身をわすらるゝと云喩へなり。そちも妄言をいへば、學力でも有者と聞ては恐れ、哥讀者・詩作る者躰の者におふては、心にいやなる事共有べけれども、名利の露を入て口に甘じ、諸苦を忘れ妄僞ヲ囀ル。思へば不便成事也。又此内に曰、儒佛と詩哥と並べ、教誡をいふて二ツを殘し、一ツを風雅と云、教誡にするは其人々の心也。能聞か。飴を見テ見の柳下惠の心に、老人杯のはのなきを養に能物也と思たまふ。弟の盜跖は盜に人の家へ入に、戸門の鳴に是を塗り、入テは不レ鳴してよかるべしと思ふたりと云事、昔より能人の知たる事、汝も知べし。飴は一ツものにて、心の用様の善惡かくのごとく別るゝぞ。教誡と云事は見る人に依事なり。既に汝、芭蕉の正路に風流成人を、そちが心の用ひ様はなき事共を僞作し、いわれぬ言を作り、前に段々云ごとく、芭蕉を文盲者、法しらずに仕る事、名聞利害に邪曲を能事に送らんと思ふ闇愚、三十余年已が心の儘に酒肆・婬房に人を誣、利を得て我儘を振ひ、其終に心に足る事なくて、今に猶利のために芭蕉の遠忌杯と、是等ごときの翁へ耻をあたへて其靈を弔ふと申事、芭

蕉の精神うけらるべきや。神を垢すといふ物也。其上に其可レ祭筋目なくて、むざと神靈を祭るは諂らへるなりと、聖人仰られしぞ。然に儒佛と詩哥と並べ、教誡とは何に有事、誰が云たる事ぞ。汝が申たる事也。其二ツを殘して一ツを風雅と云と、此云分何とも埒の明ぬ申樣、並べて殘ルは教誡と成物三ツを二ツ殘して教誡になるか。其一ツの詩哥斗が教誡に能か。誡杯に成事を殘すと云事不レ可レ有、何故に殘したるぞ。儒佛と詩哥と三ツ一双にて教誡と定たるは何の書に有ぞ。汝が云分は三ツの教誡也。漢語か。日本か。儒佛二ツ、詩歌は二ツ一ツにしての云分、此樣成僞書を吐ちらし、心に耻る事不レ止、何の爲にかく錢はほしきぞと心にとへ。名聞・好色は天下の財を盡しても足らざる事古賢仰られ、當時猶富貴の人に有事可レ見。夫に教誡杯とはよく耻敷もなく申たり。文盲にて誹諧の高ぶり、そちが文盲此内に、

初五畿内に　中降ル白雪や　後つめた食

初古池や　中蛙とび込ム　後みづの音

と子細らしく脇付し發句二句並べり。初中後を誰かしらぬ者可レ有。五畿内は古風の句なり。古風でも白雪を食、御器に五幾をもたす。扨つめた食と云語路の詰リたるわるさ、聞れはせぬを芭蕉の句に並べ、評判同日の論と思事、餘りの事也。又予が芭蕉へ石臼の銘と云戲の文書、惡かるべきは勿論、殊に聞にくき所は御直シ可レ被レ下と、京に居られし時つかはし、予、鹿紙に書遣わせしを、翁定て書直ッおかれし所もレ可レ有。予も草案の儘名も不レ書遣したるに、翁死後頭陀袋などに有しと見へたり。それを被レ死時、付居左樣の反古杯は彼が取しと見へたり。文選とやら文を集たる物して、其内へ其石臼の銘を翁と名書入たり。予が昔若き時書たり。とても文杯と云樣成事にてなし　若き時は猶以ての事なり。芭蕉の筆とは各別、若クさわがしき文なるに、芭蕉翁に名付る、其目の闇サ不調法さ、言語同斷なり。今とても可レ見翁の筆か。其いきほひ文勢大きに異也。如レ此明盲にて、此論を文の鑑にせよの是等にて文章の手本の、天地開ケぬ三才の先に儒佛の文章の姿あら

われるの、双關の文法の天下の文者に成、文作ル者の師に成との云分、闇愚故とは云ながら、畢竟禮義不レ知耻をしらぬ故也。誹諧の事をしらずして已壹人しりたると旬る故、初心を脇へ化し行邪知にて、已もしらぬ事を佛老神儒の名計聞・推量に云散し、人の上に立ッ合點、又聞ケば、つれ〲草の祕事、一條殿の抄、百人一首の冷泉家の傳等、芭蕉より傳授杯と申出、跡かたなき事也。なんと誹諧を稽古するに、此様の僞いわ(よ)ねばならぬか、是皆錢を取種おろし也。そちは聖教八千卷・儒書三万言も見つくしたる云分、何ゾで見たぞ。汝が弟子共にも見せるか。十方なし。此様成事は汝が二百年も生て居ねば成がたかるべし。其上に神道・詩哥・連哥、そちが年は何十に成ぞ。心に私の蓋あれば見へぬ物、前に云蟷螂が蟬を取とてねらひ寄ば、其跡より野鳥が蟷螂を取らぬ(ん)と寄、其跡へ獵師が野鳥を可レ取と寄に、前に深池有を獵師は不レ見。是心に欲ある私が蓋に成、皆其身をわするゝ喩也。そちも是なり。人の笑ひも跡先不レ合事も、僞妄も不ニ見得一唯諛ィ欺く工夫にて、本心はなくなつて、人を諛欺事を不レ知、先に云ごとく、佛書の虎に追れ毒蛇に嚙れるをわすれ、酒肆・婬房の露の口へ入にて、佛にていへば今生に破戒し、五戒と云物は佛法のために立らるゝ事也。出家は元より其上段々に有を妄言は常住、これに汝が前にも殺盗・婬妄に地獄の躰想をあらわす中か(と、脱カ)。生前地獄の躰を已レと作り出、將來は恐敷も不レ思、芭蕉の法事の塚を筑(築)の、遠忌問フのと利潤を工夫し、精神のおかし(をけがし)罪を作る。儒より見れば我はしらず、來世と云迄なく、こと〲く云所不義非禮取所有まじ。いふにたらず。

一第十法式論と、何やら古風の書おける物を拾ひ出して、已が事の祕事らしく、皆昔から云事共也。評するにたらず。又曰、誹諧は何ゾの爲と尋ねば言下にしるゝ様有と、前には三才の先、三皇五帝三代杯仰山成申分、爰にては言下にしるゝ様有と尋ねさせ、例の利へ輪縄をかくる云分、云に不レ足。又曰、無名の祭、發句にすれば季に成物有と、此様成文盲ははじ(恥)をしらぬ事、是をしらず、天下の師顔、天下の俳諧師を手にならべ、婢子のご

とくおもふ事がなるか。是さへしらで人に何を敎るぞ。祭と斗云は、發句でも付句でも、四月加茂の祭の事にて、名をいわず、夏成ぞ。發句にすれば季に成物有とは、其時の季入ルれば云に不レ及、四季の祭、季は其時の時ゆへに遁辭なり。只名もいわず、祭と斗して夏也。其外夏有祭には、皆其神、其所の名あり。祭と斗名なしに申が加茂の祭成ぞ。發句にすればと云は、發句には其時の季入物なれば、其時の季の入ルにて季に成物と申、おかし。夏でも筑摩・山崎・多賀・地主・山科等皆四月なれども、是等は其神の祭名をいわねばしれぬぞ。葵祭斗只祭と斗いふて、夏とする子細もしるまじ。三才の前、三皇五帝抔はさして入ぬ事也。祭の夏に成をしらねば耻かしき事也。是で世間の誹諧師は、前念・後念は扨置、打越をさへしらぬの、天下の誹諧師を手の内に並べんとは、能もいふたり。又曰、付句にすれば雜に成物有と、猶文盲の上塗をするよ。祭と云句、付句にしたるとて雜に成物か。四月也。此云分、彌埒不レ明、付句にせねばいつの季に成りて、付句では又雜に成ぞ。

是亦前、發句にすれば、季に成物有と云には違ふたり。先能聞ケ。季に成物有と云には、祭は季にならぬ云分、發句にする時其季を入れば春にもなり、[illegible]・冬にもなる云分也。雜に成物有とは、其物と云は何なるぞ。只祭と云、付句は雜なりと云いひ分也。發句でも平句でも名をいわず、祭といふ句は夏也。しらぬ事子細らしくいふて、人のかゝせぬ自分耻をかく、笑止也。又曰、君子不レ重則不レ威不レ威者無レ信と、道を學び藝を習ん妙所、信の一字より入るぞ。誹諧はなど有德の師によらざらんや。扨も〳〵申たり。段々まへに、天下の誹諧師を婢子と高言し、世間の誹諧師は前念・後念・打越しらずと申て、己が君子に成、有德の師によれと、有德の師はそちと決定して皆寄か。そちがやうに妄言するが、君子の威の重ィか。其妄偽を信仰いたせ、誹諧有德〳〵といふは、祭の夏といふ事しらぬが有德か。貞享式・白馬經・廿五條の傳・東花式等、芭蕉死後多年いわず、近年邪曲の羽翼成て、汝が皆僞作也。翁直筆に違はぬ筆にて書て見せても僞也。子細は是等皆前に云ご

とく、法の破られぬ事をしらずに破ル調(論)義(取)を云事、芭蕉になき事也。其人・其氣象、正路を不レ知不レ見不レ聞者は、實とも思ふ成べし。予がごとく多年入魂し、聞見、誹諧の上をも談ぜし者は、見ると皆僞事と知ぞ。予に又直談して申わけ云事は成まじ。其内東花式といふに、そちが書たる事此内に有。曰、一座のさばきは東花式に任ずべしと、芭蕉申されしと云事ありと。ケ様の事、翁死後數十年後に何としていはれたぞ。生前には右書ごとく決してなき事成に、君子成の有徳の師の東花式次第にせよのと、汝はなんたる千牛の皮の面ぞ。前に云通り、私欲闇愚の隔に義理を覆ひ、是ぞ前念、後念も不レ思、落墮せしは無二是非一抔、汝には耻ざるぞ。善人の敵とはなれ、惡人の友と成事なかれと云事宜(むべ)也。そちにほめられ、嬉敷思ふて友と成人は、大成(おほいなる)闇屈(窟)へ入といふ物也。其案内は不猫蚫共なり。已レく(くく)が愚案のみさへ有にいたまし。

一露川の事は日のあたり用捨有べき事なれども、芭蕉になき事を申は支考に不レ替。往昔彼等水魚のまじわり

成は、支考あらぬ事共を其方へ時々傳へし物也。兩人邪曲に羽翼成、始より互に利を以交りし故、自立して今は水火の中と見へたり。汝芭蕉に二度斗あひしは、支考取持にて逢たり。是必後(のちさし)謗りあふ始也。歐陽修の朋黨論に曰、小人は無レ朋惟君子有レ之、小人は同レ利之時暫(ク)爲レ朋者僞也、及(デハ)二其見(ルヲ)一レ利而爭レ先、或は利盡(テ)而情疎(カ)也、反(テ)相賊害(ス)、君子は修レ身則同レ道而益事レ國則同レ心而共濟(ニ)、終始如レ一此君子之朋也と、賢者のいへる言、千歲の後といへども府(符)節を合するがごとし。汝も芭蕉を僞事彼と同じ。芭蕉式・本式誹諧百廿ケ條・名目傳抔、翁ゟ傳へるよし、是翁になき事也。子細は支考が傳の飜譯と見へたり。今水火の中にても、支考も其事悉ヶ虛誕と不レ申、そちも支考を虛といわぬは中能(なかよき)時、支考に習ひしもの也。相互に支考は虛をかくし、露川は支考がむかしの取持をかくしたる物也。其外聞ヶば、翁の花より朧にての句を朧の大祕事と口訣し、二十四句の小哥仙を中古何者か仕出し、表四句・裏八句にしてせし事有。是が何に可レ成ぞ。月・花はぶく事は不レ成、埒の明

ぬ事を是も傳授口訣と云まわるとぞ。鳴海蝶羽方に、翁・知足・安信と三吟の表ありしを蝶羽方にて見、第三は安信したるを其名を削り、露川としてそちが集に出したる事、蝶羽に人々聞たまふべし。翁五十三驛の自畫自讃の事・古今傳授其外僞妄共、支考と同じければ、いふも又同事也。其故に細ッにはいわず。あらぬ事ども作り、初心の人々に血判にて堅メ傳授し、利貪るよし、去迚は淺間鋪事也。左様の事なくては誹諧ならぬか。誹諧はせず共道理を知ル人、聞ヶは僞ﾘ成とおもふべし。誹諧を正道にする者見ては、第一、二條殿の法をそちどもが破り、邪法を見、戀一句、遊女の類戀にせず、人情、折越抔云事わけもなき事といふ物也。さ様にしては面白き事有か。いかなる子細で仕るぞ。俳風は段々替れども、法の替ると云事はなきは、まへにいふごとく、予が私に云にあらず。時代の風により詞をはぶく事などは有。談林の比に、長く文字を餘シいひなどして、句の形・云分は替事有。又少々の了簡にて異成事は有べし。戀を一句、表に月なし抔云事は、誹諧を目なしにするといふ物也。夫を芭蕉にいわれたの、其式目は何といふとせられたなどいふ事、芭蕉を文盲にし、又そち共師匠にしてする人々を文盲にする事は、何共汝等は去迚はいたましき事也。益なくして害ばかり也。兩人ともに法を破り、翁より傳と僞り、様々の事仕る。其意趣は別の事にてなし。有來事にては口訣傳授のならず、口訣傳授せねば畢竟利が取レぬといふ心より外有まじ。夫は又にがにがしき心なり。態性(わごく)を闇クするといふ物也。はづかしき事共を是とし、夫に心を置事は人倫にて有かなきか、夫も自分に聞へ。そちも佛者と見へたり、佛にても心に心よくなき事は、後生の障り成べし。伊川の被レ仰ごとく、若有ニ天堂(テヘ)一君子可レ行若有ニ地獄一可ニ小人落一と。念佛申、禪定しても心、名聞・名利を事とせば、其行所いづくいづくと見へるぞ。後生は遠し、生前心能は有まじき事也。心わろくては佛に成は後人にて心わろき事也。

一是を見る人、予意地惡ク人の非を申と思ふ人あるべし。さらに意地に申にあらず。兩人ともに其初りを知り、或

は口を添、あるひは三吟を仕とらせたる物也。夫故中古色々翁を賣、なき事を申由、聞ぬにてなし。予が存ずるは、かく申も我も正路成者にてなし。世に實ある人はまれなり。皆小人にてゆへば、非成事いふも彼等に限るべからずとぞんじ、三十有余年何事も馬耳風に過し侍りぬ。其内ニ予を何としてか惡みゆと見へ、越人は翁勘當の弟子、何事も彼は夫故しらぬ者也、彼は誹諧を崩したる者也抔いふのみにあらず、物に書そしりたる物有由、見たると云人慥に聞されし事も侍れ共、芭蕉に近く入魂せしと云事が、彼等がいや成事に思ひ申と察し、夫も其分にて捨(すて)、構(かまひ)不レ申ゆへ其近年邪僞につのり、芭蕉を文盲人、法しらずにする僞書共數多板行し、貴むやうにて謗り、馬鹿成事申ゆ得ば止事を不レ得申所なり。夫も何事に芭蕉の死後の世話を、越人が不レ入事と思ふ人可レ有ゆ。予と芭蕉は誹諧の師弟也。名古屋へは七八度も來られ、毎度二三十日乃至五七十日も居られしに、其席に我等出ぬ事は十度に八度はなし。其外京・大津・膳所・岐阜・大垣・杜國がくれ家にて、數日宛席を同し、一器の食をわけ、或は東山道を經て江戸へ同道し、江戸の芭蕉庵にも三四月も一所に伏(臥)し、粥を焼(たき)、誹諧をたのしみ、誹諧懇に預り、是亦師なり友也。然るを翁になき事を有といひ觸ゆ事、せめて其云言能キ事あらば如何せん、皆翁の爲、死後の耻也。止事なきといふは是なり。去に依テ今年口を開き、芭蕉の文盲になき所を斷(ことわり)書(かく)もの也。彼等遠忌を問の法事をするの塚を筑(築)のとさわぎゆへ共、予は後世と云事しらず、只生前何とぞ正路に行度と存る斗の心にて、追善抔の神靈の爲に成事又しらず、彼等がなす追善は皆芭蕉ヲ怒らしむると申物也。しかれ共法事追善も、佛法盛成當世有事可レ成と思われ(は)ゆ間、今年十月十二日、其月其日(に、脫カ)ゆ得者、彼等が翁を汚すの虚誕をかぞへ、老のくり言葉ながら此一冊を書て、芭蕉の神靈のいかりをしづむる一ッにもならぬか。さあらば風俗の追善ともいわんも、(こ)由來なき事にもあるまじ。

右一帖者尾陽越人（芭蕉翁直弟）芭蕉流支考先翁之恐レテルコトヲ亂ニ於俳道ノ而依テレ存スルニ幸サイハイ老年ニ蕉翁遠忌爲ニ作善之ニ誡イマシムルノ邪人支考ヲ辨

享保十四己酉年五月穀旦

仰柳下

野叟芦室寫之

削かけの返事

文孝著

削かけの返事

渡部ノ狂

頭口不猫蛇といふ物有りて、尾城にて越公の作なるよし、いかにしても題號面白く、岐山下の梅長者に手ぐりして一覽申せし所に、十論十段の水かけ論也。誠や世間の評判に、是は氣違の四書とやら、五字七言の廣言をとがめて、前後左右文義を見とゞけず、馬鹿者の慮外者のとひとり腹に立狂ひて、なんだ辨慶の雜言也。一字も返答の取所なし。されど我師の惡口を聞ながら白癡だまつては居りがたく、其中の貴公の御噓と、文章の讀違へと、式日の取りまがひと、十口斗の返答は、我師の遺稿を見合て害（寒カ）の夜の相手となれば、是を削かけの返事と題して、神事の語勢にひゞかせたるは、何程御しかり候ても、あつぱれ希代の題號やと、こりずまに自慢せしめ候。

一　我師と祖翁との對面は元祿三年三月桃の日也。木曾塚の無名庵にて丈草・乙州と同道也。我師は其頃在京にて、杜律の講譯を聞居られしが、其日は節供の休日にて、一夜泊りにて歸京のよし。夜話に鬼あざみの評ありて、其時のもやうは遺稿にくはしけれど、越人とりつぎにて翁へ逢れし事は、何の書物にも見え侍らず。かくて四月の中頃ゟ祖翁へ隨侍せられ。幻住庵の山居の間も薪水の勞は我師一人なり。其秋、膳所の曲翠亭にて荷兮が蔦の葉の句評に付て、野水・越人は同門の高名なれど、此座に顏を見たる人なし。但その風俗を聞けば、野水は文に過て越人は質に過たり。越人をこねて野越となのらせば、文質彬々たらんと、蔦の葉の遺稿に見えたれば、貴公と近付でないは必定也。扨、翌年の九月のはじめならむ、野水と越人と京へ登り、凡兆をかたらひ、路通事あしざまにいひて、祖翁の機嫌を大きにそこなひ、夜半頃に駕籠に乘つて大津の乙州亭に歸り給へり。其後越公は湯衣の旅姿にて京より名古屋へ歸るとて、無名庵へ立より、蓮の實のすつぽんとぬけて何もなし　とせられしは、庭

前の即興ながら、路通が取合も遺恨なき斷にや。其時は緣に腰懸ケながら、翁の機嫌をとりかねて、直に名古屋へ歸られ候由。我師も酒堂もそこに居合せて、越顏を見られしは、其日を始ながら、終に手をつゐて近付にならずとぞ。しかれば不猫蛇の要文とて、支考は予をたのみ翁へも逢せたりとは、持上られぬ大うそにて、此ほうの小うそよりは作りやうがお下手也。

一　茶話禪をとがむるとて、何もかも予が差圖して、汝が兄より翁へたのむといふ狀も、皆予が沙汰せし事覺あるべし。大津乙州が裏にて予に申せし事覺あるべしと云々。是は無用の小うそならむ。翁への對面に貴公をたのまぬ事は前段に明らかなり。乙州が裏の事は蓮の實の時にや、其外は御意得ず。乙州が所は五六町もある也。連立て戻つての事か。是は慥に夢にてあるべし。覺えたか〳〵と何ほど御きめ候ても、曾以覺なし。人の背戶にさゝやく事、およそ色事か金事かと、名古屋の人々もおほし候半。此一段ばかり誠に面目なく存候。俳諧の論は君子の爭なり。こんなうそはやめに可レ被レ成候。

一　其時、翁の供をして行しは、霜月始頃に江戶へ着し物也。翌年正月早々に立、名古屋へ歸り、予が所へ來りしは正月中旬也。其間に茶話禪を書イたか。中略　その時予が挨拶の顏つきより三十餘年、名古屋へ來ながら無沙汰せし始と云て、此一段の御文躰はあまりくど〳〵しく、うそのつきかげんあしく候得ば、例の中略いたし候。此段は日限を慥に書て嘘をかためむと思召候哉。半年あまり寸法違ひ申候。江戶へは成程供せしが、其時は例の無機嫌にて、名古屋は沙汰なしに通り、熱田にて三宿逗留也。野水・越人は遠慮あればと、荷兮一人見舞れ、立歸りにいたされ候。勘當とは是は先師のわる口とも申べし。如レ仰武江へは十月晦日に付（着）て、番町に借宅せられ、我師と隨侍にて、二月八日迄居られたれば、百日の間には、茶話禪はいさ知らず、摩訶茶糟經をもあみ立ぬべし。正月早々は扨置て、其二月十日には我師の奥州行脚とて餞別の會あり。祖翁は五器の發句あり、其角は紙鳶の發句有り、杉風・枳風など十一人の連衆也。それより松嶋・象潟をめぐり、六月始には深川芭蕉庵の新宅に歸り、葛の

松原の相談最中に美濃より飛脚来り、夜を日につぎて、花鳥の旅も無水月晦日哉　とは、熱田梅人亭の發句也。正月早々も二月中旬も皆々例の夢ならむ。盗人といへばたけ高しとや。月日の證文慥過て尻のほぐれたるは笑止〳〵。

一　文章の讀違への事、祖翁の古池の蛙に夢の沙汰はなし。前後をとくと讀み給へ。

一　君父の前に寐て居て忠孝の情を盡すと申事、十論にはなく、例の夢か〳〵。

一　白馬經といふは祖翁の滅後に門人の稱號也。遺訓には白馬集とあり。十論の註解を御覧有べし。白馬東來の故事はとくと御存無い様に聞え候。人篇の俳諧の濫觴なり。

一　式目のとり違への事、是は百世の大事也。つゝじを正花となし、松露を冬季となしたる事は、いづれの集に出申候哉。蕉門破滅の沙汰になり候得ば、集をあらため候て日本へ斷申度候。神以此品は重て可レ被二仰聞一候。

一　祭の事、例の讀違へと被レ存候。夏季の葵祭とは犬うつ童も知たる事、季につれては四季にわたるといふ事、今一度讀〻直し給へ。發句にすれば當季と成り、平句にすれば雜となる物は、夜着・ふとん・居風呂の類也。此序に學問あるべし。

一　續猿蓑の事、僞書の二字は天下の御法度にて、不猫蛇一部の穿義所也。そも〳〵續猿蓑は江戸の沾圃を撰者にて、其人は公義の伺候人也。しかれば此沙汰は公表の大事也。此集は、元祿七年の夏、伊賀の東麓庵にて伊勢より先師の來れるを待て、七八兩月の間の密撰也。其子細は、前猿蓑の實をほどき、炭俵集の虚をおぎなへば、祖翁一代の法華經にして、凡夫の目には中々見えがたし。しかるを僞書の數に入て、打越のはこびの惡しき句いか程有りと思ふぞ、知らぬ故にしたる物也といへる、目くらの蛇にをぢぬたとへにて、俳諧冥加は此一卷にて盡ぬべし。此集は翁の滅後に再び清書もおそれあればとて、去來・丈艸を兩奉行にて、草稿のまゝにて板行したれば、書て消したる所もあり。其時請取て板行したる井筒屋のむす子庄兵衛も、手代の橋屋治兵衛も、今無事にて京住

せり。大切の事なれば尋聞て、祖翁と先師へ侘事のために、こんにやくの白あへでもして、靈供をそなへ給ひなば、未來に罰舌のはさみはのがれぬべし。是は返答も恐入候。

一　去春、久敷不レ得二貴意一御床敷奉レ存候。翁追善仕候御相談仕度事も御座候、と状をおこせし事は忘れて、予に發句でも第三でもうかとさせて、それを又商にする分別、子共だますごとく淺はかなる事おかしと云々。是は大きに推量違ひ也。先達而祖翁の法事前に、其元の相把子を便にて、兄の蓮二房ゟ状通せられしは僞なし。共子細は、花鳥五十歌仙の卷頭は遊行上人の御發句にて、脇はもとより蓮二房也。第三岩城の露沾公なり。然るに大桓の木因は、季吟門下の吟友といひ、遊行上人え吹擧の故あれば、此翁を五句目とは三年前より約束也。然ば四句目・六句目には越人か野破か蕉門に在世の古老をと、扨こそ状通はせられたり。されど返事さへ聞へねば、四句目は武陵の氷花を頼み、六句目は難波の野破子なり。必殘念にはおほすなよ。發句でも第三でもなし。貴公の得手の四句目ぶりに、猫の尾ふめば飛び上りけり　のごとき、なぐり句を賴むとの事なり。發句の沙汰は我もしらず。第三などの位をとりて、轉變自在の上手わざは、貴公におゐて御無用〳〵。

一　四方白璧の謎が聞えぬか、子共も知つた事、豆腐也と云々。是は御師傳違ひ候哉。豆腐ではなし、行燈也。中てつかりと申下の句有り。是らの學問も委細になされ、十論にいへる下學上達も尤と思ひ給へよかし。いかにしてもかの質にして野風俵子の至り、茶洗髮に片はだぬぎて、風流美服の人をねたみ、書院の壁にかす吐の沙汰は、我師を狂亂と居レ仰候へども、こなたは言語の狂亂にて、そなたは行跡の狂亂なれば、禁牢の時節は貴公を先に立可レ申候。

一　獅子庵の悪口は維摩の方丈の事、とくと御存ないさう也。在家・出家の兩用也。例の學問あるべく候。此度不猫蚫の所〳〵に出家落の取沙汰は、一向に子共のいさかひ也。凡三皇・五帝より儒佛と衛をあらそはむとする俳諧一道の高論には、似もよらぬ若輩事なり。是は返事に

不レ及い。

一　石臼の頌の事、祖翁の文とも貴公の作とも遺稿の沙汰に聞えねば、しかとは返事申がたし。つら〱文選に其頌を見れば、故事・故語のしほらしさ、貴公の不猫蛇の雜言と違ひ全く祖翁の筆格也。推するに貴公の石臼の文を、のゝ字ばかりに直したまひ、反故の中に草稿などありしを、去來か許六の僞相にて、芭蕉の二字を書添へ申されけむ。然らば貴公の趣向を借して祖翁の文となされる事は、中〱俳諧の冥加なれば、心に御悦い而、是に沙汰なしに可レ被レ成い。

一　十論十段の眞僞は、道德の二篇より、虛實の事・姿情の事、まして變化の決論にいたりて、あるは見違へ聞違へ、或は文義不呑込にて、一字も返答取所なし。況や虛實と誠僞の差別は、儒佛の萬卷に祕し置給へるを、はじめて俳諧の新論なるをや。惣じて釋迦の五千卷も、畢鉢羅窟の戶をしめて、十大弟子を證人に阿難一人の撰述なり。しかるを佛家の同門衆より、それは釋尊の自筆なるか、是はふすべて似せ物なるかと、不猫蛇のごときいさかひなし。仰のごとく杜國・越人のみ祖翁の正法を傳へ得て、越人生て居るぞならば、なぜに我師と面談して、それは連哥の新式にそむけり、是は蕉門の害ならむと、一字〱にせんぎして、つゝじ・松露のごときあやまちをあらため、俳諧・誹諧のごとき妙論を譽て、とも〱に道をひろめ給はぬぞや。我身のちいさい自慢いふとて、我家の大キな師道をじやまする事は、咸陽宮に火をつけて菓子盆一枚をぬすめるがごとし、小智大愚といふは此事也。たとひ今日の口論はどちらの方へ勝ても負ても、我師の名望は天下にあまねく、貴公の自慢はびわ橋の外にとゞかず。まして千歳の遺書を論ぜば、此度の十論も文鑑のかなの詩も、長崎の書林に賣廣め、唐人もほしがるよし。不猫蛇は板行ありとも、錢出して買ふ人はござるまじ。是程手みじかなる返答はなし。今いふ十余段の返答は、それより百度も難じ給へ。是より百度も答申べし。其外はたゞ東海鼠を相手にて、陳立はたつほど尾にも頭にも取所なし。聞けば朱子・程子を尊敬にて、佛法をそしりながら、不猫蛇の所〱に佛經の說をひきて我師を

いましめ給へるは、甘い物を苦いとてかくし喰の思案にや、但は轉學を見よとにや。ひらに點者の看板をはづし、芋虫の嗔恚をしづめて、そこに後生者の宗匠もあれば、念佛三昧に御入可レ被レ成候。

右十餘條の返答は、百代の眞僞をたゞさむとにはあらず、正月あそびの筆ずさみなれば、此返狀を行先に寫し、朧月、花の宵闇に、京町・本町の辻〳〵にて讀ミ賣に賴入候。越公も最はや極老のよし。あだし野の露も心元なし。朝聞夕死の結緣にと、諸公達へ申遣候。いそぎ御通達賴入候。名古屋は荷兮が橋守より、椎之が相撲など、角づき合のたえざるは俳諧繁昌のもとひ、をさまる御代こそめでたけれ。

享保申のとし正月

尾城下蕉門御連中樣

猪(ゐ)の早太(はやた)

越人著

芭蕉翁晩年の門人に野盤子支考といふ者あり。もと濃州の產にして、其兄はさぎ屋の何がしとて尾陽住居の商人なるゆへ、支考禪小僧たりし時より、なごやへしば〳〵往來す。翁、近江におはせしころ、支考尾州にて越人にたより、翁の許へ尋參たし。何とぞ貴公の言葉を添へ給はれと、ひたすら賴申せし故、越人諾して狀を送られ、翁の庵へまかりし事、春の日・あらのゝ連中知らぬ者は一人もなし。しかるに支考生得佞智ありて、蕉門の先輩を廢し、をのが名を賣らんとするの心から、同門の誰かれに對するを見るに、洛の凡兆は剛毅なれば近づかず、去來は柔弱なるゆへしたしむごとき、餘へ準へてしるべし。もとより野水も越人も虛誕の徒をばあしらひ、物にたじろがぬ氣象を支考心にはなはだ妬み、野・越の二人は翁勘當と浮說を世上へひろめたり。其うへ、熱田のゐびす屋に翁止宿せられし時、越人・野水等を呼て逢ばやと狀をおこされしをも、ひそかに是を抑留、右の浮說の尾を見せじと斯は手だてを盡しける。さて元祿七年の夏、翁、尾城に杖を曳、荷兮・野水の二亭にて越人・重五・羽笠等の連誹會合あり。其節翁、咄の次手に、先キに熱田止宿のとき早ゝ狀を指越たるに、何とて音づれなかりしやと、不審顏に尋られしかば、各申には、其時御狀の屆といなやいづれも熱田へ參候得ば、翁には今朝はや江戶の方へ御立候。御狀は跡にてなごやへ遣スやうにとの事故、先程進じ候とゐびす屋が口上を合點のゆかぬ儀と存、道すがら誰ゝも大かたは推量いたし歸候ひしが、只今翁の仰られやうにて彌其謎とけたりと、をの〳〵支考が姦しさをいきどをりたる氣しきを見給ひ、物を破らぬ翁なれば、それとはなしに、たとひいかなる浮雲ありとも、靑天つゐに明らけし。いさゝか舊情かはる事なしと、やがて風雅の物語にうつして皆ゝをなだめらる。此時たしかに支考が謀計あらはれける。翁、なごやを立給ふにも荷兮・越人、鳥森村まで送り、再會をちぎり申されしに、はかなや翁は其年の冬世を去給へり。かくて支考ます〳〵邪義に募り、芭蕉に託してさま〳〵の俳集を出すと雖、次韻・冬の日・あら野に當俳の微妙あることを知らず。古池の蛙の句より今

の一すぢを閉れしなどゝ、本を捨て末にとり付、推量の僻言のみ也。されば初心の輩は古池の句を今の風雅の基かとおもひ、又蕉翁の主意を知る人はさこそおかしく思ふらめ。中にも俳諧十論といへるものを編み、大に當俳の源を濁す。しかれども諸國の蕉門弱に流れて、渠を譴責すること能はず。こゝに越人憤を發し、翁滅後の汚名を淸めんが爲、卽時に不猫蛇一冊を書て彼十論の邪を破る。かれもいよ〱先非を掩はんとして、十論のねなしごとは再び答ふるに躰なければ、不猫蛇の枝葉に取つき、翁に逢し時越人をば曾て賴ぬの、四方白壁の謎は下の句相違したのと、子どものいふべき事共を書あつめて、削かけの返じと號く。これ皆をのが心をあざむく噓の上ぬりなるべし。かゝる闇愚の若輩事を、おとなげなくも取あぐるは、何とやらの棒打なればと、越人筆はとらねども、越門人のわかうど等いはでたゞにはやむまじと、此口状に名をつけてゐのはやたとは申なり。まことや世間の評判に往生したる支考まだ生きて居て、我とわが身を、先師よ弟子よとまがほにてのゝしり、蓮二房は兄じや渡部の狂は弟じやなッどゝ、一躰分身めづらしき蕉門のばけもの、剪灯新話か、お伽婢子へ書入たきと、心ある人は笑ひ申よし。濃州は支考故鄕の事なれば、此返狀を行先に寫し、野盤子幽靈來臨の折から、夕顏の馬下りよりいそぎ御通達たのみ入候。さて貴房の二字を以、渠を呼ぶはいかゞと評する人もあらんか。さはいへ削かけの返事に越公・貴公と書たれば、今また是に報ずるも自他口上の禮義なるべし。

削かけの返事にこたふ

削かけの返事といふを先ッ自慢のよし。夜話狂の序にも難陳貳百韻の跋にも、いひあふとの喩には幾度も削かけ、貴房の部類はよく〱面白き事に思はれ候や。闇の夜に乞食のいさかひをも、其元にては削かけと御唱へは候んと察申候。返事を神事の語勢にひゞかせたるは、あつぱれ希代の題號とや。井のうちの蛙どの、さりとてはおろかなり。近年京點の前句附に、たとへば私欲連理の妾と句つくり、私欲を比翼にひゞかせたるを手柄と申候。丁度貴房の返事を神事の語勢と申され候も同意にて候。聞ゞば、

貴房もひそかに田舍前句の點を致さるゝよし、取沙汰あり。其こと世間のわる口にもあらざるか。此題號の自慢を見れば、我しらずに心迄前句躰へ墜られたるかと存(ぞんず)。やゝ貴房の齢も古稀にちかし。罰舌を怖らるゝ料簡にては手前の後世を大事にかけ、もはや現世の欲を御はなれ候て、題目の音頭取になりとも、念佛三昧になりとも御入あるべく候。

一　蕉翁へ貴房初對面は元祿三年三月三日とや。出るまゝ口に三の字よく揃ひ申候。丈草・乙州同道とは、成程兩人とも湖南住居の輩なれば伴ふたる事もあるべし。なごやより狀を添られて來ぬといふ證據には引れまじく候。さて其秋曲翠亭にて、荷兮が蔦の葉の句評と一聞十知のやうに申さるゝが、假令(タトヒ)其比翁さやうの咄ありとも、貴房の耳へは馬に心經なるべし。さだめて翁の尙白などへ物がたりの又聞ならん。はた野水・越人は同門の高名なれど、此座に顏を見たる人なしとはさもあらん。其座は皆翁、晩年の門人または蕉門のあたま數にて、當俳の主意をしらぬ連輩なれば、越人・野水、顏は長ィやら短ィやら見ぬといふはありやう成べし。殊におかしきは、貴房が書たる物を遺稿と名づけ、それに越人取次の事はなし。近づきにてないが必定なりとは、得手勝手のいひぶん、生キて居ての遺稿、あたらしき證文にて候。

一　翌年の九月はじめならん、野水と越人京へ登り、凡兆をかたらひ、路通が事あしざまにいひて祖翁の機嫌を大きにそこなひ、夜半比に駕籠に乘て大津の乙州亭に歸給へり。其後、越公は湯衣の旅姿にて、京より名古屋へ歸るとき無名庵へ立より、蓮の實の發句あり。椽に腰かけながら翁の機嫌をとりかねて、直になごやへ歸られしよし。我が師も洒堂もそこに居合て越顏を見られしは、其日を始ながら、終に手をついて近づきにはなられずと云ゝ。此一段は貴房が邪曲にて、越人・野水は翁勘當といひふれたる品玉のたねと見えたり。まづ蕉翁大きに不機嫌にて夜半比に駕籠に乘、京より大津へ歸らるゝとは、いかに貴房の先非を掩ふ勝手によきとてもあまりなる僞也。わきて溫和に生れつき給ひし風流の翁を、芋(イモ)虫のやうに申なす貴房が俳諧冥加はこれにて盡ぬべし。そのかみ翁仕

官の身にて居給ふ時も、武士は沉勇をもとゝして一朝の怒をつゝしむべき事と、よく進退をおさめたる人なりしとぞ。ことさら一たび祿を辭し、雲水の身となられては、何ぞさやうの嗔意(恚)あるべきや。たとひ門人道に違ひぬること申とも、和かに教訓せらるべし。夜半の腹立、不作な嘘、宵と成とも作れかし。翁を乘せたる駕籠舁は勿論貴房が舌根ならん。おもふに路通に惡名つけたるは、却而貴房と許六なるべし。本朝文選列傳に、路通は輕薄不實にて師命に違ふと、いらざることを板行にあらはし、路通も大にはら立て、彼文選を絶板せしむ。後に返店文を創ッて、風俗文選と題號を直したる事世に隱なし。されば其ころは貴房も許六と共におとりあひ、蕉門の先輩にいろ〳〵難をつけていひ貶したがる時分なれば、路通が事をもあしざまにふれ廻られしならん。許六・貴房は翁晩年の門人にて居ながら、知らざるを知らざるとせず。同門の豪傑をねたみ、我をたかぶる癖あり。何程貴房達の批判あるとても、野水・越人は自然の風骨すぐれたるに、古翁へ久しく隨侍せられ、次韻の主意を方寸におさめ、冬の日より猿蓑まで蕉門風雅の眞ッ盛に、名譽を天下にひゞかせたる兩人なり。まして其ころ路通がごときは、長(たけ)くらべする相手にはあらず。何の益ありて凡兆迄かたらひ、路通を翁へさゝへらるべきや。扨無名庵にて洒堂も貴房も越顏を見たるは其日をはじめとは、是こそ持あげられぬ大嘘なれ。貴房なごやにて越人顏は穴のあくほど見て居ながら、つゐに見ぬとは厚皮なる人かな。洒堂をこゝに引用られしも先ッ出物があしく候。洒堂は則珍碩にてひさごの撰者なり。此集を越人へ贈り、序まで賴みし因みあり。其上湖南・洛陽の參會に、もとより越人知る人なれば、逢ふ度ごとに手をついて近づきになるものか。是も證人を引て貴房の嘘をかためんとして、かへつて尻のほぐれたるは笑止〳〵。

一　乙州が裏にて貴房が越人へさゝやき、これ〳〵の儀はなごやにて御咄し被レ下まじく候、偏に奉レ賴といひし事を、不猫虵に少書載られしはいらざるとのやうなれども、是は貴房の越人世話には曾て預らぬと、爰かしこにて申さるゝよし。先立而聞へし故、貴房が姦邪を責るの

一針なり。尤俳諧の論にてはなきはいはでも知れた事、さるに依て乙州が裏にてさゝやきし事も、覺えて居るべしと、其品をばわざと書れぬを以見つべし。不猫蛇の枝葉に取つき被申といふは皆此類なり。是はたしかに夢にてあるべしと例の厚皮ながら、貴房のむねへはよほどこたへたると見えたり。其故は人の背戸にてさゝやくと、色事か金事かと名護屋の人々おぼし候半。此一段ばかり誠に面目なく存候と、どこやら自然とあやまりたる文躰、これ世話にいふ足の裏の疵御痛歟。越人夢をさほど名古屋の連輩へ面目なう思はるゝはくせ物也。夢と究めし事ならば、是は取にも足らぬ故返答にも及ばずと、色事も金事も無二面目一も取置て、さらりとなぜに書れぬぞや。此段はいへばいふ程貴房の古疵あらはれ候に、こんな枝葉に取つかるゝがお下手也。

一　貴房が翁の供をして霜月はじめ江戸へ着、翌年正月中旬に越人亭へ來られし事、半年あまり寸法ちがひたるとや。いかにも貴房のまがりがねにては、半年はさて置、十年もちがひ申べし。貴房その時越人に白眼（にらま）れて、こそ〳〵走にて往れしを、まのあたり見聞たる名古屋の誰かれ、いまだ生殘居る人多し。かゝるたしかな證據あるをも、貴房のへらず口には、それも夢、榎の實はなりても椋の木じやと、まだもあらそふ心なるべし。但貴房は生キたり死だり、一躰分身の人なれば、其比正躰はなごやへ來られ、幽靈は江戸に在て、松嶋・蚶潟をめぐり、葛の松原の相談をもせられしにや。さて翁は五器一具の發句・其角は紙鳶のほ句・杉風の枳風のと、過去帳くり出すやうに御申候はでも、先立而葛の松原にて一覽せしめ候。右にも申幽靈の行脚ならば、翁・其角に似た罔兩達の參會にいか程か餞別の句もありつらん、一笑〳〵。熱田梅人亭へも美濃から行て、只今江戸より上り候と、かの茶糟經を以、花鳥の發句はせられしならん。是は論に及ばず候。此一條にも、翁は例の不機嫌にてなごやは沙汰なしにとをり、熱田にて三宿逗留とは、翁の狀を貴房密に抑留し、置土産にせられし時か。たゞ翁をはら立好キに書なさるゝ事、歎じてもあまりあり。さほどに翁の越人・野水を見かぎられたらば、江戸より歸にも、又なごやは沙

汰なしにして通らるゝ筈也。しかるを野水新宅へ入、飛彈の工（たくみ）の發句まであり。なごやに滯留せられしは、貴房が邪智の品玉も此歸りには不手際にて、終には藥の出たるにや。されども野水・越人を翁勘當にてはなし。是は貴房のわる口と自、白狀せらるゝは、先非を悔むの本心か。此一言は殊勝にゆ。

一　十論をよみ違の事、越人の麁相ともいひがたし。貴房の本心すわらずして、全編まぎら（し、脱カ）の文章ゆへ、吃（ドモリ）の咄きくやうにて自他の間に取まがひもあらむ。但は是も講釋の銀一枚にする種か。よし違ふても違はでも、不猫蛇にもある通、道風が筆の朗詠集と見るからは、再往これを論ずるに及ばず。されば越人が不猫蛇を書れしは、十論のねなしごと後世に殘り、若（もし）、此筆陣なき時は、次韻に當俳の主意あることを粗（ホヾ）聞及ぶ末世の秀才、疑惑すべきを歎てなり。たゞ越人が十論を破したるといふ風聞にても、邪正のふたつは人ゝの分曉あることなれば、此口狀にくり返し、何ぞ筆を勞すべけんや。

一　白馬經といふは翁滅後に門人の稱號にて、遺訓には白馬集とあるよし。是も古翁に託したる貴房が例の遺訓なるべし。酒堂が撰の白馬集、いまだそこには見られずや。翁の白馬集あらば、酒堂もかくは名づけぬ筈なり。不審〱。酒堂へはやく相談ありて、どちらぞ白馬一疋は、池鯉鮒の市へも出さるべし。

一　祭のいひわけは貞享式か東花式かはいざしらず。彌古翁の傳授にはなき事也。爰にさし出た咄なれども、他門の點者に、鳩のうき巣を雜と覺へて居るもあり。是板行の御傘ばかりを一讀して、新式の今案・當俳の潤色に謂あることを知らず、連珠合璧等さへ見ぬが故也。しかれどもこれらは良德・西武がごときをも、あがほとけとたうとむ律義一遍、世に害なし。貴房が平句の雜になる祭といふは、此類ひにあらず。ひらに手作の式目をやめて、古翁の正法に歸し給へ。

一　躑躅を正花となし、松露を冬季としたる事は、いづれの集に出たるとや。いづれの集といふ迄もなし。貴房の邪意を以つくり出されたる續猿蓑の內にあり。花の跡躑躅のかたが面白い　と云句なり。凡、華といふはいかな

る謂と明師の傳をうけずして、未熟の輩、名のある花を正花に混じては、其取まじへたる花と成て、正華にはならず。是はたしかなつゝじの花なり。翁の傳授に引合せて、此方にて吟味せしめゆ。なんぞ古翁删補の集に、かゝる胡亂(うえん)の事あるべき。次に松露を冬季にし　ると申は、猿蓑にもれたる霜の松露哉　といふ句也。猿蓑にもれしいひやう、松露ならでもいか程かしかた有べきに、冬季にしたる不都合さ、一向初心の發句なるに、沾圃にもせよ、貴房にもせよ、翁の添削あるならば、此まゝ集には入がたしと直さるべき事鏡影たり。万一其座の時宜にしたがひいひ捨の句はありとても、入集の沙汰にはおよぶべからず。されば翁の叮嚀なる、門人の名まで後代に殘るとを惜み、先にあら野撰集の時、嵐雪・越人兩吟の歌仙後の一折、翁の心に應ぜざるところありと削捨て、たゞ一折をあらはし給へり。是にても得度せられ、貴房の僞作を恥給へ。續猿蓑は翁を貴房が似せ損ひなりと諸國へ斷尤にゆ。

一　續猿蓑は江戸の沾圃撰者にて元祿七年の夏、翁伊賀の東麓庵へ伊勢より貴房の來れるを待て、七八兩月の間の密撰にて、前猿蓑の實をほどき、炭俵集の虚をおぎなへば、翁一代の法花經にして、凡夫の目には見へがたしとのいひぶん、盗人たけたかしとは是ならん。よし沾圃は猿樂にても役者にても、それは俳諧に入用なし。つら〳〵此集を見るに、撰者は名ばかり、誰にもせよ貴房の作にまぎれなし。何を隱す事ありて密撰とは申さるゝぞ。察するに、翁に託して名月二句ノ評などつくり入、支考は芭蕉在世にもかく勝れたる門人なりしと世人に奥深う思はせ、貴房が名利の助にせんとの趣向から、ひそかに編たて申されけん。さなくば、なぜに板行の時井筒屋の奥書のまぎらを止めて、此集翁の添削にて、撰者は則沾圃とか支考とか押出して披露せられざるや。心に邪あるがゆへに、隨分手づまをやられても、尻から嘘の見へ透をしられず、翁一代の法花經に、たとひ地發句なりとても、何ぞや貴房が在所の闇如、なごやの素覽がごとき數にも足らぬ者どもの句は入て、杜國・凡兆・重五・羽笠等の内に一句も見へぬ筈はなし。其外江都の連輩にもれまじき人のもれたる多し。たゞ貴房の意地を以、みだりに書る似

せものを、翁の法花經なんどゝは勿躰なき喩にて候。凡ひさご集すら見るに用捨あり。況や炭俵集の如き撰者、其人にあらざるをや。猿蓑とならべていはるゝ集にはあらず。許六が宇陀の法師にも、あら野・ひさご・猿蓑・炭俵・後猿蓑と段々其風躰あらたまり來るに似たれど、あら野の時、はや炭俵・後猿のかるみは急度顯れたりと書たり。許六も續猿蓑を翁草稿かとおもひ、貴房がだましを一ぱい喰ひはくふたれど、あら野に眼をつけたるは、まだ見識によき所もあり。しかれども瓢に底を入られ、猿蓑に關を居（すゑ）られと書たるは、次韻・冬の日をしらぬ故一向埒のあかぬ廣言、片腹いたき事に候。許六も當時存命ならば文通して異見申べきに、今ではほんの菊阿佛、殘念々々。

又曰、此集は翁の滅後に再び清書も恐あればと、去來と丈草を兩奉行にて草稿のまゝに板行したれば、書て消したる所もあり、其時請取て板行したる井筒屋のむすこ庄兵衞も、手代の橘屋次（治）兵衞も今無事にて京住せり。大切の事なれば尋聞て、祖翁先師へ佗言のため、莨蒻の白あへでもして靈供を備へたまひなば、未來に罰舌のはさみは遁れぬべしと云々。

是はおかしき證據にて候。貴房の書れたる草稿を、再清書も恐あればとは何事ぞ。書て消したる所も、わざと書損へる文字も皆例のまぎらかしと相見え候。去來・丈艸ともに柔弱の內また膏藥、生キて居ても證據人には成がたし。とに此世になき人也。次に井筒屋・橘屋の書林を證據に引るゝは、若輩千萬おかしく候。たとへば江源武鑑のうそ八百をも、佐々木家の實錄と思ひ板行し商ふ類、續猿蓑やら贋（にせ）猿蓑やら、井筒も橘も座頭に味噌とは是なるべし。もし寺田重德ごとき書林ならば、成程證人に成べく候。扨未來の沙汰は、猶若輩ながら、莨蒻の白あへ地獄でも、豆腐のこくぜう（黑繩）地獄にても、それはそなたのお好キ次第、彼地に於て御賞味あれ。且罰舌の外科へも先ッ貴房御逢候て尤に存候。一笑々々。

一　貴房三千化を撰るゝ前に、委許七間町何がしを賴み、越人へ狀通の事僞なしと雌伏せらるれば論に及ばず。其節越人許諾あらば四句目・六句目めの內を賴べきよと思れしが、越人返事なき故に氷花にて相濟よし。御知せ迄も

無之に、念の入たる御文躰ニ候。殘念におもふなどは誰の事に候哉。推するに、貴房七間町の何がしを以隨分ロ說かせ、越人をだき入べきと思れしに、越人一向取合れぬ故、貴房の內存相違して殘念なるとのいひ違へか。發句の沙汰は貴房にも御存知なきとは尤ニ候。如レ仰お下手也、さて第三の位を取て轉變自在の上手わざは、越公は御無用とや。いかに貴房の腹が立とて、是は過言と申もの也。蕉門の十大弟子が第三の位を知らず、貴房も猶遠慮ありて表に月をせぬ對に、第三なしの表をも後代の笑ぐさにて建立可レ然候。

一　四方白壁謎の事、行燈の下ノ句中てつかり、豆腐の下ノ句中ほねなし、如レ此の子どもあそびを、師傅よ下學上達よと髭喰ひそらす口からは、出家落の返答より是こそ若輩至極なれ。狂亂ざたは不猫蚫に多過申候を、又末摘のから衣幾度もおかしからねば、爰には筆を休め候。

一　維摩方丈の事、白馬東來の故事、とくと御存知ないかとは、越人への口上ニ而は有まじく候。そちの在所の連輩御挨拶の取違へ歟。かやうの故事は今時の納所坊主も聞覺えて、味噌つき哥にもうたふべし。纔な外題學問をしたり顏に申さるゝは、甲に似せて穴ほるとや。在家出家の兩用は、さだめて貴房の墜(墮カ)落より思ひ立れし獅子庵か。

一　石臼頌の事、翁の文とも貴公の作とも遺稿の沙汰に聞えねば、しかと返事申がたし。つら〳〵文選に其頌を見れば故事・古語のしほらしさ、貴公の不猫蚫の雜言と違ひ、全ク祖翁の筆格也。推するに、貴公の石臼の文を、のゝ字ばかりに直したまひ、反古の中に草稿など有しを、去來か許六か麁相にて、芭蕉の二字を書そへ申されけむと云ゝ。

此一條にも例の遺稿、生キて居てさえ知られぬ事、貴房がこと葉を貴房が書ク遺稿にないとは其筈也。翁の文と見違へし其方達の不日利を是非ともおほひ遂んとて、故事・古語のしほらしさと意地ほめ、さりとは未練也。去來・許六へぬりつけても、文選序をも書れたれば、知らぬとは申されまじ。見さだめがたき文ならば入(いれ)ぬが却而功者なるに、文珠(殊)の智惠は嫌ひにて、三人寄て槃特(はんとく)が愚昧を

世上につたへらる。但史邦が小文庫のあやまりを襲たるにや。しかるに、此頌を考るに、中にも寛平花山の御事、はた名を盜むぬす人のあたり、こゝらは恰も越人の氣象のごき語勢也。決して翁の筆格にあらず。若翁の加筆ならんと思ふ所、十に一二もあるべきか。具眼の人は味ひ見るべし。扨此頌も引合せて不猫蛇は雜言とや。貴房の虛言(ウソ)を一途に責、文章にはかゝはらぬ走書の不猫蛇を此頌にくらべらるゝは、賴義も公平(きんぴら)もひとつに覺えたる申されやう、ちと偏屈に聞え候。將又、翁の加筆にて、のゝ字ばかりに直し給ひと腹立まぎれのわる口は、他門の批判も顧たまへ。蕉門の文筆はのゝ字斗を弟子が書、あとは芭蕉の一筆かと、文章知らぬ連輩へ惑をつくると云もの也。但貴房のお弟子達、いで文書くと匂ても、のゝ字ばかりを殘されて、其餘は貴房が一筆にて、獅子庇じたて(仕立)の文章故、そなたが仕かたに比べて、翁を推量せらるゝにや。しからば貴房の撰れし文鑑・文操兩部をも本朝和漢の四字を削り、のゝ字文鑑・のゝ字文操と、外題を御直しあるべく候。

一　十論十段の中に次韻の事を少も書れぬを見れば、蕉翁當俳の主意、貴房には御存知なきに決定せり。さあらば不猫蛇一都の返答一〻成がたき筈に候。成程貴房相應の側かけごき若輩事成とも、追〻の虛言待入候。扨蕉門十大弟子の事、貴房は自、阿難に比すると見へたり。是は御遠慮しかるべし。第一蕉門の主意を知らで手前ほめの阿難の撰述、疲馬に荷が過ギ申候。さほど一人して何も角もかき廻し度ば、しらぬ事は知らぬにして、なぜ同門の先輩に尋問たまはぬぞや。たゞたかぶりを先へ出して其角作をもそねみ被レ申、東西夜話に跡かたなき嘘を翁へかこつけらる。是も阿難の心には不相應なる惡意地なり。扨又、貴房三十餘年越人へ無沙汰して居ながら、面談ありてとも〳〵に道をひろめ給はぬなどゝは、あちらこちらの異見也。まと左樣の存念ならば、十論も假名の詩もさらりと御やめ候而野・越の二老へ侘言のため、在家出家の貴房なれば、袴の上に輪袈裟でも御懸ヶ早〻なごやへ御越あれ。越人、野水の旨をうけ、隨分取持して翁の正傳御聽聞あるやうに可レ致候。又は貴房の横這を是として諸國へ

恥をひろめ度と御望ならば、重而の御返事次第此口状を潤色して板行にも可レ致候。よく賣れるの賣レまじきの錢算用などは貴房利慾の見、此方の料簡は翁百練千鍛の當俳の正傳を末世に混雜させまじきと、名利を離れし眞實の心に候。貴房のやう成商根性はなし。はた師道をじやますの、水かけ論のと申さるゝは、そなたが例の若輩成心から也。諸國擧って十論を戴く人ばかりにも有まじ。口廣き自慢、我と我身にほれるとは、貴房の名望沙汰ならん。しかるに越人程朱を尊敬あり、佛法はそしりながら不猫蚫に佛經の說を引、出家落をいましめ被レ申は、甘い物を苦いとてかくし喰の心か。但は博學を見よとの事かと貴房の推察皆相違せり。是は禁物のつかひかたにて、たばこの脂(やに)を蚫に存する格に候。凡俳諧の學問は物にかたよる事を嫌ひ、或時は儒と成、或時は佛に入、無何有ノ鄕も根ノ國も、轉變自在ならずしては、此道の達人とはいひがたし。これらの大意も次手ながら學問あるべし。

削かけの返事十余條は、百代の眞僞をたゞさんとにはあらず、正月あそびの筆ずさみなればと云〻。是はいか成いすかの觜にて御座候哉。式目取ちがへの條下に、百世の大事神以重而可レ被二仰聞一と、こと〲敷被レ申、又續猿蓑の一條に不猫蚫一部の穿義所也と書れたるに、わづか十餘條の口状に如レ此の自語相違、貴房の本心すはらぬしるし、筆端にあらはれたり。惜い哉貴房も蕉門の後學ながら、其氣濶うして俳諧には打てつけたる器なるに、いかにしても生得佞智多く、次第〱に虚言(ウソ)にたかぶりのつきて無用の辨を吐るゝ故、たとふるはおかしけれど、常山の蚫のかば燒に成がごとく、今にては何じややら尾にも首にも取所なし。若、僞作の式目・遺稿等を獅子庵の紙屑籠へおさめられ、三十餘年の非を御あらため候はゞ、蕉翁在世の本意にもかなひ、世人も却而殊勝に可レ存候。

一　某、野・越二老の門にあそび古翁の正傳を聞ながら、削かけの返事を其まゝに捨置ては、珠玉瓦礫のわいだめなし。故に貴房一黨のにくまれ人と成て、此返答におよぶもの也。惣而未熟文盲の人に對し、無益のあらそひは我等大きな嫌ひにて、貴房の門人誰かれへ不圖(ふと)參會の一座にも、其日の人和をとゝなへて時宜にしたがひ、何もいひ

捨、淨土・法華のりきみはなし。又は貴房を敵手にして斯ク破竹の勢ひを、是等は俳士の器量にして、よく溫厲の間に座す。此道の大心ともいはんか。これ至自慢にはあらず。傳統正しければ翁の餘光の予がごき迄、貫通するを見つべし。畢竟は若輩事も廣言も、みな俳諧より出たれば、あなかしこ腹立たまふな。

享保十四年酉七月

口(こう)状(じやう)

露川責
支考著

口　状

此度口状之趣は、貴房と愚老とは四十年の舊交にして、面談に一度、書通に二度、俳諧の異見申ゆ得ども、聊點頭無レ之躰にゆ。然れば貴房は蕉門を學ぶ合點にや。又自己の一派を立て、蕉門をあざむく合點にや。行先にて承ゆ得ば、芭蕉より先に季吟の直弟とも、又は芭蕉より傳法とも、十國十色に御申ゆよし、愚老も行先の返辭にこまり申ゆ。此度三越の先〳〵にて、折本の名目傳とて、故翁の俳諧を證句に引れゆ。四五ヶ所にて見申ゆ得ば、中の切・挨拶の切の外は一句も蕉門の用にあらで、却而俳諧の害なるよし、逐一に脇書致しゆ。御望ならば掛二御目一可レ申ゆ。

一貴房の俳諧の風は、天下に幾万人か有レ之ゆ得ども、此方より僉義には及ばず。貴房は自己の作り事にて蕉門を賣歩行人なれば、初心の輩は蕉門の直旨かと、誓紙に血判の信心を起す。そこを蕉門の紛れものにして、何方の評判にも俳諧は下手なれど、律義に無欲なる宗匠なりと思ひまどふ〔異本(思ひたがふ)〕。されば世の人の似せものにだまされ、俳諧の目利（めきゝ）の明らかならぬゆへに、例の蕉翁の遺訓かと慕ふ小松連中の傳授のごとく、諸國ともに尻から笑ふて、誓紙血判の傳授本を朝晩の噺の種とす。三越に貴房を笑はぬ人は二所に二人有。それは其所の連中と張合の事ありて、貴房をひかねばならぬ首尾にて、愚老とはやはり表むきの付屆にて、俳諧の出合はなし。この外三越の間には貴房を學ぶ者は一人もなし。たま〳〵状通の人ありとも、それは貴房をなぶるとて、居士の妙句も久しく聞えず、いざや此便に聞よせばやと、所〳〵より状通の事も承りぬ。かならず御油斷有まじくゆ。此度世界の評判を貴房が耳に傳ふるものは、天下に愚老ならでは有間敷ゆ。かまへて愚老を恨たまふべからず。我門の建立のために人の敵とはなりぬ。貴房は俳諧のくらきゆへに身のうへの善惡をしらず。をれは上手にて人がしたふとおぼしゆはん。人は迷ふたる心より芭蕉ゝゝに信心を起す。追剝にあふも此道理

なり。爰は貴房も知らざれば、世間の人も知らぬ境なり。今より前非を悔み給ひて、大かたは俳諧をやめたまへ。貴房が身上は喰かねず着かねずして、人目にはむさぼらぬ顔して、名聞のために俳諧を飾り、今生には蕉門の俳諧をそこなひ、未來は拔舌の地獄に落たまはん事は、口過ならねばいよ〳〵無益の愚言異本(愚書)也。靜に御思案可レ被レ成候。此通にては、天下蕉門に通志の人は、惟然坊が無起異本(無記に)の酒落をしたふやうに、貴房が野質の殊勝を尊がりて、蕉門の姿情をあちらこちらに覺ゆるゆへに、如レ斯は申遣候。陰にそしるは佞人の誹謗也。陽にせむるは聖人の教誡なり。今より一派を御立被レ成候はゞ、蕉門の證句をみな〳〵ぬき捨て、鬼界・高麗の引句をも御出し候へ。折本は一事も我家の用にあらず。貴房も誓紙血判の罰舌の罪を思ひたまへ。明暮の念佛は何の爲に御願ひ候や。今年娘の逆縁とても、それらの罪はのがれ申まじく候。諷諫も頓挫も爰の事也。

一名目傳に馨・走・響の事も、莴の松原を御學び被レ成候哉。是は故翁在世の時に、響とは起情の事也、走とは拍子の事也、馨は百句が百句ながら二句の間のにほひをいへば、附方の一名には如何ならんと、其時に故翁に難破せられて、此たび十論に辨義を付て、其誤りを悔ミ申候。然ば貴房が名目傳も無用の沙汰と可レ申候。決して拔捨たまふべし。たとへ貴房は連歌の式目を證據とし、季吟の直傳を御申候とても、鶯は春也、雪は冬也の類は、貴房が名目を習ふに及ばず。今は月・花・櫻のさばき、紅葉散を秋とし、斥鷃を冬となす類、舊式を用ざるもの數百條有りて、いにしへは文學の理屈をいひ、今は言語の道理をさばく、これが貞享式の本懐とせり。此度鵜坂集に心の花を雜とせしは貴房が差圖とうけ給り候。なまじいにそれらの舊式を傳へて、蕉門の新式の害をなせる、此度せむる事の第一也。それに貴房が、朝顔は鏡のひづみ猪口のわれ　とは前句に附かず、當句の埒なし。これらの返事承度候。

一貴房が五箇の附方に情と申、名目あり。いかなるを申候や。俳諧は百句が百句ながら前に姿あれば後に情ありて、一句も姿情をはなるゝものなし。古風は皆〳〵情

を先に聞て附るゆへに、俳諧の理屈を云ひ、今は姿を先に見て俳諧の道理をいふ。十論に姿情の論あり。貴房をはじめそこの連中は、皆々情を先に聞ゆへに、百句が百句ながら理屈也。七情は理屈に動く物なれば、理屈を人間の常情とせり。それに其情を人に教へば、火に薪を添ゆるごとく、蕉門の害の第二也。此度富山の連中は、其情に落入て油の綿にしみたるごとく、其地は三四年の病となれり。爰におもへば、東國・西國の人々も貴房が病をうけつぎて、永く蕉門の害をなせる、我はた是をふせがざらむや。かくいへど貴房には姿情の境は分明なるまじ。靜に十論を御覽あるべし。

一我家の一大事は、趣向と句作りとの差別を知りて、目に見て其姿を案ずべし。耳に聞て其情を案ずべからずとぞ。此四差別をしらぬ時は、人に俳諧を學ぶべし、人に俳諧を敎ゆべからず。されば貴房は自己をしらず、愚老より貴房は上手なりと思召候哉。去々年有勤にても發句の異見あり。實に左樣ニ思召候哉、言語道斷、是非に及ず候。貴房と愚老とが甲乙は百か一の違ひと申にもあらず。貴房は根から俳諧の道理をしらず。昔は俳諧の地役者と云て、地は達者なりと申ほどの事也。此ゆへに其頃は加賀に北枝あり、尾張に露川ありと、人の問ときは答申候。貴房も定て御覺あるべし。今は天下の宗匠と成、みづから居士の號を稱して文臺の上座に俳諧をさばく時に、百韵は百色の變化あれども、例に俳諧の一理をしらねば、附合のはこびに望み、一卷の法式に及びて、連中は貴房を知識かと問かくれば、貴房は一字の道理をも傳へず、作り事をいふより外はなし。今は十四五年も先ならむ。貴房は瘦馬に荷が過たりと申異見、定て御覺あるべし。惜むべきは貴房が俳諧の地を行過て、一聞十知の上手と思ひ、蕉門の紛れものと御成候事、返す〲も蕉翁の冥慮にもおそれ給へ。貴房が分上をよく知りて、かく的面に申者は愚老より外には天下にあるまじく候。

一貴房は武洛の點者のごとく、口過のために俳諧を賣らず、愚意の名聞よりうそをつき步行て、今生は蕉門の害となり、後生は拔舌の過を得ん事は、さりとては無益の

事どもに候。今よりさらりと俳諧を捨て、念佛斗に御成候へかし。若又俳諧を御やめ被レ成間敷候はゞ、愚老より東西へ此非を觸わたし候半。蕉門の俳諧を荷兮がごとくあざむきて、貴房が一派を御立可レ被レ成候。

一貴房が心に、佛門の殊勝躰より故翁と肩を並べ、俳諧の實躰を作りて、極本式とやらを世に傳へんとは、以之外なる鵜のまね也。むかし西行・宗祇など兼好も長明も、今日の蕉翁も、酒色の間に身を觀じて、風雅の道心とは成給へり。此ゆへに文質も調へり。貴房がごき蒔立の禪門にて、傾城の身仕舞に部屋の干鱈もしらず、嚮の臺所に掛盤の二前箸をしらず、連中の知た事を宗匠はしらで、世情分明の俳諧の設は、我と我身を耻たまへ。貴房はかへりて知らぬが自慢のよし、それならば隣の表具屋をすゝめて、念佛講の出合しかるべし。俳諧は酒色の中にも遊んで、我を知る時は其人を教へ、我をしらざる時は其人とあそぶ。此二句は十論に御覽候へ。內に虛實の設にして外には諷諫の爲也。俳諧の祕法は此事也。

一貴房は第一の虛實をしらず。俳諧は實に居て虛に遊ぶ筈也。行先にて愚老をそしられ候よし、貴房がいふ所は信僞の事也。そも〳〵大道の虛實とは、大きなる時は、天地未開を虛といひ、天地の已開を實といふ。小さなる時は、一念の未生と已生となり。是等は心法の沙汰なれば、念佛にては合點まいるまじ。それよりは手短に、貴房は夫婦の實に居て、人が女房を望む時に、我は虛に遊ぶとて人に振舞候はんか。ふるまへば犬猫の所行也。爰に虛實の前後を知て、虛に居る時は女房の不信を恨みず、本より五論の虛を知るゆへなり。人が女房を振舞へといへば、世法の實をおこなひて人には指もさゝせぬ也。これは大道の動不動の沙汰なれば、重ては御無用になされべく候。商（蛮ヵ）の信僞とは違ひ申候。

一去ゝ年三越の出合に、金澤より小松へ書通いたし、俳諧の行過をいましめ候て、慥なる地の句一ツ、かけりたる地の句一ツ、手本に遺し候へば、

曉の夢に行燈の火をとほし

嫁々が子でない爺が子になれ

此句を貴房か評判に、是は地にあらず、曲節也とや。北國は中に及ず、美濃・尾張より伊勢の山奥迄も自慢に御申觸のよし。

さう泣ふなら嫁々が子でなし　露川

貴房が泣子と愚老が泣子といづれの所が違ひ候哉。句作りのかけりは共座・共卷の變也。貴房は地と節との差別をしらず。前句に節を附て案ずる時は、夢にとほすをあやしと見て

曉の夢に行燈の火をとほし

太刀ぬきはなす金屛のかげ

此差別にてしりたまへ。趣向に地と節との差別有て、句作には曲と中事はあれど、節と中事は無レ之候。

一此度三越の行先にて、いま／＼しき三句を書傳へ、貴房より手本にと被レ遣候よし。

人に勝れていかゐ日のたま

拷問は辰の刻より暮るまで

大地にひらみ付てかたばみ

此三句はいづれの所にても口にいふ事さへいぶせがり申候。それを譽よとはいか成思召にや。頃日七尾の或人のもとにて、

聾から闇のつゞく木の下　長羽

盗人の見舞に垣の穴みせて　蓮二（異本見評）

此第三をいたし、愚老も自慢にて出すべき所に、人にまねかれて此句はいぶせしとおもひ、

乘物に飽日は下駄に杖突て　蓮二

此句は盗人には天地に劣り候へども、思ひかへしたるは風雅の運なりとよろこび申候。拷問は附合のよしあしにはあらず、俳諧滅亡のさたといふべし。されど日の玉の句、人によりて戻しがたき一座もあらば、そこを宗匠のはたらきといへば、爰にて虚實の説を知るべし。

人に勝れていかゐ日の玉

拷問は銚子二ツに飽貝

是はたいこの源七が廓の爐を責るさま也。これらに虚實は入用なり。或は日の玉も拷問も戻しがたき一座ならば、二句のいぶせき姿を變じて、鎮西八良の面影に

取なすべし。

　人に勝れていかる目の玉

拷問は辰の刻より暮るまで

　弓箭の義理を文にこま〴〵

如ㇾ斯附る時は、國の妻子も武勇に慰み、一座の連中も義理に感じて、前のいぶせき心を忘る。是を附合の機變といふなり。此附方は二句をからみて一句にあしらふ。或は一句に二句附る法もあり。是を二句一意の設（扱）ひともいふ。されば俳諧の平生とは、三句目のはこびの大事也。井波にて此頃の卷に證文あり。

　先ふみつけてしばる早繩

御袋に因果ふくめる町の衆

　火燵をのいてあたらするなり

此三句の平生を見給へ。かたばみのどき作り事にはあらず、たゞの人の只の事をいふを俳諧とは申なり。爰に三句めを三越にしらしむる爲に、例の我家の八躰をとゞむ。

其人　其場　時分　時節

時宜　天相　觀相　面影

右は我家の附かたにして、發句より擧句まで一句に八句ッヽ附る法なり。されど拷問の三句目には其人は打越にあり、時分は當句にあり、時宜は其時その場によるべし。爰には五躰の附方を出す。

　其場

拷問は辰の刻より暮るまで

　忍びがへしの松に凌霄

忍び返しは趣向也。凌霄は句作り也。余情は夕日の殘照を見るべし。

　時節

拷問は、、、

　凬さへ秋の鎧着た音

冷秋は趣向也。鎧は秋聲の賦の句作り也。余情は殺罰（伐）の聲を聞べし。

　天相

拷問は、、、

　一むら雲に霰はらつく

村雲は趣向也。あられは句作り也。余情は天魔の變相といふべし。

觀相

拷問は、、、

師走を余處に聞て風鈴

師走は趣向也。風鈴は句作り也。余情は市中の隱閑さしるべし。

面影

拷問は、、、

硯に紙の重石吹ちる

是は軍書の面影にして、爲明卿のさまないふ。此外草紙ものがたりなど儒書佛經の俤も多し。

此外に空挑といふ附方あり、我家の祕法也。よのつねの人には傳へず。たとへば三四の折にいたりて、前句の案じ行道筋をつけず、目をふさぎて拷問の所をみれば、いづくよりか文箱を持來れり。其人に見せうの見せまいの詮義あり。されどあどなき娘の文にやとて、

拷問は辰の刻より暮る迄

むすばぬ文は神もとがめず

是等の師傳にて御工夫あるべし。是を祕法といふ事は、貴房をはじめそこの連中達も京・江戸の俳諧師も、空挑の附方にて、二句は推量して道理をしらず。是を以て祕法とす。第三に韻字の祕傳あるも此類也。これらに趣向と句作りの差別も姿情の先後もしるべき也。もし又貴房がかたばみの三句めを共場也とあらそうべけれど、大地にひらみつきてといへる苦痛の情を先に案じて、かたばみの姿は後也。例に蕉門の害といはざらんや。衆生隨類各得解と申て、あまねく蕉門の附合も、折本に御引候證句共も、貴房が耳には情が先也と聞え候半。許六が俳諧の一生前句へ附ざるも、それらの得解にて御座候。畢竟は虛實の設としるべし。

一貴房が自讃の句には、首きるの、腹切るの、山伏の石子詰、しばられてにらむとやら、鋪革の上に屁をこくとやら、其類は江戸の不角流とて、學ぶ人もゆへ共、例に俳諧の談笑にあらず。まして貴房が平生をかへり見たまへ。上品の一座のつき合にも居る時は、着物に足を包み、箸をとる手も盃をとる手も、況や今樣の口合など、風情はすべて不拍子の生質にて、談笑を家とせし俳諧

の風流には、かのいふ不道化の第一といはん。此境は十論を御工夫あるべし。

一頃日貴房が自讃の句とて、三越の行先に寫してあり。」

白瀧の漲り落る數千丈

五寸の胸に世界一呑

夷等に脚氣もませて高鼾

此三句は蕉門の大害といふべし。其故は、前の拷問のごときは世間より請とらず。此三句は例のまぎれものにして、姿情の境に蕉門の害あり。すべて貴房が持病の情附なり。其外夕顏の馬のごときは、下手と見て論はなけれど、この三句には人のほれる句なれば、且又三越に此邪正をたゞせり。「されば白瀧に五寸の胸は、是を情といひ理屈といふ。五寸の胸に夷等をば前句の噂といひ、前句にのまれたりともいふ。俳諧の大事は姿の死活也。貴房は前句を耳に聞て其情を案ずるゆへに、前句の言語に驚きて名大將と覺し候哉。愚老は目を以て其人の姿を見れば、大縞の布子の袖口はほころびて、」ひた面に眉尻ははねて、かしこげに口はたゝけど、一座合點のたわけ者と見て、

五寸の胸に世界一呑

損しても飛商にこりぬやら

此附合にして自己を耻たまへ。明眼の師は一座の人を見て一生の俳諧のよしあしを知るなり。貴房は田龍(見龍カ)をさへ見そこなひて、三越の行先にて御腹立は、貴房が耻を觸ありくならずや。然るに貴房は丹波にて田龍に莊子をよみ聞せたりと御申のよし、眞ッ口に御座候。膚齋の二字は何の音にて御座候哉、御存知有間敷候。田龍は貴房へ古今の傳授申たるよし。どちらが博學ニ候哉と三越の行先には是さたにて候。よく〳〵姿を聞たまへ。貴房が白瀧の三句ははいかいにあらず。あれを詩哥のさまと云。たとへ一二句はあのさまもあらむ、三句めは早く俳諧の平生に戻るを宗匠のはたらきとはいふなり。三句ともにうか〳〵と前句の廣大に氣をとられたらんは、俳諧といふ意地なし。惣じて蕉門の十哲は、杉風・去來は實情を寫し、酒堂は俗話をあつかひ、許六はこなしをしり、越人はなぐりを得て、故翁も此衆

中のはたらきには及ばず。されど其人を宗匠にすれば、百韻は百句ながら面々の一様にて、五句ツヾきては聞にくし。貴房は其内を一色もよくせず、よらずさはらずの地に達者なりといひしに、今更其地も行過て上手の曲節を御學び候へば、かの邯鄲の歩を學ぶとやらん。今は兩手に草履をはきて、脚をそらさまの俳諧といふべし。返す〴〵も心をしづめて、峠よりこなたへ御戻り候へ。蕉門の故老も皆々失果て、明後年遠忌相勤候にも、貴房は其時の助力にはあらで、蕉門の害と成給ふ事は、愚老が心底をも御察し候へかし。歎べき事の第一なり。

一貴房は十八の切字を習ひて切字の道理を傳授せず。折本の名目傳に、から崎の松も、夕顔の瓢も何とて推量の事を天下に書傳へ、數萬の人に信心を起させ、貴房が科は何方へあたり候半。ましてほとゝぎすの二段切のどき切字は、一句も道理に叶はず、且又手爾葉をも御ぞんじなき也。身は竹齋に似たるかな　は、荷兮が橋守の文盲を見習ひてルかなクかなと思召候哉。タルかな・ケルかなとは、手爾葉を重ねて大決定の詞也。浮哉と申事は動く哉、歸る哉の類也。是等にて折本をも耻たまへ。殊に貴房が奥書に如誓戒之猥とあり。戒とは契の事なるにや。之の字はいづれの助語なるや。さほど文盲の自己をかへりみず、何とて大切の名目傳ならば、連中の學者に御尋不レ被レ成候哉。愚老は此度も石動にて和漢文操を見てもらひ、あしき所は直して貰ひ申候。貴房は東西の國曲にもいろ〴〵の文章を書ちらし、一章としてろくなる事なく天下の笑ひ草となれど、靈庭ノ賦のごとき三字の事をも人に聞合せず、我はいみじと覺し候事は、いかなる天魔の入かはり候や。先年尺八の銘の御返事も實に左樣と思しめし候哉。貴房が學文の分上は、三躰詩を教へたる曉より愚老ならでは知る人なし。さりとて自己を觀相し給へ。殊さら石動の對面に稻荷の發句の切字の事をいへば、何やら子細ありとの御返答は、さだめて連聲の事にてあるべし。それならば連聲は五音の相通に候へば、サシスセソの竪の舌音也。イキシチは韻礎にて相通せず。

天長し地は門松の稻荷山

此切字は國君の爲によろしからずとは、天長地久の中を切ると申道理なし。貴房は現在のしの字切字なるを習ひて、切字の道理をしらぬとは此事也。是非〳〵異本（したくと）く地はと御直しあるべし。天長く地はと申所にて心の切と申事は、御直し候はゞ早速御相傳可レ申候。但し又貴房などは、門松の稲荷哉　と被レ成て似合しき事にてあるべく候。

一貴房は門人好にて、先々にて誓紙に血判させ、天下に何千人とやらむ御自慢に被レ成候よし。愚老は貴房より諸國をめぐり候へど、雲鈴が外に門人は一人もなし。其故は天下の俳人は蕉翁の德を慕ふ故なれば、風を望めば凡て故翁の門人也。貴房が俳諧の下手の證據には、人のなびくを自慢顏也。五節句の付屆けもなき事ならば、口で斗の門人は重ては御無用に可レ被レ成候。俳諧にほめらるゝ事を飽申候へば、門人好も止ムものにて候。此口狀は西國・中國筋へも申遣候間、東國筋斗にて門人もへり可レ申候。帳面御消可レ被レ成候。

右之條々は故翁の牌前にて、黨誦再三して申遣候。貴房と四十年の舊交を捨て、此狀を今生の名殘と存候へば、一事も不レ輕申入候。

貴房此うへにも蕉門御立被レ成候心入ならば、折本の名目傳を諸國よりとり戾し、今迄の俳諧には誤りたるよしを諸人へ御斷候へ。然らば廣額居兒が變心よりも猶亦殊勝にて候へば、愚老が故翁より傳授仕候宗匠の入用、皆々御相傳可レ申候。重て折本の前非をつくろひて、蕉翁直旨の法式を御ひろめ候へ。然らばむかしの露川には立まさりて人も誠に殊勝がり可レ申候。今迄の罪も忽にほろびて、貴房が明暮の念佛もあだ事には成申まじく候。但また今迄の紛ものにて、前非をかくす合點ならば、此口狀を板行にいたし、蕉門の邪魔をふせぎ申合點に御座候。但又蕉門に敵して貴房が一派を立る合點ならば、貴房が俳諧と芭蕉派の俳諧とは天地に違ひ申候間、別に傳授本を御こしらへ候て、芭蕉事御申有まじく候。其時は一言半句も貴房が俳諧に異論は申まじく候。

此三ヶ條はどちらへも御返答可レ被レ成候。是を寐所にお

しかくし前非をかざられ候とても、此方より如レ此に諸國へふれ候へば、諸國に邪正は評判あるべく候。さりとては其心を引かへし、尾城に蕉門の一助と成たまへ。貴房とても愚老とても永くても四五年には過まじ。俳諧は老後のたのしみと申事は、十論の第一義也。一人も舊友をうしなひ候半事、老後の歎きとこそ申べけれ。迚も此事世にひろまり候へば、どちらへも御思案被レ成、伊勢まで貴報まち入候。多罪〻〻。

享保八
卯八月十二日

蓮　二　書判有

露川御房へ

あひくさび
露川著

口狀相楔

去比、蓮二房より露川方への口狀一通、尾州に到來して風雅・無風雅共に是をもてはやす。其文言を人の持たるを覗き見れば、露川、三越路の行脚の時、國中風雅人共、露川の中立の風雅の趣に思ひ付候事、蓮二房には何とやら不快に有レ之ニ付心ならず、此狀を尾州に遣候。國中の者共評判と志しての狀と見えたり。今取上て是非を立るもいらざるものなれども、無風雅の人は却て蕉門の魔道に入て、露川を嘲る心あれば此狀は師翁の怨となれり。師、敵對の罪をのがれんや。然ば露川身にかゝりて芭蕉に酬ふ事を知らず、且亦露川の行脚東西披露せしに、其節は誰レ其事もなかりしに越路の旅行ニ付、蓮二坊俄がましき事を申立るは、いかさま其趣の根や有べしと皆心有人は考見給ふべし。しばらく其狀の中の眼目をあげて、兩方の眞中に立て是を見れば、

一、蓮二房狀にいはく、貴房と愚老は四十年の舊交にして、面談に一度、書通に二度、俳諧に異見申候へ共、貴聊の返答無レ之由、季吟弟子ナルとも芭蕉の傳法とも十國十色に御申の由、愚老も行先の返事にこまり申候。此狀の段は露川へ何異見か、品は不レ存、然其聊も返答なく捨置事ならば、定而心に合ぬ事成べし。予推するに人のためにする人は、其身の愼、其身になき時は人として其事を不レ用、提婆が十八變の通力も自己の惡心より阿闍世王にも逆罪にいれり。諫める人の操惡しくば巧言成とも、人の情には耳に入まじ。衣鉢の佛學より出て、俗に歸るは先本心にあらずと、（本文ノマヽ）大格にて聊も請れぬものかと見え候、又十國十色は其國の人に號なれば、世の評にして何の蕉門の害ならんや。蓮二坊の返事のならぬといふも、もたせぶりなり。又名目の折本の事は末にいたり、其安否を申談ずべし。其中に中の切字・挨拶の切の外一句も蕉門の用にあらで、却てはいかいの害なるよし。是は中の切一つにても叶候と見え候はゞ、餘は叶ふやうに見るべきは誠の道也。邪を以て見ば今の儒佛も又爾なり。言說には中立れども身に行事難し。昔、芭蕉の句を用ひ來らば、是蕉門の外に立るにはあらず。蓮二の大知識には不相應成文

章とぞ口惜し。

一、貴房（蓮二房狀ニ）俳諧の風は天下に幾万人有レ之ゆへ共、此方の詮義には及ばず。貴房自己の作り事にて、芭蕉を賣りありく人なれば、此段は露川は蕉門の直旨と名乘り、誓紙・血判の事をのべたり。俳諧は下手なれども無欲なる宗匠なりと、はいかいの明かならぬものはだまされて、誓紙・血判すといふは蓮二坊の大なる過言也。是等は悉皆蓮二坊の上品の弟子、露川はまぎれものゝ心あらば、何方にても露川門弟にかたぶき申もの誓紙をもどさせ（戻）、蓮二の其風をひろめて教化すべきを、今拙き文章に我心を書あらはしたるは淺ましきにや。心有ものは見侍るべし。はいかい上手にて行脚とはいはず。今様は蕉門などいふて欲を先にして、何もなき事、口訣・傳授に拵へて諸國に徘徊す。此欲心より出、奈良茶振舞の席をよろこびたるは、世過の宗匠など取囃さるゝは數多東西に亂入たり。其中に此度三越は蕉翁遺跡有所と、其國の宗匠を歸依さする露川がはいかい下手の手柄也。それを傾かせ置は蓮二房の不器量と文通の上にあざやかに見へたり。臆ゟ露川へあなずるほどに油斷すなとは、露川の味方に成り給ふかや。露川に對して、か様文通なければ露川威光日に添へ増して、尾州門葉も見るより、扨〻蓮二は大欲の仕方也と我が身の事を書觸さする。露川、爲に須彌山に近く衆鳥皆金色（コンジキ）なるがごとし。人〻をまどはかすといふ事、人間の耳目殊に風雅人はそれ〴〵に理非を分かぬ者は有まじ。それに蓮二の因を捨て露川に歸依する人は、口訣の理のつまる所成ものか。是は蕉門の威光とは成べし。害とは成べからず。方便をめぐらす人のために、害とはなるべきか。

貴房（蓮二狀ニ）はいかいのくらきゆへに、身の上の善惡をしらず、おれは上手にて人がしとふ（慕）とおもひし、聞人は迷ふたる心より芭蕉〳〵と信心を起す、追剝ニ逢（アフ）も此道理なり。爰は貴房もしらざれば、世間の人もしらぬ堺也。此段は露川に問（トヘ）ば中〳〵上手とはおもはず、蓮二が狀の通に文盲の道心と答べし。此問を云はゞ、芭蕉〳〵としとふも追剝に逢も此道理といへるは追剝心得がたし。露川を追剝するものと見るか。さあらば無欲正直の坊とは書べからず。若又聞人が追剝する心か。露川何ほど蕉翁の流儀

といふとも、一言の信心も起すまじ。案ずるに世間の人のしらぬ堺は、色〳〵の術(テクテ)をいたし、口訣・傳授を作りて、其代とて金錢を取りて諂ふ下心ある蓮二が才覺利口、人がしらぬと見へたり。爰にて蓮二心底の黒心(くろきこゝろ)知人は知べし。蕉門の姿情あちら、こちらとは何といたしたる料簡にや。姿情のはなれざる事は萬物に渡るべし。姿斗ニ而よくば死人が物語すべし。よく〳〵至て考へ給ふべしや。とかく蕉門を退(ニゲ)たがるは、自身の欲に迷ふて、下心濁たる事。此露川は實儀を以て身を納め、現當の心もよごれぬやうにと念佛す。蓮二は見聞の主人公を捨て、俗業に歸て念佛三昧忘れたり。破戒はたもたざるものより料(トガ)深く、是を梵漸(ボンゼウ)の波羅夷(ヘライ)罪(ザイ)也といましめたるなるべし。念佛の悲願は誹諧の心に相違あるまじ。是は却而蓮二坊は管仲が器なるべし。

一、名目傳に礬(こまか)・走り・響の事は葛の松原にて書出されし旨(ムネ)、拍子・走り・起情の事も附方には如何有らんと也。此度折本の名目を露川出しゝ事は故翁の格式を定、世上に僞り宗匠繁多ゆへに、蕉翁遺詞を以て記錄して、其名を立るに何(なにか)防止有べし。蓮二房のやうに破り捨たればとて外の捨べきにあらず。起情も走りも拍子も毎座に有べき也。蓮二の名目を仕立たるにあらず、當流誹諧の一筋には何にても用ひて實の風雅に入べし。佛說に僞經多し。かなぐり捨べけれど、善に入初門となれば、和漢共に用ひ來る十三經・因果經、其外に僞經も錄に見えたり。蓮二が心は捨られけれども、今は露川用ひ來るは蕉翁の害と成事微塵もなし。みな蓮二坊、渡世のわずかなる所より五尺の衣鉢の身を隨す、是等成べし。露川もし大欲心をかくし、三越に銀錢の袖下取りて諂曲せば、生國の連衆等も恥面たるべき事、今將(いままさに)蓮二坊狀面にいよ〳〵諂はず、我が儘にして風雅を傳たれば天是を捨給はじ。名目(名目)、天下に流ル、道理なり。殊更好色の儀殊の外無案内の事、蓮二坊の狀のごく然らば、尾州の連中も廻國行脚の内ゟも、所々女色の遊所などありしに、三國(ミクニ)にはまり今庄に居られたりなど申事あらば、沙汰の限りにも思ふべきは人の口說也。此度は北國の岐(チマタ)におゐての事を演(ノ)べ記せり。もし凡夫の露川、揚屋の燈火など見たと申事有らば、蓮

二坊が同門葉といたすべし。是を以て書記の心底、心あらん人は此儀を以て、はいかいの事になぞらへたりとおもふべし。舊式・新式も其季の道理を天理・地道を立る古風、かたくなに取成し、理の屈する事を嫌ふは、當風大魁古翁の機勢成べし。貞享式の事さる事成べし。其代ょに世務・國政も替り行(ゆく)者也。しかりといへども放埒は有べからず、蕉門の遺誡なり。然ば鵜坂集に心の花を雜とする事、蓮二は指合の至極をしらず。打越に植物(うゑもの)有りて直しがたき句あらば、花の座に雜の花有べし。是は舊式を見たるは誰も知れる雜にて付句に、春の季を付ずといふ新式也。夫を疾(とく)としらずして、是ほどの舊式といふは、付合の意味不合點にして難ぜられたれば、是も蓮二坊あまり輕しめての申ぶん、書面猶野質なり。此雜と云事分別の新式に至りて何蕉門の害成事、言語の上の申ぶん成べし。打越の植物有をしらざるは無念の至極也。鏡のひづみ猪口の破とは不レ付と云ふ事、句の聞様、見やうにて聊の心得有べし。此返事の口訣は露川面談ならではしりがたし。

一、貴房、五ケの付方に情と申名目有りと不審。蓮二坊の申されゆ通りなり。七情は人間の常也。姿情相はなれて見るべからず、夫を情を以て付來れば、古きになづみ理が屈するにて働(はたらか)ず。當今姿より情を無差別にして、名目には姿と情と面(兩(ふたつ)カ)を譯判(ワケ)ずる也。露川、姿情も蓮二の姿情も、座により所により句によりて有べけれども、姿情はなれて有物はあらじ。それを名目に情と立たるといふに付て不審、暫く抑かけて露川を、無理に情の句一邊と云事は、蕉門の屈歩虫(クツフチウ)成べし。富山連中其情にしみ付と申は蕉門の害と定たるも、風雅の道しる人ともいはれがたし。是ほどの姿情の差別を辨ぜざらんや。姿と情の堺とて佛道・哥道・誹道、別に有べからず、心佛及衆生是(シンブツギウシユジヤウゼ)三無差別(サンムシヤベツ)は佛の姿情、溫良恭儉讓(ヲンリヤウケウケンジヤウ)は儒の姿情也。風雅の姿情は句毎に百句ながらに渡るべし。十論の姿情は至ていぶかし。(後カ)何の蕉門の流に白馬經を出せり。何を說き置く經にや、芭蕉の說法か。白馬の題號は佛法東漸の白馬寺なり。佛の說にや出て、祕事は何の理を書詰て口傳とゆづりて、風聞に十論の講釋と申して門弟を拵へ、言論の

世智辨を以て、袖下より彼の金銀を直段に定而講ずる師も有りとは、欲の落し穴かと一唱三拜の口をよごしぬ。

一、我家の一大事は趣向と句作りとの差別を知りて、目に見て其姿を樂じ、すべて耳に聞て其情を樂ずべからずと、此四差別を知らぬ時は、人に俳諧を學ぶべし、人に俳諧を敎べからず。此段は、句作り趣向と目に見ると耳に聞との四の差別を申出し、露川は蓮二より上手と思はれしやとの事、是も人欲の私には、たがいに下手とは思ふまじ。とかく世人の宗匠國〱に有（誓紙）を以て我門に入るは、下手の上手と申事成べし。去ゝ年石動にて發句の異見の事は如何か覺有べし。是は前方の次第有事成よし。三越へ露川行脚の節は、露川方へ蓮二より兩三通の自分の頼狀、幷、其書に自身の噂取なし給はれと申文言の狀ども數通、露川手前に有し之由、又かれ是式の音物等もいだされしの由其狀に具也。爰に今石動の論を申出されしは尾州の者に知られたいと申心根にや。石動の論は料簡もなくて今又論を書載るは、よはき狗の門內に入て吠るがごとし。今天下の宗匠と成も、自分にあがいて人が尊敬せねば用ひず。自身には德が有とおもふとも、他が歸伏せず。天下の宗匠の名は蓮二も呼られたるべし。さるに依て宗匠の名人の耳に入ぬ。扨又白居士を稱して云は、居士に付佛家に種ゝの定有り。今居士と露川を名乘事、法閫の內篇より許され、京の最上子にも呼給ふ稱號、世上に呼るゝも一德ぞかし。然るをみづから居士と付とは我慢の上の偏口也。天下に露川に異見申者は、蓮二より外は有まじとは能く聞へ侍る。漂泊の人は其道筋なればさも有べし。此文書は露川身の上に忝かるべし。武・洛の點者のごとく口過のために俳諧商はせずして、露川名門のたかぶり嘘をつきありくとは、金銀をも先〱に取らば、蓮二の本懷と思ふべし。是は露川胸中とは雲泥の事也。加（か）樣の文通せらるゝが誠の蕉門の害と成べし。立入て分別有べし。罰舌地獄へ落入らんとの事は、是又加樣の文言を吐き、初心の眼をおどろかすは無眼の地獄へ落べし。東西に觸たらば猶以蕉翁の魔界に入ル人有べし。其時露川念佛稱名の光り增益し、闇夜の燈と成べし。其時露川流のはいかいゟ外、何をか建立せんや。心有らん人は此文

面を心に入、身に引受て考訓し給ふべし。

一、昔房には佛門の殊勝躰より古翁と肩を並て、はいかいの實躰を作りて、極本式とやらんを世に傳へんとは以の外の鵜の眞似也。此段は念佛の殊勝躰より翁の俳諧の實躰を作るとは、露川は遊戯の座に心をとゞめず、己心の彌陀に移りて五逆・十惡の科を知る故に、表向から念佛の道心と姿に顯れたるべし。蓮二の常に姿を以て誹諧する人なれば、露川あたまつきをも左樣に見たるべし。就中西行・宗祇・兼好・長明、今日の芭蕉も共に酒色の間に身を觀じ、風雅の道心と成と云ふ事誠に俗心を悔て、法道に入る事は世の惡氣をいとふ也。然るに酒盛・遊興して女色にふけり、衣帶もなく成果て世に捨られて、風雅の道心と成とや。扨ゝ蓮二坊の身上に合せんために、此例を作りたる事、大僻見の內成べし。酒に醉ひ色に亂たる故に文質も調へりと申事、世の眼目にかけて見給ふべし。殊に兼・明の二師など酒色に長ずる事、先代未聞の事ども也。是は虛を先にして實を後にする術成べし。七八 露川は蒔立の禪門にて傾城の身仕廻、部屋の干鱈をくつわの臺所に掛盞の二前箸を知らずと云事は勿論也。いはんや露川念佛坊は何として傾城の設を知るべしや。殊に家督相續の士官など、加樣の內證の祕事に立入たる事有まじ。さあれば俳諧はならざるものか。大善智識も酒色の害をなす事知るべし。誠に干鱈・二前箸の祕傳は知るもの有まじきに、蓮二はよく祕法の術を得たる人成べし。然らば自分の酒色に金銀費したる事文章に見へたり。誠に佛も酒色の邪正を說て飲酒戒有、然ども是に遮戒有り。孔子も酒ははかりなし、亂に及はず。好色好言と云はれ、佛は衒賣女色と說て其邪念をいましめたり。然時は酒に染ず色に交らずして、其事を行なはずして能知るは智發の用なり。今又蓮二も其酒の味、其色の趣を見て人にいましめるが大道なるべし。露川愚にして知らぬ也。それにて宗匠にならぬと申事我身恥よ。誹諧に酒色に染ねばならぬ風雅は、惡心の事すゝめるはいかいに友とする事なかれ。天性の道を守るが人世の本主なるべし。酒色の邪に交りて傾城狂を知た人と、知らぬ人と二人の內いづれを師とせんや。虛に居てはいかいせよ。嘘つき酒呑て大わ

らひして居るが蕉門の立流珍しき事也。是が蓮二が秘法ならば塩水打て居所を改べし。

一、貴房は第一虚實をしらず。誹諧は實に居て虚に遊ぶ答也と行先にて愚老をそしらるゝ由、貴房がいふ所は信僞の事也。此段に虚實を論ず。先虚實の大道は天地未開を虚と云ひ、天地已開を實といふ。此名目に立る時は虚實と唱ふ。今太極は虚分なり。此虚を行ふが今誹諧ならば虚心にして、毎句偶(寓)言に近(ちかゝ)らんか。誹諧心は我本心の有雜無雜を打捨て五臓在實の所に、世俗の俚語に至る事は、我心に實心をかまへ虚遊を施すべし。是は今世上に蕉門の教る實心也。然ば虚實の二ッは別に有べからず。我が一念の未生は、草木万像の差なくば空虚の躰也。夫より已生の念に移るは變相の實とす。佛法修性の事也。本性虚なれば實におもむく德有べからず。虚實一にして然も教る時に至て、此二ッ動不動と立るなるべし。今信僞といふ名は替れども虚實をはなれめや。至て靜に考案有る事なり。爰に夫婦の虚實をたとへに引給ふ。是はかえつ(却)て蓮二のいへる信僞の事の姿なるべし。智俗はよく考見給ふべし。虚實先後を知るは虚心か實心か。何に依て前後有。信僞に有らんより外、言說にかゝるべからず。然ば是は信僞の證據也。信僞と虚實と立分る也、大道は虚といふ所に信僞の出べき理有。さるによつて已開の實とする中に虚分體也。是は蓮二の我身の行・不行の事を斷り、人には我も酒色に遊たれども、先師のごとく成といふは虚か實か。皆虚成べし。此虚が蓮二の流儀と見へたり。いかゞ。

評せば露川は實のため虚を施し、蓮二は虚を開て實をあらはす也。先後は言句成べし。至ては無レ差なり。はなれて働物なし、大道の動不動は神道の國中主の尊成べし。重て御無用とは濟まぬ穿さくなれば、前の言說の文章にかゝはりて、頭かくしと申斗成故なるべし。此論は日夜心法を執行して人にをしへべき一段なり。見給ふ人、風雅は(三)心を付べき事也。

一、去々年三越の出合に、金澤より小松書通も此狀の面の事は、此頃はいかいの流行、露川に内證申來ゆ。蓮二坊覺へ有べし。三四度に書通、自身の事を賴、はいかい

事、流行の指圖せられし人の今此文通の自語相違は、欲心のくらきゆへやら心有人は見るべし。地の句の手本に、

　曉の夢に行燈の火をとぼし

　嫁ゝが子でなし夫が子になれ

右を露川は地の句にはあらず、曲也と定めるは、前の句の曉の夢に火をとぼすは、夢さめての事か、夢を見ながらか。行燈のとぼしやう疾と落着せぬ句也。然所に嫁ゝが子でないと付ては、なんで嫁ゝが子でないといふ事なし。付句の中に泣事か。虫などいたむ事のなくて落着せず。一句に器量を付たれば、内に物を含ンで、句に子細らしく作るは曲成べし。地の句作らばさう泣ふなら嫁ゝが子でなし

露川　扱は行燈に火をとぼす事、殊の外泣やまぬ子の業かを付るは地の句成べし。此事石動におゐて連中廿余人の中に論じて、蓮二も直談の所評聞ながら、今又世上に出す事は共席の事は、人がしらぬと書あらはし給ふは拙し。露川に尋ば評判有べき所也。

節の時句
　太刀拔はなす金屛風の影　見龍

節を付て見るとは、曉の夢にといふ時は前句の節也。夫より案じ出して付るといふは、夢と云所に付て二句の役が別〳〵成べし。火をとぼすに、太刀拔はなすと二人の狂言の句は、付ると申事有まじと申評判に候。曲節の二ッはたがいに句有り、付る所に曲節備はる也。別に別て立るにもあらず。作り様に節なしとは申がたし。付る方より前を見立る事、作者の口に曲節共に有べし。百句も前より付れば兩様天然と備る也。今は唯、露川流儀は三句め轉じを大切に敎る也。是にてはいかいの付やう、曲節地に渡るべし、然ば廣大無邊の付たるべし。又節の付やう付事有べし。

一、三越路へ遣申句に付て、此句いぶせき句成とて共句を出され、色〳〵付やう有之候後案有べしと申。自慢の第三、蓮二の入ざることに出して、文面にも入ざる事と見へ申候。蓮二ほどの人が、第三に思ひ付べき趣向とも覺へず候。いかなる心有て書出し給ふや、後案の事も蕉門の祕法にや。覺束なし。

　拷問の銚子二ッに蚫貝

虛實の設有レ之と廓の噓をせむる也。是は彼大坂のうかむ

せの心にや。是は拷問の二字に酬はす責る事也。しからば馬を責るも拷問とつかふべしや。智淺の者呑こまず、爰、鎮西八郎が俤に取なしての付方ども、拷問の付句を弓箭の付より大ィ目の玉迄にかゝりて、三句がらみの付成べし。是が祕法の付方にや。是なら蓮二の蕉風今日破れて、錯亂往生の段に入べし。

一、平生三句の大事とての證句、三句ともに地の句成べじ。付味新しからぬ句にして、五月雨の疊の上のごとし。いかな越路の機發に合ひ申まじや察存候。

一、我家の八躰出されし事、加樣の類は何程に作る共つくられべし。露川八躰も名目は替れども、句にいたりては同じ事成べし。蓮二も入ざる名目を立てゝ、人の目付させたり。徒然の賛も先代より段數をちゞめて書たれども、我流は天下の人用いず、無益の事也。今亦八躰別て立ても、共分迄に信用せず。詮もなき事になりぬ。先其場の付句

忍びがへしの松に凌霄(ノウセン)

此句は拷問の句は人のいぶせきとて用ずとて、今忍返しさへ有るに、松に凌霄の中〱いぶせき事、拷問の二字にすぐれたり。此付句、猶々いぶせき事、人の耳目に入るべし。是が二句一意の付方か、不審。

其節の付　　天相の付

右何れも句作りの拷問、冷秋の節、鎧の音も何とやらうるさし。鎧なくても秋の心又有べし。天相も辰刻に、天魔の變相も前句微塵もなき事を付る事ならば、付るといふ事有べからず。外に任せば千万有べし。評判無益成べし。師走の句、余り觀相の句と不聞、拷問の付所、無念至極の事也。面影の句、拷問に内外の相應付のあらずと申句と存候。是が蕉翁の流儀にあらば、門葉惡道に引の罪何ぞのがれんや。工夫は功才の人に讓置ものなり。

空撓の付方は、蓮二家の祕法は天狗礫の句なるべし。論におよばず。拷問に娘の文など思ひもよらず(ぬ)付方、誠に是は空撓の付方成べし。何の師傳にや。どの風雅の付ヲ付かぬといふ場にあらざれば、云殘の場にて所論の相手なし。見ん人心付て見給ふべし。

大地に平み付てと云ふを、情の付方と聞て苦痛の情と案じ、姿を後とすといふ事は、前の拷問を自の句にして情

と見るは僻見(ヒヤクケン)也、唯大地は趣向也。かたばみは句作也、時分は暑氣の時分なり。是かたばみの姿也。何ぞ無理に苦痛と見ては付まじ。余情の余情は暑氣の苦痛と申されべし。仍(よつて)姿情の二ツ別にはなれんや。かりにも他を自の句に付る事、忌ましき事也。蓮二は蕉門の害と成て、露川は助様と成べし。爰に衆生隨類各得の文計(ばかり)用ル。此文は佛の不定教と申を定る時に用成る證文也。今は露川は蕉翁を情に斗間は不定の得解にあらず。蓮二がごとく得解有り、露川がごとく得解有、然共本來は佛の唯一音なれば、人々已々の心に應じて得解するなれば、蕉翁の一句に虚實備りて有ゆへに何方へも通ずべし。是蕉門の嗣法成べし。此異論は、はいかいの口きく者は皆有レ之事なり。強てほね折所にもあらず。彦根許六には得解から蕉翁の口辨のはいかいを、彼の蓮二の家の祕法の空撓の付と付方ある、付ぬ付とは云ふべからず。皆能此段に心を配りて御覽有べし。虚實刹那も離る事なし、句毎に有ゆへに露川當流の姿を以て、句を新く作ると、前によく付とを天下に是を傳心成べし。

一、貴房自讃の句の下は、皆露川身振の事を惡口す書面のごとし。若輩の文言也。其中にけやけき物の數上て好(スキ)となすなどの判は甚頑(ノロカ)也。はいかいは俚語を以て上品の人におよぼす時、世話・俗談の中の目立賤敷事を以て、はいかいにはならぬといふ事なし。哥には讀れぬ事もはいかいに出して人界の事とす。其起盡を分る成べし。能事は上品の人も是を知る。さるに依て下品の野語を以て一句の作とす。それ當流姿の句作に成べし。蕉翁の句に、手鼻かむ家さへ梅の匂ひ哉　の句、能吟味をなさるべし。身振の品は天性の氣質なり。蓮二坊が世上の人に向て物云ず、すまし立に鼻にて挨拶も自身に見へまじ。

一、頃日貴房自讃の句とて三越の行先に寫して有、此段は

白瀧の漲り落る數十丈

五寸の胸に世界一呑

夷等に脚氣もませて高鼾

此三句蕉門の大害といふべし。拷問の句は世間より請取らず。紛物(まぎれもの)にて姿情の堺、蕉門の害と云ふ也。是を情付と

三越に正されて邪正分ちがたし。白瀧に五寸の胸は是を情と云ひ理屈と云、瀧を見る人が、李白、廬山の法師の事成べし。しからば姿情を情にして理屈と見る事、ひが目成べし。夷等の句を噂と云は、いかなる事にや、五寸の胸に呑れるといふも心得がたし。夷等に脚さすらるは、世界一呑の言語におどろいて名大將と思召たるや。露川は耳にて聞て其情を樂じ、蓮二坊は目を以て見て其人の姿を見るといへるも、一チがいの料簡なり。今袖口ほころびるとは、合點ゆかぬたわけものと見て付ると云、たわけものに世界一呑とはあるまじき也。是は成ほどきびしき顔の胸のあたりは毛がはへて、冷しきを見る姿成べし。さあらば鎮西八郎などか、又昔武者の大力とこそ付べけれ。取亂したる人の姿取合ぬなり。聞く人に我が目で見ると、口にはたて(本文ノマヽ)氣ときつ馬鹿とは、前句のきはひにかへらず、それが蕉門の大用にや覺束なし。今の時至て、はいかいせば白瀧の三句は露川風を我は取るべし。十日の見る所にまかせたり。此段は露川が田龍の人がらを見そこないていへり。まのあたり今、蓮二坊さへ見そこないたる人おほし。是は世界おし渡る人の習なれば、曾てはいかいの正風の邪魔とはなるべからず。至て思案有べき文面也。非波にて田龍に莊子讀ませたりとの事に付て、二字何の音訓を知たりとの事は、露川直談ならでは辨じがたし。古今傳授もケ様事有とも風說も有べし。はいかいの邪魔にもなるまじ。博學淺學の論も有まじ。國々の人の歸依する教を取て、末代の龜鑑とすべき事也。白瀧の三句詩哥にして、はいかいにあらずとは詩哥・誹諧は別〳〵の物と心得給ふにや。詩哥の姿・誹諧の姿、同じ事にて、天地と共にあらはれ常成物を哥と云ひ、變化をさして誹諧といふ道理なれば、詩を諷、哥を吟じ、誹諧を樂ずるは涅槃妙心成べし。現當の染汚(ゼンヲ)を云て、俗習の中に居て、實を以て一佛乘の緣とす。誠に日夜心の修行也と、佛頂和尚の一言を殘し給へり。何別の物と立んや、是はいかいの天子魔成べし。然るに世界一呑に、平生の世中に馬鹿たわけが、合點のゆかぬもの付よとの指南、誹諧する新古ともに尤とはおもふまじ。故翁の働の衆中、十哲と各〻並て其德用を云いて、畢竟は虛を以、當流の正當と云ふと我

得手に帆をあげたり。此段板行して開帳の場・祭禮の所によみ披露めば、はいかい繪草紙に欲心の下地顯て、誹諧の辻賣となり下る事無念成浮世哉。委細の評におよばず。何ぞ古翁の年回も追善とはならで、妄執の焔と成べし。

一、貴房十八の切字の事、いかな露川にもせよ、天下漂泊の節に人の歸依する事、切字の設不案内にては人が合點すべきか、あら拙し。竹齋の句名目にのせし哉留の事、今更ならぬ事也、橋守に一通り演(のべ)たり。是を大決定哉と見るも我慢の哉立成べし。いかさま爰には決定の浮哉(うきかな)の間に又一ッの哉有べし。其名目にのせたるべし。往古より論なれば其分成べし。名目の評難ぜり。是は人々以二誓紙一相渡成べき故に奥に略して眞名書せり。如レ誓(ク)戒(イイマシム)レ之猥ゝと讀むべし。然ば戒とは契の字の行過もあたらず、今點のごとく讀めば、助語の詮儀も入らず、難もなし。是を以て露川文盲と難ぜば蓮二は未練也。蓮二の人に見せて直さるゝが手柄にならば、和漢文操を作るもいらざる事也。露川東西の國曲(くにぶり)に、色〳〵の文章あるも出來不出來も、饂飩・蕎麥切なれば、其人のさ(オ)へなればは脇の害とも成べからず。誠に靈庭賦の事は武州御庭にて書し賦(ふ)也。此三字の非言の何事にや。行過て難じられたれば、評も又成り難し。尺八の銘も定て露川胸中にての相對なれば是又評におよばず。世の人の合點せぬ事を記して、國中にひろめたる人は愚人夏の虫成べし。殊更石動の對面に、尾州稻荷の社の奉納の發句の事、何とやら子細あるとの御返事、答へは定て連聲の事成べし。連聲は何も子細は有まじ。祕傳・口決にもあるべからず、誹林良材集に、蕉翁の

十六夜や海老煎ほどの宵の闇

と中句を引て連聲詳に板行せり。是は上はヤイユエなり。下の句はチコソトノホモチロ也。是を連聲せりと云證句を引けり。是は天然の連聲相通とせり。然ば連聲は竪にかぎると申事か。何ぞや殊に横を韻礎といふ名目は韻書に嘗て見へず。說文・韻會・韻鏡の中に有かや、且亦悉曇(シツタン)十五章の連聲を立たり。梵字に通用の連聲、竪横の十五字より起る。拗音・直音・和音有。今の韵礎にて通ぜずと云は何道理にや。惣じて連聲相通に付て我家に祕法有。且ッ

其一を出してレムの二字は涅槃皆空皆の連聲、此梵字十二の摩多三十六字母ありて、相通してンはおにんぬ也。ムはふのぬ也。かくのごとく連聲、竪横連聲して、たがいに五音のひゞきにかよひて聲をたす。兕陀羅尼（ジユダラニ）を誦む也。てにをはの根元は十五章より出たり。

天長し地は門松の稲荷山　露川

此切字は國君の爲によろしからずとは、天長地久の中を切るといふ事道理なしの事、爰に子細有べし。天は長うして國君をおほい、地久うして國君をのせたり。天地人と三才を以て、しの字にて切、國君を納めたる心なり。下の山といふ字の働きをかんがへ見給ふべし。蓮二は連聲と斗思ひて、其句作りの道理を知らず。心の切字の傳は長〱としても、切る心は有れども、句作りの上に祝する事聞へず。依て此深き意を考へ給ふべし。哉とせよとの教は勿論也。今此場に至りて山の字の働を聞えざるゆへ成べし。

一、貴房は門人好みして、此段は露川門人多しと聞より偏心の崩也。蓮二が天下漂泊に門人雲鈴より外なく、是一人の門人なれば餘は蓮二をしらぬ人と見えたり。皆々蕉門末弟門人は常の事也。梵漢和三州共に釋迦の法流は皆釋氏也。孔子教誡は皆孔子の門人也。云にたらず。爰にて蓮二の欲心の誹諧の物取りは此文面に明也。此狀面を關西東へ配りたらば、大欲狂亂の師と成りて、衣食住に迷ふべしや。後の月日を見給へ。

右之條々故翁の碑前に董誦せられし事、尤に聞へたれども自讃（ジサン）・毀他（キタ）の法戒忽に破れたり。然ば蕉翁誹道の當來如何、大橋太郎が董誦とは天地雲泥成べし。四十年の交友を捨て不遠慮に書あらはされたる文書にて、露川天下の面目となれり。若〻出板して廻國せられよかし。名目傳、諸國より取戻しとの事、是は無躰なる申分也。爰等は野狐が手傳ふかと恥かし。宗匠傳授の心へ外になし。人々己々善惡をしり善心を增し、日夜の交りを敎、人邪をはなれ給ふやうにとの名目、てにはの傳成れば世俗風雅、儒神佛外ならずと云心を傳ふ。もし蓮二の氣にかゝらば道理を立て皆捨させるやうに、隨分十論・二十論・百論にて

も作りて諸國に捨させ給ふべしや。
此三ヶ條〻皆同じ下心なり。此返答をして向後門人に五節句を、今より音物勤られよとは如何。露川も申されまじ。蕉門事を申などの事は、芭蕉存生の時の凡鳥(ボンテウ)などのごときは左も有べし。露川ははいかい下手也。文盲也。然らば蓮二の大智識には害に成まじき也。又存命四五年は斗(はかり)がたき事なり。其中に露川事實にて現在未來を念佛し給ふべし。蓮二は無病息才、脚足達者なれば、はいかいの宗匠も何程か勤め給ふべし。其内に人にあかれて居仕に此世ゟ迷ふべからず。人は終りを第一とすと申故、實にや憐みも申愼みも申。

享保九年
二月　日

跋

相くさびの號は、蕉門今年朽かゝりたるによつて、門の杜の楔を兩方より打かためて、蕉翁の門人心よく通さんため、あらおかしや猿の尻の眞赤いな。

月　日

坂東聲
森　長

青根が峯

誹諧問答抄

許六著

刻青根峯序

檀林俳翁芳麿携一冊子來問序於予言之曰蕉叟桃
青之於俳諧也雖依舊稱滑稽不強須劇語以俗
談平話爲俳之恒言而其意味則使庶幾詩歌之幽玄
與之一般焉如其花判古今者倣夫詩藻家所品乃稱
之流行以自任焉勸以使變之遂擧俗事專入雅場
是俳諧體之本義也斯叟依天之寵虛以至此境誘人復
古而叟亦自不知其復古何者俳諧原詩藻之語而唐人
爲詩之一體見杜老戲作俳諧體遣悶之二律可以
覿矣且詩語多俳諧或如好歇語則唐末人鄭蘊武可
以徵焉蘊武名望之人詩名從之官至宰相蓋此時也季
唐之詩變窮矣如尋常之語氣則耳厭口飽滔々恬味之
啜焉有若爾詩者勢之所至已歇語亦俳諧也吾延喜之
朝髣髴于此則和歌撰匠之伎倆亦復爾蓋物色之萬葉假
以備一體之員所謂依樣畫胡蘆也唐衰至五季趙
宋皆尙唐詩範圍開天未必體製之正閏迨乎吾中
葉則至不知詩歌中有俳諧是爲何物而如奧義抄
及八雲御抄亦纔原馬史滑稽之字注却以滑稽釋俳
諧無乃本末倒置乎此時也雖彼土亦然詩藻家無
有俳諧之詩體則人何以徵焉況吾乎所以亞槐公任
黃門定家及淸輔皆一世之傑而言之不穩可以覿焉晚
近至者流之俳諧則泥其字通俳優之義私自幟昌
言之每泣雅場輙避三舍或其署名故設綽
號以別行之可不嘆哉幸依斯叟一變之功遂與詩
場共風雅與歌林合宮商者可謂有榮矣而斯
叟尙憚與歌人聯匠同其署名也予竊惜旃雖然叟
席天寵不知不識復得古之體以升登其境奇哉妙
哉是以門葉晚進之信叟猶七十子之仰孔聖而各
奉叟之敎以相共論評遺言亦猶彼左游夏者又右
有會則齊魯互所淑也詩云佗山之石可以磨玉則
檀林俳士有這箇祕藏豈疑其家書與否乎今闓斯編
東人之俳淵綜廣博西人之俳淸通簡要不必至其
人換地乃復然耳不如速授之剞劂氏與衆共皷樂
以樂其道且使今之蕉者識古哲之馴雅寬公以贈

夫輩見佗門而爲秦楚之看之病芳廬曰唯

天明五乙巳年夏六月既望

浪華栗齋内山之明撰併書
印 印

誹諧青根が峯問答抄敍 印

それ長頭丸、此道の宗匠の許允を蒙りしより其體その辭一定たりしに、延寶・天和の頃に至て連歌の達師西山宗因、四方の誹諧一定して却て衰へを誘ふべきを覲じて、守武を祖とし稱して古轍を破り、檀林の一風を震ひしかば、一時の好士各靡き随ふ。就中芭蕉は諸子に先達て其角を携へ、季吟を荷して干飛せしが、貞享・元祿に至て流行を唱て又一變しぬ。されば詩歌は氣運につれて變ずるは、歴代人々の見知る所なり。誹諧も又もとよりしかり。その同時その體聯異なりといへども氣運の流行にや、芭蕉を待ずして三都共に變じて、「時雨そめ黑木になるは何ぞ 才麿」「のつぼりと秋のそらなる不二の山 貞門の孫弟鬼つら」如此句々を推し見て、彼の氣運流行の自然にしからしむるを知るべし。殊に芭蕉は生得行脚を事として幽玄をおもむじ、諸國に其風を布き、且ツ俗談平話を唱へて、その所々の方言にて句を作らしめ流行をいそぎ靡かせる、誠に其徒の集れるは聚星の北辰に向ふがごとし。盛ッなり

といふべし。栗齋先生曾て論じて、唐の五絶を一發句に盡せしは古今芭蕉の手柄と云ゝ。是能く趣を解すといふべし。考るに芭蕉の再變せしを、吾が宗因見聞て莞爾として喜びしは、釋尊の末世をくみて、かれやこれやと諸經を説給ひしに同じき歟。されば芭蕉再變して一家を建るといへども、句の推敲に至ては、檀林の舊友を韓子として評し定しを以て知るべし。豈後世の誹士一派一派をかまへて、其派に限るのいやしき比ひならむや。吾が師椎本芳室の實見なりし稻津祇空は、師と共に宗祇七世の孫にして、國學に淵源もとより歌・連歌に拙からず。誹諧は芭蕉・其角に從遊して尤一方の干城たりしまゝ、先祖宗祖の跡を逐ひ箱根山に寄寓し、後亦東都に終れり。其いさをし國學の門人稻津大明神と許を受て、深川八幡宮に並宮居せしも亦一奇事なる哉。年頃祕藏せられし書籍を吾が師のもとへ殘し贈られし其中に、此問答抄その外祕める書あり。師も是をすてをかず賞せられしが、予弱かりし頃播姫路に移り行、誹案を立ん事を乞ひし時に、師の曰、姫路は惟然坊が風を布し所にして蕉門流行の地なれば、此問答抄等を枕褥として芭蕉の意をも悟し知らざれば、交も少かるべしとて贈り給はりしより祕藏して星霜を送りしを、近年に又歸坂し住して、自他の誹家を問ひ見るに、此抄を知るものすくなし。つら〱觀ずるに今や蕉門の後進、芭蕉のいはゆる流行を唱へながら、却て流行を厭ふ人多ふして、しかもむかしの一派〱と限らざる時の盛ンなるに似ざれば、人々此抄の出たらんを見ば、互に末流諸派の蕉鹿の夢を破る端とならんとぞ思ふ折から、門人有貫、其產業書林なればとて乞ふにまかせ點頭して梓に鋟しむと云爾。

天明五年乙巳夏五月仲旬

浪華浩ゝ舍芳麿敍

印 印

誹諧問答青根が峯

目録

此抄は晋子其角が若葉集の序よりして枝葉しげり、花咲實のりてかくはなれり。かの柏玉集に、夏木立青根が峯の白雲や若葉にふかき花を見すらん、との御詠にもとづけて青根が峯と題するものなめり。

天明乙巳秋　門人

耳息菴

龜洞

誹諧問答青根が峯　卷之一

浩々舍芳麿校定

贈晋氏其角書

故翁奥羽の行脚より都へ越えたまひける、當門のはい諧すでに一變す。我ともがら笈を幻住菴にになひ、杖を落柹舍に受て略そのおもむきを得たり。瓢・さるみの是也。その後またひとつの新風を起さる。炭俵・續猿簑なり。去來問云、師の風雅見およぶ處、次韻にあらたまり、實なし栗にうつりてより以來、しば〲變じて、門人その流行に浴せん事をおもへり。吾これを聞けり。句に千歳・不易のすがたあり。一時流行のすがたあり。これを兩端におしへたまへども、その本一なり。一なるは、ともに風雅のまことをとれば也。不易の句をしらざれば本たちがたく、流行の句をまなびざれば風あらたまらず。よく不易を知る人は、往々にしてうつらずと云ふことなし。

たま〳〵一時の流行に秀たるものは、たゞおのれが口質のときに逢ふのみにて、他日流行の場にいたりて一歩もあゆむことあたはずと。しりぞいておもふに、其角子はちからのおこのふことあたはざるものにあらず。且つ才麿・一品がともがらのごとく、おのれが管見に息つきて、道をかぎり、師を損するたぐひにあらず。みづからおよぶべからざることは書に筆し、くちに言へり。しかれどもその詠草をかへり見れば、不易の句におゐては、すこぶる奇妙をふるへり。流行の句にいたりては、近來そのおもむきをうしなへり。ことに角子は世上の宗匠、蕉門の高弟なり。かへつて吟跡の師とひとしからざる、諸生のまよひ、同門のうらみすくなからず。翁のいはく、なんぢが言しかり。しかれどもおよそ天下に師たるものは、まづおのが形・くらゐをさだめざれば人おもむく所なし。これ角が舊姿をあらためざるゆへにして、予が流行にすゝまざるところなり。わが老吟にともなへる人々は、雲かすみのかぜに變ずるがごとく、朝々暮々かしこにあらはれ、こゝに跡なからん事をたのしめる狂客なりとも、風雅のまことを知らば、しばらく流行のおなじからざるも、又相はげむのたよりなるべし。去來のいはく、師の言かへすべからず。しかれどもかへつて、風は詠にあらはれ、本哥といへども、代々の宗の様おなじからず。いはんや誹諧はあたらしみをもつて命とす。本哥は代をもつて變ずべくば、この道年をもつて易ふべし。水雪の清きも、とゞまりてうごかざれば、かならず汚穢を生じたり。今日諸生の爲に古格をあらためずといふとも、なほながくこゝにとゞまりなば、我其角をもつて、劒の菜刀になりたりとせん。翁のいはく、なんじが言愼むべし。角や今我今日の流行におくるゝとも、行すへまたそこばくの風流をば、なしいだしきたらんも知るべからず。去來のいはく、さる事あり。これを待にとし月あらんを歎くのみと、つぶやきしりぞきぬ。翁なくなり給ひて、むなしく四とせの春秋をつもり、いまだ我東西雲裏のうらみをいたせりといへども、なを松柏霜後のよはひをことぶけり。さいはいにこの書を書して案下におくる、先生これをいかんとし給ふべきや。

右　　　　　　　　　　　　　　　去來稿

贈落柿舍去來書

千歳不易・一時流行のふたつをもつて、晋子が本性を論ぜらるゝは、かねて其角が器をくはしく知りたまはざる故なり。生得物にくるしめる志なく、人の辱しめをしらず、故に返答の詞なく、かへつてことばを色どり、若葉集の序とす。是、はぢしめをしらぬゆへなり。しかりといへども、予三神をかけて、相撲を晋子がかたに立ず。また諸集の中、目だつ句有れば大かた晋子也。かれにおよぶ門弟も見へず。なんぞや、亡師の句にたいして、ひとしからんと論ぜらるゝは、かへつて高弟のあやまりといはん。予不審あり、師迁化の後、諸門弟の句に秀逸いでざることはいかん。近年、湖南・京師の門弟、不易・流行の二ッにまよひ、さび、しほりにくらまされて、眞のはいかいをとりうしなひたるといはんか。予たま〳〵同門にたいして句を論ずるに、ことばのつゞき、さびを付けざればよしのといはず、一句のふり、しほりめかぬはかつて句とせず、これ船をきざみ、琴柱に膠するの類ひならんか。一句ふつゝかなりと見やれども、さび・しほりおのづからそなはりて、あはれなる句もあり。また予が年やう〳〵四十二、血氣いまだおとろへず。尤句のふり花やかに見ゆらん。しかれども老の來るにしたがひ、さび・しほりたる句、おのづからもとめずして出べし。詞をかざり、さび・しほりを作りたらんは、眞のはいかいにはあるまじ。只一句すがたに誹諧あらば、すつるものはあるまじ。不易・流行のふたつにくらまさると云は、予きく、かつて趣向もうかまず。句つくりも出ざる以前に、ふゑきの句をせん、流行の句をせんといへる作者、湖南のさたなり。歌に一躰あり、定家・西行はじめより詠んとし給ふことを聞かず。詠みおはつてのち、十躰のすがたはあらはる。ときに判者の眼あつて一々体をわかつ。何体の哥よまんといへる哥道は、かた腹いたく侍らん。元來たくみ拵たる不易・流行なれば、不易・流行いまだ定まらざる世界は、俳諧秀逸なるまじくや侍らん。翁在世のとき、予終に流行・不易をわけてあんじたる事なし。句い

ゝ師に呈す、よしはよし、あしきはあしきときはむる。よしと申さるゝ句、かつて一つの品を、こゝろにかけずといへるとも、不易・流行おのづからあらはるゝなり。滅後の今日にいたつて猶しか也。かつて流行・不易を貴しとせず。よき句をするをもつて、上手とも名人とも申まじきや。ア、諸門弟の中に、秀逸の句なき事をかなしむのみ、翁滅後、門弟のなかに挟る誹諧の賊あり。茶の湯・酒盛の一坐に加はり、流浪漂泊のとき、一夜の頭陀をやすめたまふはたごやなど出て、門弟のかずにつらならんとするあぶれものども、みだりに集作る。一流はんじやうにはよろしといへども却て一派の耻辱・他門の嘲り、かた〴〵かた腹いたく侍らんか。高弟眉をしかめ、唇を閉給ふと見えたり。集作りて、善悪の沙汰におよぶは、當時撰集の手柄なり。頃日の集は、あて字・てにお葉の相違・かなづかひのあやまり、かぞふるにいとまなし。しらぬ他門より論ぜば、高弟去来公のあやまりと沙汰し申侍らん、むべならんか。北狄西戎のゑびす、時を得て吹をうかゞひ、次だいにみだりに集をつくらん事、尤悲しむに堪へたり。高弟、此そしりを防ぐ手だてありや。惟然坊といふもの、一派の誹諧を弘るには益ありといへども、却て衆盲を引の罪のがれがたからん。あだ口をのみ噺し出して、一生眞の誹諧をいふもの一句もなし。蕉門の内に入て、世上の人を迷はす大賊なり。故に近年もつての外、集をちりばめ、世上に辱を晒すも、もつぱらこの惟然坊が罪也。口すぎ・世わたりの便りとせば、それは是非なし。惟然にかぎらず、淨瑠璃の情より誹諧を作り、金山談合の席に名月の句をあんずるやからも、稀にありといへども、これは大かた同門・他門ともに本性を見とゞけ、例の晝狐はやし侍れば罪もすくなからん。予短才未練なりといへども、一派の誹諧におゐては大敵をうけて一方の城をかため、大軍をまつ先かけ一番にうち死せんとするこゝろざし、鐵石のごとし。故に同門のそねみあざけりをかへり見ず、筆をつゝまずしてこれをおこす。この雑談隱密の事、さたにおよばず、諸門の眼にさらし、向後をつゝしむたよりならば大幸ならん。願はくは高弟・予とともにこゝろざしを合せて、蕉門をかため大敵を防ぎ

給へ。

右　　　　　　　　許六稿

答許子問難辨

湖東の許六雅兄、予其角におくる文をよみて疑難を書し、このごろ予にあたへらる。まことに風騷の人なり。その旨ふかふして、その論高し。予が不才あたるべからず。しかれども微言をのべてこれを辨ず、是非のごときは雅兄たゞし給へ。

○來書曰、千歳不易・一時流行のふたつをもつて、晋子が本情を論ぜらるゝ、乘て其角が器をくわしく知りたまはざるゆへなり。生得ものにくるしめるこゝろざしなく、人の辱しめをしらず。故に返答のことばなくて、かゑつて辭を色どり、若葉集の序とす、是はづかしめをしらぬ故なり。

△去來曰、この難雅兄の言しかり。予またおもふ所ありてこれを贈る。これを辨じて誹道に益なし。しばらく筆をさしをくのみ。

○來書曰、しかりといへども三神をかけて、相撲を晋子がかたに立ず、又諸門弟の句をあなどらず。

△去來曰、雅兄の言信ずべし。予またこれに同じ。文中過分なるもの罪し給ふ事なかれ。

○來書曰、憶に眠を破て見るに、近年の諸集のうち、目だつ句あれば大かた晋子也。

△去來曰、雅兄の言感心せず。いづれの書にか、角が好き句多しとするや。予近年誹書に疎し。たま〳〵見る處の書、角が句十にして、賞すべきもの一二、その余は世間平ゝの句なり。浪化集に、角が撰集たる句をならべ書す。そのうち雅兄の句の外、獨角が句のみすぐれり、その餘は我いまだこれを見ず。

○來書曰、かれにつゞく又門弟も見えず。

△去來曰、これおそらくは、雅兄の過論ならんか。角が才の大なるを以て論ぜば、我かれを頭上にいたゞかん。角が句のいやしきをもつて論ぜば、我かれを脚下に見ん。いはんや後哲の人をや。予亢てこれをいふにあらず、同門の句における、おそるべきもの五六輩あり。雅兄もそ

の一人也。
○來書曰、なんぞや、亡師の句に對してひとしからんと論ぜらるゝは、かへつて高弟のあやまりといはんや。
△去來云、この雅兄の論精密ならず。予が角に贈る文に、かへつて師の吟跡とひとしからずと書せり。雅兄跡の字に力をかゝへ給へ。たとへば一日に二十里を東行する者あり、又十里を東行するものあり、およばずといへども、ともに跡を齊しうす。角はその東行する者にあらず。昔日去來曰、いにしへより名人多しといへども、はじめて俳諧の神に入たる人はわが翁也。角、是を聞ていはく、吾子が言しかり。はじめてはいかいの神に入る人は我翁也。去來曰、吾子が言もまた一理あり、二言意味なりことなりといへども、共に先師をもつて古人にまされりとす。予なんぞ角が師とひとしからざる事をうれへんや。
○來書曰、予不審あり。師迁化ののち、諸門弟の句に秀逸出ざる事はいかん。
△去來曰、この論しひて工夫をつくすべからず。師教月ゞにとをく、我意日ゞに生ず。たゞ秀逸のいでざるのみにあらず、かへつてその血脈をうしなふものあらん。ひとりこの道のみにかぎらず。又いはく、秀いつの事は、先師在世のうちといふともまれならん、また迁化ののちもなしとは言ひがたしとせん歟。しかれども今の世にあたつても、秀逸をさだむる人誰ぞや。むかし先師凡兆につげて曰、一世のうちに秀逸の句三五あらん人は誹者也、十句におよばん人は名人なり。また先師ひと〱の句の奥意にかなふものあつめて、ゑらばんとしたまふ。これを笈の小文と號すとつたへたり。故あつて予が名月の句を入集すとかたりたまへり。予曰わが句撰にいるべき句いくばくありや。先師のいはく、なんぢ過分のことを云へり。すべて我この度の集にゑらみいれん句、五句もちたるものはまれなり。これを以ておもふに、まことに秀逸といはんは、世にまれ成るべし。およそ先師の門人の句を賞したまふや、相あたりの賞美あり、過分のしやう美あり。門人これにおひて、あるひはまよひを取り、みづから亢りて、終におのれが位をしらざる人も多し。また半途より、みづからかへり見て、つゝしむ人これあり。

予不敏といへども、あるひは秀逸名句、あるひはこの句我もおよばず、或は風雅汝等一兩士にとゞむ、これ等の賞詞感文すくなしとせず。しかれどもしりぞいてこれを師の句にたゞすときは、雲泥のたがひあり。これを同門の句に合するときは群をはなれず。なをその賞の身に應ぜざる事をしれり。また秀逸のまれなる事を知れり。

○來書曰、近年湖南京師の門弟、不易・流行の二つにまよひ、さびしほりにくらまかされて、眞の誹諧を取りうしなひたるといはんか。

△去來曰、この語雅兄の奥旨ひだりにあり、其ところにおゐてこれを辨ず。

○來書曰、予たま〱同門弟に句を論ずるに、ことばの續き、さびをつけざればよしといはず、一句のふり、しほりめかぬは、かつて句とせず、これ船をきざみ、琴柱に膠するのたぐひならんか。

△去來曰、この論雅兄の言のごとくんば、その對したまふの過論なり。およそさびしほり、風雅の大切にして、わするべからざるものなり。しかれども隨分の作者も、句ゝさびしほりを得がたからん。たゞ先師のみこれあり。今日われらのごとき作者、なんぞさびしほりのなき句をいとひすてんや。これを常にねがふといはんはむべなり。またあるはなきにましたりといはんはよし。これをいとひすてんは過たるならん。かくのごとく論ぜば、われらたゞ口をつゝまんにはしかじ。また壯年の人の句は、さびしほり見へざるも、かへつてまたよしと言はんか。また初心の作者は、さびしほりを容易にとくべからず。かへつて其吟口とぢて、新味にうつりがたし。これ先師のおしへなり。また曰、しほりさびは趣向・ことば・器の閑齊なるを言ふにあらず。さびと、さびしき句と異なり。しほりといふは、趣向詞器の哀憐なるを言ふべからず。しほりと憐なる句は別なり。たゞうちに根ざして、外にあらはるゝもの也。言語筆頭をもつて、わかちがたからん。强てこれをいはゞ、さびは句のいろにあり。しほりは句の餘情にあり。しかれども趣向もことばも器も、又ゑらばずんばあるべからず。詞・器よしといふとも、趣向つたなからば、無塩が面に、西施が鼻をそへたるがご

とくならずんば、また梅の花のうへに、糞をぬりたるにおなじからん。豈これをかほよし、芳ばしといはんに人位せんや。

○來書曰、一句ふつゝかなりと見やれども、しかもさびしほり、自備て哀なる句もあり。

△去來曰、雅兄の言たがはず、およそ俳諧は、ふつゝか成る句もいとふべからず。たゞつたなき句、ふるき句をいとへり。師の句をうかゞふに、嚴なるものあり、やさしきものあり、狂賢なるものあり、深遠なるあり、平爲成るあり、健成るあり、あわれなるもの有、ふつゝかなる物有り、潤しき物あり。なほ千姿萬躰有りと言へども、さびしほりあらざる句はなし。雅兄先師の句をもつてかんがみたまへ。この趣向・詞・器のさびしきと、憐によらざる證也。

○來書曰、また予が年やう〳〵四十二、血氣いまだおとろへず、尤そのふり花やかにみゆらん。

△去來曰・雅兄の言愛すべし。しかれども雅兄やう〳〵老の名を得たまへり。その句にさびしほり有らんに、人應ぜずといふべからず。雅兄の作すでに、蕉門にひいでたり。句さびしほりをおもはんに、人過たりとはせまじ。

○來書に曰、しかれども老の來るにしたがひ、さびしほ・りたる句、おのづからもとめずしていづべし。

△去來曰、雅兄の言感涙すべし。しかれどももとめずしていたるものは、生得の人なり。雅兄の心くち、風騷ありてしかも道をはげむ事切なり。なをさる事あらん。その次はおもはざればいたらず、そのつぎはおもへどもいたらず。蕉門の諸生千万人、老をもつて論ずるときは、先師にこへたるもの多し。いまださびしほりを得たるもの壹人をきかず。多くはこのおもはざる人也。雅兄世をもつてかんがへたまへ。生得の人これをねがひ、なを名人にいたるべし。聖はねがへば、天にいたるべしと、古人の格言ならずや。

○來書に曰、ことばをかざり、さびしほりを作りたらんは、眞の誹諧にあるまじ。

△去來曰、雅兄の言的中せり。ことばをかざりて是を得ば、誰かこれをかたしとせん。強てこと葉を以て、これ

をなさば、路通が發句のごとくならん。ことばをかざり作ると、こゝろを用ひねがふと、又同日の論にあらず。

○來書曰、只一句のすがたに、はいかいあらば。すつるものは有まじ。

△去來曰、この論雅兄とおもはざるの甚しき也。宗鑑・貞德より以來、數人名家その風、いづれか俳諧のすがたなしとせん。しかれども宗因もちひられて、貞德すたり、先師の次韻起りて、信德が七百韻おとろふ。先師變風におけるも、みなし栗生じて、次韻かれ、冬の日いでゝみなし栗落。冬の日は猿蓑におゝはれぬ。猿蓑は炭俵に破られたり。その用捨ときに有。これをもつて、先師の一時流行の名をはじめ、用捨ときにかゝはらざる句ある也。これをとつて、千歳不易の號を起せり。しかれどもともに誹かいのすがたにもれず、なんぞこれすつる人なしとせん。

○來書曰、不易・流行のふたつにくらまさると言ふは、予聞く、かつて趣向もうかまず、句作りもいでざる以前に、不易の句をせんといへる作者、湖南の沙汰なり。

△去來曰、この事さだめて、湖南の人々ゆへありて言成るべし。今愚をかへり見て、これをおもふに、その當時の風をねがふ事は、平生こゝろにあれば、趣向と句づくりと、前後を論ずべからず。句にのぞむにいたりては、感偶するものは、趣向おのづから有り。苦案するものは、先趣向をあんず。趣向やう〳〵至りて、句作りをおもふ。句ならんとするとき、或は新古の風の出來る、その古風なるものは、幾度も拂ひすてゝ、たゞ新風にかなはむとす。新風やう〳〵いたりて句定まる。しかれば流行をおもふ事は、趣向の後、句の前といはんか。これ平生の案姿なり。また不易は、一たびこゝろに得て、へんずる事なし。故に流行のごとく、切におもひ、切にすてず。平生のはなれざるものなり。流行の句をあんずるうち、あるひは不易のすがたうかみ來れば、則とつてもつて句とす。これを舊染の風のごとく、去りきらふる物にあらず。平生の句案は、たゞ舊染と新風と、秀句あらんことをおもふ。不易・流行を用捨するにいとまあらず。また不易・流行をわかちて、あんずることゆへありていふ成べしと

いふは、あるひは奉納・賀・追悼・賢人・義士のたぐひの賛のごときは、かならず不易をもつて句案するを要とす。また着題・風吟、あるひは他門の人に對して、當流をほのめかし、あるひは新風におしうつらんと稽古のごとき、みな流行の句をもつてもつぱらにあんず。しかれども湖南の正秀は、先師遷化の日、予にかたつて曰、これより後流行たのしみなし。行末は不易の句をたのしむといへり。これらはみなゆへありていふ。また我が旗下のものにのぞまれて、ふたつをわけて案ずる事もあらん。また吟友の會、遊興に乘じて、流行の句をして見せん、不易の句をして聞せんといふことあり。これたゞときにとつての放言なり。句の秀拙と成不成は賢愚と時日に寄るといへども、このおもふ事なしといはんはかへつてあやまりならんか。しりぞいておもふに、雅兄の俳にあそび給ふ事久しく、かならず舊染有らん。句案にいたりて、その穢或は出きたらん。これを掃ふにこれを染て、新風をおもひ給はずといふ事有べからず。心におもふと、口に云ふのみ。若雅兄これをおもはずとのたまはゞ、雅兄は本舊染のなき人か。有といへども、ひとたび捨、ふたゝびその穢のきたらざる人か。かくのごとくの人もまたなしとせず。しかれどもこれはたゞ賢慮一人のうへにして、衆人と一口に云ひ難し。

○來書曰、哥に十躰あり。定家・西行はじめより、十躰を讀んとしたまふ事をきかず。よみおはりて後、十躰のすがたはあらはるゝ、時に判者のまなこ有りて、一ゝ躰を分つ。何躰の哥よまんといへる歌道は、かた腹いたく侍らん。

△去來曰、この語雅兄のさす所異なり。躰と風とはたがひあり。まづ流行は風なり。十躰は躰也。躰は古今に押わたりて用捨なし。風はときに用捨あり。万葉風・古今の風・新古今の風のごとし。また團風あり、一人の風あり、流行はときの風なり、故に一時流行といふ。また不易は、古今によろしくして用捨なし。これを躰といはんも又しかし。しかれども躰は、おのれ一躰有風なし、風を時ゝの風による。不易万の躰をそなへて、一己の風あり。故に風をとき／＼によらず、とき／＼の風によらざ

るゆへに古今にかなへり、故に千歳不易なり。風といはずんばあるべからず。また曰、和哥もいづれの風をよまんとおもふ事あるべし。後鳥羽院の勅言も、今の世にうまれて哥をいにしへに讀むもの、西行なりとつたへ聞たり。また古今の序に小町がうた、そとをり姫の流也と。これらはまづ風をこひて讀みたもふ也。西行・小町といふとも、學ばずしてかくのごとくあらじ。もし天性の風流、學ばずしてこれにいたり給ふ也。躰、大かたいづれの躰讀んと、はじめよりおもふ物には非ず。それが内にも、歌合・賀・初會とうのうたは、おの／＼正風躰をよまんと、はじめよりこゝろざしたまふとつたへ聞たり。六百番に顯昭は、たゞ一ふしよまんとしたまふゆへに、負多しといへり。またはなのうた讀むには、正風躰をよむべしといへるも、哥以前におもふ成るべし。もつともこれは躰のことにして、風にあづからず。雅兄の難は、ふたつを分ざるの難なり。去來また曰、不審は和哥の正風躰と大概似たるべし。しかれども和哥にうとし。强てこれをいひがたし。正風躰は、ひとり風躰の二字を用ゆる故あるべし。正風躰の和哥は、古今にわたり、又おのれ一風有るか。

○來書曰、元來たくみ拵へたる不易・流行なれば、不易・流行未定まらざる世界は、俳諧秀逸成るまじくや侍らん。

△去來曰、論高して語意井に落ず。推してもつておもふに、ふたつ品いまだ分ざる以前には、秀逸は有まじきやと難じたまふと見えたり。もし愚意のごとくんば、先不易・流行さだまらざる先といふ理なるべし。おそよ誹諧は和哥の一体たり。上下分てこれを言ふもの、和泉式部の句有りといへり。實不實をしらず。平忠盛・源頼朝の句は書にのせたり。式部・忠盛・頼朝、又おの／＼その代の風たるべし。よし神代よりはじまるにもせよ、おのれ句あるときは風あり、句なきときは風もあらはれず。これにおいては俳諧となづくべきものなし。しかれば不易・流行なき以前と云へる俳諧なかるべし。豈秀逸なきのみならんや。不易・流行は別の物にあらず、たゞ風の名也。その變ずる所あるを一時と云、變せざる物有を不易とわかつのみ。しかれども古人これを云ふ誹師なし。先師始て、古

來の俳諧、そのふたつ有と見て、これをわかつて門人にしめす。しめしたまふ名は、先師にはじまるといへども、實は句と一ときに生るものなり。先師なんぞみづから作爲して、門人をあざむき給はんや。しかれどもいへる言あり、ことばに達せずしてこゝろに得るものはあらじ。雅兄この論の語意いまだ詞に達せず、おそらくは烏をもつて鵜を辨ずるならん。

○來書曰、翁在世のとき、予ついに流行・不易をわかちて案じたる事なし、句いでゝ師に呈す。よしはよし、あしきはあしきときはむる。よしと申さるゝ句、かつてふたつ品をこゝろにかけずといへども、不易・流行おのづからあらはるゝなり。滅後の今日に至て猶しか也。

△去來曰、この辨、湖南の人のふたつをわかちて、句を案ずる答に有り。かさねてこれを辨ぜず。またその先師の、よしと申さるゝ句、不易・流行おのづから備るは勿論なり。若ふたつの內ひとつあらずんば先師よしと宣じ。また二ツの風にもるゝと云ふとも、雅兄古今未發の風を詠じいだしたまひて、しかもその風よろしきは作者の手柄なるべし。古今未發の風にもあらず。今日の流行風また不易の風にもあらずば、かならずして過去の風也。過去の風は先師の今日の風にあらず。先師の風にあらざるものは、雅兄これをねがひたまはじ。むべなるかな。先師のよしと申さるゝ句、おのづからふたつの內一風ある事、そのあしゝと申さるゝは、さだめて過去の風もあらん。つたなき句もあらん。

○來書曰、嘗て流行・不易をたつとしとせず。

△去來曰、この論雅兄の見のごとくんば勿論なり。しかれども雅兄しづかにこれを考へたまへ。雅兄の今日、先師にまなび給ふ所は、古今の風をわかず、これをまなびたまふや。また先師の今日の風をまなびたまふや。もし今日の風を學びたまはゞ、これ流行を貴び給ふにあらずして何んぞや。むかしは先師の昔日の流行を學びたつとみ、今日は今日の流行をまなび貴む。その流行にしたがはざるときは、先師の風におくるゝものはその旨を得ず、故に流行を貴む。雅兄今これを貴まずといへども、心裏に覺へずして、これをたつとむ人なるべし。

○來書曰、よき句をするをもつて、上手とも名人とも申まじきや。

△去來曰、雅兄の言しかり。宗鑑・守武以來、宗因にいたるまで、みな一時の能句あるゆへ、ときの人呼で名人とす。その名人の稱いまにうせず。先師もこの人々をたつとみたまふ。これよき句をする人を名人といふ所なり。しかれどもこの人々の風、先師今日取給はず。その句は一時によしといへども、風變じて古風すたれるときはともにすたる。この故に、一時の流行におしうつらんことをねがふのみ。

○來書曰、アヽ諸門弟の中に、秀逸の句のなき事を悲しむのみ。

△去來曰、ともにかなしむのみ。又秀逸有りといふとも、聞人なからん事を悲しむのみ。

○來書曰、翁滅後、門弟の中に挾まる俳諧の賦有り。茶の湯・酒盛の一坐に加はり、流浪漂泊のとき、一夜の頭陀をやすめたまふはた篭やなどのいでゝ、門弟のかずにつらならんとするあぶれものども、みだりに集を作する。一流のはんじやうにはよろしといへども、却て一流の恥辱、他門のあざけり、かた／＼片はらいたき事に侍らんか。高弟、眉をしかめ唇を閉たまふと見えたり。

△去來曰、雅兄の言まことになげくべきもの也。しかれども蕉門の高弟、客、今世にあるものすくなからず。彼れなんぞ、我正道をさまたぐるにいたらん。蕉門の流を汲といふとも、世に白眼のものあらば、正に違ひ有る事を知らず。近年書林に歳旦を持來りて、我は蕉翁の門人なり。三ツ物帖に、蕉翁の門下とひとつに、並書べしといふともがら多し。湖南正秀一日告レ予に曰、今歳旦の三ツ物、先師の門人の分、これを別錄にす。その內先師在世の間、いまだ名をきかぬ者多し、もつて悋むべき事なり。この後書林に正し、先師直に門人の知らざるものは、これをはぶかん。去來云、吾子言勿論なり。しかれどもその內、或は先師門人に亞傳のものあらん。また先師は慈悲あまねき心操にて、或重て我翁の門人と名乘らんと云ふもの、その貴賤・親疎をわかたず、これをゆるしたまふもの多し。かゑつて世に名をしられたる他門の衆など

の、これを乞ふに、ゆるし給はざるもあり。かくのごとくの輩、我蕉翁の流といへども、またさもあるべし。今これをあらため除かんは、かへつて穩便の事にあらず。たゞその儘ならんにはしかじと云々。今みだりに集作りて、我翁を穢すに似たりといへども、尤これをいたふに足らず。また尾陽の荷兮一書をつくる、書中所々先師の句をあざけるとも聞けり。我いまだこの書を見ず。かの荷兮や、先師世にます內、ひたすら信仰す。一とせ故あつて、野水・凡兆と共に先師に遠ざかる。先師そのうらみをすてゝ、迁化の年、東武よりみやこへ越給ふ道、名古屋にいたりて、かれが柴扉をたゝきて、一二日親話し給ふ。彼またこれをあがめ尊ぶ事、舊日のごとし、翁迁化の時、東武の其角・嵐雪・桃隣等、於東山に追悼の會をなす。かれ、蕉翁の門人の數にくはゝりて着坐す。今書をつくりて翁をあざける。もつとも憎むべきのはなはだしきもの也。かれが心操をかへり見るに、翁いますときは、先師を賣て、おのれが浮世のたよりとし、先師沒し給ひては、また先師を賣て、初心のともがらを、今は先師に勝れたりと欺き道びかん爲成るべし。其難ずる所、誠にわらふべきのみ。我是が爲に、その辟耳を切つて、邪口をかさんと欲す。然ども翁います時、或人翁の句を譏るものあり、我これをあらそはんとす。翁の曰、かならずあらそふ事なかれ。我おのづから我句をもつて、いまだつくさずとおもふもの多し。かへつて五三の句を揚てそしらんは、我名人に似たりと大わらひをもよほし給ふ。この事をおもへば、又憤り闇らんには不レ及。かれもこれもともに、先師を賣るものなり。雅兄これをいとひたまふ事なかれ。

○來書曰、集作りて、善惡の沙汰におよぶ。當時撰者の手柄なり。この頃の集は、あて字・てにおはの相違・かなつかひのあやまり、かぞふるにいとまなし。しらぬ他門より論ぜば、高弟去來公のあやまりと、沙汰し侍らんもむべならんか。

△去來曰、これなにといふ事ぞ。今諸方撰集、そのつたなきもの、予が罪を得んこと、近年誹書のおこるや、われこれをしらず、たゞ浪化集のみ、ゆへ有てこれをたす

く。もし浪化集にあやまる所多くば、是予が罪のがれがたし。その他は我あづからず。又蕉門の高客、國々所々に不レ珍、世人なんぞ罪を予一人に責んや。我京師に在といへども、惣て諸生の事にあづからず。たゞ嵯峨の爲有・野明、長崎の魯町・卯七・杜年のみ故ありて予これを教訓す。其余は予があづかるべからざる所なり。

○來書曰、北狄西戎の夷、時を得て吹を窺ひ、次第にみだりがはしき集を作らんと。もつとも悲しぶに堪へたり。高弟このそしりを防ぎたまふ術有りや。

△去來曰、先に云がごとく、予なんぞ世人のあざけりを受ん。また嘲りを受ずと言ふとも、道の爲・師の爲、これをなげかざるにはあらず。しかれどもこれをとゞめんに術なかるべし。

○來書曰、惟然坊と言ふ者、一派の誹諧を弘むるには、ますます功有りと言へども、かゑつて衆盲を引の罪、のがれがたからん。あだ口のみ吐出して、一生眞の誹諧を云ふもの一句もなし。蕉門の內に入て、世上の人を迷はす大賊なり。

△去來曰、雅兄惟然坊が評、符節を合たるがごとし。その內一生眞の誹諧一句もなしといはんは、過たりとせんか。また大賊とは言ひがたからんか。彼はみづからまよひ、しらずして人にしめす。これを大害とせん。賊の字たるは、雅兄いきどをりの甚だしきならん。また曰、惟然坊が誹諧たる、彼迷ふ處多しと。惟然坊蕉門に入る事久し。しかれども先師に昵近する事稀なり。これ故に、去〻戌の年の頃まで、坊ッが誹諧、世人これをとらず。しかれども先師迁化の前、京師・湖南・伊賀・難波等に隨身して游吟す。先師かれが性素にしてふかく風雅に心ざし、能く貧賤にたへたる事をあはれみ、誹諧に導きたまふ事切也。故にかれが口質の得たる所にともなひて、先これをすゝむ。一ッの好句有ときは坊は作者なり、二三子の評あたらず。なんぞ人〻の尻まいして有るらんやと、感賞尤甚し。坊ッもまた自、心氣すゝんで俳諧日ごろに十倍す。また先師のはいかいに、あるひは俳諧吟呻のあいだの樂なり、これを紙にうつす時は反胡に同じ。或は當時の誹諧は工夫を日ごろに積んで、句にのぞみてたゞ氣先

をもつて吐出すべし。あるひは俳諧は、無分別なるに高みあり。かくのごとくの語、皆故有ての雜談なり。坊がまよひを是にとるか、又先師の一ていにつきて感賞したまふ事をしらず。蕉門の俳諧かくのごとくと、自語みづからまよひて、終に全躰を見ず。かへつて同門高客のはいかいをもつて、あるひはねばし、あるひは重しとす。是、角を取て牛なりと云ん、牛なる事は牛なれども牛の全躰を見ず。他日牛の尾足を見てこれ牛にあらずと、あらそはんも又むべならずや。かくのごとくの辭をもつて人に示さんに、豈害なからむや。予推察をもつて坊を誹評す、きわめて過當なり。しかれども坊ッが一言をもつて證とす。坊が語予曰、頃日師に昵近して、略誹旨を得たり。秀作はあたはずと言へども、句の善悪自ら定て人評をまたず。また會に風國曰、句は出る儘なるをよしとす。これを斧をもつて正するは、かへつてひくみに落と。皆これ先師の賞詞と誹談にまよへり。坊ッは迷へりといつゝべし。また自欺き、人をたぶらかす者にはあらず。

○來書曰、故に近年もつての外の集、梓にちりばめ、世上に耻を晒すも、專らこの惟然坊が罪なり。

△去來曰、この罪また惟然にはあらず。坊ッ四方行脚すといへども、其徒、集を撰ぶものすくなし。南都に一集有、撰者を忘る。はじめ坊ッ助を成す。しかれども坊ッがこゝろに不ㇾ吐、半にして遁れぬと聞ぬ。また豐後の一集有、これは惟然が手筋たり。しかれどもこの集、坊ッが教示より先草稿し、後坊ッに聞て加入するときこへたり。其外坊ッが徒の集なし。（或曰、豐後の集已に板に出し、世に顯す。集は惟然教示の後の集なり。其門より有る集は終に板行に出さず。）

○來書曰、口すぎ・世渡りのたよりとせば、それは是非なし。

△去來曰、彼坊における、定てこの事なけん。

○來書曰・惟然にかぎらず、淨瑠璃の情より俳諧をつくり、金山談合の席に名月の句を案るやからも、希〻に有りと言へども、これは大方同門・他門ともに本性を見屆ず、例の晝狐とはやし侍れば罪も少からんか。

△去來曰、雅兄言、感笑す。

○來書曰、予短才未練なりと言へども、一派のはいかいにおゐては、大敵をうけて一方の城をかため、大軍のま

つ先かけて一番に討死せんとする志、鐵石のごとし。
△去來曰、勇者はかならずしも義あるにあらず、此角の謂か。義者かならず勇有り、これ雅兄の謂か。
○來書曰、故に同門のそねみ・あざけりを顧ず、筆頭をつゝまずしてこれを起す。これ雜談隱密の事、不レ及ニ沙汰一に、諸門の眼にさらし、向後をつゝしむたよりとならば大幸ならん。
△去來曰、雅兄道に志ざすの深き、この言にいたる。尤感涙す。是を他日湖南の丈艸先・正秀先に贈りて、なを二子の誹諧を聞ん。
○來書曰、願くば高弟、予と共にこゝろざしを合せて蕉門を固めて、大敵を防ぎたまへ。
△去來曰、雅兄の言勇つべし。然ども予が性もと柔弱にして、敵に當るの器にあらず。嘗て十月のはじめより、心虛勞ゐきを兼病す。今日藥におこたらず。向來猶弓を引、矛を振の力なけん。幸、强將下に弱兵なし、益兵を養ひ陣を練て、大敵を破りたまへ。雅兄のごときは實に蕉門の忠臣、一方の大將軍也。

落柿舍嵯峨去來拜

元祿丁丑十二月　日

五老井許先生
几右

病後精力未レ全、是故此一書、風國を頼、淸書仕り畢。誤字落字衍文等、御考御披見可レ被レ下候。猶語意聞へがたき物は、重て御不審を蒙度もの也。

誹諧問答抄卷之一　終

誹諧問答青根が峯　巻之二

浩々舎芳麿校定

再呈落柿舎書

一難問の御返答、瓢然として袖におつる。高弟の慈恩にあらずば、爭か小子が大道にいづる事を得ん、故にふたゝび筆を取ってその恩を謝する事。

一御返答の中予短才にして、耳におちがたき事を再び論ずる、問ふ事まつたく先生とあらそひ論ずる志にあらず。

一難問の御返に寄つて、予短筆、意味のとゞかざる事をふたゝびあらたむる事。

一過論の罪を謝する事。

一一章〲ふたゝび答のなきは、高筆儀論をよせて、推敲をさだめたる故なりと知り可レ給事。

一奥に自贊・發明の二論有、まつたくみづから倣てこれを記すにあらず。但長篇は誹諧儀論のためなり。文法をかざらず、平話をまじへたるなり。

共書に云

一第十章の問答に、予が老をとがめたまふ事、答ふるに言葉なし。面目を失ひ罪を謝するのみ。

一十三章の問答に、一句の上に誹諧あるなしの論、予がことばは古人の論に非ず。今日一句の上の誹諧を論ず。古人の論におゐては先生の言葉あり。

一十四章の問答に、不易・流行を前にすへて後に句を案ずる事、まつたくなき事といふにはあらず。一座の興、または導のためには前にすへて不易にせん、流行にして見せんなど我黨もなき事にあらず。この論おくの自讃の處に條目の下にくわしくしるす。題發句・讃物の類の引導、先生の言これ信あり。予も亡師在世のときこれを習ひ置く事。

一十五章の問答に、風と躰とのふたつ、問ひこたへ聊か相違ある事。予聞師の雜談、折ふし不易・流行の事いでたり。千歳不易の躰・一時流行のていとはのへたまへり。不易の風・流行の風とはついにきかず、よく明して一生

のまゝひをてらしたまへ。先生の書にいはく、風は萬葉・古今の風または國風、一人の風といへる。ていは古今をおしわたりて用捨なしとあり。これ先生の言、貫之の論と相違なし。予さつするに万葉の風を古今にうつし、古今の風を新古今にへんず。定家の風をやめて西行の風にうつしさり、捨る所の風はいたづらになる味あり。返書のごとく、宗因の風もちひられて貞德の風はいひいだす人もなく、信德の風むづかしといひて亡師の風にうつる。亡師の風もまたおなじ、炭俵いでゝあと／＼の風すたらず。先生不易・りうかうを風といはゞ取りすつるの風義におちんか。予がいはく、風はうごきにして枝葉なり、体は根にして古今をつらぬく。宗因の風はすたれども、誹諧の体は世にさかんにのこり、信德の風はとらねどもその体は相續して、あらぬ鳴々まで俳諧せぬものもなき世になり、今の不易・流行は誹諧の体なり。きのふの流行はすたれども今日の流行あり、今日の流行はすたれども明日の流行に富めり。これ枝葉はうごくといへども、まつたく根のうごかざる事を知れり。しかれば不易流行は体と云はんか。また先生の風といへるも一理なきにはあるまじ。不易・流行は亡師の風と云はゞ風ともいふべきか。芭蕉風のうちに不易・流行は体なり。

一十六章の問答の返書にいはく。予が不易・流行なき以前の論をあざけりて、俳諧和哥の一躰たるをしめせり。哥にそとをり姫の風をしたひて小町は哥をよめり。西行はいにしへによめりと後鳥羽院上皇宣ひし事も、これ明らかなり。そのそと織姫は誰が風を詠みたまへるぞ。またその師は誰が風をと、おしてたづぬるときは神代の風になりぬ。哥の文字もさだまらざる時のうた十躰、または不易流・行、またはほそみ、あるひはしほりなどゝいへる事なけれども、かたじけなくもみな名歌となれり。哥并誹諧すこしもかわる事なし。先生の論は俳諧はじまりの證據など書たまひ侍れども、この論はうたの初の事を述ぶ。誹諧もわけていふにはあらず。不易・流行なき已前といふ論を察したまふべし。赤人のふじのうたは何体、たれ風をしたふと云ふ事なし、只志をよ

めり。今の風知り、体しりの一字もおよびがたし。人麿のほの〳〵、猿丸の奥山等また是おなじ。不易・流行さだまらざる世界に、名句なきにもあらず。不易・流行なき世界に生れたらんにはあらねども、今の人不易・流行に縛られたるをあざけるなり。古今に作者おほへず、

もろこしのよし野の山にこもるとも
おくれんと思ふ我ならなくに

といへるうたよむ人あり。撰者達の論にいはく、この哥、名哥なりといへどもこれ誹諧体なりとて、終に古今集の俳諧体にいれたりといへり。よしのゝをあまりとをくよみなさんとて、もろこしのよしのといへる事、一實はなき事なり。これ俳諧体なりといへり。作者は何体をよみ侍るともなく、名哥よみいださんとばかり案じたらん。撰者あつて体をわかつなれば跡にして、趣向は先成るべし。委しき事は奥にしるす。

一十七章にいはく、師在世のとき、予不易・流行と云はず、また前にすへずして、句をつくりたる事は、再へんの問は、おくの自賛と云ふ條目にしるす。

一十八章に云、予流行・不易を責るとせずと云へる事を、押てたつとぶと返答あり。再答は、十六章不易・流行の下に書す。無縄自縛を打破したる過言なり。何ぞ風雅をこのむもの不易・流行のふたつをはなれて、外道筋を經て、日々に俳諧にあそばんや。しかしながら、不易・流行は、口よりいでゝ後にあらはるゝ物なれば、あながちに不易・流行を貴しとするものに非ず。この論奥に委也。

一貳十章の所に、秀逸の句なき事を悲しぶといへるに、聞人なからん事を悲しぶとこたへり。先生の言神のごとし。この後、翁の句におとらぬ句いでたり共、聞人あるまじければ、かなしぶの第一也。かやうに論ずるといふも、聞人なきその一ッなり。

一二十壹章の論に、滅後の弟子に、みだりがましき雲助の類漂泊せるをなげくに、先生の意見一言高し、これ寛仁の器たる故なり。予もしゐてこれをはぶかんとにはあらず、先生に告て腹をゐするの論也。しかしこのごろの三四集のあやまり、予が見聞のおよぶ所、奥に

しるす。二十二章の難問に、高弟先生のあやまり、少しはさた侍〃事もあらんか。ひろく御他見御用捨かふむりたきもの也。

一貳十四章惟然坊が評、猶もつてさたなし。先生の論神のごとし。一生眞の誹諧なしとは予過論か、碌々たる石の中には、金に似たるものもあらん。

　世の中を這入かねてや蛇の穴

はすこし哀なる所もあり。この坊素牛といへる時、藤の實といふ集を編り。その時はさしたる事もなきやうにおもひ侍れども、この頃あまりに集どものつたなきを見て、この集とりいだし見るに、中〱頃日の集に似たる物にもあらず。これは師在世したまふ光也。この藤の實專晒堂が後見と見えて、奥の俳諧は珍碩口也。丈艸の手傳ひも見へたり。正秀が序文は丈草の口なり、師の手傳とは見えず。

一廿五章にいはく、近年の一二集はもつぱら惟然坊が後見と見ゆるに寄て、田舍遠境の人この坊ヶが誤りと難ぜり。玄梅が集も半にして立退たる事も人しらず、但、

我集藤の實作るとき、人の後見を蒙りてまた人の集に手傳ふ、いぶかしき物也。

一、廿八章に云、この雜談、隱密の事にあらずと書せるは、先生の慈悲を蒙り度事斗なり。はかりごとに落給ふも有難し。過論の罪を謝するもの也。

一、三拾章終の問答に曰、先生例の物ぐさき隱逸を先とし給ふ事をなげく。予が如きの勇士はいふに及ばず、關羽・張飛が大勇あれども、將器なければ荊州にて犬死す。千兵得安く、先生のごとき一將は得難きと、和漢のことぐさにも見えたり。蕭何夏侯嬰とひとしき家の宰相あらば、元帥印を贈て、第二世の宗派をおこさん。惜むべし〱。

右　　　森許六拜

自讀之論之上

一、おこがましき事といへども、この論先生の腹抱れて、御披見をかふむり度候。先生と予は、亡師在世の中、かたく契約をなして、江東に上らば洛陽の去來子と心

やすく申通ずべしと翁の一言より、推參慮外をかへりみず、度々の返書を贈る。総に外の同門に對して誹諧の議論する事なし。これ師教の恩をわすれざると、さつしたまふべき事。

一、予誹諧をこのむ事千人に過たり。廿余年晝夜誹かいに眼をさらす。初學のときは、季吟老人の流に手引せられて、中頃談林の風起て急に風をうつし、京師田中氏常矩法師の門人と成て、俳諧する事七八年、晝夜寐食をわすれて、一日に三百韻・五百韻を吐出す。その頃出る諸集に渡て、一天下の誹諧おそらくは掌中に握りたる様におぼゆ。常矩門弟の第一と稱す如泉などゝいへる者は、予より遙におとつたる門人也。かれが高弟に宗雅・女葉・利次などいへる者と、五句付点取等にくびきするもの、予が俳諧の友三四人ならではなし。仕官懸命につながれたれば度々の上洛もなし。たゞ筆談撰集等にて風儀を識得す。田舎に居すといへども、京師・東武の宗匠に習はずして風儀を改るなり、遙に世間の風儀の替る事毎度なり。習はずして流行するは、明日の我に飽たるゆへなり。その頃常矩が何がし集の付句に

前句 物の時宜も所によりてかはりけり
　　難波のあしを伊勢風呂てえた

といふ句あり。秀逸とて入集す。我黨これをとらず。所によりてかはりけりといふ句、難波のあしは付らるまじ。前句拵へたるやうにして、うまく面しろき事なしとて、かやうの事より常矩を見破る。またそのころ桃青の付け句に、

前句 きゝ耳やよ所にあやしき荻の聲
　　難波のあしは伊勢の四方へ

と云句有。これ上手の作なりとて、感じて桃青を上手と稱す。其後轉變して自暴自棄の眼出來、我句もおかしからず、他句猶聞取がたし。所詮他人涎をねぶらんよりは、やめて亂舞にあそぶ事四五年なり。しかりといへども、元來ふかくこのめる道なれば、終にわすれがたくて、折ふしは他の句を尋るに、このころの体風などを論じ、そのころの一天下桃青を翁と稱して、い

よ〳〵名人の號を、四海にしくと沙汰しけり。予この人、器を見るに我肩をならべたる時、中〳〵およばざる上手なり。日ゝ名人と成侍らん。ねがはくば一度對面して、誹諧の新風を聞たしと、便りをもとむる事一二年の其うち、翁の句并に門人句等を聞て、その風をさぐる時にあら野集出來たり。よろこんでもとめ晝夜枕とす。その後につゞき原・いつをむかし等の集も略世にいでたり。猶晝夜さぐりもとめて、また俳諧する都合四五年、數千言數万言、相手を嫌はず。その内に、大津の尙白に兩度對して大意をもとむ。猶微細の所は、集をもつて毎日さぐる。予がふかく翁を招く事師の耳に入間も二三年、終に江東にあそび給はずして、師が弟の緣のうすき事を今日になげく。その後予東武に官遊して其角に兩席會す。俳諧稽古の爲によしなし。そのころ猿みの出板して、翁は吾妻のかたへ趣たまふとき、李由が月照寺に漂泊し給ふといへども、予また東武に逗留の間にして、かたちがひする事、是また師に緣のうすきなり。その冬、予故山に歸る時、師は平田よりいでゝ、美濃・尾張に過て東武におもむきたまふ。またかた違ひする事かくのごとく、予明の年七月又東武に趣く、此とき翁に對面せん事をよろこぶ也。橋町より、深川芭蕉庵再興して入たまふ年なり。江戸着の日かず經ず、桃隣手引して八月九日深川の庵をたゝき、師弟契約のはじめなり。一座に蘭嵐・桃隣・淨求法師なり。桃隣いひけるは、翁へ發句持參あるべしといふに任かせ、桃隣執筆して四五句はじめて呈す。

七月十四日島田・金谷の送り火を見て感をます。

聖靈となりて越けり大井川

十團子も小粒になりぬあきの風

かけ橋のあぶなげもなし蟬の聲

我跡へ猪口立寄る淸水かな

此外にも有しを失念。

師見終て云く、就中うつの山の句大きに出來たり。その外淸水・掛橋の句もよしと、數篇感じられたり。大井川の句は、その時すこし加筆あり、略す。予つく〳〵

不審を生ず。再篇きゝ返し、宇津の山の句能侍るやといへば、成程よしといへり。予が聞かへしたる事を不審におもひたまふや。翁のいはく、許六は愚老に對面したまはざる以前、愚老が門弟に對面したまふやと、問ひたまふ。予も云、しからず、尙白に二度對しける後は、ひたすらあら野・猿みのゝ二集に眼をさらし、晝夜句をさぐる事隙なし。すこしさぐり當たりとおもへば、跡より師の吟じいだし給ふ句、大きに相違せり。その風探り見れば、また跡の句似たるかたもなし。晝夜吟腸を斷て、やう／＼この宇津の山の句を得たり。この句二十句ばかり仕直し、二日案じわづらふて後に、小粒に成りぬといふ事を取いだしたりと答ふ。師のいはく、先達て尙白問答一ゝ聞たり。今日許子が句を見る事、もつぱら撰集にて眼をさらしたる事あきらかなり。愚老が魂を集にてさぐり當る人は、門弟子に許子一人なり。晝夜この魂を門弟子に說といへども通しがたし。愚老が本望今日達せりとて、大きによろこびたまへり。撰を見る事、許子におよぶ人あるまじと、返す／＼稱したまへり。予いよ／＼不審出來ぬ。つく／＼おもふに、はい諧はいひ勝と、平呑にのみ切て居侍るとき、師いはく、許子が誹諧と晋氏の誹諧はかつて符合せず。愚老が誹諧と許子が俳諧とは符合すといへり。この事にちからを得て懺悔す。予云、されば今日對面のはじめより予が心中大きに迷へり。この一言によつて少し力を得たり。予高翁に對面せざる以前、晋子が方へこのころ点を乞句百四五十有。予がよしとおもふ句には点稀にして、いひ捨の句に褒美の点有。今日師のかんじたまふ句、大方一点の句なり。然る所師殊外かんじ給ふ。予不審こゝにあり。師の高弟は晋子也。師弟の胸旨、ケ樣にかはりては賴もしからず。畢竟誹諧は云勝と決定し侍る也。また問云、予が誹諧と晋子が誹諧と符合せざる事、并、師の風雅と予が風雅と符合せし事を述べて、不審を明し給へといへば、師の云、許子俳諧をすき出る時、閑寂にして山林にこもる心地するを悅び、元來はいかい數寄ならずやといへり。答曰、しかり、師も好く所かくのごとし。晋子がす

く所は、曾てこの趣にあらず。俳諧は伊達風流にして、作意の働き面白き物と、すき出たる違ひなり。故に晋子と許子と符合せざるといへり。はじめて眼をひらき、一言に寄て筋骨に石針するごとし。又問ふ、師と晋子と、師弟はいづれの所を教へ習ひ得たりといはむ。答て曰、師の風閑寂を好んで細し。晋子が風伊達を好んでふとし。此細き所師の流なり、爰に符合すといへり。これをかんず。又問曰、予さぐりあたりたる所、まことの誹諧の血脈に侍るやといへば、この所毛頭疑あるべからず、心を正して俗はなるゝ外はなしといへり。その日は退出す。その後予が旅亭に招きたるとき、師の雑談に云、愚老許子に對して、予が多年の大望を遂たり。蘭嵐(嵐蘭)子曰、いづれの道か叶ひ侍るといへば、師のいはく、我國々の人に對して、俳諧の器をもとむ。もとめ得て、直指の法を傳ふべきとおもふ事、日々に有。今撰集を見て予がはらわたをさぐり得たる人は許子なり。千歳の後も許子がごとき人、世にあるまじきともおもはず。されば、しいて器をもとむる事を止めたり。今日の望は性痴にして、多年大きに執心をかけるといへども、かつて動ざる人あるべし。これは愚老がたすけにあわざれば道に入がたし。器のすぐれたるものは、獨おしえずしていたるといへり。許子が本性を見るに、愚老が求る處に大かた叶ふ人なりといへり。蘭嵐がいはく、その事いぶかし、一々論じたまへ、師のいはく。

一、器のすぐれたるもの第一。

一、この道に執心にして、寐食をわすれ、財寶まで欲に代る人。

一、歳四十を越ざる人。

一、いとまある身にあらざれば、道は行ひがたし。

一、貧賤にして朝夕苦しめる人ならず、富貴にあらずといへども、商賣農士に穢れず。

一、博識にあらずとも、和漢の文字に乏しからぬ人。珍碩がごとき人にあらず、これ六つなり。この六ツの物揃へる人稀なり。二ツ三ツは兼るといへども、六ツの品具足したる人は稀なりといへり。師の曰、第一手

筋よし器よしといへども、手筋あしきはならず。速にこの度誹諧の底をぬかせんといへり。門弟の中に底をぬくものなし。あら野の時を得たりといへども、ひさごに底を入られ、ひさごは猿蓑の底あつて、古今を隔てらるゝ、底のぬけたるは新古の差別なし。昨日また明日と流行して、一日もあしをとめずといへり。その冬の頃、愚句、

寒菊の隣もありやいけ大根

と云ふ句せし時、洒堂が句に、

鶏やほだ焼夜の火のあかり

と時を同じう侍る。この兩句翁の論じていはく、世けん俳諧をするもの、この場所にいたりて案ずるものなしと稱したまふ。予いはく、我久しくいろ〳〵の風を學ぶゆへに、ふるき場・あたらしき場は、たしかに覺ゆるなり。この場所より外にあんじ出す所は無し。然共能き句稀なるを歎といへば、師のいはく、好惡は時のよろしきにつくと示したまへり。又曰、愚老が俳諧は、五歌仙にいたらざる人、一生成就せず、大事なり、覺悟せよといへり。予誹諧とする事全篇たしかに成就する巻二、歌仙半分にみてざる巻二ッ、以上四巻なり。師いはく、愚老相手と成て誹諧する事三四度なり。いつとても誰れ〳〵と誹諧するは、かやうの物と容易におもふ事なかれ。眞の誹諧をつたふる時は、我骨髓よりあぶらを出す。必〳〵あだにおもふ事なかれと、大きに恩をしめされたり。その正月、予が亡母の七年追悼に到る。こゝろ安き相手もとめて歌仙一巻終る、成て師に呈す。師これをよんで、且ッよろこび且ッ稱す。予がいはく、師の流、この歌仙の外にあらば、予が誹諧終に本意を遂る事あたはずといへば、師のいはく、全くこれ也。うたがひ侍る事なかれと、大きにかんじたまへり。その後三月盡の日より、卯月三四日まで、予が宅に入逗留し給ふ。晝夜誹諧を聞く。その時翁の曰、明日衣更なり。句あるべし、きかんといへり。かしこまりて、三四句吐出すといへども、師本意に叶はず。師の云、當時諸門弟并他門ともに俳諧憾にして、疊の上に座し、釘鍵をもつてかたくしめたる

がごとし、是名人の遊所にあらず。許子が案ずる所も是なり。風雅の外に子が得たる藝能を察せよ。名人は危所に遊ぶ、俳諧かくのごとし。仕損じまじき心あくまで有、是下手の心にして、上手の腸にあらず。師が當歲旦、

　とし〴〵や猿に着せたる猿の面

といふ句、全く仕損じの句なり。ふと歲旦に猿の面よかるべしとおもふ心ひとつにして、とり合たるなれば仕損じの句也。予が曰、名人の師の上にも仕損じ有や。答曰、毎句有。予この一言を聞て言下に大悟す。おそらくは向後、予が句仕損じの場所ならでは一句も有るまじ、聞たまへと、高言に放つ。予あやうき釣合は、さぐりあたり（ろ）といへども、心中仕損じまじきとおもふ心あくまで有り。此一言に寄て仕そんずるところを決定せり。時に、

　人先に醫者の袷やころもがへ

と即時にいひいだす。師、掌を打ていはく、奇成、妙なり、俳諧の底この句にてぬけたり。一言下に悟するものはあれども、一言下に句をするものはなしと感じられたり。この句、秀たる句にあらずといへども、血脈の正敷所よりいでゝ、第一衣更には氣を寄よく付て、人のおよばぬ所をかんぜられたり。其角に語れば、晋子も能聞て氣のよく付たる所を感じ、則句兄弟に入るべしとて書付たり。予この時の意趣をかつて忘れず。間に髮をいれずして、今日に案じつめたり。予が大悟發明するといふ時は、去先生の論じたまふ不易・流行の二ツにはあらず。翁の父母より相續したまふ血脈の所なり。我あら野・猿蓑の二集を（三）眼にさらし、（を）工夫を強くめぐらして、晝夜に忘るゝ隙なし。自然にこの血脈の端を伺ひ置き侍る故、言下に血脈の所を大悟し、誹諧の底を打破して眼のさやをはづす。師の血脈を大悟したるものは、まつたく不易・流行の所を論ぜず。一向に血脈を失はざる所を本意とす。血脈そなはつて出生すれば、目鼻は自然と出來たり。これ不易・流行とわかれて、男となり女と成るがごとし。故に先書に論じたる不易・流行を前におきて句をあんずる事あるまじ

とはかくのごとくなり。是血脈相續の人にてなき證據に、枝葉の不易・流行にからまされて、元來出生の血脈をうしなひたるなり。人間生じて後目鼻なくば、人間用にたゝず。目鼻拵ずにおきて、人間をまた作るべしや。五臟五躰兼そなはるによつて、人間成就し出生する也。句におゐてすこしもかはる事あるまじ。先書にいはく、不易・流行を貴とせずとはいへり。またなんぞ、いやしとせんや。不易・流行とわかれざる已前に、妙句有るまじきにあらずといひたるは、血脈の正しき所をさしていふなり。已前といふは血脈の事なり。万葉の風後にもちいずといへども、血脈は万葉より繼だる故に、古今集といふものは出生したり。風は枝葉なり。これ古今の變ありてかはる事慥なり。段ゝ血脈の動かせざる所を相續したるによつて、今日の翁も血脈を繼で各ゝ我ゝにはおしへたまへり。風は此以後いくばくの變もあらん。予が論はまつたく血脈の所を申なり。近年血脈相續の句見えず、故に秀逸なしといへり。和歌などは猶又、一代の秀逸は多くはなしと聞侍る。

しかれども、一代の秀逸といふにもその人によるべし。たとへば、予が爲にあらずとて捨たる句、また予よりはるかにおとりたる人の句にゆづれば、その人の爲には一代の秀逸と成るに似たり。翁の笈の小文庫に書れたる句、それは一生一代の秀逸の事なり。たゞ人の口に申ふるゝ程の句さへこのころはなし。これはしるもしらぬも不易〳〵といへる故に、危き場所を忘れたりと察す。一年の秀逸、一月の秀逸有べき事也。是は血脉を慥に相續の上の事を、予は秀逸といふ也。俳諧の眼とも、または細みとも影ともいふ也。すこしツヽは云かはりも有べけれども、畢竟は血脈第一の上なり。言葉のかざりにて、ほそみ・しほりなどいふて益なき事を附たりし事を、先書には記し侍るなり。元來血脈のなき句の事なり。横にこけ竪にひづみたりとも、血脈さへあらばこれ上手の句なり。近年の句はよしともあしとも一向に片付侍らぬ故に、秀逸見がたきとは申事なり。前に書る所は危き場所をしらず。あくまでいひ損ぜぬ心より出來りし句どもなれば、よしとも

あしゝとも片付ず。この段は雜俳の事にあらず。蕉門骨切の弟子どもの事なり。一向に初心のともがらにはおもひいでゝ言出す事も十に一ツも有り。血脉たゞしからざる人達、人ゝ不易をこゝろがけ給へる故に、危き場所の句かつてなし。誹諧根本の滑稽少し。路通ごときの者成とも、急度はいかいをたゞしくあらため、血脉の句云ひいださば三神をかけて、予は一番に門弟となる志なり。路通一生の行跡の事は、予少しも心にかけず、予が仁義の師となさば、似せるあざけりも有べし。俳諧においては、門前に彳む乞食なりとも、一藝の勝れたる所を見出さば、なんぞ輕んずる所やあらん。千里を遠しとせず、行て師とし尊とばん。路通・洒堂ごときのもの、一生の行跡嘸ゝ亂墮ならん。是すこしも予がさはりに成る事にあらず。この路通といふ者を見るに、俳諧も亂墮なり、行跡も亂墮なり、一ツとしてとる所なし。しかれども先生は急度路通・洒堂ごときの者をにらみ法を正したまふ事、尤至極なり。先生法をみだりたまふ時は、末ゝの門人猶みだりに成て法を失ひ侍るべし。湖南の門人洒堂を本のごとくに用ひたまふ事、翁在世においては、湖南の衆、かくはちなみたまふ事成まじ。

一、惣じて句のあんじ所と申は、翁の案じ給ふ所も、予が今日案じる所も全場所替る事なし。師の句は德に依て合點せぬながら感ず。眼ゆがみ心俗に落たるが故に、門人の句は名あれどもとらず、かゑつて人嘲る者多し。予云、師は五十年來勞を經て名人とは成給ひぬ。予は今日初ての眼なれば、功をへ、年月を重る時少も智る子細なし、却て師より遙かに增る名人と成るべし。その故は、師といふ人、伊賀の山中より出で師一代の名人なり。予は師の名人の門弟と成て、師一代の工夫を勞せずして胸中にたゝみ入。予が一代の名人と都合する時は、一重秀たる名人とは成べし。中〳〵おとる者にはあらず。我六年前に血脉を繼ぎ、三神をかけて師の前におゐて大悟發明す。俳諧の底を破て自由を得たり。自讃の詞也と憎む人も有べし。和歌三神を入て自讃と云心なし。翁の流の誹諧におゐ

ては、血脈相續の門弟なり。

一、不易・流行をいはく、不易はかくれたる所なき故に不易也。流行の姿は月々年々かはる。發明の發句におゐては少紛る味あり、故に附句にして爰に記す。

一、前句ありて、さゞゐの壺いりといふ事、よき所ならば昔作出し侍る時、漸々に、

　壺いりのさゞゐはちよくに居りかね

などゝ作れり。中頃は何を尋ね拵たるとき、

　苦燒のさゞゐに盃のひつつきて

又、苦燒のさゞゐを横に喰ひ付て　などゝ作れり。當時江戸表、五句附點取俳諧は、今はこの場に居れり。この拵らへたる事を憎み給ふ故に、炭俵・別座敷に場をふみ破りて、

　さゞゐをふつてひたと吸はるゝ

と出せり。是予が生じたる國也。其後師上洛し、伊賀にこもりて後猿とかや撰じ給ふと聞。さゞゐのうまみをぬきて、遺經の俳諧を殘せりと聞ども、板出さねばしらず。予は獨流行して、

　火鉢の燒火にならふ壺煎

といふ所に遊ぶ。雉子かまぼこを燒たる銘は、必ず一獻を待ツ。にがやきのさゞゐに青串をさして並べたるを、直し見るが如し。かるきといふは發句も附句も、求ずして直に見るがごときを言ふ也。詞の容易なる、趣向の輕き事をいふにあらず。腸の厚き所より出て一句の上に自然とあり。

　佛壇の障子に月のさしかゝり

　行水の脊中を照らす夏の月

　鷹場の上を鴈渡るなり

などいへる事の類は、是かるきといふもの也。玄梅集に四疊半の卷といふ誹諧有。是、後旅の趣と見えて、あまみをぬきたる俳諧なり。又精進などいふ事を句作りにせば、昔は、

　月に一日は親の精進日

　只精進はかたつまりけり

などせし、是は新しく誹諧といふ事なし。

　ふるひから次第に上る精進日

といふこそ新しけれ。またあたらしみといふは、

祖父祖母の精進は。間まびかれて

と云こそ新しみとは申侍れ。精進はあいに落られてなど云句ならば、是むかしの句にかはる事なし。新しみといふは是なり。明日、明後日の流行盡る事なく澤山に富り。前論に云、正秀が詞に、師迁化の後流行頼みなし、不易の句ならでは作るまじきと云けると書せり。此事いぶかし。翁滅後共流行頼なきと申は何ぞや。不易・流行は誹諧の姿也。誹諧を止めて余の事に遊ばゞ格別のさた也。俳諧つぶやく中に不易・流行二ツながらなくて叶はぬ者也。叶はざるとて常に不易・流行を荷ひ運ぶものには非ず。血脉相續の人の句は、口より出るとひとしく不易・流行の姿出來て、千里を走るもの也。惣別俳諧といふもの、不易・流行の二ツならでは外に何といふ事もなし。此二ツに極る。不易にあらざれば流行也。流行の姿なければ不易也。此二ツの姿をはなれて句といふものは曾てなし。不易・流行二ツに極るといふは、おの〳〵や我〻の上の事也。世上雜誹の上を論ずる事に非ず。雜誹の事は究たる事なければ、評にかゝはらず。惣別、予が論ずる所は門人の骨切の上の噂也。此正秀血脉を繼がぬ故に、かやうの珍らしき一言をいふと見へたり。かれが俳諧を見るに、專ひさご・猿簔の場所に居り、翁と三とせの春秋を隔て、師說を聞かず、血脉を繼ず、底を拔かぬ故に、炭俵・別座敷に底を入られたり。まつたく動かぬ印也。しかりといへども、かれが俳諧を見るに底は拔ずといへども逸物也。又〳〵門人の一人なり。定家卿の論に曰、家隆は歌よみ、我は歌作り、寂蓮は逸物也といへり。此人逸物と云人なり。師の眼前におゐて句をいひ出す時は、師の眼有て撰出して是はよし、是は五文字すはらず、此句は用に立ずなどいひて、撰出し後世間に出る故に、人〻正秀はよき俳諧と眼を付るといへども、師迁化の後は猿の木から離れたる如くにして、自己の眼を以て善惡の差別を撰出す事を知ず。只我口から出るは皆よき句と心得て云出す故、當歲旦三ツ物の如き句出る也。我友木導といふもの、かたのごとくの作者也。終に師に對面

せずして、怠度師の血脈の所を見屆、師の狀通どに、木導は作者也と云褒美を得たり。しかれども逸物也。十句に七八句は雜句也。三句は天地を動かす句也。是逸物のしるし也。正秀逸物たる故に、猪のともし・鑓持の時雨など血脈の句言ひ出せり。時ゝ其姿顯はるゝといへ共、血脈を慥に繼ざるしるしに、每句翁の手筋なし。故に眼ひるみ心俗に落て、古き事又面白からぬ物もふとおかしとて言ひ出す。去る頃、予が撰集の時、猿の喧嘩といふ句面白しとて自慢し越したり。猿の喧嘩會て新しみなし。此方とらざる故に賀(加賀)の集に入たり。五三年もへだてゝ俳諧上洛の後、立歸り見侍れば此事明らかにしるべし。生れ付千兵を破る勇有とも、士を仕(使)ふ器なければ宗匠の器なし。勇は樊噲にも當るといへども、善惡の分れざる人は將の器なし。此頃の集の誹諧を見るに、炭俵・別座敷の風一句もなし。今世間の人、後猿蓑の誹諧はかるみ有て面白き事也とて、筋なき無用の句を出せり。別座敷・炭俵の風熟吟せざる人、いかで後猿の風に飛入事を得んや。しかし一向に成がたきともいひがたし。發明の人あらば直入の俳諧も有べし。大方は成まじき事也。冬の(冬の日)・あら野の時、段ゝ門人共ときの風を得たりとてのゝしれ共、次第に流行なき故に、底を拔がたきやうに入られたり。予察し見るに、荷兮・越人、あら野ゝ時眞のあら野ゝ風も得ざると見えたり。今日あら野を見るに、炭俵・別座敷のかるみ共時よりあらはれ、時代の貴のみにして炭俵の趣怠度すはれり。其時識得せば、何ぞ翁と同く流行せずといふ事あらんや。實は師の恩に寄てあら野ゝ時を得たる樣なれども、今日見る時は、時の風を得ざると見えたり。ひさご・猿蓑の時代、猶以大に同じ。慥に是底のぬけぬ證據なり。今世上に遺經の誹諧の風は、天下に三四人ならでは有まじ。伊勢の支考は後猿の時底をぬきて流行すれども、難じていはゞ實すくなき。しかりといへども、世間の門人と日を同して語る人はなし。此人慥に血脈相續して、當時諸門弟の内に肩をならぶる人なし。されどゝ質、不實に陷る心あれば行末覺束なし。美濃大垣千川といふ者此風なり。次に彥根の門人

なり。野坡といふものは炭俵のかるみ得たりといへども、生得越後屋の手代なれば、誹諧も人情程有て、少かるみ得たる迄なり。胸中せまくして我得ざる方少も見えず。高弟先生を憚らず、過言自讃に似たりといへども、時々を得ざる事は高弟とても是非なし。達摩の法、六祖の米つきに血脈を讓り給ふは、是六祖血脈を知り給ふ人なれば也。

一、返書の中に、切字・古字・古詩・古哥の用る法など、彼是のせられたり。師說と同じ趣をとき給ふといへ共、千變万化して天地に獨步の人なれば、今日の論、明日は同じ事いはず。先生の聞給ふ所、予が聞所少々は違あるらん。なれども小耳にはさみ置所、予が發明自得の下に記す。あはれ閑暇を得て、先生の傳受し給ふ所井先生の發明を合して承度候。

誹諧問答抄卷之二 終

誹諧問答青根が峯 卷之三

浩々舎芳麿校定

再呈下

一、前にしるす近年の集に、手爾葉傳受の相違有る事を歎くといへるは、他の撰集にあらず、風國がはつ蟬井菊の香、奈良の玄梅が鳥の道、加賀の北枝が喪の名抄（名殘）是也。就中玄梅が集は、手に取るものにはあらず。手爾葉の違ひ、宛字傳受の事の相違とう、上卷に二十余章、下卷に十六七もあるべし。こまかに吟味せば如何ほどあらんもしれず。

一、前に難じ侍る高弟先生のあやまりといひけるは風國集也。風國は去來先生の引廻し給ふ誹友と、みな人しれる。集作る時、先生、內見なき事はあるまじと察せり。まづ初蟬より難じて云く、作者のあやまりは、誤りにしてあやまりにあらず、專撰者の誤り也。其中に撰者の句の手爾葉違ひは、これつたなき第一也。見

落し書ちがひなどは、いづれの集にもあり。予が韻塞等も執筆の書違ひ・かなの相違、あとに見出したる所あれこれあり。先生の撰みたまふありそ・となみの二集にも、かなの書ちがひ所々見えたり。ついでに奥にしるす。是あやまりにして、かつてあやまりにあらず。

一、初蟬の巻に、鶯の噂や舌も引いれず　大津　玄香　此句うぐひすの噂やと切て又舌もといふ、珍しきつゞき也。鶯の噂の舌もひき入ずといふ事なり。心はかくれたる事なし。其外に見やりて捨る、きれ字さへ入れば發句と心得たる、作者并撰者同然と見へたり。これにても聞へるといへば是非なし。

一、上巻に、何風の吹かぬ日おつる椿かな　大津　梅主　てにはよろしからず。やとして、哉と留ぬは、新古同じ掟なれば、何と疑ひて哉ととまるまじ。椿かなとは治定の哉なれども、この句全躰うたがひの句なり。しづこゝろなく花のちるらん、といへる哥にて、一句のうたがひしれたり。切字二ッ入れて聞へぬ故に、二ッ入れぬもの也と古來より定めたるところも、かやうの事なり。何といふ字をぬきても、また哉といふ字ぬきても一段心聞へて、しかも發句のすがたを得たり。切字、發句のすがたを付べきため也。

　　鶯の笠おとしたる椿かな

此句は全躰治定のかな也。何風も吹かぬ日落る椿哉は全躰うたがひなり。何といふ字聞へず。何かぜも吹かぬ日落る玉椿となりとも、白椿となりともいへば、なるほどよく聞へる。亦

　　雨風のせぬ日もおつる椿哉

といへば聞へ侍る。なに風といへるは、風の惣名をすべていはむ爲の五文字なりと見えたり。これ世俗の平話にいひあやまりたる事を、哥誹諧につらねたる詞也。この句に限らず、何といふ字、多くいひてあやまりたる句、世間にいくらも有。この論にてよくしれる。何といふ字の間に、句を切て見侍れば、落着よく聞へ侍る。惣別平話を文字に書違ひ侍る事あり。分別なしに書侍ればあやまり多し。たとへば、何と久敷あは

ぬなどいへる詞など、何の字かつて聞へねども下略の詞なり。其下に無事なるやといふ事を、何といふ字に持たせたる詞也。よく聞知りて互に合點して來れり。文章に、何ぞ久敷不レ能ニ對面一と書ては、何といふ所聞へず。哥誹諧は文章なり。俳諧平話宜しといへども、吟味とげての上にもちひざる事は、つたなき事なり。

　何の木の花ともしれぬ匂かな

といへるは、何の字、匂ひかなと切字重疊せざると思へり。花ともしれぬとまはり、何の花かとまはる故にきこへ侍るなり。何風も吹かぬ日落るつばきかなとはまはらず。

　芭蕉葉は何にあれてや秋の風

是何といひ、又やといひゆへども、何にあれてやとは、何と云ふ字の手爾葉の中にて、外のとばなし。ケ様の證句いくらも有べし、論ずるに足らず。

一、上卷に

　春風や燒野の炭の跡もなし

是またおなじ事なり。あともなしといひ切ッて、春かぜやとうたがひのやはいかゞ。これも二ツ切字入たり。古來五文字に、やとしては、中の文字にてはとおかせず。

一、上の卷に、

　夏艸に肥たり鹿のむしり喰ひ　　惟然

肥たりと切て、又鹿のむしり喰ひ、かやうの手爾葉つゞき有べしとも覺へず。何の心かくれたる所なければ、其分にきゝなして、人ゝ置と見へたり。眼あるもの一たびにらむ時は、一字もゆるさず。六百番の哥合せ等の詞を見るに、つゞき言ひくだし、大事に論じたまふ事を、翁の誹諧もつぱら俊成卿の論にかはる事無し。又定家卿の宣ひける哥は、つゞけがらにてよくもあしくもなる、柿本のつらみといへると宣ひけるるいなり。

　いせ荻や鵜の進む夜の風の音　　馬佛

是は荻を萩とよみあやまり、進むを凉むとよみちがひたると見えたり。凉の進むとはたにつけて、つかはしたるなり。ケ様の見あやまりは、さもあるべし。しかし伊勢の荻にては、一句きこへがたし。なにと聞なし

て、撰集に入給ふぞや、いぶかし。伊勢の濱荻といふ事を、五文字にいはゞ、いせ荻とはいはれるものと、作者の發明なり。證哥あるにあらず。本哥あらばおかしからず。い勢荻と手爾葉をぬきて、いふも有るべし。いせはまの荻とはいひがたからん歟。

一、上卷に、

笠持て鵜籠を覗くよい月夜　彦根 朱廸

笠持てにてはなし、箸持てなり。頓て立いでんとしたゝめなどしながら、鵜籠をのぞくさまなり。下輩の情をよく云ひなし、よき誹諧なりと作者も自慢せしに、笠持にては作者も力おとし侍る。これらは見あやまりにして、强てあやまりにあらず。次にこゝにしるす。

おもしろふてやがてかなしき鵜舟哉　翁

この句五文字にて文字あまり、則授考に見えたり。その上晋子がかたより申越し侍るなどまで、かき侍るならば委敷あら野を見せたし。この句あら野にいでゝ、一天下に三歳の童子にても覺えたる句也。

一、下卷に、

七夕やいはむ事なし夜半過　伊賀 猿雖

此七夕やのやのもじ疑ひのやなり。事なしと切字二ツ入たり。たなばたやのやの字かつて入らぬ字也。入てたしかにならず。何事に七夕やとはうたがひ侍りけるぞ。下にては、いはむ事なしと決定して、疑ひ上に益なし。七夕も歟、七夕の歟はとかあるべき句也。かやうの文字加筆する事、撰者の役なり。愚が集の時、加賀の北枝が句に、

壁土の道せばめけり花ざかり

と聞へたり。かべ土のといふのゝ字聞へず。かべ土に道せばめけりと加筆せし事あり。

一、下卷に、

明月や坐に美しき顔もなし　翁

この句、明月の座にうつくしきと有。この發句にて一哥仙あり。予うつし置ぬ。明月の名の字を、明の字にかく事いかゞ。名月は八月十五日一夜也。明月は四季に通ず。明の字かく事あるや。かゝぬ法とはもつとも聞へ侍りぬ。

一、下卷に、

明月や泣顏見たしかぐや姫　撰者 風國

見たしのしの字、切ざるとおもふと見えたり。これ未來のしにて切る也。明月やと切、見たしと切て、二ツきれ字入たり。明月やと疑ひ、見たしとねがはれたる事、五文字うたがひ曾てゐきなし。明月やを明月に泣顏見たしと云ひくだせば、よくきこへ侍る。其上この句作例あり。亦猿蓑に、

猶見たし花に明行神の顏　翁

是翁の句也。かづらきの麓にて吟じ給ふ。はなに明行のかるみと、又明月にかくや姫の顏といふおもみ、吟味なきと見へたり。口おしき事なり。

一、下卷に

とられずば名もなかるらん紅葉鮒　奈良 玄梅

この句さて〳〵片腹いたき句なり。かやうの句の手爾葉を見て、哥よみ又連歌師など嘲る事也。名もなかるらんといふ事、大きなる相違なり。名もなかるべしといふ事を、いひあやまりて、なかるらんとはねたるなり。拙き作者・撰者の胸中符合せし事不便のいたり也。我黨はかやうの手爾葉を、說經てにはといふなり。上下万民おしなべてかんぜぬものこそなかりけり、といへるにすこしもかはらず。

一、下卷に

鮹壺を駒か林の火桶かな　泥足

これ眼ある人のすべき事にもあらず。また撰者の入るべき句にもあらず。かたじけなくも猿みのに、

鮹壺やはかなき夢を夏の月　翁

是師の名句といひ置たまへる事、一天下しらぬ人なし。これおのづから制の詞なり。下はいかやうにいひかへても、鮹壺この句の眼なり。玄梅があつめたるに、惟然が句に、

長閑なる秋とや鮹も壺の中

是師の句の下手なるもの也。予が集の時も、この句かきておくれり。大きにいやしみ、我黨は小便壺へかい捨る也。この外、いくらも侍れども論ずるにいとまなし。切字二ツ入ても、ならひにかなへる句もあり。

師の句にも、二ツ入給ふ事稀にてすくなし。今の世のはいかい師、さて〳〵拙き事なり。埋木といふもの、板木に出て有には委しく切字の事をしるす、見せたし。

一、第一初せみの句の題號は、淋しさや岩にしみこむ蟬の聲の句より出たると惟然坊が書たる事、うたがひ有まじ。然る所にこの句、蟬と題號のしかも奥に入たり、これ如何なる賞翫ぞや。題號とするほどの妙句を雜句とおなじ様に書入たる事、題號にせし賞翫かつてなし。う世の北などいへる集に、口へ出す珍らしからずと、新しみに奥に書入たる、以の外不賞翫たるべし。この集へ出さぬは、一重に賞翫たるべし。序に書たるうへは苦しかるまじ。

秋來ぬと桔梗刈かや賣にけり

この句、烁來ぬと五文字におかば、下のとまり手爾葉はあしくゝとまらず。

秋來ぬと目にはさやかに見えねども
風のおとにぞおどろかれぬる

六百番哥合に、

秋來ぬと風のけしきは見ゆれども
なを涼しさは音せざりけり　經家卿

この二首の哥にてしれり。秋來ぬといふは、下にてにはを、まはらする爲における五文字なり。この句、下にけりと治定せり。五文字無用の句なり。こゝろかくれたる所なければ、人ゝよろしからぬとばかり見なして、氣をとゞむる人なし。賣にけりといふとまりは、下へつゞかず。五文字へもどるこゝろなくては、烁來ぬとはおくへからず。この句、秋來ぬときゝやう刈かやをぞ賣にけるとあらば、とまり五文字の秋來ぬ相續すべし。撰者かやうの手爾葉はしり給はずして、撰者・撰集さて〳〵おぼつかなし。

一、おなじく、

秋風や誰にかみつく栗のいが　豐後 幽泉

この五文字のや疑ひなり。またたれにかみつく　と二ツうたがひ有。秋風やとをける程に、秋かぜの事なし。下は栗のいがの事にてはてたり。

秋のかぜ誰にかみつく栗のいが

とあらば、炼風に忍めるいがは、たれにかみつくときくべし。秋かぜやの字にて、跡に風せんなし。かつて聞へず。二ツに成なり。晋子が句に、

初雪や内に居そふな人は誰

この句、初雪やとうたがひて、跡の詞詮躰雪のうはさなり。此句秋風やといひて、跡は栗の事也。切字二ツあれども、成程一句連續してきこえ侍る句ならでは、二ツ三ツ入がたし。二字切・三字切はこの格也。此句、

はつ雪に内に居そふな人は誰

如レ此仕立る句なり。にの字重疊せる故に、初雪やとおきて、畢竟捨やの心なり。かやうの句の眞似をして、俗誹どもてには自慢に自由顔するといへども、てにをはといふもの、一字うごかしがたし。

おそろしや誰にかみつく栗のいが

斯あらば如何にも、やとして誰ともいはれんか。

一、同集に、

稲妻のかきまぜて行くやみ夜哉　去來

是先生の句也。やみ夜の事耳にたち侍る。月夜・月の夜等はいひふらしたることばなり。やみ夜とは、都鄙の詞にもきかぬ通俗也。かやうの事、本哥ありては作者の手柄なし。新しみに云出すを手柄なれば、定而證哥はあるまじ。やみとばかり哥にもよみ、通俗のことばにもいひならはせども、夜の字入ときは手爾葉なしではいはず。覺束なし。承度事九百九十九人つまりてつたなしと云て、一人面白しといはむは大きなる損ならん歟。

一、同集に、

片はらもいたむ簀の戸や冬の月　風國

簀の戸聞なれず、簀戸とはいふ也。ことばならぬゆへに、手爾葉を入れて連續させたると見えたり。これこまりなり。

命二ツ中に活たるさくらかな　翁

是命二ツと字あまりなり。予はせを菴にて借用の草枕に、たしかにのゝ字入てあり。のゝ字入て見れば、夜の明たるがごとし。しらざる時は是非なし。しかし風國が文章にのざらしの集などいへる事あれば、見ざる

ともいひがたし。

一、同集に、

　爰もはや馴て幾日ぞのみしらみ　惟然

さて〳〵大切なる切字を大分入て、手間をいれられたれども、彌聞へかね侍るなり。はやのやも、七ツのやの中にて切る也。いく日ぞのその字、三ツ入たり。その字かつて聞へず、のゝ字たるべし。

一、この外、合點しがたきてにはあれども、ながくなる故、其分に差措也。句のよしあしは人のすきぶすきにて、證據あらはしがたし。てに葉のことは一字も動かしがたし。習ひ事、格式、押へ字この事也。先生よく知給ふ事也。歯にきぬきせて口を閉給ふといふはこの事也。世間誹諧はいやしき様におもひ、かやうの拙き事より出て、いやしむもことはりなり。翁出て、たつとき事を少ししりたれども、門弟又ゝか様に崩し侍れば、予が悲しむ所は是なり。

一、加賀北枝集に云、序に翁三年忌に、木曾塚へ上りて、追善の句を書入たり。

　笠捨て塚をまはるや村しぐれ

といふ句なり。この句にて大方奥まで決定せり。句にかくれたる事なし。湖南の衆もとりたるか、集の序文に書入たり。中の七文字のやの字、切字うたがひなり。遙ゝ加州より師の追善にのぼりて、何のうたがひあるや。惣別、自句・他句といふ事を知らぬ作者也。この句は北枝が句にはあらず。塚を過るやと云へば他句なり、自句にはあらず。加賀の友などの句にて、北枝が事をおもひやりたる句なり。やと切字を入なれば、發句に成たりとおもふほどの作者、撰者する事あはれなり。とりて追善にしたる湖南の作者達、おなじめくらの集り也。師はこの追善、とり申さるゝ事にはあるまじ。又自句をやるとて、丈中の庵といふも聞あき侍る也。

一、暮秋と題號して、予が句に、

　大きなる家ほど秋の夕かな

といふ句、暮秋の巻頭に入たり。この句暮秋の句にあらず。古來秋の暮は暮秋にあらずと定まれり。たゞ秋の夕間暮といふ事のよし。すなはちあら野集にも、中

秋の部に入たり。春の暮といふに對して、秋の暮を暮秋と心得たる人、稀〻に有。秋の暮の哀より猶哀也。秋の暮といふ句二ツ、余は行秋といふ句也。あきの暮と書とも、暮秋のこゝろを兼たる句もあり。予が撰者、予が句に、

のび〳〵ておとろふ菊や秋の暮

暮秋をかねて九月の中に入たり。秌の暮はみな八月に入る也。この集も、てにはあやまりを論ぜばいとまなし。序文の自句にて大方はしれたり。

一、予が難問に云く、近年みだりがましき集ども出るといふは、かくのごとくの事なり。見極て申侍る過言にはあらず。高弟もよく聞わけ給へ、一句無理に聞へ侍るといへば是非なし。

一、ありそ・となみの二集、かなのかきちがひの事、上巻序文三枚め、杖の跡をしたはれけん筆の跡三ツながら、はのかな也。わにはあらず。この外上下巻ともに、少〻はの字の書違ひ、をの字の相違見え侍れども、執筆のあやまり、強て論ずるに及ばず。

一、猿簑下卷誹諧に云、

前 草村に蛙こわがるゆふ間ぐれ

蕗の芽とりに行燈ゆり消す　翁

この句、ゆりの字、前にもたれてむづかし。行燈さげ行としたし。

前 咳聲の隣はちかし縁づたひ

添へばそふほどこくめんな顔

この添の字、前句の噂なり。見れば見るほどゝしたし。ゆりの字は前にしたし。添字は一向に前句の噂也。深川集に出る、予が宅の誹諧に云、

今はやるひとへ羽織を着連立

奉行の鑓に誰もかくるゝ

一卷出來終て師の云、此たれの字、全くぜん句の事なり、是仕損じなりといへり。今此句に寄て見る時は、右兩句前句にむづかし。予閑に察して云く、第一時代の貴あり。亦は師名人たりといへども執着の病あり。師さへかくのごとし。門人猶以たるべし。前句に着し、題に着する事、人情の病なり。毎度この誹諧をよむ時、

したしき様に覺ゆ。退て吟味すれば、この二字前句にむづかし。師在世のとき、この事沙汰侍らずなり。先師よく知り給はんや。次でながらしるす。外へは彌さたなし。

一、文通に云く、風國歳旦脇の事、是愚集の句に似侍るよし、よく氣をつけらるゝ事なり。此句全く等類の罪あるまじ。

　藪もうごかぬ嵯峨の有明

この句、元は、嵯峨の在家の有明の月　とせしに、打越居所有によつて、この風情をいひかへたり。只さびしく閑成景曲一遍なり。在家の二字をぬきては、一句魂もなくなる故、是非なく、藪もうごかぬと仕かへ侍りぬ。この在家ところにてよませたるは、猿簑の、青天に有明の月のもつぱら力なり。この句、藪もうごかぬとはなをし侍れども、またさし合は、

　月夜のかぜの嵯峨に吹なり

など直しても、一句景曲のあたらしみ付くなり。いくらも直し侍るべし。

　藪の鳴やむ嵯峨のはつ春

この藪の鳴止むといふは、初春をよく見付たる藪にて、上七文字の中十分の誹諧あり。藪の鳴止むといふことばなくては、此代祝するとは趣向有まじ。さすれば、鳴止むといふ七字より出生の句なり。只形のよく似たるまでにて、魂格別の句也。似たるなど論ずる人あるとも、耳にかけべからず。但去年尾張歟伊勢かの歳旦引附の中に、藪のがさつくとしの暮とやら、寒さかなとやらいへる句ありとおぼへ侍る。是季は替り、ことばもいひかへたりといへども、元來の趣向、誹諧の氣付所おなじ處なれば、作例にいはむか。其上大綴に出たる引附の帳の中なれば、能見覺えたる人も有べし。されば愚集に、

　外郎買に荷はさきへやる

と云句せしに、退て見るに、いたらざる、繼尾集のはいかいに、

　荷は先へやる堂の近みち

と云句あり、是等類なり。随分吟味をとぐるといへど

も、眼とゞかずして後悔なり。荷は先へ遣ると云七文字にて、下は如何樣にも産みいださるゝ也。元この句の魂は、荷はさきへ遣るといふ事也。

　舟のたよりに荷は先へ遣る

とも言ひ、又は、

　丁稚を乘せて荷はさきへ遣る

などゝも、いくばくかいひかへあらんなれども、これ等類ひの罪のがれがたし。

一、先生、當歳旦五文字元日やの事、予かつてうれしからず。時代四五年も古かるべし。もはや元日やといふ五文字は、よく／＼新しみを走らせ侍らずば置がたからんか。殊の外にいひふるしたる五文字なり。三四年以前より、つぶやきおき侍る事なり。蓬萊と成とも、大福となりとも、かるく侍らば、ひとしほ嬉しかるべし。先生いかゞおもふぞや。きゝたし。

一、歳暮牛の尾の事。是もつて予はうれしからず。牛の尾殊の外面白し。千人ずきの句たるべし。されば貴句にはふそくと云んか。其すく所にしたゝるき所侍るゆへに、俗のよろこぶ事うたがひなし。退て案ずるに、季吟門弟に可仙とやらいふ者あり。大かたケ樣の味にては、その時代參たる作者なり。しかとはおほへねども、新古のさたいぶかし。兩句ともに貴句には不足といはんか、中々塵俗の友の及ぶ所にはあらず。

一、第三、あたゝかで字難じて曰、古來よりでと、てとは留りには嫌はず、折合にもかまはぬ掟なれば、第三てとまりには成まじとおもふ。この句に留りの句なり。但何のことばにても、第三とまる事あれば、畢竟はそれか。しかし發句にも、過去のしにも切たる發句有。予おもふに達人はせまじき事と思ふ。しらぬ人、このし文字にて切るとおもふべし。またはてに葉しりたる者、過去のし、切字とおもひて置たるなど嘲り侍るも無念なり。人々いひわけも成まじければ、虚詮せぬ事たるべしと、予は終にせず。但、過去のしにて切字なしの發句にするなり。よき句ならば、少もはゞかる事非ず、翁の句、

　父母のしきりに戀し雉子の聲

かやうの名句ならば憚る事あるまじ。貴句當歳旦の第三、での事、過去のし文字同前、せまじき事とおもひ、先達いかゞおもひ給ふぞ。でのじにて、て留りに成と思ひて仕たるなど、嘲らるゝもむねん歟。其うへこの一句、述懐の第三と聞なし侍る。如何おもひ給ふや。

一、予が當歳旦歳暮の事、二ッながら書捨なり。なかく引附帖に出す覺悟にあらず。せい暮なを書捨なり。歳旦も姿ふるめかし。蛤に弓初、取合たる所、俗のしらぬかるき處とおもひて、すがたのふるめかしき事もかまはず仕侍るなれども、是仕損じたるべし。達人などはせぬ事にて有べし。この句ならでは、發句と云物なきならばさもあるべし。澤山に云出さるゝ事なれば、早速捨べき事なり。師迁化の後は、究め中宗匠なければ、自己に決定せぬ句など、いたすものにはあるまじとおもひ侍る。向後よくたしなみ可レ申事なり。たとへ仕損じたりとも、自己に決定して、よきとおもひ侍らば一段たるべし。中にぶらりの句、人ゝある事なり。急度見究て、口外へ出さぬ事たるべし。心ひきく少の所に執心をかけて、一句になぐり置事、たしかに人ゝの上にあり。翁の言ひたまふ、あやうきところの仕損じといふたぐひにはあらず。是等はとかく下品の類の句なり。

一、去ゝ年愚集歳旦に、

干鮭にかえてやゑぞがきそ始

と云句せしに、大津尚白が句に、

干鮭に衣かへけりゑぞのひと

と云句せし、翁も笑ひ給ふたるよし。等類不吟味さたのかぎりと申侍る。この事以外相違なり。第一この句撰集に見へず。撰集にいでぬ句は等類の難なかるべしと、俊成卿ものたまひしよし。そのうへ愚句は、ゑぞが衣にかゝる事面白しとて、趣向に及びおもひよりたるにはあらず。尚白、第一衣にかへる所に眼をつけ、よろこびたる事あきらかなり。その時代も大きにふるし。この尚白が句の外にも許多か有べし。皆、衣にかえる事を悦びし句成るべし。予が趣向、かつてこの事悦び侍らず。只干鮭面白侍るゆへに歳旦に取合せ

たるなり。きそはじめは假令、歲旦故に繕ひ合せた事也。元朝ぬく〳〵ときる顏を見れば、冬中日本國中、賤山がつまでくらひあましたる干鮭、この五文字にて冬中の事よく聞へ侍るを、うれしくて取合たるなり。是まつたく等類丼ふるしとは、ふつ〳〵申がたし。この句難じていはゞ、きそはじめ、うまくてあだこと也と云たし。外の詞にて歲旦の季をもたせ侍らば、よく侍るべし。

から鮭のゐぞは古手で御慶哉

など結びたらば、よく侍らんか。衣にかえてきそはじめと、俗の悅ぶ所に大きにしたゝるき所あり、等類の難はかつてなし。右申ごく、句は產み所をきくを宗匠とは申なり。尙白が產處と愚が產所は、大きに相違なる所より出侍れば等類にてはなし。能因・賴政の白川の哥にてよくしれり。鎌倉のかつをは兼好より申ふるし、月の下に門をたゝく事は賈嶋より云あまし侍れども、師、あたら敷いひ出し侍れば、用ひやうにて、いか樣にもいはるゝもの也。おもき・かるきといふ事をしらぬ作者なれば、衣にかえると言、面白みに喰ひつきて、からさけのかるきあゆみをしらぬ故に、等類の沙汰を申なり。惣別おもき・輕きといふ事、趣向又は詞つゞき容易なるを、かるきとおぼへ侍る。うへをぬぐひたるやう成る句、このごろ許多か侍る。夫はうつけたるといふものにて、かるきといふものにはなし。面白く俗のよろこぶ所のしみつきたるごき事を、おもきとは云也。かるきといふは、詞にものべがたき所にゐもいはれぬ面白き所あるを、かるしとは言ふなり。輕きとおもしろみのなきは、うつけたるといふ物也。この事翁に尋てよく究め置侍るなり。又予が句、木曾山中にて、

山吹も巴も出る田うへかな

是は檀林時代の句によく似たるといへども、大きに相違なり。檀林の時は、山吹・巴に直に田をうへさせるはたらきとは申なり。此句、山ぶき・ともへはかりものにて、只田うへの上をよくいたんためばかりに、かり用ひ侍る也。嫂も嫁も里には不レ殘、皆出たると見る樣

に云ん爲の噂也。時代をよくしらぬ作者どもの論ずる事、かならず〳〵耳に入給ふ事なかれ。

一、次でながら難ず。亡師五七日追善、木曾塚にて、嵐雪・桃隣など集りたるれき〳〵の百員の巻に、

青き中よりちぎる南蠻　乙州
松の葉のちら〳〵落る月の影　朴吹
たしかに鹿の鳴く聲をきく　丹野
のびちゞみ我身を樂に取廻し　路通
付ちらかして買はぬ小道具　臥馬（高）
傘を提て戻りし雲の峯　土龍

乙州が青き南蠻といへるは何ぞや。南蠻といへる物知らず。黍の事か、唐がらしの事か、平話にはいふとはいへども、文章につらぬる時、一句南蠻と斗いへるものなし。惣躰にて、唐がらしとなるとも、または玉黍と成とも、聞へ侍る句作ならば、南蠻とも下略可ﾚ爲ﾚ尤。

青き中よりからき南蠻

などあらば、唐がらしの句ともいふべし。この句秋成や、夏なるや慥ならず。青唐がらしならば夏たるべし。黍にても青きとせば夏成べし。青麥になるを春に立つうへは、是慥なる夏なり。常盤木の落葉夏也。（松の葉の）松の葉ちら〳〵落る月の影、右二句ともに作者、一座ともに秋と覺へたると見えたり。二句ともに夏也。三句め鹿の句有、是たゞ一句なり。番椒の句、秋にしても、中の月の句夏なり。また三句置て、雲の峯有。かやうの事、師迁化し給ふと、はや五七三十五日の中に、人口にかゝる事を仕出し、其まゝにても捨侍るか、あまつさへ梓にちりばめ、一天下の人の眼にさらしたる事、れき〳〵の宗匠達の寄合、歯かねをならす、膳所の衆などさて〳〵頼もしからず。先生は其巻半の時、出座し給ふと聞く。内へ這入ればぞつとするとの御一句、田舍までもかくれなし。かやうの事集毎にいくらも云敷もなし、見落し・指合などは少しもくるしからず。不玉が継尾集の誹諧、穂の上の巻にも春の雪二ツ出たり、又市庵、落柿舍亂吟にも、ほつとして來るといふ付句に、差出してといふ而の字又あり。かやうの事

は、他門の人にても、よき人は見ゆるして論ぜず。右追善の卷の指合は拙きと云ものにて、大き成恥辱なり。

一、予誹諧を見る事、かたのごとく得ものなり。あら野・猿蓑をにらみ、師の魂を見屆け侍るといへるも、是得物なる故なり。當時末々の集におゐてをや。句の善惡の事は、師の眼前におゐて論ぜざれば證據なし。多く數寄不數寄に落る事、口おしき次第也。我數寄侍らぬ句を褒美する人ならでは、眞の誹諧とはいひがたからん。

一、夫、手爾葉といふものを、人々心やすくおもひなして、いたづらにをく事、元來つたなき故也。手爾葉は我朝大和のことばとなすべき爲にかくは訓じ侍る也。されば大和の地におゐて、草木土石風水の響までも、皆〳〵哥也。まして人間の言葉においてをや。花に鳴鶯、水にすむ蛙も哥をよむとは、古今集の序文なり。神代の哥は文字の數も定まらずとはいへり。今の世のは三十一字のかずをあわせねばうたとはいはず。

一、晝夜の雑話并呼吸の數、皆是哥也。哥を立る國風なれば、和字はいふにおよばず、漢字に訓といふものをつけてよめるも、皆これ大和哥のことばなり。されば箸・橋・端の三ツをよくわかち侍るたり。これはアイウエヲの五ツの響より出て、一切このひゞきにもるゝ事はなし。唐土聖人の代に、禮と樂をもつて國を治め給ふ。禮はいふに及ばず、樂といへるもの、政の爲には益なきに似たりと云へども、つく〴〵おもひみるに、樂は五音相續の調子をもつて打ならし侍る。唱哥は詩なり、詩は風雅なり。春はろう〳〵と霞める中に鶯のはつ音を催し、東風立初るより、梅のにほひをおくる事をのべて、民のこゝろを和らげる也。我朝の樂もまたおなじ。その唱哥みな哥なり。詩には上聲・去聲・入聲のおもき・輕き事を分けたり。日本の詩は唐土の樂に諷はれぬといへるも、慥に上聲・去聲のおもき・かるき事をしらぬ故なり。大和哥は手爾葉なり、てにはは五音の響也。芭蕉をはせをと訓じたるは、是ウトヲト通用する響なり。てにはのよき句は、おのづから五音の響

く調子よくひゞき、また手爾葉のあしき句は、五音の響調ひ侍らぬ故に、民の人に感應する事なし。されば糸竹管弦の吹皷なくても、この手爾葉の響をもつて打はやし侍る故に、めにも見へぬ鬼を泣しめ、武士の心をやはらげる事うたがひなし。かゝる大事のてにはを、あだにこゝろへて容易にをく事、大和哥本意を失ひ侍れば、民の心やはらぐ事、盡未來に至ると云とも有べからず。たとへばてにはの悪しきといふは、餓たる時飯をこのむ心あり、我既に餓たり、飯をくふまじきといふがごし。今の世のてには違ひは皆是也。てにはをもつて打ならすといふは、たとへば師の句に、

　うき我を淋しがらせよ閑居鳥

此句、淋しがらする諫皷鳥とせば、何をもつてか民のこゝろの和らぐ事あらんや。これ常なり。淋しがらせよと、てにはをもつて打ならし、吹ならす故に五音相續して、武士の心も和らぎ、めに見えぬ鬼神を泣しめ侍るなり。樂器の吹皷しをやとひ侍るには及ずして、一句々々に、樂はおのづから調ひ侍る也。此ころ手爾葉に五音の響有て、唐土の樂にかはらず、民を治る事を發明する也。別紙に記す。

五老井主人
森　許六　草稿

元祿十一戊寅春三月　日

落柿舍主人
去來先生
梧右下

誹諧問答抄卷之三　終

誹諧問答靑根が峯　巻之四

浩ゝ舍芳麿校定

森　許六

自得發明辨

一、師の云、發句案ずる事、諸門弟題號の中より案じいだす、是なきもの也。余所より尋來れば、さて〳〵澤山成事なりと云り。予が云、我、あら野・猿蓑にて此事を見出したり。予が案じ樣、たとへば題を箱に入て、其箱の上にあがりて、箱をふまへ立あがつて、乾坤を尋るといへり。師の云是也。さればこそ、

　寒菊の隣もありやいけ大根

といふ句は出る也といへり。予が發明に云、題號の中より尋て新敷事なきはしれたる也。万一のこりたるもの、たま〳〵一ツありとも、隣家の人同日に同じ題を案る時、同じ曲輪を案じ侍れば、ひしと其残りたる物にさがしあてべし。道筋同じ所なれば、尋來る事疑ひなし。まして遠國遠里の人、我がしらぬ中をいくばくか仕出し侍らん。曲輪を飛び出、案じたらんには、子は親の案じ處と違ひ、親は子の作意と各別成る物也。師の云く、發句は畢竟取合せ物と思ひ侍るべし。二ツ取合てよし。とりあはすを上手と云也といへり。難有教也。これ程きよ教あるに、とり合する人稀也。師は上手にて、其儘とりはやし給ふ。予はとりはやす詞はよくしりたり。案じ侍る時は、如何にもよくとりはやし侍る也。是取はやす詞をしりたる故也。平句猶しか也。炭俵・別座敷の誹諧、專ら新しみといふは、此取はやす詞の事也。此詞を知らぬ人は、遺經の俳諧にて通じがたからん。予此頃梅が香の取合に、淺黄椀とり合もの也と案じ出して、中の七文字色ゝに置どもすはらず。

　梅が香や精進なますにあさぎわん　是にてもなし

　梅が香やすへ並べたる淺黄椀　是にてもなし

　梅が香や何所ともなしに淺黄椀　これにてもなし

など色ゝにおいて見れども、道具、取合物よくて、發句にならざるは、是中へ入べき言葉、慥に天地の間にあ

る故也。かれこれと尋る中に、

　梅が香や客の鼻には淺黄椀

とすへて、此春の梅の句となせり。

一、發句は取り合ものといひけるは、たとへば日月の光りに、水晶をもつて影を移す時は、天火天水を得るごとし。發句せんと思ふとも、案じずしては出べからず。日月斗を案じたるとも、天火天水を得る事有べからず。外より水晶を求めて、よくとりはやす故に、天水を得たるがごとし。水晶ありとも、よくとりはやす事をしらずば、發句に成就しがたし。

　木がくれて茶摘みも聞やほとゝぎす

是時鳥に茶つみ、季と季とのとり合といへども、木がくれてと、とりはやし給ふ故に名句となれり。

一、又云、誹諧は題の噂と覺へたるよし。たとへば花の發句せんと思ひしに、花とばかりは十七文字に述がたし。故に一句花と言ふ噂を言へる事也。花に風の吹て散ると成ともいはねば一句にならず。一度は面白けれど、二度、風の吹て花の散とはおかしからず。されば入相の鐘に花のちるともいひ、風の吹かぬに散るなどゝ、いろ〳〵噂をいひかへて、今の不易・流行の所へ案じ付たる也。是噂なる事明らか也。よき噂とり出したるはよい句也。噂の惡しきは句も又惡しゝ。

一、亦云、噂といふは、予が句にいつぞや、洛の和及が弟子何某といへるもの來て、予と俳諧せん事をのぞむ。其時、

　都人の扇にかける網代かな

といふ句せしなり。都人の挨拶に、扇はよき噂と思ひて、冬の頃なれども取り合侍る也。此句翁に語り侍りしに、能き挨拶の仕樣也とてかんじ給ふ也。此外いくらも有べけれども、さし當りておもひ出したる故にしるし侍る也。

一、又云、未來の句を案ずるといふは、五年も七年も先の句を案ずる也。未練の者は斗方もなき事の樣に思ひ侍れども、眼前にしれたる事也。たとへば花と云題にて發句所望せし時、案じて一句出る。又一句望む時、最前案じたる所は最早述がたければ、それよりおくを

尋る。是未來の句眼前にしれたり。

一、亦云、誹諧は物ずきともいふべし。上手の句はもの好よく、下手の句は物數寄あしゝ。てには・押へ字等は、上手の句も下手の句も、一字もゆるされざれば、物數寄の能きを上手といはん。

一、又云、誹諧はなきと思へばなきもの也。あれどもあんじあてぬとおもひて案じ侍れば、成程有物也。たとへば歳旦は事せまくて、なき物と思ふ故に能い句稀也。歳暮は廣き物なれば、有べしと思ふ故に折ふし能き句出るがごとし。是明かなる事也。

一、五文字の居らざる句、人持來りて五文字を賴むといふ事、李由が句に、

比良より北は雪げしき

といふ句に、久しく五文字なし。予翁に尋侍る時、早速鱈舟やといふ五文字は居へ給へり。此句門人たる人しらぬはなし。この時師の云、凡兆が句に

雪つむうへのよるの雨

といふ句に五文字賴む。情を費して、案じ出して、下

京やといふ五文字をすへたりと語り給ふ。同じ五文字を居へ給ふに、容易に出ると出ざるとは、いかなる子細成べしと思ひしに、愚退て發明するに、鱈舟といふ五文字は取合もの也。下京といふ五文字には、例の翁の血脉を入れられたり。二ツの五文字、同じ事と思ふ人は、五文字置く事は成るまじき也。又李由ある時、

鍋ぶたひとつ冬ごもり

といふ句に五文字を賴れたり。是容易に出る五文字にあらず。これ魂魄を入る五文字なれば、案じ煩ふて、

大義して鍋ぶたひとつ冬籠り

といふ事をすへたり。又ある時朱廸が句に、

あしかる町のもゝのはな

といふ句に五文字を賴む。この桃曾て珍敷事なし。人々思ひよる所なれば、容易に五文字は置がたし。尤新しみなし。發句に成がたき故しばらく案じて、實をねらふといふ五文字を居へて、則韻塞(ヰンフタギ)に入たり。又奚魚といふもの來て、

田の草におはれ〳〵て

といふ事出たり。下五文字なし、賴むと云。予とりあへず、富士詣といふ坐語を居へたり。亦汶村が句に、

株干藁の日のよはり

といふ五文字をのぞむ。是もとりあへず、蟬の音やといふ五文字を居へたり。愚案するに、奚魚・汶村が句には、おのづから句中に血脈の筋あり。李由・朱廸が句には、血脈の筋なき故に容易におかれずして、發句に成がたし。

一古事・古實をむすぶ事、猿みのに諏訪の祭りの穗屋作る事にて、翁の物がたり有。予が集の時、李由が云、御玄猪の御祝に、公卿百官へ給ふ餅の上づゝみに、銀杏の葉に名字を書付、水引にはさみ出る事古實也。此事句に作らんといふに、予が云、是よき古實也。遠境の人々にしらしめたるがよし。しかれども句作り惡敷ば古手に落ん。專ら銀杏の句にして入れらるべし。御玄猪の句に仕立たらば、大にふるかるべしと云り。古實・古事等は、予穗屋の時、句作りを發明して置きぬ。

雪散るや穗屋の薄の刈殘し　翁

御命講や油のやうな酒五升　同

御玄猪も過て銀杏の落葉かな　李由

春たつや歯朶に止る神矢根　許六

山科や五荷三束に菊の花　同

皆、穗屋の格式より作り出す句也。

一、取合せのあやうきといふは、猿蓑に、

干鮭も空也の瘦も寒の內　翁

角大師井手の蛙の干乾哉　許六

是空也の瘦の取合にて作る句也。

一、昔も近年も、前書する事、皆發句の講譯して前書と云物に非ず。前書して講譯の上にて聞へる句などは、よき句にはあらず。前書といふは、其句の光りを添る事也。一年江戶にて晉子が句兄弟をあめるを、予に語て云く、越人がけしの句は少いひたらず、慥にけしにしては取がたし。其けしの句を返して、

散る時は風もたのまずけしの花

とせしと語りけるに、予云、さればこの越人がけ

しの句にて翁の名人を發明すといへば、晉子が云、如何。答て云、此句けしにては云足らず、故に僧に別るゝと云前書して餞別の句になし、猿みのに入給ふと語れば、晉子嬉しがりて、此事書入べしとて、前書の事を書り。越人がけしは、慥に師の前書にて、一句光りを增したり。路通が月の山の句合には、只けしの句にして前書なし。予此時路通が未練成る事をしれり。晉子はけしの句にならざる事知りて句を直し、翁は前書を添給ふ。路通只けしの句と思ひ、そのまゝ集に入たり。此事先生いかゞ思召すや。きゝたし。又云、予が集の時、李由が云、殘暑の句なし。入たしといひて、

　下帶に殘るあつさや

といふ句をいひ出せり。下の五文字なしとて、予に相談して色〻置けども、喰合ふ物なし。予が云、此句五文字あれども、一句重く成ッてむつかしからん。只このまゝにて入れられよといひて、

　下帶のあたりに殘るあつさかな

と一句にのべたり。此句斗にてはいひ足らず、是越人がけしの場所にて、前書入る句也。則贈二清貧僧一といふ題をつけたる、是この格なり。

一、いつぞや、こん屋の窓の時雨と云ふ事をいひ出して、手染の窓と作、例の論有。略レ之。其後二年ばかり有て、正秀三ッ物第三に、なの花に紺屋の窓といふ事を仕たり。此男も紺屋の窓は見付たりと、おもひて過ぎぬ。予閑にはつめいするに、發句道具平・句道具・第三道具有り。正秀が眼慥なり。予紺屋のまどに血脈ある事はしれども、發句の道具と見あやまりたるところあり。正秀、なのはなをむすびて第三とす。これ道具によし。第三なり。發句の器なし。こん屋のまどになのはなよし。また暮かゝる時雨もよし。はつ雪もよし。かげろふに、とかげ・蛇もよし。さみだれに、なめくじり・蝸牛もよし。かやうに一風ッゝ味をもつてうごくものは、これ平句の道具なり。一切動かぬものなり。慥に決定し置きぬ。

一、ひとゝせ俳諧にあそびしとき、瓜の泥によごれたるはおかしとて、六句めに、

泥によごるゝ瓜の網の目

といふ句せし其次の年、翁の句に、

朝露によごれて涼し瓜の泥

といふ句出たり。初て發句の道具たる事を知れり。あたら瓜の泥を平句にして、師に先を越されたる無念なり。これ眼の明かならざる故也。此泥にて慥に場所を知りぬ。

一、歳旦三ツ物の事。

予此三ツ物においては、よく工夫して、年〻引附に出し侍れども、誰一人秀たるといふ人もなし。師の手傳ひし給ひたる三ツ物を見て、慥に決定し、年〻花やかに仕立出せども、誰も見るものなければ、其分にて反古とは成りぬ。口おしき事なり。此三ツ物俳諧を、常式のはいかいと思ひ給はゞ、大きにあやまち也。予三ツ物をする事、天晴天下に肩を双ぶべきもの有るべしともおもはず。たれ〳〵がするも同じ事と思ひ給ふ人は、三ツ物仕樣相傳したる人一人もなし。一人もなしとはいはれまじなど言ふ人もあらん。しかれども一句か二句は、たま〳〵あれども、全篇血脈をする人は稀也。脇・第三、猶以大事なり。昔初春の季を入たるまでにて、常の誹諧に少しもかはらず。あまつさへ初春の發句に、初春の第三するやからも、稀〻見えたり。脇・第三、又一風あり。常式の句の体にて、見らるゝものにあらず。

一、當時歳旦の發句と稱して、歳旦にてなき句大分有。師の云、歳旦といふは、元日明渡りたる時の事也。大方歳旦の句にてはなしと云り。正月三日口を閉、題二四日一と前書して、

大津繪の筆のはじめや何佛

と云句出たり。此前書にて後代、歳旦の格式にせよと云心有て、書ると慥に決定し侍りぬ。引附帖の内に、七種・子日、或は元日・二日・三日など云題を出して句あり。是大きなるあやまり也。師說なき故也。子細は元日明たる時の事といふにてしれたり。遠國などの歳旦、入るゝもはゞかるべき事也。

一、脇の仕樣の事。

座頭の袖にかゝる門松
俵かさねて中もどりする
女子六尺長閑なりけり
二日の朝はとし玉の酒

などいへる脇は、師再生すといふとも、かゝる事は思ひ侍れ共、一人分て褒美する人さへなし。俵かさぬると云季ははなひ草にも見えず、是正月元日・二日ならでは言はぬ詞なり。三日ははやおかしからず。きそ始といふ發句の脇に、俵重て中戻りするといふ事、天下三べんかさねたりとも、此脇より外には有まじとおもふ也。俵重るおかしき季とて、發句の道具にてはなし。脇・第三の道具也。

三月は關の足輕置きかへて

此句出替りと五文字あらばくさるべし。

あたゝかに成る日は鍬のさし合て
百合若のきびすのあとも雪消えて
芋種の角組む頃のおぼろ月

など、もつぱらあたらしみをはしらせたり。今としの

第三に、

柳の風に梅にほふなり
かずの子の水暖にぬるみ來て

といふ第三は、三ツ物の第三故に出したり。脇に初春の詞なし。かずの子、初春の物なれども、かずのこの水のぬるむは三月也。わるくさく成てやゝ春ふかく、意味を彌生にかよはせたり。其上句作り、かずの子を漬たる水のぬるみ來て　などするは、世間十人が十人なり。漬るといふ字をぬきて、かずの子の水あたゝかにぬるみ來て　といへるにて、幽玄に成り侍れども、世間この味をしらず。同じ事と思ひ侍るこそ口おしけれ。しかし見る人あれば、其人はのがす事にあらず、自由する也。

一、追善・移徙等、餞別など仕様、かれこれ七ツ八ツも此類あるべし。是亡師の詞あらまし聞置る也。幽玄第一たけ高き句すべしと。されば不易といふは此所の事也。まづ追善の事、いろ／＼あるべし。親・兄弟・したしき者、或は師・友・藝の名人、僧・知識・隱士等かぞへ

かだし。翁卒し給ふ時、一天下知るもしらぬ追善したり。天下無双の誹諧名人の追善に、常式下手なる事斗いひて靈魂の手向となるべしや。草葉の陰にて、にが〳〵敷顔をして居られ侍らん。加様の處まで氣を付る作者もなし。氣がついても動かず、是非もなき次第也。予師迁化の時、追悼に、たゞかるみを詮にして、

一度の醫者よろこぶや歸り花

とせし所に晋子、醫者物とはむ　と加筆せし也。晋子は宇治の橋守ものとはぬの力と見へたり。予が句、醫者悦びと云は、通俗の言葉也。ようなる顔を見するとも云り。師の追善に悦びなどいへる事は、不案あるべき事也。述懐の哥に、せむぶも嬉しわすれがたみに、といへるを、後鳥羽院御感有しといふにちからあり。

一、第二年の追善、深川はせを菴にて述べたり。予自畫の像を書せたる故に、其前書をして、

鬢の霜無言の時の姿かな

とせし也。無言のときといふは西行の事也。姥・嗅又は名もなき者の追善のごく、焼香すれば袖がぬるゝの、涙が氷るの、霜に沓を繼かいるの、生前旗をすかれたる檜の笠斗、張笠が破れたるの、芭蕉が枯たるの、といへる事のみにて、一天下果たり。誰か一人秀たる句も見えず、さて〳〵はかなき志にて哀也。

なき人の裾をつかめば納豆かな　嵐雪

師の追善に、かやうのたわけを盡す嵐雪が誹諧も、世におこなわれて口すぎをする世上、面白からぬ事也。晋子中〳〵か様の處をはづさぬ、一器量のやつめ也。

一、第三年忌在所にていとなむ。我友共とつぶやく。ことし師の三年忌の追善、世上の誹諧大かた見えたり。塚に苔むし、松かぜ長し、そとばの文字が消たる、などいふ事にて果べし。追善の發句仕様有べし。專追善をやめて、懷舊の句の上にて仕て取るべし。三年つゞけて同じ追善にてもあるまじ。是下手の心なり。師のこゝろに叶ひ悦び給ふまじ。必〳〵あやまるまじといひて、

月雪に淋しがられし紙子かな

といふ句して、予が集年忌の俳諧の巻頭には仕たり。加賀の北枝が喪の名残を見るに、木曽塚へ集る句共いでたり。果して松が長し、塚が苔むし、そとばの文字が見えかねる、など云句にて終れり。我黨はひそかに言ひあてたりとて笑ひたり。

一、予當流入門の頃、五月雨の句すべしとて、

　湖の水もまさるや五月雨

といふ句したり。つく／＼と思ふに、此句餘り直にして味すくなしとて、案じかへてよからぬ句にしたり。其後あら野出たり、先生の句に、

　湖の水まさりけり五月雨

といふ句見侍りて、予が心、夜の明たる心地して、初て誹かいの心んを得たり。是先生の恩なりと覺て、今に此事を忘れず。

一、不易發句の事、翁の句に、

　青柳の泥にしたるゝ汐干かな

此句景曲第一なり。しかれども新古の事、いぶかしくて數篇吟じ返し、大きに驚き、初て此風の血脈を得たり。これ正風躰たるべし。

　津の國の難波の春は夢なれや　西行
　あしの枯葉に風わたるなり

　風そよぐならの小川の夕暮は　家隆
　御禊ぞ夏のしるしなりけれ（マヽ）

青柳の泥にしたるゝ汐干哉の句、此次に書入ても、少もおとらぬ句作り幷に細み、魂魄の入様・趣向のとり廻し、毛頭かはる事なし。此句の後、愚句、

　峯入の笠とられたる野分哉

　かげろふをたよりに上る雲雀哉

もつぱら青柳の汐干より發明せし也。

一、ひとゝせ江戸にて、何某が歳旦開きとて、翁をまねきたる事あり。予が宅に四五日逗留の後にて侍る。その日雪ふりて、暮がた參られたり。其俳諧に、

　人聲の沖にはなにを呼やらん　桃隣
　　鼠は舟をきしる曉　翁

予その後、芭蕉菴へ參とむらひける時、此句かたりいだし給ふに、予が云、さて／＼此曉の一字、ありが

き事、あだに聞んは無念のしだいなり。動かざる事、大山のごとしといへば、師、起あがりて云、此曉の一字聞とゞけ侍りて愚老が滿足かぎりなし。此句はじめは、

　須磨の鼠の舟きしる音

と案じける時、前句に聲一字ありて音の字ならず、よつて作りかへたり。すまの鼠とまでは氣をまはし侍れども、一句連續せざると云り。予が云、是すまの鼠より遙にまされり。勿論すまの鼠も新しく覺え侍れ共、舟きしる音と云、下の七文字おくれたり。上の七文字首尾調はず。曉の一字の强き事、たとへ侍るものなしといへば、師も嬉しくおもわれなん、是程に聞てくれる人なし。たゞ予口より云ひ出せば、肝をつぶしたる顏のみにて、善惡の差別もなく、鮒の泥に醉ふたるごとし。其夜この句したる時、一座の者どもに、我遲參の罪ありといへども、この句にて腹をゐせよと、自慢せしと宣ひ侍る。

一、等類をのがれる事、師說、

都をば霞とともにいでしかど
秋風ぞふくしら川の關　　能因

都をば青葉とともに出しかど
紅葉散りしくしら川の關　　頼政

此二首心詞少しもかわらねども、定家卿の判に云、頼政が哥は、能因が哥を本歌として、心詞少しもかはらねども、是等類にあらず。頼政が哥は色を詠みたる哥也。これ產所の各別なる事を、先達能く聞分給ひて、其わかちをたて給ふは難レ有き判也。加樣の先達ありてこそ、俳諧も面白く侍れ。或とき予が句に、

　朝良のうらを見せけり風の秋

といふ句せしが、おりふし丈艸へかたりければ、此句翁のおもて見せけり　の葛の句の作例たるべしといはれけり。予つくづくとおもふに、此句少しもくるしからず。翁の句は葛のうらと云古哥の詞をかへし、はじめて葛のおもてとはいはれたり。是おのづから制也。葛のうらと云ふ事、終に哥誹諧制はなし。予が句は葛のうらに對して、新しみをいひたる句也。古人葛より

外はうらを見ぬといひけれども、葛より梟の先に朝顔の有ける事をしらずと、嘲りたる句也。曾て翁の句に類する事なし。能因・頼政の哥は、意詞少もかわらねども、等類に落ずといへり。

淸瀧や波に塵なき夏の月　翁

白菊や目にたゝて見る塵もなし　同

右兩句塵なきといふ事、後にむづかしとて、波に散込む青松葉　とは案じかへられたりと聞ゆ。退て案じ見るに、此塵、志の趣ける所同じさまなり。故にあんじかへられたるとは見えたり。西行上人も、淸瀧川の水のしら波、とはつよくよみたまふ也。波に散込む青松葉と、涼しく師の言ひ給ふつよみ、西行の哥におとれりとは見えず。

あら波や佐渡に横たふ天の川

時鳥こゑ横たふやみづの上

兩句の横たふも、塵なきに似たりといへども、愚あんずるに、あら海の横たふは、佐渡・越後さしむかいたる事をいわん噂也。橋をかけべしなどの俗語も、思ひ出られ侍る。ほとゝぎすの聲横たふは、もつぱら水光接レ天白露横レ江のちから也。是似たる詞にて、出所大きに相違せり。此ほとゝぎすの句出ける時、予もあづまの方に居合せて、その折の文通に、

ほとゝぎす聲横たふや水の上

一聲の江に横たふやほとゝぎす

右兩句沾德が判に寄て、水の上の句にきはめ侍ると言ひて、色紙送られたり。今に予が所持するもの也。予翁へその返事に、(沾)德といふ者一生眞んの俳諧なし。かれが判覺束なし。予は只江に横たふの方まされりと返事せし也。案ずるに、水の上の句幽玄には聞へ侍れども、水の上はいらぬ詞なり。聲よこたふや水の上　と一言も殘さずいひつめて、しかも水の上といろへたる事を、沾德はよろこべり。これ俗のよろこぶ所なり。江に横たふや　といふ處に、いろ〳〵のこゝろをふくめたる事をしらず。中〳〵俗の耳には落がたし。師名人たるによつて一人の意に決し給はず、人にいはせて論をきわめ給ふ人也。予などにも言はせて、極め

給ふ、毎〻これ有。其外諸門人いづれも右の通也。他門の人にも言はせて、句をきはめ給ふ事度〻あり。しかれども外の句は判者の沙汰なし。此句にかぎりて沾徳が判を乞ふと、旁〻ひろめ給ふ。是子細のなき事にはあるまじ。沾徳が判に極めたるといふ事を、後代まではいむ爲とかくはしるし給ふと見へたり。兩句、甲乙はいづれともわきがたかりけれども、すき・不數寄を論ずる時は、予は江に横たふのかた勝れたりと覺え侍る。いひつめずして、心のあらはれ侍る事をこめる故也。此事奥にくわしく記す。哥にも、

日も暮ぬ人も歸りぬ山ざとは
峯のあらしの音ばかりして　基俊卿

日暮るればあふ人もなし正木散る
峯のあらしの音ばかりして　俊賴卿

此兩首はいくばくの相違もなし。まして下句は同じ詞也。人〻俊賴の哥をまされりといふとも、定家卿の判に云く、俊賴の哥は、正木散るといふ所、いろへにして俗のよろこぶ處也。是いらぬ詞也。新古と時代の費と宣ひ、基俊の哥、まされりとはきわむるといへり。兩句の上を見るに、水の上といへるとは、正木ちると言ふにかよひ侍るとおもへば、江によこたふのかたをすき侍る也。

一、右兩句ほとゝぎすの事、予察し見るに、江によこたふの方、先へ句出たるべし。江によこたふやほとゝぎす　と吟じ見るに、ほとゝぎすといふ下の五文字にて、つかへてはねかへりたる様に覺ゆる。是にて案じかえられたるなるべし。時にほとゝぎす江に横たふやと定めて、さて五文字七文字の間に聲といふ事なき故に、聲よこたふや　とは直りたるとは見えたり。水の上は後のいろへ結び也。兩句甲乙、自己にも分がたき故に、人〻に判を乞れたる成るべし。句のよきは、江に横たふの方にすぐれたれども、下の五文字の所にてよろしからぬ故に、水の上　のかたへきはめ給ふと見えたり。惣別てにはならず。ほとゝぎすの、杜若のと云詞を下の五文字に置く時は、上五文字・中七文字の間にて、手爾葉のまはらぬ時は、はねかへりたる様

に成るもの也。一こゑの江によこたふや子規と吟じ見るに、一句幽玄になるべからず。是一聲の江に横たふや　と云所までに手爾葉まはらぬ故に、下の子規きよろりとしたる樣也。又、

野を横に馬引むけよ郭公

木隱れて茶摘もきくや子規

中の七文字にておもふ樣にまはる故に、下のほとゝぎす連續したるなり。この論、予が發明也。よく〳〵御吟味給ふべし。微細なる所、よく聞侍る事、御褒美に預りたし。隨分思召のまゝに御句なさるべし。予かたのごとく聞侍るべき也。

一、世上に新しきものと、今めかしき物と取違へ侍る。あたらしきものは、成程昔より有來て、人々の見殘しとり殘したる物也。晋子が衣がへに、

越後屋にきぬさく音や衣更

といふ句あり。もちろん、句作り等はよくとりはやしたりといへども、此句晋子などせぬ句也。かやうの今めかしきものを取出し、發句にする事、以の外のいたり也。興に乘じていひ捨の卷などにはさも有べし。晋子は江戸の宗匠、蕉門の高弟なり。末〳〵の弟子この句を見て、あたらしきといふはケ樣の事とあやまり、證句にせん事うたがひ有べからず。當歳旦にも、二朱判五わりましなどいふ事見えたり、此まとひ也。ひら句は興に乘じて予もある時、

海手より夜はのんのりと明かゝり

越後屋見せる松坂の馬士

といふ句也。江戸の越後屋、京の越後屋、おかしからず。松坂の越後屋とこそ、はいかいとは申もの也。

初雪やいつ大佛の柱だて

翁、これ大佛殿の建立は今めかしきやうなれども、斯ふるき事万里の相違あり。はつ雪に扨々よきとりあわせもの、初の字のつよみ、名人のこつずいなり。

一、古哥の詞をかりて句にしたる事あり。しかれどもかつて其哥をしたごゝろにふまへて、仕たるにはあらず。自然に此詞あるゆへ、きり入たる斗なり。下心ありてとり合たるなど聞かれんは、めいわくなる事成る

べし。予が句に、

初雪や拂ひもあへずかいつぶり

此句、はらひもあへず霜や置らん、のこゝろすこしもなし。たゞ拂ひもあへずなり。はつ雪に鳰鳥、よきとり合もの也。中の七文字、明て置がたし。一句成就のため、かりにいれたる詞つゞきなり。この詞なくてはもちゆる事なし。

群烏賊や世は白妙に衣更

といふ句、江戸にてせし也。ころも更といへば、着たりぬいだりの上の事にて果しを。ころもの上ならで有べしと案じたる也。此ごろ、京都もいなかも、むれいかにて世はふきたるがごとし。只、ころもがへにとり合て、世はしろたへは、かりにいれたる詞なり。この句もこの詞の外になし。天のかぐ山と聞なさんはめいわく也。なに人の句やらんに、

立雲の南にしろし衣がへ

といふ句は、全躰あまのかぐ山なり。眼のとゞかざる人、取ちがへきゝ違へて、似する事是非もなし。晋子が流はいつとても、したごゝろなき事はせず。生所たゞしき事ならでは句にせず。

高取の城の寒さや芳野山

と云ふ句も、古里さむし、のしたごゝろなり。ふる里よりは、目の前の高取山さむしと云へるなり。晋子此ごろの秀逸は、

鶯の身をさかさまにはつ音哉

この句、近年のうぐひすの秀逸なり。外にありともおもはず。師の句、餅に糞するとこなし給ふ後に、ついにこれほどのあたらしみを、はしらせたる句はなし。この句よりよき句は如何ほどもあるべし。此のちも出べし。しかれどもこれほどに新しき句はなし。一筋に聞かれては作者も本意なかるべし。

元祿十一戊寅春三月　日　　五老井主人

森許六

去來先生　　草稿

梧右下

誹諧問答抄卷之四　終

誹諧問答青根が峯　巻之五

浩々舍芳麿校定

同門評判

一、予同門の中に對面する人もあり、またせぬ人もあり。しかれども發句誹諧のうへにて、その人をさつし作意を論じて奥にしるす。猶隱密のさたなり。

一、第一先生の風雅を論ぜばその器すぐれてよし。花實をいはゞ花は三ツにして實は七ツなり。天性正しくうまれつきたまふによりて、難じて言はゞとりはやしすこしかけたり。故に不易体の句は多けれども、流行の句はすくなし。たとへて言ふときは衣冠束帶の正敷人、遊女町にたてるがごとし。殿上まじわりにおゐては一人の人とも稱すべし。遊女町のとりはやし少しかけたり。師説の月雪を經給ふ故に、天晴中華門人の第一とは稱す。

　水うみの水増りけり五月雨

　風の地にも落さぬ時雨かな

　杜宇鳴や雲雀の十文字

など言へる一代の秀逸の句いくらもあり。師の句たりともなか〳〵上に立がたし。一人もうらやまぬものはなし。

一、晋子其角が器きはめてよし。人のとりはやするも生得、活景をおもてに上手をあらわせしゆへに、諸人の耳目を驚す。不易・流行ともに得たり。百年先の事をおもんぱかり、行過たる句あり。中以下の盲誹はこれをとらず。愚なる人の耳とをきが故なり。我筋かたのごとく得たりと言へども、未熟の人を導くたよりには遠し。故にかゑつてせまき所あり。たとへば堀りぬき井を見るがごとし。水脈まではほりぬきたりといへども、五湖・の廣きをしらざるに似たり。風雅を能くつかひてあそぶゆへに、一生、發句に名句多し。あまりの事になやまされざるしるし、題は替るばかりにて、句の取はやしはいつもかわらず。釜よりいでゝ己が財寶をひたものぬすめるに似たり。發句と誹諧を論ずるときは、はる

かに發句を得たり。

一、千那・上方の高弟にして器も勝れてよし。論ずるときは尙白が器は鈍にしておもし、千那は器はすぐれていき過たるなり。花實は花過たり。とりはやしも得られたり。故に實をいよ〳〵かくす味あり。風雅二ッ世用八ッ有り。たま〳〵殘りたる二ッの風雅、八ッの世用の盛なるによつて次第に押領せらる。たとへば脾腎の虛をわづらふ人、虛火の盛んにのぼりて、わづかに殘りたる脾土を燒がごとし。次第に肺氣もよはるが故に水を增す事かたし。久しく師說にはなれて流行に堀切は出來、八ッの世用の火氣は登るによつて、元氣次第によわり病のいゆる期はあるまじ。この人の誹諧のいき過たると言ふは、我ばかりはおもしろふおもふと言へども人かつて嬉しがらず。たとへば卯月朔日衣がへの日、紙帳をうり來たる人有り。師のいはく、これいき過なり。そのとし寒ふしていまだ炬燵をはなれず。人の賣らざる內に賣るべしとおもひて、紙帳〳〵といへども人の氣移らず。是ありがたきたとへなり。

一、文草が器よし。花實はともに大方相應せり。いとまある身なれば發句も多し。すこし利の過たるかたなり。

　青たけは持殘さぬや面しろみ

といへる句などむつかし。釋氏の風雅たるによつて、一筋に身をなげうちたる所見えず。たとへば興に乘じて來たり、興つきて歸ると言へるがごとし。この僧の句、たしかに善惡ともに一筋に見えたり。

一、支考が器もつともよし。花實も大かたにかね備へり。しかもとりはやし得物なり。難じて言はゞ、實うすく今めかしき事折〻見ゆ。ゆへに言外に意味ある句すくなし。世を侫ふ生得有りと見えて、翁の餞別に、

　此心すいせよ花に五器一具

と申され、旅五器一具とらされたり。翁はかれが侫なる生得を見とゞけたまへども、かれはこの心をすいする事あたはず。前にも申ごとく行すへいかゞ覺束なし。發句さして手柄ある句見えず、誹諧はたしかに血脈を得たり。文章を書せても聞事なり。しかれども趣意が通らず、かたはしいやみをかけり。この人血脈をたど

しくしてむさぼる心を耻じ(三)、翁の五器を能く推せばたのもしき門人の其一人、誰有て類する者あらざらん。されどもその質かしこく隨分利根なる故に、人を迷はす所の罪はなはだしく、もし乞食をするこゝろなくば世路に墮落せん事あやうし。いまだこの二ツの道わかれず、今爰にさだめがたし。是なを沙汰なし穴賢ゝゝ。

一、嵐雪、器ずいぶん悪し。本性柔弱にして花あるに似たれども實はなをなし。相應にとりはやす樣なれども、全躰とりしめたる血脉なし。たとへば能く料理する人に獻立を書せて、その獻立を前におきて、客をもてなすに似たり。

　唐の蚊や終にかれたるもしほ草

　相撲とり並ぶや秋のからにしき

柔弱にして弱く、よはきによつて美しきやうなり。うへに丹青をぬりていろどりたれば、世俗の眼には眞の錦のごとし。

一、正秀が風雅、前の書にしるす。是逸物なり。故に雜句のみ多して血脉の沙汰すくなし。自已の善悪わかれず、他句もなをしるまじ。別して當歳旦の三ッ物、吐龍など組合たる誹諧、三才の童子もわらひ草とする事うるさし。その上歳旦の句、三句いたしたり。一句の外はせぬ事と師說に聞置きぬ。

一、呂房・探志・臥馬、その外膳所衆の風雅いまだたしかならず。たとへば片雲の東西の風にしたがふがごとし。

一、伊賀の連中は、師の故郷ゆへに手筋はずいぶんよし。しかれども一人切ていでゝ、上洛するほどの大將の器有る人なし。たとへば天皷がつゞみのごとし。近年諸集にいづる伊賀の俳かいを見るに、打ッ人に應じて鳴がごとし。支考が打ッときは大方王伯が打てるがごとし。南都の者の打ッ時は道場の太皷にはおとれり。翁、在世の時は天皷がいでゝ直に打ッが如し。

一、乙州がうつわも大方なり。第一師の恩によつて乙州と言ふ名は出たり。折ふし血脉の筋を言へるといへども、かれたしかには知るまじ。たとへば舟に乘る人、船中の前後も知らず寐たり。時に順風いでゝ着船したるがごとし。翁の追善に木節と兩吟の誹諧、自慢する所の

附合とて路通が行状記に出たり。その巻に言ふ、發句も脇も師の噂なり。また奥に師の噂の句二句あり。かやうに一巻の中にいく所も出しても、くるしからぬ格式ありや知らず。たま〳〵一句などはその恩をわすれぬたよりとも言ふべし。度々の事にてうるさく侍るなり。發句に目立たる事は、一巻の奥までも遠慮すべき事なりと師說。

一、智月は一箇見えたり。乙州よりははるかにすぐれたり。しかれども仕習の朝より終焉の曉までの誹諧、五色のうち只一色を染出だせり。これは女の風雅なればなり。かれが風雅の美をいはゞ生涯の句、ひたすら智月と言ふ尼の句にして女の形を能顯はせり。

一、槐之道諷竹、天性柔弱なり。久しく草藥をなめて藥毒になやまされ侍る。しかれどもその藥毒のちからによつて、相應にとりはやせり。細に脈をうかゞふに、的中すべき良方なし。本病治しがたからん。

一、風國、發句血脈の筋たしかに見屆けがたし。雨中の花の泥を上たるがごとし。風雅は容なるがよしとおもへるにや、かたのごとく麁末なり。しかれども誹諧の巻には花實ともにあつて、しかも取りはやしも見えたり。元來誹諧血脈に氣がつきたりとも見ゆれども、發句なければ詮なし。たとへば時代ものゝ硯のふたのなきを、今やうの新物のふたを取りあわせたるがごとし。

一、杉風、二十余年の高弟、うつわも鈍ならず。執心もかたのごとくふかし。花實は實過たり。常に病がちにしてしかも聾なり。師は不易・流行を說て聞かせたまへども、杉風が耳には前後半ならでは入がたし。故に半分は流行して半分は二十余年うごかず。しかれども久しく名人にしたがふ故に、別座敷にすこし血脈あらわれたり。

一、桃隣は花實いまだしかとせず。しかれども桃隣、人間にうまれたれば、花實あるとは見えたり。

白桃や雫もおちず水のいろ

と言へる句侍れば、強て修行の功を積まばあらはるべし。この人常に貧賤にして勞せらるゝ。朝夕自己のとりはやしによつてかまどをにぎはせり。風雅もかくの

ごくとおもへるによつて、算用十露盤のうへにて損益をかんがへ、長崎の行脚よりは松島に德行りとおもへるに似たり。この人には色〳〵おかしきはなし多し。みちのおくに旅せんと言ひしは春のころなり。その春に晉子が句に、

饅頭で人を尋よ山ざくら

といふ句せしに、この坊ッみちのくの餞別とこゝろゑて松島のかたへ趣向たるもおかし。戻りてのちの今日は餞別にてなきと知たるや、かれに聞たし。

一、野坡・利牛・孤屋、その中に野坡すぐれたり。舊染のけがれを炭俵にあらため、流行の輕き一筋を得たり。しかれども元來三人共に越後屋が手代なれば、胸中せまきものどもにて、たとへば淺草川に舟逍遥する人のごとし。陸地より見る人、起臥自由にたのしめるとおもへども、舟より外は動く事かたし。されば上野・淺草の遊興をしらざるに似たり。師の恩によつて、炭俵の撰者の號をかふむり名を顯はせり。

一、如行、元來快弱なり。かれ常に師にしたがはざる故に、自己の善惡を辨ずる事をしらず。勿論血脈もたゞしからざる故に、とほうもなき事を言へり。

黄檗やひだるふ成つて春の風

など言へるたぐひ多し。しかれどもこゝろざしのあるゆへに、一筋にふみこみしと言へども、終に血脈の所へとゞかず。ゆへに皆仕損じのみなり。元來不調法にして嵐雪がごときまぎらかす所も見えず。

一、荆口老人、老功の門人なり。ゆへに舊染のけがれによつて藥毒ふかし。しかれども能子供を持て、手を引かれ腰を押されて、漸〻流行するに似たり。

一、此筋・千川・文鳥、三人ともに器すぐれたり。中にも千川すぐれり。發句のかたは此筋に秀逸見ゆれども、これは先へうまれたる一德歟。千川がとりはやし、遣經の能く聞こみたるゆへに、その外あたらしみあり。文鳥は三男たるによつて風雅もまたかくのごとし。上手の兄にしたがひ、行末執心しだい名人にも至るべし。

一、北枝が器大かたなり。花實も有りて實すくなし。師説に疎き故ちからなし。自己の眼をもつて世上の人の

流行を見ならひ、跡よりしたがふに似たり。とりはやし斗眼に入る。血脈の所をさぐりあてざるゆへに弱し。嵐雪がまぎらかしよりは、はるかに勝れたり。世俗の耳にはしほらしく聞へ侍れども、根本の所よりいでざる故に、淺間にして見ざめせり。

　ながれたる雲や時雨るゝ長良山

　雁のはら崩れかゝるや勢田の橋

一句の根なければ、とりはやしまでにて果たり。

一、越人、これも逸物なり。うつ(器)はすぐれて花實ともに見えたり。しかれども久しく師説をきかず、風雅におこたりたる故に流行をしらず。折節はむかしをおもひいでゝ、當流のかるみをうかゞふといへども、間に堀切(ほりきり)のある事をしらず。一旦誹諧に得たる所ある故に、不易はすると言へども、流行におゐてはあぶなくさぐり足なり。たとへば川をへだてゝ、むかふの岸をのぞむに似たり。立かへりむかし渡りなれたる瀨より尋上らば、この男器のすぐれたるものなれば、師に追付侍らん事かたかるまじ。惣別おこたる人、堀切の有事をしらず。一日のおこたりは一日の流行におくれ、一月の懈怠(けたい)は一月の堀切出來る事をしらざるなり。

一、荷兮、分別しれず。愚にかへりたると、いふべきものの歟。

一、鼠禪、あら野には多くいでられて後沙汰すくなし。この僧、血脈・花實はしらねども、折ふしの發句に、

　行燈に食喰ふ比(ころ)や雉子の聲

といふ旅行の句ありて、三ツの風雅をとりうしなはざるまでを本意とする人なり。たとへば親よりゆづりたる居屋敷ばかり有りて、たくわへたる寶なければ宿賃をむさぼり、おのれはうら家に引こみて、世をわたる人に似たり。簑笠にてすゝはき習ひに行たまふ程におもひたまはゞ、三ツの風雅もつて、七ツの世用をつかふことうたがひなし。

一、左次、師に對面せぬ門人なり。この僧器きよく眼つよし。志も厚きゆへ翁の發句ども一〻明し濟がたく、心かくれたる句には、情を一ヶ月もついやし、しかれどもおしむべきは師説にあわざる故に、車を半分八分に

押上るとはいへども、血脈を正しくせぬ故に、横になぐれてもとの所へもどるなり。これ師說に隨はざる費なり。

一、露川、師の國よりいでたる人にて、風雅の手筋もよし。しかれどもなし置たる功德も少なし。花實のすがたたしかならず。たとへば廣野を夜行がごとし。

一、尙白、是も上がたの高弟なり。師說に久しく絕たり。いよ／＼舊染の病再發したり。かれが器鈍にして重き所に、一風面白き胴切たる所あり。師この胴切たる事をよくたすけて用ひたまへり。全はその筋もわすれたり。たとへば五人持の大瓶の底のぬけたるがごとし。一とゝせ忘梅といふ集を作らんとせし時、師次第に流行したまふによつて輕みを說たまふ。このかるみのもとにおちて、今にその集ならずして年を經ぬ。たとへばふかき井のもとにおちて溺る人あり、師のたすけに寄て水際まで引あげ給へり。もとよりくるしみをわすれて爰ぞ世界とおもへる時、師は井輪・石垣をはね上げてかるみ爰なり、この所へ來れと敎へ給ふに、落たる人師の眞似をしてはねあがらんとする時、例の鈍く重き器なればもとの水底へしづみ、ひたもの迷ふてあらぬ好みをたてるがごとし。今とても一度師のたすけによつて、水際までは引上られたれば、その道を尋て、それより次第／＼に石を這ひ、輪を攀て上り侍らば、重く鈍きとも流行せざる事は有まじ。

一、李由、井、予が風雅は能く知り給ふ上なれば論ずるに足らず。たとへば作しれぬ打物しかも鍛がちなり。しかれども脇の障にならぬ鍛なれば、骨の切るをとり得とするのみ。

一、師は諸門弟の得たる所、一ツもかけたる所なし。師の得たる所は、一所も虛なき故に鐵壁を立たるがごとし。故に位高ふして德ふかし。何人か後代に至て、この翁を押す者あらんや。

此外門人、野邊のかづら林の木の葉にひとし。論ずるに詞なし。

右五卷の長篇、先生の意見もかへりみず、しかも能く知り給ふ所と言へども、予が腸を引出して書て、同心のよし

み就中先生と予は骨肉の思ひをなす故なり。必他見他言可レ蒙ニ御用捨一者也。

五老井主人
森　許六　草稿

于時元祿十一戊寅春三月於風狂堂述

呈落柿舍主人
去來先生
梧右下

誹諧問答抄卷之五　終

後序

百僚人士夫誰無レ有下不ニレ佩玉與ヒ劍者上矣。然玉之美者與ニ劍之利一者苟鮮ニ乎有ヲ獲焉。何者所ニ以相レ之自淑也難而不レ易。浩々舍誹匠者。親賢卅年之舊知己。頃歳復ニ居浪花一而起下唱ニ古道一之志上。轂々乎頻導ニ能者一。今將下取ニ古哲之祕篇一乃校ニ討之一上梓以廣上ニ於世一。親賢善ニ共事一且言。如ニ此篇之承由一。則前序已繳レ之不ニ復剩一焉。我只譬以試衍レ之。夫畨璵卞璧之六瑞五德鳳握鶴啣。有ニ百仞九曲之下一者。在レ時而現焉。至レ融ニ鶯門數尺之深雪一。或龍泉大阿之霜鍔氷及七星斯拱。萬人斯敵。其飛景耿々焉無ニ一點之邪心一。而乍去也於ニ平津一。乍來也於ニ豐城一者大抵物之出入顯隱不ニ獨在ニ玉與ヲ劍耳。此篇之名譽及ニ大方一者抑時乎。人乎。嗚呼懽矣

天明乙巳孟秋　備前草加　與々軒卦帰而書

栗齋大爺、世を翫ぶは俳諧に過たるはあらじと、枝栖と綽號して是に遊び、其星霜のかさなりければ、終に一大事の因縁となりて常に曰く、いろはだに覺ゆれば賤男までも能く述る道にして、其玄妙巧奇は短的にして、却て詩を作るよりは難しと、心醉の淺からざるまゝ龍門を扣き到れば、予が輩をも推轂の深きにぞ此學に預りぬるも、先大爺計り問ひければ幸なる哉。我近頃古き文にて考合せし一ッの說あり。此說をもつて推し見るに、誰彼よりは去・許の師なる蕉叟ほど此道に天助を得て、暗に数の本義に府(符)合せしはあらざるにぞ、此德をあげ述て序となし祝ん。され共奥義抄・八雲御抄より一定せしことを、非としぬるの恐れあるに似たれば、かりに華人となり眞名にてつゞり、歌聯客を始め、諸派の誹流をも或はさとし、或は疑はしめんと染筆して暗らるにぞ熟覽しむれば、此青根が峯より更に一層樓の奇論いふべくもなかりけるにぞ、此引證の書々を乞ひ抄し、且つ大爺の餘論物語をも倂認て書つらね、此序を見る童冠の助ともなさんと予が老婆親切又識者の笑ひに備ふと云ことしかり。

杜詩

作二俳諧體一遣レ悶二首

異俗吁可レ怪。斯人難二並居一。家家養二烏鬼一頓頓食二黃魚一。舊識難レ爲レ態。新知已暗疎。治レ生且耕鑿。只有レ不レ關レ渠。

註曰難一作レ能

西歷二靑羌阪一。南留二白帝城一。於菟侵二客帳一。粔粧作二人情一。瓦卜傳二神語一。畬田費二火耕一。是非何處定。高枕笑二浮生一。

註曰耕一作レ聳

大爺いへらく、此二律世に行はれぬる夢弼の集解には是なし。本集及び辟彊園が杜律解に見ゆ。杜が漂泊しもとは楚國の地なる冀州に到り、住せし時の詩の卷の首に出たり。試に詩友に示し問ふにいづれも俳諧体といふべきを答ふもの鮮し。この誹諧とするは芭蕉のいはゆる俗談平話の類にて、其地の俗事を撰ばず、其儘俗語にて詩に加へ作るをいふなり。[烏鬼]はからすを養ひ神のごとく敬ふ。此方にて四國の邊にある犬神の類か。[黃魚]注に大魚な

りと說あれども、畢竟此方の箱根山の湖水より出る黄魚の類ならん。［於兎］楚地にて虎をいふとなり。［粔籹］米麵を蜜にて和し蒸して餅となすをいふよし。［瓦卜］瓦を擊、其文理にて吉凶を定るをいふとぞ。［火耕］史記の食貨傳に所謂楚地の火耕、此方にて木曾路などの小山を燒て蕎麥などを蒔類か。是等は皆他邦になき冀州の風俗なり。又鄭溫武が詩語に俳諧多しといふは、俳諧體と体を定めて作らざるも、俗事・俗語或は歇語とて、はんじ物のごとくいひかけて跡の一字を歇てそれと聞す。杜子美の詩經の句をきりて友干とつかひ、韓退之も居諸ときりて日月を聞かせし、是皆歇語の始とも言べし。推して思ふに萬葉一集皆暗に誹諧なり。就中にて雅なるを選び古今集にいれ、俗を捨て雅俗こも〴〵にして調のよろしきを又撰びて、幸に此體の唐土の詩にあるを借りて、是に加へて万葉を存し示せるならめ。俳諧をして狂句又は狂連歌の沙汰は至て誤りなるべし。

唐書曰

鄭綮字蘊武及進士第歷監察御史擢累左司郎中因窶甚丐補盧州刺史黄巣掠淮南綮移檄請無犯州境巣笑爲斂兵州獨完僖宗喜之賜緋魚歳滿去贏錢千緡藏州庫後宅盗至終不犯鄭使君錢及楊行密爲刺史遣都還綮王徽爲御史大夫以兵部郎中表知雜事遷給事中杜弘徽任中書舍人綮以其兄讓能輔政不宜處禁要上還制書不報輙移病去召爲右散騎常侍往々條摘先政衆讙傳之宰相怒改國子祭酒議者不直復還常侍大順後王政微綮毎以詩謠託諷中人有誦之天子前者昭宗意其有所蘊未盡因有司上班簿遂署其側曰可禮部侍郎同中書門下平章事綮本善詩其語多俳諧故使落調世共號鄭五歇後體至是省史走其家上謁綮笑曰諸君悞矣人皆不識字宰相亦不及我史言不妄俄聞制詔下歎曰萬一然笑殺天下人既視事宗戚詣慶搔首曰歇後鄭五作宰相事可知矣固讓不聽立朝偘然無復故態故自以不爲人所瞻望纔三月以病乞骸拜太子少保致仕卒

按るに「尙友錄及び「排韻氏族の諸書に、鄭綮云く詩思

は在$_{二}$灞橋風雪中驢子背上$_{一}$と添へ出せり。排韻には人の問ひに答し詞とす。此詩思のもといづれの書に出るをしらず。詩話の書にて見しとも覺へ侍れどもなを臆し得ず。畫にも此姿は間々閲る事あり、宋元の間にて雅事として人口に膾炙せしにや。偖又芭蕉の雪の句にも是に類せる俳思あり。

　馬をさへながむる雪の朝かな　芭蕉

此叟唐土の俳詩人鄭綮の詩思と暗に一般なりしは、亦天助の人といふべし。

天明乙巳冬十月

檀林四世浩々舎
岡本芳麿誌　異列

（校訂編者曰、本書は原文振り假名を平假名にて施しあれば、原文の振り假名はすべて片假名によれる前例にならはず、本書に限り原文通り平假名を振り用ひたり。）

書肆

京寺町通二條　野田治兵衛
江戸日本橋通三丁目　前川六左衛門
大坂心齋橋筋南久寶寺町　高橋平助
同天滿難波橋筋伊勢町赤穂屋　松本半兵衛
同天滿十丁目筋又次郎町平野屋　松本半右衛門
同天神橋壹丁北袴屋　村田久左衛門

本朝文選（ほんてうもんぜん）

（風俗文選）

許六撰

本朝文選序

月澤　律師李由述

風俗文選（滑稽俳諧新古の文を拾ひ集めて風俗文選と題す）

龜城の羽官子。五老井の許六。新古の文を編て。本朝文選と題す。むかし。やまとの文を集めて。これを本朝文粹といへり。我おもふ。此文粹は。本朝の人の述作にして。文の体。まつたく漢文なるべし。今許六が文選は。和國の文章にして。其体をのづから。漢文にかなへり。むかしより。やまと詞おほしとも。皆〻双紙物語のたぐひのみにして。本朝の文章と稱すべき物は。今此本朝文選の事なるべし。夫漢文は。文字の數を定め。韻をふみて。其格まぎれがたかるべし。されど同じ文章をもて。文選と。古文とに記する所。其躰相違あれば。漢文とても慥ならずと見えたり。まして和文には。文字の數さだまらず。韻字とてもなし。しかるを。去來が鼠賦に。五音相通のかなをもて韵とす。是和文に。韻をふめる一格なり。あながち韻を用るにもよらず。其事にしたがひ自由なるべし。向後躰をわかつ事は。其題の趣によつて。其躰をさだむるを。學者心得とすべし。江東ノ僧律師李由字買年於四梅廬序。

印　印

本朝文選序

落柿舎　去來

世に俳諧の文あつて。其集といふものいまだ聞ず。先師一たび思ひ立給ふ事侍れど。心にかなふ物希なれば。むなしくやみぬるも十とせ余。五とせなるらん。今や門葉のたれかれ。風雅に腹ふくるゝまゝに。管城に槊を横へ。文場に臂をふるふものすくなからず。今此文集に斧を入て。始に柴門辭あり。終に頌讃の風流を盡す。或は書あり。或は論ありて。說賦のまとを述。文誄の哀を殘す。自堪能の才ありて。許多の躰をもらされず。これを千歳の後に施して。はいかい文章の手本とせば。彼童子の師の。句讀を敎ふる類ならんや。此文をしれる者は。此道をしる者なり。作者みづから五老先生と稱するものは。湖東森氏六子にして。虛實にあそべる人といふべし。しからば今の名望を感じて。此文選を戀ざらめかも。寳永元秌日序。

回　回

本朝文選序

東華坊　支考

もろこしに文選ある時は。吾朝に文選なからんやと。ことしえらびてあそぶものは。湖東の武子。許羽官なり。凡文章は。周孔の心を傳へ。莊孟の筆に皷舞せられて。和漢に心をつたふれども。姿を傳ふるものは又まれ也。人は其すがたはつたふべく。その心はつたへがたしとぞおぼえぬる。文章に何の心かあらん。心は天地の心なり。すがたは世ゝに變化して。其變化をしれる人をこそ。姿をしれる人とはいふなれ。昔の人の下惠をまなべるも。道につたふべき心なければ。すがたの變化をまなべる人とはいふべし。されば源氏物語は。はじめ終ありてたやすからず。人の見てあそぶ處も。巻〳〵にまち〳〵なるべし。狹衣は。哥にあそべりとぞ。うつぼ。竹とり。おちくぼの草子など。清少納言が枕双帋は。見る事にあそび。聽事にあそびて。はじめ終あらせむとせば。いかでかは。

榮花物がたりとかいへるものを。我いまだ見ねばよくもしらず。伊勢物語の。こと葉はぶきたるをさへ。土左日記はまたさらなり。日記は。おのれがおぼえ書なれば。人の見て。えしらぬ事をも。我は見てあそぶ覽かし。記と紀とは。おなじ心ながら。旅には紀行といふ事もあるにや。世に平家物語といふものありて。ひとへにものゝふの草紙にはあらせじとて。祇園精舍の鐘の聲に。無爲のあそびを書添たるなり。平家物語とつけたる名も。物に對したる名なるべし。鴨の何がしは。方丈の記にあそべる人也。發心集といふ物は。さるものともおぼえぬにや。四季物語といふものありて。其人の作にはあらずとこそ。撰集抄のみいとたふとし。哥の心のきすくなるは。まして。撰者の法師のあそび處なるべし。兼好法しのつれ〲草は。それにはおとりても侍らんか。硯にむかひて。物をさだめねば。世情の境目にあそぶ合點と見えたり。あるひは宗祇の終焉ノ記も。あるひは長嘯の擧白集も。おのれ〲が心にあそびて。むかしのすがたをつたへずといふ事なし。天はこれをもて月にあそび。地はこれをもて花にあそぶ。龍吟ずれば雲起り。虎嘯けば竹すゞし。梅に鶯。紅葉に鹿。いづれかかたちを傳へずしてあそばむ。先師。つねにいへりけり。漢には之乎者也の四字をもて。貴賤尊卑の詞をわかち。和には手爾遠波の四字をもて。暑し涼しの時宜をとゝのふ。文章はまして。手爾遠波の事なりとぞ。されば一句の長短をしらず。二句の句讀をしらざれば。よむ者息のつぎはをわすれて。海雲海鼠腸と。すゝりつゞけたらんは。はてしなき心やすらん。世はかくそしりてもあそび。又そしられてもあそぶ中に。我は此文選の時をほめて。あそぶものなるべしとか。

寶永元年甲申臘月日　印　印　印

本朝文選

自序

五老井　許六選

文は貫道の器也。孔子も余力あらば。これを學べといへり。吾朝往昔のむかしより。大和詞の文筆。庫にみち車にみてむ。されど。世におこなはるゝ言葉。おほくは女官の筆にして。源氏狹衣のたぐひ。男女の中をつくし。實は哥よますべき道びきなるべし。共に歌連哥の文法にして。誹諧文章の格式一言もなし。先師芭蕉翁。始て一格をたてゝ。氣韻生動をあらはせり。たとひ鄙言漢字をまじへたりとも。心は吉野たつ田の花紅葉をうらやみ。和哥の浦に志をよせて。難波津の細きよしあしをたどりしるべし。縱横自在を盡したりとも。ひとつの趣意をたつる所なくては。童蒙の丸い物つくしに落て。果は松坂を仕舞となせる。甚無下の事なるべし。今こゝにあらはす文章。躰は二十。文は一百十有余篇。皆〳〵俳諧文章なり。これをよみ。これを學て。此門に入べしとて弟子

五老井ノ許子六。撰み集て。寶永二乙酉歲。自序して本朝文選とは云爾。

印　印

本朝文選

○作者列傳

芭蕉翁者伊賀之人也。武名松尾甚七郎。奉仕藤堂家。壯年時辭官遊武州江戸。風雅爲業。號桃青。乃誹諧正風躰中興開祖也。當世爲遺功。修武小石川之水道四年成。速捨功而入深川芭蕉菴出家。年三十七。天下稱芭蕉翁。遊東西南北。說風雅助諸門人。國中悉歸芭蕉風。一過難波津伏病。終卒年五十一。葬江州義仲寺。

浪化者。東門主一如大僧正之連枝也。號應眞院。居于越中井波瑞泉寺。一日遊洛。會芭蕉翁效風雅。後著有礒海前後集。病薨。年三十二。

僧丈艸者。尾州犬山產也。壯年辭武出家。隱松本山上。蕉門之騷客也。能詩。後三年閉關而終不出。病死。常讀法華經。年四十四。

僧千那者。江州堅田產也。居于本福寺。釋名妙式上人。常任律師。號蒲萄坊。中蕉門之高弟也。

僧李由字買年。近州之產也。居于光明遍照寺。釋名亮隅上人。常任律師。入蕉門而學風雅年久。故著韻塞。篇突。宇陀法師書。病死。年四十五。

支考字盤子。號東花西花。亦號獅子庵。濃州之產也。入蕉門業風雅。一方門人也。先師滅後遊東西南北。說風雅而助諸生。故往往慕支考風者多矣。中遇居于勢州山田。後歸故國作誹書數篇。辨誹諧之論。

晉其角者。武州江戸產也。生醫家不學醫術。終業誹諧。寶井氏。號狂而堂。蕉門之一人而後起已一風。著誹書數篇。

嵐雪者。服部氏。不知何許人。業風雅。遊武江戸。蕉門之高弟也。後別妻出家。

野坡者。越之前州人。生商家居于武江戸。蕉門之學者也。一遊西海不定其所居。隨師得炭俵

之撰號。
北枝者加州金澤之人也。業磨工。見蕉翁好風
雅。北方之逸士也。
凉菟者勢州山田神職之人也。業風雅。初號團
友。
露川者伊賀之人也。生商家居于尾名護屋也。好
蕉門之風雅。
雲鈴者奥州南部之人。産武。壯年入道自號摩詰
菴婆且人。風雅師東花坊。一渡佐渡島著
入日記。
吾仲者洛陽人也。居于六條。業佛畫。好風雅。
師李由。自號柳後園。著柿表紙三卷。
路通者不知何許者。不詳其姓名。一見蕉翁
聽風雅。其性不實輕薄而長遂師命。飄泊之中著
俳諧之書。
凡兆者加州之産也。業醫居于洛。學蕉門之風雅。
一罪事不知其終處。
素堂者山口氏也。居于武陽。避世務隱于深川。
友芭蕉翁善。
嵐蘭者不知何許人。松倉氏。業武奉仕板倉
家。而奉諫速辭官。携母隱于武淺艸。蕉門之老
弟也。爲月遊于鎌倉病死。
荊口者濃州大垣之武士也。宮崎氏。蕉門故老之
士也。此筋。千川。文鳥。三士之父也。後致仕
改名東宇。
去來者肥前之産也。後隨兄居于洛陽。向井氏也。
中華蕉門之高弟也。號落柿舍。隨師選猿簑。
後病死年五十三。
万子者加州金澤之武士也。生駒氏。號此君菴。
蕉門之英士也。
厚爲者。加州大聖寺之武士也。河地氏。蕉門
之英士也。病死。
木導者。江州龜城之武士也。直江氏。自號阿山
人。蕉門之英才也。師翁稱奇異逸物。
汶村者。江州龜城之武士也。松井氏。字師蕓。
號九華亭。蕉門之達士也。常能書畫。繪師五

老井。
毛紈者。江陽彦城之武士也。北山氏。號大雅堂。好風雅愛書圖。師五老井。
程已者。近州龜城之武士也。朝倉氏。號白日堂。愛蕉門之風雅。
朱迪者。江陽彦城之武士也。寺島氏。號甘露臺。年久好風雅而入蕉門。病死年四十三。
撰者許六者。江州龜城之武士也。名百仲。字羽官。森川氏。號五老井。別號菊阿佛。一見蕉翁。得正風躰實。血脈道統之門人也。常友李由撰俳書數篇。

以上二十八人

本朝文選目錄

五老井　許六選

本朝文選目錄畢

本朝文選卷之一　五老井　許六選

辭

○辭類

柴門ノ辭　芭蕉翁

送歸許六之故鄕餞別之文也

○去年の秋。かり初に面をあはせ。ことし五月のはじめ。深切に別をおしむ。其わかれにのぞみて。ひとひ草扉をたゝいて。終日閑談をなす。其器。繪を好み。風雅を愛す。予こゝろみにとふ事あり。繪は何の爲好むや。風雅の爲好むといへり。風雅は何の爲愛すや。畫の爲愛すといへり。其まなぶ事二にして。用をなす事一なり。まとや。君子は多能を耻といへれば。品二にして。用一なる事。感ずべきにや。畫はとつて予が師とし。風雅はをしへて予が弟子となす。されども師が畫は精神徹に入り。筆端妙をふるふ。其幽遠なる處。予が見る所にあらず。予が風雅は。夏爐冬扇のごとし。衆にさかひて用る所なし。たゞ釋阿。西行のことばのみ。かり初にいひちらされし。あだなるたはぶれども。あはれなる處おほし。後鳥羽上皇のかゝせ給ひしものにも。これらは哥に實ありて。しかもかなしびをそふると。の給ひ侍りしとかや。されば此御ことばを力とし。其ほそき一すじをたどりうしなふ事なかれ。猶古人の跡をもとめず。古人のもとめたる所をもとめよと。南山大師の筆の道にも見えたり。風雅も又これに同じといひて。灯をかゝげて。柴門の外におくりてわかるゝのみ。

瓢ノ辭　許六

○男鹿なく。此山里と詠じける。嵯峨野ゝ方に隱れたる人あり。まだつり瓦の跡もきえかね。わり菱の系圖咄に。

甲州の釼も。今は菜刀一丁の身帯にて。あまりさびしさに。垣に瓢箪を植て。折ふしの筆次手にや。中にもしたゝか物に書付侍る。

〽甲にもならで果たるふくべ哉。無名子とは見え侍れど。身は雲水の便りなき。浪人ひがみとぞおぼえける。かの岡に草刈るおのこあつまり。此甲のにくさに。わざと返しとはなくて。

〽かまきりに降参したるふくべ哉とぞ笑ひける。あるじきゝつけて。陋巷にあつて一瓢のたのしびは。賢人の上。里の子はしるまじ。草刈の中より。其賢人くらべならば。許由はかしがましとて捨たりとのゝしる。あるじいよ〳〵勝に乘て。かゝる名物もしらず。汝等は田植の煎茶を入れ。たね物の納所とおぼえたるこそ口をしけれ。花はむづかしき色もなくて。楊墨がこゝろざしに叶ひ。源氏の卷の名となり。哥人の腸にまどひたる夕顔ぞかし。抑夕がほの。玉樓金殿にさがりたる由緒をしらず。たゞ喰物とぼしき。五條あたりに徘徊して。貧乏神の神木はこれなるべし。隱士が曰く。汝宇治の物語をしらずや。答て曰く。其拾遺の瓢も。咎なき隣人が一命をたてり。これ全く瓢の罪といはむ。かゝる目出度ひさごに。何の罪かあらん。かれ佛緣深きゆへ。空也上人には携へられ。鉢たゝきの祖師とはなりける。かのさゞ波や。かたゞの海士が海老すくひも。佛緣の內かとぞいひける。隱士大きに打腹立て。汝がいひ分。皆〳〵理屈の論なり。曾て風雅をしらず。古人生前一瓢の樂は。身の後の金よりは勝たりといへり。草刈が云く。其樂といつば。上戸の情也。瓢のかたちをいはむ。腹便々と肥ふとりて。口のせまきは何ぞや。せまくて餅の入らざるは。下戸のなげきなりと大笑して。哥て云く。滄浪の水。すめばつけて泳ぐべし。濁らば鯰を押ゆべしといひて。去て共に物いはず。

示秋之坊辭

支考

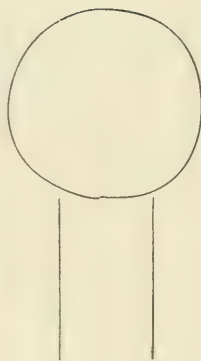
○あら秋の坊や。紅葉の栖か。世の秋か。又たゞ栖の坊なるか。見ればいとにくさげに。見ねば又なつかし。好惡は人の心にありて。彼は一物もなきもの也。むかし

湖南の幻住庵に。一夜の夢をむすびしが。其夜もしらず。よみしやすらん。にくみしやすらん。無常迅速の一句をあたへて。先師も麓までおくりは申されしか。今此草庵に。同じ心にすね合たる法師の。相住て侍るが。物いはぬ日の終日も侍りて。かく住けるこそあやしくたふとけれ。我又こゝに來りてあそばゞ。何某が三すねといふ。哥よみにやあらんと。そこの人〳〵もわらひけるなり。秋の坊が云ク。はいかいはさる事ならんか。曰ク。さだむべからず。俳諧にくはしからんとせば。世情におちて。心の花にうつろひぬべし。花なきは又世の風流なし。世にはたゞするすみならんこそ。法師達におきてはさる事なれ。たゞはいかいにはあそぶべし。俳諧にまどふべからず。しゐてくはしからんとせば。東花坊がごとき。世情のうき名とりてむ。はいかいのくるしさ。誠にしかのみならんや。

〽瓜ふたつ三ツにわる手や塵劫記

示二僧ノ古鏡一辭

李由

○こゝに僧あり。古鏡といふ。學業にわしりて。東湖の濱にあそぶ。産は濃州關ならば。など志津。孫六が鍛を得て。紫電白虹赫〻とし。三尺のひかりを振はざるや。天下誰レあつてか。敵するものあらん。さるはむかしの釼。今の菜刀とおぼえ。俊成卿の花の鏡もうち曇り。今は閑村の葎にうづもれ。祭のはやしにもたゝかれず。終に鐘鑄の奉加道具にきはまり。きのふもまるく。けふも又丸し。

此人かつて詩をよくす。多情有聲の畫を彩り。美言無糸の絃をあやつるといへども。猶風雅に足をそばだて。敷島の道をさぐり。一とせ先師。關の旅寢の比ま見

えて。一棒をうけたりといへども。いまだ澁皮もむけず。今幸に予に參じて。又鏡を磨がむとす。風雅はもと明なる物なり。鏡の物の影をうつすが如し。汝元來磨とをしらず。速に去つて。水銀を求め來れ。

〽分別に花のかゞみも曇りけり

贈新道心辭

丈艸

○世をのがれて道を求るほどの人は。皆一かどの志を發して。まとしきつとめともしあへれど。年を重ねぬれば。又かれこれにひかるゝ緣おほく。事繁くなりて。更にはじめの人ともおもほえぬ。ふるまひのみぞおほかる。古人も此事をいましめて。出家は出家以後の。出家を遂べきよし。勸めはげましぬ。魯九子は。みのゝ國蜂屋の山里にあそびて。いまださかむなる齡の。いかなる緣にや。俄に墨の袂に染かへて。ちりのすみかをかけ出。山寺にかきこもれるよし。傳聞侍りて。今のこゝろざしの正しきに。猶後の出家をおこたらぬ。みさほのほどをねがひて。拙き辭を申おくりぬ。

〽蚊屋を出て又障子あり夏の月

燒蚊辭

嵐蘭

○蚊。蚊。帳中の蚊。汝を燒に辭をもてす。汝此辭を聞時は。わが手に死すとも。みづからたれりとせよ。夫澤雉は。樊中にやしなはれことをねがはずと。彼は心をとる。これは食をもとめて。人の肌にせまる。かれを愛せむや。これをにくまむや。

〽きゞすは草にかくれて。草の爲にやかる。汝は帳に入て。帳の爲にやかる。あはれなるかた。いづれとかせんや。

〽蛼促織の火に入は。戀ゆへときけばわりなしや。雨に濡露にそぼちて。さそはれし風だにもつらし。げに玉の緒の絕なむ事もしらず。いく偽の夜や賴み來し。汝がやかるゝ事。何を情とせむ。義經の逆落は。暫時さしをく。須山小宮山が夜討は。かくれて謀をなすといへども。天下の爲にして。名をのづからしたがふ。又汝といはむや。

「虞舜は頑父をさけ。日本武尊は。夷賊をのがれ給ふ。共に天にして。汝といふべきにあらず。大盗に樞戸を穿むや。汝がふるまふを見るに。帳をたるゝ時は。其闕くゝの間をうかゞひ。垂おはつて。縦横の透間をたづね。すべて小破の所をもとめ。人のじりへにつきて。入らむとはかる。嗚呼踉蹌が徒にはあらじ。

「すべて汝がおこなふ處。猛き事もなく。たのしむ事もなし。あはれなるかたにも。やさしきかたにもあらず。たゞにくむべきものゝ甚しき也。

「蚊。蚊。帳中の蚊。汝をやくに辭をもてす。汝此ことばをきく時は。我手に死すとも。みづからたれりとせよ。

〽子や啼む其子の母も蚊の喰む

鉢扣ノ辭　　去來

○師走も二十四日。冬もかぎりなれば。鉢たゝき聞むと。例の翁のわたりましける。こよひは風はげしく。雨そほふりて。とみにも來らねば。いかに待侘び給ひなむといぶかりおもひて

〽箒こせ眞似ても見せむ鉢扣と。灰吹の竹うちならしける。其聲妙也。火宅を出よとほのめかしぬれど。猶あはれなるふし〴〵の。似るべくもあらず。かれが修行は。瓢簞をならし。鉦打たゝき。二人三人つれてもうたひ。かけ合ても謳ふ。其唱哥は。空也の作也。かくて寒の中と。春秋の彼岸は。晝夜をわかず。都の外。七所の三昧をめぐりぬ。無縁の手向のたふとければ。かの湖春も。わが家はづかしとはいへり。常は杖のさきに茶筅をさし。大路小路に出て。商ふ業かはりぬれど。さま同じければ。たゝかぬ時も鉢扣とぞ。曲翠は申されける。あるひはさかやきをすり。或は四方にからげ。法師ならぬすがたの衣引かけたれど。それも墨染にはあらず。おほくは萠黄に鷹の羽。打ちがへたる紋をつけて着たれば。月雪に名は甚之丞と越人も興じ侍る。されば其角法師が去年の冬。ことごとくね覺はやらじと吟じけるも。ひとり聞にやたへざりけむ。打とけて寢たらむは。かへり聞むも口おしかるべし。明して社との給ひける。横雲の影より。からびたる聲して出來れり。げに老ほれ足よはきものは。友

どちにもあゆみおくれて。ひとり今にやなりぬらんと。
翁の。
〽長嘯の墓もめぐるか鉢たゝきと。聞え給ひけるは。
此あかつきの事にてぞ侍りける。

四季ノ辭　許六

古今和歌文章謂四季者多矣假令姿用俳諧詞爲之其情和歌文章不可更今此辭全篇以財寶之上盡四時情是誹諧也

○行年の晝夜はたへずして。しかももとの晝夜にはあらず。子取婆〻の足手を返し。隱坊の鋤鍬休する時なし。人若かりし時の月日は。行道ゆるやかに廻り。老ての後の光陰は。慥に徑路を行にきはまれり。五十年來のすぐるは。一杯の蕎麥切よりも早く。今又五十年生む事は。田樂を翻すよりもやすし。つら〳〵一とせの變相を見るに。いづれかあはれならざるはなし。むかし紫氏淸氏の物語にも。華ちり時鳥とかはるあはれをのべて。錢金のあはれをいはず。世わたるわざのはたらきは。たゞ此ものゝ手柄にして。神佛とても及びがたし。まづ春の御ン賀の引出物より。八朔歲暮のたてまつり物。皆金銀の手柄にて。下万民の末〳〵まで。千代よろづ代を十かへりと。あふぎ奉るもとはり也。金子の威德とて。大判は裸で出仕し。白銀は付臺とて卑下したるこそ哀なれ。錢は凡夫の手に落て。靑ざし一貫文を頭とし。こき簪。蠟燭一挺ぎり。廿五十の年玉まで。皆相應にこそめでたけれ。春寶引をせぬ人は。六月の蚊にくはるゝとて。しはき親仁もゆるされて。錢つかはすもとはり也。え方參の十二燈より。よろづの神〳〵はとりそめられて。細き穴から世の中を。廣くめぐみをたれ給ふ。梅は花の兄とかや。春の風やはらかに吹て。里の中道溝石をつたふ比。まづ江南の一二輪咲初て。白きは本色といひながら。南鐐の寒き風情をこのむならむ。柳連翹の黄色に。茶たね山吹のあたゝかにさけるは。かの大判の裸をうらやむか。鶯の金衣鳥とは。直に似せ金の同類なるべし。きぬさらき二日の空は。まだ鴨の羽音ながら。日影うらゝかに。南の障子押やり。飛石よりかげろふも

ゆる比。かはらけのひねりもぐさ。誰にかすゆらんと。おぼつかなく見なさる。凰くろふたる悪太郎。小路がくれを尋出し。お乳めのととり廻し。あたり近き。やいとの婆ゝをかり招き。筋違風門すへられて。涙のかゝる饅頭も。中〳〵それちうるさくて。やう〳〵膝をすべり落。からき命いきたる心地して。灸甕の芥子銀は。湯氣のたつまで握られて。何買ふ物とはしらね共。たゞ嬉しとばかりおぼえける。明日は初午とかや。錢數寄の稲荷殿。御簾の中より。千貫の散錢に。めでさせ給ふ。御物好こそ有難けれ。されば佛とてもいやにはあらず。黄金の膚を願ひ。閻浮檀金を最上とおぼえ。極樂には金銀を鋪とかや。いづれの佛神に詣でゝも。錢箱の響にめでたまはぬはなし。世の中の人の。心の花にはうつりやすく。奢は日〳〵に長じて。田舎の金銀は。すべて都のあたゝまりなるべし。西東の遊び所。南北の參ッ事。すべて錢なし人は。一足もすゝみがたし。櫻は四方山にさきこぼれても。吉野を花の名所とはいへり。飯貝六田の軒端より。幾重の雲をわけつらん。此御山は。彌勒の代につかふべき金とかや。むかしより世の人の。面白しとおもふもとはりなり。やう〳〵やよひもくれて。ほとゝぎすの來べき。卯月の空打曇たる。片山里の垣根の雪は。何を卯の花とうらやみけむ。錫も鉛も。ともに白銀の膚なるべし。牡丹の花の白きはさら也。世に稀なる紅とて。長安の豪富はもてあそび。これに魂をうばゝれける。その面白き所は。たゞ小判を植て。詠むるなるべし。雲雀は終日に囀り。水鶏はよもすがらたゝく。池鯉鮒野の馬市なるべし。一歩はひとつふたつなどいひならひけるに。馬買ィ牛買ィの詞とて。五つぶ十粒とならべてかぞへ。伯樂が錢金を皆あてに。集りたる遊女野郎のたぐひ。簺ふり樗蒲一のより所にして。廣野の小屋のたゝずまる。しばし里あるこゝ地なるべし。はやし祭。喰ひ祭。打つゞき。桑子庭に起かゝる比。茶山いそがしく。からし種こぼるゝなど。麥跡の田植さへおくれて。例の五月雨ふりつゞき。舟にて市に入る時。矢矧堤はきれて。道筋かはり。大井川とまりて。島田金谷に。陣を張大名小名いくかしら。猶行末の川〳〵。いかばかり出ら

んと心ぼそし。此時例の一歩小判のはたらきこそ。目さむるわざなれ。梅雨晴の六月空さえて。峯に雲をく比。植田沸かえり。天地は蟬の聲に鳴ひしがれ。一日の晷さもたへて。千とせをふる思ひなるに。十九土用とかや。京田舍熱病にたふれ臥。家〱わらはやみはやりて。水藥師の泉も。其功ぬるく。驗者のいのりもたへまある比。紫雪とかや。世に良藥ありて。たち所に醒たり。これこそ黄がねの鍋にて。黄金を煎じたる物なれ。やゝすゞ風粟の葉むけに立初。芋の葉ぶりつく比は。金氣世におこなはれて。星合の空もうち過。物際近づく比。革篋布とびまはり。丁銀箱を出てうそぶく。奥の世の中打つゞき。巡禮のぼりつどひ。金の直下る比を。巡禮小判とはいふ也。家〱むかひ火燒捨て。魂祭ころ。旦那寺の小僧。棚經とてよみありく。物喰せ酒のませ。やがてかけ合に。一粒包みてやれば。またはづかしと思へる。いとあはれなり。やう〱生身玉。養父入事過て。躍見る心にはなりぬ。彼島原と中は。廿四日をかぎりと定め。世界の金銀は。此時この里にとらるゝなるべし。たゞ一夜さの假のにほひに心とゞまりて。これよりえにしの中立となるたぐひもあれば。鈎がへといふはいかにぞや。こはき風。あらき日影をさへ。いとふしとおもふべき身を。いま〱しく大秤にふらば。昆布干鮭の思ひをすらん。あるは家を賣り。家督をうりて。くはす貧樂の道樂人。つまる所は俳諧師也。いくとせか。松島象潟の旅をうらやみ。此秋しきりに。姨捨更科の月見むと。三衣袋に身帯をたゝみ込ミ。木曾の御坂を越かねて。尾花のつてにまねかるゝ。かけ路の下の草枕。一夜二夜はもてなされて。長逗留に飽れぬる。たゞ行さきの袖の露。ちらりと見せてあはれ也。秋もはや。くるゝと菊の名に立て。黄ミ白ミ粧ニ東籬といふは。かれも金銀をうらやむたぐひか。時雨ふりそむる比は。諸家の爐開きとて。名物の賓くらべ。風流に似て。金づくのはたらきなるべし。霜月朔日より。野郎の顔見せ。給分は小判也。むかしは吉原堺町と打ならび。中なるがふき屋町。天下の金をとらかして。まぶといふ詞も。此時より出づらん。今朝からは師走とかや。乙子の朔日とて。節季ゆの來初る

日也。空はうす墨の多氣色。比良の高根。志賀の山。むかし長等の峯の雪。都の方はあられふる。音羽の瀧の音もなし。嵐木がらし唐がらし。岡部の里の冬ごもり。何を師走の年くれて。金一段に責寄たり。かはせ小判。大名借。つゝみ廻して相坂をこえ。高瀬の舟のかぢ枕。汐路はるかにとられ行。鄙の旅寝ぞあはれなる。神は人の敬によつて威をますとかや。伊勢熊野のお初尾時。藥代は銀一枚。衣配は小判なるべし。すでに煤と明。餅と暮て。廿九日といふなり。けふは小の大晦日。一日の違ひとはいひながら。一年中の大油斷。今此時にあらはれたり。三千世界の金銀は。けふ一日の亂世にて。入みだれ〳〵。あたる所さはる所。皆と〳〵くしたがへて。壽永も已に暮にけり。抑やまと哥は。神代より傳はりて。おもき國の翫びなれば。天下誰あつてこれをおさむ。されど末の代にあたつて。和哥の道に對するものは金也。目に見えぬ鬼神をなかしめ。おとこ女の中をやはらげ。たけきものゝふの。心をなぐさむるものはこれ也。上古はいやしきものにいひなされたる。それもさる事ながら。今やうは此ものににくまれたる人。此界にては。二日の逗留ならず。たゞあはれなるは金なるべし。

本朝文選巻之一　畢

本朝文選 卷之二　五老井 許六選

賦

○賦類

南都ノ賦　汶邨

○あをによしならの都は。御さぶらひ三笠山の麓なり。元明天皇。和銅二年。藤原の宮より。此の京に移さる。大宮殿。大佛殿。佛神をあがめて。王法を輔く。若宮のやしろ。月日の宮。竈殿。尾上の宮。鏡の神は。橘の廣繼をまつり。浮雲の宮は。鹿島立の始とす。氷室。卒川。東大寺の八幡。二月堂に若狹井あり。三月堂。四月堂。釣鐘は。久我の入道の詩をとゞめ。大門の折釘は。源の賴朝の幕を張。興福寺は。七堂伽藍。はじめは山階寺といひ。中比は馬屋寺と號す。東金堂。中金堂。食堂。講堂。南圓堂には。補陀落の藤をうつして。順禮の札を納め。東圓堂には。いにしへの八重櫻を殘して。花垣の庄を領ず。西金堂の樂をあらため南大門にうつして。薪の能をはじむ。七度半の使に。四座の猿樂をめす。雨天には紙を蹈で試み。夜陰には薪を積で焚。保生が鉢の木に。名人の號をとり。大倉が芭蕉に。達人の名をあらはす。水屋の能。若宮の能。春日祭。御祭。素絹に大衆の顏をつゝみて。大華表につらなり。錦を着て。松の下に弓矢の立合を舞。頭屋の兒は。牀木に腰をかけ。赤衣の仕丁は棒を横ふ。大名馬。大名鑓。大太刀持。小太刀持。競馬。流鏑馬。長谷川黨は甲冑を帶し。射手の兒は。綾藺笠に弓矢を持。關白代は束帶して。藤の花をかざし。バヂヨの兒は供つれて。腰に木履をつくる。ハイケンの神子。奈良の神子。細男。氷室付の樂人。トカミ。拍手は。仕丁の宿老。頭屋の御幣。田樂のビンヅロ。春は二月の

雪をちらし。冬は霜月の花をさかす。手向山に。菅家の紅葉を詠じ。武藏野に。業平の若草をよむ。雪消の澤。野守の池。御手洗川。佐保川。一位。二位。五位の橋。馬出。轟。故鄕の橋。鶯の瀧。青龍の瀧。森は神垣。手分の杜。地獄谷。千手谷。劍塚。逢火塚。むら雨のたえ間には。雲井坂に晴を祈り。雉の羽音には。わか草山に眠をさます。鹿は春日野に臥。魚は猿澤の池に浮ぶ。衣懸柳。良辨杉。夜泣の地藏。文使の地藏。元興寺の鐘は。鬼の手の痕になだれ。十三鐘は。七つ六つの間につく。角寺。紀寺。般若寺には。大塔の宮を隱し。何がしの坊には。義經の鎧をとゞむ。重衡は治承に燒。松永は永祿に亡す。俊乘坊の跡をふむで。龍松院は願をおこす。輿懸石は。伊勢の御の眺望をなし。柳綠花紅の碑は。紹巴翁のしるしとかや。華原磬。泗濱石。蘭奢待の伽羅。鴨の毛の屛風。柳生家の劍術。寶藏院の十文字。法花寺の作り犬。西大寺の豐心丹。法論味噌。力饅頭。なら漬。奈良酒。奈良こんがう。なら團扇。墨。曝。世に名高く。打箔。中鑵は此京より起る。岩井が具足。文殊が打物。膠。綠靑。靼。皷の皮。土風呂。灰炮烙。櫟。木練。なら茶はヤヂウと名づけ。甞食を硯水といふ。油烟取。五合禰宜。乞丐坂の石。穢多村の木格子。赤き物は。頭屋の赤飯にたとへ。瘦たる人は。金堂の鉦打といふ。木辻の待宵。鳴川の別れ。情に万金を盡し。思ひに一命を輕むず。口は七口。景は八景。町〳〵に御門の名ありて。五條三條の巷をわかつ。夏冬の朝起。春秌のならはひ。諸國にすぐれ。諸人にこえたり。是皆舊都の。ありがたき遺風なるべし。

鎌倉賦 并序

許六

夫相摸國。鎌倉は。郡の名にして。大職冠鎌子丸の時。靈夢によつて。鎌を埋むの地也。このゆへに郡の名とす。染屋の時忠。惣追捕使として。文武の御宇より。聖武の神龜年中まで。こゝに居す。それより上總介平直方。これに住して。八幡太郎義家朝臣より。源家代〳〵居住の地なり。賦して曰。

〇三代の將軍。九代の執權。春の花さけば。秌の紅葉と

變ず。柳のみやこ。もろこしの里。鶴が岡。雲井の嶺。下の若宮は。頼義朝臣の建立にして。上の若宮は。源二位の勸請なり。宮柱ふとしき立て。民の戸烟にぎはへり。江の島は。三辨財天。三浦三崎に。杜戸の明神あり。鳥合が原は。相摸入道が。鬪犬の地。由井の濱は。下河邊の庄司が。笠縣を射初る。小袋坂。稻村が崎。七里が濱。月かげが谷には。曆を作り。扇が谷には。佐竹の紋の畦あり。腰越の寺には。辨慶が申状の下書を殘し。兒が淵には。白菊が最期の哥をとゞむ。片瀨川には。宗尊親王の影をうつし。滑川には。靑砥が錢を搜す。日蓮盛久が首の座。景清からいとが籠のあと。大塔の宮は。佞臣の讒にくるしみ。實朝の卿は。公曉が爲に弑せらる。勝長壽院には。義朝の髑髏を葬り。法花堂には。賴朝の墳墓を築く。西行上人は。三夜に軍法を說。定家の卿は。七年和哥を談ず。化粧坂は。少將に名高く。神前の舞臺は。靜が舞をはやす。和田。畠山。千葉。北條。官領屋敷。梶原屋鋪。佐々木屋敷には。馬ひやし場の水あり。正宗が舊跡には。刄をきたふ泉を見る。花が谷。蛇が谷。梅が谷。松葉が谷。建長寺。最明寺。圓覺寺。壽福寺。海藏寺は。石割玄翁の開基。松が岡は。實朝の尼寺也。籠釋迦。鉄地藏。深澤の大佛。長谷の觀音。金洗澤。星月夜の井。橋の下の小哥は。あめ牛めくらが威勢をそしり。小栗の說經は。横山が强盜を語る。阿佛。長明が日記。重衡。俊基の紀行。春は雪の下に花を踏で惜み。夏は山の内に鵑を待て眠る。美奈能瀨川の月。御輿が嶽の雪。礎のあとは。感慨の情をまし。鳩の聲は。懷舊の腸を斷。鰹は兼好が筆にいやしめ。左蒔の榮螺は。實平が麁相を殘す。苔。磨砂。海老。柴胡。すべて魚鼈の類。あまかづきいとまあらず。高瀨おしをくり。かよはぬ日なし。名にしの地藏は。武相の境にして。六浦。金澤は。むさしの地なり。瀨戸の明神には。四橋一覽の眼をさき。能見堂には。八景惣詠の詩を見る。照手の松。筆捨の松。金澤の文庫といふは。稱名寺にあつて今はなし。文殊像。普賢像。こく梅。櫻梅。せいこ梅。靑葉の紅葉。わづかに西湖。さくらの二梅をとゞむ。大きなるものは。賴朝のかうべにたとへ。廣き所は。かまくらの海道に比す。

今の戸塚は。いにしへの材木町といひ。大磯の宿は。遊女町の沙汰なり。されど東南に海近く。西北に山つらなれり。境地狹してすでに谷〱の號あり。むかしの繁花繁榮を論ぜば。なんぞ今の泰平不易の江戸に及ばむや。

吉野ノ賦　　丈艸

○よし野を御吉野といふは。皇居の地なればなり。山。川。里。嶺。嶽。高根。尾上。山の井。花園を詠ず。すべて二十一代の哥數三百七十余首。猶家〱の集。物語類。詩連俳諧のたぐひ。佐川田喜六があさな〱。貞室老人のこれは〱まで。かぞふに中〱いとまなからん。さればもろこしの吉野とは。おほいもうちぎみの誹諧の哥より始り。芳野川花の音するとは。慈鎭和尚の大きなる哥の手柄なり。川は巴が淵よりわかれて。紀の和哥山に落。山は大峯よりつゞきて。那智高野につらなれり。藏王堂は。三ところに安置し。一郡は八郷とかや。上市よりは飯貝にわたり。下市をこえては。六田よりのぼる。妹背山をへだて。高取の城にむかふ。ちもとの櫻。日本が花。櫻田の谷。さくらが嶽。關屋の花。瀧ざくら。雲井櫻。布引の櫻。花矢倉。花籠の水。嵐山は。龜山の御宇に都にうつされ。袖振山は。天武帝より五節の舞を始む。清見原の天皇は。國栖人の舟にかくし。後醍醐帝は。吉水院を皇居に定む。義經も此院にやどり。秀吉も此寺を本陣とす。賀名生は要害の御所。如意輪寺には御廟を築く。厨子の戸びらに。南帝勅作の詩を。みづからあそばし。過去帳の奥には。楠正行最期の哥をとゞむ。判官の鎧。辨慶が太刀。ロの山門は。彦四が痛腹の所。つゝじが岡は。忠信が空腹の地なり。勝手の寶藏には。靜が舞の裝束を納め。子守の拜殿の哥仙は。定家卿の眞蹟上袋の後狩野永徳が筆なり櫻木の宮。金精の明神。力乞の不動。廻り地藏。尊算の御影堂には。花供養の餅をまき。五臺寺。櫻本は。當山の先達也。大瀧。宮瀧。西河の瀧。高瀧。蟬が瀧。清明が瀧。菜つみ川。とく〱の清水。外象の橋。神子の水。鷲の尾の鐘。龍返しの岩。龜石。玉石。大杉殿。人丸塚。若葉の鳥井。鎧懸の松。かげろふの小野。猿引坂。琴堂。琵琶山。青根が嶺。釋迦が嶽。七十二なびき。

八十の窟。これ皆順逆。二つの通路なるべし。産は頭巾。ほらの貝。火打。塗物。紙。漆。葛。榧。たばこ。釣瓶鮨。柹。木の子。籠細工。木鉢。材木。山折敷。さくらは吉野に名たかく。よしのは櫻にて名を擧たり。麓より奥の院まで。左右の山〳〵。前後の谷〳〵。たゞ雲を攀上り。たゞ雲をくだるがごとし。海道の吹だめには。落花の波を揚。木の間の嵐は。寒からぬ雪をふらす。麓ははやく。奥はをそし。開落山の淺深によれり。春此山に上り。いづれか花の盛ならぬ所はあらじ。夫櫻の名目は。伊勢櫻。江戸ざくら。火櫻。樺ざくら。うば櫻は葉のなきをいひ。しほ竈とは濱に咲といふ事にや。熊坂といひ。楊貴妃といふ。世に色よき杜若は。八橋と名付。よく垂る萩を。宮城野と號す。さればむかしより。たゞさくらの名に。吉野といへる花をきかず。たゞ吉野とも櫻とも。理屈をつけぬこそ高みなれ。

松島ノ賦

芭蕉翁

○そも〳〵事ふりにたれど。松島は扶桑第一の好風にして。凡洞庭西湖を恥ず。東南より海を入て。江の中三里。浙江の潮をたゝふ。七十二峯。數百の嶋ゝ。欹つものは天を指。ふすものは波に匍匐。あるは二重にかさなり。三重にたゝみて。左にわかれ。右につらなる。負るあり。抱るあり。兒孫愛するがごとし。内ふたご。外ふた子。鎧嶋。かぶと嶋。牛嶋。蛇じま。内裏嶋。屛風じま。笆が嶋は。あまの小舟漕つれて。肴わかつ聲〳〵に。つなでかなしもとよみけむ俤を殘し。末の松山は寺となりて。松のひま〳〵墓を築く。羽をかはし。枝をならぶる契の末も。終には皆かくのごとしと悲し。野田の玉川。沖の石。宮城のゝ萩。武隈の松。猶此境に名をならべたり。しほがまの浦には。塩がまの明神あり。神前のかな灯籠。文治三年。泉の三郎寄進と記す。雄嶋が磯は地つゞきにて。雲居禪師の別室のあとに。坐禪石。瑞岩寺は。相摸守時頼入道の建立。當時三十二世のむかし。眞壁平四郎出家して。入唐歸朝の後開山す。其後伊達政宗再興して。七堂伽藍となれりける。法蓮寺は。海岸に峙。老杉影をひたし。花鯨波にひゞく。松の緑こまやかに。枝葉汐風

に吹たはめて。屈曲をのづからためたるごとし。其氣色宵然として。美人の顔を粧ふ。ちはや振神のむかし。大山ずみのなせるわざにや。造化の天工。いづれの人か筆をふるひ。詞を盡さむ。

富士ノ賦

嵐蘭

○不二は日本の蓬萊山也。むかし孝靈五年。山はじめて現ず。徐福も此山に登りて仙藥を求め。かくや姫も神と化してこゝに靈をとゞむ。峯は八葉にわれて。根は四州にまだかる。道路は三口よりのぼりて。千筋にわかれ。すそ野は東西に長して。百里につらなる。形けづりたるがごとく。高き事北斗に近し。夜陰に旭をかゞやかし。夏天に雪をいたゞく。山間に海をたゝへ。山上は眞砂を聳。和國異朝類するものなく。三國名山と稱じて。義楚六帖に甚ほめたり。日本武尊は。東夷をたいらげて。草薙の名をあらため。右大將頼朝は。ものゝふをあつめて。牧狩をかる。鳴澤の池は。俊成の仇名をとり。人穴の奥は。仁田が無分別さうなり。十郎の宮。五郎の社。西行は五文字をすへかね。探幽は墨色にあぐむ。烟は古今の序に。二流によまれ。雲は廻船に怖れて。一尺八寸の號をとゞむ。禪定の人は。寶冠に頭をつゝみ。下向道は。小袖の砂をふるふ。絶頂の鮗。半腹の雀。巣鷹は大心にして。伊豫の松山におとし。水鳥の羽音には。臆病になつて。都の方に逃る。ふじ海苔。不盡灰。富士甘艸。ふじ黄芪。栗。柿。松。檜の木のたぐひ。往還は竹の下越。根原ごえ。關は足柄の關。横ばしりの關。あら井の渡口。佐夜の山越。海を隔。峰をかさぬ。三保淸見寺の見越。箱根。鎌倉の姿。日本。兩國の橋上には。馬上の人の首をめぐらし。赤坂。駿河臺には。乘物の窓に眸をさく。遠くは朝熊山をかぎり。ちかくは原よし原のあたりなるべし。諏訪の湖には。倒の影を浸し。甲州の府には。三つ峯に見えて。扇の繪はこゝなるべし。むかしより。詩哥連俳の句數。合せてこれをつまらば。大かた此山の高さには比せむ。されど古今の間。たゞ一首秀たる者は。赤人の白妙なるべし。其余は此山に對して。万が一にも及ばず。吾翁。富士吉

野の句。一生なしとかや。東路に趣く人は。かくなりがたきふじの詠に。心力を費し。叉あづま路におもむかぬ人は。かく有難き富士を見ずして。一生を終るも。共に殘多き事なるべし。

湖水賦

李山

○近江。もと淡海なりしを。大宮にちかき江とて。近江につくり。遠き江を。遠江と號すとかや。仁皇十二代。景行の御宇。滋賀の郡に。遷都あつて。高穴穗宮に行幸す。三十九代。天智帝。大津の宮にうつり。廢帝の御宇。保良の都をたつ。近州はじめは十三郡。保疆潤澤。種千倍を得。春氣早く到。日本四番。大上ゝ國と稱す。仁皇七代。孝靈五年。地裂湖となる。同時富士山現ず。されば不二禪定するに。近江人を先達とさだむ。善積一郡は。已に湖となりて今はなし。わづか磯といふ一村殘り。古郡變じて。坂田の新郡に屬す。同國余吾。筑摩江の兩湖あれど。大きさわづかに二里に過ず。たゞ日本みづうみと稱ずる物は。琵琶湖の事也。形似たればとて其名とす。佐ゝ波賀國とは。風土記に出て。樂ゝ波や丹穗てるの文字は。萬葉よりはじまれり。東西十里。南北二十余里。山谷のしたゞる所。八百八川。湖を圍む水郷五百余村。中に大小の嶋あり。竹生嶋は周廻一里。寺院九坊。天女をあがめて。岩つなぎの神事あり。空海の祕密を封じ。經政の撥をひゞかす。武嶋はつくぶの半にたらず。沖の嶋は。沖津嶋山とよめる。漁人わづかにすめり。白石といふは。四石湖上に峙。樹木一株もなし。奥の嶋は。人家數百。疊の表を産とす。猪崎。岡山。黑づの八嶋。なら嶋は水鳥の巢つくり。勢田の中島には。蛇柳あり。入龜。出龜の二嶋は。筑摩江の中に浮ぶ。山は比良四明の翠をひたし。鏡伊吹の影をうつす。橋は勢田。青柳の橋。松は辛崎。千ゝの松。蓮は支那に名高く。蓴菜は四川に肥たり。柳大根。兵主蕪。八幡蚊屋。長濱絹。高宮布。野洲ざらし。高嶋硯。武佐墨。白部石。舟木材木。庭石は木戸によろしく。盆山の敷砂は大洞の白石。是方解石也 伊吹の產は。蕎麥。からみ。艾。石灰、藥種の

類。すくも。岩木。日野椀は會津の根本。しがらき燒は高麗の薬也。混元丹。百々薬。幡磨田米。醒が井餅。多賀杓子。綣村鍋。四十九張のきせる。池の川縫針。守山鞦。國友鉄炮。武佐判の八合升。（是レ柴田勝家之製、軍中兵粮ノ助トス。）端無のヂバン。（佐々木家ノ具足肩也。其子孫ノ者ノ。農父マデ手レ今着レ之。）大津馬は飛彈材木を飛し。鎌倉の生食も。本此國より出たり。湖中の獵頭は。尾上片山に綸旨をいたゞき。石垣つきは。阿野大を天下に用ゆ。白髭の御神は。湖水七度の芦原を見給ひ。磯崎の明神は。日本武の御廟也。多賀。日吉の神社は。しらぬ人なくして更なり。筑摩の神は。鍋の數に名高く。新羅の社は。源氏の大將より。感を盆とかや。大津四の宮の神社。今濱の八幡宮。豊滿の神は。幡竿を守り。宇賀野の神明は。第十四座の迁坐也。彥根山の天神は。幾津彥根命と申奉る。金德の御神なれば。金龜山に迹を垂。吾すむ平田山。鳴宮の天神は。御旅所也。流天神は。天津彥根命なり。木德の神にて。千々の松原に宮居し給ふ。名は神代よりはじまりて。大納言經信。贈答の哥にも。彥根山とよめる也。山上の觀世音。堀川の御宇。寛治三年。白川の上皇。御幸の地也。神社佛閣。金龜山の城の爲に。地を移して。今の北野寺に同坐あり。石山は觀音道場。石は白瑪瑙。山は黃金なり。皐州金山の始り。三井は園城寺。鐘に名高く。むかしながらの山ともよめり。夫山といへば。延曆寺にきはまり。寺といへば園城寺をさす。共に押出したる靈場也。坂本西敎寺は。天台淨土の一本寺。堅田の浮御堂は。惠心僧都の千躰佛。長命寺は。順禮の札に顯れ。猪崎の不動尊は。棹飛の術に名高し。矢取の地藏。木の本の地藏。石塔寺には。天竺阿育王の塔をとゞめ。（是所謂八万四千塔ノ一也。本ニ來止。三ツノ其一也。）日平流山は。行基四十九院をたてゝ。都卒の內院を移す。（三國傳記ニ云。昔シ鬼神靈山ノ一峯ヲ盜ミ。湖水ノ濱ニオロス。其下ニ隱テ石ト化ス。今ノ荒神山ノ蛇石是ナリ。）高野永源寺は。寂室派の一本寺。女人の高野山になぞらへ。番場の辻堂は。一向時宗の源にして。仲時已下の過去帳よりは。如是畜生の願文にてかくれなし。百濟寺の下乘は。小野道風の眞蹟。池寺の八夫の繪は。金岡の筆也。正樂寺は。佐々木道譽が菩

提所。コンクハイの狂言。白藏主が寺也。敏滿寺般若坊には。那須與市が願書をとゞむ。野寺の鐘。練貫の水。松尾寺の本堂は。飛彈の匠が建て。千年の星霜をかさね。瓦屋寺は。太子。天王寺の瓦をつくらせて。其殘り此地に埋て今もあり。東西本願寺の御坊。院家一家の寺〻。涛涼寺。龍潭寺は。禪の道場。窓には千嶺の雪を含み。門には万里の舟をとゞむ。菅山寺は。世に菅の寺といふ。菅家の遺愛寺也。安土山摠見寺は。信長の城跡。日本天守の始り。七重の甍を聳かす。廣間の名額。此寺に殘る。觀音寺は。佐ゝ木の城山。すなはち觀音城也。今濱の城は、太閤秀吉の。城の持初。坂本の城は。明智光秀が終りをとれり。俵藤太のながれは。蒲生家に殘り。六角京極は。佐ゝ木のわかれなり。稻毛三郎は。供御の瀬を知て。多勢を渡し。賤が嶽の七本鑓は。後代に名を擧たり。木の匠の豐後は。甲良の庄より出て。道を坂東に傳へ。鍛冶の貞宗は。高木より出て。名を鎌倉に揚たり。猿丸。黑主の舊跡をとゞめ。僧元政。季吟翁。皆此國の産也。すべて哥名所。一百余ヶ所。猶撰集に殘るものすくなからず。近江八景は。騷人墨客これを翫ぶ。これ近衛政家公の哥をはじめとす。國中土に灰汁なく。水に泥なし。音聲に淸濁をわかちて。うらの言葉をつかふ。桑によろしく。又茶に宜し。世に川魚といへる物は。湖魚の事なり。汐ならぬ海士のいとなみもをかしけれ。大網。卷網。四手。跡懸。手丸。唐網。魞。簗。カリ〱。竹瓶あさり。いさりのあはれもふかゝるべし。鯉。鮒は總名にして。鯉の品類。鮒のたぐひ。其名かぞふにいとまなからん。春は山吹の子をいだき。秋は鱗に紅葉をちらす。江鮭。鱒の名を變じ。鰣。鰙の味をわかつ。取よき物は鮇と名づけ。鯰は王城五十里を去ずとかや。勢田鰻。和爾鯵。氷魚は近江にかぎる。（内膳式云。田上ニ取進シタルヲ。宇治ニテ取。九月ヨリ十二月マデ供レ之氷魚ヲ捕モノヲ。網代ト云ナリ。）不賀比。（鮒ノフト。鰙ノカト鰉ノヒヲ合テ。其名トスル魚也。）鮎。小鮎。鯇。卵。水鮭子。山水鮭。ギヽ。鎚。蟹。小鰕。蜷。蜆。胴龜。石龜のたぐひ。獺は魚を祭り。川太郎は相撲を好。船は大津百艘と稱す。八十の湊。津〱浦〻。大丸子。小丸子。小ばや。川御座は大

名船。高瀬。傳馬は川舟なり。段平に大石を積。艜は耕作のたすけ也。（進肥村不レ入舟歐）棚なし小舟。堅田舟。比良の八講は。舟人湖上の風をおそれ。論義とは。風のさだまらぬをいふ。トイテとは。日和風。ハヤテとは。雨をさそふ。勢田嵐。伊吹風。ヤマせ風。ナガせ風。サキ風は春夏の名にして。秋冬は日あらし也。根わたしは湖上の風の名にして。宮内卿は漕行舟をながめ。臥佛老人は。路縱横と吟ず。眞野の鶉に袖をぬらし。山吹の崎にはこ鳥を聞く。万木の鷺。老僧の時鳥。鶴。白鳥。鵆。水鶏。鹿は玉川に啼て。百足は三上山をまくとかや。玉の濱の郁子を獻じては。新米の供御を備へ。在士の藤咲ては。藤堂家に花を捧ぐ。栗本の栗の木は。神代の沙汰にして。花澤の花の木は。今も咲なり。龍灯松は。已待の夜毎に光をあけ。大藪の雨夜には。星鬼の火を簑にうつす。抑江州八十余万石。皆此水にやしなはれて。年々の貢を備。大嘗會の稲穂を奉るも。たゞ此湖の潤ひなるべし。

前麿山賦

（麿山者丸山也、在肥長崎一遊廓之地也。）

支考

○七月十日。けふは二十万五千日の功德とかや。殊に女心の頼をける。物詣の日なるべし。此津の遊女どもの。人も見。人にも見られむと。よそほひたちたるに。ゆきゝの追風に。心ときめきせられて。花ずゝきのなびき合たる野邊は。男山もあだにたてりと見ゆらんかし。さるは浮草の世にうかれて。身をあだなりと見る人は。浦の見るめも。いかにあだならん。今さしあたりたる物思ひはなけれど。左右の翠簾ごしにのぞかれて。顔のをき所なからんこそ。うたておもはるれ。禿といふものゝ。何心なくて。茶漬喰たしと思へる。雀の花見顔にもたとへ侍らむ。をひさきいかなるあだ人にか馴て。物思ふ事もならひてむと。これさへあはれにおぼえられける。

〽草花の名に旅ねせむ禿ども

後磨山ノ賦

去來

〇十日（月カ）八日は。たふときちかひありて。ちかき山寺に佛をがまむとて。こゝの遊女共の。月まうでするなり。唐士舟も入つどふ湊なれば。浦人の氣色さへうちさはぎて。秋風の折にふれては。葛の葉のうらみがほに。磯アの鷹の大空に吹なされて。そゞろに人を思ひ驚（オドロ）くならん。それが中にも。はかなき世をちぎり。諸友（共）に苔の下になどゝ。一すじに。祈りおもへらむ人もあるべしと。あらぬ心さへ取そへられてかなし。見渡したる人〳〵の。をのが國びゐきに。物くらべしあそばむにも。難波の浦の。あしさまにはいはぬをと。ひたすらにあまの子の。あさましとのみ思ひあなづりて。都の商人も。手袋ひきたるためしおほしとかや。かゝる事などはいひいたるべき。年のほどにはあらぬを。西花坊に。此ながめの賦つくりたりとほのめかされて。終に後の賦のぬしとはなり侍りける。

へいなづまやどの傾城とかりまくら

（本朝文選巻之二　畢）

本朝文選 卷之三　五老井 許六選

譜（賦ノ誤カ）

○賦類 附譜

鼠ノ賦井引　去來

此賦以五音相通假名字爲韻

鼠。一ッの名はよめが君。又よめともよめり。其たね品あり。四尺の鼠は圖はづれにして。大なるは五六寸。ちいさきは寸にみたず。山椒の眼。小豆の鼻。齒は糸をつけて小袖も縫べく。耳は木の芽のめだつに似たり。尾をきつて錐のさやとなさばなしてむ。背腹の色にめでゝ。うすくも濃も染出せり。其行や。夜出て晝隱る。常にぬすみをもて身を養ふ。まことにくむべきものゝ一つなり。乃賦を作りて曰く。

○二月鼠の穴を塞ぐ。つく〴〵汝がいたづらをおもへ。家に居て人をおそるゝは。足のうらに疵持けらし。油をのむ事。世の酒にひとしけれど。いつしか沈醉を見す。粟を蠹し。器をそこなふは。殊更にいはじ。大棗をかむ牙にふるれば。病を生ず。はづかしき文をちらして。男女の中をもさまたげ。あやしき巣をつくりて。源平の亂をきく。何をへつらひて。佞人のためしに引出られ。いかにすゝめてか。書を焚代の宰相となしぬる。神佛のたふときも。尿糞に汚したてまつる。草の根をはむ月の鼠は。俊成卿のうらみなりけり。つく〴〵汝があやうきをおもへ。それ人の賢しきや。方木檻をまき吹矢を儲。黐をぬりて。往來もたやすからず。けはしき城をた

のむとも鼬を防ぐ手段はあらじ。杳なる空をながめては。鳶のつかまむ愁わするべからず。桁走り。障子のぼり。早業得たりがほなるも。おもはず升にかゝりて。いかばかりの思ひをすらん。虚死仕て仕合に。東坡が袋を逃たりとも。生捕れてなまなか。張湯が文をうけなむ。或は鈴を頸にさげて。兒童の戯となり。あるひは筆の用に髭をぬかれて。老の悔を殘せり。あやまりて晝鼠とあなづられ。濡鼠と笑はれ。更に吹鼠とくるしみて。人の爲にぞ悦ばれぬる。我さへかなしきを。燒鼠となりて。狐狸の命とらむこそ。あさましく罪ふかけれ。つく／＼汝が尊きを思へ。日よみの初に呼れて。位司いやしからず。百敷のかしこきも。甲子をむかへて。年の號あらため給ふぞかし。あら玉の春立かへれば。子の日の御賀あり。子祭といへるは。いづれの長者の傳へなる。からの日本の歌にもよめり。海原や。もしほの陰に友なふなまこは。海鼠とかゝれ。秌風の尾花がすゑに妻こふ鶉は。田鼠の化したる也。烏羽玉の闇き夜は。いかづちともなれり。象といへる獸すら。かつ恐懼ぬる。麝香鼠は筑紫に住なれて。こと國に行ず。かづき姿のわかやかなるは。嫁入の繪虛事にぞ。どこの乙子を七郎とは申す。新左衛門とつけるは。さかやきすりての後なるべし。大ねら小ねら。將廿日鼠と名のり。月／＼十二の子をうむ。誰が家にかとりつくし得む。もし白子出て。福の神にや愛せられむ。汝が隱里はいづくのほとりぞや。武藏野の鼠穴にや。出羽の境の鼠が關なるか。信濃の奥の鼠宿なるか。目出度身をもて。かり初の世をむさぶる。などか歸らん事をおもはざる。窮鼠かへりて猫を噛の志ありとも。三井の賴豪が。千疋のいきほひすら。本意を遂る事は。猶きこえざりけり。

旅ノ賦 并引　　許六

旅は風雅の花。風雅は過客の魂。西行宗祇の見殘しは。皆誹諧の情なり。我翁。白川の田植哥を聞初。奥羽の間をめぐり。高館の夏草に。兵共が夢を驚かし。あつみ山の夕凉には。吹浦を詠め。佐渡に横たふ天の川に。初秌の袂をしぼる。それよ

り蛤の二見を渡りて。七百三十余程を吟ず。曾良が落髪の力量を感じて。一鉢の飯を分ヶて。風流を盡さる。ひとひ芭蕉庵をたゝき。繪の雜談に及ぶ時。予に旅十躰の繪をかゝせて。讃じて何某が求めに應ず。其風雅にたより。俗語をあつめ。狂賦五段となす。あなかしこ奥の細道。草枕の類にはあらず。

「旅店のさま。上段に書院床。劍菱のすかし。火のなき火燵にやぐらかけて。門口の入湯桶。かたぶけて居たり。底に小砂のさはるは。夜べの殘りもいぶかし。出女のたて嶋は。春杯をしらず。根太板敷は落て。隅〳〵まで疊とゞかず。天井襖は。雨もりにきはづき。鉄行灯はくらく。紙はわらんべの心といふ事に燃たり。錢賣。草鞋賣にせがまれ。やう〳〵に枕をかたぶけ。心よき寐入ばなは。馬さしの聲に夢を破る。出立は七つといひふくめたるに。旅人も亭主もよく寐て。夜のあけてふためくつらもにくし。

〽大名の寐間にもねたる寒さ哉

道づれの上をいはゞ。船頭の胸づくしをとり。駕籠廻しをたゝき。馬さしとつかみ合。一僕の跡にさがるをねめまはし。鷄のなかぬに。つれの男を起し。挑灯とぼして。夜道を行を手柄とし。入湯の一番に入たがるは何の爲ぞや。つはの枯葉に雨のはら〳〵といふ前に。

〽世話やきの友にあきたる旅の宿といふ句も。此情にかなへり。

「海道の賣物に。餅酒のなき所もなし。磨針峠の餅をくはねば。未來焰王の前にて。からきめを見るといへり。寒天にも冷素麵をすゝむるは。逢坂の茶屋。饅頭のほか〳〵と見えたるは。見付の宿也。卵子の煮ぬきは。木曾の旅。はな紙は竹にはさみ。錢の肴板は筒をかけたり。昆蒻の田樂は。何ものゝ喰けるぞ。

〽乘かけに春の密柑や宇津の山

「舟川の上。馬駕籠の情。しば〳〵かぞへがたし。五月の大水も。かり借の手形に書入。おのが草の戸は流るれど。首だけの借錢を納して。しばらく息をつぐものは。嶋田金谷の賊なり。水の淺深を何文川とこたえ

たるは。大きなる洒落也。天龍の中の瀬は。馬人足を空にまとふ。乘人は股だけ入て。荷を肩にかけて待。あがるものは。屓れ支度して舟端に立ッ。旦那が鐙をかたねたるは。渡し場の情也。馬士駕籠舁は。輕重に日月を送り。一盃の酒に。浩然の氣をやしなふ。一生を漂々飄々とすまして。雲介の號を蒙り。炎暑の日も。玄冬のあしたも。榎の木の下に眠ッて。蟻の都に到。終に飮喰を座敷につかず。汁かけて出す馬士の食と作られ。小便はほしりながら。吸がらは手の裏にはたき。錢は耳の穴に納め。金は犢鼻褌に結ぶ。一とせの名殘も暮て。世にある人々のとぶく月日を。出替の季と定めけるは。世をやすうをくる人にも似たり。

〽出女も出かはり顔や年の暮

「流浪漂泊の上にこそ。あはれなるためしはおほけれ。獨り坊主には宿をかし兼。同じ所に二夜はとめず。五月雨の朝。霙の夕暮に。情ふかきあるじは。長持くさき布子かして。ぬれたる物を燒火にあぶる。あるは三寶荒神といふ物にしがみ付て。しばらく足を休れど。極めの札場より追おろされて。却てのらぬ前より股をすくめ。兩方の手に杖を携て。あゆむべしとも見えず。人間病死の到來は。時も所もまたず。醫療のたすけうとく。懷中のふり藥は。やう〳〵急病を防ぐ。巡禮飛脚の族は。路頭に倒れ臥シ。片目なる肝煎に追たてられ。老僧の愍みにて門下に入。おとろへかさなり。終に黃泉の下に趣く。かねて何國の土とならん。終をしらず。犬走の土中にこめて。年の齡。衣類の摸樣を小札にしるされて。何國のいかなる人といふ名もしらずなり行也。岡部の辻堂の笠に。經文をよみて。同行の別を惜み。隅田川の念佛を尋て。我子の古墳にのぼる。今來古往の人。旅懷の情を盡して。風雅の膓をさらす。能因は白川の哥をよみて。二たびみちのくにおもむき。不二都鳥の二句を求めて。すみやかに故鄕に歸る者は。貞室老人なり。東海道の一すじもしらぬ人の。風雅におぼつかなしといはれし。翁の聾耳の底にとゞまる。

揚揮豆賦　毛紈

○赤小豆殿の能には。一に俵に納り。二ににつとあかふて。是よりあかの仇名を取ル。初春の粥には疫をのぞき。卯月の空の牡丹餅。うるはしき名目を略して。今様のいき過は。ぼた〳〵とのみいひならはし。哥よむ人は。秋の夕のあはれなる名を好みて。萩の花とめされてより。誹諧の人は。隣しらずともよむなり。饅頭の唐韻めく時は。アンとよばれ。學のつよき物識のこびる時は。赤飯ともいふ也。深更とは。理屈人の名づけたる名にして。あかつきと解謎なるべし。蕪蔞亭に君臣の義を盡し。七歩の詩は兄弟の情を述。從兄弟煮。不死汁の名は。いづれの御時にはじまりたる由緒をしらず。又あや折の竹にからめき。張皷の糸につながるゝも。かれが中の一つの遊なり。嫌となれば大きに嫌ひ、好に逢ぬればおほきにすく。かゝる堪能を持ながら。頓の料理に煮かぬるは。いかなる小豆殿の御分別かおはしけむ。

四梅廬賦　僧李由

○恙を怖れたる時は。窩に住居し。氷の雨の用心とて。岩窟の所々に残りたる世もあるに。廂に孫庇をおろし。下側にしころをつけて。民の竈の賑ひける社めでたけれ。堅田の蜑の舟に年を重ね。乞食は橋の下に子を産たぐひ。鶯の巣のやさしく。鳥の巣のふつゝかなる。皆おのれ〳〵が生得なり。ことしの秋。予ひとつの巣を營む。燕の土をはこび。蟻の塔をくみて。四根の梅をたより。頬白の家をかゆるたぐひにはあらで。病鷄が塒に憑む。鳳凰の威をふるはむよりは。凡鳥の嘲りなからん事をよろこぶ。山鳩が逸物の鷹と吹上らるゝも心ぐるしく。たゞ一日の閑鷗とおぼえて眠る。蝸牛の釜打破らむとせがまれては。又出て蛐蜒の部とのらめく。蚫の貝の半造作。榮螺の蓋の戸もつらぬ住るながら風雅の友の入亂れ。賓主寄居虫の家をわすれて。例の夜應の寄合よと。はやされてたのしむのみ。

閑居ノ賦

汶村

○廬山の雨の夜に月をしたひ。たれこめて。春の行衛しらぬ住るもあるに。よしや吉野ゝ奥は住うくとも。うき世の嵯峨のさがなきよりは。中〳〵すみまさりけめ。栗栖野のおくの。菊紅葉の閼伽棚も。柑子の垣に見おとされ。宇治山の隱家には。梅柳の風流を爲れど人喰犬にさめたり。花は一もとのさびしきをうらやみ。水はとく〳〵の雫をしたふ。烋は東籬の下をめぐつて。沓の底をきらし。冬は西嶺のさむきを望て。笠の重さをわする。茶粥糂粏の輕みに。五臓を沙羅し、紙子背身のさびしき音に。千石をかへたり。詩は三籟の趣をさとり。哥は山家の風を好む。手桶一ッ。鍋二ッ。疊三。粜米四五升。手梟の拍子をおぼえて。紙のたくはへを忘れ。自剃の自由を得て。耳の危さをのがる。壁一重に市聲の喧しきを隔て。簾一枚に車馬の埃を避たり。世を捨。世に捨らるゝ類。まつ事もなくて明しくらす社。まとの閑居とはいふべけれ。今の閑居めくものを見るに。食には八珍を盡し。酒には五味をたしむ。揩枚の障子には。四季の花鳥を彩り。皮付の柱には。樟ふくらの名木を求む。額には花紺青の文字を彫め。軸にはきれ人形の箔を光らす。窪き所には水を湛へ。高き所に亭を築く。琴三味線の夕。小哥淨瑠璃の曉。隣家の眠を覺し。行人の足をとゞむ。粉白く黛翠なるもの屋をつらね。帶廣く袖長きたぐひ廊をめぐる。牡丹芍藥に數金を盡し。蘇鉄海石に財をついやす。伽羅は交趾をくべて蚊ふすとし。燭は會津をたてゝ。月の光を奪ふ。或は地黄枸杞子を植て。地子をつぐのひ又は瓜茄子を作りて。八百の店に出す。夕顏の借屋に。隣の生業を語らせ。柑類の菓擔には。錢の算用を聞。これらの閑居も。彼淸貧の閑居と名を同じうせむや。聖人いへる事あり。小人閑居して不善をなすとは。此閑居の見通しなるべし。

招魂ノ賦

文考

○西方の吾翁の魂あり。行ていづこにか歸ざらむ。た

ましゐ速に歸來れ。ことし神無月十日あまり。湖南の舊草に。門人あそむでたましゐをまつ。またばなどか歸り來ざらむ。たましゐそれかへり來れ。柴門に春の花ちれば。鳥驚きて別をうらむ。蓬窓に炢の月落れば。人荒て住(スマ)ずなりぬ。さればすみれ草の住よき世中に。何に卯の花の垣ねとはよみけむ。時鳥の行衛なからむにも。春の鴈の終にかへらずやあらむ。しからばたましゐいづこに行としてか。還(カヘ)るに道なからむ。還來(カヘリキタ)れ〱。王孫むかしは草とおひぬ。蘼蕪(ビブ)の香いまや衣にみつらむ。まして花薄の穗に出てよ。まねかばなどかへらざらむ。魂すみやかに還來れ。東花坊は。此日のあるじまうけせむに。かの蕎麥切(ソバキリ)は。宇津の山道の細き手際にはあらねど。むかしの心わすれざればなり。豆腐は夜寒の都ぢかく。蒟蒻(コンニヤク)は黑津の里の名にしあへり。いかで世の人の風味にあまからんや。琥珀の霜をふるは。菓(クダモノ)やゝかうばしく。瑪瑙(メナウ)の氷をふくめるは。酒吏にみどり也。香花なをさばかりならむや。魂まづ歸り來れ。たましゐ何にかあかざらむ。さゝ波や。打出の濱のむかしおぼゆらむ。水渺(ベウ)ゝとながれて。山更に長し。長等の山の山櫻も。たゞ春のあだなる物にさきちりて。志賀の古びぞ年〱なりける。かの辛崎の松の孤(ヒトリ)のみ。花の朧(オボロ)のちぎりやはわすれむ。殊にあはれむべき比良の高根は。入江の駒とむべき人こそなけれ。むかし堅田の。秋の夜寒に落ては。病鴈の旅ねに。其身を佗しか。其後のたよりはきかずなりぬ。さるは水ぐきの岡の。名のみとむらん。鏡山の面かげも。今宵は待人あるにぞありける。松風の音羽山とかや。こなたの岡はまそばの花も咲たり。世に逢坂の關はあれど。粟津の原のあはでや歸らん。魂こゝに歸り來れ。世にいふ天堂は。人の心あまし。さるは風月の情過(スギ)たらん。地獄はたゞおろそかに。まして風雅のいとまもなからむ。されば彌陀ほとけのねぶりて。いとたふとげにおはせど。左右の御手(ミ)の置(ヲキ)處なからむに。地藏ぼさつは色のみ白うして。梅の花の寒き所こそおはせね。焰王宮の人ゝも。たゞ世の人を是非のみ見むとすらむ。そも打とけたる心もあるまじ。しかるに杜國嵐蘭がともがら。圖(ヅ)司何がし。岐山の落梧までに。

明暮の心隔つまじけれど。十とせあまりの。風雅の變におくれたれば。それも心ゆかぬ所ありて。相手にはいとゝほしからむよ。然らばたましる誰にかよらむ。歸りて是を見ざらむや。たましるとく歸りきたれ。むかし誹諧に。詩哥の信ありといはれて。鶯の花に鳴。蛙の水にすめるたぐひ。いづれか信なからんと。俗は是をもて世をいとなみ。僧は是をもて後世をたのまむとせしに。中比はいかいは信あらずとふみやぶられて。信ある人は。このまとなしと誹り。僞ある人は。このいつはりなしとよろこぶ。そも又炭俵。後猿蓑の變なるべし。今や俳諧は。信あらざるにもあらずといはむに。世に指をたふすもの。終にいくばくもあらず。其あらずといふもの。こゝにあらざらんや。此日の魂すみやかに歸り來れ。かへらば吾ガ翁にせむ。魂誠にかへり來れ。魂誠に歸り來れ。

○譜類

百鳥ノ譜

文考

○鶴は仙家のもの也。是がみさほは人にちかゝらず。むかし陶淵明に。達磨の風骨ありといへるものは。鶴に淵明が風流ある事をしらず。されば野草の花の。あきらかにひらきぬる時。柴門の月のあらたにすめる夜ならむ。此ものひとりは見まくおもふ也。しかるを鳶の無能にして。衣裳もおろそかに侍るは。まして風雨にもいとはじとならん。かの莊周が夢に。胡蝶とあそべる。是もむつかしとやはおもふ。

「雉子の啼聲はいとかしこきに。百矢の數をのがれずやあらんといはれて。一朝にたまの命を落しぬるは。是も韓信が輩の。文武をつくさゞるものなるべし。

「蒼鷹の人を見こなして。眼の内に。あらゝかなる才智をそなへたる。いとにくし。されど一藝に名あるものは。世の人それをゆるしもしつべし。

「かの斥鷃が蓬生の宿は。膝をいるゝに過ねば。大鵬の雲の万里をうらやまず。さらばをのれをたのしむのみにして。かならずうらやむ方にもあらず。彼鳳凰といふ鳥は。いかなる鳥にかあらむ。

「稲負鳥呼子鳥とかや。はこ鳥は春に住なるよし。なかぬ物にやしらず。椋と樫との二鳥は。其實をはめる時の名なるべし。しかるを鶫といふ鳥の。花におきふしたらむ。いと心得ね。木々の花の咲こぼれて。明ぼのゝ雪にもまがへる時は。駒鳥の聲のみ。ひやゝかにしていとよし。されば此鳥の名は。聲のたぐひをいへるならん。をのれがかたちを。名になせるものは。目白頬白のたぐひなるに。鵲は殊におかし。年々菊をいたゞきける。自然の理はあやまたねど。ことしは珍しう。梅花をもかざせよかし。

「雲雀は終日に啼暮して。はては雲にもふすにかあらむ。此ものは小春の空をよくおぼへて。鳥羽の田づらなどに。ふと啼出たるに。かゐつけて囀る鳥もなければ。あはれさびしきものかなと。おもふ時もある也。

「三光は。啼時に月日星といふなるよし。むつかしとも思はめや。佛法僧と啼鳥ありて。高野の山にのみ住なる。是をも三寳とこそいはめ。しかるに鶯の。法花經と唱ふる。さるは世さらに老めきたるわざ也。提壺の美酒をかひ。布穀の袴をぬけよといふは。昔をのれがゆへならねど。世の人のしからしむるものなるか。蜀魄の不如歸と啼は。きはめて托物の聲ならくのみ。

「秋の雁の江天におくれ。時鳥の暁の雲にさけぶ。いづれにかさだめ侍らん。雁はあはれに。ほとゝぎすは悲し。

「鸚鵡は恩をわすれぬよし。此國にはまれ／＼なれば。よくもしらず。むかし蔡君が鸚鵡は。琵琶が身まかりし。跡の名を呼つたへしに。心をいたましむ潯江のほとり。おなじくあそべどもおなじくかへらずといへる。配所の詩ならばさもあるべし。我國の鳥も。物はえいはずして。万里の別をしたひ行けるとかや。（扶桑十異志八ニ有下飼鳥渡テ海ヲ慕ニ主君ニ之故事上）是さへおもひかけぬ事なるべし。

「燕もゆかりはわすれぬ鳥也。終日にひるがへり。終日に囀りて餌にはかならず身をつくさずや。いはゞ江湖

の僧の。一夜二夜にちぎり捨て。身を雲水にまかせたるが。年を經て後は。見しらぬ人もおほかる。されば行脚の身の。人にもおくられ。をのれもおくりたらんに。涙のこぼるゝは。いかなる時にかあらん。かの法師の。宿かし鳥とよみつゞけぬるより。孤村に出て夕陽を啼盡せば。誰が家にか今宵もおくらんと。あぢきなき事もおもはるゝなり。

「鷓鴣とは名のかしこきもの也。青草の暮の雨には。遊子の魂をおどろかし。黄陵の曉の雲には。旅人の涙を催す。すべて夜啼ものはかなしきに。水鷄は隱逸の風情を得たり。

「星月夜のおほつかなき比は。磯のちどりのおほくあつまりゐて啼は。心もきゆべくてかなし。たゞ人の別墅なる所に。水の湛もいと淺くて。常は來馴てあそぶらん。戸などかゐやりたる音に驚て。忽二三聲のすみ行は。其あとも遙に見送られて。河風寒しと思ひ出たるは。またるゝ人もなくて。何にかはせむ。

「鴫はましてたつ時のあはれなるに。馬糞といふ鷹の。風にひるがへりたる。なまうかひにていとにくし。彼澤の夕暮は。江山の風情をそなへたれば。もろこしの雲夢ときこえし澤は。いかなる澤にかあらむ。

「白鷗は人をさけて。をのれ靜なるものなり。しかるを諫鼓鳥の。をのれ啼て。人をさびしがらせむとす。なべて卯の花の曇は。いとねぶげなるに。夕日の影も木の間にちり殘りて。山にはおもひかけぬ鳩も啼也。啼處のさだかにしれねば。是もいとさびし。此ものはひとへに雨の日をかなしめるとかや。百花の深き所ならば。終日ぬるともいとはざらまし。

「梟の晝出て。まよひありきぬるいとおかし。かならず笑はれじと。はたらきたる顔にもあらず。さるたぐひの老僧にや。むかしも市中にあそびゐける也。

「深草に住なる鶉は。其聲すみやかにして。世をはゞからず。山にもちかく。水にも遠からず。粟の穗の靜なる時は。こゝにも出てあそぶなるべし。

「啄木鳥の飢をしのびかねて。木にそひ。梢をたゝきあるきて。終日しづかならぬこそ。はかなきわざなれ。か

ぎりなき生涯の。いとなみとならば。誰も〳〵あさましき事おほかるべし。されば空山の日影に。霜たばしりて。楢の柏もちり〳〵に吹れ行比は。此鳥の聲の更に幽にして。いざや。張道士が家を。とぶらふ人にも似たれ。

「木がらしの夜一夜吹あかして。しのゝめには吹ずなりぬるを。さし出る朝日の。殊に珍しう。さし籠たる障子のかぎりは。もゆるばかり長閑なるに。物の影のさと過て。またゝきもあへぬは。いかなる鳥にか侍らんと。いつも〳〵おもはるゝ也。蓋鷸などの。ゆるやかに舞ありくも。隙を過るほどなれば。あはたゞしきか。

「軒の雀の晴をよろこびし。何やら殊の外に囀る。是は市人にもたとへ侍らん。鶏は碁僧の風情にして。人の隙を窺ひありくものなり。家鴨もおなじ家にはありて。をのれが身をおしともおもはずや。たゞに淤泥のけがれをもいとはずして。是ゝ世の外に出て。物にもかゝはらぬとおもふは。さばかり悟たがへたる事は。世の人の上にもあるかし。そなへをきたる翅も。いつかは青雲の心ざしにあへらむ。誠にあはれむべし。

「世に人を葬る者ありて。常は顔など見合すべきにもあらねど。なすべきわざあれば。呼て酒のませ。價をもやりつ。しかるに鵜といふものは。詮なき鳥なるべし。早川に魚などかづきあげたる。をのれならずとも。網しても得つべし。さるものならば。わきまへぬ事もあるべきに。人の手にかはれて。追はみたる魚をも。白地に吐せて。それをめでたしとさゝめかし。笹の葉打きせて。おくりもおくられもする人は。鳥よりは一しほもおとり侍らんか。鷹は羽の下に鳥をくみ敷て。譽れを人にも見られむと思ふは。せめて名の爲にもなさばなりぬべし。さらば此ふたつのものを。我友となさば。打をきたる心のいとまもなからん。

「鵙はたちゐにつれなくて、へつらはぬものなり。子など持たらばいかにかあらん。

「鷺の風情はいとなまめかし。何がしの中將が。はつかに人を思ひそめて。雨にもそぼち。露にもしほたれて。常の心もさだかならねど。色には出じ。〳〵とこそしのぶなりけれ。されど田面にうかれ出て。田螺ふみまよふ

比は。まさしくさるものゝ。たとへともおぼへずなり。

┐楚臺の夢は。一夜の枕に驚き。驪山の契は。万里の雲を隔つ。朝の嵐に。錦帳を動せば。李夫人が影も。ふたゝびはかほる事なし。しからば翡翠といふ鳥は。いかなる美人の魂にかあらむ。杜子美が衣桁に啼といへるも。此鳥ならで外はあらじ。名にめでゝ是を我友となさば。はしなき人にやあやしまれむ。名を聞より。其姿のおもはるゝ。鴛鴦の中は更也琉璃といふ名は。世の人のきゝをもかざれるかな。

┐鶯の聲は。滑にして。殊に佳所もいやしからねば。是も美少年のたぐひにはあらめど。風情やゝおだやかならず。まして夜なかぬは。いぎたなしともいへりけり。

┐鳶烏の世をさみたる中にも。烏ばかり觜のいやしきものはあらじ。夕べには寐まどひ。朝〻にははやく起て。前栽の木の實などにつきては。ゑおもひ捨ずや。いかなる時にか。息などもつまるやうに啼て。いとゞにくさげには侍るなり。それをも神のつかひのみならば。かゝる事いひもせまじ。

┐およそ鳥の。觜のたいらぎたるものは。死水のあかを啜り。とがつて長きものは。魚を探り侍る。五穀をはめる鳥の。まどかにしてほそやかならぬは。誠に備たる事なるべし。觜のさきのかゐまがりたるは。をのれが友をやぶるべきたくみにや。いとおそろし。

┐鳥にして鳥の名にあらざるものは。鷓鴣の一名を泥滑ゝといひ。倭國にも。行ゝ子といふ鳥ありて。聲は少にごりたるやうに侍れど。啼時はやゝ涼し。かの明ゝといふ鳥は。かしらふたつにてはめるよし。むかへて我友となさば。米櫃の底をやはらはれむかし。

┐世を便ゝといふ鳥ありて。春秋のさかゐをしらず。遊ぶ所又常なし。しかれども。巣つくらふ鳥の。明てはわすれ。暮てはかなしめる類にもあらず。たまく啼聲はありながら。公冶長が輩ならねば。しるものなし。（一說ニ夜遊テ朝寐ヲ好鳥也。其餌ハ。蕎麥白米ノ類。饅頭ハ嫌ナリ。）誠にしるものなからましかば。世にありて是も又詮なし。其形にたぐへたる隆鼻鳥は。常に人の惡をたゞし。（愛宕高雄ノ山ニ在テ。杉ノ木ニ寐ル鳥ナリ。）迦陵頻は。聲の美におぼれたれば。我はしらず。かの蝙蝠といふ

ものにしたがはむか。

百花ノ譜

許六

○當世の人の花過。古人の實すぎたる。いづれの時か。花實兼備の世あらむ。

「梅の風骨たる事。水陸草木の中に。似たる物はあらじ。十月一陽の氣に。燦々たる江南の玉妃。まづえめるより。生涯を物ずきにくるしみ。風流のほそみに終る。是を色にたとへていはゞ。吉野高尾などいふべき遊君の。心おとなしく。名を耻。いき過たる心より。桐火の高ぶり。かたち痩ぎすに。涙もろく。きのふの我に飽ける心より。一たび着たる衣類調度など。ふたゝび目にもかけず。人に打くれ。金くれる男なれども。愚癡なるにはすりぬけ。請出さるゝ場所をはづして。はづむだる男の一言に。百年の富貴をかへたり。借錢の利に利をかさね。やう／＼盛も過たる比。生前の本望を遂て。幽なる住居に。朝夕の烟をたてゝも。猶物ずき風流の細みに富めり。子さへなくて。夏冬の寐覺もやすし。待事もなくて。世を靜にいとなみ。同穴のかたらひを。なせる人には似たり。

「紅梅といふ花は。一度彼岸參の心を動かし。未開紅の光をはなちぬれども。やがて蕾くだけ花ひらけてより。日／＼におとろへ。雨風を帶。夕日にしらけて。つぼめる色を失ふ。たとへば三十過たる野郎の。大躍につらなり。心ならず風流をつくりたる心地ぞする。

「櫻は全盛の傾城なり。天晴當風に打こみたる風俗。行末明日のたくはえの。一點もなき花なり。

「海棠は。同じく時を得たる野郎の。大夫と仰がれ。勢ひもさかむに。世ノ中猛とのゝしれども。質素にしてうるほひ少し。誠に香のなき一色の。欠たる心地こそ本意なけれ。

「梨花は。本妻の傍に侍る。妾のごとし。よろづ物おもひにうちしづみ。常に人の下にたてるがごとし。

「椿は。はたゞありの人の。本妻とむかへたるが。端手なる風俗をも似せず。ありがゝりに家を治め。身を脩め

るをもとゝし侍れども。さすが女色なれば。うす化粧に紅粉をたえさぬ。身持のよき花なり。

「桃は。元來いやしき木ぶりにて。梅櫻の物好。風流なる氣色も見えず。たとへば下司の子の。俄に化粧し。一戚を着飾て出たるがごとし。爛熳と咲みだれたる中にも。首筋小耳のあたりに。産毛のふかき所ありていやし。

「藤は。執心のふかき花なり。いかなるうらみをか下に持けむ。いとおぼつかなし。

「山吹のきよげなる。眉目容すぐれ。鼻筋おしとをり。襟廻り奇麗に生れつきたゞ透融なッどいへるばかりにて。さして命をかけてとおもはざるたぐひこそ。女の本意といふまじけれ。

「長春。薔薇のたぐひは。紅白うつくしく。粧ひたるには似たれど。元來いやしき花の。殊にさかり久しきこそうたてけれ。たとへば惣嫁といへる辻君の。日のくるゝを待兼。世上に徘徊し。物ごゝろおぼへてより。其ながれをたてゝ。五十にちかき比まで振袖を着し。始もなく。終もなきこそうるさけれ。

「牡丹は。寵愛時を得たる妾の。天下にはゞかれる。心なげに打ほこり。常は嫉妬我執のいかりふかくして。青天にむかつて。吐息をつきたる風情に似たり。

「芍藥といふ花は。いまだ嫁せざる娘のよはひも二八にあまりたるが。ねよげに見ゆる心地ぞする。

「罌粟は。眉目容すぐれ。髮ながく。常は西施が鏡を愛して。粧臺に眠り。後世なッどの事は。露ばかり心にかけぬ身の。一念のうらみによりてごそと剃こぼして。尼になりたるこそ。肝つぶるゝわざなれ。

「杜若は。のぶとき花也。うつくしき女の盗して。耻をしらぬに似たり。

「あやめは。小づくりなる女の。目を病る心地ぞする。

「百合花は數品おほし。笹ゆり。博多ゆり。鬼百合。色は異なれども。元來一種にして。生得いやしき花なり。たとへば輿車にのれる位なければ。かゝえ帯つよくからげあげ。上づりに脛たかく。あゆみ出たる女に似たり。

「姫百合は。十二三ばかりなる娘の。後に帯うつくしく結びたるがごとし。

「合歡の花のねぶ氣なるは。深閨の中に縫物をかゝえ。晝眠る女に似たり。過にし夜半の。いかなる事かありて。かくはねぶりけむ。いとおぼつかなし。

「其下に晝顔の目を覺したるは。廿にちかき比まで。男心をしらぬ女の。はじめて宮づかへに出たる比の。よろづつきなきありさまならんか。

「紫陽花の花は。色白に肥ふとりたるが。ちかくよりてみれば。白病瘡のあとのすき間もなくて。興さめてやみぬ。

「蓮はうつくしき所すくなし。たとへば上手の繪にかける。天人の顔にひとし。どこやら佛めきて。心こそおかるれ。

「卯の花は。第一名目よし。時鳥の來べき比は。かならず咲とおぼえたるこそをかしけれ。うつ木の花といふ人は。無下の事なり。卯の花月夜の夕すゞみに。しろめなる衣装に。黒き帯仕なしたる女の。ふと打つれたるが。行違ふ程もなく立わかれて。顔のほどもおぼつかなく見かへせば。はや尻影ばかりを。見送りたる心地ぞする。何方へかかよふらんといとなつかし。

「朝顔の盛すくなきは。よき女の常は病がちに打なやみ。土用八専のかはる〲。隙なきに打ふし。一月の日數も。廿日はかしらからげ。引込たるが。たま〲空晴きり。朝日さし出たるに。心地よげに打粧ひ。衣装などあらためて。ほのめき出たるには似たり。

「鷄頭は。和のなき花なり。よからぬ女の。一筋に貞女をたてるがごとし。

「らにの花は。蝶の羽に薫物すと。先師の腸より捜出し侍るこそ。其佳人の面影もなつかしければ。これに先をこされて。口を閉ていはず。

「鳳仙花といふ花は。是もけば〲しく。紅粉鉄醬を粧ひ。人の眼を驚かすやうなれども。手に携えて見るべきものにもあらず。木ぶり葉つきのいやしき事は。彼出女の李喰口もとには似たり。

「女郎花は。いにしへより女にたとへ。我落にきと。法

師の破戒によめるは。女郎の二字になづめるならんか。初秌の風によろめきたてるも。菊にさきをかけられたらむは。手柄やすくなからんと。おもへる物ずきこそやさしけれ。此女郎花といへる物。花にしてはちと請取がたし。たとへば聟のうつくしきを撰みて。小哥を習はせ。髪をおろして是を比丘尼とはいふ也。大卒は女色にして。かざりなければ。大象をつなぐべき。執心のきづなもなし。さればとて。男色のかたづまりたる類にもあらで。男女の中にたてる風俗也。此花百花に類する姿なし。古人蒸栗のごとしといへるは。草實のたぐひに比すべきか。莖も花も等しく黄にして下葉すくなによろめきたるは。彼比丘尼のたぐひとや見む。

「桔梗は。其色に目をとられり。野草の中に。おもひかけず咲出たるは。田家の草の戸に。よき娘見たる心地ぞする。

「萩はやさしき花也。さして手にとりて愛すべき姿はすくなけれど。萩といへる名目にて。人の心を動かし侍る。たとへば地下の女の。よく哥よむときゝつたへたる。なつかしさには似たり。

「菊の隱逸なるは。和漢ともに名にたちたる花なれば。あらためてはいひがたし。風流物好。目だちたる事を嫌へるは。よき女のおつとなどにおくれて。閑なる片はづれに立しのび。よはひもいまだ三十に。なるやならずの盛なれば。さすがに髪などおろすべくもあらず。たゞ一人あるおさなきものにひかれて。心ならず世中に住佗たるを。はづかしとおもへる人には似たり。

「寒菊の霜をいたゞき。雪をかづける中に。忽然と精骨を盡したるは。天地造化の行はれざる所はなしと感ぜり。たとへば越路の果のはてにも。三國。金澤。富山。高岡などいへる所〳〵に。おもひかけず風流のある心地ぞする。

「冬牡丹のしやれ過たる。たとへば大津伏見など。分内狹き所の遊女町。工商の家ゐ軒をならべ。打交りたれば。白地のむすめども。傾國の風俗を見習ひ。養父入。生身玉の里がへりに。しやれを盡し。一向遊女の立振舞に似たれば。兩親いかばかり悲しと制しつら

む。時と所をしらざるは。大きなるいき過ならむ。「當世の人の花過。古人の實過たる。嗚呼いづれの時か。花實兼備の世あらむ。或問云ク。當時人情の花にうつり。鳥に心を驚かしやすきは。ことごとく此文章に盡て。はじめて人の耳目を動し侍る。今先生が歎く所の俳諧の實は。いかなるをいふにかあらん。おぼつかなし。はやくこれを明し。はいかい大道に悟入させよ。答テ云ク。夫レ實のかたちをいはむ。茘子の顔のぶつぶつとしたる。實性の人の髭尤よりくるしく。若暑き題の哥よまむとおもはゞ。はやく此もとに立よるべし。姫瓜の丸顔は。さんちや風の俤あり。瓢の青ざめたる。熟柿のあから顔。下戸上戸はふるくして。今様は是をとらず。日やけの梨のじやぐれたる。座當のあたまこそ。俳諧の實には究り侍る。

山水ノ譜

許六

○凡山水をゑがくに法あり。一丈の山には一尺の樹。一寸の馬には豆ほどの人なるべし。遠人には目鼻を書ず。遠樹には枝なし。遠水波なくして雲とひとしかるべし。岩に三面を見せて。道には二の岐あるべし。すべて畫は遠近を知を第一とす。遠山ちかき山とつらならず。遠水ちかき水とまじはらず。林木遠きものは疎平にして。近きは高密なるべし。葉あるものは枝やはらかに。葉なきものは硬。土に生ずる時はなをく。石に生ずるものは曲れり。古木は節多して。半ば死を書べし。四時の變化を察し、山の淺深をしるべし。山谷樹深き所には。寺觀樓閣の屋ねを重ね。水郷山店の間には。酒旗の青白を飜すべし。これ王摩詰が。山水の賦の法式なるべし。やまと山水とてかはりあらず。されど城ある所には。天守を聳かし。神社ある地には。鳥居を書べし。山石水木ともにやはらかに。櫻は白妙に。和松は緑にして。これ其和漢各別の沙汰なるべし。富士は下野長く。景大やうに書べし。松島はあやしくたえに。景冷じかるべし。象潟は景を殘してあはれに。九世戸は景等分にして麗しかるべし。須磨明石はあはれにさびしく。吉野龍田は花やかにさびし。住吉は神久

て面白く。泊瀬はむかしなつかしかるべし。六玉川。近江八景。風雅の上をもて知べし。唐の僧。和の江湖を見ていへる事あり。これ唐の西湖に十倍せりと。和畫西湖を寫して。帆ある舟をはしらす。唐の西湖は水淺くして。人の溺るゝ湖にあらず。たゞ遊人の舟のみといへり。世上に洛中洛外の繪とて。切箔惣金をきちらし。丹青鮮かに彩り。黄白細微に文をなす。奴の頰髭に墨を點じ。傾城の唇に丹を含む。これ其遠近をしらざるもの也。假令丹青は塗とも。洛中城外の景色は。まつたく山水の部にして。遠人の格式なるべし。すべて畫圖をよくせむものは。先風雅をしるべし。古人畫中ノ詩。詩中の畫といふは。此所なるをや。世に料理する者。魚鳥を切事を知て。喰事をしらず。畫工はゑがく事を知て。面白事をしらず。されば面白事しらずして。面白事を書ざるは。何のおもしろき事あらんや。

本朝文選卷之三 畢

本朝文選巻之四　五老井　許六選

說

○說類

蓑虫說　素堂

○みのむし〳〵。聲のおぼつかなきをあはれぶ。ちゝよ〳〵となくは。孝に專なるものか。いかに傳へて鬼の子なるらん。淸女が筆のさがなしや。よし鬼なりとも。瞽叟を父として舜あり。汝はむしの舜ならんか。

「みの虫〳〵。聲のおぼつかなくて。かつ無能なるをあはれぶ。松虫は聲の美なるが爲に。籠中に花野をなき。桑子は絲を吐により。からぅじて賤の手に死す。

「みのむし〳〵。無能にして靜なるをあはれぶ。胡蝶は花にいそがしく。蜂は蜜をいとなむにより。往來おだやかならず。誰が爲にこれをあまくするや。

「みのむし〳〵。かたちの少なるを憐ぶ。わづかに一滴を得れば。其身をうるほし。一葉を得れば。これがすみかとなれり。龍蛇のいきほひあるも。おほくは人の爲に身をそこなふ。しかじ汝がすこしきなるには。

「蓑虫〳〵。漁父が一糸をたづさへたるに同じ。漁父は魚をわすれず。風波にたへず。幾度かこれをときて。酒にあてむとする。太公すら文王を釣の誚あり。子陵も漢王に一味の閑をさまたげらる。

「みのむし〳〵。玉虫ゆへに袖ぬらしけむ。田蓑の嶋の名にかくれずや。いけるもの誰か此まどひなからん。鳥は見て高くあがり。魚は見て深く入。遍照が蓑をしほりしも。ふるつまを猶わすれざる也。

一蓑虫〳〵。春は柳につきそめしより。櫻が塵にすがりて。定家の心を起し。秌は荻ふく風に音をそへて。寂蓮に感をすゝむ。木がらしの後は。空蟬に身をならふや。骸も躬も共にすつるや。

又以二男文字一述二古風一

蓑虫ゝゝ　落入二窓中一　一絲欲レ絶
寸心共空　似二寄居状一　無二蜘蛛ノ工一
白露甘レ口　青苔粧レ躬　從容侵レ雨
飄然乘レ風　栖鴉莫レ啄　家童禁レ叢
天許作レ隱　我憐稱レ翁　脱二蓑衣一去
誰識二其終一

柴賣ノ說　凡兆

○柴賣の柴うる事。小野。細河。くらま。高雄もあれ。矢背。小原は。花園梅が畑よりは先おかし。深山柴をのが竈に折くべてといへるは。すめるあたりの氣色ならん。かの秦の毛女が賢にも似ず。河陽の焦子が仁にもあらず。唯世渡りのよすがにして。女は都に出てこれを賣。夫は山に入てこれを樵る。頭は日に晒せども黑く。足は泥に染れども白し。さすがに建禮門院の女房。阿波の典侍の局などいふ人の名殘あるにや。あをきひとへは。色香の爲に衿をつくろひ。秸して二布をあらはし。白き手おほひ。しろきはゞき。白き帶はうすくたゝむでうしろにむすびさげ。幾男の心をか動す。春は躑躅山藤を戴き。茅花虎杖をたばね。行さき〳〵の山づとゝなしぬ。道のほど一里二里。とをくは三里にあまりて。肩かゆる業もなく。花の陰には睡をもかけず。漸く京の町にちかづきては。歸の事どもちぎりて。大路小路にわかる。或はおろして門をはき。あるひは出口の市に米をしろがへて。小袋の首をくゝる。月の夕はつれにおくれて。紅葉の雨を分行こそ。いつかは我屋にいたらめと。見るをだに物うきに。東の翁の笑ひて曰く。身のいやしきを思へば。官女もかたらひがたし。心の鈍を思へば。傾城もなをまじはりがたし。若妹背をなさむに。此をなごをなむどいたはり給へり。左禮言ながら殊勝にぞ侍る。

閉關説

芭蕉翁

○色は君子のにくむ所にして。佛も五戒のはじめにをくといへども。さすがに捨がたき情のあやにくに。あはれなるかた〴〵もおほかるべし。人しれぬくらぶの山の梅の下ぶしに。おもひの外の匂ひにしみて。忍ぶの岡の人めの關も。もる人なくばいかなるあやまちをか仕出てむ。あまの子の波の枕に袖しほれて。家をうり身をうしなふためしもおほかれど。老の身の行末をむさぶり。米錢の中に魂をくるしめて。物の情をわきまへざるには。遙にまして罪ゆるしぬべく。人生七十を稀なりとして。身の盛なる事は。わづかに二十余年也。はじめの老の來れる事。一夜の夢のごとし。五十年六十年のよはひかたぶくより。あさましうくづをれて。宵寐がちに朝起したる。ね覺の分別なに事をかむさぶる。おろかなる者は思ふ事おほし。煩惱増長して。一藝すぐるゝものは。是非の勝るもの也。是をもて世のいとなみにあてゝ。貪欲の魔界に心を怒し。溝洫におぼれて。生かす事あたはずと。南華老仙の唯利害を破卻し。老若をわすれて。閑にならむこそ。老の樂とはいふべけれ。人來れば無用の辯あり。出ては他の家業をさまたぐるもうし。孫敬が戸を閉て。杜五郎が門を鎖さむには。友なきを友とし。貧を富りとして。五十年の頑夫。自書し。みづから禁戒となす。

〽朝がほや晝は鎖おろす門の垣

師ノ説

許六

○いにしへ學ぶものは必師あり。師は道をつたへ。業を受。惑を解ものなりと。されどもろこしにも。此事久しくたえてつたはらず。まして吾朝には。むかしよりさる事をきかず。往昔神道のさかむなりし時は。唯一の師ありて道を敎る事。退之がいひにかはらず。然るをいつの比よりか。兩部といふ事はじまり。神道は日〻にをとろへ。佛法は月〻にさかむにして。和國の風俗はたえ果。やう〳〵家〳〵に大黑どのをあがめ。初春をむかへては。え方棚にしめ引まはしたるこそ。はつか

に和國の道の残りたるしるしならめ。當世佛道の師たる人々見るに。大路に門をし拔き。鐃鈸を打て貴賤をあつめ。利益を說て寳を蒔かす。其弟子となる者を見るに。孤になりて家業にたよりなき人。あるは飛鳥川の淵瀬にかはりて。家を賣田をうり果ては。行所なき人。又はあほうの子共。片輪者の行末。父母の産つけたる黑髪。露ばかりもをしまず剃落し。素性法師がつぶりを撫ては。たらちめはかゝる涼しき事は。よもしらじなど輕みに落し。何某寺の新發意とはいふなりけり。これもいにしへの師道に相似たれど。世を渡る口すぎなれば。巫醫樂師。百工の師を求むるにかはらず。又は弓馬兵法の道。諸禮。躾方。讀書。有職の師たる人の。由斷せぬ顏つきこそをかしけれ。山伏の師を先達といひ。其弟子を强力と名付。比丘尼の師たるものを。お寮といひて。其弟子を米かみとはいふなり。伊勢富士の神職の人を。御師といふはいかなるゆへかしらず。其道其業を敎へて。仁にちかしとはいへど。年の暮のあはれを感じては。二朱壹步の使を待かね。無盡の企。表がへの割付もうるさく。朝夕の摺鉢時を考へ。夜食の遲きなら茶を侘たり。さるは世の風俗にして。敎ゆる人もぬからず。まして習ふ人も猶ぬかる事なし。こゝに俳諧の師たる事。貞德老人よりおこりて。貞室は弟子となり。花の本をうけ繼。これを天下の宗匠とはいふならじ（し）。それより厨子小路に。點者の看板をかけて。あたらしき道を說て。宗匠めくものは。一座一興の宗匠にして。眞の花のもとゝはいはず。先師芭蕉翁。ひとり天下に甲たり。世學て道を受。まどひを解。これを天下の宗匠とはいふなり。今のはいかい人を見るに。一生師と賴む人も見えず。見取聞どりの人眞似に。朝夕をあやまり。まどひより惑ひに分入事をしらず。人生れながらしるものなし。師にしたがひて惑を解。師說にうとき人は。自己の善惡を究る事をしらず。先師身まかりて。十とせ餘。二とせの春秋をへぬれど。師の餘光いまだ國中をかゞやかせり。其道を繼十哲の門人。口をならべて。我こそ血脉道統なれと。手ほめの宗匠にかどはされ。眞の

道統ある事をしらず。其人の俳諧をしらんとおもはゞ。先其所のはいかいを見るべし。眞の俳諧一人あれば。一郷すべて道に迷はず。これ言下に惑を解て。あらぬくま〴〵をたどらぬ故なり。茲に弟子孟遠。余にしたがひて道を聞事久し。我官裈縣命につながれ。沈痾老衰の床になやみて。たすけとなる事稀也。今かれが爲に師ノ説作つて送る。かならず余が俳諧のたとき事を知て。余がはいかいのたふとき事に迷ふ事なかれ。若明眼有徳の師あらば。すみやかに乗かへて。行たき方へ行べし。

名阿段説

許六

○左右の下に物をつけて。文字の埒を明したるを祉。李斯が手柄とはいふなれど。通字ありて己の已ともよむまじければ。なくても事は欠まじくや。名目のなき世ならば。一日もあるまじ。されば味噌桶に水風呂もせず。尿桶に飯をもらぬためしは。ありがたき名目にあらずや。さるを今の人。名は天地以前より。つけ置たるとおもへる。いとはかなし。けふ名をあらため。明日はや目のさけやう。鼻のかゝり。さも呼べき人とは見する。禪教識とは顯密の名。鐵巖をつめてはぬれば。師の號。大むね一派一流の名目あり。もろこしの人の名つく事。深き心なし。敵を殺して我子の名とし。白魚を得て其名を定む。わづか一兩字の間に。ふかき心をふくめ。夕可木端の類も。漸きゝあき。一笑志計もあまりにつたなし。小坊主阿段よく茶をくむ。予が渇をとゞむ事。杜子が獠奴に等しければ。名づくる説つくつて。かれにとらする事かくのごとし。

出女ノ説

木導

○傾城傾國は。唐人のつけたる名にして。白拍子ながれの女は。我朝のやはらぎなるべし。昔より品類あまた。かぞふにいとまなからん。國〴〵の名目。當世の洒落。柄杓。干瓢。白人。巾着のたぐひ。大むね一種より出て。位階の高下は金銀の相當なるべし。たつとからずして勅撰にゆるされ。貴人のかたはらに侍るゆへにや。少子細過て。おほくはふるみに落

たり。爰に道人がゝりの遊君ありて。終に人の魂をとらかす意氣張も見えず。まして哥よむ程の戀にてもなし。たゞ物くひ。酒のみ。言語進退のやすき事は。かりに和光同塵の姿をあらはし。慈悲第一の出女とはいふなりけり。倩生涯のありさまを見るに。地をはしる旅客の勞をなぐさめ。女郎花のたぐひにもあらで。江湖行脚の獨坊主を落さむとす。あるは朝立の旅人を送り。打着姿をぬぎ捨ては。箒を飛し。蔀やり戸おしひらきてより。やがて衣引かづき。再寐の夢のさめ時は。腹の減期を相圖とおもへり。高足打の塗膳にすはりながら。通りの馬士に言葉をかはす。やう／＼晝の日ざしはれやかにかゞやく比。見世の正面に座をしめ。泊り作らんとて雨肌ぬぎの大けはひ。首筋のあたりより。燕の舞ありく景氣こそ。目さむる心地はせらるれ。關札の泊りをうけては。あたらしき竪嶋に。京染の帶むすびさげて。鬢の雫のまだ露ながら。門の柱にうち添たるは。かれが一世の勢ひなるべし。いかなる人かやどりて。いかばかりの仕合すらんもしらずと。賴母しく見やられ侍る。あるはすさまじき髭やつこになぶられ。弓同心の灸のふたつけかへ。座敷の手拍子に輕忽の聲を上て。返事をこたへ。油火かきたてる指は。をのがつぶりにぬぐふなるべし。青天に塗木履を引づり。急用には赤脚で飛。御油。岡崎の全盛もむかしになり果。斑女照手がうけ出されたる取沙汰もなし。もろこしの楓橋にて。月落烏啼の吟も。此君にあはぬうらみをのべ。江口の泊に。宿かさぬ君もなくなりて。今はたゞの所にはなりぬ。伊勢路の彩色はあかめがちにて。大津草津は少しうすかるべし。冬枯のまばらなる比は。いつとなくよはり果て。梟の下の煤氣も寒く。木綿所の小車の音も。さびしく暮て。水風呂の火影に足袋さすわざも佗し。片田舍は法度きびしく。表向は勤もせず。されどあはれなるかたには心ひかるゝならひ。夜更亭主しづまり。ぬけ道よりしのびやかに。書院床の小障子あけて。神の瑞籬もはゞかりなくて大股に打こへ。終に一夜の枕をならぶ。出替は年の暮を定め。給分の加増は赤前垂をこぎる。物皆終りあれば。古莚も

蔦にはなりけり。此ものゝ行衛何にかならん。昔は普賢ぼさつにもなりける先例もあれど。今はすこしの違ひありて。果は駕籠舁の妻にこもり。瘦子あまた産捨。閒鍋の間に餓て。生涯を終る。未來とでも覺束なし。紺屋の地獄まではあれど。出女の地獄の沙汰はきかず。たゞ八万地獄の門〳〵にたゝむも。又あはれなるべし。

雜ノ說

不知作者

○人物禽獸は。其人物禽獸の紛骨なる所に倒れ。山川草木は。其山川草木のすぐれたる所にたふる。物皆をのがたのしみの纔なる所に。たふれ果るも哀なる事なるべし。瞿曇は無爲に倒れ。仲尼は仁義にたふる。莊老は寓言にたふれ。神仙は靈異に倒る。伯夷叔齊は賢にたふれ。楠正成は忠に倒る。火はあつきにたふれ。水はひやゝかなるにたふる。砂糖はあまきにたふれ。野老はにがきにたふる。長はながきにたふれ。短はみぢかきに倒る。されば瘡を愁ふる人は。痒をかく所にたのしみ。貧をくるしむものは。盜賊の難なき事をたのしぶ。是皆和漢人情の趣く事は。さら〳〵かはる事あるべからず。昔より風雅に倒るゝ人おほき中に。西行は哥に倒れ。宗祇は連歌にたふる。先師はせを翁は。はいかいにたふれて。生涯を終る。其門葉あまたの中に。たふるゝ所同じからず。武の杉風は耳のとをきにたふれて。微細の論をきかざれば。二十余年半は流行し。半は流行せず。洛の去來は。風雅の正直にたふれて。春風桃李花の開くる日をしらず。其角は作にたふれ。支考は理にたふる。凉兎はふるみのしたるきに倒れ。露川は誹諧の數にたふる。史邦木導は風雅のつよみに倒れ。千那李由は。風月の情の過たるに倒る。嵐蘭は鎌倉の月にたふれ。丈艸は松本の閉關にたふる。（風俗文選丈艸は松本の閉關にたふる。杜國は横にたふれ。惟然は高みにたふる。尚白は忘梅の趣向に倒れ。許六は文章の文に倒る。されば芭蕉流に倒るゝものあれば。はせを流をたふす人もあるなり。鶯は時鳥に倒れ。櫻は紅葉にたふる。人は人にたふるゝものあれば。我は我に倒るゝものなり）颯竹は大坂に倒れ。尚白は大津にたふさる。桃隣は松本の追善に倒れ。洒落は難波の病床にたふる。嵐雪は妻にたふれ。如行は友にたふる。正秀は金山に倒れ。乙州は兜にたふる。舍羅は道樂にたふれ。惟然は高みに倒る。我は口にたふるゝものなり。

愛梅説

万子

全篇詠梅而無梅字。終句以一梅字結之

○屈原楚辭にわすれ。菅家宰府に招く。西の對のおぼろ夜に。我身ひとつをかこち。孤山のたそがれに。疎影横斜をうつす。山路の朝日のどやかにさし出たる。折かけ垣の匂ひ殊に春めき。谷の扉うらゝかに打霞み。竹の嵐枯葉がちなるに。初音ほころび。十月江南の天氣。醉客馬にねて。酒家の村を出。師走の冬籠たる。越路の雪の中に。朝數寄の袂に匂ひをとゞむ。遍照が折箸。皇居の額。數珠。十露盤の粒。耆木。染屋の汁。これ皆かれが。風姿風情のわづかの端なるべし。彼説にいへるは。牡丹は花の富貴なる物なり。菊は花の隱逸なる物なりと。是そのかたちにより。其愛する人によれり。蓮は花の君子なる物なりと。是は其理屈によれり。我は其理屈をとらず。梅は花の風雅を好むもの也。我は其風雅を好むものを愛する物なり。

艸字藤説

程已

五老井四絶之一也

○草臥て宿かる藤は大和路や。實となつては。誹諧のかたちにあらはれ。手折て塗笠にかざゝば。大津繪の風流なるべし。高松に倚托して。佞者のためしにひかれ。梅の傍に來れば。怒て斧をとるわづらひもなし。藤の性酒をこのむ。山主常に餅をたしむに何の興ありて。かゝる裊ゝとは長き事ぞ。我おもふ。草字藤は。藤の中の下戸なるべし。情中にあれば色に出ッ。これ其餅のかたちをあらはし。三尺さがりを咲けるよと。賓主とり廻してぞうらやまれける。

〽打鎰に蛸のかざしや藤の花

草苅説

露川

○松の葉かきは雪間の氣しきありながら。その親のまづしきより。其子はつゞれ着ておかしからず。馬糞かく子のいかなれば。親もなく。兄弟もなく。いづこより出て。

いづこには歸るらん。さゞ波や。粟津の松の木の間かけて。馬の鈴-音に風-情は得たれど。蚫のいふかゐなき名なるべし。此草-刈は。笛の名-人。さてこそ牛にも乘せておきたれ。夏は朝かげの。見てもいと涼しく。百-合風-車刈-入て。絡-緯のゐて鳴-日もあるべし。秋はむら雨のとりあへず。道かきいそぎ。荷ひつれたるに。空また晴て又おかし。鈴-鹿はかゝる氣しきありて。坂は日のてる所なるべし。

〽草刈の道〳〵こぼす野菊哉

山ノ芋ノ説

吾仲

○芋に數-種あり。山-中に生ずるを山-芋と號し。自-然-生と稱して山-藥に用ゆ。畑に植てまろがせとなるを。つくねと呼ッで。其功もすくなく。其味も次也。秦楚には玉-延といひ。鄭越には土-藷と號す。杜-詩囊-中の法をこゝろみず。陳-簡-齋は玉-延の賦作る。鍾-山の薯-蕷は。三-日炊るれど色を變ぜず。我-國みちのくの芋は。糸を引事鵝のごし。四-月に葉を生じ。初-秋に子を結ぶ。ぬかごとよばれて座-禪-豆に入られ。いもが子ははふ程とよみて。叡-聞に預る。寒-夜の寐-酒には。峨-眉-山の芋をすり込。卯-月の麥-飯には。まり子の宿のとろゝをうらやむ。世に腎-藥ともてはやさるれど。貧-僧の爲には少よろしからず。人-參よく人を殺し。よく人を活す類なればとて。棕櫚ばせをを植まぜて。其勢ひをもどされけるこそおかしけれ。

嘲ニ宵-惑ヲ一説

毛紈

○秋の暮のあはれをしらぬ人は。入-麪をこのみ。長-雪-院をする人は。唐-様の書をすく。風-雅のうつる。うつらざるの違ひなり。かの人生-得灯を見ず。眠-室にかきこもり。寐る事を樂の最-上とする。寐-酒さめ。夢-盡て。ひたものねがへれども。夜の明る氣しきもなく。屋普請の胸-算-用も仕あき。大-國を領じ。治めむとおもへば。言-下に治り。又は金-持の浪-人となりては。嵯-峨の奥に引こみ。斗數頭陀に心を凝じては。松-島象-潟に身をよす。されど繪に書る色に心を動かし。献-立-紙

にすはりたる心地せられて。やがて興盡ぬ。たま〳〵庚申の夜ありて。宵寐せぬ物とおどされ。大欠に懸金をはづし。田樂の燒るを待かね。病人の夜伽にあたつては。藥風爐に額を焦す。かゝる人たのしぶといふ事をしらず。琴棊書畫は屏風の摸樣とおぼへ。花鳥風月は手本に書とばかりしる。昔宰予が晝寐も。夜ふかすあてにねつらんかし。古人の燭をとるといへる。誠にゆへあり。人生七十今時はいきず。たとひ五十で死たりとも。百年の算用にはたつべし。晝ありく鵂鶹は。鷹につかまるれど。夜出る惰鳥は。網にかゝりても。やがていなさるゝを。たふとしとおぼえたり。

解

獲麟ノ解ノ解　許六　長雪隱ノ解　許六

籔醫者ノ解　汶村・

○[illegible]

五老井　許六選

獲麟ノ解ノ解

許六

○魯の哀公十四年。西の狩に麟を得たり。孔子大きになげき給ひて。春秋をとゞむ。夫麟はいづれの時出て。孔子は見覺え給ふぞいといぶかし。鼠は愚にして火難の家をさけて命をたもつ。麟は四靈の隨一にして。狩ある事をしらず。うろたへ出たるも又いぶかし。孔子みづから聖に高ぶり。もしや牛馬の生れそこなへるにてやありけむ。これも又いぶかし。麟うせ。道おこなはれざる物ならば。道は麟にのみありて。聖人の上にはなき事にや。猶又いぶかし。麟はろぶれば。聖人も共にうせ給ふ例にてもあるや。たとひ聖人うせ給ふ例ありとも。道

はまさしく存せり。是とてもなけくにたらず。儒道たふとしとおもふものは。麒麟を第一にたふとび。次に聖人をあがむべきか。箸折るれば親に離れ。櫛の歯欠れば子に別るゝ占とて。童蒙のものはふかく悲しめり。箸おるゝ毎に親にもはなれず。櫛木履欠るたびに。子を失ふにてもなし。されば仁義の占もあはぬためしもありぬべし。麟をすかぬ聖人もありや。又聖人を好ぬ麟鳳もありや。むかし三皇五帝より以来。孔子の外出たる聖なし。和國も神代より打つゞき。當時百年枝をならさぬ聖朝なるに。麟鳳出たる取沙汰もなし。犬わ戸口を守り。鶏は時を報ず。麟出て人もおどさず。鳳啼て旅寝の夢を破る能なし。出ぬ方の聖人。いよ〳〵口出たかりぬべし。見ぬ唐士の鳥もねじと。徹書記があやまりたるは。もし出ぬ方をよみたるにや。世間聖人をしらずして。麟鳳にのみ目をつけて。末の凡夫の不目利は。かの一言のあやまりにて。聖人なしとおもふなるべし。今此麟を解して見るに。とまり兼たる春婦の。よき場所に出合せ。擧句の趣向と見こなしたらば。何の麒麟に理屈のあらむや。

長雪隠ノ解

許六

〇一藝の達人は。郷童に上座を許され。名字持たる人と。座席の爭ひをする。早喰。早糞は。男子の一藝とは稱じ侍る。此藝おほくは無風雅の人にあり。たとひ一藝はつきたりとも。二藝一德ありて。万德一藝にはかへがたからんか。されば甲斐の名將の分別所に定め。山といふ隱語を殘し。森ノ蘭丸が。きざは莉かぞへたるは。信長公も藝者と見えたり。詩哥連俳の名句も。此所より産出し。大悟十八度も。此室に入て工夫を極めり。つく〴〵と一とせのあはれを盡して。鳴や霜夜の蛬。蔦の編目をもる月夜まで。人に心はつゝめり。いにしへより朝市に隱家ありといへるは。慥に此所の事なり。世務所用のいとまなき身も。しばらく閉關する時は。印綬を解て。公役を許す。いそぎ閑居に入て。跡を遠ざけ。半日の寂寞を樂まむと。尻をかゝげて走る。

〽何おもふ長雪隱のしぶ團

藪醫者ノ解

汶村

○世に藪醫者と號するは。本名醫の稱にして。今いふ下手の上にはあらず。いづれの御時にか。何がしの良醫。但州養父といふ所に隱れて。治療をほどこし。死を起し。生に回すものすくなからず。されば其風をしたひ。其業を習ふ輩。津〳〵浦〳〵にはびこり。やぶとだにいへば。病家も信をまし。藥力も飛がごし。それより物換星移つて。今は長助も長庇となり。勘大夫は勘岔となる。當時の藪達を見るに。先門口に底拔の駕乘物をつるし。竹格子に賣藥の看板をかけて。文字の紺青も。半は兀たり。たまさかの藥取を賴みて。藥店にはしらせ。物申には暖簾の内に答へて。女房の顏をつゝむ。町役には牢舍を療じ。藥代にめでゝは。河原者にのます。牛膝には牛の膝を尋ね。鶴虱は鶴のしらみをさがす。藥のみも次第にかれて。胃の氣よはり。元氣衰へて。果は何がし村の道場の明をまつ。我ガ俳諧の道をもてこれを押ば。師說もいまだとをからざるに。其手筋を失ひながら。宗匠めくをみるに。今はやらるゝ紗綾ちりめんの。乘物の中もおぼつかなく。緋衣木蘭色のさとりの拂子も。心許なけれど。佛法には藥毒の氣遣なければ。其分なるべし。たゞ藪醫者のやぶはらに。又出る竹の子も。藪とならむこそうるさけれ。

（本朝文選卷之四 畢）

本朝文選 卷之五　五老井 許六選

記

○記類

落柿舍ノ記　去來

○嵯峨にひとつのふる家侍る。そのほとりに柿の木四十本あり。五とせ六とせ經ぬれど。このみも持來らず。代がゆるわざもきかねば。もし雨風に落されなば。王祥が志にもはぢよ。若鷙鳥にとられなば。天の帝のめぐみにもれなむと。屋敷もる人を。常はいどみのゝしりけり。ことし八月の末。かしこにいたりぬ。折ふしみやこより商人の來り。立木にかい求めむと。一貫文さし出し悦びかへりぬ。予は猶そこにとゞまりけるに。ころ〳〵と屋根はしる音。ひし〳〵と庭につぶるゝ聲。よすがら落もやまず。明れば商人の見舞來たり。梢つく〳〵と打詠め。我むかふ髮の比より。白髮生るまで。此事を業とし侍れど。かくばかり落ぬる柿を見ず。きのふの價かへしくれたびてむやと侘。いと便なければ。ゆるしやりぬ。此者のかへりに。友どちの許へ消息送るとて。みづから落柿舍の去來と書はじめけり。

〽柿ぬしや木ずゑはちかきあらし山

幻住ノ菴記　芭蕉翁

○石山の奥。岩間のうしろに山あり。國分山と云。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。麓に細き流を渡りて。翠微に登る事。三曲二百歩にして。八幡宮たゝせ給ふ。神体は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚

忌なる事を。雨部光をやはらげ。利益の塵を同じうし給ふも又たふとし。日比は人の詣ざりければ。いとゞ神さび。物しづかなる傍に。住捨し草の戸あり。よもぎ根笹軒をかこみ。屋ねもり壁落て。狐狸ふしどを得たり。幻住菴と云。あるじの僧何がしは。勇士菅沼氏曲翠子の伯父になん侍りしを。今は八年ばかり。むかしになりて。正に幻住老人の名をのみ残せり。予又市中をさる事十年ばかりにして。五十年やゝちかき身は。簑虫のみのを失ひ。蝸牛の家を離れて。奥羽象潟の暑き日に面をこがし。高すなごあゆみくるしき。北海の荒磯にきびすを破りて。今歳湖水の波にたゞよひ。鳰の浮巣のながれとゞまるべき。芦の一本の陰たのもしく。軒端茨あらため。垣ね結そへなどして。卯月のはじめ。いとかり初に入し山の。やがて出じとさへおもひそみぬ。さすが春の名残も遠からず。つゝじ咲残り。山藤松にかゝつて。時鳥しば〳〵過るほど。宿かし鳥の便さへあるを。木つゝきのつゝくともいとはじなど。そゞろに興じて。魂呉楚東南にはしり。身は瀟湘洞庭に立。山は未申にそばだち。人家よきほどに隔り。南薫峯よりおろし。北風海を浸して涼し。日枝の山。比良の高根より。辛崎の松は霞こめて。城あり。橋あり。釣たるゝ舟あり。笠どりにかよふ木樵の聲。麓の小田に早苗とる哥。螢飛かふ夕闇の空に。水鶏のたゝく音。美景物としてたらずといふ事なし。中にも三上山は。士峯の俤にかよひて。武蔵野ゝふるきすみかもおもひいでられ。田上山に古人をかぞふ。さゝほが嶽。千丈が峯。袴腰といふ山あり。黒津の里はいとくろう茂りて。網代守にぞとよみけむ。萬葉集の姿なりけり。猶眺望くまなからむと。後の峯に這のぼり。松の棚つくり。藁の圓座を敷て。猿の腰掛と名づけ。彼海棠に巣をいとなび。主簿峯に菴を結べる。王翁徐佺が徒にはあらず。唯睡癖山民となりて。孱顔に足をなげ出し。空山に虱を捫て座す。たま〳〵心まめなる時は。谷の清水を汲て自炊ぐ。とく〳〵の雫を侘て。一炉の備いとかろし。はたむかし住けむ人の。殊に心高く住なし侍りて。たくみおける物ずきもなし。持佛一間を隔て。夜の物おさ

むべき處など。いさゝかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は。加茂の甲斐何がしが厳子にて。此たび洛にのぼりいまぞかりけるを。ある人をして額を乞。いとやす〳〵と筆を染て。幻住菴の三字を送らる。頓て草菴の記念となしぬ。すべて山居といひ。旅寐といひ。さる器たくはふべくもなし。木曾の檜笠。越の菅蓑ばかり。枕の上の柱に懸たり。晝はまれ〳〵とぶらふ人ゝに心を動し。あるは宮守の翁。里のおのこ共入來りて。ゐのしゝの稲くひあらし。兎の豆畑にかよふなど。我聞しらぬ農談。日既に山の端にかゝれば。夜座靜に。月を待ては影を伴ひ。燈を取ては罔雨に是非をこらす。かくいへばとて。ひたぶるに閑寂を好み。山野に跡をかくさむとにはあらず。やゝ病身人に倦で。世をいとひし人に似たり。つら〳〵年月の移こし。拙き身の科をおもふに。ある時は仕官懸命の地をうらやみ。一たびは佛籬祖室の扉に入らむとせしも。たよりなき風雲に身をせめ。花鳥に情を勞じて。しばらく生涯の計とさへなれば。終に無能無才にして。此一筋につながる。樂天は五臓の神をやぶり。老杜は痩たり。賢愚文質のひとしからざるも。いづれか幻の栖ならずやと。おもひ捨てふしぬ。

〽先たのむ椎の木もあり夏木立

十八樓記

芭蕉翁

○みのゝ國。ながら川にのぞみて水樓あり。あるじを賀島氏といふ。稲葉山後に高く。亂山左右にかさなりて。ちかゝらず遠からず。田中の寺は。杉の一むらにかくれて。岸にそふ民家は。竹のかこみのみどりも深し。曝布所〳〵に引はえて。右に渡し船浮ぶ。里人行かひしげく。漁村軒をならべて。網をひき。釣をたるゝ。をのがさま〳〵も。たゞ此樓をもてなすに似たり。暮がたき夏の日も忘るばかり。入日の影も月にかはりて。波にむすぼるゝかゞり火の影もやゝちかく。高欄のもとに鵜飼するなど。誠にめざましき見ものなりけらし。かの瀟湘の八のながめ。西湖の十の境も。涼風一味のうちにおもひためたり。もし此樓に名をいはむとな

らば。十八樓ともいはまほしきなり。

〽此あたり目に見ゆるもの皆涼し

五老井ノ記

許六

○靈泉あり。水のたゆる事。纔に尺あまりにして。三尺の盆池よりながれ出る事。潺々溶々たり。五老井と名づく。別墅をひらきて。五老庵を結ぶ。主人姓は森。名は許六。みづから五老井ノ先生と偁す。五老は予が別號也。驛が原不知哉川ながれて。鳥籠の山南に近し。十旬の休暇をうかゞひ。半日の閑を領ずる所なり。遙に聞。東江はせをの翁。錫を坂西に趣しめ給へるの折ふし。靈泉を共に汲で。風騷の匂ひを。葎の中にとゞめむとならじ。其水の清き事は。惠山の泉脉を通じ。甘き事は粛州の金泉にひとし。立かへる春の朝。白散の藥をさげてより以後。四時の生涯を養ふ事かぞふべからず。一とせの間に。わきて泉を翫ぶ事は。夏を主とす。霍山鳴が井盤の納涼。西上人の柳の陰も。今此水に俤そひぬ。其德其要廣大にして。神佛のたふときをすゞしめ。月堯の井を掘。禹の水土をたいらげてより。四民猶おだやかならしむ。後に山あり。さゝ栗の岡といふ。晴にのぞみ。雪に對して。眺望きはまりなし。湖水の島々。江南江北の山のたゝずまゐ。日枝伊吹の嵩。比良三上の高根に眸をさく。西南の間に千鳥が岡あり。聖德太子の御哥より。犬上の名どころとなりぬ。杖を曳ては籬を廻り岡に登る。蕨は藜をたすけ。栗は茗粥を炊ぐ。抑庵は。纔に莚三枚をまうけて膝を窄め。賓主六人一座に全からず。茶碗五ッ。枕五。筆硯の外に物なし。月に杜鵑をそへ。驛路の鈴に。里の砧を合せて。秋をかなしむ。庭に箒をあてず。樹に木鋏を入ず。窓前の草をのづからなり。たま〳〵畑を穿ては。狛の瓜種を求め。五色の茄子を植るといへども。山蟻の爲にせゝり落さる。吁借居士。文書に僻する事二十余年。子瞻。芝瑞を師とし。楊子。梅道人が骨髓を伺て。雪裡のばせを。炎天の梅。自然に一味の風雅を兼むとす。世上予が筆痕を樂て。予が心頭のたのしびをしらず。風雅は是非をあ

らそひ。書圖は郷童の前のたはぶれとなる。いまだ風雅の爲に。文書をたのしぶといふものを聞ず。予と共に志を同じうして。はやく吾をたすけよや。〱。終日樹下に徘徊すれども。更に答ふるものなし。四隣の鳥聲。花間の蜂蝶のみ。笑て青天に腹皷を皷し。五老の流に脚を洗て歸る。于レ時元祿五年壬申ノ春。二月。於二婆羅樹林下一濺レ毫。

〽水筋をたづねて見れば柳かな

九花亭記

汶村

○亭あり。九花と名づく。九華は何ぞや。抑九花安妃は。神仙の名にして。山に九花あり。丹に九花あり。衾に名あるは王侯の用る處。魏の武帝は臺に名づけ。唐の伊氏は室に名づく。襯あり。殿あり。帳あり。扇あり。菊に九花の名ありて。茶にも又此美稱あり。上清眞人は。日月を呼ッで大寶九華とし。李正臣は。壺中の九花をたくはふ。蹇動は九花先生と號し。荀鶴は九花山人と稱す。我ガ四柱の亭。九は陽の極數といふ。理屈にもわたらず。華は壯麗のひくみにもあらず。たゞ方寸をやしなふの天地にして。春は曙。千里鶯啼て。梅かうばしき朧月に嘯き。青楓風すゞしく。ほとゝぎすあやめにかほり。水鷄若竹に敲く。萩女郎花露細うして。菊は黄に。柞さびしげなり。比良伊吹遠くこびへ。金龜金花ちかく峙てり。亭外の風物すくなからず。亭中の物數。又いくばくぞや。屛風傘味噌壘。馬一疋。鷄一羽。亭あり。其主人は誰ぞ。近陽城下。松氏汶村みづから記すといふ。

琵琶亭ノ記

許六

○むかし嘉祥の比。貞敏といふ人。三面の琵琶を唐土より傳り。猶代〻に作りおかれたる。樂器おほしといへども。あるは火の爲にやかれ。又は田舍の土に落て。口おしき事のみおほし。こゝに名物一面ありて。終にもてあそぶ人なし。嶋の經政も。撥短うしてとゞきがたく。關の蟬丸も。膝せまければすみ所なし。柱には四の嶋〱をたてゝ。落べきわづらひもなく。何某

が袂のそくいゐるもいたづらなるべし。撥面にはから崎の松をゑがき。覆手には。勢田の長橋を横たへたり。二の月は。出しほ入方のながめを添。四時の細きいと筋を。絃手にねぢあけ。花さそふ山風に。春のわかれをおしみ。鶏鳴濱の夕ぐれには。秋のあはれをかなしむ。あけては弾じ。暮てはおさむ。倦時は比良横川に足を打かけ。眠る時は三上伊吹に枕を高うす。此亭のあるじは誰ぞ。杉原氏みづから高ぶり。これを琵琶亭と名づく。むかし伯牙がしらべも。鍾子期が耳なくては益なし。これをきく人は誰ぞ。五老井の許子六。力を合せ口にまかせて記す。同じ穴の狐の寄合。犬の嗅つけぬ間を。重寶と見るべし。

風臺水臺ノ記

許六

○四梅廬の南北に。風臺水臺を築く。風は涼をとり。水は月を弄するの心なるべし。春の風あたゝかに吹ば。水香しうして。梅の影を浸し。㳒の嵐雲に音信ては。池あれて荷葉おゐそかなり。主人律師。風に乘じて遊び。醉客李氏酌で月をとる。乖て榮耀をこのまざれば。まして名利の煩しきもなし。常に風狂の遊士。此臺にのぼつて。風水の二を評ふ。其爭ふ處は。たゞ餅酒にあり。上戸方は。風臺にふかれて水をうらやみ。下戸等は。水臺に腹をふくらかして風を望む。其いどみを見るに。蝸牛双角の諍に等しく。源平水陸の鬪に似たり。されど酒のみは。舌もぢれ。足よろめきて。下る事得難く。餅好は。胸こがれ。喰おもりして。更に動に懶し。終に相引に引退き。上戸は。桓公の蚊となつて禮を忘れ。下戸は。蝦蟆と化して。腹を撫て樂しむのみ。

○紀行類

五老井 許六選

鹿島ノ紀行

芭蕉

○洛の貞室。須磨の浦の月見に行て。へ松かげや。月は三五夜中納言といひけむ。狂夫のむかしもなつかしきまゝに。此秋鹿嶋山の月見むと。おもひ立事あり。

伴なふ人ふたり。ひとりは浪-客の士。ひとりは水-雲の僧。僧はからすのごくなる墨の衣に。三-衣の袋をえりに打かけ。出-山の尊-像を。厨子にあがめ入て。背-中にせをふ。柱-杖曳ならして。無-門の關もさはるものなく。あめつちに獨-歩して出ぬ。今ひとりは。僧にもあらず。俗にもあらず。鳥-鼠の間に。名をかうふりの。鳥なき嶋にも渡りぬべくて。門より船に乘て。行-德といふ所にいたる。船をあがれば。馬にものらず。細-脛のちからためさむと。歩-行よりぞ行。甲斐ノ國より。ある人の得させたる。檜ノ木もてつくれる笠を。をのく\いたゞきよそひて。やはたといふ里をすぐれば。かまがいの原といふ。ひろき野あり。秦-甸の一-千-里とかや。目もはるかに見わたさるゝ。つくば山むかふに高く。二-峰ならびたてり。かの唐-士の双-劒の峯ありと聞へしは。廬-山の一-隅なり。雪は申さず。先むらさきのつくばかなとは。我ガ門-人嵐-雪が句なり。すべて此山は。日-本武-尊の言葉をつたへて。連-哥する人の。はじめにも名づけたり。和哥なくはあるべからず。句なくは過べからず。誠に愛すべき山の姿なりけらし。萩は錦を地にしけらんやうにて。爲-仲が長-櫃に折-入て。都の土産に持せたるも。風-流にくからず。きちかう。をみなへし。かるかや。尾花みだれ合て。小男鹿のつま戀ふ聲。いとあはれなり。野の駒。所得がほにむれありく。又あはれ也。日すでに暮かゝる程に。利根川のほとり。ふさといふ所につく。此川にて鮭の網-代といふものをたくみて。武-江の市にひさぐ者あり。宵のほど。その漁-家に入てやすらふ。夜の宿腥し。月くまなく晴けるまゝに。夜-船さしくだして。鹿-嶋にいたる。晝より雨しきりに降て。見るべくもあらず。麓に根-本-寺のさきの和尚。いまは世をのがれて。此所におはしけるといふを聞て。尋ね入てふしぬ。すこぶる人をして。深-省を發せしむと吟じけむ。しばらく清-淨の心を得るに似たり。曉の空いさゝか晴ぬるを。和尚おどろかし給ふれば。人ゝおどろき出ぬ。月の光。雨の音。たゞあはれなる氣しきのみ。むねにみちて。いふべき言の葉もなし。はるく\と月見に來たる。かゐなきこそほゐなきわざなれど。かの何がしの女すら。時鳥の哥。

えよまでかへりわづらひしも。我ためにはよき荷擔の人ならむがし。

〽月はやし梢は雨を持ながら　翁

〽雨に寐て竹おきかへる月見哉　曾良

南行紀

李由
許六

○烏は黒く生れながら。鷺の白からん願ひもなし。笠はあるにまかせ。雨をしのぐ物に。菅簑はあれど。今樣は合羽で仕廻ふ。錢を入たるは。草鞋一足にて。天晴旅人の出立は出來たり。二月晦日といふ日に。蝸牛の家を離れ。名吉の國廻りにうかれ出て。田づらの柳。木瓜すみれ。遠音の雉子のうす曇。旅の心にはなりきりたり。前途路遠しと。杖の頭をからめかし。首にかけたる頭陀袋。身は雲水の果しなき。布引山の山中に。道づれせばやと見れば。見しれる聖なりけり。男是より。角文字やいせの野飼の。跡や先やと打つれ。やがて土山の泊につく。手ぶるき水風呂の時宜に時をうつし。聖長袖の役に。其夜はあら湯を請取る。明日よりは湯番の前後を定め。猶日〱の事を筆に記さむ。これも湯番につけて廻すべしとて。書記も湯番も男に渡しぬ。

「明れば彌生朔日。湯番の男ぬからじと起て。行べき所へはしる。例の一藝長ゝと勤ければ。聖もゝ尻にて待兼たり。天氣よき夜明の雲あひしらみかゝり。並木の木陰まだほのくらく。遠近人の笠の內。そろ〱見えたり。鈴鹿山越むとて。聖駕籠。男馬。

〽天井に首はつかへて山ざくら　聖

〽伊勢はてる馬士の鈴鹿や花曇　男

「下り坂。山あひくらく。朝霞の中に。坂泊の啪も程なくちかよりたり。

〽鶯も竹屋どまりや朝あらし　聖

「晝氣色は。關の地藏にて見るなり。茶店をすこし打たゝきて。しばらく腰をかけたり。

〽田樂やあふのくロになく雲雀　男

たそがれ過る比。雲津に着ば。宿の案內もおぼつかなし。

「二日。聖夜ぶかく起て。非番の男を起す。烘氣たる行燈の影に。會津盆の打ひらめたるに。日野椀の壺皿。いとさびしげにつきすへたり。見る目いぶせく胸ふさがり。やがてもかゝらず。杉箸しらけ直し。腹の氣しきつれなければ其日の役をはらふ。はき物は寐所よりしめつけ。笠は上壇より着ながら。此宿を出たり。前後の家並はしづまりかへり。左右の鷄の聲。みだれたる中を出ぬけて。火縄の火影ちら／＼と見えがくれなり。紀行録に。温庭均が早行も聞あきぬれば。此度は法度にして。雲津川の假橋を渡る。かくはいへど景氣胸の内にうかめたり。松坂の矢川といふは。人の面白がる所なり。其所さき宵にとへば。今は絶てたゞの所になりたりといふ。筑摩。朝妻。江口。神崎は。むかし語りともおぼえぬるに。きのふの淵は。けふの矢河となりて。人かはり。家かはりぬれば。搗米の船には。むなしく蠅のむらがり。草履草鞋の鎰は。徒に風に動く。今は其土に色香もなし。

〽松坂や越後屋とへば江戸ざくら　男

〽出女の雪むら消て明野哉　聖

宮川の渡りを越て。代垢離の子共は。蛙のごとく。一錢剃の鋏は。蟹に似たり。

〽髮結の腰にしだるゝ柳かな　聖

山田に入て。何がし大夫のもとにつく。日高ければ。參宮の支度して出たり。

抑神前に詣でぬれば。よろづの事は忽わすれて。かたじけなさの一すじに。涙はおとし侍りぬ。

奉納二句

〽青海苔も和光の塵のひとつ哉　男

〽松櫻川を隔てゝ墨の袖　聖

天の岩戸に入れば。灯明かゞやかし。常闇のむかし思ひ出られ。有難き事かぎりなし。

〽穴藏と見ればおそろし雉子の聲　男

内宮に詣でゝ。御社ちかき杉のむら立に。御裳濯川はきよくながれ。御寶前はしん／＼としてくり石の上に畏り拜し奉る。つたなき心にもまとはありて又上もなき嶺の松風身にしみわたり。小袖の膚にさはりぬるも。

いま〳〵しき心地せられ。あまりに忝きと思ふおりは。さむきものなり。又奉納。

〽百八のなみだのかゝる蕨かな　聖

〽今ぞしる月日の花も梅さくら　男

つきせぬ御名残も暮に及べば。すでに御暇申て出たり。二見の方もゆかしけれど。行さきいそがしければ。おもひとゞまりて。例の大夫の許に歸りて臥ぬ。

序

○序類　五老井　許六選

曠野集序　芭蕉

○尾陽蓬左。橿木堂主人荷兮子。集を編て名をあら野といふ。何ゆへに此名ある事をしらず。予はるかにおもひやるに。ひとゝせ此郷に旅寐せし。おり〳〵の書捨をあつめて。冬の日といふ。其日かげ相つゞきて。春の日また世にかゞやかす。げにや衣更着彌生の空のけしき柳櫻の錦をあらそひ。蝶鳥の。おのがさま〳〵なる風情につきて。聊實をそこなふものもあればにや。糸遊のいとかすかなる。心のはしのあるかなきかにたどりて。姫ゆりのなにゝもつかず。雲雀のおほ空にはなれて。無景のきはまりなき。道芝のみちしるべせむと。此野の原の野守とぞなれるべらし。

元祿二年彌生書

猿蓑序　其角

○はいかいの集つくる事。古今にわたりて。此道のおもて起すべき時なれや。幻術の第一として。其句に魂の入ざれば。夢に夢見るに似たるべし。久しく世にとゞまり。ながく人にうつりて。不變の變をしらしむ。五徳はいふに及ばず。心をこらすべきたしなみなり。彼西行

上人の。骨にて人を作りたてゝ。聲はわれたる笛を。吹やうになむ侍ると申されける。人には成て侍れども。五の聲のわかれざるは。反魂の法のおろそかに侍るにや。さればたましゐの入たらば。アイウエヲよくひゞきて。いかならん吟聲も出ぬべし。たゞ俳諧に魂の入たらんにこそとて。我翁行脚のころ。伊賀越しける山中にて。猿に小簑をきせて。はいかいの神(タマシイ)を入たまひければ。たちまち斷腸のおもひを叫(サケ)びけむ。あだに懼(アツ)るべき幻術なり。これをもとゝして。此集を作りたて。猿みのとは名づけ申されける。これが序も。其心をとりて。魂を合せて。去來凡兆のほしげなるにまかせて序す。

宴(スル)ニ柳後園ニ序

支考

○世にあそぶ人ありて。綾羅錦繡にたのしぶ時は。樂つきて後たのしむものなし。山林樹下にあそぶものは。心にみたざれば。世にうらやむかたも出きぬべし。此ふたつのさかひに居らざるものを。心に天遊ありとぞ。むかしの人もいへりける。されば柳後園の何がし。三四の友達ありて。あそぶ事日あらず。額には閑の一字を題して。しづかならぬ時は横になし。やかましき時はさかさまに置て。その時の心に隨ひ行は。大小の額見る心にや侍りけむ。此日東花坊も。此中にあそびて。人ゝ酒のまむと催したるに。心に物をとめ。口に余情をいふ人ならば。罰は金谷の酒もおしからむ。俳諧に案じ入たる時は。こよりといふものして。くさめさせむとぞたはぶれける。

近江八景ノ序

千那

○近江八景は。湖水の絶景をあつむ。比良堅田より。三井石山につらなり。粟津辛崎を見渡し。勢田矢橋を合せ。瀟湘の八景になずらへ。八(ヤツ)の所を定む。そのかみ永祿第五。仲秋の月に乘じて。近衛(コノヱ)の政家公。石山寺にあそべる時。はじめて此景を詠ず。すべて我朝國〳〵の八景。諸寺諸山の十境。題せずといふ事なし。されど此湖上の八(ヤツ)に。いまだ並ぶものを見ず。いにしへより。八の詩哥はあまたあれど。俳諧の八景あ

る事を聞ず。されば近江八景はあふみ人がよしとて。繪は五老子が筆をかり。題はわが里。堅田の病鴈の夜寒をはじめ。自他遠境の作を集て。すでに近江八景の一軸となす。これをあつめ。是に自序するものは江州の産。蒲萄坊の主人。僧千那。筆を本福寺の東軒にとる。

四絶文章ノ序

李由

○許氏が五老井に四絶あり。絶は絶勝の義なるべし。ひとつには艸字藤。二には楊揮豆。三には雲花園。四には紫芝岡なるべし。我問事あり。四は須彌の四州によるや。曰ク。不レ然。四海四方の四にあらずば。四時四月の四ならずや。曰。不レ然。四恩四教の四にたよらずば。四民四姓の四の數によるや。曰。不レ然。四天四睡の四をねがはずば。四王四皓の四をうらやむか。曰。不レ然。我惘然として問をやめたり。許子が曰。分別理屈は我有にあらず。若三絶五絶の增減あらば。吾子が算用はたち所に相違すべし。たゞ一二三四の第四番にあたれば。四絶とはいふ也。むかし愚なる法師あり。無才にして法名の文字にくるしめり。ある人をしへて云。まづ法の一字をかしらにかうぶらしめて。下はいろはを以てつぐべしと。法師おほきにちからを得て。やがて法以法呂と。段〻に名づけて。すでに一二の篇にいたり。第六の番にあたれり。時にかはらけ賣身まかりて。法名たべといへば。法六と改名して。やがてとらせぬ。妻子ふかくかなしび。たとひ此世の業は是非なし。せめて來世に生るゝ時。此苦患をたすけたべといへど。法師かしらをふりて。我法名は土のたぐひにはあらず。今六の當番なれば。是非なしとて。終に法六になして暗りぬ。今予が四絶もかくのごしと。おの〳〵これを感じて。說。賦。銘。賛の四文を書して。終に五老志にとゞむ。某李由これに一章をくはへば。おそらくは五絶とならん事を知て。やがて四文章の始に序して。此心をのべて。此罪をのがるゝのみ。

要文集序

許六

〇相坂山の杉に雪はふれども。法花經〳〵と囀出し。淀のわたりの夜ぶかきに。本尊かけた〳〵とぞ鳴ける。百千のとり〳〵に。おのが一聲の外に。かはりたる音聲もきかず。烏のかあ〳〵と鳴暮し雀のちい〳〵と同じ事囀るに。飽ずやありけむ。本尊をかけ。法花經よむ鳥は。かあ〳〵。ちい〳〵よりは。少物しりたる顏つきこそおかしけれ。其顏つきにても。同じ事ばかり囀るに。イヤ。チウ。にくし。可愛しのかはりめやありけむかし。よくぞ聞わけける。もろこしの鸚鵡といふ鳥は。人のいふ事をよく眞似ける。此國に渡りても。和語を聞しり。父。母。爺。口鼻をよくぞまねける。此鳥此國になければ。はじめ終り慥ならず。かれもこれも。もどかし鳥といふは。父母の産つけたる囀りもなくて。明暮諸鳥の眞似を所作とし。一生餌袋にたくはへたる囀りもなし。たゞさら〳〵。さら〳〵と霰ふりける柞原に。ある事ない事虛言八百。これを樂の最上とおぼえて。筆にまかせ書付たるを。要文集とぞ申侍りける。

書樓繪合序

許六

〇和朝のいにしへ。繪かく人の中に。火難に家を燒て。不動尊の妙筆をふるひ。あるは他の國に趣き。漢王の夢に入て。雪ふねの名を殘す人もありけり。當世の風情はあはれすくなし。布袋。福祿壽の二筆をおぼえて。あつぱれ畫師の一列に入。弟子となり。師と賴む時。第一番に人前をおしへ。次に筆法をしめす。唐士のゑかく人は。樓を造りて人を禁ず。起てゑがき。寐てゑがき。おのが精神を盡す。猫をゑがきて鼠を絕すも。むべなるかな。われ畫樓を造らむ事。豈久し。されど沈痾老病につかれて。筆をとる日稀也。一とせの中。夏暑の六七月は。墨爛れ。膠とらけて。ゑがく日なし。冬寒の三月は。水凍。筆かじけてゑがく日なし。是を一とせ五ケ月の禁筆とさだむ。猶雷雨風霜は。一日の禁筆。又公私のいとまをぬすみ。花に座し。水に戯れ。月に嘯き。雪に吟じて。又ゑがく日すくなし。たま〳〵

淸朗の日あつて。ゐがゝむと席をうつし。水を汲時。例の雜客入みだれ。あるは物喰。酒飮。炭火にからをはたき。果は莊蝶が生寫しにあき果て。今年の春。頻に書樓を造る。おほきさ方丈餘。東西の銘は。薄暮雲霧のくらきを扶て。北に書齋あり。半日は樓にのぼり。半日は齋にこもる。人來て繪を好む時。きはめていふ詞あり。遲き事は。三會の曉を期すと約して歸る。次の日來て。はや遲〻の罪を責む。予が隣家にすむ人。一生ゐがく事をしらず。一生遲〻の罪をうけず。我たま〳〵繪なつて求に應ず。遲しといへども隣人にははやし。三年過る日は五年め也。五年終る時は。七年の月日也。これ成就の時節としるべし。樓成て門弟子六人。題を探て。人物山水花禽をうつす。各一軸を懷にして左右に列なり。すでに勝負を爭ふ。此撰にもるゝ門人すくなからず。これを書樓の繪合といふ。樓主五老井。許子六。自序作つてふける。鄭公が樗散にして。老書師と稱するのみ。于時元祿壬午冬。十一月日書之。

麻生後序

許六

○麻生の名を。烏帽子折ともいふは。好に赤烏帽子と。同じゐぼしの釋なるべし。すべて世は好嫌ひの二より流れ出て。天地黑白のたがひともなるなるべし。妹といふは人丸の好。西行はなりけりより事起りて。後京極殿は。雪の明ぼののやうを好給ふ。俊成卿の鶉に。寂蓮法師の槇の夕暮は。たま〳〵なるべし。桃といへばっ桃隣にきはまり。翁は昆蒻をすかれたり。是は精進物の沙汰に及べし。晋子が傾城に。阿山人が出女は。朝夕にして。名護屋の柿の。かの字のひゞきは。末摘花のから衣と。同じ五音のカキクケコなるべし。烏落人が。赤いは〳〵の赤きは。好に赤烏帽子の。あかい所を發明したり。されば撰者の范字も。柳後園の一人なれば。柳の靑き所をも。此集に述らるべしと。俳諧大居士跋す。

銀河ノ序　　芭蕉

○北陸道に行脚して。越後ノ國出雲崎といふ所に泊る。彼佐渡がしまは。海の面十八里。滄波を隔て。東西三十五里に。よこおりふしたり。みねの嶮難谷の隅〱まで。さすがに手にとるばかり。あざやかに見わたさる。むべ此嶋は。こがねおほく出て。あまねく世の寶となれば。限りなき目出度嶋にて侍るを。大罪朝敵のたぐひ。遠流せらるゝによりて。たゞおそろしき名の聞えあるも。本意なき事におもひて。窓押開きて。暫時の旅愁をいたはらむとするほど。日既に海に沈で。月ほのくらく。銀河半天にかゝりて。星きら〱と冴たるに。沖のかたより。波の音しば〱はこびて。たましゐけづるがごとく。腸ちぎれて。そゞろにかなしびきたれば。草の枕も定らず。墨の袂なにゆへとはなくて。しほるばかりになむ侍る。

〽あら海や佐渡に横たふあまの川

番椒ノ序　　野坡

○とうがらしの名を。南蠻がらしといへるは。かれが治世。南蠻にて久しかりしゆへにや。未詳 酸醤子。天覗き。空見。八なりなどいへるは。おのがかたちを好める人〱の。翫びて付たるなるべし。皆やさしからぬ名目は。汝が生得のふつゝかなれば。天資自然の理。さら〱うらむべからず。かれが愛をうくるや。石臺にのせられて。竹椽の端のかたにあるは。上々の仕合なり。ともすれば雷鉢のわれ。底ぬけ釣瓶に培れて。やねのはづれ。二階のつま。物ほしの日陰をたのめるなど。あやうく見え侍るを。朝皃のはかなきたぐひには。誰も〱おもはず。大かたはかづら髭つり髭の益雄にかしづかれて。貧乏樽の口をうつすみさかなとなり。不食無菜の時。ふ圖取出され。おほくは奴僕豆腐の比。紅葉の色を見するを。榮花の最上とせり。かくはいへど。ある人北野詣の歸るさに。道の邊の小童に。こがね一兩くれて。汝が青々とひとつみのりしを。所望

せし事ありといへば。いやしめらるべきにもあらず。しかじ。今は其人〻も此世をさりつれば。いよ〳〵愛をも頼むべからず。からき目も見すべからずと。小序をしかいふ。

〽石臺を終に根こぎや番椒

本朝文選　巻之六　五老井　許六選

箴

○箴類

飲食色欲ノ箴　許六

○善は常也。悪は變なり。悪出て後善あらはる。善悪に迷はぬ人は。其善悪になづまぬ人なり。食は禮より重く。色は民と共にせよとかや。されど食の命をやしなひ。色のあばれをしれる功も。なづむ心より。やがて大病を生ぜり。色は三教ともににくむ事甚しきゆへに。甚制せられず。和朝哥道のおしへの高き事は。戀を第一とす。色は風雅也。風雅は仁なり。惻隱の心あり。大舜の二女に嫁し給へるも。今日おして見る時は。是畜生なり。かのながれを汲やからは。これらをもよしとなづめり。元來畜生兄弟姉妹と嫁する事をせずは。人倫は姉妹と嫁する事を道とやはいはむか。彼教には。後なきを不孝の第一とたてゝ。孝を五倫の始にをけり。若周公。孔子。天性精の虚したる人ならば。子なけむ。第一の孝道は欠ぬべし。是とても聖人のまつたきといふべきか。桀紂が極悪も。子あれば是孝子なり。子なき君子にはまし侍らんか。

「吾朝。いづれの御時よりか。西域の教を廣めり。此教は。後なきを第一とせり。其ながれをたつる者世に多し。大路を行人も。十が三四はこれ也。神の道に合して。これを兩部といへり。扶桑東夷の機をよくしり。かつ小國の分量をよくさとせり。地のせまく。人の過たる國也。彼やからの人々。後なきを不孝とし。鼠の子を産捨侍らば。程なく富士山もこぼち入られ。湖も彌。鹿飛を切ぬく沙汰に及ばむ。堂塔に金銀をちりばめ。法事法席に美を盡すといふとも。其費は國にとゞまりて。他の所へはもれず。多の眷屬の食ひつぶし侍らんよりは。いとめでたし。佛供といへる物は。備へたるば

かりにて。曾てへらず。是日の本建立の源ならむか。こゝをきれ。かしこをたて。子孫あらせじと思ふなりとの給ひて。一人の罪人となり給ふ。御心こそありがたけれ。しかはあれ共。此頃は。僧のかくし子といへるものあれば。少はもどるか。

「温飩は汁をほめられ。蕎麥切は。からみに威をとられり。奈良茶は。跡一盃を茶につけらるれども。其號を持り。飲食器物共に。すぐれたる極品の物は。賓客のもてなしとせるに。たばこばかりは。亭主を奔走せり。客人たばこは。へらぬを調法とせるは。何ぞや。

「餅は心地よき物。酒はうれしき物。茶は淋しき物。もちくひは酒をのまず。酒好は饅頭をくはず。是天の自然か。たま〳〵上戸に。嫌なき生れつきあるは。牙あるものゝ角をいたゞきたる類とやいはむ。

「傾城の色は。晋子が見屆て。いひふるしたれども。遊君の情は。下品にこそおかしき事はあれとて。木導は。出女の上を盡せり。よき遊女のきぬ〳〵のうつり香は。こぬか袋の匂ひかともおもはる。やす傾城の匂ひは。郡内嶋のうつり香ならん。追込辻君のたぐひは。にほひ曾て定まらず。

「隱居の妾ほど。うらやましからぬものはあらじ。さだまれる名をさへいはれず。若きをも。祖母〳〵とよばれつるこそうたてけれ。色欲におぼれて。あくまで淫ずるものは。男女に上下のたがひありて。高家富貴の人の妻は。七人半のあてがいといへるも。男子の德とおぼえり。たとひ七人が十人といはれたり共。いやとはいふまじきに。半とかぎりたる。はしたの妻こそおぼつかなけれ。

「雪駄の男。鼻紙の知音とさだめて。いくたりの妻を重ね侍るは。下女やはしたの上の奢なりけり。筑摩の祭のあとたえて。おこなはれざるは。かれらが爲には。おほきなる仕合ならん。かゝる淫樂の世となり行も。神道のおとろへたる。神のとがめとやいふべき。

「鮟鱇。河豕魚といふ魚あり。形も大きにうまれつきて。あくまで肉をくはれながら。汁を吸るゝを。手柄にいはれけるこそ。大きなる損なれ。

「鯛は魚の最上とほめられながら。鼻屎にて釣られける。ためしもありや。いと口おし。

「鰯といふものは。魚類の下品にいひなされて。いやしきものゝそへ物となるのみならず。田畠の肥しとなるこそ。猶口をしけれ。しかれども。正月のことぶきに引出されて。上﨟のまじはりをするを。自慢顔なり。されどもかしらばかりをはやされ。獄門のごくになりて。口〳〵にさゝれ。果は箒の先にかゝりて。行方しらず成行けるも。猶〳〵口をし。

「かながしらといふ魚は。あたまがちのみにて。くふべき所すくなし。彼かしらのかたき所に手柄ありて。産屋のことぶきには。かしづかれて出る。惟然坊が。つぶりのやはらかなるは。かれにも似よかし。

「魚鳥の匂ひをもてなさるゝは。むしり喰れながらも。本意とやはおもふらん。

「鶴は。芹の香の俤を残し。雉子は。昔なつかしき匂ひをとゞめり。痩て小兵とはいへども。雲雀のいきりもの。水無月の鶴鴈とほこりける。

「生海鼠といふものゝ匂ひは。たとふべき物なし。牛房の香にかよひておかし。松茸のふん〳〵たる物に。毎度柚の相客に出らるゝ類ひ。

「焼蛤の馨しきには。胡桝の粉の鼻に入たるがうれし。かばやきの匂ひ。風流にはあらねど。うまき匂ひとやいはむ。

「ある法師の。茄子の鴫やきをほめられければ。傍の俗人。鴫の茄子やきも又よしと返しける。

「時を感ずるといへるは。かけ菜に打大豆汁の春めきたるもあるに。つまみ菜に。唐がらしの青くさきは。初秋のあはれをすゝめり。

「芹蕗のたうを。春の景物に撰置は無念なり。定家の卿。冬の花に梅をよみ給ふいとよし。

「鰤は。節振舞をかぎりとし。鯖は生身玉を終にとれり。

「さんちやは四つ時。出女は八つを威勢の盛といふべし。吾翁。色と義の道をしめし給へる詞に云。

色をおもふ事は。うどんを見るがごとく。
義を守るものは。唐がらしの辛に類せよ　と。

「山葵。生姜。蓼。からし。山椒の辛き類も。冬共場所を得たり。海鼠腸といへる物には。わさびの打あがりたるからみをすり込。昆布に巻込るゝ時は。山椒の手柄を見せたり。鯉のにつけの湯けに。飯鮹のおぼつかなき味をもてる。

「色はおもひのまゝならぬ命とはよめり。あはぬをかこち。逢夜の鳥をうらみ。待宵の鐘に。戀の情を盡せり。湯殿柴部屋のせは〳〵しきちぎりに。百とせのよはひを。のべたる心地して。さらぬ顔をつくりて出たるもをかし。せはしき事を。戀のあはれといふとも。八坂北野の茶屋ものゝ振廻ほど。手廻しなるはなし。燭臺を握り。階子に上り。客を迎ふるより進退に左右の手を空しくせず。内の亭主心得て。二階口へ銚子盃さし出し。取肴あまたならべり。二三獻の過るを待かね。屏風引廻したるは。つまみくらひたる。蛸や酢貝の。胸につかへたる心地やせむ。

「玉子。山ノ芋は。腎の藥とばかりおぼえて。同じくい物ならば。水をます物にしくはなしとて。朝夕すゝめり。虚實ともに病となりて。剋する所をしらず。古人も。口よく病を致し。共德を敗る。口を守る事は瓶のごくせよとはいへり。吾生はかぎりあり。情欲はかぎりなし。色好むものは。みだりに淫せず。傾城に家を亡すものはあれど。腎虛をしたる人をきかず。

聽ノ箴　　許六

○耳はきく事の役者にして。聖人耳に惡聲をきかずといふは。大きなる無理也。たとひ山林深谷にかくれたり共。惡聲を聞ましとはいひがたかるべし。されば釣鐘も通ぜぬかな聾をよしとはせず。瘂は元來母の胎内より聾にして。此世の音聲をきかずとかや。元來舌の短きにはあらず。共かたちを見ず。共聲を聞て埒するものは。神鳴。ほとゝぎすのたぐひなるべし。尤鳴神は。雲中の沙汰なればさもあらんか。昔より此鳥。此聲をなくと。慥に引合てきく人なし。當世は鵯のたぐひ。此聲を鳴もしらず。たゞ本尊かけたとなけば。是非共此鳥にするもおぼつかなし。和漢詩哥の相違あ

り。千聲万聲。たゞ鳴〳〵とばかり。詩には作れり。此國の哥には。なかぬ事をかこちて。きかぬうらみをよめり。つまる所はひとつなり。和國風流の手柄にして。此鳥にかぎらず。此たぐひ多し。琴をきむとよむは。禁の字の心なるべし。此音を聞時は。邪念を禁ずる事也。もろこしの人は。常住これを左右にし。旅行にも携へ。瀧を詠むるにももたせたり。すべて一日の中。見る事は一にして。きく事は九つなるべし。須臾の間も。耳中に物の音聲の。客とならざる間なし。されば見る聲よりも。聞聲はさきなるべし。其かたち見たらんより。其聲をきくに。情をますたぐひこそおほけれ。むかしより見ぬ戀にあこがれ。思ひをちゞにくだき。傾城の箱階子あらゝかに蹈ならす音は。見るよりも其音に胸つぶるゝわざなれ。蕎麥切はおろしの音に心ときめき。樂屋の笛のしらべは。其猿樂のめでたく舞かなづるよりも。ゆかしきわざなれ。隣家に餅つく音。極熱の頃。垣を隔てゝ車井のはしる音は。其亭主の心まで。涼しく思はれ侍る。和朝もてはやす。小哥。淨瑠璃。箜篌。三味線。是皆婬樂とて。君子はいやしまれける。此音曲をきく時は。何のあて事もなくて。不圖戀慕のおもひを催す。鉦鐃鈸の音は。我人心よからぬ聲と。おぼえたるこそことはりなれ。此音聲は。無常を催す事を。第一につくれり。むかし聖人。樂を以て天下を治め給ふ。我朝の樂も又同じ。夫樂は。天地を動かし。神鬼をなかしむるもの也。これを聞人感をなさずといふ事なし。是其民の邪を禁ずるの源也。されば畔を讓り。戸ざしをわするゝもことはりならん。婬樂暗に戀の思ひをなし。鐃。鐃鈸。自然に死の近づく事を悲しぶ。是人心の私なきしるし也。何ぞ聖人樂を以て。國を治るに治らざらんや。王昭。西施が美なるをきけど。人戀にほれたるためしなし。これ其王昭西施に念を動かさゞるしるし也。吾情たゞしき時は。其物にあつからず。聖人耳に惡聲をきかずといましめ。禮にあらざればきく事なかれといふも。此あたりのいましめなるべし。

銘

○銘頌

五老井　許六選

机ノ銘

芭蕉

○間なる時は臂をかけて。嗒焉吹噓の氣をやしなふ。しづかなる時は書を紐とひて。聖意賢才の精神をさぐり。靜なる時は筆をとりて。羲素の方寸に入。たくみなすおしまづき。一物三用をたすく。高さ八寸。面二尺。兩脚にあめつちのふたつの卦を彫にして。潜龍牝馬の貞に習ふ。是をあげて一用とせむや。また二用とせむや。

東ノ銘

支考

雙白堂主野紅子。夫妻相共好風雅。因有双白之號。東銘指野紅西銘曰其妻。

○むかし人の繪を書そめしに。丹青は後の事なりとて。此白の一字をぞたふとまれける。身に錦繍をまとひ。頭に金冠をいたゞきて。君といひ。臣といひ。男といひ。女といふ。さるは人の見て名づけたる名なるべし。しかるに女のをみなへしは。嵯峨野の露のよすがもあるに。男のをみなへしは。いづこの野邊の秋にかあらん。たゞ此双白堂のあるじとならば。かの商山の翁に頭ならべて。花もおもしろからん。月も面白からむ。其銘にいはく。

〽花鳥にさとればもとのしら髮かな

西ノ銘

許六

○つよからずつよからぬ女の風雅は。糸筋のごとく。

此糸五色に汚れざれば。狂客の悲しみをそへても。何がしが緇塵にそまらざるよろこびを見せたり。天の香来山の衣をたち。布引の機物をはえたる糸すじも。皆是ほそみより出たる。女の手わざならん。猶日本紀の局が。初音の巻にいひけむ。瀧のよどみの年なみより。水上としつもりて。老にけらしな。黒き筋なしとは。共に双白堂の事なるべし。其銘にいはく。

〽髪の花女瀧男瀧のかざしかな　嵐雪

茶碗ノ銘

○黒茶碗あり。花の朝は。ます／＼黒く。雪の夕は。いよ／＼黒し。月待宵のやみをさぐり。闇夜に鼻をとられしは。をの／＼つちめくらのまじはりなるべし。

検校　貧僧　大黒　小ぐろ
はちの子　早ふね　小雲雀

三代目をのん子といふ。のむここそ猶ふかき意味あれ秘してしばらく残す。

〽まつむしのりんともいはず黒茶碗

雲華園ノ銘

五老井四絶ノ一章也　汶村

○夫茶は龍鳳を貴とするは。歸田録の詞也。和漢飲食の中の重味也。陸羽が茶經にのする所。建州。洪州に名茶多して。杜牧もこれをほめたり。和朝明恵といふ聖。唐巴東の實をとりて。始て越前の國に植。都の北。栂の尾に移せり。猶茶の土地に住ならずとて。終に宇治山に掘うつして。上林何某が家をかゞやかす。近世の土産は。駿州の安部。みのゝ華長。熊野。近江。其中に江東の茶勝れたり。政所。松ノ尾は極品也。しがらき。宇治田原は。又其次也。檗山禪師来朝して。唐茶の鍋煎を製す。世もつて隱元茶と號す。これは是出し茶也。これより首の長き茶罐を作ッて。給仕の小坊主をたすけ。几下牀頭にすへて。手づからくむ。其ノ銘に云ク。

能さます　能まじはる
よく悟る　よく寂す
能すゝむ　能へらす

六の徳を兼るといふ共。茶ありて水なく。水あつて茶なくば益なし。龍焙。金砂の二泉は。茶を烹るによろし。三の間の水。柳の水ありといへども。許子が五老井を汲ぞ。此茶を烹る時は。白雲滿碗花徘徊す。一たびこれをすゝる人は。專風雅の志をすゝむ。盧仝が七椀といふは長過たり。

飯酢ノ銘

吾仲

○飯鮓は。いづれの時よりかもてはやしけむ。此六條の銘物にはいへりけり。今はおほやけの奉りものにかぞふれば。下ざまの人は。日を限りても待べし。まして卯の花の咲ころは。此ものゝ氣しきも濟からんに。藤の花の咲時に。それが節をあはせたらん。いかなる人の深き心か侍りけむ。是にて二季草の名も。世の人はいふべし。器物は。杉の香もてつけたる折に入て。此花をかざしにも。又は文など付てもやるべし。かくことゞゝしきやうなれど。すべて上ざまのもてあそびもの也。長良の鮓は。むかしをしのぶより。梅津かつらの名にしられて。

大津松本の旅人も。笠をかたぶけずといふ事なし。かの茄子たけの子の鮓といへば。何のこけらにも似かよひて。あま法師のこがれものならんに。是は形のもてはなれたれば。人の得しらぬも尤なるべし。是に黄な粉といふものを。など添ては給はらぬぞと。ある人のいひたるを。飯ずし見るたびの。笑ひ草にはいふなるべし。共銘にいはく。

以飯名鮓　鮓而非飯　一點鱧皮
十重鳥子　色於雪白　香非梅酸
藤花漸暗　橘香已近　貴介尤褒
下臈未知　昔卞和玉　似之是照

座右ノ銘

芭蕉

○人の短をいふ事なかれ
己が長をとく事なかれ
銘に云
〽ものいへばくちびるさむしあきのかぜ

是非齋ノ銘

許六

○是を是とするは。諂へるにちかし。
非を非とするは。謗るに近し。

羽官平日。儒釋道の書をよむ。道は儒の敵となり。儒は佛のむかふ座主にとれり。若酢吸の三翁。世に再生して。吾はいかいの道を塩梅せば。きはめて是非齋の遊を覗ひて。筆箱の連衆に入らむと。あの方より望まむ。

誄

嵐蘭ガ誄　芭蕉　丈艸ガ誄　去來
去來ガ誄　許六

○誄類　五老井　許六選

嵐蘭ノ誄

芭蕉

○金革を褥にして。あへてたゆまざるは士の志也。文質偏ならざるをもて。君子のいさおしとす。松倉嵐蘭は。義を骨にして。實を腸にし。老荘を魂にかけて。風雅を肺肝の間にあそばしむ。予とちなむ事。十とせあまり九とせにや。此三とせばかり官を辭して。岩洞に先賢の跡をしたふといへども。老母を荷なひ。稚子をほだしとして。いまだ世波にたゞよふ。されども榮辱の間に居らず。日々風雲に座して。今年仲の秋中の三日。由井金澤の波の枕に月をそふとて。鎌倉に杖を曳。其かへるさより。心地なやましうして。終に息絶ぬ。おなじき廿七日の夜の事にや。七十年の母に先だち。七歳の稚子におもひを殘す。いまだおしむべき齢ひの。五十年にだにたらず。公の爲には。腹をしきりても悔まじきうつはものゝ。はかなき秋風に。吹しほたれたる草の袂。いかに露けくも。口をしくもあるべき。今はの時の心さへしられて悲しきに。老母の恨。はらからのなげき。したしきかぎりは聞傳へて。偏に親族の別にひとし。過つる睦月ばかりに。稚子が手をとりて。予が草庵に來たり。かれに號得さすべきよしを乞。王戎五

歳の眼ざしうるはしと。我の一字を摘で。嵐我と名づく。其よろこべる色。今目のあたりをさらず。いける時むつまじからぬをだに。なくてぞ人はとしのばるゝ習。まして父のごとく。子のごとく。手の如く。足の如く。年比いひなれむかびたる俤の。愁の袂にむすぼゝれて。枕もうきぬべきばかり也。筆をとりておもひをのべむとすれば才つたなく。いはむとすれば胸ふたがりて。たゞおしまづきにかゝりて。夕の雲にむかふのみ。

〽秋風に折てかなしき桑の杖　　去来

丈艸ガ誄

○今歳二月末の四日。月は草庵に残る物から。禪師身まかり給ひけりと。湖南の正秀が許よりしらされけるにぞ。胸ふさがり涙とゞめかねぬ。つく〴〵此人のむかしを思ふに。尾張の國に生れ。犬山に仕へて。勇猛の名もありしとかや。一日若黨一人を供し。ひそかに君父の前をしのび出。道の傍に髪おしきり。黒染には引かへられける。常の物語には。指の痛ありて。刀の柄握るべくもあらねば。かく法師にはなり侍ると也。ある人のいへるは。其弟に家祿譲り侍らんと。かねて人しれず志ありて。病にはいひよせられけるとなむ。其後洛の史邦にゆかり。五雨亭に假寐し。先師にま見え初られしより。二疊の蚊屋の内に。頭をおし並べ。四間の火燵の上に。面をさしむけて。吟會おほくは此人をかゝず。先師の言に。此僧此道にすゝみ學ばゞ。人の上にたゝむ事。月を越べからずとのたまへり。其下地のうるはしき事。うらやむべし。然れども。性くるしみ學ぶ事を好まず。感ありて吟じ。人ありて談じ。常は此事打わすれたるが如し。先師深川に歸り給ふ比。此邊の句ども。書あつめまいらせけるうち。大原や蝶の出て舞ふおぼろ月などいへる句。二つ三つ書入侍りしに。風雅のやゝ上達せる事を評じ。此僧なつかしといへとは。我方への傳へなり。又難波の病床。側に侍るもの共に。伽の發句をすゝめ。けふより我が死後の句なるべし。一字の相談を加ふべからずとの給ひければ。或は吹飯より鶴を招むと。折からの景物にかけてことぶきを述。あるはしか

られて次の間に出ると。たよりなき思ひにしほれ。又は病人の餘りすゝるやと。むつまじきかぎりを盡しける。其ふしぐ\も等閑に見やり。たゞうづくまる寒さかなといへる一句のみぞ。丈草出來たりとは。感じ給ひける。實にかゝる折には。かゝる誠こそうごかめ。興を催り。作を求るいとまあらじとは。其時にこそ思ひ知侍りけれ。先師遷化の後は。膳所松本の誰かれ。たふとみなづきて。義仲寺の上の山に。草庵をむすびければ。時々門自啓。曲々水相逢などゝ打吟じ。あるは杖を横たへ。落柿舍を扣て。飛込だまゝか都の子規とも驚かされ。予も彼山に這のぼりて。脚下琶湖水。指頭花洛山と。眺望を共にし侍りしを。人は山を下らざるの誓ひあり。予は世にたゞよふの役ありて。久しく逢坂の關越る道もしらず。去々年の神無月。一夜の閑をぬすみ。草庵にやどりて。さむき夜や。おもひつくれば山の上と申て。こよひの芳話に。よろづを忘れけりと。其喜びも斜ならず。更行まゝに雷鳴地にひゞき。吹風扉をはなちければ。虛室欲寄閑是寶。滿山雷雨震寒更と。興じ出られ。笑ひ明してわかれぬ。身の上を嘯からす哉ときこえし。雪氣の空もふたゝび行めぐり。今むなしき名のみ殘りける。凡十年のわらひは。三年のうらみに化し。其恨は百年のかなしみを生ず。をしみても猶名殘をしく。此一句を手向て。來しかた行末を語り侍るのみ。

〽なき名きく春や三とせの生別れ

去來ガ誄

許六

○維寶永元甲申のとし秋九月。落柿舍の去來卒す。嗚呼悲しひかな。此郎は。向井氏玄勝老人の末の子に生れて。筑紫の方におひたち。名は平次郎。武を業とし。若かりし時より洛に居す。弓矢を捨て十五年と吟じたるは。十五年先の事也。合せて三十年來の大隱士。和名これを浪人とはいふ也けり。いつの比よりか。先師蕉翁にま見えて。風雅の名高ぶり。京師にかまへて。諸子のかしらに坐す。南西の氣を押へ。東北の風を護す。天下蕉門の高弟と稱じて。あら野の時。

正風体のまなこをひらきて。

〽湖の水まさりけり五月雨とかや。猿蓑の選を蒙りて。不易流行の巷をわかち。後猿の新風にのぞみても。終に幽玄の細みをわすれず。

〽木がらしの地にも落さぬ時雨かな

ほとゝぎす啼や雲雀の十文字とは申けり。又いづれの仲妹にや。

〽岩ばなやこゝにもひとり月の客と吟じて。先師の耳を驚かし。月賞翫の第一。古今の秀逸にはきはまりたり。すべて一代秀逸は。一兩句もてる人さへ稀なるべし。此おのこは。已に數句に及べり。二十余年薪水の功積り。嵯峨の落柿舎に師を迎へ。石山の幻住庵に老を訪ふ。心ざし深くて。一とせ難波の變を聞て。速にともづなを解。義仲寺の葬りにも。肩衣に鋤鍬を携ふ。死後の城を堅ク守り。諸生をなづけ。初心をたすく。越の浪化にかはりて。有磯砥波の書を選じ。崎の卯七をたすけて。渡り鳥を集む。此秋我大願に力をよせて。文選序者の一人にすゝみ。病床に伏ても。三度自他の書を寄たるに。いかなる蕉門滅亡の月日にやありけむ。去年の冬は。中越の院家薨じ給ひぬ。ことし衣更着。丈艸卒す。秋九月此郎去て。手もぎ足もぎの思ひをさせて。人の腸を斷せけるぞや。猶生き殘りたる十大弟子の中にも。世のたすけとなりがたきもあるべし。其人かの人と。かへまくほしと思ふ方も有べし。從來の因縁ふかきえにしありて。しかも同じ痢疾のやまひをうけて。共に終りをとれり。身は貧閑清寂の高みに遊びながら。老兄法印の孝養をわすれずして。常は心ならぬ。余所のいとなみもいそがしく。ある時は攝家親王の御館に候じ。遠近の來客に對し。四時の運氣を察し。二六の陰晴を考ふ。されど花鳥の細みをわすれず。月雪のあはれに。情をなやます。病ありて。起臥のさびしきをしらずとかや。猶おもふ人のなきにしもあらで。此事かの事仕果してむ。今宵は森の下露わけそぼちて。小萩がもとに袂しぼらんと。玉だれのひまもとむるに。あらぬさはりのみ出來がちにて。初夜過る雪駄の音も程なくしづまり。夜がれのみぞお

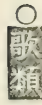
ほかる。又の日もつとめて。とくより例のいそぎに。心のどまるきはもなくて。そゞろ事に暮しつゝ。夕陽西にかたぶけり。こよひこそと。物くひ湯あみし。みじか羽織に長刀。足ばやにすべり出て。東がしらにむかふたるは。天晴私の黨の旗頭。熊谷笠の見いれもよしや。よしやあしやの取沙汰はせぞ。うき名は賀茂の早瀬にながせと。川風寒み千鳥さへ啼て。下庵ちかき聲づくろひ。仕はてざるにさつと明て。打入たるけはひ。しばしいふべき事さへなくて。灯火ほそき方に向ひ。盃引よせ。少くゆらせてより。心地づきたり。此ほど四五日のとだへに。珍しと見るなでしこの。もとゆひものびやかに。露けき心地せられて。あはれなる事ぐさに。節小袖の染もやうも。いまだ其夜はきはまり兼て。膝のはづれに打ふしたれば。小夜もやう／＼更て。衣手さむくそひ臥たり。明ばとくかへらむなど。契りかたらふひまもなくて。南禪寺の豆腐屋も曉をおかし。白川黑谷の鐘も。手枕のすき間をつとふに。うち驚かされて。帶引しめ。刀ほつ込。氷まじりの朝川越て。小芋中ぬきの比。京にはいきつきたり。今はの時の人しらぬ。心の中さへ思ひやりぬ。現の境も千々の思ひを碎き。娘の生さき。其子の母の行末。いかに覺束なく見果つらん。ア、悲哉。松本山の僧が身まかりぬる時は。此秋我に誄せらるべしとは。よも思ひよるまじ。今我辭を作て彼を痛む。此次必我番にあたらむも。又哀なるべし。ア、悲哉や。

（本朝文選卷之六　畢）

本朝文選 卷之七　五老井 許六選

歌

落柿先生ノ挽歌　文考
鄙歌 五首

○歌類

落柿先生ノ挽歌　文考

此歌四章而後。加變聲之歌三章。漢無此法。蓋和文一體歟。

○ことしはいかなる年なれば。かくあぢきなき人をのみ見るらん。去年の神無月は。浪化の君にわかれて。霜の光に名をしたひ。栗津の丈艸は。此きさらぎの願ひにみちて。花の陰に歸り給ひぬ。卯月のはじめは。落柿舍に日をくらし。其事彼事語り合て。是よりたれが身の上をや。鳥も啼らむと。はかなみいひしが。去來はいはるゝ人の數に入て。かくいふ我ばかり殘り居たらん。沖の船の友を失ひて。老の波のよるかたなき心地ぞせらる。なき人の此ごろおほき世やさらにと。むかしの人のなげかれしも。かくあぢきなきをりなるべし。人は廿ばかり。三十も過るまでは。をのれが友達も。同じ心のすこやかにおひたちて。たま〳〵なき人の上を見ても。あはれとはおもひけめ。おどろくほどの悲しさにはあらず。よそぢも過行ほどよりは。幾とせの交をかさねて。その人ならねば此事はしらず。あはでは戀しう。見ざらんはいかにと。文にもいひかはすほどに。けふは其人もなくなりて。世は扨はかなきもの哉と。ことしはじめてしらる也。誠に此人よ。風雅は武門より出れば。かたき所にやはらみありて。先師もそれをゆるし給へりしが。我はやはらぎたる所にかたみあらんをと。逢時ははぶれていひもしつ。まして蕉門の高弟にして。吾輩の先生なるをや。何にか此人をおしまざらん。我のみかくおしむにや。あやし。其歌ニ曰ク。

家は聖護院の森にかくれて。寒き梟の聲に驚き。

名は落柿舍の梢に殘りて。空しき秋の色を恨む。

世ははたいかならん。我はたかくならん。

窓のあらしに燈をまもり。

軒のしづくに影をしたふ。

おしむべし。ア、かなしむべし。ア、

柿の木もあれ行猿のなみだには。夜こそねられね。人も歎らむ。嵐の山の山あらし。世にあらしとは山ぞしる。嵯峨野に人のさがなごゝろや。

○鄙歌

あふみぶり　よみ人しらず

「鶯に。きとろはさぶいみなべらの。うらゝかことの。軒にけよやれ。

自得　はせを

「思ふと。ふたつのけたる共あとは。花のみやこも。ゐなかなりけり。

題しらず　おなじく

「あみ雜喉を。升にはかりて賣人は。かふ人よりも。あはれなりけり。

二かいより落てよめる　去來

「などてかく。いそがしいとて二階から。おちての後は。ひまになりけり。

やまひにふして　許六

「白かゆは。きらいなれどもやめはたゞ。いゐをばくはで。啜る也けり。

文

誹諧發願文　浪化　　聖靈祭文　李由
剃髮文　支考　　祭猫文　支考
弔古戰場文　芭蕉　　返店文　路通
斷絃文　許六

○文類　五老井　許六選

誹諧發願文　浪化

○人死して六道に生れ。からき目見むは。ひとへに娑婆

の業因によれりけるとかや。世に立花すく人は。たてゝは崩し。くづして又たて。終日大汗ながし。葭のさきに枇杷の葉つけて。馬の耳のおもひをなし。屈曲を好みて。鉄釘に打つけ。針がねにしはりかゞめて。見るめもくるしかるべし。わづか五寸の瓶に。千山万水のおもひをこめむも。猶〳〵氣づまりならんかし。若立花せむとならば。曾根の松を心に立て。ながしに清見寺の梅ならば。少は心ののびやかなる風情もあるべし。されど一時の榮花も盡て。まづ椿ころりと落て。無常をしめし。木槿一日の榮をさとりて。程なくしぼる。例の心短きにや。やがてぬき捨。果は烟と立のぼる。それさへあるを。碁うつ人は。赤目引つり。喰物時をわすれ。終夜同じ事ならべたらんは。飽ずやあらん。よき手あしき手とて。一座打こぞり。案じふくれ。碁石のかぎり蒔盡す時。何のをし氣もなく打崩したるは。さりとは殘多き事なるべし。さしも手間入て案じたらんは。せめて五日十日もながめよかし。此人死たらん後は。かならずさゐの河原に生れて。父母戀しがる子共に立まじはり。地藏おほさつの御衣の下にかくれ。あけくれ同じ事すらんも。又あはれなるべし。若一枝さして諸佛に奉り。一日投てはあみだぶ唱へたらん人は。うたがひなく西方に生れて。百味の外の飯食には。なら茶。蕎麥切はくひ次第たるべし。今吾はいかいの結緣は。狂言綺語のふるみにおとし。百韻千句の數を合せて。一座の廻向は。あみだぶ〳〵と申て仕舞侍りける。

聖靈ノ祭文

李由

○それ娑婆のありさまは。寸地に五穀を植ぬ所なく。寡婦が紡績の隙なる日なし。されど貧報に追ぬかれて。餓口更に閉る事かたし。いかなれば極樂淨土の臺を去り。百味の飯食をさし置。盂蘭盆になれば。取物とりあへず。瓜の馬の迎を待かね。麻骨の杖引づり。戸板あら莚の座敷つき。莧荒和布の賞翫殊に。きり麥冷索麵の腹中あひこそ。覺束なけれ。淨土のあまみに飽て。娑婆のかるみをよろこばれたる。聖靈もあるかし。地獄の釜の御戸ひらけたらんは。たまさかの仕合な

るべし。食好みの振舞まては。ちと奢の沙汰にもなるべし。たゞ修羅畜生のあぶれ者。中有の浪人かはきとこそ。おもひやられ侍れ。常に願ひ置れたる作善功徳。讀經念佛の行は。そも何になりたるぞや。佛果を得られたる歷〻も。餓鬼あしらひにおもはれ。中にも新聖靈は。葛籠持の夫にさゝれて。外側に直るこそあはれなるべけれ。生前の列座のころは。あたま數よみて。膳だてもせられたるに。灰の足跡に人數をしられ。終に送火の明に。はやし出されて。草葉の陰に歸りても。料理馳走の評判せんは。もとの人界より。願ひ損の後生なるべし。伏惟。中元の佳節。浮屠の教におほはれ。目連の母を始とし。西の海へ父を沈めしあはれまで。放逸の衆生。たま〳〵五倫親属の名を呼出し。我も一たびは此馳走の數には入べし。一念の慈悲に。寺の小僧が腹ふくらかし。一包をよろこばしむるこそ有難けれ。あがり膳は歯のあともなし。果は魚鳥のたすけとなりぬ。報恩經に。一とせの中六度。聖靈の來去の日ありて。上古は年の暮にも。此祭ありしを。いつの比の簡略よりか。世間一統にいひ合せて。其沙汰もなくなりたるは。たゞつまる所は。坊主の迷惑とはなりにけり。聖靈達〳〵。今年は殊に穏づるもよし。地獄極樂の亡者迄。才太郎畑のいき過まで。さそひ合せて御出あるべし。六日飛脚の頓死なきゝたて。一紙の祭文は御免を蒙らんと。仍謹如斯。

〽聖靈よ蓮にあまらば芋ばたけ

剃髪ノ文　支考

○浪花の舍羅。剃髪の前も舍羅といひ。ていはつの後も舍羅といふ。此舍羅を捨て。どの舍羅をか求めむ。舍羅〳〵として。更に舍羅なし。

〽一たびは瓢の花のあたまかな

祭猫文　小序　同

此文以四六之法用漢字韻也是全似誹諧之漢和而不然始以万葉手爾波文字用之爲韻雖爲和文用韻之始祖太奇也

○李四が草庵に。ひとつの猫兒ありて。これをいつくしみ思ふ事。人の子をそだつるに殊ならず。ことし長月廿日ばかり。隣家の井にまどひ入て身まかりぬ。其墓を庵のほとりに作りて。釋自圓とぞ改名しける。彼をまつる事。人をまつるに殊ならぬは。此たび爪牙の罪をまぬがれて。變成男子の人果にいたらむとなり。其文曰。

「秋の蟬の露に忘れては。鳥部山を四時に噪ぎ。
秌の花の霜にほこるも。馬嵬が原の一夜に衰ふ。
きのふは錦茵に千金の娘たりしも。
けふは墨染の一重の尼となれり。
されば　柏木ノ衛門の夢。
　　　虚堂和尚の詩。
戀にはまよふ。欄干に水ながれて。梅花の朧なる夜。
貧にはぬすむ。障子に雨そゝひで。燈火の幽なる時。
　鼠は可捕とつくりて。褒美は杜工部。
　蛙は無用といましめて。異見は白藏司。
昔は女三の宮の中。牡丹簾にかゞやきて。花まさにはやく。
今は李四が庵の邊。天蓼垣にあれて。實すでにおそし。
前生は誰が膝枕にちぎりてか。さらに傾城の身仕舞。
後世はかならず音樂にあそばむ。ともに菩薩の物數奇。
玉の林の鳥も啼らむ。
蓮の臺の花も降らじ。
　涅槃の鐘の聲冴て。圍爐裏の眠たちまちにおどろき。
　菩提の月の影晴て。卒都婆の心なにゝかうたがはむ。
　　如是畜生
　　南無阿彌

吊古戰場文　芭蕉

○三代の榮耀。一睡の中にして。大門の跡は。一里こなたにあり。秀衡が跡は。田野になりて。金鷄山のみ形を殘す。先高館にのぼれば。北上川は南部よりながるゝ大河なり。衣川は泉が城をめぐりて。高館の

下にて大河に落入る。康衡等が舊跡は。衣が關を隔て。南部口をさしかため。えびすをふせぐと見えたり。扨も義臣すぐつて此城にこもり。功名一時の叢となる。國破れては山河あり。城春にしては。草青みたりと。笠打鋪て。時うつるまで泪を落し侍りぬ。

〽夏草や兵どもがゆめのあと

返店ノ文

踏通

○旅店喰物をかしがむとて。鍋ひとつを求めたり。おほきさ一升あまり。其料にすへ置たるへつゐ。また一めぐりもちいさかるべし。火のあたる所わづかなれば。鍋の底みなひゞきれたり。手にふるゝ毎に。いとうあやうければ。爨おとす業もなむなかりけり。

「旅店一物二用の物あり。夏はすみ〴〵を釣て。蚊虻の觜をとをざけ。冬はよきころにたゝみて打かぶりぬれば。霜雪の愁。藁のふすまにかへたり。

「旅店はわづかの板庇なり。是は貧しき人ゝのすむ。長屋の端をしきりて。一間なる所にしつらひたれば。假のやどりに事かよひて。中〳〵おかしき住居なりけり。月の末には。家のあるじなりける人に少づゝのあたひをやる。もらひ求めて贈る時は。心を易し。贈ざるなりは。迫出されむ事を思ふ。其是非にある事三十日。日ゝ世にむかひ。人に隨ふ毎に。にくまれむ事を悲しみ。譽られむ事をよろこぶ。油皿をこぼさゞるがごとく。氷の橋をつとふばかりになむ侍りける。

「おの〳〵三ツの物。求ざりしむかし。髮すり足をかろくして。容も潤ひ。心もさかむなりしかば。十とせ餘り。こゝろざしの至るに任せて。乞丐のまねをしあるきけり。しかありしも。其境にいらざればにや。あるは風雅に魂うごき。あるは人情にすがた轉ぜられて。いまだ止ぬる道をしらず。折から深川の翁。行脚のつてに。かり初の緣を結び。その樣もゆかしかりければ。過し比の春。江戸の府まで尋ね來れり。六十余州あまねく人聚り氣のあつまる所なれば。ゆゝしき事の數〳〵にして悲しき品をかくせり。まづはとて。翁を訪ひまいらせければ。古鄉の方に斗藪し給ふと。あたりの人〳〵こたえ侍りぬ。む

なしき跡は草ふかき庵を閉て。はせを一もとを殘せり。藪梅のにほひ簾にちり。小鳥の聲軒にあそぶ。賴み來し心より。悲しみを求めて。しばしのあれさいはむ方なし。情あるものありて。なつかしがりつゝ。我を伴ひ。おもひがけぬ此すまゐのあるじとなせりける。それかれはちなみやすく。友とする人ひとりふたりまうけ侍れば。あなたこなたに思ひそみて。一とせあまり。ふたとせの春までとゞまりけり。翁も頃日歸庵なりしかば。かぎりある命に。求がたき願ひみちて。侘るにつのり。詠ずるに高し。霽は杖を攀。杳を曳て。志を雲雨の外にあそばしめ。夜はともしびをとり机にそひて。おほくは千古の餘を論ず。かならず世をいろひ。人を謗るとはなけれど。日なれ聞馴し。上ざま下ざまの品など。物ずきにいひのゝしるは。暫時の情をむすぶなるべし。かくてなむ。此春も春めきぬれば。霞の朦々たるは。目をくつろげ。梅のかうばしきは。鼻をうごかし。雲雀のちり〳〵と囀るは。我に流浪の思ひをすゝむ。嗚呼。いづれの時。いづれの里。いづれの狂人か。同じく此むねをあはれまむ。つながれたる庵はぬしにかへし。彼鍋は人にうちくれて。身は笠ひとつのかげを賴みて。行衛なき方をぞたのしみけり。

〽肌のよき石にねむらん花のやま

斷絃ノ文

許六

○鳥の嚶々と啼キ。木の丁々とひゞく。專友をもとむるかなしみの聲也。人はいふにたらず。子を捨妻をすてゝ。山林の友にまじはり。琴を斷。金を擲て。まことのこゝろざしを盡し。語りかたらふこそ。うき世のおもひ出とはいふべけれ。假初の旅ねに。一夜二夜の別をさへ。かなしと思ふならひなるに。あるは雲井の國に貶せられ。遠きあら磯に配せらるゝわかれ。いたりてかなしかるべし。されど濁江に影見ざる歎きのみにて。同じ世にすむなぐさめもある也けり。たゞ長門ノ國に舟を出し。廣嶋の方に趣く人の別は。みるめなき海士の呼聲のいなせもきかず。磯馴松の獨さびしきに音信るゝ便もなし。こしかた行末おもひつゞけぬる悲しさは。遣方な

からん。我に方外の友あり。江東平田ノ邑。光明遍照寺。十四世の僧。亮隅上人。字ハ李由。一の字は。買年。四梅廬と號す。嘗て律師に任ず。姓は豫州河野の嫡流にして。安藝の宍戸を兼合せたり。母なむ。やむ事なき深窓の女メにして。藤原なりけり。僧三代。我三代。あるは茶に交りてさびを好み。又は碁に暮して勝負をよろこばず。我レ僧は風雅に交る事二十余年。僧は寺を忘れ。我は家に歸る事をしらず。ひとつ蚊帳にむれ入り。同じ衾に足をつゝむ。若孔孟の理屈人を親にもたば。生たる甲斐はあるまじといへば。老佛のいき過たるを。子にしたらん時。身代破滅は立所なるべしとて。是より天地をそしり初て。牡丹芍薬はひくき花也。櫻海棠は能過たり。かれは愚痴。それは鈍なりとて。果は食好の上に落て。餅蕎麥切は急用にたゝず。終にはやみの豆腐に流れて、夜中の勝手をおびやかし。面目もなく其夜も明たり。月見。雪見。星祭。玉まつり。四梅廬の明ぼのには。鳥の初音を待侘び。七種の踏草には。蕗の薹を捜す。笋の數を覗き。瓜なすびの畠をあらす。風臺にふかれ。水臺に冷し。爐開きの次手には。歳旦の句を鍛ふ。煤掃の逃所。鰒汁の定舞臺。從者が無返事に空耳をつぶし。小僧が白眼もわきむいて通る。遲ゝたる春の日みじかければ。長ゝたる秌の夜長からず。伊勢住吉の物まふでの比も共に奉幣をさゝげ。吉野龍田の旅ねの夜も。同じ花紅葉に臥たり。三日對せざる時は。百日のおもひをなし。五日音信ざれば。三年の月日を隔つるがごとし。然るにことし寶永第二ノ。乙酉の六月廿二日の夜。例の積氣胸膈にさしつめ。たれかれよべとばかりにて。終に息絶ぬ。親族朋友のしたしきかぎり。末寺諸檀の僧俗男女。足を空にまどひ。國中さはぎかなしみ。四日五日はとりつゝみ物しけれど。壁生草の。いつまでかはとて。終に夏野ゝ原に送り捨て。平田山に立のぼる一すじの烟に。遠近の里人もいまはと思ひやるべし。後の事共は。有難きかぎりとり盡し。法中の高僧。日夜に席をかさね。和泉なるはらからの御坊も。朝夕のまどをつとむ。中陰の日數も程なくすぐれば。つどひあつ

まれる人〳〵も。おのがかたざまにわかれさりぬ。反魂の香も。招魂の袂も。共に手ぶるき處を好まざれば。ふたゝび俤を見る人もなし。無碍(ムゲ)ー堂の垂布(タレヌノ)の色も。鴈來紅に時を奪(ウバ)はれ。五老井のまつ宵も。一ー人の席を欠たり。つら〳〵四とせ五とせ。僧は肝腎に積をうれへ。我は肺肝に痐をやむ。平生病がちに打なやみて。朝夕の露に世をはかなみ。夕の鐘に命をかぞふ。僧と我といへる事あり。我死ば。僧口を閉む。僧身まからば。我絃をたゝむ。思ふに蕉門のはいかいも。日〻に衰へ。正風の血脈も。次第に絕て。きく人もなければ。する人も猶なし。孔ー子の道は。春秋にとゞまり。五ー老子がはいかいは。此文ー選に盡て。これより後。はいかい閒の博士(ハカセ)とはなる也。僧すでに身まかりぬれば。我果して絃ーを斷(タチ)ぬ。

（本朝文選卷之七　畢）

本朝文選 卷之八　五老井 許六選

傳

○傳頌

東順ノ傳　芭蕉

○老人東順は。榎氏にして。其祖父江州堅田の農士。竹氏と稱す。榎氏といふものは。晉子が母方によるものならじ(し)。ことし七十歳ふたとせの秋の月を。やめる枕の上に詠めて。花鳥の情。身を悲しめる思ひ。かぎりの床のほとりまで。神みだれず。終に吏科の句をかたみとして。大乘妙典の臺に隱る。若かりし時。醫を學むで。恒の産とし。本多何某の公より。俸錢を得て。釜魚甑塵の愁すくなし。されども世路をいとひて。名聞の衣をやぶり。杖を拆て業を捨。既に六十年のはじめ也。市店を山居にかへて。樂む處筆をはなさず。机をさらぬ事十とせあまり。其筆のすさみ。車にこぼるゝがごとし。湖上に生れて。東野に終りをとる。是かならず大隱朝市の人なるべし。

〽入月のあとは机の四隅かな

牧童ガ傳　支考

○牧童は。もと小松の素生にして。賀の金城に居る事年ひさし。家は剃刀の業をもて。よいつねのたつきとはなせりけり。牧童は彼が兄にして。北枝は是が弟也。本より謝公が才能をあらそはざれば。かつて阮家の富貴をもうらやまず。たゞ同胞のあはれみ。そのづから世の人の鏡ともいふ也けり。むかしは梅翁の風流をしたひ。中比は芭蕉の門に入て。時の風雅にあそべる心の。ふたりともにあそぶ所おなじからず。たとへ

ば一巣におひたちぬる鳥の。彼は梅の花の清きに囀り。是は卯の花の曇れるにあそぶ。あそぶ處の同じからずといふは。たのしむ心の殊なればならじ。砥取の山の時鳥も。けふはとぎそと啼わたれば。夜を梟のあそび數奇となりて。吟席交會此人をしらずといふ人なし。時に居眠りをもて。生涯の得物とせり。ある時は欄干の花にそむき。ある時は檐外の鳥を聞ながら。眠り來りねぶり去て。四十年の春秋も過行ぬれば。貴介もこれをわすれ。高明も是をゆるし給へば。終に兜率の内院にも。高くねぶらんとぞたかぶりける。湖南翁。かつてある法師に向ひて。牧童はよき者なりと申されしよし。よくてあしからんや。あしくてよからんや。其翁ならずばしらじかし。しからば生天は先なるべくとも。成佛は後ならんといへる。むかしの人の心も。人はふたりの人に似てや侍らん。牧童常にいへりけり。我むかし。芭蕉の翁にま見えて。武の素子堂が。浮葉卷葉。此蓮風情過たらんといふ句の。物語に及ぶ。此句は此蓮と聲にとなへたるがよしと。おしへ給へりし外は。別に何事もおぼえ侍らずと。時の人是を評じて。げに人は人のならひありて。さらぬみなもともたどりたるやうに。およづけいふらん。かくたゞありの人は。世にたふとしと。されば世の中の老の坂越たらん。其人は飢寒の間におきて。風雅もやゝあやうからずといふべし。

東花坊贊じて曰。むかし人は。恒の産なければ。つねの心なしとて。つれ〴〵の法師だに。安部野のあたりに。花むしろ織て。都のつてには賣もせられしか。まして世にある此人ならば。砌刀のわざのみいときよげなり。かくするどなる物の中にも。かの居眠りのさむまじくは。物と我とわすれたりとやいふべき。物其我をや忘れけむ。我其物をやわすれ劍。ねぶるに時もなく。さむるに又時もなし。何がし和尚の。虎によりて居ねぶりたらん。世におこがましく見られがまし。ある上人は。目のさめたらん時。俳諧せよとも仰せられしか。扨はいかいは人の心にすまじきや。たゞ我心にすなりけり。然れども。人のおもしろがらずば。我もおもしろからず。此さかゐをしりてこそ。俳諧はす

なりけれ。さりや。はいかいは人の心をやはらげて。花に啼鳥の。花ならずしてかうばしといへる。世のまじはりの媒とならば。彼鶺鴒のはらからも。などや一巣のよしみなからん。俳諧はたゞ戯也。はいかいにはあそぶべし。世にたはぶれ。世にあそぶ時は。草刈笛の世にわすれて。牧童の名もおしむまじけれ。所謂素子堂が一蓮のちぎりあらば。其時の翁の心にあそびて。今も一字の師の影をも。ふまざれとなり。

公平ガ傳

汶邨

○坂田ノ公平は。何の處の人といふ事をしらず。源ノ頼義朝臣に仕へて。公時が男。山姥が孫とはいひ傳ふ。年のほどは三十あまりにして。終に衰老の容なし。其生質正直正路にして。人の異見を聞ず。一生彼が妻といふものゝ沙汰なし。其高名をいはゞ。夷が千嶋の末〳〵まで。しらざる人もなく。慥に見たる者もなし。たゞ好む物には茶筌髪に鉄棒にて。其勇力のつよき事は。恰も木綿織物の名目にさへなりにける。かゝる兵も。すこし艶だちたる所のあるや。公平女とはいへ共。いまだ男子の號には蒙せず。治世榮花の程を見むと思はゞ。和泉大夫が芝居に走りて。寺上りのわらんべ。又はつよみを好む中小姓の。感に堪たる顔つきを見るべし。つら〳〵無常迅速の哀をしるや。いづくの隠元禪師にはだまされけむ。ごそとすりて。公平道心とはこゝをいふ。剛き物先ほろぶためし。死ぬべき場所をこしらへ。終に黄泉に旅立せて。地獄破りの沙汰まではありて。其後は便りをせず。彼公平が手柄のほど。上下万民をしなべて。かんぜぬものこそなかりけれ。

五郎四郎傳

支考

筑紫に五郎四郎といふものあり。其性は小麥の餅也。明暮これに馴たる人は。たゞ五郎四ともいふ也。此もの野畠の間に生じて。肌をろそかに色くろし。しかれども菓子屋の手にわたりて。百練千鍛すれば。あるひは饅頭の肌やはらかに。かすてらの味ありて。ほとんど僧を落さむとす。むかし志賀寺法師の。容こそ痩たれ。

心は花の都人を戀そめて。玉の緒の歌はよみ給へり。まして其名も。三輪の山本に住て。葛城の神の。晝のかたちにもはづる事なし。されば心ぐだり。姿いやしきだに。色はすつまじき世なりけり。五郎四何にか侘しからんよ。あるつらの人は。衣食の價をむさぼらず。酒肆婬坊の眼高しと。人の人にもてはやされて。こゝろの外に見ぐるしうやつれ。座上にありて。虱をひねる。さばかり捨はてたる世ならば。石上樹下のすまゐこそあるべけれ。しのぶ山の關路も。こゆる人のあればこそあれ。戀せじ。酒のまじとは。誰にかかためたるぞや。先師ノ曰ク。色をおもふ事。溫飩のごとくせよと。汝をよろこぶもの。日夜に愛せず。汝をにくむもの。絕て嫌事なし。しからば物のほどをいへるなるべし。汝が本性はいやしからねど。おほくは賤の女の杪子にかゝりて。ありがたき生涯をあやまる。されど世をてらひ人にこびて。身をかざらむとする人には。をのづからまさりもすべし。此さかるは。汝チ五郎四がしる處にもあるまじ。何晏がおしろいせぬ顏も。一世の願ひにはあらず。兵部卿の宮の。かりのにほひもまた仇なりとしるべし。世はたゞ世にしたがひて。眼前のたのしびをたのしむべき事なり。

へ夕がほに鏡見せばや五郎四郎

靈虫ノ傳

去來

○浮世に米といふ虫あり。母は出雲の國。稻田姫のながれとかや。父はゆく衞もしらぬ稻のとの。夜な〱かよひ來りて。かくはいなほの孕み初けるとなむ。ふるさとに侍りし中は。川水にやしなはれ。案山子法師にもりそだてられ。やゝ生ひたちぬるまゝ。賤のふせ屋に籾とよばれ。晝はあら莚の上にならび。夜はせはしき俵の中に臥。されど久しく民間にとゞまらず。地頭代官のもとに上られ。或は鞍つぼに遣のぼりて。須磨逢坂の關をこえ。あるひは船板に飛うつりて。敦賀下田の沖をはしる。終に商家の藏の中にかくれて。おそろしき空音を啼出しぬるは。あやしき里に。春の鳥の花にたはぶれ。秋の虫の露をかなしめるおもひにもあらず。

時しらぬ虫の音ながら。春は一しほ音もまさりけり。又は旱うちつゞき。雨風さはがしき年の暮には。かならず高ねを出して。嫠婦の胸をおどらせ。窮士の腸を斷せるのみか。乞食などのこれになきこゝろされむも。いとあはれふかゝるべし。常に國〳〵よりあつまりて。おほき時はねよはく。旁〳〵に分れて。すくなき時は音つよし。まとやみづからなかずして。人の口をかりて音をふるゝと。あだにあやしかりける虫のしわざなり。たゞ富貴の場にあそべる事をよろこびて。貧賤の竈に入ル事を耻。しかはあれど家〳〵にかひとられ。唐櫃の中の辛め見しより。ながく聲ねをとゞめて。いつとなく滅失けるにぞ。人〳〵は皆あきれ果侍られける。

疝氣ノ傳

李由

○疝は病の名にして。氣をつむ事山のごしとは。素問の說なり。いづれの臟腑より出る事をしらず。陰經に城郭をかまへ。淫嚢をかくれ里にさだむ。常は腰のあたりに逍遙して。火箱煖母の陽氣にうそぶく。かれが一世の手柄をかぞへば。花に啼き。梅に囀る時。人のとがめをうけず。卯の花に千聲万聲を叫び。陰を感じては。秋の野もせの聲よりもしげく。時雨ふり初る比。火燵にやりわたしては。きり〳〵すのよはりにひきかえ。高音をはりても。屁屓比丘尼の働も見えず。公界に出て不圖とりはづしても。をのづから咎を疝氣に蒙らしめ。病氣不相應の大食も。かれが病の色に取なし。青ざめたる顏色も。ふく病やみと名付がたし。貴賤老若。男女小兒のさかゐもなく。又虛實のわかちもなし。大雪をしり。雨氣をさとり。土用八專には毎度蜂起して。胸膈に横たはり。痰を帶ては眩暈を起し。怔忡をしては胸をおどらす。世に醫術の良薬ありて。三和五積の煎湯を施し。あるは蕎麥切のおろしに驚き。芥子番椒に目を醒して。斗方を失ふ時か。飛脚の腨にかくれ。瀉腹の勢ひにさそはれて。不圖此界に下る時。矢場に杖のさきに卷出されて。果は六條河原にさらされて。尸の上の耻辱をかうむる。一陣やぶれては殘黨まつたからずして。終に太平を

謡ひ。腹つゞみを鼓いて。天下戸ざしをわすれたり。

〽橙や病氣治る御代の春

直指ノ傳　　許六

○百年後の人に語ッて云ク。誹諧直指の傳あり。たとひ上手の名ありとも。理屈あるは。眞の直指の俳諧にはあらずと知べし。むかし守武宗鑑より以來。興をとる物をはいかいと名づけ。實ある事はかつてしらず。先師はじめて。躬恒貫之の魂を見ぬき。正風幽玄の實を得たり。道のべの木槿は馬に喰れたるより。あら野猿蓑に至つて。正風の躰を慥に顯はせり。俳諧中興の開山となつて。是より翁とは稱し侍りける。されば其風になびく門葉。里にみち。巷にみてり。されど理屈の境にまよひて。直指のはいかいは一人もなし。夫理屈を離るゝはやすし。理屈をはなれたる後は。趣向をはなれ。手に携る一物もなし。人麿のほの〳〵。赤人の田子の浦の場所は。先師のはいかいにして。ふるくざひかへりたる事は。たゞ百人一首の哥を見るがごし。無爲の妙句はいひながして盡ず。跡に光明の光を放つ。理屈の句はつまりて跡へもどる。是彼ノ光明をあやまり覺て。終に理屈の境をしらず。和哥は貫之より。基俊。俊成に傳り。連哥は宗祇宗長とつゞく。今先師の俳諧血脈相承の者を聞ず。我東に赴き。始て師にまみゆる時。旅の句問れけるに。宇津の山にて

〽十團子も小粒になりぬ秋の風　と申ければ。師驚ていへり。汝いづれの敎によつて。愚老が流を見届たるやと問。我あら野猿蓑を師とすと。吾子は誹諧の集を見る者なり。今わが腸は見ぬかれたりといふ。再會の日。嵐蘭子に語ッて云ク。我レ門人の器をもとめて。はいかいを殘さむと思ふに。昨日許子に會して我ガ望を休せり。撰集に我ガ魂をとゞむる時は。後代許子がごきも又あるべし。千歳の後も。愚老が血脈は朽ざる事をしれり。其後三月盡の夜。師來りて。終宵閑談して。衣更の句を望めり。我一兩句いへどいまだ叶はず。師ノ云ク。すべて世の人。句の慥を好む。上手はあやうき所に居れり。されば上手の上には。かならず仕損

じおほし。愚老が當歳旦。
〽年〳〵や猿にきせたる猿の面は。まつたく仕損じの句也と。我問。師の上にも仕損じありや。答て云。毎句あり。仕損じたらんに何のくるしみかあらん。下手は仕損じを得せずと。我此時はじめて眼をひらきて。
〽人先に醫者の袷や衣更といへば。師ノ云ク。是也。吾子が俳諧の底は此所にてぬけたり。はいかいに底ある者は。新古にわたりて自由を得ず。愚老は常に許子が行末を恐れて。みだりに句をいはず、諸門人由斷すべからずといへり。當時もてはやす門人の俳諧は。全く先師の流にはあらず。晋子ば作を好みて。己が一風を立たり。猶頃日の風躰は。はいかいの名を改め。餅とも酒とも名づけたらんに。何のたがひかあらん。東花坊は賢き者也。先師身まかりて後。みづから上手といはせ。師說にうとき事もあるにや。虚實新古の取ちがへも有べし。俳諧を弘むるには利ありて。はいかいの道を殘す爲には。おほきに害あり。他の俳諧の事はおいて論ぜず。其角支考は下手にてはなし。先師の口僻はよく眞似ける。芭蕉流にはあらず。はせを流正風躰の血脉を得たる者は我也。當時ははいかいに醉て甲乙をしらず。後世は忽醒て善惡を定むるに遠慮なし。其遠慮なき人に正風躰を示す。

三月盡

〽けふ限の春の行衛や帆かけ船
〽春なれや田の青苔に啼ク蛙
〽四五月の卯波さ波やほとゝぎす
〽わが跡へ缺口立よる清水かな
〽欄干にのほるや菊の影法師
〽看經の間を朝がほのさかり哉
〽初霜や鐘樓の道の沓の跡
〽はつ雪や治る江戸の人ごゝろ

是先師滅後の句也。先師生前の耳を驚せざるも無念にして。今又一人も。此句の腸を聞人なきこそ。猶又無念の事なれ。後人芭蕉翁の血脉。嗣人なしといふ事なかれ。今此傳を讀で。定て過當といはむ。謝して云ク。過當人も死し。又過當といふ人もほどなく死せむ。これ

その怒をやはらぐる處なれば。かならず見ゆるしをくべしと云〻。

碑

壺碑　芭蕉
笠塚碑　李由

五老井　許六選

○碑類

壺ノ碑

在奥州市川村多賀城　芭蕉

○つほの石文は。高さ六尺あまり。横三尺ばかりか。苔を穿て文字かすか也。四維國さかゐの數里をしるす。此城。神龜元年。按察使。鎭守府將軍。大野朝臣。東人之所里也。天平寶字六年。參議東海東山節度使。同將軍惠美朝臣獦。修造而。十二月朔日とあり。聖武皇帝の御時に當れり。むかしよりよみ置る哥枕。おほく語り傳ふといへども。山崩れ川落て。道あらたまり。石は埋れて土にかくれ。木は老て若木にかはれば。時移り代變じて。其跡たしかならぬ事のみを。こゝに至りて。疑ひなき千歳の記念。眼前に古人の心を閱す。行脚の一德。存命の悅び。羇旅の勞をわすれて。泪もおつる斗になむ。

笠塚ノ碑

李由

○江東平田邑。光明遍照寺の地に。先師はせを翁の笠塚あり。十四世の僧某シ。蕉門に入て學をつむ事二十余年。思は琵琶湖より深く。をしへは打出の眞砂より高し。朝には香華を備へ。夕べには句を錬て。推敲を定めむ事を祈る。むかし芳野山にのぼりては。花の明ぼのを見せかけ。竹植る日は東坡が笠をうらやむ。月のあみだ笠に。時雨霰のいかめしき音を。佗られたる俤もなつかしとて。死後に此笠を乞うけ。終に土中にこめて。門人各一句をさゝげて。かの塚に同じく納む。世に報恩を殘したる。長崎に尾花塚。深川に發句塚。越

中に翁塚。木曾塚は直に遺骨を葬る地なり。されば西行の塚とて。國〳〵に殘したるも。此類ならん。あなかしこ。死後の門人。師にま見えぬ事を。なげく事なかれ。はやく此塚に來り。季札が劍をかけて。一句をたてまつらば。生前の門葉にひとしかるべしと。弟子李由字買年謹ンでこれを書ス。

本朝文選卷之八　畢

本朝文選 巻之九　　五老井　許六選

辯

○辯類

詩歌誹諧辯

丈艸

○一士あり。火燵壇上に誹麾を把て。諸生に示して曰く。泰平壑震つて。風雅四海に波わく事久し。中にも俳道の一流。あらゆる國郷に入わたりて。村童野老も干麥を流し。鍬杖を朽さむとす。しかれども。詩哥の高みに涼居て。古人よばりする輩は。にが〳〵しく彈指していへり。渠がと。なんぞこゝろざしをやしなひ。道におもむくたよりならむや。ひとへに滑稽の雜口。虚言にして。俗中の俗なるもの也と。今我一辨を出して。銘〳〵の境をあらため。道〳〵のをし及べき所を判断すべし。まづ和哥の徳たる事。誰かあふがざらん。上つ代より傳へ來て。人の心を種とする言葉。其誠より責らるれば。鬼もあら男も。頂をたるゝ正道なり。其様躰。たとへば雲の上人の。衣冠つやゝかに。帶笏けだかうして。轅の中にいまそかるがごとし。青侍、白丁はなく〳〵しく。警よそほひ。住吉玉津嶋と氣色うかび。あるひはよし野はつ瀬の遊山めきたり。たま〳〵には富士。あさ間。須磨。明石の逆旅に。浦のとま屋の夕暮までは。ながめ盡しぬれど。さすがに蛸壺の底さし覗きて。あはれしるにたよりなく。小鰕まじりに。竈馬鳴蛩の屋には。腰かくべき褥も見えず。まして野くれ山くれのはし〳〵。牛道。鹿道。猿すべりの邊は。名を聞にも及ばず。これその位高く。官高きが故に。下に臨める風景。棄る物おほしといつつべし。詩ははなはだ無碍自在にして。志のおもむく處。

辭の隨ざるはなし。其飛行のすみやかなるありさま。かの名におふ。八匹の駿馬をまるめ合せて。飼にかふたるがごとし。手綱すれば。盤面にしづまり。鞭すれば。四方八極。時の間なり。況やその上の風流。山を見て後むきに跨り。句を錬て手悶をなしぬ。鞍の上疊勝りにして。前後左右かけ障りなし。嗚呼快なる哉〳〵。如何せむ。今是に乘るものの。おほくは桃尻なる事を。俳諧のかたちたるや。簑笠竹杖艸鞋しめつけて。朝立したるがごとし。京田舍去嫌ひせず。一所にあなまどひせず。雪の市中に押れ。陽炎の芝原にこけたり。あるは山寺の小料理になぐさみ。士亭に逗留をあかれたるも。一段の笑ひなるをや。月ほとゝぎすの曉を。木の根。岩ばなに寐覺て。又見ぬ方に歩をすゝむ。はてかぎりなき津〳〵浦ゝ。薩摩潟。蝦夷が千島の門背戸までも。さらばいへ。殘す物あるかは。是吾道の廣みにして。我あそび所といふべし。氣のむく處。目のおよぶたけ。風せよや〳〵と。募ておぼえず手をうちけれど。從者は例の茶に倦じて。火の氣を打消し。勝手は夜半の時雨じみけり。

定先後辨（マヽ）　支考

林紅法師。むかし浪化に具せられ侍りて。吾翁と物いひ。顏をもしれるける人なりしが。其頃は年いとわかくて。風雅もねぶたきころなるべし。此地に嵐青のおのこありて。其時の次手ならん。手水湯もまたなつかしき梅の花といふ句を。手水湯に竹椽あをし梅の花と。翁の生前に筆を添られたれば。かれは林紅が下にたゝむ事を恥。是は嵐青が上にあらん事をあらそふ。其あらそひは。まとに君子なるや。東花坊これが判者たらんといふに。いとけぶたし。風雅に通じて。翁を見ざる嵐青は。見ぬ戀にあくがれ。翁を見て。風雅に通ぜざる林紅は。逢てあはざる戀なり。いづれも戀の部にはありながら。心とけぬほどはいかにかまさらむ。くらぶ山の嵐も吹あへず。あだし野の露もをさかはりて。八とせのむかし語ならば。我も其翁は戀しかりける。世に風雅の信あらば。其翁は湖南におはして。面白き人

には見ゆべきとなり。されば風雅の心にあそべ。心の風雅をば求むまじき也。

へ逢坂も粟津も果は秋の草

豆腐ノ辯　許六

○むかし晝とあけ。夜〻と暮たる時。豆腐といふ物一丁出て。名もなく。類もなく。甲もなく乙もなし。たゞうまきと斗おぼえたるこそありがたけれ。それより小路〱に出生して。世〱の聖賢に料理せられ。昔豆腐は。石部金吉とてすたり果て。今やうのおぼろめく物を。豆腐の聖とはいひはやらす。猶五倫五常の献立を作りて。是は仁也。それは義なりと。急用に取出す。七つ入レ子の三つめ五つめを。求に應ずるには似たり。田樂一串にも。仁義は自然にありて。天地をつらぬく風味はもてり。折ふし藪賢人あつて。豆腐をあへ物にせむといへば。朱子程子の塩から口は。これを異端寂滅と酬すれども。元來聰明睿智の飛助ならでは。此行過はならず。たとへば用名ノ介が〔非ズ揚名ノ介ニ口傳云〕隣家にあたつて、碓を穿てり。終日耳中に客たり。過去の聲は盡て。未來の音はひゞかず。たゞ一聲の碓にして。終日一聲のからうす也。許由むかし。堯の天下をうけず。なりひさごもかしがましとて捨たり。天下國家のたくはへは。輕して棄るにやすく。耳中の瓢の畜は。重うして捨るに難し。巣父が牛をあらはざるは。元來許由が耳の汚れたるを。にくむなるべし。和漢同じ耳垢等が。ほめしるしたるこそ口をしけれ。されば前後なき事をみづからしらば。すたりたる田舍豆腐も。開闢一丁の豆腐に。異なる事は。なかるまじかし。

天狗ノ辯　木導

○萬の形ある物。いづれか畫圖にうつされぬ物はあらじ。されど眞向の天狗ばかりはなるまじとて。繪かく人は常に笑ひ侍りけり。いかにぞや。天狗しりの古法眼も。正面の鼻にはこまりぬらん。此もの。神祇尺教にもあらず。人倫生類の部をのがれて。俳諧の爲には。よき道具ならむ。世の人の我慢長ずれば。鼻にあらはれ。

天狗となりて。杉の木ずゑに居を卜。愛宕高雄の山住を好み。都の秋のなつかしとや。うき世の嵯峨のあたり近き。嵐の山の夜あらしに。木の葉天狗ぞさそはるゝ。又は大峯かづらきや。高間の山の花ざかり。富士の高根にねぶりては。月雪のふる里をわすれたる。浮世のさまぞあはれなる。されど名哥などよむべき顔にもあらず。かの里も出かはりやありけむ。虚氣たる男をたぶらかし。嫁取もせぬ宿に。礫を打かけ。火事をすかれたることそうるさけれ。かゝる境界にも。何の奢かありて。無盡の沙汰には及び。天狗賴母子と人にはいはれ。弦めその一座につらなり。六波羅の酒盛には。醉狂ひの擧句もいぶかし。うるさき顔にても。花の都人を戀そめ。牛若殿に浮名をながし。心中のしるしにや。爪をはなし。果は竹生嶋に送られて。たから物の數には入ぬ。ある人。洛の大儒に天狗を問。これ深山幽谷のいきれより。かゝる變異は生ずる也。何の怪とするにたらんと。されば天狗を山谷のいきれといはゞ。麟鳳は聖人のいきれならん。尾長虫は糞土のいきれにして。虱は乞食のいきれなる事慥なるべし。

手足ノ辯

汶村

○甲冑のよろひかぶとをあやまり。行燈挑灯をとりちがへたるは。むかしより闇中みな誤りおぼえければ。却てあらためたる人を。あやまりといふも理ならん。こゝに一身の中。足をいやしとし。手を貴しと定め置たるは。いづれか賤とし。いづれかたふとしとせむや。いやしとて。終に斬捨たる人もきかざれば。持にこそ定め置たけれ。それ足は行歩を產として。外の用をしらず。沓木履をかけ。草履わらぢをはきて。直に土をふまず。居る時は。足袋襪につゝみまはし。あゆみつかるれば。馬駕籠に扶乘られ。千山万水の間に坐して。風情に嘯く。手は一身の奴にして。定めたる產なし。頭の虱を摑り。跟のあかぎれを撫る。至らざる所なく。又なさずといふ事なし。是いやしき事の第一なるべし。貴人高家の傍に。侍女小姓のつとめあれど。厠の役ある事を聞ず。されば我脚にて。他の鼻端の塵を拂は

ど。人怒つて。我を罪せむ。人また我が頭の蠅を。足にて追はど。我是をたふとしとおもへど。世の人我に代つて。にくみのゝしり。怒をうつして。我を阿方と號するこそ。おほきなる僣上なれ。其僣上人。蒲團簟に臥て。休する時も。かならず足を伸すを一番とす。湯に入ん人も。足からならでは這入がたし。向後足にあたらしみをつけて。手を古風のふるみにおとさむ。但し徳利子は。各別の沙汰なるべし。

人參ノ辯

許六

○夫人參は。元氣大補の聖藥也。からやまと。これを寶とす。とりわき三十年來の和醫。人參なくて。人を療する事かたしと見えたり。邪氣濕熱陰虚火動のわかちもなく。人參〳〵には。病家おほきに草臥たり。凡人參の斤兩はかぎりあり。かぎりなき人參つかひに買とられて。世界の人參。威をまし。時を得たり。價高直にして。凡夫貧僧の口に入事かたし。產は朝鮮を最上とす。其代物。たちどころに魂を失ふ。醫家朝鮮の產を好るゝは。おもきがうへの小夜衣。質に置より外はなし。彼ノ人參醫者を察し見るに。理屈人の利錢する心になぞらへ。又は低人の價高直物にめでゝ。ひたすらたふとまるゝと見えたり。人參の力にて。あまねく人の命をたすかるならば。邊塞醫療なき地は。人種は盡べし。たとへ死ぬるにもせよ。人參に殺さるゝ者なし。人參ある國は。人參にて人を助け。又人參にて人を殺す。生死の算用は。持にして置くべし。されど大切の金銀。ついへぬ方勝ならん。やまひに三ッあり。人參にてたすかる病。人參にて死ぬる病。人參なくて活るやまひ。此三ッの內。人參なくて事欠ぬ方。ふたつなれば。是もひとつの勝なるべし。我沉痾老衰して。折ふし人參を用ゆ。唐の產。朝鮮の產。其功すこしもかはる事なし。醫家は人にあたへて。外より察し。病者は我呑て功を知ん。たま〳〵病家に入て脉をつまみ。そこ〳〵に尋ねちらし。病見どをしの顏つきにて。合點〳〵で歸らるゝなり。彼ノ人參にもり殺され。忽あたりたる事をしらず。其功いまだとゞかずして。

むなしくなりたるに極ぬれば。又人参のきゝたるをも。たしかには知ッ給ふまじと覺束なし。きくとあたるとの境目もわかれざるに。朝鮮唐の産の微細の能は。知ッ給ふまじと。猶〳〵おぼつかなし。我レおもふ唐より渡す所の。數百方の醫書。皆唐人参にて組たる方也。若シ人参朝鮮にかぎらば。其國所を記すべし。唐人何ゾの遠慮すべき。されば川芎窮弓のたぐひも多し。それ萊菔は。尾張の産を極上とす。されど大根のなき國所。なくて事の欠たる事を。きかざるがごとし。それ醫道。俳諧。よく相似たるべし。醫者やまひにむかひて方をつけ。作者前句題に望みて。趣向をよする所。其理屈をはなれ。つく。つかぬの危き境は上手名人の手限。同じ場所ならん。當時醫をまなび。哥道を習ぶ人を見るに。其稽古前後なり。まづ所作を盡しからして。なを其道に精からん時の。學文なるべし。これ古人上手の仕かたなり。さるを學文よりまなび入て。一切理屈にてすますゆへ。祭過ての皆掃除也。むかし丹溪。素問を見て。四十より醫に入ル。古今の醫聖と稱す。すべて醫學は。狭き物ならん。道を盡し。理を究るは。素問一部の事也。其餘は。味噌塩の献立にして。以呂波寄の字盡を引よりもやすかるべし。今の上手めく人は。毎度素問の語で堅め。本草の説をつばなかす。文盲の病家。平詞を信ぜずして。大きに漢字に驚きて。上手名醫に極む。當世のやまひは文盲にて。素問本草を聞しらずして。彼ノ名人の御薬はかつてきかず。ある人犬の吠かゝるには。虎といふ字を。書て見すれば。忽にぐると習ひ置て。ある時人喰とびかゝりけるに。習の文字を書て見すれば。其手にくらひつかれけり。日本の犬は文盲にて。虎の字のよめぬがごとし。たゞ理屈より理屈にくひ入ッ。是は上を見てゐる句。これは下を見てゐる句なりと。小刀刻の小細工は。みな素人に耳ぢかければ。終に理屈にすゝめ入レて。理屈地獄に墮すなり。されば霍亂の賣薬は。はくらん病が買なりとは。名人の一言なり。百年の後。若シ理屈がすたらば。わが僭上のこと葉も。又眞となるべし。

射御ノ辯

許六

○比類なき勇武の木陰をたのみ。百年の高恩は。廣く天をいたゞき。三代の徽祿は。徒に地をせばむ。是を食る腸は。忠義をのべて形となし。武道を錬て肉を作る。膚たゆまず。目まじろがず。能登殿の矢尻は。胸板におれこみ。彦四郎が切先は。腹の皮におさめかくす。老は齋藤が髭にちかより。年は諸葛が齡に隣る。嗚呼千行万行の涙をおとし。三思一言の辭を殘す。

夫レ武士の武道だて珍しからずとて。商人のなすにもあらず。たゞ武士は。武士の眞似がよき也。さればとて。武士の武士臭きは。鼻を覆ふ。おのれ〳〵が家職の。ふるき事をしらず。魚物野菜のたぐひも。ふるき物はかならず臭し。武士の武藝を好ムといふは。本意にあらず。其武士幸ィに武藝に好當れり。博奕遊興好に嘗てかはらず。武術力量をあてにおもふべからず。馬物具を頼むべからず。佐々木四郎は。わが氏姓の祖なれど。生食頼みに宇治川の先をかけられたり。もし世に生食和墨なくば。先のならぬも不自由なるべし。搦手數万の由斷人。一騎も殘らず渡しぬれば。佐々木が鎌倉の荒言も。すこしは是にて戻りけり。嘲笑ふに似侍れど。佐々木。梶原になづまぬものは。おほきに褒たる言葉とは。かならず知べし。一とせ大坂表におゐて。穴澤といふ天下無双の長刀の名人も。折下外記にたばかられて。終に組討には討れたり。一生の骨折は。此時一度の用なるを。打わすれたる不覺仁の。穴澤をいふにはあらず。たゞ藝術を頼むべからず。むかしより。一番鑓をしたる人に。上手の號もなく。又下手の號もなし。かくいへばとて。武藝をなすなといふにはあらず。武藝の名稱は。太平の代の看板なり。武藝とて。我役にあらぬ事は。せぬがよし。しらぬといふて耻にならず。立身にしたがひ。役替にのぞみて。其時すみやかに當役は習ふべし。其癖當役は無沙汰にして。いらざる說經者の馬乘習ふたぐひならん。一藝すぐれたりとも。武の全きにはあらねど。一藝をも愛し給ふは。大將の役なり。我わかゝりし時。此道にふかくわ

たはる道をしらでは。息合病馬に疎しとて。大閤秀吉公の愛臣。桑嶋左近は和の馬師公也。此術をたづねもとめて。百二十巻の祕方に渉る。馬の好悪をしらざれば。求る道に疎し。古今目利は一流にして。山上入道が傳也。世に馬を見るといふ人あれど。山上入道の名をだにしらず。ましで深き習ひある事は猶しらず。往昔は此藝称せられて。祿をいたゞくものおほし。今はしる人さへなくなりたり。これを段の目利とはいふなり。馬上の五物。鐙合。太刀打。早乘。早をりは。鞍鐙の善悪によれり。これをしりて求めざれば此事かなはず。大因幡三代より。代々の手曲をしり。寸法。曲尺合。殘る所なくおぼえて。これらを常に肺肝の間にかくし。泰平の世の安居の樂となせり。汝ひとゝなり。筋骨つよく。力つきなば。おのが分限をしりて。常役を勵むべし。功成り名遂て。餘力あらば。天地陰陽の理を探り。仁義五常の道を學びもすべし。これを文武の侍とはいふなり。かならず文にながるゝ事なかれ。武士は武道を先にして。文は後にとけ入。春の花のむなしくちり。秋の月もおもしろからず。あけては食をわすれ。暮ては寐る事をしらず。されど弓は力よはくて矢束を引ず。玉打は目にやまひありて。細ヵにあたらず。此二いろの道は。口おしく欠たり。凡ッ手足にかぎりあれば。しりても持では益あるまじ。劍術は。母方の祖父にしたがひ。正法念流の兵法を學び。すでに未來記の奥義を傳ふ。祖祖父より四代の門弟。二千余人の中。未來記を嗣もの纔二三子に過ず。これ劍術諸流の源也。鑓は横手物に利ありとて。父が術を繼。寶藏院の法印より。我レに至りて五代なり。馬は悪馬新當流を學むで。かけひきの道は達者なり。此三のものは。一騎武者の手足にして。これをしらぬものは曾ッてなし。これに精からんとおもふに。太刀打はつよく首に斬つけ。鑓ははやく敵の胴腹を。突ぬくより外に道なし。馬は其品おほし。よく乘得たりとも。軍馬の上をしらぬ時は。おほきに欠たりとて。黄母衣の隨一。河合氏の祕術を尋ねて。常に數巻のおもむきを。ふところに納む。馬はわが足なり。い

心得べし。今吾が猶子十歳の時。遺誡のはじめに。此辯を書して。武の魂をいるゝものなり。

表

雨乞ノ表　許六　嘲二佛骨ノ表一　其角
讀二佛骨ノ表一　厚爲　陳情ノ表　支考

○表類　五老井 許六選

雨乞ノ表　許六

○皇天天に位し給ひてより以來。四海の民を愛し。農業おこたらず。蠶飼時をうしなふ事なし。あまねく御うつくしみの波は。八嶋の外までながれ。ひろき御めぐみの風は。いたらぬ里〳〵もなかりけり。しかるにことしの夏六月。おほひに旱して。雨一すじも降らず。千里草枯て赤地となり。百川水盡て川原となる。野老たふれふし。村翁餓つかる。牛羊唾かはき。犬馬舌こがれたり。白晝に星あらはれ。日月は赫ゝとしてあかし。龍神も岩穴に引こみ。鳴神の駒も膝を屈してたゝず。土器の大豆は。忽いれこがれて。水晶の艾は。たちどころに火となる。白髭の鳥居は出て。葦原の變を感じ。鹿飛岩あらはれては。勘者の勞を盡す。大堰桂の水いさかひには。鋤鍬の鉾先をあらそひ。鳥羽の田づらの古井を汲では。釣瓶のひまもなかりけり。されば國王もまとありて。政たゞしく。古代の風を興し。かりほの庵のあらはなるをあはれび。寒夜のあかつきには。御衣をぬがせ給ふ。百官忠義を盡し。郡主民を撫ては。かぎりある貢物をゆるされけるに。天何の怒かあつて。かゝるからき目見せ給ふぞ。神泉苑の祈さへしるしなくて。布留の社の名のみ空し。牛を洗ふては雨をいのり。簑笠をかけては氏神をたのむ。天はやくあはれみをたれて。雨をほどこし給はゞ。御湯は大釜を盡し。相撲はあたらしき鼻褌をかゝげむ。猶ひなびたる笠の躍もおかしく。裝束出立は揃はずと

も。借着ばかりはゆるされて。摸様は天道次第たるべし。庄屋肝煎謹ンでかくのごとし。臣悲歎の情にたえず。拝表して以て聞す。

嘲佛骨表　　其角

古文傳ノ類准下讀孟嘗君傳之例上

○むかし韓退之。表を奉つて佛骨を嘲る。今我これを讀みて。退子をあざける。人死して骨となり。骨朽て土とかはる。佛骨何の王位をけがさむ。佛骨もし人を穢さば。禽獸の皮骨は。猶人をけがすべし。人は天地の靈にして。禽獸人に及ばず。夫レ束帶のかざりには象牙をたふとび。珍鐘の鋪物には。虎豹の皮にふす。鼈甲は笄につくり。尾毛は筆の用にぬかる。鹿茸。牛角。鯨の鬚のたぐひ。宮室を飾り。器物を造る。たゝき鹽は。なめて口中を潤し。雉子の胴殼。蕪骨は。嚙で直に腹中にはしる。退之佛骨をいやしとし。禽獸をたふとしとするは。何の謂ぞや。若シ佛骨細工のたすけにもならずといはゞ。はやく疾鬼にあたへて。錢かねとせざる。假令拂底の鬼なりとも。虎の革の犢鼻褌は取べしと。かれが淺見を嘲つて。しかいふのみ。

〽しばらくは蠅を打けり韓退之

讀佛骨表　　厚為

○佛骨は西域の人の骨なり。漢土を飛こえ。日本に來る。豆腐昆蒻に足突給ふな。いらざる長逗留して。厨子にこめられ。外より鎖をおろしぬれば。大小用にからき目見給ふこそあはれなれ。はやく手作の紫雲に打のり歸去給へ〳〵。

〽から鮭の舍利にならぬこそ過分なれ

陳情表　　支考

美濃ノ國山縣郡ニ。在三輪ノ明神ノ社。清輔ノ袋双紙ニ。記ス此神詠ヲ。東華坊。作テ文奉ス此ノ神ニ云云。愚謂借リ用李令伯ガ之表ノ題號ヲ耳。

○世に天地ありて。天地は人の父母とこそいふなれ。人は万物の上にたてる物なり。その人に我レあり。その

我〻に東華坊ありて。西にあそぶ時は。西華坊ともいへり。東西の二華は。支考が坊號にして。野にある時は。野盤子といひ。家にある時は。獅子庵といふなるべし。さるは此御神の氏子にして。風雅はをのづから漂泊のたつきとぞなれりける。むかしは桑門に袂を染て。ほのかに祖佛の影をしたひ。中比は翰窓に灯をとつて。ふかく孔老の腸を見むとせしも。をのれが智をたのみ。物の理にたどりて。たゞ黍の蜂の。窓にまどへるたとへにぞ侍りける。一とせ湖南の幻住庵に。白頭の翁を見て。才能は文字をはなれ。風雅は心を。あそばしむる物なりと聞て。此翁とあそぶ時は。酒にゑへる人の。何ゆへならでも。たゞおもしろきこゝちにぞ侍りける。翁の曰ク。俳諧といふに。三ッの品あり。寂寞はその情をいへり。女色美肴にあそびて。麁食のさびをたのしみ。風流はそのすがたをいへり。綾羅錦繡に居て。薦着たる人をわすれず。風狂は其言語をいへり。言語は。虚に居て實をおこなふべし。實に居て。虚にあそぶ事はかたし。此三ッの品は。ひくき人に。高き所をいふにはあらず。高き人の。ひくき所をいふなりとぞいへる。されば此さかゐは。人のほめ。人のそしる所なるを。ほめられむとおもひ。そしられむとおぢふ。をのれがおもひにまどひぬるをと。理ははじめていたりぬ。事はつくすべからず。かくて俳諧は。まのあたりにありて。口まさにいはむとすれば。心のくまをつくさず。人のやすき所をまなばむとて。をのれむづかしき奥をたどり。をのれむづかしからざらむとすれば。人は金玉の手づまをつくす。ふかゝらずしてあさく。あさからずしてふかし。朝におもひ。ゆふべにいねて。此心又やすからず。ある夜。曲翠亭にあそぶ事ありて。尾の荷兮が。蔦の葉の一句を評じて。俳諧はかくいひつくすまじきをと申されしに。さはとむづかしき夢の。さめたる心地ぞせらる。落柿舎のぬし。洒落堂のあるじも。おなじ夜のあそびに侍りて。我はかくおぼゆるをといへば。人はさもおもはずとこそ。あざむかるれ。よしや我心のせまりたらん時は。燒火の轉寐に。雪折〻竹をきゝ。戸の節穴に。稲妻を見ても。我はかくまど

ひたりと。おもひしらんに。我はわがやすき所をしれりけりと。今宵はじめてぞさだめける。是よりあづま路のかたに旅立て。松島象潟のながめにあき。越の白根のしらぬ行すゑもく心づくしのたびねをだに。生の松原の名によそひて。いけるかひありとぞ見はてぬる。今年は老の名によばれて。此古里の春をもむかふるなるべし。人の命のさだめがたきに。耕ずして食ひ。織ずして着る。我はた世の人に。何をかおふせたらん。入ては此神の光にてらされ。出てはかの翁の徳にあそぶ。俳諧はおのづから。人の上にいはれて。我はいかいの人をあやまてるなるべし。人の俳諧のあしからんをば。我俳諧のあしき也。我俳諧のよからぬをば。神の風雅のよからぬをといふべし。まして夜居りの神心には。朝寐も身につみておぼすらんかし。此表をいさにくみ給ふな。疎くはかうまで頼むまじき物を。たゞ俳諧に命をかふべくとも。四時の變化に私なからんことを、幣の御まへにかしこまりて稽首の涙をかけ奉ける。

（本朝文選巻之九 畢）

本朝文選　卷之十　　五老井　許六選

論

○論類

旅ノ論　許六

○陰陽にしたがふ蒼生は。これ皆天地の蝍蛆也。鮨食に生ずる蛆は。生れながら粮に富。口あきて夜ル出る鳥は。觜にさはるをとりて。やう〳〵おのが糧とす。さればとて粮のとぼしきを歎き。俄に業をかへむ手段もなければ。木啄のつゝきまはり。蜘蛛の網を張て。待より外はなし。つら〳〵東西に奔走する旅客。粮の爲にせざる人稀なり。かの中に。風雅に旅する人に代て。論をくはふ時。こゝに大國を領じ。大軍を將て。往來する人は。粮を求る事おほひなれば。又その罪も甚深し。又寶引の錢をたくはへ。十二灯をあつめて。ぬけ參りする二藏三藏。一錢の袖乞に滿足して。五臟をやしなふ。かれと是とを論ぜば。二藏三八が上にたつ事かたし。一日の糧。一月の粮。一年のかて。一生の糧。もとめたくはふる計。其根ふかく。其源とをし。又馬士飛脚のやからも。旅に生涯を果す。圓位。風羅。のたぐひも。旅に死なむとはかりて。心のまゝに終る。さればかたちの似て。志のたがふ所は。雲泥の論なり。我レことし衣更着のはじめより。五月の半バまでに。旅する事。すでに四百余里。おのが身ノ上を論じて見る時。大軍の將は。罪重しといへども。其利益大きにふかし。吾レ今日の一錢をも求めず。五斗の米を荷ふて。東西に漂泊する事。馬子駕籠かきの論に落て。終には並松の間に餓死せむ。さればとて。鮨めしの蛆を願ひ。糞虫の粮に飽けるを。うらやむにあらず。

仁不仁ノ論　北枝

○楯つくる人は仁にして。鏃するものは不仁なりとかや。醫をなす人は國を醫し醫スル人ヲの名目は仁にして。實は不仁なるべし。病者おほく療ずる人を。名醫とも。はやり醫者ともいふ也。其はやる所をよろこび。乘物ざしめかして隙なからむは。不仁の第一なるべし。さればとて。かの藪醫者のはやらざるも。仁とはいひがたからん。たま〳〵の病人とて。むかへたらんをうれしと。羽織打かけ。時得たり顔に。はしり出らるゝこそこれも不仁なるべけれ。むかしもろこしに。矛盾を一荷にしてうる人あり。矛うらん時は。いかなる楯もたまらずといひ。盾かふ人には。干將鏌鎁も。通る事あたはずといふ也。かたへの人きゝて。其方が盾を。其方が矛にてとをさば。いかにやと問れて。終にものいはずして。本國に逃かへりぬ。これを矛盾とて。おかしきたとへにはいふ也けり。吾朝にはこれをやはらげて。慶庵とも。ゐしやぼんともいふ也。又は小村の道場坊も。藥をほどこす道は。仁者なれど。これもはやりをよろこばれて。縮緬醫者にかはる事なし。又は後生たすけむといふも仁の道にちかし。されど釋氏も死をよろこび。鈴打ならしてとぶらはるゝは。これも不仁の沙汰なるべし。むかしより此譬を。穢多の伯樂とはいふなりけり。

蕎麥ノ論　許六

○天は天ずき。地は地ずきにして。いづれの時。おもき命あり。又は誰レ人頼みあつらへ。陰陽五行を以て。万物化生する事をきかず。聖人天地の沙汰を大きにほめたり。天地はほむれ共よろこびず。そしれどもいからず。これ皆聖賢の理屈にして。元來天地に分別はなし。天は升る事を好。地は降る事を好みて。四時の骨おり。晝夜の苦勞。人もやとはぬ潛上こそ。大きなる損なれ。それより人物山川草木鳥獸まで。おのが一筋に好入ッて。外の物好は更になし。雨は雨好。風は風ずき。夏は暑ずき。冬は寒ずき、されば櫻に梅もさ

かず。鶯がほとゝぎすを鳴たるためしなし。聖人は聖人好。阿方はあほうずき。鬼は地獄ずき。佛は極樂ずき。人は人ずき。我は我ずきより外になし。世に儒釋道の好人出て。位鼎の足のたてるが如し。世々の方人ありて。わが好たる道の外なしとおもへり。五戒五常は此方より出ると思へど。五倫五戒の墨曲尺をはづれて。人一日のたゝぬ上は。儒佛なくても事は欠まじ。儒佛崇敬の人。聖人佛より。飯一盃ふるまはれたる沙汰をきかず。たゞ士農工商の家業の外。さら〳〵別に大道なし。當時儒好を見るに。敬の一字は胸中にありて外より察しがたし。たゞ坊主を惡み。佛をそしり。親兄弟身まかる時。大きなる棺槨をこしらへ。檀那寺のやつかいとなす。是より外によき事は見えず。異朝の法に。地を買とりて葬るは。大國の風俗にして。ふかきわづらひなきと見えたり。和國廟の爲に。地を買とらば。神代より日本半國は買とられむ。砂糖曲物にて埒するこそ。佛家大きなる才覺なれ。いにしへより鳥邊船岡に葬あまりたる事をきかず。釋氏の事たる事。田畑

もたで秋おさめ。蠶飼せずして冬あたゝかなり。人間一種の建立にして。もし此法なくば。此ともがら。いづれの嶋にかわたさむ。佛法には精進日あり。むかしは祥月一日の沙汰なり。それさへ大小のくり合。閏月の相違にて。命日の錐もみは覺束なきに。眷屬あまた出來て。飯料不足を補はむ爲。毎月にはなりたるとや。月〳〵齋米をやりながら。二親もたぬものなければ。一とせの中。二日はのけて。廿二日魚くはぬ日こそ口をしけれ。佛法修行の人を見るに。其なす業は坊主のまねなり。成就の時と見えて。くり〳〵と剃まはし。袈裟衣の仲間に入ッて。上品上生とおもへる時。其なり濟したる所を見れば。物も見事なる坊主なり。たま〳〵佛法をたのしみて。浮世をやすふおもはるゝ。人のなきこそ本意なけれ。儒佛の最初はあたらしからん。次第〳〵にふるくなりて。聖人佛も出給はず。是にはいかいを加へたらば。忽あたらしき聖人も出。當流の佛も出生し給はむ。むかし堯の二女を許したるは。聟も舅も聖人の寄あひ。孟子嫂おぼるゝ時。さし合をくりはじめ

たるは。豈孟軻の流行にあらずや。佛は功徳をすけり。達磨の無功徳はいき過ながら。これ佛法のあたらしみならん。夫當時凡家の人。聖人佛になりて何の益かあらん。たゞ一家の中の聖人にて。世のたすけにはなりがたし。其上仕官は浪人のもとひ。工商農業の人は。金銀田畑をかすめとられ。道しりだけの損をして。たちまち非人乞食なり。その時例のゐふみにおとし。時にあはぬとて仕舞けり。とてもなりにくき。聖人佛をうらやまむよりは。たゞ愚痴に金銀をたくはへ。世の爲。人の爲。ほどこし侍らば。生聖人生佛とし。釋迦孔子より有難がらん。たとへば温飩を好人あり。其子は蕎麥切を好めり。蕎ずきはうどんを謗り。温飩方はそばきりをにくめり。日夜朝暮此論やまず。むかしより。蕎とも麥とも。世の一統せざれば。蕎はそば好。麥は麥ずき。天は天ずき。地は地好には極れり。そしりてをかしければ謗り。ほめてあたらしき時褒るものは。我大道のはいかいなり。

頌

俳諧頌　李由　　蕎麥切頌　雲鈴
酒徳頌　朱廸　　石臼頌　芭蕉

○頌類　五老井　許六選

俳諧頌　李山

○はいかいもと和哥の一躰にして。神代よりはじまり。更に連哥より出たるにあらず。其法式。連哥に相似たれど。あながち無言。新式になづむ事なかれ。俳諧。誹諧。誹譃。滑稽。諧謔。謎字。姿戯。鄙諺。狂言。九つの品にわけられ侍る。いかなるをいふにかあらん。まさしくしる人なし。公任經信ごときの人もしらざる事なれば。末代にさだむべきにあらずとは。御抄のをもむきなり。古今。千載。後拾遺等に見え侍れど。今のはいかいも。九つの中には。相かなへるな

らん。これ和國末代の風俗にして。四海こと〳〵くながれわたり。あまねきもてあそび物とはなりにけり。石筆の早態に。花月のおもしろみを記し。火燵にずりこみ。障子の穴に。雪霙を吟じては。余所の寒さを侘たり。獨居無言の行に倦ず。旅店山野の道づれを求めず。豪貴にともなひ。鄙賤にまじはり。夜明しの會に。親の心をやすめ。年に似合ぬあだ口も。俳諧師にゆるされ。野老村童も。睦月五月のひまを伺ひ。馬士船頭も。山川万里の勞をなぐさむ。夫俳は。市中にあつて。山林のさびしきをうらやむものなり。全く山居の道具にあらず。目に見えぬ鬼を泣しめ。勇武の心をやはらぐるものは。詩哥連俳ともに。其感ひとしかるべし。かの中にも。一言の活法に。白髪を若やかし。忽千歳の命を延るは。ひとり俳諧の德也。鄙言俗風とて。君子いやしめ給ふ。連哥は德高うして。やむごとなき御もてあそびよりはじまり。宗祇一代は百韻に花三本なりしが。宗長の時。ふかくかなしみ。花四本。雨二つの勅許を蒙る。鰒は毒ありとて。喰ふ人の稀なるに。陰德をかくし。俳諧俗流とて。捨られたるに。おほきなる手柄ありて。日〳〵の流行に。新風をおこす。これ其德のすぐれたる第一なるべし。

蕎麥切ノ頌

雲鈴

○蕎麥切といつぱ。もと信濃ノ國。本山宿より出て。あまねく國〳〵にもてはやされける。されば宇治の茶あつて。同じく茶臼石に名高く。伊吹蕎麥。天下にかくれなければ。からみ大根。又此山を極上とさだむ。洒〻落〻の風流物。誰か是を崇敬せぬものはあらじ。世に道成寺の能あれば。其次キは三輪にきはまり。鶴の料理過て。後段の時は。かならず蕎麥切の場所なるべし。常に胃の氣をめぐらし。諸欝を散じ。壽命を延る聖藥なるに。いづれの虚氣人か。中風の毒とあだ名をたてられ。蕎麥喰ぬ人も。頓死中風はするなるべし。たゞ蕎麥一人の罪となるこそ口をしけれ。近頃は慳貪屋の手に落て。所化寮の伙客に。靑貝の手桶荷ひこみ。比丘尼宿の大よせに。錫の鉢をすゑならぶ。壁

に紋書たる大濱茶屋には。一本鎗の旅客をとゞめ。寐覺の門前の何本もりには。通りの馬士を招く。有馬の夜食。淀の川舟の乘合。眞那精進のわかちもなく。をとこ女の去嫌ひもなし。夫蕎麥大根は。君臣佐使の付合なるを。越路の國に。胡桝の粉の折形を備へ。都の方には。山葵薑にてやらるゝこそ本意なけれ。先師翁のいへる事あり。蕎麥切誹諧は。都の土地に應ぜずとて。一生請合申されずとかや。花車を好みたるあるへいとう盛もくるしく。又は一箸づゝの盛並べも。中〳〵待遠なれば。たゞつくね盛の大椀にて。三盃目の時。はじめて本性には立もどりけり。仕舞限の二番がさねは。無念無想の境界になつて。うき世のおもひ出を申けり。

酒德ノ頌

朱廼

○伯倫酒德の頌作る。其德あげてかぞへがたし。さる德ありて。內損脾虛の病を愁へ。酒毒惡腫の痛を生じ。身をやぶり。德を失ひ。なま醉の號をとりて。朋友のまじはりを斷。破戒の過を蒙りては。佛の道にそむく。されば盜跖にも德ありて。伯夷にも損あり。これ其用る人によりて。其理のとりあやまりなるべし。我今酒の德を見るに。京奈良の酒店。伊丹鴻の池の酒藏。日々に身を潤し。月々に屋を潤す。綾羅錦繡に目を見出し。五味八珍に腹をこやす。ある時は吉原嶋原の揚屋にあそび。大臣とあふがれ。作善供養の場につらなりては。大檀那の號をとる。是みな酒袋のしぼり粕なるべし。きのふまでは下部の藤次といへるものも。けふは何がし町の名主。宿老の列につらなり。小賣請酒の細望姓も。白壁をならべ。大釜の煙絕る時なし。これ世に上戸といふものありて。酒の德は顯れたり。さあらば下戸はあまねく富るものにやといへど。むかしより下戶のたてたる藏もなしとは。皆飲ぬけの金銀にて。三葉四葉の酒藏とはなれるなり。是も又理のとりあやまりなるべし。其德孤ならむや〳〵。

石臼ノ頌　　芭蕉

○市中にあつて。俗塵によごれぬものは。げにそのはじめをよくするよりも。その終りをとぐるとはかたし。商山竹林の猛士も。猶出てつかへ。寛平華山の上皇も。終りたしかならず。たま〳〵これを見るに。たゞ石臼のひとつのみ。聖一國師は。これをもて肉身をやしなひ。法身をしる。民家にはまた。麥刈そむるころよりも。籾こきおとす冬にいたるまで。片時も余所にする事なし。其高き事を論ずれば。役優婆塞の庵の中にかくれて。彼たぐひを道引きりの上に立べし。上と下とふたつなるは。ちからたらざる者の爲にもつばらなればなり。不斷土間にあつて。莚より外を見ぬは。謙に居る事のとゝのへるにあらずや。かりにも黄姉の手にとられざるもの。ありがたき事を。ふかくさぐりしるべし。目なだらかなる時は。かますを擔ふ老翁の出來て。こつ〳〵とする音すみて後は。季札が劍を。塚にかくるとをはづべし。名をぬすむ盜人はあれど。石臼をぬすむ盜人はなし。また人の心をみださゞるのいたりならずや。月さしのぼる夕顔の陰に。ひとりはをどろの髪をまくね。ひとりは佛のまねをするあたまなりにて。くるしき事をおぼえず。挽まはすちからに。其飢をたすくるは。文王の始につかへたまへるに事たがはず。やゝいま様の。むづかしき哥のふしにもかまはず。聲も唱哥も古代のまゝにして。枝もさかゆる葉もしげると。しはぶきがちに。わなゝかれたるぞをかしきや。

讃

五老井　許六選

○讃贊類

西行上人ノ像讃　　芭蕉

○すてはてゝ。身はなきものと。おもへども。雪のふる

日は。

さぶくこそあれ。花のふる日は
うかれこそすれ。

神農ノ像讃　　涼莵

○野にもね。山にも寐る人を。人は神とも。佛とも思へど。薦着たる乞食は。門にもたゝせず。この皇いかなれば。十善の位におはして。手づかみに物はきこしめすらむ。さはいへ。春の野あそびには。酢味噌あらばといひおきけむ。慮外ながらもわれらが活計なり。

〽神農もおもへば苣に野蒜かな

團扇ノ賛　　荆口

○詩あり。歌あり。はいかいあり。おほくは班女が似せ箔つかひ。これこそ古手の打ぬきなれ。中にも山崎にすめるさる法師が。

〽月に柄をさしたらばよき團扇かなとは。いふたりけりにて詮はなし。上弦下弦は。月の部に入レぬ合

黠も迷惑なり。今當流のちか道は。其この傍の炙餅。いかなる人も一串は。塩梅よしに賛して曰ク。

〽味噌つけてあぶられればよき團扇かな

入學ノ賛　　許六

○儒家何がしが猶子。洛に入ッて道をまなぶ。賛じていはく。もろこしに豫樟七年の才といふは。鈍にして遲し。當時は三年にして。大木の幅する木あり。山斷すべからず。

〽本箱にまづなる桐の若芽哉

紫芝岡ノ賛　　許六

五老井四絶之一絶也

○靈芝の產たる事。王者仁慈ある時は。かならず生ずと。泰平長久の時をしりける。いとめでたし。されど聖代に。あはじ〳〵と待けん長さよ。さる心ながさにては。不圖うちわすれたる代もありけむかし。又地靈なれば生ずともいへり。ある書にいはく。東坡夢に人家

にあそぶ。堂西に小園あり。古井の石上に石芝あり。上に紫藤を生ず。折て喰ふ。味ひ雞蘇のごし。予が五老井の上に。艸字藤あり。其西に紫芝岡あり。されば坡翁が夢は。余が五老の地なる事明ヵなり。戯れに賛じて云く。

靈芝よ　靈芝よ
田夫の孫の手となる事なかれ
禪僧の如意となる事なかれ

我きく。いにしへの韓氏は。楚にあつては。わづか執戟郎にいやしといへども。漢につかへては。元帥にのほつて。終に大漢を興す。器物も又同じ。我朝とゝやといふ。名物の茶碗は。魚店何がしが猫の飯器たるを。達人とつて万貫の道具となせり。これ用ひらるゝと。用ひられざるとなり。あなかしこ〳〵。證文の出しおくれ。出損になる事なかれ。

書

院艶書　　日蓮上人報書

五老井　許六選

○書類

院艶書

○やまとの國に梟といふ鳥あり。鶯姫をこひて。文かきやるごとにそもじはまともじ。いくたびも文かよはして。まとの文字の返し見るまで。

日蓮上人報書

○新麥壹斗。たかむな三本。油のやうな酒五升。南無妙法蓮花經と回向いたしゅ。

以呂波文字後序

上古日本の文字ありて。今に用來るもの。兩三字あるべし。いつの比よりか。漢字わたりて。本朝の文字は。たえ果てしる人もなし。もと假名字といふは。萬葉書の事にして。訓と聲とを交へ用ゆ。これ以呂波文字のなき以前。男女尊卑。これをもて文字の用を達せり。源ノ順が。萬葉集のかな付も。聲と訓とのまぎらはしきが故なり。片かなは。吉備公の製作にして。アイウエヲの五音相通の文字とす。大和假名とは此事なり。又いろは文字は。世に弘法の作とのみおもへるも。一決しがたし。一說に

以呂波仁保へ土。知利奴留遠。

以上十二字護命の作。

和加與太禮曾。門禰奈良牟。宇爲乃於久也末。計不己衣天。安左幾由女美之惠比毛世寸。以上三十五字は

弘法の作。

京の一字は傳敎の作也。いろははもと四十七字なるを。傳敎此一字を加て。邊鄙遠境の男女迄。王土の字をしらすべき心ざしにて。一二三より。千万億の數字は。聖德太子のかぞへ哥を。こゝに添たりといふ。又は空海。勤操。傳敎の三師。共に造れともいへり。又兼良の纂疏には。四十七字は天地自然の聲。彼漢聲を假て。和字となすとかや。さればいろはを國字といひて。天竺震旦になき字とはいひがたし。是まつたく漢字にして。草書のすがたなるをや。文の躰は。長歌短哥のさまにして。あまねく末世に。手習ふはじめにぞなれりける。さるを後代此中の字性。とりあやまり。書あやまる事おほし。まづへの字は。ヘノのヘにして。ためずして斜なるべし。これ。へとえの分にて。たはみたるを。ちゞみえといふなり。とは土なり。止の字にあらず。すべていろはは訓をとらず。皆聲を用るによつて。土なる事明ヵなり。つの字に說ゝ多し。たゞ門の字と心得べし。但口傳。むは牟也。世に歩武とおもへるは。點をうつ所になづめり。またく歩武にあらず。點はムの押の點なり。おの字はおゐての字にして。木篇に作るは非

也。又をの字は遠の字なり。これを口のを。奥のおといふ。江は衣の字にて。ちゞみえといふは。兄の字に歸す。これ橘諸兄の兄なり。上代のいろは文字と。中比今様の字なりは。はなはだちがへり。次第にあやまりもて行て。あらぬ物になり果たり。そのかみ。源氏物語出る比にさへ。はやとりあやまれりとて。紫式部も。これを歎きたるを。當世野郎傾城の書ちらしたる字形には。正字の俤もなく。此後次第にしる人もなくなり果。いかばかりの字形にか。なり行むもはかりがたし。京極黄門定家卿の。かなづかひとて。定めおかれしより。歌道の傳授物にして。是をしらざるものは。無下の事なるべし。されど大和言葉に用る假名字には。まつたく字心なし。上古の万葉書にて知ルべし。これ天竺の陀羅尼字の類ならん。假名遣一通は。和國のものしるべき事にして。しゐて吾ガ俳諧の上にては。ふかく吟味せむもむづかしかるべし。たゞかな書のたぐひには。此以呂波の正字を。たゞしおぼゆるを。第一とすべき事なり。文字のたゞしきもろこしにさへ。文字をとりあやまりて。古篆の篆書に。たがふものおほし。眞は眞なり。行は眞より出る。草は古篆より出て。まつたく行をやつすにあらず。草書に精しからんとおもはゞ。篆字にわたつて。其源をたゞしてしるべし。されば和朝のいろは文字も。此正字をもて。たしかに書ば。たとひ異朝にわたしたりとも。文字の正字はすみやかに。異國人もよみあかすべしと。九花亭の主人。公平氏汝村。本朝文選。かなづかひをたすけむが爲に。これを跋す。旹寶永三丙戌春三月ノ望。

印　印

本朝文選卷之十　大尾

右此本朝文選全部十卷者五老井許六先生之撰也嘗聞先師
芭蕉翁雖レ有二此志一文章未レ調而止レ之先生十五年來繼二此
志一終其功成雖レ然甚祕レ之深藏レ之門人等卒歎 朽二文庫一
二三子合レ力而借發二書笈一爲二自他一直二其本書一與二書林井
筒屋一彫二之梓一全無二一字誤一最無レ類本只恐二借偷罪一可レ
蒙二 和歌三神御罰一者乎

寶永三丙戌年秋九月吉日

五老井門人

荒氏　魚路
渡氏　曰良
仙氏　武旻
山氏　孟遠

華洛
京極通二條上町
井筒屋庄兵衛板
京寺町二條
書肆　野田彌兵衛板

通説

芭蕉を葬る時、導師の偈のうちに、「五十一年、一字不說」とある。是は向上宗風の常套語ではあらうが、芭蕉の氣持に好く當つてはゐる。風雅の精神の現れたものが俳諧であるならば、其外に俳論の俳話のといふ閑葛藤はなくもがなである。芭蕉在世の當時、俳話書類の刊行などの一つもなかつたのは、さうした第二義の物を通してはいる事を迂遠とした程同門の人達が第一義的の精進をしてゐたからである。芭蕉の歿後、其祖述や俳論がはやり出した事は、內面的には彼等の創作力が稀薄になり、世間的には追蹤附和する底の俳諧愛好者が多くなつた證左で、主として入門者を導く爲のものである。だから、其俳論俳話は嚴正なる意味に於ける批評や檢討ではなく、師傳の聞書、作法の指南に過ぎぬとも云へようが、其を傳へた人々は皆、芭蕉の直弟子であり、又、句作には眞劍に骨を折つた人達であるから、其說く所には夫々に其相應な眞實がある。「以心傳心不立文字」を旨とする禪宗に、註疏語錄の傳書が一番多いのと同じで、そのやうな老婆親切があればこそ、後世の者は實際に益を受けてゐるに違ひないのである。しかも、俳壇今日の有樣を見るに、明治時代に於ける子規の芭蕉復興は徹底を缺いたまゝに終り、其頃のやうな句作的熱度は減退し、一般に何か新しいものを求めてゐながら、偷安的な氣持から脫しえてゐないやうに思はれる。斯うした今日の俳壇人にとつては、芭蕉門弟の手になつた俳話書類こそ、其が初めて書かれた時と同じき意義を以て要求さるべきものではあるまいか。

支考は、「葛の松原」に於て、趣向と句づくりとを說いてゐる。今日の言葉に翻せば、趣向とは取材であり、句づくり

とは想案である、句づくりにさへ新しい味があれば、趣向は新を求めぬ方がよろしいといふのは、新しみといふ事を誤解して珍しさを漁る者には好い戒であらう。附句は附かなくては詮ないものではあるが、「松葉のごみに煮ゆる鍋ぶた」といふ句などは「なまじいなる前句をきかむより此句ばかりがおもしろきぞかし、句ごとに季のなき發句をすると思へ」といふ言葉も一說ではある。又「續五論」にては、本情と風雅とを說き、本情とは其物に具つた類型的な趣味、風雅とは其物に對して個性的に感じ出したる趣味であつて、こゝに風雅のさびしき實がありとする。又、風情と風姿といふことを別つて、風情のみにこだはれば抽象的となり古くなり易く、風姿の具體味を捉へる事に依て新しみを見出せといふのも初學者には解り易い說き方である。「二十五箇條」に「發句は屛風の繪と思ふべし、己が句を作りて目をとぢ、畫に準らへて見るべし、死活おのづからあらはるゝもの也、此故に俳諧は姿を先にして心を後にするなり」といふのも同じ氣持の作法である。「俳諧十論」は組織的とは云ひ得ないが、あれだけに大規模なる俳論は人を驚かすに足りる。其中に「そも俳諧の修行とは其道をあとへ戾る事也」といふのは同感である。「爰に上手の下手に似て、下手の上手に似ざる事を知るべし」といふのもよい。此言葉を越人が難じて「跡を踏まぬやうに作意をはたらかねば古くなる也、夫を逆へ戾るが俳諧の修行とは馬鹿なる云やうなり」といふのは、全く別の意味なのであつて、支考の非難としては當らない。

許六は、論客として能く辯ずる。「篇突」に「新しき所なくては俳諧と云ふべからず」と書いてゐる。此考は蕉門の誰もが奉持するものだが、さて今の新しみとは何かといふ點にをの〳〵が疑をもつてゐる、なまじの新しみよりも先師時代の句風が好いと考へるものは、遺弟の中に多くあつたであらう。許六は「畢竟、句數多く吐出したるものゝ、昨日の我に飽ける人こそ上手にはなれり」といふ考で、作品本位である。「蕉門の輩、多くは蕉翁を崇拜して、蕉翁の

俳諧のたふとき事を崇敬せず、是俳諧に執心少き故にして、蕉翁の俳諧のたふときを元來知らざる故なり、世に蕉翁より勝れたる名人あり共會て知るまじ、あが佛と賴みたる師あり共、自己の眼明らかならば、其名人を見屆、忽のちかえて師とすべき事也」といふのも、當時、既に芭蕉が偶像化され、芭蕉の作といへば悉く名吟のやうに信じられる習に對しては、確に一家言である。又、「宇陀法師」に俳諧の選集に就て、「近代初心の手に落て國々より蜂起する撰集、てには違をならべ、集とおもへるはかなき事也」といふのは、之を今日の世に向つて云つたものとしても、うなづかれると思ふ。然し、許六が句作の祕訣とする所は、配合の體を以て調和の美を現すといふに盡きる。其も一つの句體には違ひなく、又、其手法に依て蕉門の句風に一特色が出來、一段の自由を得たには違ひないが、其手法のみで押通さうとするのは狹い。芭蕉が「發句はとり合物也、二つ取合て好くとりはやすを上手と云也」と許六に語つたので、彼は其師言を金科玉條としてゐる譯だが、一方に芭蕉は洒堂に對して、「發句は汝がごとく物二つ三つとり集めて作るものにあらず、黃金を打のべたるやうにありたし」と云つた言葉が「去來抄」にある。蓋し、芭蕉は所謂、人を見て法を說いたものと思はれる。

土芳の「三冊子」は、土芳の意見とては少く、大體、芭蕉の言葉を土芳が傳へたものであるが、「常風雅にゐるものは、思ふ心の色、物となりて句姿定るものなれば取物自然にして子細なし、心の色うるはしからざれば、外に詞をたくむ、是則常に誠を勤めざる心の俗也」といひ、「常勤て心の信を得て感ずるもの動くやいなや句となるべし」といひ、「物の見えたるひかり、いまだ心にきえざる中にいひとむべし」といひ、「句作になるとするとあり」といひ、何れも其境地に至つた人にして初て云ひ得る名言である。又、芭蕉の句の推敲の迹を擧げ、表現に苦しんだ其實話を書いてゐるのは、今日の句作者にとつても、實に好い參考となる。

去來の著す所の諸抄も亦芭蕉の肚裡を傳へる事を主眼としたものではあるが、是には去來の解したる芭蕉として、彼自身の見解も加はつてゐる。其も惡くはない。俳諧には不易と流行とがあるといふ事を、去來は芭蕉から聞いてから、彼に一つの信念が出來たと共に、其說に拘泥するやうな所もないではない。「花實集」に「去來曰、不易流行は万事にわたる事なり、然れども俳諧の先達是をいふ人なし……宗因一旦流を起せりといへども、又其風を長く已がものとして時々變ずべき道を知らず、先師始て俳諧の本體を見付、不易の句を立て、又、風は時々に變ある事を知り、流行の句々分に敎給ふ、されば不易流行の事は古說によらず先師の發明なる事今に於て明か也」といつてゐるのは間違ない所だけれども、之では抽象論であつて、後進の爲の誘掖とはならない。又、句に寂、位、細み、しをりの說がある。寂とは自然を觀入したる其姿、位とは作者の心境のうつりたる句品、細みとは對象の取扱ひ方に於ける至純性、しをりとは情感の動き方に於ける潛入性——斯う今の言葉を以て云へば云はれるかもしれぬが、やはり元の寂とかしほりとか云ふ象徵的の言葉の方が却て其心がふつくりと出るのは、俳句その物が元來、象徵的の文學だからである。連句では、物にて附ける、心にて附ける外に、前句のうつり、にほひ、ひゞき、くらひにて附けるといふ。うつりとはムードの相通、にほひとは感じにて受ける、ひゞきとはリズムにて受ける、くらひとは（連句の場合は）前句がどういふ人を云ふたものかと其人を見定めて附ける、之が蕉門の附け方の特色である。是等は句作の心持が餘程、微に入り細に入つて來なければ解らぬ消息であつて、現今、句作するものには之だけにデリケートな工夫が缺けてゐると思ふ。「旅寐論」の中では、等類の論、前書の事に聞くべき所が多い。「去來抄」の中には、句作に就て暗示的な有益な問題が提示され解決されてゐる。「蘿の葉の」といふ句に就て、芭蕉が、發句は斯くの如くくま〴〵まで云ひ盡すものでないと云つた言葉、「手を放つ」といふ句に就て、芭蕉が、此句惡いといふではないが、巧者にてたゞ云ひ紛らかしたま

でだと云つた言葉、「つかみあふ」といふ句に就て、凡兆と去來が其句の麻畑は麥畑に觸れよう、（今日の用語で云へば動く）、いや麻畑でも麥畑でも苦しくないと論じた時、芭蕉が「又、ふれるふれぬの論かしがまし、無用なり」と制したといふ話、凡兆が「雪つむ上の夜の雨」といふ上五のない句を得て考へわづらふてゐた時、芭蕉が「下京や」と置いて與へたといふ話など、何れも味ふべき事である。「去來文」は初心の手を取て教へる氣持で、切字の事から、古歌古詩をふまへて句を作る法から、言葉の一寸した置き方まで懇篤をきはめてゐる。

北枝の「山中問答」は、芭蕉の言葉を書留めたものだが、「俳諧の道理に遊ぶ人は俳諧を轉ず、俳諧の理屈に迷ふ人は轉ぜらる、世に上手下手の論のみして俳諧といふ道の所以を知らず……古より詩といひ歌といひ、道の外に求むるにあらず」云々、又、「世人俳諧に苦しみて俳諧のたのしみを知らず」云々などは貴い言葉である。

許六と野坡と議論を上下してゐる「雅文せうそこ」は、許六が眞向上段から例の取合せの說で野坡を教へるやうな口吻に對して、野坡が「句はしまりを第一にして取合せものを尊しとは存ぜず候」と反駁してゐる。次に許六が古池の句をどう解するか、云ふて見られよ、此句も蛙と古池とのかけ合に工夫あれなどゝ、いよ〱高慢な口を開くので、野坡は、貴丈こそ其が解らぬから自分に句意を書あらはさして我ものにせんとするのであらうと皮肉を云ふてゐる。此論爭は野坡の方がしつかりしてゐる。

越人が「俳諧不猫蛇」は、支考を指して、憍慢、欺瞞の不屆者と罵り、師の名を藉りて僞書を作り、金錢を得る事のみを考へてゐると手痛く人身攻擊をしてゐる。恐らく、支考に其事實はあつたのであらうが、之は藝術上の論でないから爰には預る。越人は其公憤を以て、支考の「十論」に非難の鋒を向けて、一々にあげあしを取らうとしてゐるが、うそだ、ばかだなどゝ毒づくばかりで、論理にかけては越人は支考の敵でない。之に對して支考は門人渡部ノ狂の

名を藉たる「刎かけの返事」を以て、「十論十段の眞僞は……あるは見違へ聞違へ、或は文義不呑込にて一字も返答取所なし」とあつさりと片付けてゐる。越人から芭蕉の自撰なりといふ「續猿蓑」は汝が僞作に違ひない、といふ難を受けては、「續猿蓑の事、僞書の二字は天下の御法度にて、不猫蚫一部の穿義所也、そも〳〵續猿蓑は江戸の沽圃を撰者にて、其人は公義の伺候人也、然れば此沙汰は公表の大事也」と逆ねぢをくはせ、又、祖翁の正法を傳へたる越人がまだ生きてゐるぞといふ彼の言葉を取て、「なぜに我師（支考自身）と面談して……とも〳〵に道をひろめ給はぬぞや、我身の小さい自慢いふとて我家の大きな師道をじやまする事は咸陽宮に火をつけて菓子盆一枚を盜めるが如し」とひやかしてゐる。そこが越人は猪突にして、支考は老猾なる所以かもしれぬが、與黨としても支考の方が役者は上である。兎も角、惡罵と皮肉との交換は讀んでゐても氣持が好くない。たゞ、其中にも、越人が「芭蕉の直筆を見ても俳諧が芭蕉にてないぞ、手跡を以て芭蕉といふは最下の事也、俳諧が芭蕉なれば惡筆が書いても翁としらるゝ……汝が皆僞作なり、翁直筆に違はぬ筆にて書て見せても僞也」と云ひ、支考が「惣じて釋迦の五千卷も、畢鉢羅窟の戸をしめて、十大弟子を證人に阿難一人の撰述なり、しかるに佛家の同門衆より、これは釋尊の自筆なるか、是はふすべて似せ物なるかと、不猫蚫のごときいさかひなし」といふ答など、微笑すべきものがなくもない。支考の「刎かけの返事」に對し、越人は更に「猪の早太」を以て、主として事實の僞妄を剔抉せんとしてゐる。又、續猿蓑にある「猿蓑にもれたる霜の松露かな」をとつこに取つて、松露といはずとも如何でも仕方があるべきに　わざと松露を冬にしたのは不都合だと論じ、此樣な大きな不都合があるのでも續猿蓑は芭蕉の目の通つてゐない證據だといふのだが、之は越人ともあるものが、ずゐぶん初心くさい感違ひだと思ふ。さて俳論は巧みでも、人間としては感心出來難い支考が「口狀」の一書を以て、同門の露川を責め、「貴房は自己の作り事にて蕉門を賣歩行人なれば……」と云つてゐるか

ら、いたちごつこである。露川は之に「あひくさび」を以て答へてゐる。此も亦泥仕合だが、此中で面白いのは支考が露川を難じて「貴房が心に、佛門の殊勝体より故翁と肩を並べ、俳諧の實体を作りて極本式とやらを世に傳へんとは、以ての外の鵜のまね也、むかし西行宗祇など、兼好も長明も、今日の蕉翁も、酒色の間に身を觀じて、風雅の道心とは成給へり、此ゆへに文質もとゝのへり、貴房が如き蒔立の禪門にて、傾城の身仕舞に部屋の干鱈もしらず、響の臺所に掛鰹の二前箸をしらず、連中の知た事を宗匠は知らで、世情分明の俳諧の說は我と我身を耻たまへ」との云云ひ分。露川の答は、「さて〱蓮二房（支考）の身上に合せんために、此例を作りたる事大僻見の内なるべし……誠に干鱈二前箸の祕傳は知るもの有まじきに、蓮二はよく祕法の術を得たる人なるべし、然らば自分の酒色に金銀費したる事文章に見へたり……露川愚にして知らぬ也……嘘つき酒呑て大笑ひして居るが蕉門の立流珍しき事也、是が蓮二が祕法ならば鹽水打て居所を改べし」といふのである。

「靑根が峯」（誹諧問答抄）に收められたる去來より許六へ、許六より去來へ贈りし文は、それ〱に禮を盡してゐる上に、問題が藝術を離れてゐないから氣持が好い。去來は其角が流行の變化を知らずして、たゞに己を守ることを責め、許六は其去來に對して、其角などは人としては責める價値がないが、句はたしかにうまい、其よりも不易の流行のといふことを好んで論ずる湖南京師の作者が其語にくらまされてをりはしないか、兎も角、師が迁化の後、諸門弟の句に秀逸がないではないかといふ。去來は又之に酬いて、「たゞ秀逸のいでざるのみにあらず、却て其血脈をうしなふものあらん」と嘆じてゐる。それから許六は「自得發明の論」などゝ、取合せ法の自讃をしてゐるが、凡て以上の蕉門諸生の俳論は、元來が文字を以て說き難き箇中の消息を口舌の上に明らめようとする所から、何れも議論の爲の議論に倒れてゐる弊があると思ふ。

許六の「本朝文選」は所謂、俳文の體格を味ふのに好い。芭蕉は「世上俳諧の文章を見るに、或は漢文を假名にやはらげ、或は和歌の文章に漢章を入、詞あしく賤しくいひなし、或は人情をいふとても、けふのさかしきくま〴〵まで探り求め、西鶴があさましく下れる姿あり、我徒の文章はたしかに作意を立て、文字は假令漢章をかるとも、なだらかに云ひつゞけ、事は鄙俗の上に及ぶとも、懷しく云ひとるべし」と云うたさうな。俳文作者としては、許六がやはり一頭地を拔いてゐるやうである。（荻原井泉水）

日本俳書大系　第四卷　終

大正十五年九月五日印刷
大正十五年九月十日發行

非賣品

日本俳書大系
（4）

著作者　神田豐穗

發行者　神田豐穗
東京市日本橋區數寄屋町一番地

印刷者　谷口熊之助
東京市牛込區早稻田鶴卷町四〇三

印刷所
春秋社印刷所

發行所
東京市日本橋區數寄屋町・春秋社內
日本俳書大系刊行會
振替東京二六八七二・電話大手 二一二四 二一二四

（溝口印刷所印行）